

ワンサマーとプレデター

噛ませ犬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界最強と言われた姉の付属品しか見てもらえず、周りからも同然だとしか言われなかった少年、織斑一夏。彼はとある理由で誘拐され、姉の裏切りにより絶望し、誘拐犯達から暴力を振るわれる。そんな中、一夏は誘拐犯に殺されそうになった時、三体の捕食者（プレデター）に助けられた。

そして三年後、彼は姉に復讐すると共に、一人の少女と出会ったのである。

目次

プロローグ、三人のプレデター達との出逢い

第1話 1

第2話 7

第3話 13

第一章、帰還と少女との出逢い

第4話 19

第5話 25

第6話 30

第7話 36

第8話 41

第二章、簪救出、プレデター達の成人式

第9話 47

第10話 52

第11話 58

第12話 64

第13話 69

第14話 74

第15話 79

第16話 85

第17話 90

第18話 96

第19話 101

第20話 107

第三章、IS学園入学（前編）

第44話	第43話	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第四章、IS学園入学（後編）	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話	第24話	第23話	第22話	第21話
238	233	228	222	217	212	207	202	196	190	184	179	173	168		162	157	151	145	140	135	130	125	119	113

第68話	第67話	第66話	第65話	第64話	第63話	第62話	第61話	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話	第五章、クラス対抗戦。そして再会。	第55話	第54話	第53話	第52話	第51話	第50話	第49話	第48話	第47話	第46話	第45話
367	362	356	351	346	340	334	328	323	318	313	308	302		297	292	287	282	277	271	265	260	254	248	243

第92話	第91話	第90話	第89話	第88話	第87話	第六章 「再会、招待ーそして和解」	第86話	第85話	第84話	第83話	第82話	第81話	第80話	第79話	第78話	第77話	第76話	第75話	第74話	第73話	第72話	第71話	第70話	第69話
507	501	495	489	483	477		471	465	459	453	447	441	434	428	422	416	410	404	399	394	389	383	377	372

第 116 話	第 115 話	第 114 話	第 113 話	第 112 話	第 111 話	第 110 話	第 109 話	第 108 話	第 107 話	第 106 話	第 105 話	第 104 話	第 103 話	第七章、新たな 楯無、そして 恋人同士へ……	第 102 話	第 101 話	第 100 話	第 99 話	第 98 話	第 97 話	第 96 話	第 95 話	第 94 話	第 93 話
644	638	632	626	621	615	609	603	597	590	584	578	572	567	561	556	550	546	540	535	529	523	518	512	

プロローグ、三人のプレデター達との出逢い 第1話

彼は何の為に生まれたのだろう。彼は何の為に生きて来たのだろう。

彼には姉がいて、姉の為に頑張ってきた。しかし、世間は彼を姉の付属品としか見てくれなかった。そして、今の彼は危機的状況に立たされていた。

ドイツ。ドイツは今、夜であった。ここは、ドイツの街外れにある、周りが森で囲まれている建物。その建物のとある一室。室内はとても黒く、天井の隅には蜘蛛の巣があり、物などが一つも置かれていない。

「……がはっ」

建物には、縄で身体を縛られている一人の中学生にも満たない少年と、三人の、懐に拳銃を隠し持っている全身黒づくめの男達がいた。

男達は兎も角、少年はさっぱりとした顔立ちに黒い髪と黒い瞳。服は上に黒い長いティシャツに下には黒いズボンを穿いていて、白いスニーカーを履いていた。

それは良い、少年の顔には殴られた後に出来た痣が幾つもあり、服は少し乱れている。何故、少年は、こんなボロボロなのは、目の前にいる男達が少年を殴ったからである。

男達は只、少年を殴った訳ではない——男達は、とある目的で少年を誘拐し、とある目的が失敗した為に少年に暴力を振ったのだ。

証拠に男達の表情は陰しく、少年は虚ろな眼をしながら俯いていた。少年は暴力を振るわれた事で俯いていた訳ではない。少年は姉の裏切りで絶望していた。

少年は姉の為に頑張った。しかし、世間は自分を姉の付属品とし見えていなかった。姉も姉で少年の言う事や話しさえも聞いてくれなかった。

少年は姉に助けを求めていた、にも関わらず、姉は少年を助けよう

とはしなかった。それも今、少年が絶大絶命の危機にも助けようとは、しなかった。

「たく、織斑千冬と言う女、自分の弟を助けようとはしないなんてな？」

男の一人が皮肉ったように言った。それを聞いた、千冬の弟と言う少年・織斑一夏は何も言わず、下唇を噛む。

一夏にとって、姉の裏切りは一夏の心に絶望だけでなく憎悪をも生み出していた。

「そうなんだよな……ところであの二人は？」

今度は別の男がそう言った後、辺りを見渡し、仲間の二人がいない事に気付く。因みに男達は三人ではなく五人である。

「あいつらなら、小便だぜ？」

「小便、全く呆れた奴等だぜ？」

周りを見渡していた男の問いに、別の男が答え、周りを見渡していた男は呆れながら言った。

「ははは、まあ、良いじゃねえか？ 漏らすよりもましだろう？」

「まあ、そうだけだどな……ふっ、ふふふ」

三人の男達は笑う——男達の笑い声が室内に木霊する。一方、一夏は何も言わず下唇を噛み続けていた。

「ふう、さっぱりしたぜ」

建物の外では、二人の全身黒ずくめの男達が小便をしていた。その内の一人が小便を終らせ、チャックを閉じる。

「おいおい、お前は呑気だな？」

「別に良いだろ？ 俺達の目的は失敗に終わったんだし、やる事もねえからよ？」

小便を終らせた男に、別の男も小便を終らせた後、先に小便を終らせた男に訊くと、男は何も言わず笑う。

「何言つてんだよ？ 排泄の我慢は身体に良くないだろ？」

「確かにそうだけだよーん？」

後から小便を終らせた男は何かを言う前に、ある方角を見た。そこには何も無い。

「どうしたんだよ？」

先に小便を終らせた男が疑問を抱き、訊ねると、男は首を左右に振る。

「嫌、何でも無い、俺の気のせいかもしれないー戻ろうぜ」

男はそう言っていると、小便を終らせた男と共に建物の中へと戻った。

『ナンデモナイ、ナンデモナイ』

「戻ったぜ？」

二人の男達は、一夏や仲間達の元へと戻る。

「おう、それよりもこれからどうする？」

「そんなのは俺に聞かれても困るわ」

男達は話をしている中、一夏は表情を険しくしながら身体を振るわせていた。姉を許さない、姉を殺してやる、と心の中で強く思っていた。

その間に、男達は話を終えたのか、一夏を見やる。

「ボウズ、悪いけど、お前を殺すわ」

男の一人が一夏にそう言っていると、一夏の前に歩み寄り、一夏の前に立ち止まると懐から拳銃を取り出し、一夏に向ける。

「じゃあ……」

拳銃を取り出した男が何かを言い終わる前に、男の頭が宙を舞う。

「!？」

そんな男を見た一夏と四人の男達は眼を見開く。一方で男の頭は一夏の近くに転がり落ち、頭のない身体は膝を突き、俯せに倒れる。そして、顔や身体の周りから血の海が出来る。

「な、何が起き……」

男の一人が何かを言おうとした直後、その男は突然、何も言わなく

なる。

「グフツ!？」

男は口から血を吐く。それを見た三人の男達は表情を恐怖で歪ませるが、口から血を吐いた男はそのまま、前に倒れた——背中には二本の刺傷の痕があり、黒い服だが血が染まっていた。

「ウワアアア———ツツ!!!」

仲間の死を切っ掛けに、男達は懐から銃を取り出し、辺りを無我夢中で乱射する。

室内に数発、数十発の銃弾が放たれ、数十発の葉莖が床に転がり落ちるが男達は手を止めない。

刹那、何かが一人の男を巻き込みむ形で壁へとめり込む——何かとは網だった——それも鉄製の鋭い網だった。

「アアア……!」

同時に男も全身が壁へとめり込まれながら悲痛の声を上げるが鉄製の網は男の自由を奪い、男の露になっている肌からは縄目状の傷が出来る。

それを見た二人の男は悲鳴を上げながら銃の引き金を引き続ける。直後、男の一人の頭が跡形もなく吹っ飛ばされ、頭のない男は銃を落とすと銃の転がり落ちる音が木霊し、同時に頭のない男は膝を突き、そのまま俯せに倒れる。

「ア……アアツ」

一夏は悲鳴を上げようとしたが恐怖で出せないでいた。一瞬で四人の男が死んだ——見えない何か彼等の命を奪ったのだ。

その何かと一夏でも判らない。判るとすれば幽霊が彼等に天の裁きが下したのだろうか——嫌、そんな事はない。それは直ぐに判った。

「だ、誰だ出てこい!! 出てこいよ!？」

最後に残った男の叫び声から始まった。男は銃を手放してはいない、顔を涙でクシャクシャにし、震えているのか膝を笑わせていた。

男も恐かったのだろう。何かが自分を狙っている、何かが自分を仲間達同様、殺そうとしているのではないのかと思っていた。

「お、お願いだ、こゝ、殺さないでくれ！」

男は命乞いの言葉を述べる。それは無駄に見えるだろう。突如、扉が勢いよく開き、男は拳銃を扉の方へと向ける。扉の外には何もいなかった。そして、その見えない何か、一夏や男の前に姿を見せる。

「な、何だよお前は!？」

「あ、ああつ……」

その何かを見た男は恐怖の叫びを上げ、一夏は眼を見開きながら戦慄した。その何かとは男よりも一回りも大きい身体に黄色かがった肌。

甲冑に近い鎧を身に纏っているが腹や脹ら脛などが露出している。右肩には最先端かつ、この地球上の技術とは比べ物にならない小さなプラズマ砲に近い武器を付け、右腕にはガントレットを、腰周りにはブローチに近い物を幾つも着け、背中には小さな槍を着けている。

肩まで掛かる鋭い黒髪に、顔には口元が複雑なヘルメットを着けている。

それはまだ良いだろうがその何かとは誰の目でも明らかのように宇宙人であった。

「な、何だよお前は……っ!？」

男はその何かに銃を向ける引き金を引くが弾は出てこなかった。さっきの乱射で使いきってしまったのだ。

男はそれに気付き慌てて懐から弾倉を取り出そうとした。刹那、男の首元に鋭利な刃物が通り過ぎ、男の頭が宙を舞う。男の首と身体の一部から血が大量に噴き出て、辺りを真っ赤に染める。

一夏は言葉を失った。男の首は宙を舞った後、床に転がり落ちる。首だけしかない男は眼を開けていた。

それでも、男は絶命していた。やったのは目の前にいる宇宙人ではない——宇宙人の横から、別の何かを投げたように腕を前に出している宇宙人が姿を現す。

その宇宙人は、口元が複雑なヘルメットの仲間だった。だが、着ている装備は少し違うのと、ヘルメットは口元は複雑ではなかった——少しさっぱりとしているヘルメットを着けていた。

それだけではない、今度は反対方向の隣から、また別の宇宙人が姿を現す。この宇宙人も二人同様、装備は少し違って、着けているヘルメットも少しでこぼこしている。

そして、三体の宇宙人は辺りに見渡すと、口元が複雑なヘルメットの着けている宇宙人が一夏に歩み寄る。

「く、来るな!!」

一夏は逃げようとしたが縄が一夏の自由を奪っている為、逃げる事は出来ない。その間に、一夏に歩み寄る宇宙人は左腕から二本の刀に近い鋭利な刃物を展開し、一夏の前に立ち止まる、左腕を振り上げる。

「や、止めてくれ……」

一夏は宇宙人に懇願した。それとは関係なく、宇宙人は一夏目掛けて左腕を降り下ろす。一夏の悲鳴が辺りに木霊するが、宇宙人は聞く耳を持たなかった。否、宇宙人は耳がなかったのだった。

第2話

三年後。ここは太陽系惑星から遠く離れた惑星。その惑星は小麦色かつ地球と同じ大きさである以外、変わりなかった。

その惑星のとある場所、そこはジャングルだった。ジャングルと言っても木や、草や、住んでる生き物達は皆、地球とは全く違っていた。違うと言えばジャングルだけではない、空がオレンジ色だった。夕日ではなく、まだ昼間であった。

そんなジャングルの中を、槍を片手に、表情を険しくしている一人の青年が歩いていた。

青年はガツシリとした顔立ちに、少し伸ばしている黒髪に、周りを見据える澄んだ黒い瞳が特徴的な青年である。

服は、上は黒の長いシャツに下は黒いズボンや黒いスニーカーが特徴的であり、シャツやズボンはつぎはぎだらけであるのと、スニーカーもボロボロだった。

更に、服の上には輝や傷跡が幾つもある、腹や前腕、脹ら脛等が露出している甲冑に近い鎧を身に纏い、腰には水に良く似た液体が入っているボトルをぶら下げていた。

そして、青年の手に持つる槍は地球上の槍とは全く違っていた。その槍は両側に鋭い刃が特徴的な穂先と、柄の部分は最先端技術を用いた物だった。

「……………」

青年はジャングルの中を歩いていた。さすがジャングルと言うだけであって、風通しも余り良くなく、気温は高い方で暑い。

青年の額には汗が流れていて、身体を纏っている服が汗でくっ着くのと、その上に着ている鎧が青年の体力を奪っていた。

ジャングルの中は青年にとって地獄その物だった。それでも、青年には、ある目的があるのと、心に秘めている憎しみが青年を励ましていた。

「暑い……………」

勿論、青年はジャングルの中を歩いただけでも、この暑さには

本音を吐く——表情はそのままだったが青年は額にある汗を手で拭く。

「これだけ暑いと、流石に……休憩するか」

青年はそう言うと、近くの木の前で凭れ掛かるように座り、槍を大事そうに抱き締めながら腰にぶら下げているボトルを手に取り、蓋を手で捻るように開け、中に入っている液体を少し飲む。

液体は水ではなかった——水に近い物だった。しかし、幸いな事に、それは人間に害はない物だった。

「不味っ」

反面、それは不味い物だった。それは硬水よりも更に硬水みたいな味だった。一夏はボトルの蓋を閉める。

「……!?」

一夏は近くに何かの気配を感じ立ち上がり、木から離れ、槍を構える。辺りには誰もいない。

それでも一夏は辺りを見渡しながら警戒した。刹那、一夏は後ろから気配を感じ振り向いた直後、一夏は後ろへと吹っ飛ばされる。

「うわっ!!」

一夏は吹っ飛ばされた反動で槍を手放し、槍は地面に転がり落ちるが一夏も少し離れた木と激突した。

「つうつ……」

一夏は身体中に走る激痛に表情を歪め歯を食い縛り、よろよろと立ち上が、自分がいた場所を見る。

そこには誰もいなかった——嫌、いた。それは一夏の前に姿を現す。

青年よりも一回り大きな体格。黄色い肌が特徴的かつ厚い胸板。青年同様、肌が一部露出している甲冑に近い鎧を纏い、顔には口元が複雑なのが特徴的なヘルメットを着けている宇宙人がいた。

「け、ケルティック……」

青年はその宇宙人をケルティックと呼んだ。そう——その宇宙人の名はケルティックプレデター。

三年前、誘拐犯達に殺されそうになった少年・織斑一夏を助けた三

人のプレデター達の一人であり、そのリーダー格である。

そして、その助けられた一夏は今、目の前にいる青年だった。そう、一夏は青年へと成長した。

三年間という長くも短い時間をこの惑星で過ごしていた。単に只、過ごしていた訳ではない。

一夏はケルティックの弟子として、この惑星に住む凶暴な生物と戦っていた。時にはケルティックと共に戦い、時には一人で戦っていた。

「ケ、ケルティック……何故、アンタが此処に？」

一夏はよろけながら立ち上がると、目の前にいるケルティックに訊ねる。

ケルティックは何も言わず、左腕にある複雑なコンピューターガン・トレッドを操作し始める。

操作の音だけが聴こえ、直後にケルティックは操作を止めた。すると、ガン・トレッドから映像が流れ、一人のプレデターが映る。

そのプレデターはケルティックと同族だがヘルメットを着けていない。肩まで掛かる黒く鋭い長い髪、額が広がっている。口元は左右斜め上下にある四本の牙が特徴的かつ、奥には歯が並んでいる。眼は黄緑だが何処か貫禄さえも伺える。

「え、エルダー!?!」

一夏はそのプレデターを見て慌てて膝を突く。エルダー・プレデター。彼はプレデター族の長にして、一番強いプレデターであった。

一夏にとつて、そのエルダーは一夏の恩人の一人に入り、この惑星に送ってくれた張本人でもある。

そのエルダーが何の用なのだろうか？ 一夏はそう思い、怯える。

『落ち着ケ、少年ヨ、才前ニ良イ知ラセヲ持ツテキタ』

「えっ?」

エルダーの言葉に一夏は惚ける。因みにエルダーが発している言葉は、地球のジャングルやロサンゼルスにいたると言う若者のプレデター達からの連絡でマスターしたものである。

『少年ヨ、才前ハコレカラ我々ノ星ヘ戻ツテ来イ』

「えっ!？」

エルダーの言葉に一夏は再び驚く。しかし、エルダーは一夏を見て笑いに近い声を上げる。

『ハハハ、ソナニ嬉シイノカ?』

「嬉しい! ……あつ、いや、嬉しいです」

一夏は弁える。それでも、エルダーは言葉が続ける。

『モウスグ、我々ノ仲間ガ乗ツタ飛行船ガソチラニ付ク。ケルティツク』

エルダーはケルティツクを向き合い、ケルティツクは頷く。

『スカーヤチョツパー、ソレニ他ノ二人ノ少年ニ連絡セヨ』

「仰セノママニ」

『ソレト、飛行船ニ乗ツテイルノハ、ウルフダ』

「ソウデ……ウルフ? ウルフナノカ?」

『ソウダガ?』

エルダーの言葉にケルティツクは何も言わず俯く。一夏やエルダーが訊ねるがケルティツクは聞く耳を持たない。

そして、ケルティツクは顔を上げ、咆哮を上げる。

「ウオオオoooooooooooo!!」

『!?!』

「ひっ!?!」

ケルティツクの咆哮にエルダーと一夏はたじろぐ。それは辺りに響き、木に止まっていた飛んでいる生き物達が驚きのあまり、一斉に飛び始める。

何故なら、ケルティツクはウルフに憧れていた。ウルフのようになりたいと思っていた。

ウルフプレデター。又の名をクリーナー。彼はゼノモーフと言う黒い宇宙人を狩猟するのが生業の宇宙人であった。

彼の名を聞いた大半のプレデターは彼に憧れており、彼のようにになりたい者が後を絶たない。

その為、大半が彼の後を追うように必死に特訓している。

「エルダー、彼ガ、ウルフガ迎エニ来テクレルノカ!？」

ケルティックは興奮を抑えきれず、エルダーに訊ねる。

『落着クノダ、ケルティック、ソレヨリモ早く、他ノ者達ニモ連絡シ、特定ノ場所ニ集合セヨト伝エロ』

「オウヨー」

ケルティックは元気良く答える。それを見たエルダーは呆れながらも、ケルティックに集合場所の映像を送る。

『デハ、後ハ惑星デ待ツテル……一夏』

エルダーは一夏と向き合う。一夏は一回頭を下げ、再び顔を上げる。

『後デナ』

「はいー」

一夏の言葉にエルダーは笑うと、エルダーは映像を切った。

「良シ、行クゾ一夏」

ケルティックは一夏に命令した後、ケルティックは再びガントレツドを操作する。その間に、一夏は槍を拾うと、空を見上げる。

微かだがオレンジ色の空が見える。だが、一夏の心は晴れなかった。

「あの、クソ女ガ……」

一夏は自分の姉を思い出す。それは一夏が唯一、憎悪の対象として見ている人物であった。

姉の名を聞くだけでも、見るだけでも怒りが込み上げて来る。最早、一夏は姉を身内として見てはいない。

「一夏、行クゾ」

すると、ケルティックが一夏に言う。一夏は姉の事を思い出している間、ケルティックはスカーやチョツパーに連絡を終え、後は集合場所に集まるだけであった。

一夏はケルティックを見て頷くと、ケルティックは一夏に背を向け、歩き始める。一夏もケルティックの後を従っていくように歩く。辺りは未だジャングルだった。それに周りから何かの生物の鳴き声が聞こえるが、それでも一夏はケルティックの後を従っていく。

そして、二人はスカーやチョツパー、他の二人の少年と言う人物と

合流する為にジャングルの中を歩き続けた。

第3話

ここは広大な宇宙。そこは無限に広がっていて、幾つもの惑星が浮いていた。

そんな宇宙を、一隻の大きな黒い宇宙船が飛行していた。その宇宙船は禍々しいのが特徴かつ、幾つもの傷痕が見受けられる。

その宇宙船は単に飛行している訳ではなかった。その宇宙船は、とある惑星へと帰還する為に飛行している。

そんな宇宙船の船内には四体のプレデターと、三人の青年が乗船していた。

四体のプレデターはケルティック、スカー、チョッパーと、この宇宙船を操縦しているクリーナー。

一方、三人の青年は一夏の他に、二人の少年達も乗船していた。しかし、その少年達は一夏と同じ年であり、青年だった。

「ふう……やつと、あの惑星から出られたな」

宇宙船の中央では、一夏が胸に着けている鎧を脱ぎながら、他の二人の青年達に言う。

因みにケルティック達は操縦室でクリーナーに用がある為、いない。

「まあ、そう言うなって一夏、俺はチョッパーが居るだけでも心強かったからな」

一夏の問いに、チョッパーと一緒に行動したと言う青年が笑いながら答える。

幼さが残る顔立ちに、肩まで掛かるさっぱりとした黒髪に迷いのない黒い瞳。

服は一夏と同じであるが左腕部分は破られていた。鎧も同じだが武器は槍ではなく、左右にある二本のブレード。それが青年の主力武器でもある。

「ふっ、何だよそれ？」

青年の言葉に一夏は思わず吹き出す。それを見た青年は頬を膨らます。

「何だよそれ、お前だつてケルティックと一緒に居たから人の事言えねえだろ?」

「まあ、確かにそうかもな止しまる——勇人はやと、お前はスカーと一緒に居たけど、どうだった?」

一夏は、チョッパールと一緒に居た青年を止と言った後、今度はスカーと一緒に行動したと言う青年、勇人に訪ねる。

勇人と言う青年は大人びた顔立ちに、金髪のショートカットに黒い瞳。服は一夏や止と同じ服を着ているが少しだけしか乱れてはいない。

鎧は兎も角、武器は右腕にある二本のリストブレイドと、腰に着けている手裏剣の様なものどディスクを模した手裏剣が勇人の主力武器でもあり、得意な物でもあった。

「おい、話題を俺へと切り替えるな」

勇人は一夏と止に呆れる。

「まあ、良いじゃねえかよ? お前だつて、スカーと一緒に行動したのは嬉しかったんだろ?」

「それはそうだが一夏、お前だつてケルティックと一緒に居たのは辛くなかったのか?」

勇人の言葉に一夏は笑う。

「当たり前だろ? ケルティックは俺の命の恩人だし……それに」

一夏は哀しそうに笑う。

「ケルティックは俺の師匠でもあり、兄のようにも思えるんだよ……」

一夏は哀しそうに笑いながら言った。一夏はケルティックを信頼していた、兄のように思っていた。

一夏はケルティックと行動したのはエルダーからの命令でもあり、一夏もエルダーの命令には納得していた。

ケルティックに恩を返す事が出来る、と。ケルティックと一緒に戦った時や、ケルティックと戦った時もあった。

それは死地に赴く程の戦いだったが一夏は弱音を吐かなかった。ケルティックに恩を返す為、ケルティックを困らせない為に頑張っていた。

そんな一夏に止は哀しそうに笑い、隼人はフツと笑っている。

「まあ、お前がケルティックと一緒に居たのは嬉しいって事は良く解ったぜ？」

勇人はそう言いながら腕を組む。

「だろ？　でも、お前達だって、チョッパードとスカーと一緒にいて楽しかった事、いっぱいあるだろ？」

「そりやそうさ、俺はチョッパードと一緒に居たのは楽しかったよ」

「俺もだ、スカーは何も言わない事が多いけど、時々からかってくるから困ったけどな」

勇人の言葉に、一夏と止は笑う。彼等は青年らしく、各々の思い出を語る。

すると、ケルティック達が一夏達の戻ってくる。

「一夏、モウソロソロ、惑星ニ着クゾ？」

ケルティックが言うのと、三人は表情を険しくする。

そして、ケルティック達はヘルメットを脱ぎ、素顔を晒していた。

彼等は皆、同じ顔をしていた。左右斜め上下にある四本の牙と、その奥にある歯。額は広く、六つの黄色い瞳が一夏達を捉えている。

「そうか、それよりもケルティック、ウルフさんと話をしてどうだった？」

「メチャクチャ嬉シイニ限ル、オレハウルフニ憧レテイルカラナ」

ケルティックを見た一夏は笑う。

「そっか、良かったね」

一夏とケルティックが会話している中、止はチョッパードと、勇人はスカーと他愛もない会話をしていた。

『オ前ラ、惑星ガ見エタゾ』

船内からウルフの声が聞こえ、三人の青年と三体のプレデターは近くにある窓の外を見た。

そこは薄茶色の惑星が見えーそれはプレデター達の惑星だった。三人と三体は喜びを隠せないでいた。

プレデター達は久しぶりの故郷に帰ってきたのと、三人は久しぶりにあの惑星に戻ってくるのが嬉しくて堪らなかったのだ。

そうしていると、宇宙船は惑星へと着陸の準備を始める。

プレデター達の惑星。その惑星は地球と同じように科学は発展しており、それも地球以上の技術を備えた物が幾つもあり、街には数百、数千、それ以上に数億のプレデター達が住んでいた。

そんな中、一夏達が乗船している飛行船が、とある場所に着陸する。その場所はトンネルであり、近くには二体のプレデターが佇んでいた。

一人は、額に三つの楕円形が特徴かつ頬がやつれているようにも思えるヘルメットを着け、胸には布切れの様なものを着けているプレデター。

もう一人は、隣にいるプレデターと同じヘルメットを着けているが何処か違うヘルメットを着けているプレデターが居た。

すると、飛行船の扉が開き、一夏達とクリーナーを除いたケルティック達が飛行船から出てくる。

「あつ、ボアにストーリーカー!!」

一夏は二体のプレデターに気づき、駆け寄る。それを見たボアとストーリーカーは互いを見た後、一夏を見守る。

因みに布切れを着けている方がボアであり、ボアと少し違うヘルメットを着けているのがストーリーカーである。

一夏は二人の元まで駆け寄ると、二人の前に立ち止まる。

「一夏、良く戻って来タナ？」

ボアが一夏に聞くと、一夏は喜びを隠せない。

「はい、ケルティックと一緒に居たから辛くありません！」

一夏の言葉にボアとストーリーカーは笑う。

「ハハハ、ソレハソレハ良カッタナ？」

「はい、それよりもエルダーやガーディアンは？」

一夏の言葉にストーリーカーが答える。

「エルダーナラ、シャーマントスカウトヲ引き連レテ、モウソロソロ来ルゾーガーディアンハスネークト共ニヨウガアル為、今ハ居ナイ」
ストーリーカーが言葉を述べている間、ケルティック達が一夏達の元へと来て、クリーナーは姿を見せぬまま、宇宙船を飛ばし、何処かへと

飛び去った。

「ボア、ストーカー、久シブリダナ？」

「ケルティック、スカーニチョツパー、良ク戻ツテキタナ、止モ勇人モ」

「へへ」

「フツ」

ボアの言葉に、止と勇人は笑う。すると、奥から三体のプレデターが一夏達の元へと来る。

一人はエルダープレデターであるが二人は違った。

一人は白い肌が特徴かつ瞼の周りが黒く、黄色い眼が特徴的なプレデターであり、手には独特的な槍を持っている。

もう一人はきつぱりとしたヘルメットを着けているプレデターだった。

エルダーが二人のプレデターを引き連れて、一夏達の元へと歩み寄る。それを見たプレデター達や一夏達は跪く。

「ケルティック、ソレニ他ノ者達モ良ク戻ツテキタナ？」

エルダーは一夏達を見て喜びを隠せない。すると、エルダーは彼等に、顔ヲ上ゲヨと命令する。

ボアとスカート意外のプレデター達と一夏が顔を上げると、エルダーは再び笑う。

「ハハハ、才前達、三年前ヨリモ逞シク凜々シイ顔ヲシテイルデハナイカ」

エルダーは一夏達やケルティック達を見て言葉を述べる。しかし、彼等を見るエルダーの顔は、まるで孫の無事と成長したのを喜ぶ祖父のようにも思えた。

エルダーは歴然の猛者でありながらも、数億もいるプレデターのごくわずかしかないエルダーの名を持つ者でありながらも、プレデター達の帰還を見守っていた。

中には戻ってこないプレデターもいるが彼等は誇り高き戦死を遂げたとして誇りに思っていた。

エルダーが喜ぶ中、槍を持っているプレデター、シャーマンが訊ねる。隣にいるきつぱりとしたヘルメットを着けているプレデターは

スカウトである。

「エルダー、ソレヨリモ本題ニ入ラレテハ？」

「ウム、ソウダツタナー、一夏、止、勇人、才前達ニ話ガアル」

「二はい？」

一夏、止、勇人はエルダーを見据える。一方、エルダーは表情を陰しくしていた。

彼等にある事を言う為にーそして、口を開いた。

「才前達ヲ、他ノエルダー達ト議論シタ結果、地球ニ帰ス事ガ決マツタ」

「二えっ？」

エルダーの言葉に三人は不意を突かれ、瞠目する。一方、ケルティック達プレデターもエルダーの言葉に不意を突かっていた。

そして、エルダーの言葉が辺りに沈黙を生み出し、重苦しい空気が流れ始めていた。

第一章、帰還と少女との出逢い 第4話

地球。その惑星は太陽系の一つであり、緑色の大地と蒼い海で出来た惑星だった。

その地球を、地球の周りを迂回している衛星から判らないように、一隻の黒い宇宙船が地球に近付き、宇宙船から三隻の小型宇宙船が発射され、三隻の小型宇宙船は地球目掛けて接近する。

宇宙と惑星の間にある大気圏を抜け、一つの島国に接近する。そこはアジアにある日本と言う島国。

三隻の小型宇宙船は日本の伊豆半島の森林にある地面へと突き刺さるように落下した。

そこまでは落下したのは良かった物の、小型宇宙船は辺りの樹々に甚大な被害を及ぼしていた。

勿論、それは仕方ない事だった——小型宇宙船に乗っている彼等なら、そう言うだろう。

刹那、三隻の小型宇宙船の扉が開き、三人の青年が宇宙船から降り、地面に着地する。

三人の青年は全員、黒いシャツに黒いズボンや黒いスニーカー、腹や脹ら脛等が一部露出している鎧を纏い、各々違うが武器を持っている。顔には各々デザインが違うヘルメットを着けている。

「ふう……着いたか」

一人の、口元が複雑なヘルメットを着けている青年は辺りを見渡しながらそう呟くと、ヘルメットを取る。

黒くさつぱりとした黒髪と黒い瞳が特徴的な青年が顔を晒す。人は、ここが森であるのと、近くには自分の仲間である二人しかいない。「久しぶりの地球か……」

青年は呟くと、歯を食い縛る。その青年とは一夏であった。しかし、青年は悲しそうに、ケルティックのヘルメットを見つめる。

何故なら、さつき、エルダーから、とある命令をされた為に。

それは、地球への帰還——それは一夏達の為の措置でもあった。理由は、一夏達が十分に強くなったのかを確認する為ではない。ケルティック、スカー、チョツパーの三人を成人の儀式へと参加させる為でもあった。

成人の儀式——それは若いプレデター達が重装備で、ゼノモーフが沢山いるであろう場所に赴き、そこで条件を満たし、晴れて成人を迎える為の儀式でもあった。

しかし、その儀式で生還するプレデターは余りいない。居たとしても、精々一人である。

それに一夏達を返すのは、他のプレデター達の許しが出来なかった為でもある。

エルダーやケルティック、ウルフと言ったプレデター達の中には、一夏達を快く思わないプレデター達もいた。

彼等にもプライドがあり、彼等には絶対的な自信があった。プレデターは人間よりも遥かに強い、と。

勿論、それは揺るぎない事実であり、人間がプレデターに勝てる要素は余りない。

それを人間である一夏達を自分達と同格であるのが気に入らなかつたらしい。

その為、不意で殺そうとしているプレデターが何時現れてもおかしくはなかつたのだ。

その為、エルダーは一夏達が惑星に戻って来るや否や、地球に返す為に宇宙船を用意して待っていた。

因みにガーディアンやスネークがいなかったのは、宇宙船に爆弾が仕掛けられていないかを調べる為であり、操縦士にはエンフォーサープレデターを待機させていた。

そして、一夏達は短い時間だったが、ケルティック達と別れの挨拶をした後、地球へと戻ったのである。

一夏達はそれは仕方ないと思っていたが、一夏達が一番辛かったのはケルティック達と別れる事であった。

一夏がケルティックのヘルメットを見つめる中、他の二人の青年達

もヘルメットを取り、素顔を晒す。

止と勇人だった。二人は辺りを確認した後、止はプルプルと身体を震わせる。

「地球だー！ー！ーッ!!」

止は喜びの表情を浮かべながらヘルメットを持ったまま両腕を上げながら叫んだ。

周りには、自分でも判るように土や樹の独特な匂いに、身体を撫でるように吹く微風。

夜なのか空は黒く、僅かながらに満月が見え、梟の囀る声が聴こえる。

ここは地球。止はそう思い、叫ばずにはいられなかった。パーチョツパーと別れたと言う、哀しい現実から逃れるのと、その寂しさを紛らわすかのように……。

そんな止を他所に、勇人は止に歩み寄る。

「止、久しぶりの地球に帰ってきた事で嬉しいのは解るが、取り敢えず武器の確認をしとけ」

勇人は眼を細めながらそう言った後、スカーから貰ったヘルメットを持ったまま腕を組む。

「だって良いじゃん、自分が生まれた星である地球に帰って来れたからさ……勇人は嬉しくないのか？」

止は勇人に訊ねると、勇人は視線を横へと移す。

「嫌……嬉しいのは嬉しいが……それよりも一夏は？」

「一夏……あそこだ」

止はとある場所を指差し、勇人は止が指差した場所を見ると、そこには宇宙船の近くで、ケルティックから貰ったヘルメットを寂しそうに見つめている一夏がいた。

「……………」

一夏はヘルメットを見ながら溜め息を吐くと、二人に気づき微笑む。――何処か哀しそうだった。

「一夏……今行くよ!!」

そんな一夏に止は手を振り、一夏の元へと駆け寄る。一方、勇人は

フツと笑いながら、一夏と止の元へと歩く。

その間、止が一夏の元へと辿り着き、少し遅れて勇人が一夏と止の元へと辿り着く。一夏は止と勇人が来たのを確認した後、表情を険しくする。

「辺りに人の気配はないか調べるぞ」

一夏の命令に、二人は軽く頷き、三人は手に持つてるヘルメットを付け、右腕にあるコンピューターガンダレットを開き操作すると、赤外線モードに切り替えた後、辺りを見渡す。

「嫌、ない……あるとすれば、鳥の囀る声だけだ」

「此方もないよ、それに武器の確認の確認もしようぜ？」

勇人はそう答え、止は両二の腕に装着している腕当ての少し下に装備しているリストブレードを展開する。

そのリストブレードは太いや鋭いや切れ味が良いだけでなく、白銀色に輝いていた。

止は二人から離れ、リストブレードを振り回す。

「つたく、それよりも俺も出すか」

勇人は止に呆れ瞑目した後、首を左右に振ると、左腕にある甲冑の腕当てに装着されている二本のリストブレードを展開する。

そのリストブレードは止が展開したリストブレードよりも細長く、切れ味も良い方である。

因みに、勇人は腰に二つの茶色い丸いポーチをぶら下げており、中に、二個の手裏剣が丸くなっているように入れていた。

「ハハハ、二人共……それよりも、自分達の乗ってきた宇宙船を処分しなきゃ」

一夏は苦笑いしながら訊ね、二人は「あつ」と直ぐに気付くと武器を戻す。

「じゃ、やるよっ」

「ああ」

三人はヘルメットを被っているが表情を険しくしていた。そして、右腕にあるコンピューターガンダレットを操作し始めた。

刹那、三人の乗った小型宇宙船にある六つの小さな黒い画面から奇

妙な赤い数字が出てくる。

それは地球の数字とは違うーそれはプレデター達のよく知る数字だった。数字はエラーしたかのように点滅し始める。

「行くぞー!」

一夏の言葉と共に三人はその場から離れるように走り出す。その間にも数字は点滅を止めない。それに一夏達がコンピュータガントレットを操作出来るのはケルティックに教えられたのと、エルダーが自分達の為に地球人でもよく使えるように改良してくれたからである。

「急げ、何時爆発するか解らないんだぜ!」

三人が走る中、一夏は勇人と止の二人に言う。何故なら、小型宇宙船には爆弾がセットされていた。

理由はプレデター達は自分達の技術を奪われないのと、闘いに破れた際の為の、コンピューターガントレットに自爆装着を設置していた。

それは跡形もなく吹き飛ばすのと、証拠もないように証拠隠滅をはかる為でもある。

勿論、一夏達が乗ってきた宇宙船にも設置されていて、一夏の右腕にも自爆装置が設置されている。

そして、一夏達が遠くまで逃げた後、三つの小型宇宙船は爆発した。爆風は青く、音も小さい。それは半径五百メートルにも及び、威力は辺りに生い茂っている樹木を吹き飛ばす程であり、生き物が巻き込まれれば命はない程であった。

しかし、そんな爆風は直ぐに消え、残った物は何もなかった。

勿論、そこは街から遠く離れた森であるのと今の時間帯が夜であり、誰も爆発が起きたのかは知らない。

例えば誰かがこの場所に気付き何が遭ったのかは、知る由もない。

「ふう……危なかった〜」

一方で、一夏達は爆発から逃げ切り、森の奥で少し休んでいた。一夏はヘルメットを取り、額には僅かながらに汗を流し、肩で息をしていた。

「それよりも、あれに巻き込まれたら、俺達も終わりだったな」

止は木に凭れ掛かりながら、一夏と勇人に訊く。一夏は木の近くで立っただけ、勇人は木に凭れた掛かりながら腕を組んでいた。二人共、止のようにあまり疲れの色はない。

「ああ、だが、これでやるべき事は果たした」

一夏はヘルメットを持ってない方の手で額に流れている汗を拭い、表情を険しくする。

それを見た勇人は眉間に皺を寄せ、止は何も解らないと言った表情を浮かべながら首を傾げる。

「俺達は、これからこの世界を変える為に戦う……あの女にも復讐する為に」

「そうだったな〜」

止は首を左右に振りながら喜ぶ。一方一夏はそう言った後、ケルティックのヘルメットを被る。

止はチョッパーのヘルメットを、勇人はスカーのヘルメットを被ると、街に行く為に森の中を歩き始めた。

刹那、止が躓き、転んだ。一夏と勇人は立ち止まり、一夏は止を見て苦笑いし、勇人は呆れて頭を抱え、止は激痛に堪えながら立ち上がる。

しかし、それは一夏や勇人にとって、本の一瞬の肩の荷を下ろす、止の行為にも思えた。

勿論、当の本人である止はそんなつもりは、なかったのは言うまでもない。

第5話

翌日、ここは東京・秋葉原。今の時間帯は昼間であり、多くの人が行き交っていた。中には外国人等が多くいて、近くには二台の観光バスが停まっており、沢山の中国人観光客が降りてきては、街の中を観光している。

そんな街の中を歩いている三人の青年がいた。一夏、勇人、止の三人である。

三人は身体にはプレデター特有の武器や装備を着けてはいない。武器や装備は右腕にあるコンピューターガンレットを操作して隠している。

その為、いざと言う時にしか使つてはいけないのである。理由はエルダーから言われた為に。

因みに彼等は何故、伊豆半島からこの東京に来たのは電車であり、勿論タダ乗りであるのと、ある人物のお願いがある為に。

「う〜〜」

すると、ある人物は心の中で抑えきれない感情を爆発させたいのか、ワクワクしているー止だった。

「止、気持ちは解らなくもないけど、少しは落ち着いたらどうだ？」

そんな止に、近くにいる一夏は苦笑いを浮かべそう言い、勇人は頭を抱える。

「だってよ、三年振りの地球だ……」

「わっ、馬鹿っ！」

止が何かを言い終わる前に一夏が慌てて、止の口を塞ぐ。理由は、自分達が別の惑星から地球へと戻って来た事を世間に知られてはいけない。

もし、知られたら世界中の大半の国が自分達を調べようとするのと、プレデター達の武器を調べる危険もあるからだ。

もしそうなってしまったら、自分達はコンピューターガンレットを操作して武器や装備もろとも、破壊と言う意味で自爆しなければならぬ。

一夏は止が何かを言い掛けたのを止めようとしたのも、理由だけだではなく、彼等のリーダーとして責任がある為に。

話を戻そう、止は一夏に口を塞がれていたがジタバタして放れると困惑しながら、一夏に訊ねる。

「何すんだよ一夏!?!」

「それは此方の台詞だ！ お前が変な事を言おうとしたから止めようとしただけだ！」

「へっ、俺が何を言ったと言うのさ!?!」

「それは……」

「おい、お前ら」

「へっ?」

一夏は止と軽い口論をしていると、近くにいた勇人が二人の間に入り、辺りを見渡すように首を振る。

周りには人が行き交うのと、自分達の様子を見ている人達が何人かはいる。

しかし、一夏と止の様子を見ているは人達は二人の口論を気になっていたのだ。

一夏はそれに気付くと、止と勇人にその場を離れるように命令し、三人はその場を離れた。

「全く、止はあんな事を言うからだろ?」

数分後、一夏は未だ納得出来ない表情を浮かべながら腕を組み、勇人は呆れながらも眼を細め、止は辺りを見渡しながら歩いていった。

勿論、一夏は止に言ってるが当の本人の止は一夏の話の聞くどころか、彼の心は「楽しみ」で満ちており聞いてはいない。

「止……ハア……」

そんな止に一夏は呆れて溜め息を吐く。

「全く、何故、秋葉原に行きたいと言ったんだー勇人」

一夏は止から勇人を見る。そう、秋葉原に行きたいと言ったのは止ではなく、勇人だったのだ。

三人は東京へ来るや否や、勇人が突然秋葉原に行きたいと言い出

し、此処に来たのだ。

一夏は反対はしなかったものの、止は大のヒーロー好きであり、秋葉原となればフィギュアが沢山ある為、尚更行かないと言う訳にはいかなかった。

そんな一夏の問いに勇人は何も言わず、街の中を見て微笑んでいた。

普段はクールなイメージが強い勇人が時々しか見せない、優しい表情を浮かべている。

一夏は勇人を見て何も言わず微笑むと、この街で用はないけど少しは楽しむか、と口では言わないがそう思っていた。しかし、一夏は脳裏にある人物の顔が過る。

織斑千冬——彼は一夏の姉であり、一夏が最も憎んでいる人物。

三年前、自分が誘拐された時、名誉を選んだ女。それにあの件以来、一夏は姉に只ならぬ憎悪を抱いていた。

あの女の顔が浮かぶ度に憎悪が増し、怒りが増してくる。それに、一夏はあの件とは縁を切る気もあつた。

自分の家族は誰もいない。自分は自立するつもりもあつた——嫌、そのつもりであつた。

あの女と逢つたら何を話そうか、嫌、あの女が絶望に包まれていく方法を考えた方が良いだろう。

あの女が何を言おうが何をしようが、自分は姉の元に戻るつもりはない。

一夏は顔には出さないが心の中では抑えきれない感情を必死に押さえていた。

最早、彼の憎悪は抑える事は出来ない。今は何とかなるだろうが遭う事になると最早、無理に等しい。

「でも……逆に良い事もあつたな」

一夏は、ふと、笑みを浮かべる。それはケルティックやエルダー達との出逢い。それは一夏にとっていい思い出だった。

一夏はケルティックから武器の施しや扱いを頭に叩き込まれ、強くなった。三年と言う長くも短い時間を、一夏はケルティックと共に修

行し、自分が誰にも干渉されない日々を過ごした。

一夏から見ればケルディックと一緒にいる事は一夏自身にとって良い思い出であり、同時に一生消える事のない思い出でもある。

しかし、ケルディックは誇りあるプレデターだった。

彼は一夏の義理の兄みたいな存在だったがそれでも関係ない。彼がいたから今の自分がいる。

隼人や止とも出逢い。彼等のリーダーとして責任を任される身を受け持ったのだ。

彼等を部下としてではなく、仲間として、親友として接して行こう、と。

それは一夏の心が憎悪で支配されている中、僅かながらに友情が残っている事を意味していた。

それは一夏にとって幸ある事だろう。彼らが死ぬ事になったら別だが……。

一夏は隼人や止と共に歩き続けていた。

「ふぎやっ!?!」

刹那、止が前に倒れる。一夏と勇人が止が倒れたのに気付き止の方を見ると、止の背中にのし掛かるようにうつ伏せに倒れている十代後半の少女に気付く。

少女は右手に黒い鞆を持っているが少女は起き上がる。

その少女は、少し長めだが外側に跳ねている毛先が特徴的な清楚ある水色の髪に、赤い瞳。

服は白いシャツに下には蒼いズボンや、白い靴を履いている。

「いたた、っ!」

少女は止を見て慌てて立ち上がると、止に対し頭を下げずに、その場を離れようとして走り去っていかうとした。

「ちよつと待て!」

一夏が怒りを抑えきれず少女の手首を掴み、少女は突然掴まれた事に戸惑いながらも、一夏は見る。

「放して! 私は急いでるのよ!」

「ふぎげん!! ぶつかって謝りもなしでその場から逃げようとする

なんて最低な事だろうか!？」

「それは悪かったわ! ……でも、今は私の手を離して!! 時間が無いの!!」

「そんなもん知るか!! それよりもさっさ……っ!？」

一夏は再び怒るも、少女の顔を一瞬だけ見て眼を見開く。少女は目尻に涙を浮かべていた――紅い瞳に似つかわしくない涙を流していた。

一夏は何も言えず、少女の手首を掴んでいた手の力を緩める。その隙に少女は一夏の手を振り解き、その場を離れるように走り去って行った。

「あつ、待てこの野郎!」

止は追い掛けようとしたが一夏に制止される。因みに止は一夏と少女が会話している間に起き上がり、勇人は止に手を貸さず、一夏と少女のやり取りを静観していた。

「ちよつ、どうしたんだよ一夏!?! あの女、謝りもしなかつたんだぞ!?!」

「……あいつ泣いてた」
「えっ?」

止は抗議の声を上げるが一夏は首を左右に振った後の言葉を聞いて、惚ける。

「あいつ泣いてた……何かに弱味を握られたのか……それとも何かを求めているみたいに」

一夏は言葉を続ける。一方、止は何も解らず髪を掻き、勇人は何も言わない。

そして、一夏は少女の行動やあの涙を気にし、何かを感じた。

そんな三人とは裏腹に街の人達は一夏達の一連の行動に興味を示していたがそれも直ぐに無くなり、街の人達は再び歩き始める。

しかし、隼人や止は兎も角、一夏は解らなかつた。あの少女が後に、一夏の復讐を和らげる為の存在になる事を……。

第6話

「泣いてた？」

一夏の言葉に、止はきよんとした表情で答える。因みに彼等は今、路地裏にいる。

一夏は壁に寄りかかり、隣には勇人が壁に凭れ掛かりながら腕を組み、止は二人と向かい合うように壁に凭れ掛かりながら立っていた。彼等が何故路地裏にいたのかは、それは一夏の気になった事から始まった事だった。

話を戻そう、止の返事に一夏は首を縦に振る。

「ああ、あの女、泣いてた。何か訳があったみたいに」

「そんなの考え過ぎだよーそれにあの女は謝りもしなかつた……うゝゝゝ」

止は反論した直後、嫌な事を思い出したかのように頬を膨らませる。

それを見た一夏は苦笑いし、勇人は何度も見せられているかのように呆れ溜め息を吐く。

勇人は、止の天然ぶりと不運ぶりに呆れながらも、一夏に訪ねる。

「それよりも一夏、あの女が何の事情があるにせよ、俺達が関わる事ではない」

「それは解るけど、何故か気になるんだよな」

一夏は腕を組み考え込む。そんな一夏に止は首を傾げ、勇人は何も言わず空を仰ぐー路地裏とは言え、青空は見える。刹那、勇人は不意に口走る。ー誘拐だったりしてーと。

止の発言に一夏と止は驚き、勇人は眼を細める一方で、視線を一夏へと向ける。

勇人は同時に、「悪い……」と一夏に謝る。一夏は何も言わず哀しい笑みを浮かべ首を左右に振る。

「別に良いよ……それに何故そう思うんだ？」

一夏は間を置いた後、表情を険しくして訊ね、勇人は一回頷いた後、口を開く。

最初、勇人が気になったのは一夏の言葉だった。少女が泣いているのと少女の口から語られた急いでいる訳。

それは少女の身内の誰かが誘拐されたのか、それに鞆を持ってたのなら鞆の中に身代金が入っていて、それに指定の場所にまで来なければいけないのではないのか、と。

無論、それは勇人の考えている事であり、それを止は反論する。

「でもよ、そんなのは憶測だろう？ 只の学校に遅刻になりそうから泣いたのか、それとも身内の誰かが事故に遭ったか、危篤になっているから病院へ急ごうと思った上に、嫌な予感がしたから泣いただけじゃねえのか？」

止はそう言葉を述べた後、勇人は呆れて首を左右に振る。

「馬鹿か、そんなんだったらタクシーを使えば良いだろう？」

「あつ、そつかーでもそんなのは俺達には関係ない事だろう？ なあ、一夏？」

止は一夏を見る。一夏は何も言わず俯いていた。

「どうしたんだ一夏？」

止は訊ねると、一夏は顔を上げ首を左右に振る。

「何でもない、それよりも勇人、止の言う通り、只の憶測にしか過ぎないかもしれないし、お前の勘違いなのかもしれないから」

一夏は勇人を見てそう言い、勇人は眉間に皺を寄せ瞑目すると、一夏は何かを思い出したかのように二人を交互に見る。

「そうだ、俺ちよつと一人で行動したいから、二人はそこら辺で何かしていなよー、一時間後、またここで」

一夏はそう言うのと、二人と一旦別れる意味でその場を離れるように路地裏を出る。

後ろから止の呼び止める声が聞こえるが一夏は耳を貸さず、人混みの中を走り去っていった。

「行っちゃった……ま、いつか、一夏がそう言うんなら」

止はニカツと笑い、両手を頭の後ろに当て、勇人を見る。

「俺達は一時間の間、自由気ままに行動しようぜ、勇人？」

止は嬉しさを隠せない一方で、勇人は一夏が出ていったであろう方

角を見たまま何も言わない。

そして、軽く瞑目して微笑む。ーやっぱり、気になるのか、と心の中でそう呟いた。

それを見た止は何も解らず首を傾げ、勇人は眼を開け、止を見ると何も言わず頷いた。

「ここら辺で良いか」

一方、一夏は二人とは離れた場所にいた。そこはさつきとは違う路地裏であり、人が殆ど通らない場所でもあり、ビルはビルの間路地裏であった。

一夏は辺りを見渡すと、警戒しながら右腕の裾を捲る。右腕にはコンピューターガンレットを着けていた。

一夏はガンレットを操作する。刹那、一夏の身体からプレデター特有の武器や装備が展開され、一夏は顔にケルティックのマスクを着けていた。

そして、一夏はコンピューターガンレットを操作の手を止める。刹那、一夏は身体を透明にする。

「後は……探索だな」

一夏は身体を透明にしながらマスクを使つて、街にいる少女を捜し始める。

秋葉原には何万人もの人がいるが、一夏は関係なく捜す。

単に少女が気になった訳ではない、一夏は誘拐と言う言葉を聞いて、何か胸騒ぎを感じていたからだだった。それに、それは間違えであつて欲しい、と願つていた。

ここは秋葉原の駅近くにある広場。そこには沢山の人が行き交つていた。

そして、広場には、止とぶつかったにも関わらず、一夏の文句にも耳を聞かず、その場を去った少女が大事そうに黒い鞆を持ってい辺りを見渡していた。

「っ……」

少女は辺りを一通り伺った後、人気のない場所まで移動し、やるせない表情を浮かべると懐から白いスマートフォンを取り出し、何処かへと電話する。

「刀……たてなし楯無よ、約束通り、父さんの部下は巻いたわ」
少女——楯無は何処かに電話していた。すると、電話の主が答える——女性の声だった。

『良くやったわね……それともう一つ、また訊ねるかもしれないけど、約束の物はちゃんと持ってきたのでしようね？』
「ええ……約束の一千万はちゃんと持ってきたわ」

楯無が答えると、電話の向こう側にいる女は笑う。

『ご苦労さん』

「約束は守ったわ……かんざし簪ちゃんを……妹を返して！」

『それは無理な相談ね、あんた達更識の面々が私達の要求を未だ呑んでないからよ』

「要求の物はちゃんと用意した筈よ！」

楯無は怒る。

『落ち着きなさい……それに返せと言われても直ぐに返せないわよ？』

「っ……」

『だったら私の話を聞く事ね、私達は横浜の港にいるからそこで取引をしましよ——そうね、夜七時頃ぐらいに来なさい……それまでは更識や他の奴等に見つかっちゃ駄目よ？ それに破ったら妹の命はないと思いなさい……じゃあね』

女はそう言うと、電話を切る。楯無が慌てて、かけ直そうとしたが無理だった——妹の身に何か遭ったら困る為に。

スマートフォンから音が流れるも、楯無はその場で膝を突く。

「簪ちゃん……うっ、ううっ」

楯無は涙を浮かべ俯く。妹が誘拐されている。

それは楯無にとって辛い事であるのと、妹に辛い思いをしている事を知りながらも何もしなかった事を責めていた。

何故なら、楯無は簪とは仲が悪かった。それは楯無に原因があるの

と、更識と言う家系にも原因があったからである。

「簪ちゃん……私は最低な姉ね……ううっ」

楯無は鞆を抱き締めながら俯く。そして、楯無は一人誰にも気付かない場所で数分間、泣き続けた。

「すっげえ!!」

店内に止の喜ぶ声が木霊する。一夏と別れた止と勇人は、秋葉原のとある店内にいた。そこには数十、数百点以上のフィギュアがガラスケースの中に飾られ、売られている。

止は、ガラスケースの中に飾られているフィギュアを見て、止は喜びを抑えきれないでいた。

三年間と言う長い間、遠く離れた惑星で修行していた為、地球を離れていたが見たい事もないヒーローや女の子が増えている、と。

まあ、三年も離れていれば新しいキャラクターが増えるのも当たり前だろう。

止は童心に返ったように眼を輝かせている一方で、勇人も店の中にある商品を眺めていた。

「……はあ」

勇人は何も言わず溜め息を吐くと、止には何も言わず店内を見渡した後、ふと、一夏の事を思い出す。

あの時の、路地裏にいた時、自分が推測とも思える発言を聞いた時の一夏は、何かを思い出したかのように哀しそうであった。

しかし、勇人はそれに気付いていたがあえて軽く謝った後に、何も言わなかった。

何故なら、一夏には誘拐された経験があり、そしてそこで姉に裏切られた事も。勿論、それは一夏から聞いた事である。

その為、勇人は一夏の行動を何も咎めはしなかった。彼がリーダーであるのと、一夏の僅かながらに残っている優しさを無駄にもしない為に。

「全く、馬鹿な奴だ……推測なのによ」

勇人は笑みを浮かべる。勇人には知った事ではなかった。一夏が

勝手な行動をしても気にしない。

そして、近くから止がファイギュアを眺めていたのに集中し、余所見をしている形で目の前にあるガラスケースにぶつかつた事も気にしなかつた。

第7話

「くっ……いない」

数分後、一夏はプレデター特有の防具を纏い、顔にケルティックのマスクを着けながら身体を透明にしながら、少女・楯無（一夏は名前を知らない）を捜していたが人が沢山いる為に苦勞していた。

ただ、その場を動かなかった訳ではない。一夏は街の中を移動しながら探していたーそれも、建物の屋上を移動しながら。

屋上は立ち入り禁止場所が多い。しかし、一夏には関係ない事だった。透明になれば誰にも見られる事もない上、肉眼ではあまり見える事は出来ないからだった。

それとは関係なく、一夏は屋上から街を見下ろす。街には沢山の人が行き交う。子供から極僅かに老人や、恋人や家族連れ等が見受けられるが一夏には関係ない。

一夏は探しているのは楯無であり、その他の人達は関係ない。たとえあつたとしても一夏にはどうでも良いことだった。

（何なんだろう……あの涙は……それに勇人の言う通りだったのか？）

一夏は、ある事を思い出す。最初に止にぶつかったにも関わらず謝ろうとはしなかった楯無に怒った時の、楯無の流した涙。

あれは、勇人が言った、楯無の身内が誘拐されたと言う推理。勿論、一夏は気付いていないが楯無の身内は誘拐されている。

あの涙も妹、簪を誘拐された為に流した涙であつた。それに勇人の言う通りでもあつた。

「……っ」

刹那、一夏の忌々しい過去が一夏の脳裏を過る。三年前、一夏は誘拐され、そこで心ない暴力を振るわれ、心に傷を負った。

それもこれも全て姉のせいたが今は関係なかった。今は、楯無が何処にいるのかを知りたがっていた。

「どうすれば良いんだ……」

一夏が焦りを隠せない中、右腕に装着しているガントレットから通信が入り、一夏はガントレットを自分の顔へと近付けさせる。

『こちら勇人、一夏聴こえるか?』

通信を入れたのは勇人だった。勇人からの通信に一夏は首を傾げるが訊ねる。

「どうしたんだ勇人?」

『嫌、それよりもお前に良い知らせだ』

「良い知らせ?」

勇人の言葉に一夏は怪訝な表情を浮かべる。

『ああ、お前が捜していた女は見付かったぞ』

「えっ!?!」

勇人の知らせに一夏は瞠目し、直後に我に返り訊ねる。

「ど、何処にいるんだ!?! それに何故お前がそんな事を!?!」

『まあ落ち着けよ、俺達もお前に協力したいからさ』

「えっ?」

勇人の言葉に一夏は惚ける。そんな一夏の声が聴こえたのか勇人は軽く笑う。

『フツ、まあ俺達もお前から一時間の自由時間を貰ってもやることはないからお前の、女を捜す協力をしたいと思ってよ』

「で、でも俺は自由時間は与えると言ったけど女を捜せと言って」

『それがいけないんだよ』

一夏が言い終わる前に勇人が遮り、それを聞いた一夏は再び「えっ?」と惚ける。

すると、一夏から見れば通信している為判らないが勇人は溜め息を吐き、その後言葉を続ける。

『全く、お前は馬鹿なのか、それとも単に人に頼りたくないのか判らないが、お前は一人で、秋葉原からたった一人の女を捜す事が出来るのか?』

「あ……っつ」

一夏は勇人に指摘され言葉を詰まらせる。しかし、勇人の言う通りでもあった。

この街は広い、人が沢山行き交うだけでなく、自分が視線を移動した直後に、楯無が移動していると言う意味で見落としているのかもし

れない事もある。

一夏はそれに気付くと何も言えなくなり瞑目し下唇を噛む。すると、そんな一夏に勇人は再び溜め息を吐く。

『全く、俺達のリーダーがそんな事も判んないとはな……』

「ご、ごめん」

『だが、俺にも原因があるから何も言えないーでも、そんなお前だからこそ俺はお前を尊敬している』

勇人の言葉に一夏は眼を見開く。しかし、勇人は言葉を続ける。

『一夏、俺やスカーに、止はチョツパーに助けられただけでなく、お前にも助けられた。お前には返しきれない恩があるんだ』

勇人は笑うも、何処か寂しそうだった。

『あの時……嫌、今は良い、それよりも一夏、今すぐ秋葉原の広場へと向かってくれ……そこに女がいると止から連絡があったからな』

「えっ、止から？」

『ああ、今は止が監視しているから大丈夫だーそれに俺は用があるから後から追う……じゃあな』

勇人はそう言うと、一夏の言いたい事を通信を切る。

「フウ……」

一方、勇人は一人、屋上にいた。

そこは一夏がいる場所とはかなり離れた場所であり、周りには誰もいない。それにそこは立ち入り禁止場所であった為、人が立ち入る心配はない。

それに勇人もまた一夏同様、プレデター特有の防具を身に纏い、顔にはスカーのマスクを着けていた。

「すまない、一夏、止……」

勇人はそう呟くと踵を返し、ある場所へと向かう。それは、とある場所へと向かう為だった。

その場所は此所、秋葉原にあり、勇人がどうしても行きたい場所でもあった。そこに、とある人物が居る為に。

そして、勇人は左腕にある二本の細長いリストブレイドを展開して

……。

「うゝゝん」

一方、ここは秋葉原の広場の近くにある駅の屋根上。その屋根上には身体を透明にしながら広場を見ている止がいた。

止は屋根上で跪きながら一夏や勇人同様、プレデター特有の防具を身に纏い、顔にはチョツパーのマスクを着け、そして、赤外線モードで広場にいる楯無を監視していた。

「動く気配なしか」

止は呆れながら、その場を動かない楯無を見て呟く。何故、止が此所にいるのかは勇人から一夏に協力する為に、お前とぶつかった女を見つける為に街の中を捜すぞと命令された。

これには止も否定したが勇人は聞き入れず、止は渋々、勇人と共に人気のない場所まで移動した。

そこでコンピューターガンレットを操作して、プレデター特有の防具を纏い、それぞれ、違うマスクを着けて、街の中を捜し、そして、広場にいた楯無を見つけたのである。

話を戻そう、止は右腕に装着しているガンレットを操作し、ある人物達に連絡を入れる。

「こちら止ー誰か応答してよ、一夏、勇人」

『ーこちら一夏、止、勇人から聞いたけど、様子はどうか？』

応答したのは一夏だった。それを聴いた止は不貞腐れる。

「一夏かーねえ一夏？ あの女を監視しろってどういう事なのさ？俺はもうちよつとヒーローフィギュアを見たかったのにさー」

止は自由時間を潰された事に怒る。それを聴いた一夏は、止には判らないが苦笑いする。

『ハハハ、ごめん、でも、ちよつと泣いてたのが気になったからさ』

「ふゝゝん、でも一夏が言うなら良いけど、俺はあの女が許さないもんーあの女、俺に謝りもしなかったんだぜ？」

『まあ、お前の気持ち解らなくもないけど、一応、引き続き監視を続け

てくれー俺も後からそっちへ合流するから』

「解った……それよりも勇人は？」

『勇人は解んない、用があるから後で合流するって』

「ふうくん、それよりも一夏、お前何処にいるの？」

『俺は交差点の真上にある線路近くにあるビルの屋上にいるよ、もうすぐそっちに合流するから、それに俺は女に声を掛けるから、それまで引き続き監視を続けて』

「解つ……えっ？」

一夏の言葉に止は不意を突かれたかのように声を上げる。

『だから、俺が女に声を掛けるまで、女から眼を離さないでくれ、頼む』

「えっ……でも、そんな事したら一夏、俺達がプレデターの武器を防具を世間に晒す危険もあるんじゃないか？」

『嫌、大丈夫だ、その時は防具や武器を解除して近付くから安心してくれーそれと場所は何処だ？ 広場と言っても何処にいるかは解らないからな』

「確か、広場の人目の付かない所で座っているよ？」

『そっか、じゃあ後でな』

「うん、じゃあ気を付けてね？」

止の言葉に一夏は『ああ』と答え通信を切る。止も通信を切った後、再び楯無を監視する。楯無はその場を全く動かない。

それを見ていた止は何かを考える。

「一夏……一体どうしたんだろ？ ーまさか、あの女が泣いていたのと、勇人が言っていた誘拐の事を気にしているのかな？」

止は一夏が思っている事を口にする。すると、ある人物が楯無へと近付く。

それは、一夏だった。それも、ケルテックプレデターの防具を解除しないままで。

「えっ、一夏!？」

それを見た止はチョッパーのマスクを外すが、一夏は身体を透明にしたまま楯無へと近付き、そして巻き込むように身体を透明にした。

第8話

「簪ちゃん……」

身体にプレデターの防具や武器を装備し、顔にチョッパーのマスクを着けている止に監視されている事も知らずに、その場を一步も動かない楯無は黒い鞆を大事そうに抱き締め、哀しそうに俯きながら、妹・簪の名を呟いていた。

妹は今頃何をしているのだろうか、怖い目に遭ってるに違いない。それも全て、自分のせいである事にも後悔していた。

「簪ちゃん……ごめんね」

楯無は再び涙を流しそうになる。刹那、楯無は何者かに腕を掴まれ、振り返った直後、眼を見開く。

その何者かは自分よりも背が高く、上は長袖の黒いシャツに黒のズボン。腹や脹ら脛等が一部露出している防具や、禍々しい武器を装備し、顔には口元が複雑なマスクを付けている。

その何者かは一夏であった。勿論、楯無はそれが誰かは知らない。「な、何よあんた!？」

楯無は自分の腕を掴んできた一夏の腕を振り解こうとする。しかし、一夏は楯無の腕を放そうとはしなかった。

「放して!! 放さないと人を呼ぶわよ!？」

「大丈夫だー俺はお前の味方だ!」

「何が味方よ!? 変なマスクを付けてるだけのコスプレ野郎じゃない!?!」

「誰がコスプレ野郎だ!? それに人を呼ぶと言っても俺達は身体を透明にしているから誰も気付かれねえよ!」

「そんなの……えっ?」

一夏の言葉に楯無は周りを見渡し、驚く。確かに周りには人達は自分達に気付いていない。

それどころか、広場を行き交うだけで一夏と楯無の存在には気付いていないー駅の屋根上にいる止以外は……。

「これで解つたら?」

「解らないわよ……それに何故、私も透明に!？」

楯無は一夏と向き合う。すると、一夏は溜め息を吐き口を開いた。「それは俺がお前の腕を掴んでいるからだよ、俺達は身体を透明にした場合、何かに触れた場合もそれを巻き込むように透明にするからな……人に限るけど」

「触れたら透明にー待って? 俺達も? 他にもいるの?」

一夏の言葉に、楯無は疑問に思い訊ね、それを訊かれた一夏は「あつ」と墓穴を掘ったかのように戸惑う。

「他にもいるよ……まあ、一人は用があるから、もう一人は、屋根の上にいるよ」

一夏は勇人や止の事を楯無に教える。楯無は納得どころか怪訝な表情を浮かべている。

楯無から見れば、いきなりそんな事を言われても信じかたい事だろう。一夏が何を言っても、彼女は何も信じない。

ましてや、自分達が装備している防具や武器が宇宙人が造った事も。

楯無は一夏に不信感を抱くかのように眼を細めて、それを見た一夏は言葉を詰まらせるが、ふとある事を思い出し、訊ねる。

「そう言えば、何で泣いてたんだ?」

「えっ……」

楯無は一夏に指摘され瞠目する。何故なら、楯無が何故、自分が泣いている事を彼が知ってるのかを疑問に思った。

楯無には判らないだろうが彼が自分の涙を見た者、一夏である事を未だ知らないのである。

一夏に指摘された楯無は戸惑うも、一夏は何も言わないーケルテックのマスクを着けているとは言え、二つの黒い瞳は楯無を見据えている。

一夏自身が単に気になっていた訳ではない。一夏自身が優しすぎる故の行動でもあった。

一方、楯無は一夏に見据えられ困惑し、不意に眩いてしまう。

「簪ちゃん……妹が誘拐されたの」

「えっ?」

楯無は観念したかのように眩き、それを聞いた一夏は眼を見開く。それは、勇人の言う通りであった誘拐と、妹と眩いた楯無がその妹の姉である事に驚きを隠せない。

誘拐、姉——それは一夏にとつて禁句に近い言葉。彼の心に大きな傷を追わせた言葉でもあった。

一夏は眼を見開く中、楯無は一夏の様子に気付く。
「どうしたの?」

楯無に訊ねられた一夏は我に返り、首を左右に振る。

「嫌、何でもない……ただ、妹さんが誘拐されたのか?」

「え、ええ……」

「そ、そうだったんだ……じ、じゃあそれで泣いてたんだ?」

「ええ……それも私のせいなの?」

「えっ?」

「私のせいなの……それよりも、貴方は何で私が泣いているのを、何処で知ったの?」

楯無の問いに、一夏は何も言わなくなり、そして直ぐ答えた。

「それは、貴女が涙を流していたのを見たからだ」

「私が、涙を流していた所を?」

楯無の言葉に一夏は深く頷き、そして言葉を続ける。

「ああ、でも、俺は貴女に素顔を見せる訳にはいかないし、名前も言えない——それよりも、何故、妹さんが誘拐されたのが貴女のせいだと言うんだ?」

「そ、それは……」

一夏の問いに楯無は困惑する。しかし、一夏は何も言わなかった。彼女が自分の口から言うのを待っていた。

数分後、楯無は再び観念したかのように口を開き、一夏に言った。

「成る程、家の為に妹さんを守り、妹さんに心に傷を追わせるような事を言った、と?」

数分後、一夏は楯無の腕を掴んだまま、楯無と隣同士で座り、楯無

の話に耳を傾けていた。

楯無は自分は家の仕来たりに従い、楯無の名を襲名する形で貰った事。その妹の簪が自分の為に努力していたのを気にしていた事。

勿論、楯無の名は重くのし掛かるような物であるのと、妹には自分への協力は必要ない事を言い「無能のまままでいなさい」と言ってしまった事。

それが妹を傷付け、妹と仲が冷めきってしまった事。そして、誘拐されたのが自分のせいではないのかと、楯無は思っていた事。

勿論、後者は楯無が思っている事であり、楯無が悪い訳ではない。逆に前者は楯無が悪い。

いくら、家の仕来たりとは言え、姉の為に協力しようとする妹に心ない事を言うのはどうかしている。

勿論、それも楯無が優秀な姉であるからだだった。楯無は妹の簪を思うあまりとは言え、流石に酷すぎる、と。

一夏はそう思いながらもあえて口にしなかった。

「それで私は思ったのー何で自分達は更識の家で生まれたのか、家で家の仕来たり等で楯無の名を貰ったのか、何で簪ちゃんに酷い事を言ったのかな、って」

「……………」

「それでね、私は簪ちゃんを思っているけど、私は簪ちゃんになんて謝れば良いのかなって…………簪ちゃんが許してくれるのかって…………」

楯無が話す中、一夏は楯無の話に耳を傾けている。それに、ケルティックのマスクを着けているとは言え、一夏の表情は悲しそうであつた。

楯無は妹を想っている、大事に想っている。自分よりも名誉を選んだ姉とは違い、妹の為に助けようとしている。

それに一夏は楯無を見て、自分の姉もこんな姉だったら良かったと思つた。

「最低よね…………簪ちゃんが苦しんでいるのに、姉である自分が何にもしてやれなかつた何て…………最低よね?」

楯無はそう言うと、嗚咽を上げる。妹に謝りたい、妹にこれまでの

事を償いたい。

楯無はそう言う気持ちでいっぱいだった。また、二人でお話をしたい、遊びたい、と。

そんな楯無の話を聞いた一夏は溜め息を吐いた後、楯無に言った。「だったら、助けにこうぜ……俺達で」

一夏の言葉に楯無は顔を上げ一夏を見る。一夏はマスクを着けているとは言え、哀しそうに笑っていた。

楯無に同情した訳ではない、楯無に自分と同じ想いをさせたくないからであった。

「で、でもあなたは部外者?! あなたには私達の問題に巻き込まれる理由なんて無いわよ!」

一夏の話聞いた楯無は驚きながらも反論すると、一夏は首を左右に振る。

「嫌、理由はあるよ……それはね」

一夏は楯無の腕を掴んでない方の手を楯無の頬に当てる。楯無は驚くも、一夏は言った。

「君達の辛い想いは俺にも解るから、かな?」

一夏は哀しそうに笑い、それを聞いた楯無は再び驚く。刹那、コンピューターガントレットから通信が入る。

一夏は通信に応答しようかとしたら、向こう側から通信が入った。

『聞いたぞ一夏、俺も行くぜ? お前の隣にいるお姉さんの為にも協力してやるぜ?』

通信してきたのは止だった。止は一夏と楯無のやり取りの一部始終をコンピューターガントレットから訊いていた。

「止、お前もか?」

『ああ、お姉さんの気持ちも解らなくもねえよーそれに俺は女の子を誘拐する野郎には腹が立つから……うわっ!! ハトが俺の頭の上!! シツ、シツ!!』

「と、止?」

止の言葉に一夏は驚き訊ねるが止からはハトを追い出そうとする止の声が聴こえる。

そんな一夏に楯無は何も言わず見つめていた。

「取り敢えず、妹さんは何処にいるか教えてくれないか？」

「えっ……でも、そんな事したら」

楯無は戸惑うも、一夏は笑う。

「大丈夫だよ、俺達を信じて」

一夏の言葉に楯無は再び驚く俯く。それもほんの僅かだったのが、こう思った。

彼等なら妹を助けてくれる、と。勿論、彼等を信じた訳ではない、だが、妹を助ける事が出来るのは、彼等しかいない、と。

そして、楯無は決意したように顔を上げ、哀しそうに言った。

「妹を、私達姉妹を助けて……」

楯無は言った。一方、それを聞いた一夏は頷いた。

そして、一夏、楯無、止による簪救出作戦が今始まった。

第二章、簪救出、プレデター達の成人式 第9話

一夏が楯無や止と共に楯無の妹・簪救出の為に動き始め、電車に乗っている頃、ここは日本からかなり離れた、周りが海で囲まれた氷の大陸、南極。

南極は北極よりも寒く、辺りは氷で出来た厚い床に近い地面。今日は最悪なのか、風よりもたち悪く、目の前が見えない程強い吹雪が大陸中に吹かれている。

勿論、そこに生き物がいないと言う訳ではない。ペンギン等が棲んでいるのと、南極を調査する為に世界中から選ばれた極僅かな人が海の近くで基地を設け、そこで住んでいる。

「グルル……」

そんな南極の中央には、三体の宇宙人が南極の中を歩いていた。

人間よりも一回り大きい身体に、黄色い肌。腹や脛等が一部露出している甲冑を纏い、各々の得意分野である武器を少しだけ持っていた。

髪が太く鋭いのが何本も生えているのと、各々、顔にはデザインが違うマスクを着けている。

一体はデコボコとしたマスク、一人は他の二体とは違いさっぱりとしたマスクを着けている。

そして、最後の一体は口元が複雑であるが体格が他の二体とは違い胸板が厚く、身体も少し大きい。何故なら、彼がリーダーであるのと、他の二体を引き連れて、南極の中を歩いていたのだ。

彼等の名はない。強いて言うならプレデターとも呼ばれている。そんな彼等が南極の中を歩いていたのは、とある儀式をクリアする為でもあり、宇宙船からこの地球へと降り立った。

彼等は未だ、未成年である。彼等とはある儀式、成人式をクリアする為に地球へと来たのだ。

それに、彼等は一夏、勇人、止とは知り合いでもある。

「モウスグ、指定サレタ場所だ」

顔に口元が複雑なマスクを着けているプレデター・ケルティックがそう言う。それを聞いた、顔にデコボコとしたマスクを着けているプレデター・チョツパーと、顔にさつぱりとしたマスクを着けているプレデター・スカーがピクツと身体を動かす。

三体のプレデター達は、これから成人式を迎える。そこは氷の床下の奥深くに建てられている一つのピラミッド。

そこが成人式の会場でもあり、史上最大の死の会場でもあった。ピラミッドにはプレデター達よりもタチの悪いゼノモーフと言う宇宙生物が何十、何百もいて、そこにはリーダー格のクイーンもいる。

それは、彼等が成人式を行い、クリアする為に必要な宇宙生物でもあり、そう簡単にいく訳にはいかない事をも意味していた。

そして、三体のプレデターは、とある場所へと着く。そこには大きな穴があった。その穴は地面の奥深くに続いていて、坂道にもなっていた。

そう、そこがプレデター達が目指すべき成人式への道でもあった。

「イヨイヨダナ？」

スカーが言うと、ケルティックとチョツパーは頷き、直後に三体のプレデター達は各々、武器を展開する。

スカーは左腕に、二本の細長いリストブレードを展開し、チョツパーは両前腕の下にある二本の太く長いリストブレードを展開し、ケルティックは背中にある槍を取る。

『生きて帰って来てね、ケルティックーケル』

刹那、ケルティックは、とある青年の顔を思い出す。青年とは一夏だった。

「イチカ……」

ケルティックは一夏を思い出し眩く。

「ケルティック？」

そんなケルティックにチョツパーが訊ねると、ケルティックはチョツパーを見た後に首を左右に振り、チョツパーとスカーを交互に見た後、頷く。

「行クゾ」

ケルティックの言葉にスカーとチョッパーは軽く頷き、三体のプレデター達は穴の中へと踏み入れる。

これから、彼等は死地へと赴く。彼等は名誉ある大人になる為、プレデターとしての誇りを得る為、そして、とある人間と再び再会する為に死地へと足を踏み入れた。

「ギンチャアアアアアア……」

そして、ピラミッドから沢山の宇宙生物の鳴き声が聞こえた。それも一匹ではない、何匹も鳴き声を上げていた。

「……………」

一方、その頃、一夏は楯無や止と共電車の中にいた。

その電車は横浜まで走るが周りには人がいるのと、一夏と楯無は隣同士に座り、止はその近くで立ちながら窓の外を眺めていた。

それに三人は、横浜に着くまでやる事は無かった。止は電車の外を眺め続け、楯無は隣に座っている一夏の肩に頭を置きながら哀しそうに眠っていて、一夏は不貞腐れてながら黒い鞆を大事そうに持っている。

それに楯無は兎も角、一夏と止は装備を解除していた。

「……………」

楯無の隣に座っている一夏は不貞腐れながら呟く。それを聞いた止は一夏を見る。

「どうしたんだ一夏？」

「どうしたもこうしたも無いだろ？　俺達は素顔を晒すつもりなんて無かったのに」

「まあ、良いじゃん？　別に秘密にしている訳じゃないんだからさ。」
「そう言う問題じゃねえよ？　それに素顔を晒す羽目になったのはお前のせいだろうが」

一夏は指摘すると、止は苦笑いしながら髪を掻く。それに彼等は金を持ってない。金は、横浜までの電車賃は楯無に出してもらった。

「つたく……」

止を見た一夏は呆れるも、隣にいる楯無を見る。楯無は未だ眠り続けていたがその表情は何処か悲しい。

眠っている楯無を見た一夏は軽く溜め息を吐くと、再び止を見て言った。

「俺も一眠りするから、横浜に着いたら起こせよ？」

一夏は止にそう言った後、一夏は眼を閉じる。一方、止は「えくく」と情けない声を上げる。勿論、それは止への罰でもあった。

そして、一夏達が乗ってる電車は横浜に着くまで各駅に停まらなきやいけない為、時間が掛かるのであった。

そして、電車は東京駅に停まった。

「グルル……」

一方、南極にいるケルティック、スカー、チョツパーの三体のプレデターは穴の中を滑るように降り立った後、南極の地下深くにある場所を歩いていた。

そこは太陽の光を浴びる事が永遠になく、辺りは冬のように冷たい風が流れ、地上を支えるかのような氷柱が何本も見受けられた。

それもピラミッドへの道標だけでなく、成人式への試練の一つでもあった。勿論、ケルティック達には関係ない。

「ギンチャアアア……」

刹那、近くから何かの生き物の鳴き声が聴こえ、ケルティック達は立ち止まり、顔に着けているマスクで辺りを確認する。

辺りには何かの生き物が四匹も近付いてくる。それも奇妙な鳴き声を上げながら近付いてくる。

ケルティック達は警戒しながら武器を構え始める。ケルティックは槍を取り出し、チョツパーはリストブレイドを構える。

しかし、スカーも腰回りに手裏剣を取り出し、軽く振った直後、突如、手裏剣を後ろへと投げる。

手裏剣は一直線に突き進み、目の前には何かの生き物がいて、その生き物の首を真つ二つにし、生き物は頭から血を流す事もなく、床に落ち、胴体も倒れる。

一方、手裏剣はブーメランのようにスカーの手元へと戻る。

「ギンチャアアア!!」

直後、近くにいたであろう生き物達が奇声を発しながら、ケルティック達に襲いかかるように走り出す。

その生き物は全身が黒く、細長い後頭部、流れ出る涎に剥き出しの歯。肉がなく、骨が見える程の胴体に細長い四肢。背中には四本の突起物に、先端が尖っている細長い尻尾。

誰からみても気持ち悪いと口を揃えて言うだろう。その生き物の名はゼノモーフープレデター達の最大のライバルであり、この生き物達が世界中に現れたら、人類は絶滅してしまう程、危険な宇宙生物だった。

それにゼノモーフは三匹いた。三匹のゼノモーフは奇声を上げながら、ケルティック達に襲いかかる。

しかし、ケルティック達も武器を構え迎撃態勢をとる。そして、三匹のゼノモーフと三体のプレデターの死闘が始まった……。

第10話

「ギアアアア!!」

三匹のゼノモーフ（これらを全てA、B、Cと呼ぶ）は奇声を上げながら、ケルティック、スカー、チョップパー目掛けて走る。

そして、三匹は何故か中央にいるケルティックだけに狙いを定めていた。何故なら、ゼノモーフは皆、頭が悪かったのである。

「キィィアアア!!」

中央にいるゼノモーフAが、ケルティックの直ぐ近くにまで来ると、ケルティックに襲い掛かるように跳躍した。

「ガアア!!」

ケルティックは叫びながら、ゼノモーフAに対し槍で攻撃……ではなく、拳で殴った。

拳はゼノモーフAの顔面に命中し、ゼノモーフAは顔に激痛を感じながら後ろへと吹っ飛ばされる。

勿論、後ろにいたゼノモーフBを巻き込む形で体当たりし、ゼノモーフBはゼノモーフAと共に吹っ飛ばされる。

しかし、ゼノモーフCは何とか躲し、ゼノモーフAとゼノモーフBが横を通り過ぎても、ケルティックに迫る。

「キィィアアア!!」

「グガアア!!」

ゼノモーフCとケルティックは互いの相手に威嚇するように咆哮する。刹那、ゼノモーフCはケルティック目掛けて跳躍した。

ケルティックは槍で刺そうとしたがゼノモーフCの方が早く、ケルティックにのし掛かるように押し倒す。

ケルティックは押し倒された直後に槍を手放してしまう。

「ギアアア!!」

ゼノモーフCは二本の長い腕を使ってケルティックを攻撃する。しかし、ケルティックは何とか堪えつつ、ゼノモーフCを巻き込む形で寝返りうち、右腕でゼノモーフCの頭を地面に押すように押さえ、左腕にある二本のリストブレイドを素早く展開すると、ゼノモーフC

の頸動脈を斬る。

「キィィアアア!!」

ゼノモーフCは悲痛の叫び声を上げるも、ケルティックは再びリストブレイドでゼノモーフCの首を斬る。

刹那、ゼノモーフCは身体をピクピクとしながら事切れた。

「キィィアアア!!」

「シャアアアア!!」

その間に、ゼノモーフAとゼノモーフBが起き上がり、ケルティックに威嚇するように咆哮を上げる。

だが、そんな二匹の前に立ちはだかる者達がいた。スカーとチョツパーであった。

二体のプレデターはケルティックがゼノモーフCを倒したのを確認する前に、ゼノモーフAとBの近くにまで移動していた。

「グガアアア!!」

チョツパーは咆哮を上げながら両腕の腕当てに装備されているリストブレイドを展開する。

スカーも無言で、左腕にある二本のリストブレイドを展開する。

「キィィアアア!!」

ゼノモーフAとBが咆哮を上げながら、二体のプレデターと闘おうとする。一方、スカーとチョツパーも相手を絞る。

スカーはゼノモーフAを、チョツパーはゼノモーフBを相手にしようとした。

「グルル……」

その間、ケルティックはゼノモーフCを殺した後、立ち上がり、槍を拾った後、二人の間を見ている。

ケルティックは二人に力を貸すどころか、手助けをしようとはしなかった。

理由は、プレデターは力を貸してはいけないのである。

もしやってしまったら、一族の恥として白い目で見られてしまう。それを回避するには、同族に殺される他ない。

その為、ケルティックはスカーとチョツパーの闘いを見守るしかない

かったのである。

「……!?」

刹那、ケルティックは目の前の光景が変わるのを感じた。目の前にはスカーやチョツパーがいない。

いるのは、一人の青年が槍を構えながら、自分に背中を向けている。青年の目の前には大きな獣のような生き物が唸り声を上げている。

「イチカ?」

ケルティックは、その青年を呼ぶ。青年が振り返るとした直後、光景は変わった。

ケルティックの目の前にいたのは、ケルティックに背中を見せているスカーとチョツパーだった。

「キィィアア!!」

刹那、ゼノモーフBがチョツパーに襲い掛かるように体当たりしてくる。

チョツパーはゼノモーフBの体当たりを躲すと、ゼノモーフBの尻尾を両手で掴み、引っ張る。

「キァア!!」

ゼノモーフBは尻尾を引っ張られ転ぶも、チョツパーはゼノモーフBの尻尾を掴んでいる両手に力を入れ、ゼノモーフBを背負い投げした。

ゼノモーフBは頭から氷の地面に直撃したが悲痛の声を上げる前に、チョツパーはゼノモーフBの尻尾を掴んだままゼノモーフBを軽く振り回した後、両手を放す。

ゼノモーフBはチョツパーの少し離れた場所の地面に転がる。

「グオオアアア!」

チョツパーは、ゼノモーフBの元へと走る。一方、ゼノモーフBも起き上がるが、チョツパーに体当たりされ、チョツパーにのし掛かられるように押し倒される。

「グアアア!!」

刹那、チョツパーはゼノモーフBに馬乗りしながら両腕にあるリストブレイドでゼノモーフBの首を切った。ゼノモーフは悲痛の声を

上げる前に身体を痙攣しながら事切れた。

そして、軍配はチョッパーに上がった。

「……」

一方、スカーは無言で、ゼノモーフAは咆哮を上げながら、一歩も引かない。二体の宇宙生物の間には殺伐とした空気が流れていた。

どちらかが先に動けば有利となり、後から動いた者がカウンターを喰らわせる事も出来る。

その為、スカーとゼノモーフAは先に動けばいいのかを悩んだ。勿論、先に動いたのは、ゼノモーフAだった。

「シヤアアアア!!」

ゼノモーフAはスカーの直ぐ近くにまで来た直後に跳躍して襲い掛かる。

しかし、スカーは右手を拳に変え、ゼノモーフAの下顎を下から殴った。

ゼノモーフAは下顎に激痛を感じるが上へと吹っ飛ばされそうになるがスカーはゼノモーフAの片脚を左手で掴み、ゼノモーフAを地面に叩き落とす。

ゼノモーフAは地面に叩き付けられるが、スカーは無言でゼノモーフAの片脚を放さないまま、ゼノモーフAを背負い投げした。

一回ではない、何回も繰り返し返した。そのせいか、ゼノモーフAからは息はしていない。ゼノモーフAは死んでいた。

ゼノモーフAの後頭部には輝が入り、黄緑色の液体が流れている。そして、スカーが背負い投げを止めたのは、一分後だった。

ゼノモーフAは死んでいたが、スカーは何も感じないように咆哮を上げる。

辺りにスカーの咆哮が木霊するも、チョッパーも咆哮を上げる。

「……フン」

それを見たケルティックは軽く笑う。しかし、そんなプレデター達を遠くから見ている、一匹のゼノモーフがいた。

そのゼノモーフはケルティック達が倒したゼノモーフとは少し違っていた。

「シヤアアアア……！」

そのゼノモーフは涎を垂らしながらその場を離れるように立ち去った。そして、そのゼノモーフは向かった先は、ピラミッドである。そして、ケルティック達もピラミッドへと向かう為に歩き出した。ゼノモーフはプレデター達が来た事をクイーンに伝える為、ケルティック達は成人式をクリアする為に……。

『横浜、横浜……』

一時間後、ここは横浜駅。駅に設けられたスピーカーから男の車掌の声が聴こえ、電車から沢山の人が降り、その後に電車へと乗る人が何人も見受けられる。

そんな中、黒い鞆を大事そうに抱えている少女、楯無とその隣には青年、一夏は電車から降りる。その後ろには止もいたが電車から降り、直後に欠伸びしていた。

彼等は全員、楯無の妹・簪を救う為に横浜へと来たのだ。勿論、約束の七時まで未だ二時間ある。

それまでに、三人は横浜で何処に簪がいるかを探し出さなければならぬ。勿論、手掛かり港であるが港だけでは判断出来ない。

港には沢山の人がいるのと、その中から簪を捜すのは骨が折れる。その為、向こうからの連絡を待つ他ない。

そして、そう考えているのは一夏であった。止は辺りを見渡して、楯無は両手に持つてる黒い鞆を大事そうに抱き締める。

「簪ちゃん……待っててね……必ず、お姉ちゃんが助けて上げるから」
楯無は哀しそうに、妹の無事を祈るようにそう呟く。楯無そんな楯無に一夏は無言で見据え、止は再び欠伸びをしていた。

「大丈夫だ、あんたら姉妹に辛い思いはさせねえよ」

一夏は楯無にそう言い、楯無は一夏を見ようとしたが一夏は二人から離れるように下りエスカレーターの方へと向かう。

楯無と止は一夏を追い掛けるように歩き、少し歩いた後に改札口を

通り、駅を出た。

目の前は交差点だった。交差点と言っても、バス停が幾つも置かれ、タクシーが何台も停まっている。

そう、ここは交差点と言うよりも、横浜駅から他へ移動するよりも待ち合わせする為の交差点でもある。

しかし、そんなのは一夏達には関係なかった。周りが騒がしい中、人々が行き交う中、一夏達も彼等に紛れ込むように歩き始めた。

第11話

「わああ〜」

ここは横浜の街の中、そこには沢山の人が行き交って、その中には一夏、楯無、止がいた。

一夏と楯無は隣同士で歩き、その後ろには止がいて、止は横浜の街を見ていた。

横浜の街はあまり変わってはいなかった。勿論、止から見ればの話である。

止は三年振りとも言える地球に帰還したにも関わらず、外国人観光客のように喜んでいた。

彼の喜びは地球に帰還した事よりも、色んな場所を行きたい気持ちの方が強い。

彼の喜びは何処から湧いてくるのかは判らないーそれでも、彼は一夏や勇人の親友である事に変わりはない。

そんな止とは違い、一夏と楯無は止のように喜んでいない。一夏は表情を陰しくし、楯無は哀しそうに俯いていた。

勿論、二人は止のように楽しんでる訳ではない。止を含めた三人は楯無の妹、簪を助ける為に横浜へと来たのだ。

一夏は楯無の妹が横浜の何処の港にいるのかを考え、楯無は妹が無事である事を祈っていた。

三人の間には重苦しい空気と言うよりも、あまり良く、悪い訳でもない空気が流れている。

しかし、彼等は簪と言う少女を助けると言う共通点がある為、何とも言えない。

「それにしても、変わらないよな〜」

止が呟き、一夏は軽く頷く。

「ああ、それにしても……大丈夫か？」

一夏は隣にいる楯無に訊ね、楯無は顔を上げ、軽く笑う。

「いえ、大丈夫よ……」

楯無は軽く笑いながら答える。それを見た一夏は何も言わず楯無

を睨むも、軽く溜め息を吐き、前を見る。

一夏は楯無が無理して笑っている事に気付いていた。彼女は妹を心配している、彼女は妹の安否を気にしている。

一夏から見れば、楯無は自分が姉としての罪悪感に苛まれているのではないのかを感じた。

しかし、一夏はあえて口にしなかった。自分は楯無の妹を助ける為であって、姉妹の仲を戻す訳ではない。

姉妹の問題は姉妹が解決する物であり、自分が関わる訳ではない。一夏は自分にそう言い聞かせる。

「一夏、俺、横浜中華街に行きたい」

刹那、止が唐突に何かを言った。それを聞いた一夏と楯無は立ち止まり振り返ると、止は両手を頭の後ろに当てながら不貞腐れていた。

「止、何を言ってるんだ？」

一夏が訊ねると、止は両手を腹の方へと移動させる。

「お腹空いた」

「えっ？」

止の言葉に一夏は惚ける。そんな一夏に止は言葉を続ける。

「だから、お腹空いたー、一夏だってお腹空いてるだろ？」

「嫌、それは解るけど、我慢してくれよ」

一夏の言葉に止は首を左右に振る。

「我慢出来ない、それに一日、何も食べてないからさ！」

「えっ!？」

止の言葉に楯無は驚きの声を上げ、一夏に訊ねる。

「い、一日何も食べてないって、ほ、本当!？」

楯無の問いに一夏は戸惑い、直ぐに止を睨む。止は首を傾げ、一夏に疑を問抱いていた。

「ねえ、一日何も食べてないって本当なの？」

「それは……」

「そうだよー」

楯無は再び問うと、一夏は何かを言う前に止が答える。楯無は耳を疑うも、止は言葉を続ける。

「だって俺達——嫌、ちよつと訳があつて何も食べてないよ? ……
まあ、三日も何も食べてなかつた事もあつたけどね?」

「え、ええっ!?!」

楯無は再び驚く。それを聞いた一夏は呆れ、頭を抱える。——止、
また余計な事を——と心の中でそう思った。

しかし、止の言つてる事を事実であり、何も言えない。げんに、自
分も腹を空かせている。

一夏は何も言わず瞑目する。楯無は再び訊こうとしたが一夏は何
も言わなかつた——嫌、口を閉ざす方を選んだと言い替えれば良いだ
ろう。

「うん、お腹空いてるのは事実だし、何より金も持つてないのが証拠だ
もん」

無理だった。止がまた余計な事を言つたのである。それを聞いた
一夏は瞑目しながらも苦笑いする。

「……ねえ、私には貴方達が何者なのかは判らないけど、何か奢つてあ
げるわ」

止の言葉に、楯無は言つた。楯無の言葉に一夏は瞠目し、止に至つ
ては「マジで!?!」と喜ぶ。

「い、良いのかよ? 俺達は部外者であるのと、お前の……嫌、ごめん」
一夏は何かを言おうとしたが、ある事に気付き表情を曇らせ、楯無
に謝り、楯無は悲しい笑みを浮かべながら首を左右に振る。

「良いのよ……でも、貴方は私達を助けてくれようとしているから、で
も、ちゃんと助けてよね?」

楯無は哀しそうに笑いながら言葉を述べ、それを聞いた一夏は何も
言わず頷く。

しかし、止は何を食べようかと悩んでいる為、二人の事等気にもし
ていない。

「おばちゃん、中華まん三つ!」

数分後、ここは横浜の名所、中華街にある店、そこは中華まんが美
味しく、それを食しにきた人達が店の前で並んでいた。

勿論、遠くから来た人もいれば海外から来た人達もいる。その中で、一夏、楯無、止もいて、彼等が店の一番前にいた。

因みに、中華まんを注文したのは止である。

「はい、熱々だよ！ 火傷しないようにね〜っ？」

その店の店主か店員であろう白衣を着た人柄の良さそうな小太りの中年の女性が、紙で包まれた中華まんを止に差し出す。

「あち、あちち」

止は受け取るものの、手のひらが熱く感じるも何とか持つ。

それを見た女性は笑うも、今度は近くにいた一夏に、紙で包まれた中華まんを二つ差し出す。

一夏は軽く頷いた後に受け取ると、楯無が代金を支払い、その後、女性が御釣りを楯無に渡した。

「わああ……」

「ここで喰うなよー！ 人気の無い場所で喰おうぜ」

その間、止は中華まんを食べようとしたが一夏が言葉で制止する。それを聞いた止は不貞腐れるも、リーダーの命令である以上、頷く事しか出来なず、渋々、一夏と楯無と共に、人気の無い所を捜した。

「うんめえ〜っ」

数分後、三人は人気の無い場所を見つけた後、止は中華まんを一口食べた後、感銘の声を上げる。口内に中華まんの白い生地や、中の餡の味が広がってくるのを感じていた。

それに美味しい、と。勿論、止自身の感想であり、未だ食していない一夏や楯無に判る筈はない。

「……ほら」

止を他所に、一夏は両手にある中華マンの内、片方の中華マンを楯無に差し出す。

「食えよ」

「……良い、いらない」

一夏が訊ね、楯無は俯きながら首を左右に振った後、軽く答える。恐らく簪の事がある為、喉を通らないのだろう。

一夏は軽く溜め息を吐くも、一夏は止を見る。

「止、俺の分を食っても良いぜ」

「良いのか!？」

止は喜びの声を上げるが一夏は笑みを浮かべ軽く頷いた後、自分の中華まんを。

「サンキューー!」

止は一夏が差し出してくれた中華まんを掴み、一夏の中華まんを一口食う。

それも、かなり口を大きく開けて。

「全く……ゆつくり食えよう?」

一夏は止の食い意地にヤレヤレと思いつつ、軽く笑うと楯無を見た直後、手に持ってた、楯無の分である中華マンを半分にするように千切る。

白い生地の中である、豚肉や筍等の餡が顔を覗かせるように見えるが、一夏は片方を楯無に差し出す。

「ほらよ、これなら文句ないだろう?」

一夏は軽く笑う。にも関わらず、楯無は俯いたまま首を左右に振る。

「……ハア」

楯無の同じ素振りに一夏は溜め息を吐くが楯無を哀しそうに見つめる。よっぽど、妹の事が心配なのだろうか。

楯無は未だ妹が無事である事を祈っているのだろう。一夏から見れば判らないが楯無はそう思っているに違いない。

一夏は楯無の様子に再び溜め息を吐くと、自分の分の中華まんを口に咥え、そのまま楯無を抱き締める。

「えっ、ちよつと……」

一夏の突然に行動に楯無は驚き顔を上げるが、一夏は空いてる方の手を楯無の後頭部に当て、楯無の顔を自分の胸に埋めるように押し付けている為、顔を上げる事は出来ない。

「ちよつと止めて……!」

楯無は一夏に言いながら両手や身体を激しく動かして離れようと

する。手に持ってた黒い鞆を手放すが楯無には関係ない。

「お願い止めて!!」

楯無は一夏から離れ、一夏を睨むも直ぐに瞠目した。何故なら、一夏は泣いてたのである。

「……何で泣いてるの?」

楯無は一夏に問うも一夏は楯無に背を向け、空いてる方の手で目尻にある涙を拭う。

楯無が何を聞いても一夏は答えなかった。そんな一部始終を見ていた止は中華まんを食べる手を止め、哀しそうに眼を逸らす。

「ナンデナイテルノ、ナンデナイテルノ」

しかし、近くにある建物の屋上から、とあるプレデターが身体を透明にしながら、自分達を見ている事を彼等は知る由もなかった。

そして、そのプレデターは身体を透明にしたまま、その場から離れた。勿論、その事も、一夏達は気付く筈も無かった。

第12話

「シャアアア!!」

「グオオオ!!」

一方その頃、南極の中心部の地中深くにあるピラミッド近くの空洞では、ケルティック、スカー、チョツパーのプレデター達が数十匹のゼノモーフを相手に奮戦していた。

ケルティックは槍やリストブレイド、時には拳で蹴散らし。スカーはとても長いリストブレイドや手裏剣で蹴散らし、チョツパーは長く太いリストブレイドで蹴散らしていた。

しかし、相手は自分達よりも数が多く、プレデター達には分が悪い。それでも、ケルティック達は何とか倒していく。

あるゼノモーフはリストブレイドで首を切り落とされ、あるゼノモーフは槍で刺し殺しされ、あるゼノモーフは手裏剣で真つ二つにされている。

辺りにはゼノモーフの屍が何匹も転がっており、緑色の液体が辺り一面に飛び散っている。

それでも、ゼノモーフ達は数でケルティック達を追い詰めようとし、ケルティック達三体のプレデターは自分達が持つてる武器で抗う。

どちらも死ぬ気で戦っていた。

そんな中、ケルティックは手に持つてる槍で目の前にいるゼノモーフの胸を刺す。すると、一体のゼノモーフがケルティックの元へと跳躍しながら襲い掛かり、ケルティックはゼノモーフが刺さったままの槍で風ぎ払う。

ゼノモーフは、槍に刺さったままのゼノモーフで体当たりされる形で吹き飛ばされる。しかし、今度はケルティックの後ろから二匹のゼノモーフがケルティックの元へと駆け寄る。

勿論、ケルティックは振り返りながらゼノモーフが刺さっている槍で風ぎ払い、二匹のゼノモーフは横へと吹っ飛ばされる。

「……………」

スカーは無言で右手に持つてる手裏剣でゼノモーフの首を切る。ゼノモーフの首が真つ二つになるも、スカーはそのゼノモーフに追い討ちをかけるように足蹴りした。

刹那、今度は後ろからゼノモーフが迫ってくるがスカーは振り返った直後に手裏剣を投げ、手裏剣はゼノモーフの頭を斬り落とし、スカーの手元に戻る。

「グルオオオ!!」

チョツパーは両腕にあるリストブレイドで二匹のゼノモーフを頸動脈を切り、今度は体当たりし、ゼノモーフにのし掛かるように倒れるが立ち上がり、辺りを見る。

すると、左右から二匹のゼノモーフがチョツパーに迫るように飛び掛かる。チョツパーはそれを確認した後、両腕にあるリストブレイドで返り討ちにした。

ケルティック、スカー、チョツパーは武器を駆使してゼノモーフを返り討ちにしていく中、僅かに残ったゼノモーフ達がプレデター達の強さに恐れ、突然、攻撃を止めその場を離れるように走り去る。

それは自分よりも強い生き物が現れた事による事で逃げる、と言う野生の本能なのだろうか。

ゼノモーフ達が逃げていく中、ケルティック達は武器を下ろす。
「逃ゲタカ……」

ケルティックはそう言いながら槍を背中に戻す。スカーはリストブレイドを戻し、手裏剣を軽く振って丸くし腰元に戻す。

チョツパーもリストブレイドを戻すがケルティック達は辺りを見渡す。辺りには自分達が殺したであろうゼノモーフの屍が転がっている。

しかし、ケルティック達は一通り確認した後、ゼノモーフを死体を何度も跨ぎながら歩き出し、ピラミッドの中へと続く階段を登り、中へと入る。

中はさっきの氷の空洞よりも暖かく、左右の壁には、プレデターや

ゼノモーフが対立しあうような壁画もあり、古代のプレデターの像か通路を見ているように凜と佇むように造られている。

それは未成年のプレデター達を迎える為か、それとも儀式を成す為の未成年プレデター達の無事を祈る為のだろう。

勿論、ケルティック達はそんな事は気にもしない。

「待テ」

刹那、スカーが気配を感じ二人に言い、ケルティックとチョツパーは立ち止まり、スカーを見やる。

「ドウシタ？」

ケルティックが訊ねるがスカーはマスクを使って辺りを見渡す。すると、奥からゼノモーフが此方へと近付いてくる。五匹はいた。

「……マエカラ、クルゾ」

スカーがそう言うと、ケルティックは槍を取り構え、チョツパーはリストブレイドを展開する。

スカーがリストブレイドを展開し、腰にある手裏剣を取り、軽く振る。

「シャアアア!!」

奥から奇声が聴こえ、辺りに木霊する。それも五つあり、ケルティック達の元へと近づいて来る。その正体はゼノモーフだった。

ゼノモーフ達はケルティック達を殺そうと再び襲い掛かる。そんなゼノモーフ達にスカーは再び手裏剣を投げる、手裏剣は二匹のゼノモーフを斬り殺し、スカーの手元へと戻ってくる。

一方、ケルティックは咆哮を上げながら槍を構え、ゼノモーフ目掛けて駆け寄り、一番前にいたゼノモーフを槍で風ぎ払う。

刹那、風ぎ払われたゼノモーフは横へと吹っ飛ばされ、壁に激突する。だが、その後ろには別のゼノモーフがいた。

そのゼノモーフは跳躍して襲い掛かるも、ケルティックは素早く槍で刺し殺し、今度は壁に激突したゼノモーフを刺し殺す。

五匹の内、四匹はスカーやケルティックに殺された。だが、最後の一匹であるゼノモーフは何故か動かなかった。

そのゼノモーフは他のゼノモーフとは似ているが少し違う。その

ゼノモーフはケルティック達の戦い方をまるで監視しているように静観していた。

「グルルル……」

そんなゼノモーフを見たケルティックは唸り声を上げながら威嚇する。それでも、そのゼノモーフは何もせず奇声を上げずその場を走り去った。

そのゼノモーフを、ケルティックは追い掛けようとする。そんなケルティックを、チョツパーが「マテ！」と呼び止める。

ケルティックは立ち止まり身体を翻し、チョツパーの隣にいたスカーはチョツパーを見やる。

「何故ダ!？」

ケルティックはチョツパーに問う。すると、チョツパーは、こう答えた。

「追ウナケルティック、一人デノ行動ハ死ヲ招ク」

「何ヲ言ツテル！ 俺達ハ誇リ高キプレデターダ!! ソレニ俺達ハ未ダ未成年ダ！ 此所ニイルゼノモーフヲ一匹残ラス殺サナケレバ成人トハ認メテモラエナイ！」

「ソレハ解ツテイルーダガ、奴ラハ俺達ヨリモ多イー俺達ハ肝心ノアノ武器ガ無ケレバ勝カテナイ。リストブレイドヤ手裏剣ダケデハ心細イ」

チョツパーの言葉にケルティックは言葉を詰まらせる。そして、スカーが口にした「あの武器」とはプラズマキャノンの事である。

プラズマキャノナーそれはプレデター達の遠距離専用の武器であり主力武器である。そのプラズマキャノンをつけられるのは他の惑星に行く時や成人式をクリアしたプレデターにしか与えられない。

それに、成人式を行うプレデター達に持たされる事は許されなかった。何故なら、その装備は成人式の場所で自ら手に入れる他ないのである。

理由は、それも試練の一つであり、未成年プレデター達を試す為の一つでもあった。

話を戻そう。チョツパーはその事をケルティックに言ったがケル

ティックは俯き、槍を掴んでいる槍に力を入れ、「クソッ」と呟く。

一方、チョッパーは言葉を続ける。

「ケルティック、オ前ガ大人ニナリタイト言ウ氣持チハ解ルーダガ、俺ヤスカーモ大人ニナリタインダ」

チョッパーの言葉にスカーは頷く。しかし、ケルティックは何も言わず俯いている。

「ソレニケルティック、オ前ガ死ンダラ、一夏ガ哀シム」

チョッパーの言葉にケルティックは顔を上げる。マスクを被っているがケルティックは驚いていた。

「ケルティック、オ前ガ死ンダラ一夏ハドウナル？ 一夏ハオ前ニ逢イタガツテイルンダゾ？」

チョッパーはケルティックにその事を問い、ケルティックは何も言わず再び俯く。

確かにそうだった。自分は早く成人になりたいだけではなく、一夏とも再会したかった。

成人式をクリアした事を伝えたい、と。それだけではない、一夏と再び話したい、一夏と再び槍を交えたい、拳をぶつけない、と。勿論、彼等の間には種族を越えた友情が芽生えていた。

ケルティックはそう思い、顔を上げ軽く頷く。

「アア、ソウダナ」

ケルティックの言葉にチョッパーは頷き、スカーも頷く。それはチョッパーやスカーにも逢いたい人物がいる為に。

「行クゾオ前ラ、俺達ノ強サヲ奴ラヲ見セテヤロウゼ！」

「オウヨ！」

ケルティックの言葉にチョッパーは答え、スカーは無言で頷いた。そして、三体のプレデター達はプラズマキャノンがある中心部へと向かう。

だが、途中でゼノモーフ達が襲い掛かって来ても、彼等は負けないだろう。

第13話

「モウスグ、中心部、ダ」

数分後、プレデターのリーダー格であるケルティックはピラミッドの中を索敵しながらそう呟く。

彼の後ろにはスカールとチョッパーがいて、ケルティックの言葉に頷く。彼等は今、中心部へと向かっていた。

彼等が中心部へと向かう理由は、そこにプラズマキャノン砲があり、ゼノモーフを倒す為の強力な武器。

彼等は、プラズマキャノン砲を手に入れた後、残りのゼノモーフを一掃しようと考えていた。

プラズマキャノン砲さえあれば、ゼノモーフ等敵ではない。だが、それだけではゼノモーフを倒す事は出来ない。

ゼノモーフには、ゼノモーフの幼体であるフェイスバガーを産んだクイーンがいる。

クイーンはゼノモーフのボスにして強い。それに常にクイーンの周りにはゼノモーフ達がいる。

そのゼノモーフ達が今までのゼノモーフ達とは違う。その為、クイーンやゼノモーフを倒せるのはプラズマキャノン砲をうまく扱える事と、プレデター達の力量が鍵なのである。

話を戻そう。ケルティック達が中心部へと向かう為に通路の中を歩き続ける中、彼等は中心部へと辿り着いた。

そこはとても広く、辺りには壁画があり、プレデターしか読めない文字が無数に書かれており、近くには背筋を伸ばしながら槍を持っているプレデターの像が距離を置くように幾つも建てられている。

そして、中央には五、六段しかない階段があり、その階段を上った先には棺桶に近い細長い箱が置かれている。

しかし、その細長い物の中にはケルティック達が欲しがっている、プラズマキャノンが三つ入っているのだ。

ケルティック達はそれを確認すると、中心部の中央へと向かう。途中、階段を登るがそれは直ぐに終わった。

彼等は細長い箱の前に立ち、箱のカラクリを解く。刹那、箱は自動で開く。それはまるで、沸騰したお湯の中にいる浅蜷が中をパツと開くようにも思えた。

だが、その箱は浅蜷のように素早く開く訳ではなかった。それはゆつくりの方であつた。それだけでじゃない、白い煙の様な物が噴き出る。

それはケルティック達の顔を覆う程ではない。そして、煙が噴き出る箱の中から、三つの機械的な銃身が姿を見せる。

それこそが、プラズマキャノン砲だつた。が、それらは全て小、中、大のように大ききや形が違う。

それでも、ケルティック達には関係ない事だつた。

「グルル……」

ケルティックは唸りながら真ん中にある、真ん中ぐらゐの大ききのプラズマキャノン砲を手に取る。

それに続き、スカーやチョッパーもプラズマキャノン砲を取るが、スカーは一番大きいのを、チョッパーは一番小さいのを取つた。

そして、三体のプレデターはプラズマキャノン砲を右肩に装着している機械へと取り付ける。

カチャツ、カチャツと言う音が三つも聴こえるがケルティック達はプラズマキャノン砲を着け終えた。

刹那、ケルティック達の右肩に装着されているプラズマキャノン砲が動く。

ケルティックが動かしている訳ではない。プラズマキャノン砲が勝手に動いたのだ。

ケルティックはそれを確認した後、右腕にあるコンピューターガントレットドを操作する。

「大丈夫ダ、大丈夫ダ」

コンピューターガントレットドから、くぐもつた声が聴こえる。それは、プラズマキャノン砲が扱う事が出来たのを、ケルティックは電子音を通して彼等に伝えていた。

スカーやチョッパーも電子音を使つて答える。どうやら、大丈夫の

ようである。

「グルル……ゴアアア!!」

ケルティックは咆哮を上げる。それは成人式をクリア出来るのかも知れない喜びでもあった。それも知れない喜びでもあった。

それは、憧れだったクリーナーに近付けるのかも知れない喜びでもあった。それは、一夏に再会出来るのかも知れない喜びでもあった。

ケルティックはそう思い思い、咆哮を上げてしまった。そんなケルティックにスカーは首を傾げ、チョッパは何も言わなかった。

辺りにケルティックの咆哮が木霊する。それはケルティック達が成人式を成すかもしれない事を意味していた。

しかし、近くから何か動く音が響き渡る。それは、プラズマキヤノン砲を取ったプレデター達の第二の試練でもあった。

その頃、此処はピラミッドの最深部。そこはとても広く、床は奥まで続く一本道であり、両側にはマグマが噴き出っていて、生き物が落ちたら骨の髄まで溶けてしまう。

そこにいるだけでも誰もが暑いと呟き、その場から離れたい、と思うだろう。しかし、その奥には八体のゼノモーフがいた。

七体は兎も角、一体だけは違う。その一体のゼノモーフは他のゼノモーフよりも大きく、何故か拘束されていた。

そのゼノモーフは潰れたように平べったく禍々しい後頭部、四本の細長い四肢に二本の小さな細長い腕が特徴なゼノモーフだった。

何故なら、そのゼノモーフは他のゼノモーフのボスにして、クイーンである。それに拘束されているのは、プレデター達に成人式に必要な為に捕まり、拘束されたのである。

「シャアアア!!」

そんなクイーンや七匹のゼノモーフ達の元へと駆け寄るゼノモーフがいた。

そのゼノモーフは、ケルティック達が他のゼノモーフ達を殺してい

るのを静観したゼノモーフだった。

ここに来たのも、クイーンに報告する為である。

「シヤアアアア……」

そのゼノモーフを見たクイーンは元気がないように微妙に声を上げ、そのゼノモーフはクイーンの前に来ると、声を上げた。

ゼノモーフは同じ事を何度も繰り返すように声を上げていた。まるで、クイーンに何かを言い掛けている。

そんなゼノモーフに対し、クイーンの近くにいたゼノモーフ達も鳴き声を上げている。

彼等は何かの会話をしていた。その会話は怒りや哀しみ等が感じられない。そうだろう。他の種族や彼等の会話を理解する者は近くにいない。

その為、彼等が何を言っても、周りは理解出来ないだろう。

「シヤアアアアアア……!!」

刹那、ゼノモーフ達が怒りに近い鳴き声を上げる。それは怒りや哀しみが籠っていた。

それは、クイーンの近くにいたゼノモーフ達が、ケルティック達を静観していたゼノモーフから、他のゼノモーフ達が殺されたのを報告されたのだ。

これには流石にゼノモーフ達も怒りを抑えきれない。そして、個々にいる宇宙生物達は、プレデター達を殺さなきゃ気が済まないでいた。

「シヤアアアアアア……!!」

そんなゼノモーフ達に、クイーンは鳴き声を上げて静まらせる。それを聞いたゼノモーフ達は落ち着き、クイーンを見やる。

クイーンは鳴き声を上げ続けていた。自分の産んだ子供達が死んだのを、哀しんでいるようにも思える。

クイーンを見たゼノモーフ達はクイーンの鳴き声を聞いて何も言えなくなる。すると、クイーンは、ケルティック達を静観していたゼノモーフに対し、鳴き声を上げる。

今度はお前が行け、と。勿論、クイーンはそのゼノモーフに命令し

たのは理由があった。そのゼノモーフはクイーンが最初に産んだフェイスバガーの成体であるゼノモーフだったのだ。

そのゼノモーフは今迄のゼノモーフ達とは違う。他のゼノモーフ達よりも頭が良く、とても強い。

ケルティック達。プレデターにとつて厄介な相手である。その為、クイーンはそのゼノモーフに全てを託した。

この子なら、プレデター達を倒す事が出来るだろう、と。

そして、クイーンは近くにいるゼノモーフ達に対し鳴き声を上げる。

お前達も行け、と。勿論、それもゼノモーフ達には解り、ケルティック達を静観していたゼノモーフや、クイーンの近くにいたゼノモーフ達は一齐に、ケルティック達を静観していたゼノモーフが来た道へと引き返すように走り出す。

宇宙生物達の間には、同族であり兄弟同然の仲間達を殺したケルティック達を殺す、と言う復讐心が芽生えていた。

後ろからクイーンの鳴く声が何度も聴こえる。それでもゼノモーフ達は振り返らなかつた。

クイーンの鳴き声がゼノモーフ達を鼓舞させているのと、クイーンがプレデター達を殺して欲しいと言う頼みと言う風に、ゼノモーフ達には聴こえていた。

そんなゼノモーフ達にクイーンは鼓舞させるように鳴き声を上げ続ける。ゼノモーフ達がその最深部からいなくなってもなお、鳴くのを止めない。

そして、クイーンは鳴き声は最深部に木霊し、クイーンの鳴き声は徐々に小さくなっていた。

第14話

「グオオオ!!」

ケルティック達を静観していたゼノモーフ、クイーンの近くにいたゼノモーフ達がケルティック達を殺す為に中心部に向かっている頃、ケルティック達は自分達に襲い掛かってくる数匹のゼノモーフ達と戦っていた。

数ではゼノモーフ達が少し勝っていたがケルティック達が押している。何故なら、ケルティック達は左肩に着けているプラズマキャノン砲を使って戦っていた。

しかし、ケルティック達がプラズマキャノン砲ばかり頼っている訳ではない。ケルティック達は自分の得意武器である槍やリストブレイドも使っている。

その為か、ゼノモーフ達は一匹、また一匹とケルティック達に殺されていく。そんなプレデター達に、一匹のゼノモーフがケルティックに襲い掛かる。

刹那、ケルティックの左肩に着けられているプラズマキャノン砲の砲口から、青い光を発する電気の球体ープラズマ弾が放たれ、プラズマ弾は襲い掛かってきたゼノモーフの顔を吹っ飛ばし、顔の無くなったゼノモーフの身体はその場で倒れる。

微かに痙攣を起こしているがそれは直ぐに治まった。

「グルルルルル……」

ケルティックはゼノモーフを倒したのを確認した後、着けてるマスクで辺りを伺う。近くにいるスカーやチョッパーも着けてるマスクで辺りを伺う。

近くにはゼノモーフの気配はない。あるとしたら、さつき殺したであろうゼノモーフ達の屍が辺りに転がっている。

宇宙生物達はケルティック達に襲い掛かってきた。だが、プレデター達の返り討ちされ、殺された。プレデター達が悪い訳ではない、彼等は正当防衛かつ儀式の為に致し方ない事である。

その間に、ケルティック達は近くにゼノモーフ達がない事を確認

した後、武器を戻す。

「グルル……」

ケルティックは右腕にあるコンピューターガントレッドを操作し始める。すると、ガントレッドの上から、赤い映像が流れる。

映像には、このピラミッド全体が映し出されている。それでも、ケルティックはコンピューターガントレッドの操作の手を止めない。

刹那、映像に映し出されているピラミッドが黒く変わり、建物内が見え始める。それだけでなく、ある人影や数十匹の生物がオレンジ色で映し出されていた。

人はケルティック、スカー、チョッパであり、生物達はゼノモーフ達である。しかし、ゼノモーフ達は未だピラミッド内にうようよいて、三十匹はいない。

それを見たケルティックは再び唸り声を上げ、チョッパーは何も言わず俯く。しかし、スカーは何も言わず、ケルティックがコンピューターガントレッドで流した映像で違和感を感じていた。

それは、ピラミッドの最深部にいるクイーンに対してだった。

クイーンは最深部にいながらも身体を拘束され、辺りに護衛の筈のゼノモーフが一匹もない。普通なら、クイーンは子孫を残す為の重要な存在の筈。

なのに、肝心のゼノモーフ達はクイーンをほったらかしにしている。スカーはその事をケルティックやチョッパーに指摘しようとした直後、周りの壁や地面が変わるように動き始める。

ケルティックはコンピューターガントレッドを操作するのを止め、辺りを見渡す。スカーとチョッパーも建物が動いたのに驚きもせず、戸惑いを見せない。

それに、これは第二の試練でもあった。その試練は迷路であった。その第二の試練はピラミッドの中が一定時間を過ぎたら、建物内が迷路のように変わり始める。勿論、それは一定時間であり、また一定時間を過ぎれば変わる。

それはプレデター達にとって独りで戦う事になれば、迷う危険もある。それも、独りで戦うプレデターには関係ないが、辺りにはゼノ

モーフがいる為、危険も伴っていた。

ケルティック達は建物内が変わっていく中、何もしていない。そして、彼等の周りのピラミッド内は変わった。

ケルティック達の後ろは壁だが目の前と左右には奥深くにまで続く通路があった。それはまるで、ケルティック達は一人で行動しなきやいけない事をも意味していた。

ケルティック達はマスクに備えられている赤外線で通路の奥を確認する。通路の奥にはゼノモーフはいない。ケルティック達は赤外線モードから別の赤外線モードへと切り替えるも、やはりゼノモーフはいなかった。

「グルル……グオオオ」

ケルティックは仕方なく、スカーやチョッパーに命令する。ここは三方に別れた方がいい、と。ケルティックの命令にスカーとチョッパーは領き、ケルティックも領き返す。

そして、スカーは左の通路、チョッパーは右の通路、ケルティックは前の通路の方へと歩き始め、そこで別れた。

「グオオオ……」

右の通路の方へと歩いたチョッパーは一人、辺りを警戒していた。此処はさっきの場所とは違い通路は広くなりつつあり、天井も少し高い。それに何時ものように古代のプレデターの像が距離を置かれるように幾つも建てられている

しかし、辺りにゼノモーフがないとは限らない。

「シヤアアア……」

すると、チョッパーの目の前から、二匹のゼノモーフが鳴き声を上げながら、チョッパーの元へと駆け寄ってくる。一匹は通路を走り、もう一匹は壁にへばりつきながら走っていた。

チョッパーは二匹のゼノモーフを見て、プラズマキャノン砲の砲口をゼノモーフに向け、リストブレードを展開する。刹那、チョッパーはプラズマキャノン砲を、壁にへばりつきながら走っているゼノモーフ

フへと向け撃つ。

壁にへばりつきながら走っているゼノモーフは避けようとしたが、プラズマキャノンの攻撃を受け、吹っ飛ばされる。

それでもチョツパーは今度はプラズマキャノン砲を、通路を走っているゼノモーフへと向け、撃つ。

しかし、ゼノモーフは避け、攻撃を躲した。それを見たチョツパーは驚きはしなかったものの、再びプラズマキャノン砲で撃つ。

今度は命中し、ゼノモーフは吹っ飛ばされる。

「シヤアアア……」

だが、チョツパーの後ろにある壁の少し上には、一匹のゼノモーフが壁にへばりつきながら小さな鳴き声を上げる。

そんなゼノモーフに、チョツパーは気付いていなかった。何故なら、目の前にいるゼノモーフは二匹ではなかったー奥から、三匹が奥からやってきたのである。

チョツパーはプラズマキャノン砲を撃ち続け、目の前にいるゼノモーフ達は吹っ飛ばされ、倒される。

「シヤアアア!!」

それを好機と見たのか、壁にへばりついているゼノモーフは、チョツパーに襲い掛かる。

チョツパーは振り返るが、ゼノモーフにのし掛かられるように仰向けに倒れる。

チョツパーの後頭部に激痛は走らなかった。プラズマキャノン砲を着けてる機械のお陰で、身体には余り激痛は走らなかった。

「シヤアアア!!」

ゼノモーフは細長い両腕でチョツパーを攻撃する。チョツパーのマスクには細長い傷が幾つも出来始める。それでも、チョツパーは何とか堪え、ゼノモーフの腹を蹴る。ゼノモーフは吹っ飛ばされ、地面に叩き付けられる。

その間に、チョツパーは立ち上がり、プラズマキャノン砲をゼノモーフに向ける。しかし、プラズマキャノン砲の砲身が取れた。

「!？」

チョツパーは驚くも、倒れているプラズマキャノン砲の砲身を眺めている暇もない。今は目の前にいるゼノモーフを何とかしなければならぬ。

チョツパーは仕方なく、リストブレイドを展開し、ゼノモーフを睨む。一方、その間にゼノモーフは起き上がり、チョツパーに対し、威嚇に近い鳴き声を上げる。

一体と一匹の間には距離があるものの、チョツパーとゼノモーフは互いの襲い掛かる。

二人は抱き合うように体当たりするも、ゼノモーフは吹っ飛ばされる。何故なら、体格差ではプレデターが有利だった為に。

ゼノモーフは再び地面に直撃するように倒れる。チョツパーはチャンスと言わんばかりに、リストブレイドを……ではなく、腰にある手裏剣を取り出し軽く振ると、ゼノモーフに対して投げた。

ゼノモーフは起き上がるも、手裏剣で首を真つ二つに切られる。ゼノモーフの首は地面に転がり落ち、胴体は崩れるように倒れる。

その間に手裏剣はチョツパーの手元に戻り、チョツパーは手裏剣が軽く振り、腰に戻す。

「グルル……」

チョツパーはマスクで辺りを確認する。辺りにはゼノモーフの気配はないが、チョツパーは警戒しながらも、プラズマキャノン砲を拾い、左肩に取り付け、再び通路の奥へと向かう。

しかし、チョツパーがいる先にはゼノモーフは数匹はいる。それでも、チョツパーはケルティックとスカーは再び合流する為に自ら危険の場所に足を踏み入れた。

第15話

「……………」

その頃、左の通路を歩いてきたスカーはとある広場に出ていた。そこは周りが同然のようにプレデターの像は、一つも置かれていない。

壁にはプレデターにしか読めない古代文字が無数に書かれているのと、真ん中には、ピラミッドの頂上なのか、そこで槍を高らかに掲げながら空を仰いでいるプレデターが画かれ、その近くには広場を出る為の通路があった。

スカーから見れば関係なく、歴史の勉強しに来た訳でもない。スカーは、成人式を為し、大人になる為に来たのだ。その為には、ここにいるゼノモーフを一匹残らず殲滅する他ない。

スカーだけではない。ケルティックやチョツパーも大人になる為に共に来ている。

スカーはマスクに備えられている赤外線で見渡す。すると、近くにゼノモーフの鳴き声が聴こえ、スカーは鳴き声がした方へと振り向く。そこは、この広場を出る為の通路の方。

スカーは左肩に着けているプラズマキャノン砲の砲口を向けながら、通路を赤外線で見ると、奥から三匹のゼノモーフが此方へとやって来る。

スカーは通路の奥にいる三匹のゼノモーフを確認すると、マスクの左目近くにあるの照準機能のような物を使う。刹那、通路の方から、三つの小さな赤い丸が出てきた。

それは、スカーが照準機能で出したレーザーだった。

そのレーザーはスコープ代わりにもなり、獲物に狙いを定める事も出来る。スカーはレーザーで通路の奥にいるゼノモーフを狙う。

通路の奥は薄暗いが赤外線でゼノモーフを確認出来る為、問題ない。刹那、スカーはプラズマキャノン砲から青い稲妻を発する弾が放たれ、通路の奥へと消えていく。

同時に、何かガラガラになる音が通路に木霊する。それは、ゼノモーフが身体に弾を受け、身体がガラガラになる音だった。しかし、

スカーは再び、プラズマキャノン砲から二発の弾を放ち、弾は通路の奥へと消えていく。再び、何かがバラバラになる音が通路に木霊する。

しかし、スカーは何も言わず左腕に装備しているリストブレイドを展開し、腰にある丸くしているディスクを右手で取り、軽く振って刃を展開する。

「グルル……」

スカーは武器を構えながら辺りを見渡す。広場にはゼノモーフの気配はない。にも関わらず、スカーは辺りを気配していた。

狩人としての本能か、それともいざというのだろうか。そして、スカーは広場から出る為に再び歩き出す。

「グルル……」

チョップパーとスカーがそれぞれの通路へと歩き、全く別の場所へと着いた頃、前の通路へと歩いたケルティックもまた、チョップパーとスカーとは違う場所へと来ていた。

そこは、上を支える為の支柱が幾つもあり、壁には何も画かれていない。だが、そんなのはケルティックには関係ないだろう。

ケルティックは唸り声を上げながら辺りを見渡す。マスクの赤外線モードでゼノモーフが居ないかを確認する。――何処にも居なかった。

それはケルティックには良い事なのだろうか、嫌、悪い方なのかも知れない。辺りは少し薄暗く、灯りもあまりない。ケルティックは辺りを警戒しながら左腕に装備しているリストブレイドを展開する。

すると、ケルティックの少し遠くの後ろから一匹のゼノモーフが声を殺し、音を最小限に抑えるように歩いて近付いてくる。

そんなゼノモーフに、ケルティックは辺りを警戒していたが真後ろは死角である為、真後ろにいるゼノモーフには気付いていない、訳はなかった。

「……………」

ゼノモーフは無言でケルティックに近付く。突如、ケルティックは後ろを振り返りながら左腕を前に突き出す。刹那、ケルティックの左腕に装着している何かの装備から何かが飛び出し、ゼノモーフの身体を包むようにゼノモーフに絡まり、ゼノモーフは何かに絡まれながら吹っ飛ばされる。

その何かとは網だったーそれも、かなりの硬度を誇る網だった。そして、ケルティックは左腕に、ある装備を着けていた。それはネットランチャーと言う物だった。

ネットランチャーから放たれたネットはゼノモーフの動きを止める役目をしている。ゼノモーフもゼノモーフでネットから抜けようともがく。

だが、ケルティックはそのゼノモーフにとどめをささそうとした。

「シャアアア……」

しかし、そんなゼノモーフを助けようと、他のゼノモーフ達がケルティックに元へと駆け寄る。そのゼノモーフは三匹いた。かの宇宙生物達はケルティックに襲い掛かる。

因みに、一匹はケルティックの後ろから現れ、一匹は左の方から現れ、一匹は右の方から現れたのである。

「グオオオ!!」

ケルティックは辺りを見渡しながら咆哮を上げるや否や、槍を取り出し、右にいるゼノモーフに対し、右肩にあるプラズマキャノン砲を向け、砲口から青い稲妻を発する弾を放つ。

右にいたゼノモーフは弾と直撃した直後に四散する。しかし、ケルティックは後ろにいるゼノモーフには踵を返ししながら槍で風ぎ払い、左にいるゼノモーフに対しては、槍を投げる。

槍は一直線にゼノモーフの元へと突き進むが、ゼノモーフは躲す。刹那、ゼノモーフの身体は粉々に四散する。その理由は、ケルティックがプラズマキャノン砲で撃ち殺したのである。

直後に、ケルティックはプラズマキャノン砲をとあるゼノモーフへと向け、砲口から青い稲妻を発する弾を放った。そのゼノモーフは、さつき槍で風ぎ払ったゼノモーフ。

そのゼノモーフは弾を受け、四散する。そして、ケルティックはゼノモーフ達を倒した……とある一匹のゼノモーフを除いては。

「シヤアアア!!」

刹那、とあるゼノモーフの奇声が木霊し、ケルティックは奇声をした方を振り返り、驚いた。

そのゼノモーフは、さつきケルティックが左腕に装備しているネットランチャーから放たれたネットで身体を拘束される形で、一時的に足止めを喰らっていたゼノモーフである。

そのゼノモーフはネットに絡まれながらも、自分の身体の中に流れている酸で網から脱出したのである。

しかし、そのゼノモーフは、ケルティック達を静観していたゼノモーフだった。そのゼノモーフはケルティックの放った網から脱出したものの、額や左肩には黄緑色の網状グリッドの傷が出来ていた（以下、グリッドと呼ぶ）。

その為、そのグリッドはネットから脱出した直後にも関わらず、ケルティックに対し鳴き声を上げる。

その声には殺意と憎悪が籠っていた。勿論、ケルティックには解る筈もない。

「グオオオオオ……!」

ケルティックはグリッドを見て唸り声を上げ、グリッドに対し、右肩に装備しているプラズマキャノン砲を向ける。

ケルティックはプラズマキャノン砲の砲口からプラズマ弾を放つも、グリッドは難なく躲し、ケルティックの元へと駆け寄る。

それを見たケルティックは再びプラズマ弾を放つも、グリッドは走りながら跳躍して躲す。

「!?」

グリッドが二度目の攻撃を躲しにも関わらず、ケルティックは驚く。一方、グリッドはケルティックの直ぐ近くにまで迫っていた。

それを見たケルティックが再び驚く前に、グリッドはケルティックの前で一回転した。刹那、ケルティックは突然、横へと吹っ飛ばされ、地面に転がる。

ケルティックが吹っ飛ばされたその理由は、グリッドが後ろにある尻尾でケルティックを叩く形で風ぎ払ったのである。

「グルル……」

一方、ケルティックは激痛を堪えながら起き上がり、グリッドの方を見るがグリッドは何処にも居なかった。

ケルティックは起き上がった直後に立ち上がり、辺りを見渡す。辺りには支柱やプラズマキャノン砲でバラバラにしたゼノモーフの肉片が幾つも転がっている。

勿論、ケルティックには関係ない事だった。ケルティックは未だ辺りを見渡す。

「シヤアアア!!」

その時、後ろから鳴き声が聞こえ、ケルティックは振り返るも再び横へと吹っ飛ばされ、地面に転がる。

ケルティックを吹っ飛ばしたのはグリッドだった。グリッドはケルティックの後ろにいなながらも、自分の方へと注意を向ける為にわざと鳴き声を上げ、再び尻尾でケルティックを叩く形で吹っ飛ばしたのである。

一方、ケルティックは何とか起き上がるも、グリッドはさつきとは違い、ケルティックに駆け寄る。

ケルティックは咄嗟に右肩に装備しているプラズマキャノン砲で攻撃しようとしたが、グリッドの方が速かった為、グリッドに体当たりされ、グリッドにのし掛かれる形で、仰向けに倒れる。

「シヤアアア!!」

グリッドはチャンスと言わんばかりに両腕の爪で襲い掛かる。その最中、ケルティックのマスクに三つの縦長い爪跡が出来た。

だが、ケルティックはグリッドを足蹴りして吹っ飛ばし、グリッドはケルティックとは離れた場所の地面で叩き着けられる。

その間にケルティックは立ち上がるが、グリッドも何とか起き上がり、ケルティックに対し、奇声に近い鳴き声を上げる。

「グルル……!」

一方、ケルティックは右腕にあるリストブレードを展開し身構える

が、目の前の少し奥にいるグリッドを見ながらこう思っていた。

「ーこいつは、今までのゼノモーフとは違う、とー。」

そして、ケルティックとグリッドの間には重苦しい雰囲気の流れる。それは、壮絶な死闘が繰り広げられる事を意味するかのよう……。

第16話

「グルル……」

「シヤアアア……!」

ケルティックとグリッドは今、互いの相手を警戒しながら唸り声を上げていた。ケルティックは右腕に装備しているリストブレイドで展開しながら身構え、グリッドは尻尾を軽く振るよう動かししている。

しかし、ケルティックの右腕にあるリストブレイドの刃先は鋭く、グリッドの尻尾の先端は尖っている。どちらも相手に致命傷を与えるくらいはある。

勿論、それは心臓や脳を刺せば一瞬で終わる。二体の宇宙生物はそう思っていた。が、どちらも先に動けば良いのかを悩んで、いなかった。

「グオオオ!!」

先に動いたのはケルティックだった。ケルティックは咆哮を上げながら、グリッドに駆け寄りつつ、リストブレイドを装備している右腕を横に伸ばし、グリッドに斬りかかるように腕を振る。

しかし、そんなケルティックの攻撃をグリッドは屈んで躲し、ケルティックの攻撃は空振りに終わる。ケルティックは屈んだグリッドを見ようとした刹那、首を右に傾げる。

直後、何かがケルティックの顔を通り過ぎる。グリッドの尻尾だった。グリッドは尻尾でケルティックの顔をマスクごと貫こうとした。勿論、グリッドの攻撃もケルティックが躲した事で無駄に終わる。

「グオオオ!!」

その際にケルティックは、屈んでいるグリッドに対し、リストブレイドでグリッドの頭を刺そうとした。しかし、グリッドは身体を傾げて躲す。

ケルティックの二度目の攻撃も無駄に終わる。刹那、ケルティックは仰向けに倒れる。ケルティックの右足首にはグリッドの尻尾が絡まっている。

何故なら、グリッドはケルティックの攻撃を躲された直後に、尻尾を、ケルティックに気付かれないようにケルティックの右足首に近付け、ケルティックの右足首を絡むように掴んだのである。

ケルティックが転んだ直後にグリッドはケルティックを放さないように尻尾を地面に這いずり回すように振る。

ケルティックは振り回されるように引き摺られるが、グリッドはそんなケルティックを近くにある支柱に叩き付ける。

ケルティックは声を上げる前に身体中に激痛が走るのを感じた。しかし、グリッドはケルティックを引き摺るように走る。

「グルルルルルル!!」

ケルティックは引き摺られるも後頭部に激痛が走るのを感じ声を上げる。刹那、ケルティックはリストブレイドを地面に深く突き刺す。リストブレイドは地面を引き摺られるように刃先から火花を飛ばす。勿論、それもケルティックの考えでもあった。

リストブレイドの刃先を地面に食い込ませようとして何とか引き摺られるのを阻止しようとしたのだ。すると、グリッドの走るスピードが落ちていく。

グリッドは走るのが遅くなっている事に気付き走るペースを落とし、ケルティックを見ると同時にグリッドは走るのを止めた。嫌、無理矢理ケルティックに止められてしまったのである。

それは、リストブレイドが完全に地面に食い込み、それが原因でもあった。グリッドがそれに気づく前にケルティックは素早く起き上がり、グリッドに対しプラズマキャノン砲で撃つ。

グリッドは避けようとしたが至近距離の為、避けきれず、右腕の半分がケルティックが放った弾により吹っ飛ぶ。

「シヤアアアアアアアア!!」

グリッドは右腕の半分が無くなったのと同時に悲痛の声を上げる。だが、ケルティックを放してしまった。

ケルティックはチャンスと言わんばかりに地面に深く突き刺っているリストブレイドを発射という形で外し、素早く立ち上がると、グリッドの尻尾を引つ張る。

グリッドは倒れるも、ケルティックは両腕に力を入れてグリッドを二、三回振り回した後に投げた。グリッドは目が回る前に少し離れた場所の地面に叩き付けられるも、ケルティックは左足に装着しているポーチに入れているタガーナイフを取り出し、グリッドに構える。そして、グリッドもまた、ケルティックに対し鳴き声を上げた。

少し時間を戻す。その頃、スカーはとある場所の通路の中を歩いていた。途中、何匹かのゼノモーフと遭遇したが振り返りにし、今に至る。

「……グルル」

スカーは無言で通路を歩き続けていた。しかし、スカーは何故か違和感を感じていた。左右の壁にはプレデターにしか読めない文字が無数に画かれているが、ゼノモーフの気配はない。それに、この通路は何故か暑い。

自分はプレデターであるが暑い所には強い。にも関わらず、この通路は暑い。歩けば歩く程気温が高くなっていく。それは例えプレデターであつてもきつい。

「……この暑さは何だろうか？」
「……スカーは内心そう思いながらも口では言わなかった。

「!？」

すると、スカーは通路の奥に何かがある事に気付き走る。そうすると、奥へとたどり着くと同時に通路を出た。

そこは前を歩くしかない一本道に、左右にはマグマが噴き出ている。そう、通路が暑かったのも、この場所に噴き出るマグマが原因だった。

しかし、スカーはマグマよりも、身体中が暑くなっているよりも、その場所の奥にいる生き物を見据えていた。

その生き物はゼノモーフだか他のゼノモーフよりも一回りも大きく、身体中を機械に近い鎖で拘束されていた。

そして、その生き物はスカーに気付くも死にかけているのか鳴き声も小さく、身体中が拘束されているのかは、或いは弱っているのが原因なのか身体をあまり動かさないでいる。

「グルル……」

スカーはそのゼノモーフを見て唸り声を上げると同時に、そのゼノモーフの正体を知っていた。そのゼノモーフはクイーンだった。そして、クイーンがいると言う事は、ここは最深部である。

そう、スカーは一人で、この最深部へと来たのだ。しかし、スカーは決して手柄が独り占めしたい訳ではない。スカーは単に、気付かぬ内に、この最深部へと続く通路に来てしまったのだ。

「……………」

スカーはクイーンを見て何も言わずにクイーンの元へと歩み寄る。一步、また一步と、スカーはクイーンへと近付く。

左右からマグマの噴き出る音が聞こえ、湯気が最深部全体に充満する。勿論、それはスカーには関係ない。スカーは今、クイーンを討伐し、成人式を成さなければならなかったのである。

すると、スカーはクイーンの直ぐ近くにまで来た後、何故か立ち止まり、クイーンの顔を見る。

クイーンはスカーに対し、鳴き声を上げながら身体を動かさそうとしていた。身体中には機械に近い鎖で拘束されているにも関わらず、クイーンはスカーに攻撃しようとしていた——無駄だった。

スカーは無言で右肩に着けているプラズマキャノン砲をクイーンの顔に向ける。

刹那、スカーの右肩にあるプラズマキャノン砲の砲口から青い稲妻が飛び散る弾が放たれ、クイーンの顔に直撃し、クイーンは悲鳴を上げる。

クイーンは顔が吹き飛ばされ、辺りに酸が飛び散る。そして、クイーンはそのまま事切れた。身体に痙攣を起こしていなく、息もしていない。

一方、スカーはそんなクイーンを見て何も言わず、踵を返し、その場を離れるように歩く。いくら相手が拘束されているとは言え仕方

ない事だった。何故なら、スカーはケルティックやチョツパーとは違い、冷静だった、頭が良かった。

例えゼノモーフが拘束されようとも、始末しなければならぬ――それは、ゼノモーフが地球に居てはいけない為に……。

スカーは仲間達と合流しようとしている。刹那、左のマグマの方から何か飛び出し、スカーは左の方を見る。

マグマからはマグマ特有の飛沫が周りに飛び散るが、その何か、スカーの目の前の少し先に着地した。スカーは目の前を見る――スカーは驚愕した。

そこにいたのは大きなゼノモーフ、クイーンだった。そのクイーンはさっきのクイーンとは違い元気である。

そして、クイーンは二匹いたのだった。それは、成人式を成さなければならぬプレデター達を試す為でもあった。

「シャアアアアアアアアアアア!!!」

クイーンは着地するや否や、スカーに咆哮を上げる。一方、スカーは槍を取り出し、臨戦態勢に入る。

そして、スカーはプレデター達の最後の敵であり、真のラスボスであるクイーンとの戦いが切れて落とされ、同時に、ケルティックもまたリーダーとして、ゼノモーフのリーダーであるグリッドとの戦いを続ける。

第17話

ケルティックやスカーがとあるゼノモーフ達を相手にしている丁度その頃、ここは横浜の港。

今の時間帯は夜だった。しかし、港には誰もいない。何故なら、ここは人にあまり使われない港だった。

その港には四つの倉庫が横並びに建てられており、目の前には海が広がり、その奥の向かい側には横浜の街が見える。

逆に此処は灯りはない。それがより一層、不気味さを増し、寂しさを増している。

「……………」

そんな港に、一人の少女がいた。少女は港の海を眺めながら黒い鞆を大事そうに抱えている。

その少女は楯無だった。楯無は妹が誘拐されたのと、妹を拐ったであろう誘拐犯の女性から、この場所へと来る様に電話で連絡され、この港へと来たのである。

そして、近くにはあの二人はいなかった。

「簪ちゃん……………」

楯無は妹の名を呟く。その表情は何処か哀しく、楯無自身が罪悪感に苛まれているのを思わせている。

楯無にとつて、妹は大事な存在、両親や従者同様、大切に思っていた。だが、自分は妹を傷付けてしまうような事を言い、妹との仲は冷めきっている。

それに今は、もうすぐ約束の時間である七時になる。楯無から見れば、妹ともうすぐ逢えるのと、妹の安否が気になりつつあった。

刹那、二つの足音が聴こえた。一つはハイヒールであり、もう一つはスニーカーか何かの靴の足音だった。それも、どんどんと大きくなっている。

楯無は目を見開き振り返ると、二人の男女がいた。女の方は二十代前半で、金髪のロングヘアーに蒼い瞳、クリムゾンレッドの女性用スーツを纏い、赤いハイヒールを履いている。

男の方は三十代前半ぐらいで、黒の短髪で黒い瞳に無精髭を生やし、全身黒いスーツを纏い、黒いスニーカーを履いている。

二人は、楯無の元へと歩み寄る。その表情は何処か不敵に笑っている。それを見た楯無は再び驚くも表情を険しくする。

楯無は気付いた。彼女達こそが、妹を誘拐した犯人である事に。そして、二人の男女は楯無の前に立ち止まる。

「貴女が、更識楯無ね？」

女性が楯無に問うと、楯無は表情を険しくし頷く。

「そう」

「貴女達、簪ちゃんを拐った犯人でしょ!？」

楯無が問うと、女性は軽く笑う。

「ええ、そうよ?」

女性は答えると、楯無は「ぐっ!」と歯を食い縛り、鞆を持つてる手に力を入れる。この女、絶対に許さない、と。

「フッフ、そう怒らないの、そんな事で怒ったら、妹の命は無いわよ?」

女性の言葉に楯無は下唇を噛み、鞆を持つてる両手に力を入れる。

「まあまあ落ち着きなさいーそれよりも電話で言ったけど、身代金を持ってきたのかしら?」

女性の言葉に、楯無は瞑目し深く頷く。そんな楯無に女性は口の両角を上げ、勝ち誇った表情を浮かべる。

「そうーなら話は早いわね?」

女性の言葉に楯無は目を開け、眉間に皺を寄せ、女性を睨む。

「そう睨まないの、そうしたら、妹の命はないわよ?」

女性の言葉に楯無は「グッ!」と言葉を詰まらせる。一方、女性は楯無を見て不敵な笑みを浮かべる。それはまるで、身内の心配をする者を見下し、尚且つ手玉に取っているようにも思えた。

そんな楯無や二人の男女を、近くの倉庫の屋根から見ている二人の青年がいた。プレデターの防具を纏っている一夏と止である。

二人は顔に着けてるマスクのお陰で、三人の会話を聞いている。しかし、一夏は三人の会話を聞いて苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。

「許せねえな」

一夏は二人の男女に怒りを覚える。二人の男女は楯無の妹、簪を誘拐しただけでなく、二人の発言が楯無を見下すような発言とも思っていた。勿論、そう思っているのは一夏だけである。一夏は手に力を入れる。

「――今すぐにも、あの二人を殺したい――と。そんな一夏に、隣にいる止が一夏を宥める。

「落ち着けて一夏、今出たら、簪と言う女の子が殺される危険があるぜ？」

止は一夏を宥めながら言葉を述べると、一夏の肩に手を置く。

「だけどよ！……嫌、解ってるけどよ……」

一夏は俯き、下唇を噛む。顔にはケルティックのマスクを着けている為、どんな表情をしているのかは止には判らない。それでも、止は溜め息を吐き、再び楯無や二人の男女の方を見る。

「あれ？ 移動すんのか？」

止の言葉に、一夏は頭を上げ、楯無達を見る。――確かに、楯無達は移動を始めていた。しかし、楯無達は一夏や止が屋根の上にいるこの倉庫や他の倉庫の中へと入るどころか、別の――この港の近くにある別の港の方へと歩いていった。

勿論、一夏や止はその事を知らない、訳ではない。それは、二人が顔に付けているマスクには録音機能が備えられており、三人のやり取りを良く解っていた。

「追い掛けるぞ」

一夏は止に楯無達の後を追い掛けようと言い、止と共にその場から離れようとした。

「――なあ、一応、勇人に連絡を入れた方が良くないんじやねえか？」

「――」

刹那、止が唐突な発言をし、一夏は止を見る。

「な、何を言ってるんだ？」

「嫌、一応、勇人に連絡を入れた方が言いかなくって思ってるさ？」

止は一夏を見ながら髪を搔く。勿論、それは止の判断でありなが

ら、止はその判断を一応、一夏に訪ねて決めて貰おうとした。

そして、一夏の判断は「ああ、その方が良いかもな」と、止の判断を受け入れた。

「止、お前は勇人に連絡してくれー俺は更識の後を追うから、お前は勇人に連絡したら、俺と合流してくれ」

一夏は止にそう命令し、止は「解った」と言いながら頷くと、一夏は頷き返した直後に楯無達の後を従ける為にその場を離れる。

「さてと、連絡するか」

止は一夏は居なくなつたのを確認した後、右腕にあるコンピュータターゲットレットを操作し始める。

勇人に連絡する為であるのと、勇人の様子を訊ねる為や自分達がいる場所を教え、この街の何処かで合流しようと伝える為でもあった。

止はコンピュータターゲットレットを操作し続ける。刹那、コンピュータターゲットレットから声が聴こえた。

「……あつ、勇人？」

止はその声の主に気付き、答えた。そして、止は勇人に連絡を入れた。

ここは、一夏、止、楯無、二人の男女がいる港の少し離れた場所にある港。そこはさっきの港と同じような場所だが、建物は五つも建てられている。

そんな中、五つもの倉庫の内、一つの倉庫の、倉庫を出入りできる大きな扉。その扉の前には、楯無や二人の男女がいた。

「着いたわよ」

二人の男女の内、金髪の女性が口を開く。男は兎も角、それを聞いた楯無は瞠目し、直ぐに下唇を噛み、手に持つる鞆に力を入れる。

ーこの倉庫の中に妹がいるー。楯無から見れば喜ぶと言うよりも、楯無自身が罪悪感を感じていた。

妹はどうしているのか、妹は無事なのだろうか、妹は助けに来てく

れたのが自分だった場合ガツカリするのか、と。

それらは全て、楯無の思ってる事だが金髪の女性や黒いスーツを着た男には関係ない事である。

すると、女性は楯無に「入るわよ？」と命令し、楯無は頷き、女性が先に入り、楯無、男が後から入る。

倉庫の中は少し暗かった。人の気配はするものの、それは何人かは判らない。だが、そこには簪がいるだろうかー嫌、いた。

それは、唐突に判った。その妹は、倉庫の真ん中の真上で、身体を縄で縛られながらぶら下がっていた。

「簪ちゃん!!」

楯無は、身体を縄で縛られ身動きが取れない少女を見て戦慄する。

その少女は楯無と同じ、少し長めの水色の髪だが毛先が内側に跳ねているのが特徴的かつ、楯無と同じ赤い瞳であるが眼鏡を掛けている。

服は、上は薄水色の半袖にその上に薄い白いベストを羽織い、下には膝まである青いスカートを穿き、白い靴下に黒のドレスシューズを履いている。

しかし、その少女は気を失っているのか項垂れている。そして、少女の真下には一人の女性と、三人の黒いスーツを着ている男達がいる。

「簪ちゃん、簪ちゃん!!」

楯無は簪を呼び掛けると、簪を助けようと思いい靴を放り捨て、簪の元へと駆け寄り、刹那、何者かに背中から体当たりされ、俯せに倒れた直後にその何者かに押さえつけられてしまう。

その何者の正体はさっきの男だった。

「放して、放してよ!?!」

楯無は男にそう叫ぶ。しかし、男はニヤニヤと笑い、女性は楯無が放り捨てた靴の元へと歩み寄り、拾った。

「フッフ、アハハハハ!!」

女性は靴の中を見る為にチャックを開け、中に入っている物を見て笑う。中にはお金が入っていたーそれも一千万円もあり、全て本物

である。

女性はそれを見て笑っていた。

「簪ちゃん、簪ちゃん!!」

一方、楯無は押さえつけられながらも簪の名を叫ぶながら簪に手を伸ばす。だが、簪は気を失っている為、楯無の叫びは無駄に近かった。

近くには女性の笑う声や、男達の笑う声が耳に届いても、楯無には簪を助けたいという思いがある為、楯無には届いていなかった。

「簪ちゃんーん!!」

そして、楯無の何度も簪を呼ぶ声が倉庫内に木霊し続ける。

第18話

「簪ちゃん！ 簪ちゃん!!」

楯無は、倉庫内の中央で身体を縄で縛られながら下がっている簪を呼び続けるも、簪は氣を失っている為、何の反応も見せない上に、楯無の近くにいる女性の狂喜のような笑い声が耳に響く。

それだけじゃない、簪の近くにいる三人の男達は少し笑い、男達の近くにいる女はほくそ笑み、楯無を押さえ付けている男なんかは未だにニヤニヤと笑みを浮かべている。

楯無や簪は兎も角、簪を誘拐したであろう者達は誘拐犯達であり、彼等は誘拐は元より、目的である身代金が難なく手に入れた事が嬉しくて堪らないのと、自分達は勝者だと思っていた。

すると、楯無の何度の呼び掛けに反応したのか、或いは氣を失ってから暫く経った後なのかは判らないが簪が「う、う……ん」と微かに呟いた後に眼を開ける。

「簪ちゃん!?!」

簪が氣が付いたのを見た楯無は喜びよりも驚愕し、簪は楯無を見て「お姉ちゃん!?!」と共に驚きの声を上げる。

「簪ちゃん……!」

楯無は簪が無事である事に安堵の表情や胸を撫で下ろしたかったが今は無理だった。今は自分達姉妹は危機的状況かつ捕らわれの身に近い。

その為、今は、この危機的状況を打開するのを見つけるしかなかった——あの二人が自分達を助けてくれるのを待つしかない。

「お、お姉ちゃん……っ」

一方、簪は楯無を見るや否や楯無から眼を逸らす。それはまるで疚しい事があるかつ罪悪感に苛まれているかのように、哀しそうに俯いていた。

楯無は簪の様子に疑問を抱き、「簪ちゃん」と訊ねる——だが、さっきまで笑っていた女性が笑うのを止め口を開く。

「あらあら、あんたの妹さんは罪悪感に苛まれているみたいね?」

女性の言葉に楯無は「えっ？」と惚ける。しかし、女性は更に不敵に笑う。

「やっぱり知らないのね？ ……まあ、良いわ、貴女の妹の代わりに」
女性が何かを言い終わる前に、簪が「駄目っ!!」と叫びながら遮る。
「簪、ちゃん？」

楯無が簪の様子に驚くも、簪は涙を浮かべながら楯無に謝る。
「ごめんなさいお姉ちゃん……これは嘘だったのに、本当の誘拐になっちゃった」

簪の言葉に楯無は「えっ？」と惚ける。だが、簪は、未だに理解出来ないでいる楯無に訳を話した——そして、それを聞いた楯無は驚愕したかのように瞠目する。

何故なら、この誘拐は最初、嘘だった。それは姉妹の両親や家の者達が姉妹の仲を戻そうと思い、嘘の誘拐をしようと言う考えをした。

この発案は更識の先代であり、姉妹の父親だった。勿論、家の者達は反対したものの、彼等も姉妹の仲が戻るのを願っていた為に賛同した。（姉妹は彼等の作戦を知らない）

この当日、簪は誘拐されたが誘拐したのが更識の人間であった為に誘拐の件を聞いて拒絶したものの、簪も姉とも仲良くしたい為が為に協力した。しかし、そこが間違いだった。

「最初は上手くいった……でも、途中で本当の誘拐になっちゃった……」

簪は目に涙を浮かべつつ言葉を続ける。途中、この偽装誘拐が何処から漏れたのか、本当の誘拐となってしまったのである。

これには更識の面々も想定外かつ突然の事で戸惑った。勿論、それは姉である楯無の耳に届いてはおらず、近くにいる者達が簪を誘拐した犯人達である。

その証拠に、簪と楯無は捕らわれの身になっている——それが、彼等を誘拐犯達である事を物語っていた。

「う、嘘………そ、そんな」

簪から理由を聞かれた楯無は愕然とした。自分は妹を助ける為に動いた。にも関わらず、自分は更識の者達に騙され、挙げ句の果てに

は本当の誘拐にもなってしまった上に、何の関係もない自分と同じ年か年下かもしれない青年達を巻き込んでしまった。

それらは全て、自分や更識の面々に責任はあるのだ。それを、あの二人が知ってしまったらどうなるのだろうか——否、既に知っているに違いない。あの二人が顔に付けてるマスクで、自分達の会話を聴いているだろう。

「ごめんね、お姉ちゃん……本当にごめんなさい……」

簪は涙を浮かべながら、楯無に謝罪の言葉を述べる。しかし、それを聞いた楯無は愕然としたまま、表情を青褪めていた。

「嘘、でしょ？……そんな」

楯無は目尻に涙を浮かべ瞑目した。すると、そんな姉妹に女性は鞆のチャックを閉じ、勝ち誇った表情で楯無を見下す。

「まあ、貴女は、これで私達は本当の誘拐犯だと言う事に気付いたでしょ？」

女性の言葉に、楯無は目を開け、女性を睨む。女性は楯無に睨まれながらも勝ち誇った表情を崩さない。

「確かに貴女達が簪ちゃんを誘拐した犯人達だって判ったわ……でも、貴女達は何者なのよ!？」

楯無の問いに、女性は答ええない。——それは私が話すわ——。刹那、近くから別の女性の声が聞こえた。楯無、鞆を持つてる金髪の女性、楯無を地面に押さえ付けている男性が声が出した方を見やる。その女性は、三人のスーツを着た男達の近くにいた女性だった。その女性は三十代後半で茶色い長い髪に青い瞳。黒の女性用のスーツを纏い、赤いハイヒールを履いている。

「私が、更識の中にいる裏切り者を利用したのよ……更識楯無？」

茶髪の女性は何かを言いながら、楯無の元へと歩く。だが、楯無はその女性を見て「貴女は……!？」と驚きを隠せない。

楯無は、その女性には見覚えがあった。その女性は日本政府の一人であり、汚職まみれの女性議員だった。

それに、更識家とはある人物に頼まれて、その女性議員の汚職に関する証拠を集めてくれと頼まれたのである。

「覚えているようね？　そうよ、貴女達が私の事を嗅ぎ回るような事をしたからよ？」

女性議員は表情を険しくしながら、楯無にそう言う

「だからと言って、何で簪ちゃんを巻き込むのよ!？」

楯無は女性議員に怒る。それを聞いた女性議員はムツとする。

「貴女達更識家が私の事を調べようとするからでしょ!？　貴女達が私の事を調べたら、私の政治生命は絶たれ、何もかも失っちゃうからよ!？」

「それは貴女の自業自得じゃない!?　貴女が汚職みたいな事をしなければ私達は貴女の事を調べないわよ!？」

「うるさいわ!!　今の時代は女が偉いのよ、そう言う事なんて目を瞑っていけば良いじゃない!？」

「そんなのは許される事じゃないわ!!」

楯無の言葉に女性議員は「黙りなさい!!」と叫んだ。二人の口論は少し長かったが女性議員の言葉が口論を止める役目を作る。

楯無は少したじろぐも、女性議員は少し狂喜的な笑いを浮かべる。

「今の時代は女が偉いのよ!？　男は女の為に奴隷になると、ISと言う世界最強の兵器が有る限り、男は女の言う事を聞く以外何も無い!!　それに私は汚職をしたのも、議員になれたのも全て女と言う権力を利用した!　これで私に逆らう者はいないと悟ったわ!」

女性議員は狂喜的な笑いから一変、怒りの形相へと変え、楯無を睨む。

「それを貴女達が邪魔しなければ……私は、私は——っ!!」

女性議員は憤怒の叫び声が上がった直後、楯無を指差すと、男達を呼び。

「あんた達!!　私の事を調べようとした更識の、この女を犯してしまいなさい!!　この女が犯されるのを、それをあいつらに見せつけるように撮影するのよ!!」

女性議員の言葉に、楯無は瞠目し、簪も瞠目した。しかし、簪の近くにいる三人の男達が楯無の元へと駆け寄る。刹那、楯無の叫び声が木霊する。

「い、嫌——っ!!」

楯無の叫び声は悲鳴に近かった。それも、楯無の近くには四人の男達がいて、楯無は押さえ付けられた男に仰向けにされ、四肢を男達に三人の男達に押さえ付けられ、その内の一人が楯無の身体をマジマジと見つめている。

「止めて、お願い止めて——ッ!!」

簪の泣きながら懇願の声の木霊する。しかし、それは無駄に等しかった。男達の顔は、これから女性を犯せると言うのか不気味な笑みを浮かべている。それを見た楯無は身体を震わす。このままでは犯される——好きでもない男との子供を孕んでしまう、と。

そんなのは嫌だった。しかし、その男は楯無の胸に手を当てようとした。

「嫌——ッ!!!」

楯無は泣きながら叫び声を上げる。助けて、誰か助けて、と。刹那、壁が外から何者かに破壊されるように爆発した。

「何っ!?!」

女性議員が叫び、簪や男達が破壊された壁の方を見やる。すると、破壊された壁の向こう側には一人の青年がいた——身体にプレデターの防具を纏い、武器を持っている一夏だった。

「誰よあんた!?!」

女性議員が、外にいる一夏に訊ねるが、一夏は顔にケルティックのマスクを着けている。

だが、女性議員や男達は知らなかった——彼は、一夏はケルティックのマスクを着けながらも、彼等の一部始終を聞いていた為に、表情は怒りに満ちている事に……。そして、一夏はこう思っていた。

——てめえら、全員ぶっ殺してやる、と。

第19話

「だ、誰よあんた!？」

女性議員は、破壊された壁近くに佇んでいる一夏に問うも、一夏は無言だった。

(い、一夏君に止君なの……?)

一方、楯無は男達に押さえ付けられ泣きながらも一夏と止の名を呟く。助かった、自分は貞操を奪われずに済んだのか、と。

にも関わらず、楯無は未だ泣いていて、例え一夏と止が助けに来てくれても、彼等が、この誘拐が身内が行った嘘の誘拐である事を知っているのだろうかである事と、自分を押さえ付けている男達に返り討ちにあい殺されないのかを心配していた。

一方、一夏は何も言わなかった。そうだろう、一夏は女性議員のやり方と、女性議員が男達を使って楯無を犯そうとしている事に怒っている。

それに、簪の誘拐が、楯無と簪の身内である更識家によって偽装された誘拐に怒っているよりも、女性議員のやり方の方に怒りを感じていた。

「――お前達には死の制裁を与える――。一夏は心の中でそう思いながら右腕にあるリストブレードを展開する。

「っ!」 あ、あんた達、あんな変な奴を殺してしまいなさい!」

女性議員は少し驚きつつも一夏を指差しながら、男達に命令し、男達の内、一人は楯無を捕らえ、三人は懐から拳銃を取り出し、一斉に一夏へと向ける。

刹那、一夏はその場から消えた――身体を透明にしたのである。

「き、消えた!？」

拳銃を持っている男達の内の一人が仲間と言う。それを見た他の男達、簪、金髪の女性、女性議員は驚く。刹那、男の一人の頭が宙に舞う。

一瞬の出来事であった。それに近くにいた男達や、楯無、金髪の女性や女性議員は突然の出来事に一瞬油断していた。

それだけではない、男の首のない身体から夥しい真っ赤な血が噴水のように噴き上がり、微かだが近くにいた男達や楯無の顔や身体に飛び散る。

その光景は楯無や男達が、首のない男の血の雨を浴びているようにも思え、男の首は地面に音も出さずに転がり落ちた。

「キャアアア!!」

「嫌アアアアア!!」

その直後だったアアアアや金髪の女性の悲痛の叫び声が倉庫内に木霊する。それだけじゃない、声は出さなかったが楯無、女性議員や男達の誰もが恐怖で顔を歪ませている。

一瞬の出来事とは言え、更識姉妹や女性議員やその部下達を恐怖を刻むには充分な程だった。更識姉妹は兎も角、一夏は女性議員や部下を塵殺するつもりだった。

彼が、プレデターと言う超人的な宇宙人からプレデター特有の狩りを学び、プレデターのように狩ろうとしていた。

それに、一夏は今、とある男達の近くにまでいた。そして、一夏は一人の男の背後へと周り、後ろからリストブレードで下から突き刺したアア同時に男の胸にまで貫通する。

突き刺さされた男は突然の事で声を上げる事は出来ず、天井を仰ぎ、拳銃を落とす。

アアアア!! アアアア。近くにいた拳銃を持っている男、楯無を押さえ付けている男、金髪の女性と女性議員が男を見やり、一斉に声を上げる。

刹那、一夏はリストブレードを男の背中へと深く突き刺し、右拳を男の体内へと食い込ませ、何かを掴み、引き抜こうとしたアアアア脊髄だった。

しかし、一夏の力では頭蓋骨までは抜く事は出来ず、おまけに脊髄は固く、一部しか引き抜けなかった。同時に、リストブレードを引き抜き、脊髄の一部を投げ捨てた。一方、男は口から血を吐き、膝を突き俯せに倒れた。

「嫌アアア!!」

「ウワアアアーーーーッ!!」

「アアッ……ッ……」

再びその直後だった。金髪の女性は叫びながら鞆を放り捨てその場から離れるように逃げ、女性議員は腰を抜かし、簪は気を失い、拳銃を持つている男は恐怖のあまり持つてる拳銃で辺りを乱射する。

拳銃の銃口から銃弾が何発も放たれるが、一夏には当たらなかった。一夏は男の持つてる拳銃に当たらないように素早く移動していた。

「ちよつと止めなさい!?!」

女性議員が男を宥めるが今の男は恐怖で支配されていた。

殺らなければ、此方が殺られる。男はそう思い、拳銃を乱射したのである。

「……………」

そんな男に、一夏は呆れて物も言えず身体を透明にしたまま男に近づき、リストブレードで男の拳銃を持つてる手を切り落とす。

「ギャアアア!!」

男は叫び声を上げ、切り落とされた手からは血が少し多めに噴き出る。それでも一夏はお構い無しに、左手で男の頬を素早く掴み、此方へと振り向かせ、リストブレードで男の両目を抉る。リストブレードは男の後頭部へと貫通した。

近くから女性議員の叫び声が聞こえたが、一夏は軽く聞き流し、リストブレードを引き抜くと、男の頬を放し、軽く押した。

男は両目が無くなっていった。眼球はグシャグシャになっていた。本の数分で三人の男は一夏に殺された。自業自得としか言い様がないが一夏から見れば塵殺の対象であり、彼等は殺されなきゃない者達だった。

「次はお前等だ」

一夏はリストブレードに着いている血を、リストブレードを軽く振って落とすと、女性議員と楯無を押さえ付けている男の前で姿を現す。

一夏は何故か、マスクや防具に返り血を浴びていた。服は黒い服

だから判らないだろうが服にも返り血を浴びている。それは透明にしたままとは言え、返り血は浴びる物だったのだ。

それだけでも今の一夏は、人を殺す事を躊躇していない。

「あ、ああっ……」

「ひ、ひい……」

女性議員と楯無を押さえ付けている男は一夏を見て、恐怖で顔を歪め、身体を震わせていた。殺される、このままでは彼に殺される、と。それに、金髪の女性は一夏の殺戮に恐れをなして逃げた為に、ここにいない。

そんな一夏に、楯無を押さえ付けている男は近くに落ちている、死んだ仲間の拳銃を拾おうとして移動した。

しかし、それよりも早く、一夏が左腕を男に突き出す。刹那、一夏の左腕から何かが飛び出て、その何かは男を巻き込め、男は後ろへと吹っ飛び、地面に叩き付けられる。

「ウアアアーツ!!」

男の悲鳴が木霊する。男の身体には網が絡まっていた。そう、一夏は男に対し、左腕に装備していたネットランチャーにある網で、男の自由を奪ったのだ。

遠くから男の叫び声が耳に響く。しかし、男は網から脱出しようとするが網は鉄よりも硬く、刃物で切る事は出来ない。

それだけでなく、網や男が動くせいで、男の肌や身体に網状の傷が出来始める。

「次はお前だ」

一夏は、男は後でいいだろうと思いつつ、今度は腰を抜かしている女性議員を見るや否やそう言った。

それを聞いた女性議員は「ヒツ!？」と身体を震わせる。表情は恐怖で未だ歪んでいたが逃げようとしても身体を言う事を聞かず、更には失禁していた。

しかし、一夏はそれを気にもせず、女性議員の方へと向き合う。

「こ、殺さないで!!」

女性議員は一夏に泣きながら懇願する。だが、一夏は何も言わず、

背中に携えている槍を左手で取り出し、上下に伸ばす。

槍は一瞬で長くなった。しかし、一夏は槍を女性議員へと向け、それを見た女性議員は殺される恐怖のあまり、泡を吐いて気を失う。

「駄目えええーっ!!」

そんな一夏に、後ろから女性の叫び声が聞こえ、何者かが一夏を羽交い締めにした。一夏は槍無だった。槍無は男が手放した事により解放されたのである。

それだけでなく、槍無は一夏の行動に恐怖を感じただけでなく、このままでは一夏が女性議員を殺してしまうのかもしれない危険をも感じていた。

勿論、槍無が行動できたのも、一夏を止める為の物だったのである。

「放せ!!」

一夏は槍無に言いながら身体を激しく振る。

「お願い! これ以上殺すのを止めて!!」

「何言ってやがる!?! この女は最低なお前達姉妹を……」

「それは解ってるわ!! ……でも、これ以上私達の家で、貴方自身を手を汚すような事はもうしないで……!」

槍無は顔を一夏の背中に埋めながらそう言った。が、一夏は鎧を纏っている為、槍無は一夏が纏っている鎧の背中部分に顔を埋めていた。

「お願い……お願い……!」

それでも、槍無は一夏に懇願する。これ以上、何の得にもならない事を止めて欲しい。これ以上、自分の人生を棒に振るような事は止めて欲しい、と。

「……………」

そんな槍無の思いが届いたのか、一夏は無言で槍を地面に落とす。カラン、と言う音が辺りに微かに響き渡る。

一夏判った、よー。一夏の間で置いた言葉が槍無の耳に届き、それを聞いた槍無は瞠目し、直ぐに安堵の表情を浮かべながら「ありがとう……」と呟き、一夏から離れた。

「……な、訳ねえだろうが!!」

楯無の思いは届いていなかった。一夏はマスクを着けているが表情は険しいままだった。

一夏は右腕を、気を失っている女性議員へと突き出すようにと向け、右腕に装備しているリストブレードを、女性議員へと向け発射した。

刹那、二つのリストブレードは女性議員の胸へと突き刺さり、女性議員の服の胸部分には血が出始め、服に滲む。

一夏の行動に楯無は「つ!?!」と驚くが時既に遅しだった。

そして、一夏は、逃げた金髪の女性や、網に絡まって未だに逃げようとしている男性以外の二人を残して、女性議員や三人の男達を殺してしまった……。

第20話

「そ、そんな……な、何でなの?」

楯無は今、自分に背中を向け、自分の言った事を聞き入れたにも関わらず、それはふりであり、女性議員に止めを刺した一夏に対し、信じられないと言わんばかりの表情を浮かべ、身体を振るわせていた。

一方、一夏は楯無に背を向けたまま無言で地面に転がっている槍を拾う為に屈み、槍を拾うと同時に槍を縮ませ、背中に携えた後ゆつくりと立ち上がり、辺りを見渡す。

近くには女性議員や三人の男達の死体、未だ網に絡まっている男、身体を縄で縛られぶら下がれながら気を失っている簪……そして、後ろにいる楯無以外、誰もいなかった。

しかし、一夏は女性議員や三人の男達を殺した事に躊躇しないは愚か、彼等を殺した事に後悔はしていなかった。

それは、女性議員は権力を翳し、更には汚職をしている事に反省していない事……男達は男達で楯無を犯そうとした事に腹が立つと共に怒りをも感じていた。

……こんな救い様のない者達には死が相応しい……。一夏は脳内でそう言う結論に辿り着いていた。確かに彼等は救い様のない人間達だが同時に、一夏は既に越えてはならない所を越えてしまったのを意味している。

それでも、一夏には意味のない事だろう……近くにいる更識姉妹や世間から見れば違うのだが……。

「ねえ……一夏、君?」

一夏の後ろにいる楯無が恐る恐る一夏に訊ねるも、一夏は女性議員の胸に突き刺さっている二本のリストブレードの刃を引き抜くことで、女性議員の近くで屈む。

「ねえ、一夏君? 貴方は何で……人を殺した……の?」

楯無は再び一夏に問う。だが、一夏は女性議員の胸に刺っているリストブレードを引き抜く。直後に、女性議員の身体が一瞬だけ動いたが一夏がリストブレードを抜いた直後だったのである。

女性議員は既に死んでいる為、女性議員は息をしていなく、眼を開けたままだった。それでも、一夏は無言で、左手でリストブレードを右腕にある発射口へと戻している。

「ねえ、……………」

楯無が三度問おうとした。刹那、悲鳴が聞こえ、一夏と楯無は悲鳴がした方を見やる。網に絡まる形で捕らえられている男がいた。

男は網に絡まれているだけで悲鳴を上げていたのだ。しかし、男は全身に激痛を感じていたからだ。

網はとても鋭く、顔や露出している肌や服から網状の傷が出来ているだけでなく、網自体が男の身体にくい込みつつある。

網が男の肉に食い込む音や服が破ける音などが微かに聞こえる。一夏は、男がこの世を去るまでのタイムリミットにも思えた。

「……な、何なの!？」 一夏は驚きもせず、リストブレードを戻す。しかし、それとは反対に一夏は驚きもせず、リストブレードを戻す。

刹那、男の悲鳴が一瞬だけ大きくなり、徐々に小さくなった。一夏は死んだのだった。

男は身体に絡まり肉体に食い込んでくる網が心臓へと達してしまったのだ。それが男の悲鳴の原因でもあり、タイムリミットが過ぎた事を意味していた。

これには楯無も驚くも、一夏は何もかも解っているのか気にもせず無言で立ち上がり、楯無と向き合う為に身体を翻す。楯無は一夏の行動に気付くが一夏はマスクを着けながらも口を開く。

「敵は粗方片付いた……………後はあそこに吊るされているアンタの妹を助けるだけだ」

一夏は楯無にそう伝える。楯無は一夏の言葉にビクツと肩を震わせ、俯く。

「どうした?」

一夏は楯無の様子に疑問を抱き訊ねる。一夏は無言で俯いていた。一夏は「おい?」一夏が再び訊ねるが楯無は顔を上げた。一夏は目につつすらと涙を浮かべていた。それは、一夏への罪悪感である事を物語っていた。

「――何故泣いている？　――。しかし、楯無の罪悪感を一夏は感じる事もなく、ただ、訊ねている。例え楯無の思いが届いても、彼は聞く耳を持たない――今の彼には……。」

「何故泣いてる？　それは嬉し涙か？」

「違うわ……私は、私は……っ」

楯無は再び俯くと、一夏に背を向ける。それを見た一夏は首を傾げる。

「それよりもアంతタの妹さんを……」

一夏は楯無を他所に、簪の事を思い出すとともに簪の方を見上げる。刹那、一夏は近くから自分の名前を呼ぶ意味で叫び声が耳に響き、声がした方を見る。

その方角は、この倉庫内を出入り出来る扉だった。その扉の近くには止がいた――手には、この倉庫から逃げ出した金髪の女性がいた――その女性の片足を掴みながらここへと連れて来たのである。

それを見た一夏は「止」と言い、止は顔にチョッパのマスクを着けながら、一夏と楯無の元へと歩み寄る――金髪の女性を引き摺りながらである。

「一夏――勇人には連絡したよろっ」

止は一夏の前にまで来ると、そう言う。

「そうか……で、勇人は何て？」

「勇人は未だ秋葉原にいるけど、翌日の渋谷のハチ公広場で待つてるって」

「そうか……それよりも止、その女は生きてんのか？」

一夏は、止の近くにいて、止に片足を掴まれている女性を指差す。「嫌、生きてるよ？　最も、俺を見て喚いていたから黙らす為に顔パンしたけど？」

「顔パンってお前……」

止の言葉に一夏は苦笑いする。そんな一夏に止は辺りを見渡す。

「それよりも一夏、近くににいる奴ら、これ一夏が殺ったの？」

止は、自分達の近くにいる女性議員や男達の死体を見渡しながら、一夏に訊ねる。

「ああ、俺が殺ったよ……」

一夏は直ぐに答えた。決して疚しい事や罪悪感を感じている訳ではなかった。

「そっか、それよりもコイツはどうする？ 一応殺しておく？」

一夏の返事を聞いた止は軽く何度も頷くと、今度は自分が掴んでいる金髪の女性の処理を訊ねる。それを聞いた一夏は「そうだな……」と考え、一方で楯無は止の言葉に肩を震わせ、直後に振り返った。

「――駄目っ!! 」。楯無は叫んだ。それを聞いた一夏と止は無言で楯無を見やる。楯無は涙を流していた。

「駄目よ……これ以上、自分達の手を汚すような事はしないで……!」

楯無は泣きながら、一夏と止に言った。

「何故だ？ こんな奴等は殺した方が良いだろう？」

しかし、それも一夏には届く筈もなかった、楯無の強い思いも一夏から見れば何を言ってるのかも解らないだろう。

「良くないわよ……そんな事をしても貴方達の為にもならないわよ……」

「それはアンタの思ってる事だ。コイツは誘拐犯の一味の一人――それに、誘拐は殺人と同じように最も許されない事だ、こんな奴には堀の中にいるよりも、この場で処刑した方が早い」

一夏はそう言いながらリストブレードを展開し、止を見て頷く。止は一夏が頷いたのを見て頷き返すと、止は金髪の女性を一夏の前に差し出す形で地面に叩き付け、一夏はリストブレードを金髪の女性へと向ける。

「駄目っ!!」

一夏の行動に楯無は叫ぶ。刹那、楯無は近くに落ちてる拳銃を拾い、一夏へと向ける。

「お、おい!! 何をしてんだよ!!」

楯無の行動に止は叫び、一夏は楯無を見る。楯無は一夏に拳銃を向けていた。単に拳銃を向けていた訳ではない――これ以上、一夏の為にも一夏を止める為の行動でもあった。

「何をして、noo」

一夏は楯無の行動に驚きもせず、楯無に訊ねた。一方、楯無は拳銃を一夏に向けながら身体を震わせていた。

「――彼を止める為には、こうするしかないのか――楯無は心の中ではそう思っていた。」

楯無は金髪の女性を助けたい訳でもない、簪を助ける為の行動でもない。楯無は一夏を止めたいが為の行動でもあった。

勿論、正しい判断とは言えないだろうが今の楯無にはそれしか出来ない。

「私は貴方を撃ちたくはない……だから、その剣のような刃物を下ろして」

楯無は身体を震わすながら、一夏に言った。

「……………」

「聞こえないの？ 貴方がそれを下ろせば私も拳銃を下ろすわ！ だから、だから……………」

一夏は無言であるが、楯無は一夏の無言を聞き入れていないと思いき言葉が続ける。

「撃てよ」

「えっ?」

刹那、一夏は不意に眩き、それを聞いた楯無は惚けるが、一夏は言葉が続けた。

「撃てよ、俺を止めたいのなら、俺を撃ってみろ」

「な、何を言ってるのよ!? 本気なの!？」

楯無は一夏の行動に戸惑いを隠せない。そうだろう、一夏は自分から楯無に撃たれるのを望んでいた。

これには楯無は驚くも、一夏は両手を横に広げる。

「撃てよ……俺を止めたいのなら、俺の身体に風穴を開けてみるよ」

「で、でもそんな事したら貴方が死ぬのかもしれないのよ!？」

「そうだよ一夏!?! 何もそんな事をしなくても良いだろ!?!」

止も一夏の事を心配する。そんな止に一夏は止を見る。

「大丈夫だ、俺を信じろ」

一夏はそう言うと、楯無と向き合う。

「撃てよ、撃って俺を止めてみるよ？」

「で、でも……私は……」

楯無は未だ戸惑いを隠せない。

「撃てよ、撃ってみろよ……撃てええーっ!!」

一夏の怒りの叫び声を上げた。これを聞いた楯無は「ヒッ!?」と再び肩を竦める。刹那、一夏と楯無の間に一発の銃声が轟いた……。

第三章、IS学園入学（前編） 第21話

「あ、あぁっ……」

「い、一、夏？」

一発の銃声が辺りに響いた後、楯無と止は微かに眩く。それは直ぐに消え、楯無が手に持つてる拳銃の銃口から硝煙が辺りに微かに漂っていて、楯無は未だ震えていた。

それは、楯無が一夏を撃つたからだ。勿論、楯無は一夏を撃つつもりはなかった。しかし、一夏は死んではない、一夏は胸を撃たれたがプレデター特有の防具のおかげで無傷かつ、楯無の拳銃から放たれた銃弾は一夏の防具の一つである胸当てに直後に跳ね返され、宙に舞い、地面に転がり落ちた。

それは一夏に致命傷を与える事もなく、それはプレデターの防具が硬いのと拳銃程度の銃弾の攻撃ならどうって事になる事をも物語っていた。

一方、一夏は無言で楯無を見据えたままりストブレイドを戻す。一夏は怒ってはいない訳ではないが一夏は楯無の行動に怯えてはいなかった。

何故なら、一夏自身が「楯無自身が自分に怯え拳銃の引き金を引いた」。一夏から見ればそう思い、一夏自身が撃つのを躊躇している楯無に怒っていたのだ。

それに、例えば楯無が撃つても撃たなくても、一夏は何もしないつもりだった。

「満足したか？」

一夏は楯無に訊ねると、楯無は肩を竦める。

「まあ、俺には関係ないけど、お前がこんな物を持つのは良くないぜ」
一夏は楯無に近付き、楯無が持つてる拳銃を取り上げ、拳銃を放り捨てた。拳銃の落ちる音が辺りに響くが一夏は気にしなかった。

一方、楯無は何も言わず俯く。楯無は顔を青くしていたが俯いていた

為に一夏と止に自分がどんな表情をしているのかは判らないだろう。

「まあ、お前が何を言おうが……ちっ」

一夏は舌打ちすると、止を見る。

「止、先にあそこ（にぶら下がっている女の子を助けるぞ）」

一夏は止を見るや否やそう伝え、身体を縄で縛られながら倉庫内で宙にぶら下がっている簪を首を振る形で指した。

それを見た止は簪を見ると、「判った」と言った後に頷く。

「俺が、このレーザーディスクであの娘の身体をぶら下げている縄を切るから、お前はその真下であの娘を受け止めてくれ」

一夏はそう言うのと腰に携えている、丸くしている手裏剣、レーザーディスクを取り出し、二、三回軽く振った。

レーザーディスクから五本の鋭利な刃物が飛び出る。一本一本が鋭いだけでなく銀色かつ妖しい輝きを放っている。

しかし、血が着いていた。それは最近と言うよりも数分前に着いた物と言っても良いだろう。

「判ったぜ、じゃ俺はあの女の子の真下に行くから」

止はそう言うのと、簪の真下へと走り、簪の真下にまでたどり着く。——良いぜ——止が言った。それを聞いた一夏は視線を楯無の方へと向ける。

楯無は未だ俯いており、一夏が声を掛けても何も返事はしないだろう。一夏は楯無を見て溜め息を吐くと、楯無を通り過ぎ、レーザーディスクを構える。

狙いは、簪の身体をぶら下げている縄であり、一夏は狙いを定めるとレーザーディスクを投げる。刹那、縄の切れる音が微かに響く。

同時に、レーザーディスクはブーメランのように一夏の手元へと戻り、一夏は軽く受け止め、簪は地面へと落ちる——そして、目に掛けていた眼鏡が擦れ、それも一緒に落っこちる。

「あらよっ」と

そんな簪を止は軽く受け止めた。しかし、止の受け止め方は誰か見ても横抱き——お姫様抱っこに見えた。それでも止は何も言わず、簪を見る。

簪は氣を失っているが眼鏡を掛けていない。止は眼鏡を受け止めるつもりはなかった為、眼鏡は簪よりも先に地面に落ち、割れた。

その為、簪の素の顔を眺める事は出来た。

「……可愛いな」

そんな簪に、止は思わず不意に呟いてしまう。別に止が簪に気がある訳ではない、止自身が不意に呟いただけである。

「取り敢えず、この娘の身体を縛っている縄を切るか」

止は簪を横抱きしながら屈むと、簪をそつと地面に寝かせ、両腕に装備している武器、シミターブレイドを展開せずに、簪の身体を縛っている縄を切った。

縄が切られた直後、簪は自由になるも未だ氣を失っている為、自分が未だ縄で身体を縛られているか縛られていないかは気付いていない。

「おい、あんたの妹を助けたぞ?」

その間に、一夏はレイザーディスクを軽く振って丸くし、腰に戻す形で携え、その後には楯無に訊ねた。楯無は未だ俯いていたが一夏が訊ねている事に気が付き、顔を上げ一夏を見る。

楯無は未だ顔を青くしていた。一夏に罪悪感を感じているのと、一夏に何て謝罪すれば良いのかが判らないでいた。

「どうした、顔が青いぞ?」

一夏は氣にもせずに楯無に訊ねるが楯無は無言で一夏から目を逸らす。

「え、ええ……ありがとう……っ」

楯無は下唇を噛み、両手を拳に変え力を入れる。

「どうしたんだ? 嬉しくないのか?」

「う、嬉しいわ……嬉しいに決まってるじゃ、ない……っ」

一夏は再び訊ねた後に、楯無は答えたが身体は震わせ、再び泣き始める。やはり、楯無は一夏とは眼を合わせる事は出来ないでいた。

この誘拐は家族による狂言誘拐が本当の誘拐になった事。その事で絶望した自分に追い撃ちを掛けるように自分が男達に犯されそうになった際に、彼、一夏が自分を助けてくれたが一人を除いて誘拐犯

達全員を殺してしまった事。

それだけでなく、自分は一夏を止めようとして拳銃を向けたが一夏に言葉で促され、挙げ句の果てには一夏に向けて発泡してしまった事に罪悪感を感じていた。

それらは彼等を、一夏と止に簪を助ける為に協力をさせてしまった自分や身内が原因であり、何の罪もない彼等の人生に大きな影響を与えてしまったのだ。

楯無から見れば原因にある自分自身をやるせなく思っていた――それも、涙を流す程であった。そんな楯無に一夏は楯無の肩に手を置こうとした。

刹那、楯無は一夏を見るや否や、一夏に抱き着く。

「お、おい!?!」

これには流石の一夏も楯無の行動に驚きを隠せない。

そんな一夏を他所に楯無は顔を一夏の胸に埋めながら嗚咽を上げる。それは後悔と罪悪感の涙だった。

楯無はそれを全て吐き出す形で、それを一夏に謝罪と言う形で一夏に抱き着いたのである。

例えそれが一夏のした事が消える訳ではない――それでも、楯無は一夏に謝りたかったのである。

「お、おい離れろよ!?!」

一夏は楯無の行動に戸惑いながらも楯無に言う。一方、楯無は一夏の胸に顔を埋めたまま泣き続けていた。

勿論、一夏は服の胸部分に濡れた感触を感じてはいなかった。防具を着けていた為に、それを感じる事はなかった。

しかし、一夏は楯無が泣いている事には気付いていた――それも一夏には関係なかった。

「――どうしたの、その人?」
「――。後ろにいた止が不意に声を掛ける。止は一夏とは違い、簪を抱き起こしながら疑問を抱くような表情を浮かべている。

「何でもねえよ、でも、この女が突然抱き着いてきたから困ってるよ」
一夏は振り返らずにそう言いながら、楯無を引き離そうと身体を動

かす。楯無は一向に離れなかった。

「おい離れるよ？ 動きにくいだろうが……！」

一夏は少し怒っているのかそう言う口調へと変わりつつあった。そんな一夏に楯無は顔を上げた。一夏は未だ眼にうつすらと涙を流していた。

「ごめんなさい……」

楯無は微かながらに呟く。それを聞いた一夏は「何っ？」と首を傾げる。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

楯無はそう言いながら再び俯く。それは楯無がやつと見つけた謝罪の言葉だったが、一夏は何も言わなかった。

それだけではない、一夏はケルティックのマスクを着けたままであり彼がどんな表情をしているのかは楯無には判らなかった。

「ごめんなさい……あなたを……ごめんなさいっ」

楯無は謝罪の言葉を述べる。刹那、一夏は何かに気づき、楯無に言った。

「……済まないが、ここでお別れだ……」

一夏はそう言った。それを聞いた楯無は眼を見開き一夏を見ながら「えっ？」と驚く。刹那、楯無は背中に一瞬だけ激痛を感じ、そのまま目の前が真っ暗になり意識を失った。

数分後、楯無は眼を覚ました。目の前には夜空が広がり、海の音が聴こえ、近くには自分の両親や従者である本音姉妹がいた。「っ!？」

両親や本音姉妹は楯無が気が付いた事に涙を浮かべ何かを言っていたが、楯無は眼を見開き起き上がる。近くには一夏や止はいない。両親や本音姉妹は居るが隣には簪も居て、彼女は未だ気を失ってい

る。

そして、此処は港であつたが近くには数台のパトカーや自分の家の物であろうリムジンが停まっていた。

そして、楯無は倉庫を見るも、男性の悲鳴が聴こえた。その理由は、倉庫内には、女性議員や金髪の女性、網に絡まれた男を除いた男達が全身の生皮を剥がされて、逆さまに吊るされていて、それを見た男性が悲鳴を上げたからであつた。

そして、一夏と止は港から姿を消した。それに彼等は、黒い鞆の中に入っていた一千万の内の百万円と一緒に……。

第22話

翌日、ここは昼間の渋谷のハチ公広場。そこは駅の前であり、その先には大きな交差点があり、そして沢山の人が行き交っていた。

勿論、それらは全てとは限らなかつた。中には待ち合わせをしているのかベンチに座ったり、携帯電話とかで時間を潰したりしている人や、どっかのテレビ局の者達なのかアナウンサーやカメラマン等の数名のスタッフがいた。

それだけではない、中には外国人もいて、彼等も又、渋谷と言う街を観光目的で来たのか仕事に来たのかは判らないが渋谷の街を歩いていた。

そんなハチ公広場には、一人の全身が黒である服やズボンが特徴的な青年がベンチに腰掛けているが、その表情は何処か険しい。

大人びた顔立ちであるものの金色の髪が風で靡き、目の前だけを見据える黒い瞳には何かを思うように宿っている。

「ーもう、そろそろ来る頃か?」 ー。青年は不意に呟き辺りを窺う。それは青年が誰かを待ち合わせをしていたからだ。それは誰かは判らないが青年には判る人であり、青年からすれば、唯一無二の親友達である。

刹那、そんな青年の近くから声が聞こえ、青年は振り返ると共に立ち上がったが青年は瞠目していた。

そこにいたのは青年をよく知るであろう二人の青年達が青年の方へと歩み寄り、青年の近くにまで来ると立ち止まる。片方は青年と再会を喜んでいるかのように表情を明るくし、もう片方はほくそ笑んでいた。

「一夏、止、何だよその格好は?」

青年は彼等の名を言うと共に彼等が着ている服を指差しながら言葉が続ける。

そう、彼等は一夏と止であり、彼等の名を言った青年は一夏と止の仲間であり、秋葉原でとある目的の為に一人別行動をしていた勇人だった。

勇人は一夏と止の着ている服が違う事に気付く。何故なら、勇人は一夏と止が着ている服は良く解っていた。

二人は自分と同じ全身が黒い服を着ていたが彼等の着ている服が違う事に少し呆気にとられていた。

止は上が黄色のチエック柄が特徴的な長袖のシャツを着て、その下には青いジーパンを穿き、白のスニーカーに近い靴を履いている。

一夏の方は上が白の長袖のシャツに黒のベスト、下には肌色のジーパンを穿き、下には黒のスニーカーに近い靴を履いていた。

そんな勇人の指摘に、一夏が答えるかのように口を開いた。

「それは後で話すーそれよりもこれからの事を話そう……勇人、お前に関係する事だ」

「俺にか？」

一夏の言葉に勇人は表情を険しくする。しかし、止は何故か吹き出しそうになるのを堪えていた。

二十分後、ここはとあるデパートの五階。そこは衣服売り場だったが近くには、ある物が置かれており、女性物が大半を占めており、男性服は少ししかなかった。勿論、そこにも人はいるが女性が多く男性は少ない。

そんな衣服売り場には一夏達がいた。彼等は、とある人物の服を買いに来たからである。

「ったく、やる事つてのは俺の着る服を買う為だったのか？」

勇人は呆れ半分に言いながら男性の上着コーナーを一つ一つ確認していた。勿論、近くににいる一夏と止に言ったのだ。

「別に良いだろ？俺達だけいい思いをするのはお前だって嫌だろ？」

一夏は勇人に言うも勇人は瞑目する。

「まあ、それもそうだが、俺は別に服が欲しい訳ではない」

「そう言いながら、勇人、服を選んでんじゃん？」

止は勇人の行動を指摘すると、勇人は「ウグツ!？」と凶星した。

「へへっ、凶星でいやんの。それよりも一夏」

「何だ？」

一夏は止を見ると、止はある場所を指差す。

「あれ見えてきて良い？」

止がある場所を指差しながら、一夏に訪ね、一夏は止が指差した場所を見る。そして、一夏は驚愕した。

その場所は、とある物が置かれている。そのとある物はISだった。それも打鉄が二つ、隣同士に置かれている。

「あ……っ」

「一夏？」

一夏は下唇を噛む。そんな一夏を見た止は何も解らず首を傾げるが、一夏は慌てて止を見ると笑った。

「嫌、何もない。見えてきて良いぜ？」

「ありがとう」

止はそう言った後、ISが置かれた場所へと走る。そんな止を見た一夏は哀しい目をしていたが一瞬だけ表情を険しくする。

「……一夏、憎いか？」

そんな一夏を、上着を選んでいた勇人が声を掛ける。

「ああ」

一夏はそう言いながら頷く。

「そうか、それよりも一夏、教えてくれ、何故、お前と止が服が違うのかを」

勇人はそう言いながら上着を選ぶ。そして、一夏は表情を険しくしながらも、勇人にその経緯を話した。

「成る程な、それでお前や止は、その楯無と言う女の妹を助ける為、そしてお前は楯無と言う女の家族による誘拐が本物の誘拐になったよりも、楯無や簪と言う女を助けるよりも、誘拐犯達に怒りを感じて殺戮を起こした、と？」

勇人は自分が着る服を選びながら、一夏が自ら語った事に何も動じ

ず、驚きもせず耳を傾けていた。

実は一夏と止は昨日、簪を助けた後、一夏は自身の判断で楯無を手刀で気を失わせ、その場に寝かせると、気を失っている簪の近くにいた止に、近くに放り捨てられている鞆の中に入っている一千万の内の百万を盗れと命令した。

これには止も疑問を浮かべ首を傾げたが、一夏は『いざと言う時の為だ』と言った後、男の身体を包んでいるように絡まれている網を回収する為に、網に絡まれている男の方へと歩く。

一方、止も一夏の言い分を納得し何度も頷くと、黒い鞆の方へと歩き、一千万の内の百万だけを取り出す。

その間に、一夏は網を回収したと同時に『その二人には此処にいさせるのは悪い、港に運ぼう』と二度目の命令をし、止は簪を、一夏は楯無を運び、倉庫を出ると港に隣同士に寝かせ、一夏は楯無の携帯で楯無と簪の家族に連絡した後、そのまま立ち去ったのである。

勿論、一夏と止は金髪の女性に手を出していない。何故なら、一夏は楯無に抱き着かれている際にある事―ある人物の通信が入ったのを聴き、後の事を彼に任せる為に、止と共に楯無と簪を連れて倉庫を出たのである。

そして、その人物は三人の男達の生皮を剥ぎ、逆さにした後にその場を去った。勿論、その者がやった事を、一夏は連絡して知ったのだ。「あの後、彼に、エンフォーサーに後の事を任せ、俺達は警察に見付からないよう野宿し、ここに来る前に服を調達した」

「成る程ね、それでお前達の服が違うのは納得出来た」

「だろ？ それよりもお前が解らねえ事があるんだ」

「エンフォーサー、だろ？」

勇人は服を選びながら、一夏が疑問に思った事を答え、それを聞いた一夏は頷く。

エンフォーサー、彼はエルダーに命令され、一夏、勇人、止の三人を地球に送り返した人物であり、横浜の港の倉庫にいた三人の後始末をしたプレデター。それに、一夏が楯無や止が横浜で見っていたプレデターは彼である

しかし、一夏には解らない事があつた。エンフォーサーは何しに来たのかを……勿論、それはエルダーの命令でもあつた。

「俺には解らねえんだ、エンフォーサーが何しに来たのか、エルダーは何の為に彼を地球へと赴かせたのかを……」

一夏は俯く。すると、勇人はある服を取り出し、それを眺める。その服は黒の革製の上着であり、背中には下顎のない髑髏が刻まれている。——これで良いか——。勇人は不意に呟き、一夏は顔を上げ、笑う。

「それで良いのか？」

「ああ、俺にはこういう服の方が良いんだ……」

「お前は何を着ても似合うかも知れないが、俺から見れば少し派手過ぎねえか？」

一夏は笑いながら指摘すると、勇人は微笑む。

「別に良いだろ？ お前みたいに服なんて着ればそれで良いみたいに適当に選んでいる奴には言われたくないな」

「それを言うなよ？ 俺はオシヤレは元より、服は着れば何でも良いんだよ」

「フツ……だが、それもいいかも知れねえな？ でも、恋人が出来ればオシヤレは必要かも知れねえぜ？」

勇人はそう言った後、一夏は再び微笑む。

「居ればの話だろ？ それに俺達の事を好きになる奴なんて、そう簡単に居るか？」

「居るかも知れねえぜ、案外？」

勇人は上着を手にすると、今度はズボンコーナーの方へと歩く。勿論、一夏も一緒だが二人の会話は何処か平和的かつ普通の青春を謳歌したい男子の話にも近かった。

だが、それは一夏や勇人にとって一時の復讐を和らげる物に過ぎず、彼等が復讐を果たしたい相手の前では無理に等しい。

勿論、復讐は何も変わらない——それでも、彼等にはほんの一瞬でもいい、一瞬でも彼等の心の傷を癒す時間があればそれで言いのかもしない。

刹那、辺りが一瞬だけ光に包まれた。それはほんの一瞬だったが、一夏と勇人、辺りにいた人達は一瞬だけの光に驚いた物の、それが消えた後に光がした方を見やり、そして驚愕した。

そこには、ISが、女性にしか扱えない筈のIS、打鉄を纏っている男がいた。その人物は止だった。

「と、止?！」

一夏は驚き、勇人は瞠目していたが、止は「アリヤツ?」と未だ現実を見ないでいた。

第23話

「と、止?! お、お前?!」

一夏と勇人は困惑しながら、IS・打鉄を纏っている止の方へと駆け寄る。一方、止は何も解らないでいたが徐々に自分の置かれている立場に気付き、冷や汗を流す。

何故なら、止はISを動かすつもり等はなかった。それもその筈、止は単にIS、打鉄を興味本意で眺めていたがそれに飽きたらず、不意に触ってしまい、それが原因で今に至ってしまう。

その間に、一夏と勇人は止の元へと駆け寄る。

「い、一夏、勇人、どうしよう! 俺IS動かしちゃった!」

「そんなのはどうでも良いんだよ!? それよりも早く降りろよ!」

慌てる止をよそに、一夏は止に命令するが止は自分の身体に纏われているISを見る。

「そんな事言われても俺、どうやって解除すれば良いのか解んないんだよ!」

止の言葉に一夏は「はあっ!」と声を上げる。そうだろう、止はISを動かす以前に、ISの知識や稼働時間や使用方法は皆無に等しい。

その為、ISから降りろと言われても、素人同然の止には無理だろう。それだけでなく、辺りにいる人達も騒がしい。

女性達は、本来女性にしか扱えない筈のISを男が動かした事に驚きを隠せず。男性達は男性達で、自分達と同性である男―それも二十にも満たない青年がISを動かした事に驚きを隠せない。

しかし、周りが驚いていながらも、一夏と止は別の意味で慌てている。

「……………」

辺りが騒がしい中、勇人は表情は驚きその物だったが内心何かを感じていた。それは嫌な予感であり、勇人はそう思いながらも下唇を噛むと、もう一機の打鉄を見据える。

その間に、一夏は止を助けようとして、止の身体に纏われているI

Sに触れた。刹那、辺りが再び光に包まれ、辺りにいた人達は光に怯む。

それは一瞬、本の一瞬だったが同時に誰かが転がり落ちた。止だった。止は「アテツ！」と声を上げるが光が消えた後には、一夏はいなかった。何故なら、今度は一夏がISを纏っていたのだ。

「い、一夏……!?!」

勇人は別の意味で驚き、止は起きやがるや否やISを纏っている一夏を見て驚きを隠せない。

それだけではない。近くにいた人達は更なる驚愕の事実をしつたかのように慌てている。

勿論、男女共に二人目のISを動かした男が現れた事に慌てている為、共通の意味で驚いている。

「うっ……!?! ……っ」

しかし、当の本人である一夏は苦虫を噛み締めたかのような表情を浮かべている。何故なら、彼はISは動かすつもりは無かった。

なのに、何故か彼はISを動かしてしまったのだ。何故、自分は動かす事が出来たのだろうか？ 嫌、今はそんな悠長な事を考えている場合じゃない。一夏は突然の事に戸惑いつつもISから降りる。

すると、一夏達の少し離れた場所から、一夏達の元へと駆け寄る者がいた。それは五人だが年は三十代で全員男であり、黒のスーツが特徴的な男達だった。

彼等は全員驚いていたが一人が叫んだ。

「君達、我々と一緒に来てくれ!!」

男はそう叫ぶが、一夏は彼等を見るや否や、止と勇人に対し叫ぶ。――此処を離れるぞ!! ――。一夏はそう言うと、突然走り出す。

止は一夏の突然の行動に驚きつつも一夏の後を追いつ、勇人は冷静を装いながらも上着を持ったまま、一夏の後を追いつける。

「待ってくれ!! 我々と来てくれ!!」

五人の内の一人が叫ぶが一夏達は止まる事はない。

「あつ！ そうだ!?!」

すると、一夏は何か思い出したのか近くのレジの前に止まる。レジの前に店員はいたが女性だった。

だが、一夏が止まった事により止や勇人も止まるが止は「どうしたの一夏!？」と言うも、一夏はポケットから二万を取り出し、レジの上に置く。

「精算する暇はありませんがこれで勇人の持つてる上着を下さい!!」

一夏はそう言うのと、再び走り、止や勇人も走る。一方、女性店員は突然の事で戸惑うがレジの前を五人の男達が走って通り過ぎた。

一夏達は今、男達に追い掛けられていた。途中、他の人達とぶつかりながらも何とか男達の視界から消えようと走り続ける。因みに一夏達は、このデパートから出る為に階段を駆け降りている。

「ねえ、何で逃げるの!？」

一夏達は逃げる中、止が一夏に言う。

「そんなのは当たり前前だろ?! 奴等に捕まれば何をされるのかは解らねえだろうが!？」

一夏は止に対して叫んだ。そうだろう、一夏や止は男でありながらISを動かした。それは紛れもない事実であり、目立つかつ危険をも意味している。言わば、男達の希望であり、女達から見れば危惧の存在。

それに、捕まれば捕まればで身内に連絡される危険もあり、憎悪の対象がどんなに離れても、すつ飛んで来る危険もある。

同時に、自分達はプレデターの防具や武器を持っている。それはプレデターの技術があり、奴等に捕まれば技術を奪われる危険もあり、世間に知られる危険もあるからだ。

一夏は捕まってそのどちらも選びたくもない。身内であり憎悪の対象に逢うよりも、死を選ぶ。プレデターの技術を盗まれるよりも、プレデター達への恩義の為にプレデター達の習わしにより自爆と言う形で死を選ぶだろう。

話を戻そう。一夏達は階段を降り一階にまで来ると、デパートを出

入り出来る玄関の方まで走り、玄関を出た。

辺りは沢山の人がいたが、近くには大きな交差点はないが車が走れる交差点はあり、車が何台も走っている。しかし、そんな悠長な事を思っている暇もなく、一夏達はその場から離れるように走り出す。その数分後にデパートから男達が出てきたが、彼等は一夏達を探そうとするも、一夏達を見失ってしまったのである。

その理由は、一夏達がマラソンランナー並かつそれ以上のスピードで彼等を撒いたからである。

そうなったのも、彼等がケルティック、スカー、チョツパーと共に未知の惑星で三年間修行し、そこは過酷な環境であり危険な生物は沢山いたが三人は人間以上の体力と肺活量、更には瞬発力をも得たのである。

故に、彼等は死地を潜り抜けただけでなく、熊やワニよりも強い獯猛な生物を相手にし喰らってきたのである。

彼等はとても強く、そして絆も固い。その為、肺活量が違う男達からみれば相手にもならないのだ。男達は辺りを捜すも、一夏達は既にその場からいないのだった。

「ふう……ここまでこれば何とかなるかもな」

一方、渋谷からニキロ離れた街の人気の無い路地裏。そこには一夏、勇人、止の三人がいた。

彼等は汗を流し、息をしているものの、疲れの色は見せていない。しかし、三人の表情はそれぞれ違う。

勇人は無表情であるものの、一夏と止がISを動かす事が出来たのを内心驚いた(勿論、勇人自身もISを動かせる事を知らないのと、いつの間にか上着を羽織っている)。

止は止で嬉しさと驚きが混じったような表情を浮かべていた。

「くそっ!!」

そして、一夏は憤怒の形相で近くの壁を殴る。そんな一夏の行動に勇人と止は一夏を見やるが一夏は表情を崩してはいない。

「くそが……っ」

一夏は再び眩くも悲しそうに俯く。これから大変な事になった。それは一夏にとって最悪な事を想定させる事をも予感させている。

一つ目は自分と止がISを起動させた事。それは世界にとって、自分達は注目を集める事や命を狙われる事をも意味している。

二つ目は身内に逢う危険がある事だが、それは一夏には思い出したくもない物だろう。

「一夏、これからどうする？」

そんな一夏に勇人は声を掛ける。勇人は一夏や止とは違い冷静だったが内心、一夏を心配していた。

すると、一夏は「っ!？」と言葉を詰まらせるが顔を上げ、勇人と止を交互に見る。止は首を傾げ、勇人は鋭い視線を向けている。

「そうだなあ……嫌、今はない、少しの間ここにおいて、その後でプレデターの能力を使って隠れよう」

一夏はそう言いながらも再び俯いた。しかし、一夏は弱気になっていた。彼自身がこれからどうすれば良いのかが判らないのと、自分と止がISが動かしたのを周りが見ているのと、世間がどう動くのかを気にしていた。

勿論、それは自分達には逃げ場がない事をも意味していた。そして、一夏達はその場に少しだけいたが、彼等がISを動かしたと言う事実を世間が知るのも時間の問題だった。

第24話

世界は今、世界中にいる人々に衝撃が走っていた。それは日本で、女性にしか扱う事が出来ないISを、男でありながらも動かしたと言う驚愕の事実が日本を通じて、全世界に伝えられたのだ。

勿論、この世の中では、今の時代ではそれは男性達にとっては希望であり、女性達にとっては危惧である。

何故なら、今の時代はISと言う世界最強の兵器が全世界にあり、そのISは女性にしか扱う事しか出来ない事から、女性達の間では自分達女性が偉いと言う、権力を振り翳すような女性達がいて、それが後を絶たない。男性達は男性達で女性達に逆らえず、挙げ句の果てにはなにもしていないのに冤罪で辞職に追い込まれる事も珍しくはない。

その為、今はISがあるせいで女尊男卑と言う風潮に染まっている。そして、それを打開出来るのがISを動かしたと言う二人の青年が鍵であるのだ。しかし、その二人は今いないー彼等はISを起動した後に逃げ、姿を消した。

夜の六時半。ここ、渋谷は今、大混乱に陥っていた。街の至る所では警官達が辺りをパトロールし、普通の道路や高速道路では検問所が幾つも設けられ、上空にはヘリコプターが何機も飛んでいる。

その光景は異様その物だが違う。渋谷に凶悪な逃亡犯が潜伏している訳ではない。警官達は上層部からの命令でISを動かしたと言う青年達を捜している。

上層部と言っても政府も関係し、ISが出来た事で設立されたIS委員会も関係している。

言わば、この渋谷での警察による大捜査は国家を揺るがす物として有名になるだろう。

そんな渋谷の街中を、とある七階建てビルの七階から見ている三人の青年達がいた。身体にプレデターの防具を纏い、顔に各々デザインが違うマスクを着けている一夏、勇人、止の三人であり、彼等は上空を飛んでいるヘリコプターに見付からないように隠れている。

因みに、そのビルは会社だが、休みなのか誰もいない。周りにはパソコンが置かれているデスクが幾つも置かれており、来客用のソファも設けられている。

「わおっ！ 何処もかしこも警官だらけじゃん！」

止は窓から街の異様な光景を眺めていたが興奮と驚愕を隠しきれないでいた。そんな止を、近くにいた一夏と勇人は何もせず、各々違う事をしていた。

勇人は立ったまま腕を組みながら何かを考えているが顔にスカートのマスクを着けている為、どんな表情をしているかは判らない。一夏は一夏で壁に凭れ掛かりながら槍を大事そうに抱きつつ座っている。しかし、勇人は兎も角、一夏はケルティックのマスクを着けているが表情は怒りに満ちていながらも何処か寂しそうだった。

そうだろう。一夏達は今、危機的状况に立たされている。それは警察が捜しているのは自分達であり、上層部からの命令でありながらも血眼になって捜している。

それは一夏達が指名手配犯かつ容疑者である事をも意味している。動けば捕まる上、隠れていても何れは見つかってしまう。

言わば、一夏達は今、渋谷と言う街で動物のように檻の中にいる生き物の立場に等しい。

例え、あの警察の包囲から脱出しても、日本は愚か、世界中から逃げる道は何処にもない。それに今頃、一夏達は知っているか知らないかは判らないが、テレビでは男がISを動かしたと言うニュースがバラエティーを他所に緊急速報として流れ、センサーシヨナルに語られているのだ。

そして、一夏達が逃げられる場所は、帰る場所は何処にもない。

「くそっ……どうすれば良いんだ？」

一夏はそう呟きながら槍を持っている手に力を入れる。

「それは解らねえな……でも俺も何も浮かばないみたい」

一夏の言葉に、止は答えるようにそう言いながら窓に背を向け、そのまま座る。

「それよりも止、お前は何故、ISを動かす事が出来た？ それにお前

のせいで俺達は警察に追われる身になったんだろうが？」

そんな止に、一夏は顔を上げ止を見るも、止は首を傾げる。

「そんなの俺には知らねえよーそれに昼間も言ったじゃん？俺は興味本意でISを触っただけだった」

止は首を傾げながら言った。勿論、この話は一夏が昼間に止に同じような事を言ったが答えは同じである。彼は、止は単純にISを触りただけであり、ISを動かしたまでは想定していなかった。

仮に動かしたとしても、彼は最初から自分はISを動かせるという事を知らないし、人間誰しも未来の事を予知出来る訳ではない。

話を戻そう、一夏に訊ねられた止は答えるも、今度は止が一夏を指差しながら口を開く。

「それに一夏だって何でISを動かせたのさ？俺がそこが解らないよ」

止の言葉に一夏は何も言い返せず俯く。

「何で動かせたんだろうな……」

一夏は不意に呟いた。一夏は別にISを動かした訳ではない。だが、今はそれどころではない。

今は、この状況をどうにかしなければならぬ。ここを出るとしても街は警官だらけであり、何れは捕まる。出なくても、何れは見つか

る。それに、彼等をプレデターのやり方で殺す事も可能だが相手は警官であり、悪を捕まえ、正義を貫く者達。警官だれしも正義ではないが彼等には怨みはない。

一夏はどうすれば良いのかが解らず、言葉を詰まらせる。そんな一夏に止は両手を頭の後ろに当て、何も言わなくなる。

「……!?!」

刹那、三人は近くに気配を感じ、視線をとある方角へと向ける。そこは、この建物内を出入り出来る扉だった。

「誰かが来るみたいだな」

勇人が不意に呟くと、一夏は「ああ」と言いながら頷き立ち上がり、止も立ち上がる。刹那、一夏はスピアを伸ばし身構え。止は両腕に

装備しているシミターブレイドを展開し。勇人は右腕にあるリストブレイドを展開し、腰にあるレイザーディスクを左手で取り、軽く振る。

三人が三人、各々の得意武器で扉に近付く。警官か、それとも自分とは別の侵入者だろうか？ 嫌、一夏達には判る訳ではない。

何故なら、扉には誰もいない。侵入者は、後ろにいたのだった。

「っ!？」

一夏達は後ろを振り返ると、そこには窓の近くには一人の女性が立っていた。二十代前半であり、紫掛かったピンク色の長い髪に紅い瞳、スリムな体格だが頭にはウサ耳を着けていて、服は『不思議な国のアリス』に近い青い服装を身に纏っている。

だが、その女性は哀しそうに、そして眼に薄っすらと涙を溜めていた。

「あんたは……!？」

一夏はその女性には見覚えがあった。

「誰っ!？」

「誰だお前は!？」

しかし、止と勇人はその女性とは初対面であり、勇人はレイザーディスクを投げようとした。——待てっ! ——。刹那、一夏が叫んだ。

それを聞いた勇人と止は一夏を見るも、一夏はその女性へと歩み寄る。止が一夏を呼び止めているが一夏は女性の前に立ち止まる。

「貴女は……まさか」

一夏は女性に訊ねるも、女性は一夏を見て呟いた。

「いつ君、なの?」

女性は一夏の事を知っていた。すると、一夏はスピアーを縮ませ、背中に携えるように戻すと、顔に着けているマスクを両手でゆっくりと外し、女性に素顔を晒した。

女性は、一夏が素顔を晒した後、瞑目すると、一夏の顔に手を伸ばし、一夏の頬を触る。一夏は女性よりも背が高かったが女性には関係なかった。

「いつ君だよね？」

女性は一夏の頬を触りながら訊ねた。女性から見れば、彼が一夏本人かどうかは解らなかった。それでも本当であつて欲しい、彼が一夏、織斑一夏であつて欲しい、と。

勿論、一夏は女性の質問に答えた。——そうです、俺が一夏です——^{たばね}東さん、と。

「いつ君……いつく——んっ!!」

その直後だった。女性は、東は彼が一夏だと気付くや否や嬉し涙を涙を流しながら、一夏に抱き着き押し倒す。

一夏は東に抱き着かれ押し倒され仰向けに倒されるた直後にケルティックのマスクを落とすも、一夏は満更でもない表情を浮かべていた。

「いつ君……いつ君が生きてた……いつ君……!」

東は一夏の胸に顔を埋めながら言葉を続けていた。東は嬉しかった、一夏が、大切な弟のような存在が生きていた。

三年、東から見れば長い年月だったに違いない。それでも、東は諦めなかった。一夏が、彼が生きているのを信じていた。そして今、彼が生きていたのを知ると、東を溜めに溜めていた我慢を全て吐き出していた。

「東さん、痛いですよ……」

一夏は東に言っても、東は聞こうとはせず退こうともしない。余程、東が心配だったに違いない事をも意味していた。

そんな中、止とどうすれば良いのかが解らないでいたが勇人は無言でレイザーディスクを腰に携え、リストブレイドを戻す。

勇人は東が敵ではないと気付いたが東が泣き止むまで、一夏、勇人、止は何も出来ないでいた。

第25話

「東さん、落ち着きましたか?」

東が一夏に抱き着き押し倒しながら泣いてから数分後、一夏は東に訊ねる。東からは泣き声は聞こえなかったが一夏はあえて訊ねたのだ。すると、東はゆっくりと起き上がり、一夏を見据える。

東の目尻には涙の痕は残っているものの、東は何処か吹っ切れたかのように安堵の表情を浮かべているが静かに頷く。それを見た一夏は軽く微笑むも少し苦笑いする。

「そうですか……それよりも退いてくれませんか? 起き上がれませんか?」

「あつ、そうだったね!!」

東は子供のようにニッコリと笑い、一夏を自由にする為に立ち上がり、一夏に手を差し伸べる。一夏は東の手を取り、ゆっくりと立ち上がった。

「いつ君、生きてたんだね? 良かったよ……」

東は再び泣きそうになるも、一夏は軽く頷いた。

「はい、この通り生きています」

「そうなんだ……それにお帰りなさい、いつ君!」

東は笑いながら良い、一夏は再び頷いた後に軽く言い返した。――ただいま、東さん――と。

彼女の名は篠ノ之束。しのののたばね一夏の姉・千冬の親友であり、ISを作った天災にして、一夏の数少ない理解者。

彼女は世間から千冬の付属品しか見ない一夏を励まし、時に一夏を気遣い様子を身に来ていた。一夏が心身ボロボロになっても、彼女なりに支えていた。

しかし、三年前、あのモンド・グロツソの大会の時、一夏は誘拐され、行方不明になった際、彼女はこの世が終わったかのように絶望し、血眼になって世界中を捜した。

周り一夏が死んだのではないかと思っても、彼女だけは諦めなかった。生きてる、絶対に生きている、と。

そして今、束は一夏と再会した。それはISを動かしたと言う青年達の存在。それが束を動かし、束自身はそれが一夏ではないかと賭け、そしてその賭けが当たったのである。

束から見れば嬉しかったのだろう。だが、そんな悠長な事を言っている場合ではなかった。それは、勇人のたった一言から始まった。

「おい二人共、今は再会を喜び合い、浸っている場合ではない」

勇人は二人に言った。その理由は今の現状をどうにかしなければならぬ為に、それに警察の魔の手から逃げられる場所を探さなければならぬのだ。

勇人自身、二人の再会に水を差すつもりはなかったがあえて、勇人は訊ねたのだった。刹那、束は先と変わって、勇人と止に対し軽蔑な視線を向け、邪険な表情を浮かべる。

「誰だよお前等？ 折角の感動の再会を邪魔するなよ？」

束の威圧かつ邪険が込もっている事を言われた止は「えっ!？」と肩を震わせ、勇人はスカーのマスクを着けているが細い目を束に向ける。

二人は知らないだろうが束は自分が認められた者や親密な関係の者以外の者には邪険に扱い、汚物を見るかのような目で話すのだ。言わば、二人は束とは顔見知りではないのと、対象外である為仕方ない事である。

そんな束に、一夏は宥める。

「落ち着いて下さい束さん、彼等は俺の仲間であり、俺と同じ死地を生き抜いてきた親友です」

「そうなの？」

束は一夏を見ると、一夏は軽く頷き、そして二人を見る。

「二人共、自己紹介してやってー後、マスクはちゃんと取ってからな？」

一夏は二人に言うと、止と勇人は互いを見やり、直ぐに一夏を見るが一夏は軽く頷く。そんな一夏を見て、二人は再び互いを見やると止は首を傾げシミターブレイドを戻し、顔に着けているチョッパーのマスクを両手で取る。その間に勇人はリストブレイドを戻し、顔に着け

ているスカーのマスクを片手で取る。

そして、二人は同時にマスクを外し、束に素顔を晒した。それでも、二人は束に自己紹介した。

「俺は止、霧崎止だ」

「俺は勇人……訳あつて名字は言えないが勇人で良い」

止と勇人は束に自分の名を言うと、束は「フ〜ン……」と怪訝な表情を浮かべながらそう言った後、直ぐに笑う。

「じゃあ、とー君にはやちゃんね！ 私は篠ノ之束!! よろしくね〜」

束は止と勇人に手を振りながらあだ名で呼び自身も自己紹介した。言それを聞いた止は惚け、勇人は瞠目した。束の素早い変わりようと、束のアダ名で呼ばれた事に驚いていたのだ。

しかし、止は兎も角、勇人は自分だけ「はやちゃん」と言われた事に驚いている。勿論、束も悪気ではないが束が親密な関係者にはアダ名を付ける為仕方ない。

「二人はいつ君の友達だし、それにいつ君が認めたのなら悪い人じゃないよ」

「良かったな二人共、アダ名を付けて貰って」

一夏は二人を見て笑うも、勇人は納得していないのか少し怒っているが溜め息を吐くと、スカーのマスクを持ったまま腕を組む。

「まあ良い、それよりも早く此処を離れようぜ？ 此処も何時警官が踏み込んでくるかは解らねえからな？」

「確かにそうだな……此処も何れは警察が踏み込んでくるだろう、二人共、準備しろ」

一夏の言葉に、勇人と止は「ああ」と答えながら頷き、止はチョツパーのマスクを、勇人はスカーのマスクを被ろうとした。その間に一夏は束に抱き着かれ押し倒された時に落としたケルティックのマスクを拾う。

「大丈夫、そののは私に任せて!!」

三人を他所に、束が自分の胸に手を当てながら叫び、三人は一斉に束を見やると、束は三人を見ながらニヤニヤしていた。その表情は自

信に満ちているが束には、この状況を打開出来る方法があるのだった。

それも、彼女がこのビルへと来たのも、彼等の後ろから現れたのも、全てを物語っていた。

そして、束が考えた、この状況からの、警察による大包围網を脱出と、彼等を救う為に作戦である事も。

一夏達がいるビル周辺の上空。そこには何機かのヘリが飛んでいた。全てが警察の物ではない。テレビ局が派遣したヘリコプターもあり、上空から渋谷の様子を確認していた。

勿論、ヘリコプターは一夏達がいるビルの事を気にしてはいない。一夏達も、一夏達がいるビルの屋上から何かが一瞬で上空を通り過ぎた事を知る由もなかった。

ここは、渋谷から離れた、とある場所。そこは街の中だったが、誰一人、上空から何か降ってくる事に気付いていない。

そして、その何かはある場所へと落下するが地面が穴が開くように開き、その何かは穴の中へと落ちるように突き進み、そして穴は何事もなかったかのように閉じられた。

穴の中は広がった。建物に近く、辺りは鉄で出来た壁に、色んな物が置かれている。それは全てロボットだったが数機しか置かれていなく、一機や二機しか動いていない。

すると、中央にはその何かの姿を現す一人参だった。それも人参を模した乗り物だった。その乗り物は地面に浮くように着地すると、人参が割れるように開き、そこから一人の女性と三人の青年が降りてきた。

束、一夏、勇人、止の三人だった。束は兎も角、一夏達は束とは違い、辺りを見渡す。束から見れば違うだろうが三人は初めて此処に来

たからだっだ。街の地下にこんな場所があった事に驚きを隠せないでいた。勿論、止が興奮していたのは言うまでもない。

それに、彼等が此処に来たのは束のお陰である。束は、世間がISを動かしたとされる青年達を捜している事に気付き、彼女自身も人参型ロケットで捜し、そこで一夏と再会したからである。

因みにロケットはステルスモードで姿を消して屋上に置き、泥棒気分です扉からではなく、窓から入ったのである。

「驚いたでしょ？ でもラボは他にもあるし、ここよりも数倍も良いラボがあるよー」

束は笑いながら自慢する。しかし、一夏達はラボの方に興味がある為、聞いていない。そんな彼等を見た束は頬を膨らますも、ある人物を思い出し、言った。

「それよりもいつ君、とー君にはやちゃん、くーちゃんを紹介したいからこっちへ来てくれないかな？」

束の言葉に三人は束を見やり、止は「くーちゃん？」と聞き返す。「そうだよ、くーちゃんは今、夕食の準備をしているから、厨房へと行く」

束は踵を返し、通路の方へと歩く、そんな束に一夏達は互いを見やるが直ぐに束の後を従って行った。

(束さん……元気で良かったな………つ)

刹那、一夏は束を見て、ある事を思い出す。それは三年間逢えなかった者達の存在だった。一夏から見れば逢いたんだろうが今は無理であるのと、今の自分は彼等よりも止や勇人を選ぶからだった。

(ごめん……)

一夏は彼等に謝ると、勇人や止と共に、束の後を従っていった。

第26話

ここは束のラボの一室にある厨房近くの通路。そこには束と、束の後を従っていくように一夏、勇人、止の四人が通路を歩いていた。

通路の中は広がったが白銀色であり、左右の壁には距離を保つように幾つもの扉があった。しかし、四人が向かっているのは厨房であり、他の部屋ではない。

刹那、四人は何かを臭い、立ち止まる。その臭いは焦げ臭く、まるで何かを焦がしたかのようにも思える。――厨房からかな?! ――。束はそう思い、走る。

束が走った直後に一夏達も走る。四人は通路の中を駆ける。目指す場所は厨房――それも、四人は内心嫌な予感がした為に。

「あそこだよ!」

束がとある方角を指指す。そこはとある青い扉であり、厨房でもあった。扉は自動で開く物だったが四人は厨房へと雪崩れ込む。

――うげっ!! ――厨房へ入るや否や、止が鼻や口元を押さえながら叫ぶ。一夏や勇人も口元を押さええるも、三人は辺りを見渡す。厨房だけあってガスコンロや水道、換気扇や冷蔵庫等が設けられている。

なのに、厨房内が換気扇では無理な程の、黒い煙で支配される意味で充満されている。それはとある料理を作って大失敗してしまった事を物語っていた。

「くーちゃん! くーちゃん!」

そんな中、束は黒い煙が充満する厨房内へとある人物を捜すも直ぐに見付かった。その人物は咳をしながら、一夏達の元へと歩み寄る。

十代後半の少女であり、透き通るような白い肌に美しい白銀色の髪に眼を閉じているのか瞳の色は判らない。服装は上が白く、下が青いゴロスリの服を纏い、胸元には青いスカーフを着用し、黒いストラップシューズを履き、杖を手にしている。

「くーちゃん、どうしたの!?!」

束は少女を、くーちゃんに対し肩を掴むと、くーちゃんは軽く頭を下げた。

「申し訳ありません束様、新しい料理に挑戦したら、このような有り様になってしまいました」

くーちゃんは束に訳を話す。すると、一夏が束に訊ねる。

「束さん、その人は？」

一夏に訊ねられた束は「あつそうだ」と何かを思い出し、彼等をくーちゃんに紹介した。

「くーちゃん、自己紹介するね！ この子がいつ君こと織斑一夏君！ 私が捜していた子だよ！」

束はくーちゃんに一夏の事を自己紹介すると、くーちゃんは一夏を見ながら杖を持つてない方の手を胸に当て微笑む。

「あなたが一夏さんですか、束様からは色々とお伺いしております。私はクロエ、クロエ・クロニクルと申します。訳あつて束様の元で保護され、身の回りを世話をしています」

「あつ、そうですかー束さんからは聞かれていますますが俺は一夏、織斑一夏と申しますーそれにこの二人も紹介しますねーほら」

一夏は勇人や止の二人に自己紹介するよう促す。そんな一夏を見て二人は互いを見合うと直ぐにクロエを見やり、止から先に自己紹介する。

「俺は止ー霧崎止つてんだ」

「俺は勇人……名字は訳あつて言えない」

「そうですか、宜しくですね」

「そうだよ！ 二人はいつ君の親友で、とー君にはやちやんだよ！」

クロエは納得し頷くが、束は二人のアダ名を言い、それを聞いた勇人は少し怒る。ーまたか、また「はやちゃん」と言うのかーと、心の中で呟く。勇人は束のアダ名を未だ気に入らないでいた。

だが、勇人はその事を束に言えばいいものの、束の気持ちを無駄に出来ない。その為、勇人は何も言わず溜め息を吐く。

「それよりもくーちゃん、何を作るとしていたの？」

そんな中、束はクロエに訊ねると、クロエは哀しそうに俯く。

「実は最近、料理は失敗ばかりで束様に身体に悪い物ばかり食べさせていたので、それで身体に良いと言われる焼き魚を作ろと思いました

が……」

「失敗した、と?」

クロエが言い終わる前に、止が両手を頭の後ろに当てながら答え、それを聞いたクロエはゆっくりと頷いた。

何故なら、クロエは最近、束の為に料理を振る舞っているが何れもこれも失敗ばかりであり、食材を無駄にするどころか焦がした物ばかりしか出来ないでいた。

クロエ自身も何とか上達しようとしているが失敗ばかりであった。しかし、束はクロエの作った料理に文句は言わず、それらを全て胃袋の中に収める。

束自身は腹を満たせばそれで良いのと、クロエには無理をさせている為、何も怒らない。クロエ自身もそんな束に何も言えず日々失敗ばかりだった。

「私は料理を上達したい……私は束様に美味しい物を食べさせてやりたいのです……っ」

クロエは涙を浮かべる。そんなクロエに束はクロエを慰め、一夏達は何も言えずクロエ自身に哀れみを感じた。刹那、一夏が口を開く。

「俺が教えてやるよ。一夏がクロエに言った。これには束達も一夏を見やると、一夏は哀しそうに笑っていた。

「俺が教えてやるよ、こう見えても、俺は料理が出来るから」

「えっ、一夏、料理出来るの?」

一夏の言葉に止は訊ねると、一夏は「出来るけど?」と返答した。

「そうだよ! くーちゃん、いつ君に料理を教えてやったら!? いっ君料理が得意なんだよ!」

「そうなのですか?」

「そうだよ! いっ君はこう見えても料理は得意だけじゃなく、ちーちゃんが居ない間……」

刹那、一夏は眼を見開き「止めろ!!」と叫ぶ。その言葉に束、クロエ、止は肩を竦め、勇人は瞑目する。勇人以外の三人は一夏を見やると、一夏は憤怒の形相をしていた。

「い、いっ君?」

束が恐る恐る訊ねると、一夏は「っ！」と歯を食い縛り、駆け足で厨房を出ていく。後ろから束や止の呼ぶ声が聞こえるが一夏は背中であけ止め、その場から走り去っていた。

ここは、さつき束が一夏達と共に渋谷から脱出する為に束が乗ってきた人参型ロケットが置いてある場所近くの通路。その場所には厨房から走り去った一夏がいた。

「くそっ!!」

一夏は自身の心の中に膨らみつっあるやるせない思いを堪えきれず、それを吐き出せない意味で壁を殴る。そんな事しても何も変わらないが一夏は八つ当たりと言う意味で壁を殴ったのである。

一夏は壁を何度も殴るが膝を突いた。

「くそっ……くそっ……!」

一夏は肩を震わせる。その理由は、束が言った言葉にあった「ちーちゃん」。その言葉は束が親友であり、一夏の憎むべき姉である千冬を指している。一夏は千冬の名を聞くだけでも、その名を耳にするだけでも怒りが込み上げてくる、復讐したくなるのだ。

それだけではない、一夏はさつきまで、とある親友達の事を思い出していた。しかし、それは口にしなかった。今の自分には彼等と逢う資格はない為に……。刹那、一夏は気配を感じ、気配がした方へと振り返ると、止と勇人がいて、二人は一夏の方へと歩み寄っていた。

一夏は驚いていたが、止は何故か首を傾げ、勇人は細い目をしていた。近くには束とクロエはいなかった。

「一夏、さつき逃げたのは何だったの?」

二人は一夏の近くで立ち止まると、止が訊ねる。だが、一夏は首を左右に振る。

「嫌、何でもない……ちよつとトイレに行きたかったから」

一夏は哀しそうに笑いながら答える。が、そんな一夏の嘘を見破った者がいた。勇人である。――嘘だな――。勇人はそう言った。

それを聞いた一夏は瞠目し、止は「そうなの?」と首を傾げる。そんな二人を他所に勇人は腕を組む。

「一夏、嘘を付くな、あの時のお前は、あの女が言った言葉に怒りを感じていた」

「あ、あれはトイレが我慢出来なかったから……それで」

「トイレが我慢出来なかったのならあの女達に聞けば良いだろ？ それに止めろつてのは何だ？ あれは何の意味で叫んだ？」

勇人の言葉に一夏は「ツ!？」と言葉を詰まらせる。凶星だった、それも勇人の的確な事を突くかのような言葉に何も言えなくなる。

そんな二人に止は彼等を交互に見やるも、止は再び一夏に訊ねる。

「そうなの一夏？」

今度は止の二度目の質問に一夏は俯く。もはや言い訳が出来ないと思っただのか、一夏は頷く。

「ああ、そうだよ」

一夏の言葉に止は「そうなの？」と疑問を抱き、勇人は溜め息を吐き瞑目する。

「全く、悩みがあんなら言ってみろ、言えば楽になるからな？」

「でも……」

「言った方が言いと思うよ？」

一夏は拒もうとしたが止が遮り、一夏は止を見る。止は笑っていたが一夏は再び勇人を見ると、勇人は眼を開け、一夏に鋭い眼差しを向けていた。

止の表裏のない笑顔、勇人の鋭い眼差しに一夏は何も言えなくなる。確かに言えば楽になるだろう。しかし、それで楽になるとは思えないし、二人に嘘をつく事も出来ない。

一夏は観念したのか、口を開いた。

「ああ言うよ、俺、悩みがあるんだ……」

一夏は二人に言った。それを聞いた止はへへツと笑い、勇人はフツと笑う。そして、一夏は二人に悩みを打ち明けた。

第27話

「えええ〜ッ」

「ちっ……最悪だな」

通路内に止の驚愕したような声と、勇人の舌打ちした後の勇人自身は怒りに満ちていた。二人は今、千冬への憎悪と旧友達と再会すれば良いかで悩む一夏から一夏自身に遭った事を聞いて胸糞悪くなっていた。因みに三人は通路の壁に寄りかかりながら座っている。

一夏は幼き頃、千冬と共に両親に捨てられ、親の愛情を知らずに千冬に育てられていた。千冬は家計を支える為にバイトで家を空ける事が多く、一夏は独りでいる事が多かった。

それだけならまだ良いだろう。だがその後が問題だった。それはISと言う兵器。それは一夏や千冬にとって大きな亀裂をも生じる。姉の千冬はISで世界の頂点に立ち、周りから好奇心な目で見られている。その一方で弟の一夏は世間から姉の付属品しか見られられなくなった。テストで満点を取っても同然だとしか言われなくなり、満点ではなくても千冬の弟なのか？ と言われてしまう。

一夏自身も姉に相談をしても「忙しい」とか、満点を取っても「私の弟だから当然だ」としか見向きもしなかった。それどころか、ISがあるせいで千冬を崇拜するファンからは誹謗中傷を浴びせられ、更には立場も悪くなっていった。

勿論、一夏はそれでも決して挫けはしなかった。それは一夏が家族の温もりを欲していたのと、姉に認められたいが為にーそれも、全て水の泡と化した。

ドイツで行われた第二回モンド・グロツソ大会。それが一夏が千冬への不信感を爆発させ、千冬への憎悪を決定だにする。

自分は姉の付属品でしかなかった。自身は姉に見てもらえなかった。姉は自分よりも名誉を選んだのだ、と。

それが一夏の心に暗い影を落とし、憎しみを増幅させたのだ。

「俺はその後、計画が狂った事で怒った誘拐犯の男達に暴力を振るわれ、殺されそうになった……でも」

一夏は哀しそうに笑う。

「ケルティック、スカー、チョツパーの三人に助けられた……」

一夏は哀しそうに笑いながら肩を震わせる。あの時、自分は殺されそうになったがプレデター達に助けられた。もしも、自分はその時、彼等の助けが無かったら殺されていただろう。

そうなれば、両側にいる勇人や止にも逢えなかったし、親友ー嫌、旧友達にも逢えなくなり、彼等を哀しみのドン底に突き落としていたに違いない。

「俺は怖いんだ……三年間も地球を離れたから旧友達あいつらに辛い思いをさせたのと、俺が死んだかも知れない事で心に傷を負わせたんじゃないか、って」

一夏は俯く。青年は復讐の為に地球へと戻ってきた。しかし、旧友達あいつらの存在が一夏の心を揺らがし、彼自身に迷いを生み出している。

幾らケルティックから殺しの業を教わり、肉体や精神が成長しても彼は一人の人間。悩みは一つや二つではないのだ。

「俺は怖いんだよ……自分は復讐の為に地球に戻ったのか……親友達に再会する為に地球に戻ったのか……情けないよな？」

一夏は未だ肩を震わせながら言葉を続ける。そんな一夏に止と勇人は何も言わなかった。彼等も一夏に同情しているのか、止は哀しそうな眼をし、勇人はやるせない思いを隠しきれず舌打ちする。

「逢いに行けば良いだろうが……」

刹那、勇人が口を開きそう言い、それを聞いた一夏は耳を疑い瞠目すると、顔を上げ、勇人を見る。

勇人は視線を目の前へと向けている為、一夏とは目を合わせていない。

「勇人、今何て？」

一夏は勇人に問うも、勇人は瞑目する。

「だから、逢いに行行ってんだ」

「えっ……勇人？」

一夏は再び勇人に訊ねるが勇人は目を開け、一夏を見る。

「逢いに行けば良いだろうが……お前がそう思うのならな？」

「勇人、お前何を!？」

一夏は驚くも、勇人は冷静に言葉を続ける。

「一夏、お前は一つ勘違いしていないか？」

「何をだよ？」

一夏の言葉に、勇人は目を細める。

「一夏、お前は俺と止と出逢う以前にそいつ等とは親友だったんだろ？ 尚更、お前は逢わなきゃならない」

「そんなのは理由にはならねえ……第一、逢う理由もねえよ」

一夏は俯く。

「それは解ってるーだがな、そいつ等はどう思っている？」

勇人の言葉に一夏は「えっ？」と惚け顔を上げる。何故なら、一夏は自身が旧友に逢いたいと言う気持ちはある。しかし、一夏は旧友達の気持ちを解っていない。

旧友達は一夏が死んだと思い哀しみに暮れている。二度と一夏に逢えないと思っっているに違いない。それに旧友達は一夏にとってかけがえのない大切な者達である。

そんな彼等の気持ちを一夏自身は知らないだろう。だが、これだけは勇人に言えた。

「そいつ等はお前に逢いたがってる……死んだと思っっているに違いないーそれも俺の目の前にいるのは誰だ？ お前自身だろ？」

勇人は一夏を指差し、一夏は戸惑うも勇人は言葉を続ける。

「俺の目の前にいるのは一夏、お前だ。現にお前は生きている。交通事故に遭って死んだ訳でもなく、通り魔に殺された訳でもなく、突然死んだ訳でもないーお前は生きている。それにお前はやる事があるだろうが」

「俺の、やる事？」

勇人は頷く。

「ああ。お前はやる事がある。それは親友達に生きている事を知らせ、逢う事だーそれがお前自身の親友達へのせめてもの償いだろ？」

「償い……」

一夏は勇人に言われ、再び俯く。確かに勇人の言う通りだった――自分は生きてる、この通り身体に異変はない。

親友達から見れば驚き半分、喜び半分だろう。しかし、自分が今まで何処へ言ったのかを訊ねて来るに違いない。

自分は宇宙人の弟子として他星で修行していた――何て、そんな事は言えないし、信じて貰えないだろう。

何よりケルティックやエルダーと言う恩人達であるプレデター達の存在を世間に知られる訳にはいかない。

世間に知られてしまったら彼等の恩義に背く事になるのだ。一夏はそう思い、身体を震わせる。

刹那、一夏はケルティックの事を思い出す。ケルティックならどうするのだろうか？ ケルティックなら自分に何て言うのだろうか？

それにケルティックは成人の儀式を突破しているのだろうか？ 勿論、そんなのは一夏には判る筈もない。もしケルティックがいたのなら、一夏は彼に相談していたのだろうか。

「逢いに行けば良いんじゃないのかな？」

刹那、今度は止が口を開き、一夏は止を見ると止は微笑んでいた。

「一夏、一夏は友達に逢いたいでしょ？ だったら悩んでないで行ってきなよ!!」

「でも、そんな事をしても……」

躊躇する一夏に、止は一夏の肩に手を置く。

「一夏、俺は俺でお前はお前だ――お前は自分が良いと思った事を信じれば良いんだぜ？」

「自分を信じる？」

一夏の言葉に、止はニカッと笑う。

「そうだよ、一夏は自分が良いと思った事を信じれば良いんだぜ？」

それに今の一夏がやる事は、勇人の言った通りの友達との再会。友達も一夏が生きてたら喜ぶんじゃないかな？」

止の指摘に一夏は「喜、ぶ？」と言いながら疑問を浮かべる。すると、止は頷く。

「そうだよ！ 一夏が逢いに行けば友達は喜ぶし、一夏には安らぎの

時間が出来るじゃん!？」

止は笑いながら、一夏に言う。一方、一夏は瞠目していた。一夏は自分自身の悩みを彼等に打ち明け、葛藤している自分にヒントをくれた。

それは、彼等が、悩んでいる一夏に対し彼等なりの答えであり、一夏の背中を押す役目をもしてくれた。

だが、一夏はそんな彼等を見て何も言えずにいた。

「一夏……止の言う通りだ」

未だ悩む一夏に勇人は再び答え、一夏は勇人の方を向くと、勇人は表情を陰しくしていた。

「一夏、さつき止も言ったが、お前はお前だーお前が何をしようが俺と止は何も言わないし、出来る限りの事は協力する」

「勇人……」

一夏が勇人の名を呟くと、勇人は微笑む。

「そんな顔すんなよ？ お前は俺達のリーダーだ。お前がそんなじゃ示しがつかないだろ？」

「そっだよ一夏!! お前は俺達のリーダーだけどそれ以前に俺達は親友だろ!？」

今度は止が言い、一夏は再び止を見ると止は両手を頭の後ろに当てながら笑っていた。

「止……それに勇人」

一夏は両側にいる勇人と止を交互に見る。彼等は一夏が旧友達に逢う事を許していた。それ以前に、彼等はプレデター達に鍛えられた以前に出逢い、三人は互いに親友として接していた。

彼等の絆は脆くもなく、壊れる危険もない。しかし、一夏は二人の励ましや自分に背中を押してくれた事に思わず、涙を浮かべる。

「二人共……ありがとう」

一夏は涙を浮かべながらも笑って答えた。隣にいる止がからかってきても、勇人は何も言わずに笑いながら瞑目する。

その光景は、彼等が、三本の矢にも思えた。そして一夏は、旧友に逢う為に動く前に彼等と少しだけ一緒にいた。

近くに東とクロエが微笑ましそうに見られても関係なかった。

第28話

一時間後、ここはとある場所の商店街的場所。そこは沢山の人々が行き交っていた。街で買い物をする人、外で外食を済ませようとする為に街を歩いている人、単に街を歩いているだけの人もいる。

街には各々の目的で街を歩いている人がいる中、一人の青年が街を歩いていた。青年は街の中をさま迷っている訳ではない。食事を摂ろうと、買い物をしに来た訳でもない。

青年は只、この日本……嫌、異国の地である中国で観光をしに来た訳ではない。彼は、一夏はとある人物と再会する為に、この異国に足を踏み入れたのだ。

しかし、一夏の近くには勇人や止、束やクロエは居ない。一夏は街を歩きながら辺りを見渡す。中国独特の文字が書かれている看板に、中にスープが入っていて、湯気が立ち込める鍋を店前に置いている露店が幾つも並んでいる。

それは祭りその物だろうが一夏は空を見上げる。今の時間帯は夜だったが一夏には関係なかった。

「三年ぶりの地球で日本の次に訪れたのが……中国か」

一夏はそう言うと、再び街の中を歩いた。

更に一時間後、ここは中国の軍事基地の一室にあるシャワールーム。そこには一人の少女がシャワーを浴びていた。

十代後半に差し掛かる少女であり、美しい茶色い髪に翡翠色の瞳、体はスリムな方だが少し小柄だった。

しかし、少女はシャワーを浴びていながらも何処か寂しそうだ。シャワーヘッドを頭から浴びても、辺りに湯気が立ち込め、シャワールーム全体が湿気で充満し覆われていても、少女には関係なかった。

「もう、三年か……」

少女は不意に呟いた。それは少女にとって長い年月であり、寂しい年月でもあった。少女は、ある少年に思いを寄せていた。

しかし、その少年は三年前、行方不明となり、死んだ。勿論、それは噂に過ぎなかったが世間から見ればそう思うだろう。

そして少女は泣いた。その少年は少女の初恋相手でもあり、想いを伝えてはいない。それでも、少女は少年の分まで生きようとしていた。

だが、想いを伝えられなかった事は、少女にとって大きな心の傷であった。

「クヨクヨしても何も変わらないわね……さっ、もう上がろうかしらね？」

少女はそう言った後、蛇口を捻る。刹那、シャワーヘッドからお湯の雨は出なくなった。それでも、辺りに充満している湿気は消える事はない。

少女はシャワールームを出て、近くにあるタオルを手に取り、髪や身体を拭く。髪は未だ濡れているが少女は身体を一通り拭いた後、下着を着け、寝間着を着ける。ピンクのパジャマだったが、少女はドライヤーで髪を乾かし、それを終えた後にシャワールームを出た。

少女には解りきった事だが部屋は広く、電気は点いていた。ここは軍事基地でありながらもテレビやベッド等、必要限りの物は揃えられ、扉や窓も設けられている。

少女にとって、この部屋に居るのは唯一の安らぎの場所である。その為、少女は髪を軽く触ると、ゆつくりとベッドへと歩み寄り、腰掛ける。ベッドはフカフカだったが少女はテレビを見ようと思い、リモコンに手を伸ばす。

刹那、この部屋を出入り出来る扉が自動で開き、少女は扉の方を見る。扉の外には誰も居なかった。

「誰よっ…」

少女は立ち上がり、扉の方へと歩き、扉の外を見る。外に誰も居なく、人もいない。少女は辺りを一通り確認した後、不信感を抱きなが

らも扉から離れる。

扉は自動で閉まるも、少女は身を翻す。

刹那、少女は目の前に何者かが姿を現す。その者はプレデターの防具を纏い、顔にケルティックのマスクを着けている一夏だった。

「だ、誰よ!？」

だが、少女はその者を一夏だと言う事を知らず、驚きながら身構える。一方、一夏はそんな少女を見て頬を緩める。

一夏は彼女を知っていた、良く他の親友達と遊んでいた。が、三年前のあの誘拐事件の少し前、彼女は親の都合で中国へ帰る、と。勿論、転校と言うのは仕方なかったが一夏は彼女とは、ある約束をしていた。

それは今は良いだろう、今の一夏は三年と言う年月を経て成長した少女を見つめていた。あの幼かった少女は美しい少女へと成長していた。

それは時間の関係でありながらも少女には面影が残っている。話を戻そう、相手が一夏である事を知らぬ少女は再び問う。

「誰よアンタ……誰よ!？」

少女は怒る。すると、一夏は口を開いた。

「俺だよ……鈴^{りん}」

一夏の言葉に少女は、鈴は瞠目した。

「まだ判らないのか? それもそうだよな……鈴……それにあの時約束したよな、酢豚を作ってくれるって」

「な、何で私の名前を? それにその約束は……まさか!？」

鈴は驚きを隠せない。すると、一夏は頷き、顔に付けているケルティックのマスクを両手でゆっくりと外す。

そして、一夏は素顔を鈴に晒し、そして鈴は再び驚いた。

「あ、アンタは……嘘でしょ?」

鈴は一夏に歩み寄る。一夏の前に立ち止まると、一夏の頬に手を伸ばし、触った。

「そ、そんな……ゆ、夢よね?」

鈴は一夏の頬を触りながら眼に涙を浮かべる。鈴にとって信じら

れない事だった。それは目の前にいる一夏が鈴の初恋の相手であり、とある約束をした者。

それは鈴にとって、死んだと思っていた一夏が生きていた、と。鈴から見れば信じられないだろう。だが、彼女は信じたかった。

その約束は一夏以外誰にも言っていない。それに、誰かが一夏に成り済ます為に整形手術をした訳でもない。彼は本物の織斑一夏だ。

出来る事なら本当であって欲しい、彼の口から本当の事を言ってくれ、と。

「ああ、そうだよ……鈴」

「っ……いい、一夏……っ!!」

鈴は涙を流しながら、一夏に抱き着く。一夏は押し倒されそうになりながらも何とか堪え、ケルティックのマスクを片手で持ったまま鈴を軽く抱き返す。

「鈴……三年振りだな？」

一夏は鈴を抱き締めながら囁く。

「何が三年振りよ!? アンタ今まで何処に行ってたのよ!? 死んだと思っただけ心配したじゃない!」

「ごめん……でも、鈴も元気そうじゃないか？」

「何が元気そうよ!? アンタが死んだと思っただけ、私が何れだけ心配したのか判ってんの!」

「判らない……でも、心配掛けさせてごめん……」

「心配掛けさせてごめん!? そんなのは遅すぎるわよ……」

鈴は一夏に怒るも何処か哀しみが混じっていた。そうだろう、鈴から見れば一夏が生きていた事は信じられない程の喜びであり、三年と言う長い年月で溜めに溜めていた寂しさを全て吐き出すにも十分過ぎる程だった。

例えそれが初恋の相手だとしたら更に喜ぶ。鈴は一夏に怒りながらも笑う。

「それよりもお帰りなさい……一夏!」

鈴はニコツと笑い、それを見た一夏は微笑む。——ただいま、鈴、と。

それを聞いた鈴は再び泣き、一夏の胸に顔を埋める。彼女なりの恥ずかしさだろうが彼女は少しこのままでいたかったのだ。

彼の、男性特有の温もりと、ずっと逢えない寂しさを埋めるかのように……勿論、一夏は何も言わなかったが一夏は何もしなかった。

そして、一夏は鈴が落ち着くまで、鈴の背中を擦り続けた。

一方、日本の、東が身を隠す為に造ったラボ。そのラボのリビング的場所には勇人と止、クロエがいた。

そのリビング的场所にはテーブルやソファがあり、テレビも設けられている。そして、三人はソファに座りながら、テレビを見ていた。しかし……。

『速報です。IS委員会や政府は、渋谷で発見されたと言うISを動かしたと言う二人の青年達を捜す為に、上野や横浜、宇都宮等、関東地方に捜査を拡大するよう警察に命令し、現在、警察はその命令に従い、捜査を拡大する方針に……』

「おいおい、何か大騒ぎになってんじゃない?」

「ちっ、政府や警察はどんだけ暇だよ……!」

テレビに映っているアナウンサーの言葉に止は困惑し、勇人は舌打ちして静かに怒りを露にする。画面は変わるが画面には警官が検問所を設けているせいで交通渋滞を引き起こし、空には沢山のヘリコプターが飛んでいる。

それだけならまだしも、警官は捜査範囲を広げると言う事を政府から通され伝えられているのだ。そんな二人に、クロエは宥める。

「落ち着いて下さい。それに今は東様が何とかしてくれています」

「それは解るけどよ? 東さんが何とか出来るのか?」

二人はクロエを見やると、クロエは微笑みながら頷く。

「はい、東さんなら何とかしてくれます」

「そうなの?」

「はい、東さんはもうすぐ、世界各国にある事をしますから」

クロエは微笑む。そんなクロエに止は首を傾げ、勇人は知らんと言
う意味でテレビを見る。

刹那、勇人はテレビに映っている交通渋滞の所である車に気が付き、
瞠目した。

「あれは!?!」

勇人が驚くと、クロエと止は勇人の言葉を聞いてテレビを見るも、
テレビの画面は変わった。

「っ……くそっ!!」

勇人はテレビが切り替わった事に怒りを覚え、立ち上がるや否や、
束の所に向かう為走る。

後ろから止の呼ぶ声が聞こえたが勇人は振り向かず、束の所へと走
り続けた。

第29話

「落ち着いたか、鈴?」

数分後、一夏は鈴に訊ねる。鈴は徐々に落ち着きを取り戻しつつあるものの、微かに涙を残しているが一夏の問いに答える意味で小さく頷き、一夏を見据える。

鈴の表情は何処か吹っ切れたかのように安心している。そうだろう、鈴は一夏が幼き頃の約束を覚えていた事。死んだと思っていた初恋の人が生きていた事。

それが鈴にとって、何よりの喜びであり、彼女の心に空いた大きな穴を塞ぐのには十分だった。しかし、鈴は、ある事を一夏に訊ねる。「それよりも一夏、今まで何処に行ってたのよ? 心配したじゃない?」

「それは悪かった……でも、それは聞かないでくれ……」

一夏は表情を曇らせる。それを見た鈴は思わず「ごめん」と呟く。「嫌、良いんだ……それよりも鈴は何故、この基地に?」

「私は一応、ISの適正能力が高かったから、ここでISを使った訓練をしながら日々を過ごしているわ。勿論、ちゃんと休みの日には出掛けたり、家に帰ってるわよ?」

「そうか、それよりも鈴の両親は元気か?」

一夏の問いに鈴は瞠目し、直ぐに哀しそうに眼を逸らす。――鈴?――

一夏は鈴の様子に疑問を抱く。が、鈴は顔を上げ、一夏に笑う――それは作り笑顔だった。

「な、何でもないわ! それよりも一夏、身体に纏ってる防具みたいなものは何よ?」

鈴は一夏の身体に纏っている防具を指差し、それを指摘された一夏は戸惑う。

「これは……」

一夏は戸惑いながら言葉を探す。そうだろう、これはプレデター達の装備だ。この地球の科学以上の、嫌、それ以上の脅威ともなるのだ。

勿論、一夏は彼等の存在を知らせるつもりはない。例え目の前にいる幼馴染みである彼女にでも、口を割ってでも言えない。一夏は戸惑いながらもこう答えた。

「これは何も言えない……嫌、聞かないでくれ」

一夏は俯く。そんな一夏を見た鈴は何かを思ったのか何も言わない。

「ごめん……でも、一夏は何で中国へ来たの？ それに弾達だんに逢わなかったの？」

鈴は自分や一夏の友人達の事を教える。その友人達とは五反田弾とその妹・五反田蘭らんに、御手洗数馬ちうまの三人。

彼等は一夏の唯一と言って良い程の友人達である。一夏が辛い時に支え、良く一緒に遊んでいた。しかし、自分が三年前に突然いなくなった事に怒っているのだろうか？ ー嫌、一夏は自分が他星で修行していた三年間、彼等は何をしていたのかは判らない。

それに一夏は弾達ではなく、鈴に逢うのを選んだのにも理由があったのだが今は鈴に逢ってない事を伝える為に首を左右に振った後に言った。

「嫌、逢ってない……弾達がどうしたんだ？」

一夏は鈴に弾達の事を訊ねるも、鈴は何処かソワソワしていた。まるで疚しい事があるみたいなのを物語っている。一方、一夏が弾達に逢わなかったのには理由があった。

それは勇人からの一言から始まった。一夏は最初、弾達に逢おうとしたが勇人はそれを否定する。何故なら、勇人は一夏に。

『お前は今追われている身だ、日本は今お前や止を見つける為に血眼になって捜している……だとすれば、お前は鈴と言う女に逢いに行けーその女は中国にいるのなら、日本は海外に行つてまで捜す事はない』

勇人の言い分は正論に近かったが確かに日本が海外にまで行く事はないのと、自分達が未だに日本にいると思つているからだ。

そうなれば、鈴に逢える事が出来る中国ならば彼等の捜査の手は伸びないし、束に頼れば世界中を飛ぶ事が出来、尚且つ誰にも判らない

ように中国へと行ける。

因みに一夏は勇人と止の二人に自分達の友人を教えた為に、鈴が中国にいる事まで教えた。

それに一夏がどうやって中国へ来たのかは束のロケットであり、鈴がいる場所を特定できたのも束に頼んで住所を特定してもらい、この基地に侵入できたのもプレデターの科学を使って侵入したからだつた。

話を戻そう。一夏は鈴に訊ねるも、鈴は未だソワソワしていた。鈴は気まずそうに、一夏に、蘭から、自分達兄妹や数馬や千冬の身に起きた事を語り始める。

彼女達は知らないだろうが三年前のあの日、千冬はモンドグロツソ二連覇と言う偉業を成し遂げた代償として一夏を失った。千冬から見れば名誉よりも、たった一人の肉親である一夏を失った事が大きかったのか、千冬は心に大きな傷を負いながら帰国した。

しかし、帰国したその日、千冬は家の前に五反田兄妹や数馬がいる事に気付く。だが、弾は憤怒の形相、数馬と蘭は哀しいと怒りが混じったかのような表情を浮かべていた。

千冬は彼等に「一夏が死んだ事を伝えるがそれを聞いた弾は怒り狂い、千冬を殴ると、千冬にこう叫んだ。何故見てやらなかったんだよ!?! 何故一夏の事を心配しなかったんだよ!?!」と。

勿論、千冬は何も反論もせず、やり返しもしなかった。千冬は千冬で一夏の気持ちを蔑ろにした後悔と、一夏を失った悲しみで一杯の為、弾の言い事を聞いてはいない。

そんな弾に、数馬は弾を落ち着かせているが弾は未だ怒りで我を忘れており、落ち着くまで数分は掛かった。あの光景は今でも、弾の妹である蘭には苦い思い出だろう。

蘭は一夏に想いを寄せていた。彼女も彼女なりに一夏を失った事は辛いのだろう。嫌、蘭は一夏に想いを告げていないのと、それが一生出来ないと知って泣いていた。

勿論、その時には鈴は居なかった。鈴は親の都合で中国にいる為、その出来事を蘭に電話で教えて貰ったのである。

「あの時の蘭は泣きながら、私に教えてくれた……でも、弾達も弾達なりに後悔していたわ……」

鈴は哀しそうに俯いた後、一夏を見る。

「一夏……弾達は今でもあなたを助けてやれなかった事を悔やんでるわ……だから」

鈴は一夏の手を両手で包むように掴む。

「だから一夏お願い……弾達に逢って。弾達に逢って励まして上げて！」

鈴は一夏に懇願した。それは鈴が弾達を心配し、弾達を思つての願いだつた。一夏が生きてると知れば彼等は喜ぶだろう、と。

一方、一夏は哀しそうに瞑目した。一夏だつて彼等に逢いたかつた。嫌、今はそれは出来なかつた。

今の自分は追われている身——自分から逢いに行けば彼等に迷惑を掛け、千冬の元へと帰らされるだろう。だから今は、一夏は鈴に行動で答えた——首を振って……。

「な、何でなの？ 貴方から逢いに行けば弾達は……」

鈴が何かを言い掛けるも、一夏は手刀で鈴の首元を叩く。刹那、鈴は瞠目した後、目の前が真っ暗になると共に気を失つた。

「おっと……」

一夏は、気を失つた鈴を支える。鈴は気を失っているが数時間は気が付かないだろう。一夏はそう思いながら、鈴を横抱きし、ベッドに寝かす。

鈴を見る一夏の表情は何処か哀しかった。勿論、一夏は中国に来たのは鈴に逢いに來たのと、長時間、鈴と一緒にいるのは危険だつた。

ここは軍事基地であり自分は侵入者。見付かつたら何をされるかは判らないのと、束が乗ってきたロケットを待たせる訳にもいかないからである。

それに鈴の意識を奪つたのは、彼女がもう少しだけ此処に居てくれといひそうなのでそれを危険と感じたからだつた。

一夏はそう思いながらも、鈴に「すまない」と言い残すと、此処を出る為にケルティツクのマスクを着け、コンピューターガンレット

を操作する。

刹那、一夏は身体を透明にしてその場から消え、中国を脱出する為に束に連絡した。

そして数分後、束は衛星をハッキングし、テレビを伝えて全世界に警告した。

ISを動かしたと言う男性操縦者達は、この束さんが預かったから何もするな——何かしてきたら、全世界のISを止める、と。

これには全世界の人々は驚くも、束は一夏や止の安否を気にし、彼等がどっかの国々で実験台にされる事を恐れたのである。

それに勇人から『とある物』を見た事で検問所の解体や、自分も一夏や止が防犯カメラに映ってるかもしれない為、迂闊に外に出られないと言ったのだ。

その為、束はその事を伝え、その後、彼等の安全を約束する見返りとして彼等には、この春IS学園に通って貰う事をも約束した。

そして、一夏はラボに戻ってくると同時に、束が勇人もISを動かせる事をも教えて貰ったのは言うまでもない。

第30話

束が全世界に宣言してから一時間後。一夏、勇人、止の三人は束に呼ばれ、束が半日か一日以上居るかもしれない研究室にいた。

周りには幾つもの液晶モニターが置かれており、唯一操作出来るキーボードは三つだけ設けられている。キーボードは兎も角、液晶モニターにはIS関連の物しか映っていない。

恐らく、束は此処で日々、研究しているのだろう。普通の者なら一日も経たずに弱音を吐くだろう。嫌、束は天才であり天災であるのと、此処を造ったのは束であるのも事実だろう。

「兎に角、いつ君達にはIS学園に入学するまでの間、このラボで生活してもらおうよ？」

話を戻そう。束は三人に、これからの事を話した。三人にはISの事を勉強させ、ここでISの技術を叩き込み、ISに慣れるまでの訓練を施させようと考えていた。

勿論、三人には暫くの間、外を出る事は許されない。それは束が彼等の身を安全を考慮しての事だった。束自身、男がISを動かせるのは想定外だし、そんなのは束には関係なかっただろう。

しかし、一夏が関わっているとすれば話は別であり、一夏の知り合いだったら束は間違いなく、彼等を保護していたに違いない。

「取り敢えず、いつ君達の意見はどうかかな？　もししてくれるのなら束さんは何かをしてあげるけど……」

束は一通りの事を言った後、一夏達に訪ねる。束も束なりで一夏達の事も考える。別に一夏達に強要している訳ではないが一夏達の意見も尊重しなければならぬ。一方、一夏達は各々物思いに更けていた。

一夏はIS学園に入学する事に躊躇しているのか少し戸惑っていて、勇人は何も言わず瞑目している。

止に至っては「別に良いけど？」と言わんばかりの表情を浮かべ、両手を頭の後ろに当てながら何回も頷いていた。

すると、勇人は何かを思い出したのか、束にある事を訊ね、一夏や

止は勇人を見やる。

「束……さん？」

「何かな、はやちゃん？」

束の言葉に勇人は苦虫を噛み締めるかのような表情を浮かべるも、直ぐに問う。

「束さん、俺の願いを聞いてくれませんか？」

「何かな？ 外を出る事以外なら良いよ？」

束は首を傾げるも、勇人は首を左右に振る。

「いえ、そう言う訳じゃねえ……ただ、秋葉原に設置されている全ての防犯カメラの映像をハッキング出来ないか？」

勇人の言葉に、束は「どうしてなの？」と聞き返すが、勇人は訳を話した。

「ちよつと理由があつて言えない……勿論、タダとは言わないーあんなの言う通り、IS学園に行く事を決める」

「そう？ だったらそれは御安い御用だけ……何でなの？」

束は勇人に訊ねるが勇人は束から眼を逸らし「いえ、ちよつとな……」と呟く。一夏と止が勇人の様子に疑問を抱くも勇人は三人を交互に見て微笑む。

「嫌、ちよつと訳があつて言えませんがよろしくお願いします」

勇人は束に頭を下げる。勇人の行動に束は首を傾げ、一夏と止は互いを見やる。

一方で勇人は頭を下げている為、彼がどんな表情をしているのかは判らない。勿論、勇人が眉間に皺を寄せている事に。

「ーうまくいけば、彼を見付ける事が出来るー」。勇人は内心そう呟く。彼は、とある人物を捜していた。

勇人はその人物に怨みを抱いていた。そして、勇人はその人物が秋葉原に良く行く事を知っており、勇人が秋葉原に行きたいと言ったのも、一人で行動したいと思ったのも、その人物を殺す為だった。

しかし、その人物は秋葉原には居なかった。今日は偶々行かなかったのか、訳あつて行けなかったのかは判らないが勇人はその人物に殺意を抱いていた。

勿論、その事を一夏や止には言っていない。それは勇人自身の過去である事を……。

「取り敢えずありがとうございます。一夏」

勇人は顔を上げ、一夏を見る。

「俺と止はIS学園に行く事は決まったぜ？ お前は どうするんだ？」

勇人は一夏に訊ねる。一夏は突然訊かれた事に戸惑う。だが、止は何も言わず首を傾げている。止は止で既にIS学園に行くのは止自身も決めており、後は一夏だけがIS学園に行くか行かないかは決めていない。

それに束が男性操縦者をIS学園に行かせると言ってしまったのと、更に自分達の存在は全世界に知られている為、断る事は出来ない。

一夏は仕方なく、束に言った。『ー行きますー』と。これには束も頷くと、両手を叩く。

「取り敢えず、いつ君達が学園に行く事は決まったけど、いつ君達には暫くの間此処に居てね？ 勿論、いつ君達の身の安全は保証するから……ね？」

束の言葉に三人は頷くと、束はある事に気付く。

「それよりも三人にお願いがあるんだけど……いつ君達が右腕に着けている……」

刹那、三人は「それは駄目だ」と断る。何故なら、束は一夏達の右腕に着けているコンピューターガンレットに興味を持っていた。

そのコンピューターガンレットはプレデター達が造った物である。その為、束はそれが何かは知らなかったが興味を持ち、調べようとした。

無論、一夏達はそれを頑なに拒んだものの、束は未だ諦めきれないでいた。

その為、束は未だ一夏達にコンピューターガンレットを差し出すように懇願するも一夏達は断り続ける。それはクロエが来るまで十分も続いたの言うまでもない。

「全く、束さんには感謝すると言うよりも呆れるな……」

一夏の一言で止はウンウンと頷き、勇人に至ってはクロエから借りたであろう本を読んでいた為、一夏の言ってる事に耳を傾けてはいない。

因みに彼等がいる所は、IS学園に行くまでの間だけ、三人で暮らす事になった部屋にいた。その部屋は少し広く、簡易ベッドはないものの、座布団が三つあり、テレビは一応置いてあった。

部屋時代は汚くはないが空気の取り換え等も必要である為、窓がない代わりに換気扇が設けられていた。

それにいきなりの事でもあり、部屋自体は用意出来るものの、色々な物は後日用意するしかなかった。

それに、彼等は束に色々な事を教えてもらう代わりに、クロエに料理や家事や裁縫を教えたりする物だった。

勿論、コンピューターガントレットの事は……無理である為、束が不貞腐れたのは言うまでもない。

「まっ、それは一夏の言い分は正しいし。何よりクロエちゃんも束さんの事を思ってるみたいだし、それで良いんじゃない？」

一夏の言い分に止は笑い、それを聞いた一夏は苦笑いし、勇人は本を読むのに集中している為、やはり耳を傾けてはいない。

因みに一夏は部屋で胡座を掻いており、止は寝転がり、勇人は壁に凭れかかりながら座って本を読んでいる。

三人が三人、各々の時間を過ごす中、止が唐突にこんな事を口にする。――束さんが俺達の為にISを造ってくるって言ったけど、名前はどうするの？　――と。

刹那、一夏と勇人は止を見やる。一夏は瞠目し、勇人はジト目で止を見据える。何故なら、一夏達は数分前、この部屋へと案内される前に、束が彼等に専用機を造ってあげると言い出す。

これには彼等も驚くも、束は一夏へのせめての罪滅ぼしと、勇人と止は一夏の友人である為と言う理由だった。

その為、束は三人にはどんな専用機が良いのかを訊かれたものの、彼等は接近戦や遠距離戦の両方を得意とする物が良いと答えたが、肝心の専用機の名前は自分達が付けると言った為、束はそれを了承した。

勿論、束が一夏達からコンピューターガントレットの事を差し出して貰おうとしたが結局は無理だったのは別の話である。

「一夏や勇人は名前は決めたの？」

止の言葉に二人は頷く。勿論、止自身も既に名前を決めている。彼等はその事を仲間には言わなかった。

何故なら、彼等自身も互いの親友達が専用機に何の名前つけるのかは知っている為に。話を戻そう、止の言葉に勇人は口を開く。

「それよりも、もう寝ようぜ？ 明日から束さん自ら指導する訓練があるからな？」

勇人はそう言いながら本を閉じる。勇人の言葉に一夏は頷いた。

「確かにそうだな……それに束さんが専用機を造ってくれるだけじゃなく企業をも起こしたからな……」

「そうだよね……それにしても、何であんな長い名前の企業にしたんだらう？」

止は束の言葉に疑問を抱く。それは束が起こした企業であり、その名前がウェイランド・ユタニ社と言う企業だった。

「そんなのは俺は知らない……でも、勇人の言う通り、もう寝ようー寝不足だと訓練には従っていけないからな……」

一夏はそう言うのと、座布団を二つ折りにして、それを枕代わりにして寝転がった。勇人は一夏の言葉に頷き、本を置くと、一夏と同じように座布団を枕代わりにした。

止は最初から寝転がっていた為が文句言っていた。勿論、止は渋々納得し寝始める。

彼等はその日の一日を終えた。しかし、明日から束自ら指導する訓練があった。

そして、その訓練は地獄であったが彼等三人はプレデター達に鍛えられた為に何とか従っていた。

そして、時間は早いものなのか、彼等は束の課した訓練を全て終え、IS学園へと入学した。

第四章、IS学園入学（後編） 第31話

（ちっ……周りはそんなに男性操縦者が珍しいのか？）

一夏は今、教室の一番前の席にいた。両側には勇人と止も席に着いていたが三人共、服は違っていた。ここはIS学園であると同時に高校に近い学校でもある為、制服を着ている。

制服は此処がIS学園である為なのか、白いのが特徴的な制服だった。それに一夏達を含めた此処にいる全員が全員同じ制服である物の、デザインが微妙に違う。

しかし、問題はそこではない。一夏、勇人、止の三人以外のこの教室にいる生徒達は全員、女子である。何故なら。ISは女性にしか扱えない。

その為、IS学園は女子校であると同時に男子達から見れば女の園。ハーレムを築きたい男達にとっては喉から手が出る程入りたい所であるだろうが一夏達はそんな事を考えてはいない。

一夏達はISを動かしたと同時に男性達の希望。彼等がISを動かしたとなれば男女平等社会を築く事が出来るのと、一夏達自身が男性達の期待を背負っている。

だが、一夏達はそんな事をも考えてはいない。彼等は東から身の安全を守る為にIS学園へと来たのだ。ここなら他所の国から妨害や拉致される危険もない。

それだけではなく、一夏達が学園にいる限り、外の者達は手も足も出ないのだ。たとえ出したとしても、一夏達に返り討ちに遭うか、この学園へと侵入したエンフォーサーに殺されるのがオチ。

言わば、IS学園事体が要塞であると同時に、外からの干渉を受け付けない。話を戻そう。一夏は辺りを窺うも、ある人物と目が合い、その人物は頬を紅潮しながら、一夏から目を逸らす。

その女子は美しい黒い長髪をリボンでポニーテールにして纏め、黒い瞳や美しい顔立ちであるが何処か凜としている。スリムな体格で

あり胸もある。

だが、一夏はその女子を見て舌打ちした。――何故、あいつがこの学園に？　――一夏は内心そう思っていた。

一夏はあの女子が嫌いだった。――嫌いと言うよりも、彼女自身に良い思い出等なかった。彼女のせいで自分は辛い思いをしていた。

それなのに何故、彼女は、この学園に居るのだろうか？　――恐らく彼女は束の御内だからだろう。一夏はそう考えると胸糞悪くなり、自身でも判るように機嫌が悪くなる。

一夏だけではない、一夏の挟むように両側の席にいる止や勇人も各々の時間を過ごしていた。止は呑気に寝ており、勇人は女子達からの視線を気にする事もなく本を読んでいる。

刹那、この教室を出入り出来る扉が自動で開き、止を除いた全ての生徒が一斉に扉の方を見やると、一人の女性が教室へと入ってくる。

その女性は二十代前半で幼さが残る顔立ちだが黄緑色のショートカットに、翡翠の瞳に眼鏡を掛けている。

服は黄色を基準としたドレスに近い服を来ていて、茶色いブーツを履いている。服装は兎も角、見た目が問題だった。

誰から見ても中学生にしか見えない、と。勿論、本人にはその気はないがその女性はこのクラスにいる生徒を任された教師だからだ。

女性は黒板前にある教卓の前に立つと、踵を返し、黒板の近くにあるチョークを手に取り、何かを書き始めた。

それは直ぐに終わったが黒板には白い文字でこう書かれていた。――『山田 真耶』と。恐らくその女性の名前だろうが女性は再び踵を返し、クラス中の生徒達を見て微笑む。

「今日からこのクラスで貴女達に勉学を執る事になった山田真耶です」

その女教師・真耶はクラス中の生徒達に自己紹介した。しかし、一夏達は愚か、クラスの女子達の大半は無反応だった。

彼女達は真耶よりも一夏達を見ている。一方、少数は真耶の自己紹介に軽く拍手しているだけであった。これには真耶も泣きそうになるが気を取り直し、言葉を続ける。

「そ、それよりもクラスの皆さんも自己紹介して下さい！ 勿論、この教卓の前に立って、それとあいうえお順でお願いします！」

真耶の言葉に一夏はクラスの女子は頷く。すると、一人の女子が立ち上がり、教卓の前に立つと、自分の胸に手を当てながら自分の名を言う。その女子は赤髪掛かった紫色のショートカットに琥珀色の瞳が特徴的な少女だった。

「相川清香あいかわきよかです。得意な事は……」

女子の一人が自己紹介していると、一夏は何か気が付いたのか、隣にいる止の肩を揺らす。

「止、止」

一夏は止を起こす。ーうあん？ ー。刹那、止は惚けたような声を上げながら起きる。止は未だ目がトロンとしていたが止は一夏を見る。

「何っ、一夏？」

「何じゃないだろ……今は」

「織斑君、織斑君？」

止の問いに呆れたのか、一夏は今の状況を言おうとした時、真耶が一夏に訊ねる。

「何ですか？」

「次は織斑君の番ですよ？」

「俺の番？」

一夏の言葉に真耶は頷き、一夏は周りを見渡す。止と勇人以外のクラスの女子は一夏を見ていた。それは一夏の番である事を意味し、自己紹介は早く終わるものである事を意味していた。

「……解りました」

一夏はそう思いながらも内心溜め息を吐く。一夏は目立つのは嫌いだった。しかし、自己紹介となればそれをやるしかないし、クラスの女子達に名前を覚えてもらわなきゃならないのだ。

勿論、一夏自身はクラスに馴染むつもりない。だが、自己紹介だけはちゃんとやっておこう、と。

一夏は席から立ち上がり、教卓の前に立つ。勇人を除いた、真耶や

止、クラスの女子達の視線が自分へと向けられていた。

「つたく……一夏、織斑一夏です……趣味は家事全般、料理に特訓……好きな事は無い。嫌いなのは権力を振りかざし威張る女……将来の夢は……嫌、ない」

一夏は一通りの説明を終えた。刹那、一夏は近くから気配を感じたと同時に何か頭上目掛けて振り下ろされるのに気付く、素早く手刀で弾き返し、その何かは宙を舞い、床に落ちた。

そして、その何かは黒い出席簿だった。それに、周りは一瞬の出来事に何が遭ったのかは理解出来ないでいた。嫌、勇人は本を読み続けている為、一連の出来事を気にはしていない。

「……貴様……クソ女が……!」

一方、一夏は目の前にいる女性を睨む。その女性は二十代前半で整った顔立ち黒い瞳、美しく長い髪を一つに纏めるように束ねていた。

華麗な体に女性用スーツを身に纏っている。だが、その女性は一夏を見て驚いていた。

その表情は死んだと思っていた御内が生きていた事に驚きを隠せない事だった。

何故なら、一夏達の存在は今日まで明かされなかったのだ。それは束の計らいによる物だった。

それに、束は彼等の入学手続き等を色々済ませ、その反面彼等がウェイランド・ユタニ社の専属パイロットである事を赤してはいない。

話を戻そう。その女性は目の前にいる生徒・一夏を寂しそうに見詰めるも、一夏は憤怒の形相で睨むと、舌打ちして席へと戻ろとした。

「……!」

女性は一夏の肩を掴もうとした。刹那、一夏は女性の手を弾く。

「……!?!」

一夏の行動に女性は驚愕した。その女性だけではない、止や真耶、クラス中の女生徒達も驚いていた。何故なら彼が、一夏が教師に暴力を振ったも同然の行為に愕然としていたのだ。

勿論、一夏は周りの視線に怯む事もなく、勇人は呑気に本を読んでいた為、気にしてもいない。

それだけではない、一夏は席に戻り、その女性を睨む。

一夏の瞳には憎悪が宿っていた。それは一夏の一生消える事もない物だった。しかし、そんな一夏に勇人は視線を一夏に向けた後、「フン」と軽く言った後、再び本を読み始める。

一方、そんな女性に真耶が声を掛ける。

「どうしましたか織斑先生？」

女性は、一夏と同じ名字を持つ女性は真耶に訊ねられ、女性は我に返り、真耶を見て首を左右に振った。

「嫌、大丈夫だ……それよりも会議で遅れてしまったてな、済まない」

「い、いえ……私は教師としての仕事を全うしただけですから」

真耶がそう言うと、女性は教卓の前に立ち、表情を険しくすると口を開く。

「今日からこのクラスに勉学を執る事になった織斑千冬ちふゆだ！ 私の質問には『ハイ』か『イエス』かで答えろ！ 解らない事があつた時は解るまで教えてやるからな！」

千冬はクラス中の生徒達に自己紹介した。一方、クラス中の生徒達は何故かソワソワしていた。

そうだろうーさっきの事を見たら何も言えなくなるし、嫌な予感しかしないからだ。しかし、一夏達男子は違った。

止は軽く拍手し、勇人は未だ本を読んでいる。そして、一夏は千冬を睨み続けた。

そして、残りの自己紹介は何事もなく終わったがこの学園で色んな事件が起きるのを、誰も知らず、知る由もない。

第32話

「うーくん、やっとゆっくり出来るく」

「ゆっくり出来るって……お前さつきまで寝ていただろうが？」

クラスの軽い自己紹介と、一夏が千冬と再会してから数十分後、クラスの者達は授業が始まるまでの短い休み時間の間、各々の時間を過ごしていた。

軽い自己紹介だけで足らず、親睦を深めようと近くの生徒に声を掛ける者、一人の時間を過ごしたいのか読書したり、寝たりしている者がいた。

しかし、それは極僅かな人にしか限られていなかった。大半は一夏、勇人、止の三人の男子生徒を見ていた。

興味本意で見ている者達や、彼等がイケメンなのか頬を紅くしている者達に、女尊男卑主義者であるのか彼等を睨む者達に別れていた。

それだけではない——教室の外には別クラスの生徒や上級生で溢れ返っている。

勿論、三人はそんな者達の各々の思惑が籠った視線にたじろいではない。彼等もまた、短い休み時間を普通に過ごそうとしていた。

彼等だつて健全な学生だ。大半の時間を勉強する為に過ごす中、極僅かしかない休み時間を有意義に過ごしたいのだ。

止は重苦しい事から解放されたのが嬉しかったのか背伸びをし、一夏はそんな止に微笑み、勇人は本を読み終えたのか本を閉じ、ほくそ笑えんでいた。

そんな光景を周りが見れば男子生徒達の何気無い会話に見えるだろう——だが、彼等は地獄に近い死地を潜り抜いてきた猛者達である事に気付いていない。

「それよりも一夏、あん時殺気立っていたけど、大丈夫なの？」

止が唐突に一夏に訊ね、一夏は目を見開くと同時に直ぐに眉間に皺を寄せ、舌打ちし、両手を拳に変え、力を入れる。

「どつたの？」

一夏の様子に止は再び訊ね、勇人は無言で瞑目した。——ちよつと

良いか？　――刹那、一人の女子生徒が三人に声を掛けてきて、勇人は目を開け視線を声にした方を、止は声が出た方へと、一夏は憤怒の形相を浮かべながら声が出た方を見る。

そこには、一人の女子生徒が腕を組みながら立っていた。その女子生徒はさつきから一夏を見ていた女子生徒であり、今も一夏を見ている。

しかし、その女子生徒は一夏の表情に少し驚いていた。

「な、何だその顔は……幼馴染みの私に何故そんな顔を向ける!？」

その女子生徒は一夏の顔を見て怒る。そんな女子生徒の言動に、一部を除いた生徒全員が肩を竦める。

勿論、止は怯むだけであり、勇人は無言で瞑目し、一夏は歯軋りする。

一夏はその女子を睨んでいた。その女子も千冬同様嫌いしていた。彼女のお陰で自分が何れ程酷い目に遭ったのかを、彼女は解っていない。

一夏のその女子を睨んだ後、再び舌打ちすると、その女子から目を逸らす。

「おい、一……」

「一夏君!!」

その女子が一夏に怒りを覚え訊ねようとした刹那、別の人物の叫び声が一夏達やその女子、他の生徒達が声が出た方を見る。

そこは教室を出入り出来る扉だった。しかし、一夏と止は叫んだ人の主をよく知っていたのか瞳目する。

その女子は空のようかつ清楚な水色の長い髪に紅い瞳。この学園の生徒なのか白い制服を身に付けており、上級生なのかリボンの色が違う。

その女子生徒は一夏や止とは顔見知りだった――嫌、その女子生徒が一夏に逢いたかった者と言い換えればいいだろう。

「や、更識?」

一夏は驚きを隠せない。その女子生徒は、上級生は楯無だった。何故なら彼女は、この学園の生徒であるからだ。

一方、楯無はそんな一夏を哀しい眼で見つめると、一夏に歩み寄り、一夏が座っている席の横に立つ。

一夏は座っている為か楯無に見下ろされている形で見詰められていたーが、楯無の瞳は揺らいでいた。そんな楯無に一夏は訊ねようとした。

「お……」

刹那、楯無は下唇を噛み締めながら、一夏に抱き着く。

「お、おい!?!」

楯無の突然の行動に一夏は驚き、止は顔を紅くし、勇人は瞠目し、他のクラスの女子生徒達は顔を驚き直ぐに顔を紅くしたーある一人を除いては……。

「お、おい楯無!?! な、何をするんだよ!?!」

一夏は楯無の突然の行動に戸惑うも、楯無は両腕を一夏の背中に回し、顔を一夏の肩口に埋め、そして、こう言った。

ーやつと逢えたー。楯無は小さな声で一夏に呟いた。それを聞いた一夏は眼を見開くと同時に、肩口が濡れている事に気付く。

楯無が泣いていたのだ。それは楯無が望んでいた事だった。あの時、一夏は自分達姉妹を助けた後、何処かへと消えてしまった。

勿論、楯無自身も何もしていない訳ではない。楯無も一夏を捜していた。だが、見付からなかったー彼等は束に保護されていたのと、束が彼等の存在や情報を世間に教えていなかったからだ。

嫌、楯無は今、一夏と再会出来た為、そんな事は関係ないだろう。楯無は一夏との再会を喜んでいるのか少し笑っている。嬉し涙だった。

「一夏君……一夏君……!」

楯無は一夏の背中に回している両腕に力を入れながら一夏の名を呟く。一方、一夏は別の意味で驚いている中、周りも楯無の行動に一部の女子は顔を紅くしている。

「貴様、何時まで一夏に抱き着いているのだ!!」

そんな中、最初に一夏に声を掛けてきた女子生徒が楯無に怒りを覚え、楯無を殴るとし、手を上げる。

ーっ!?! ーその女子生徒の行動に一夏は下唇を噛み締めなが

ら、楯無を守る為に抱き締める。刹那、何者かがその女子生徒の手首を掴み、一夏とその女子生徒はその何者かを見やる。

手首を掴んだのは勇人だった。勇人はその女子生徒に呆れているのか眼を細めている。

「止せ、篠しののほノ之のほうき 箒」

「何だ貴様は!？」

「勇人はその女子生徒を箒と言ひ、箒は勇人を睨みながら、手首を掴んできた勇人の手を振りほどこうとした。」

一方で、勇人は箒の手首を掴む手に力を入れていた。その為、箒がどんなに振りほどこうとしても、勇人には敵わない。

「放せ、このお!!」

箒はもう片方の手で勇人を殴ろうとし、手を拳に変え、勇人目掛けて殴る。刹那、勇人は箒の拳を手で包むように防いだ。

「ーぐっ!？」 ー。箒は勇人の行動に歯を食い縛る。

一方、勇人は箒の拳を包むように掴んでいる手に力を入れ、五本の指を箒の手の甲に食い込ませる。

「ああーっ!!」

箒の悲痛の叫び声がクラス内に木霊き、それを聴いたクラス内や廊下にいる女子生徒が「ひっ!？」と恐怖する。

が、勇人は箒の手首や拳を掴んでいる両手に力を入れている為、箒の手首を放す事や、箒から離れる事はしない。

それに、箒を見る勇人の表情は般若のように怒りが籠っており、二つの瞳には別の意味での怒りが宿っている。

「ー俺の仲間に出さず、無言で箒を睨み付ける。その事を口に出さず、無言で箒を睨み付ける。」

箒は箒で勇人の睨みの籠った視線にたじろぐよりも、手の甲に激痛から逃れたいが為に早く解放されたいが為に身体を激しく動かす。

それでも、勇人は掴んでいる両手を一向に離す気配はない。そんな勇人に止は箒を助けるよりも勇人を止める形で席から立ち上がろうとした。

「ー止せ、勇人!! ー。一夏が勇人に対し叫び、それを聞いた勇

人と止やクラス内や扉近くの廊下にいる女子生徒達は一斉に一夏を見やる。

一夏は箒から守る形で楯無を抱き締め続けていたが一夏はすこし悲しそうに勇人を見つめると、こう言った。

「――止せ、そんな事をして何も得はない――と。勿論、勇人は無言で一夏を見据え、一夏も勇人を見据える。二人の間には重苦しい空気が流れるがそれも直ぐに終わる形で消え、勇人は舌打ちした後、箒の両手を乱暴に放した。

箒はやつと解放されたにも拘わらず、手の甲に激痛が未だ走っているのか手を押さえながら顔を歪めながら膝を突くと、勇人を睨む。

勇人は勇人で箒を見下す形で無言で見据えていた。しかし、それだけでも威圧をも感じさせる。

「これは何の騒ぎだ!？」

刹那、誰かが呼んだのか千冬と真耶が慌ただしく教室へと戻って来た。

「これは何の騒ぎだ? それに」

「篠ノ之さん!？」

真耶は箒の元へと駆け寄る。千冬は千冬で彼等の身に何が遭った事を訊ねようとした。しかし、一夏は千冬を見て舌打ちすると。

「ちっ……仕方ねえ」

一夏は楯無を横抱き――つまり、お姫様抱っこした。一夏の行動やその光景を見た女子生徒達は顔を紅くするも、一夏は視線にたじろぐ事はなかった。

そして、一夏は楯無を連れて教室を出ようとした。

「待て織……」

千冬は一夏を呼び止めとした。だが、一夏は千冬をギロリと睨む。

「っ!？」

千冬は一夏の睨みに身体を震わす。そして、一夏は千冬を見て舌打ちすると、楯無を横抱きしながら教室を出ると、上級生にある事を訊ね、それを教えて貰うと同時に軽く感謝の言葉を述べる。

そして、チャイムはなったが一夏は遅刻と言う形で楯無を連れて、

ある場所へと向かった。

第33話

「まったく……」

一夏は今、楯無をベッドの上に優しく寝かせ、自身は近くの椅子に座る。そこは保健室であり、一夏は上級生から保健室の場所を教えてもらい、保健室の中にいた。

保健室と言うだけであって、ベッドだけでなく、沢山の薬品等が納められている棚に体重計や身長計等が設けられている。それに校医は居ない。

恐らく、用事があるのだろう。

それに何故、一夏は保健室を捜していたのかと言うと、一夏は楯無を落ち着かせる為だった。本来なら楯無が所属しているクラスまで行けば良かったが、上級生から何を言われるかは判らないのと変な噂を流されたら困るからだ。

無論、それは無理に等しい。今頃、廊下にいた他のクラスや上級生のクラスが元凶と言う形で噂が流れているだろう。

「全く、ろくでもない噂が流れるのは嫌だぜ」

一夏は溜め息を吐くと、楯無を見る。楯無は一夏から背を向ける形で横向けになっていた。

勿論、楯無自身、一夏にまた助けてもらった意味で、一夏があんな行動をしたのを覚えていたのか、頬を紅くしている。

「ところで更識？ あんた、この学校の生徒だったのか？」

一夏の問いに、楯無は小さく頷き、一夏は溜め息を吐く。――全く、ここは色んな奴と再会するな――。一夏は内心そう呟いた。楯無と言い、嫌いな千冬や箒と言い、ここは色んな人達と再会する。

まあ、学校と言う物は小中から一緒の者が高校でも一緒である事もあるし、中学では別々になった者達が高校で再会する事も珍しくない。しかし、一夏から見れば嫌いな千冬や箒と再会した上、しかもクラスも一緒なのは苦痛その物でしかない。

一夏はそう思ってしまったのか、舌打ちし、俯く。――ねえ、一夏君？――すると、楯無が口を開き、一夏は顔を上げる。

楯無は未だ一夏に背を向ける形で横向けになっていたが、一夏を見るように身体の向きを変え、一夏を見据える。

一夏を見る楯無の紅い瞳は哀しそうだった。まるで、目の前にいる者への罪悪感と後悔をも感じているような目だった。

「……何故そんな目をする？　……。しかし、一夏からは何も感じられず、一夏は首を傾げる。勿論、楯無は不意に眩く。

「……ごめんね……。楯無は一夏にそう言い、それを聞いた一夏は目を見開くも、楯無はベッドに座る形で上半身だけを起こしながら、一夏から目を逸らし俯き、言葉を続ける。

「ごめんなさい……」

「何がだよ？」

一夏は何も解らないでいた。それでも楯無は言葉を続ける。

「あの時、貴方に……人殺しをさせてしまった事……を」

「ああ……あれか」

楯無の言葉を理解したのか一夏は腕を組む。あの時とは簪誘拐事件での出来事。あれは狂言誘拐だったが本当の誘拐となってしまうた事件である。

あの事件は更識の裏切り者が女性議員へと情報を流す形で密告した物だ。そこまでなら未だ良いだろう。だが、一夏はあの時、五人の人間を殺したのだ。

三人人はリストブレードで殺し、一人はネットランチャーで放ったネットに絡まり数分後に死亡し、後の一人はレーザーディスクで首を斬り落としたのだ。

何れも一夏が殺ったが一夏は人を殺した事に後悔していない。それに一夏は殺人だけでなく窃盗や不法侵入をしている。無論、楯無はそんな事を知らない。

「何で……何であの時、私や簪ちゃんの前から姿を消したの？」

楯無はそう言いながら、一夏の胸ぐらを掴み、言葉を続ける。

「それに貴方なの？　貴方が彼等を、何であんな事を、生皮を剥がすような事をしたのよ!？」

楯無は一夏の胸ぐらを掴みながら、一夏に叫んだ。

一方、一夏は楯無の言葉に瞠目し、直ぐに瞑目した。だが、一夏は楯無の問いに答えなかった。嫌、正確には答える事は出来なかった。

更識姉妹の前から姿を消した事は答える事は出来るが、生皮の件は答える事は出来ない。あれはエンフォーサーの仕業である。

それに、エンフォーサーは、エルダーからとある使命を任せられ、一夏達の前に現れた、後の尻拭いをしてくれた。それに、エンフォーサー自身も何も語ろうとはしない。

彼が何の目的で地球に来たのか、エルダーから何の命令を下されたのかは、一夏は知らない。

「答えてよ……あれは貴方がやったの？ ……ねえ!？」

楯無は一夏に詰め寄る。目には薄っすらだが涙を浮かべている。嘘であつて欲しい――楯無は一夏にそう願っていた。彼の口から答えて欲しかったのだ。

そして、一夏は溜め息を吐き、眼を開け、こう言った。

「あれは俺ではない……それしか言えない」

「えっ……ほ、本当に?」

楯無は再び一夏に詰め寄る。その距離は鼻と鼻と振れる距離だった。普通の男子なら頬を紅くするが、一夏は楯無に恋愛感情を抱いてはいない為、何も感じてはいない。

「ああ、本当だ……それだけは信じてくれ」

一夏はそう言った後、軽く俯く。本当ならエンフォーサーの存在を教えたかったがそれは出来なかった。言えば、彼等の恩義を無駄にする行為に等しい。

その為、一夏は彼等の存在を言わなかった。しかし、楯無には何て言えば良いのかも解らない。刹那、一夏は、ある事を思い出し、楯無に訊ねる。

「そう言えば、俺があの後連絡したけど、その後はどうなったんだ?」

一夏の言葉に楯無は「っ!？」と驚き、直ぐに悲しそうに俯き、肩を震わせる。――楯無?――。一夏は楯無の様子がおかしい事に疑問を抱く。刹那、楯無は再び一夏に抱き着く。

「お、おい!？」

一夏は楯無の行動に再び驚く。それに、楯無の行動は最早、三回目だった。一回目は簪誘拐事件の時であり、二回目は自分がいたクラスでの時である。そして三回目は、この保健室で起きた。

『二度ある事は三度ある』と言う言葉があるがまさにそれだった。自分は三度も楯無に抱き着かれた。紛れもない事実だが一夏から見れば面倒臭いと思っていた。

一夏はそう思いながらも、辺りを見渡す。保健室には誰もいない。校医は戻る気配はない。一夏はホツと胸を撫で下ろす。

誰がか、この光景を見たら誤解されるからだ。一夏は変な噂が流れるのは嫌だが今は楯無を見る。楯無は泣いてはいないが未だ身体を震わせている。

「おいどうしたんだよ?」

一夏は楯無に訊ねるも、楯無は未だ身体を震わせ続けている。何度訊ねても同じだった。

(何か遭ったのか?)

すると、一夏は何かに気が付いたのか、ある事を訊ねようとした。刹那、楯無は口を開いた。

「ー怖かった、辛かったー」。楯無は一夏に囁く。その意味は楯無自身が身内の件で誰を信じれば良いのかが判らないでいた。

身内や従者や親友は少し信用しているものの、完全に誰かを信用した訳ではない。楯無が、彼女が誰に助けを求めれば良いのかが判らないでいる。何故なら、彼女は自分が更識の当主であると同時に誰かに弱い所を見せたくない、と言う、彼女自身の我が儘もあった。

にも関わらず、楯無は一夏に自分の弱さを見せている。単に一夏に甘えている訳ではないーあの時、楯無が一夏が人を殺したのと同時に一夏への後悔もあってか、一夏に抱き着くと言う行動を起こしてしまったのだ。

あの時の楯無は一夏に甘えていた。男達に犯されると言う恐怖と、あの誘拐は本当だったと言えその前に身内達の狂言誘拐だった事。

そして、一夏を止める為と言え、一夏を撃ってしまった事にも後悔していた。

楯無はそれを思い出したのか、恐怖で震え、それに目の前には唯一自分が甘えてしまった一夏がいた為、身体を震えを止まらせる為に一夏に抱き着いたのだ。

そんな楯無に一夏は未だ戸惑いを隠せないでいて、楯無をどうすれば良いのかも判らないでいた。

「仕方ねえ……」

一夏は咄嗟の判断とも言うべき行動を起こすかのように、楯無の背中に手を回し、楯無の頭を撫でる。その行動は一夏なりの楯無を宥める為でもあった。

本当なら、あの後の事を聞こうとしたが楯無がこんな状態では何も聞く事は出来ない。その為、一夏は本意ではないが楯無を落ち着かせる為に楯無を抱き締めている。刹那、顔を楯無の頭に近付ける。

良い匂いがしたー！勿論、一夏は別に狙っていた訳ではない。そして、楯無は身体の震えを止める為、一夏は楯無が落ち着く為、二人は抱き合っていた。

勿論、保健室には二人以外誰もいない。今は、色んな意味での二人だけの時間を過ごしていた。

ー！ああ……これは完全に一時間目の授業には出られないなー！。一夏は心の中でそう呟きながらも、千冬や箒の顔を思い出したのか、しかめっ面になる。

「え……ええええ……二人はそんな関係なの……？」

しかし二人は、保健室の扉の隙間から、自分達が抱き合っているのを、とある人物に見られている事を知らなかった……訳ではなかった。

「誰だ!？」

刹那、一夏は保健室の扉の外から気配を感じ、扉を見るや否や、そう叫んだ。

第34話

「誰だ!?」　「誰だ!?」　一夏の叫び声が保健室内に木霊する。そんなに一夏に楯無は肩を竦い、一夏を見上げると、一夏は鋭い目付きで保健室を出入り出来る扉を見据えていた。

一方、一夏は保健室の扉を見据え続ける。誰かいる――彼、一夏は人の気配に気付いたのだ。

それは今さっきだった。扉の外にいる誰かがいるのは事実だ。二人は気付いていないが扉の外にいる誰かが二人が一部始終を、二人が抱き合っている所までを目撃しているのも事実だった。

刹那、保健室の扉が開き、そこから一人の女子生徒が保健室へと踏み入れる。その女子生徒は楯無とは同級生なのかりボンの色は同じで、

長い茶色い髪のサイドテールに蒼い瞳に眼鏡を掛けている。身体はスリムな方だが、何処かぎこちない笑いを浮かべている。

「誰だあんたは?」

一夏はその女子生徒を睨みながら訊ねると、その女子生徒は未だぎこちない笑いを浮かべていた。すると、楯無はその女子生徒を見るや否や瞳目した。

「か、かつちゃん!?」　「か、かつちゃん!?」　楯無は驚きながら、その女子生徒の名を叫び、一夏は楯無を見る。

「かつちゃん?」

一夏は彼女の事を楯無に訊くと、楯無は少し顔を紅くしながら答えた。

「か、彼女はま、まゆずみ 薫子かおるこ……私と同じクラスで……そ、そのお……」　楯無は頬を赤らめながら人差し指と人差し指をチョンチョンと当てながら気まずそうに俯く。その仕草はとても可愛い。

だが、一夏はそんな楯無の仕草にも頬を赤らめもせず、何も感じない。一夏は薫子と言う女子生徒が何者かを知りたがっていた。

「じ、実は彼女は……新聞部の副部長なの」

「新聞部の副部長?」

楯無の言葉に一夏は眉間に皺を寄せ、薫子を見ると、薫子はニツコりと笑っていた。その笑顔は何処か悪意を感じるも、一夏は再び楯無を見る。

楯無は楯無で何処か恥ずかしそうに俯いていた。そして、一夏は楯無と薫子を何度も交互に見る。そして、一夏は自分の状況に気付いた。

自分は楯無を抱き締めているーそれはつまり、薫子から、新聞部の副部長から見れば格好のネタでもあり、色々と誤解を招く危険もあった。

そうなれば、自分は……。一夏は表情を険しくしながら、薫子に。「違う!!!」

一夏は薫子に叫んだ。勿論、それは言い訳にもならないだろう。薫子は新聞部の副部長であると共に記者であるから……。

「それにしても、二人はそう言う関係だと思っただけどなく」

数分後、一夏と楯無、薫子の三人は保健室の中で軽い談話をしていた。その前に薫子は少し残念そうな表情を浮かべながら俯いていた。

そうだろう、一夏と楯無が抱き合っていたら誰だつて付き合つてると思う上に、ここは保健室と言う格好のネタだ。

新聞部から見れば今週の特集にもなれるし、何より恋愛関連ともなれば女子は喜ぶからだ。

しかし、それが違つとなれば大打撃であると同時に特集にも穴が空くのをお話っていた。

そんな薫子に一夏は腕を組みながら「フーン！」と瞑目し、楯無は薫子に「ごめんね」と謝る。

「それよりも、かつちゃんは何で保健室に来たの?」

楯無は薫子にその事を訊ねると、薫子は我に返る。

「ああ、そうそう! 先生がたつちゃんが教室に戻って来てないのを心配していたから、私にたつちゃんを捜して来て欲しいって言われた

の

「そうなんだ……ごめん」

「別に良いわよー本来なら布のほとけ仏先輩の役割だけど、先輩も先輩でたっちゃんのの事になると忙しいからね」

「悪かったわね……」

楯無はジト目で薫子を睨む。一方、一夏は二人の会話に溜め息を吐き、腕を組むのをやめ、立ち上がる。

「一夏君？」

楯無と薫子は一夏を見やるも、一夏は二人を交互に見る。

「俺の役目は終わった……それに、アンタらのガールズトークに巻き込まれるつもりもない」

一夏は踵を返し、保健室を出ようとした。刹那、楯無は一夏の手首を掴み、一夏は楯無を見る。

楯無は瞳を揺らがしながら頬を赤くしている。行かないで、もう少しだけ一緒に居て、と、一夏にそう教えていた。

しかし、一夏は楯無の瞳に何も感じない。そんな楯無に一夏は何もいわない。

「え……ええつゝ」

薫子は二人の様子に内心声を上げる。一夏は一夏で何も言わない一方で、楯無は一夏を見つめている。その光景は、何処かの国の姫君が、名を名乗らない漆黒の騎士に恋をしているような光景にも思えた。

勿論、そんな軽い物ではない。二人の場合は、楯無が由緒ある家系の長女として生まれ、一夏はISが出てくる前は一般的な家庭の長男として生まれた。

それ故、彼等を引き合わせたのは楯無はISが、一夏は居場所のない自分を助け、鍛えてくれたケルティックが、彼等二人を引き合わせたのだ。

それは運命とも言うのだろうか、それとも二人が結ばれる運命をも意味しているのだろうか。それは誰にも判らない。

嫌、一つだけ判った事がある。それは一夏と楯無の二人が、自分達

の身に起きた出来事と言う名の運命に翻弄されたに過ぎない。

話を戻そう。一夏と楯無は互いを見ていたが一夏は楯無の手を振り解く。――あっ………。楯無の残念そうな声が微かに響くも、一夏は保健室を出ようとした。

「まさか二人が付き合ってたなんてね〜」

刹那、薫子が唐突に変な事を言い、一夏と楯無は薫子を見やると薫子はうつすらと笑っていた。悪意その物を感じるが薫子は楯無を見て軽くウインクしながら口パクする。

彼の事を聞きたいんだでしょ？ 薫子は楯無にそう言っていた。勿論、楯無は薫子が何を言ってるのかは理解出来た。

だが、一夏は身を翻す。

「何のつもりだ？」

「いえ……たっちゃんの気持ちを踏みにじるような事をしたくないで欲しいな〜って思ってたね」

「それは俺への脅迫か？」

薫子は首を左右に振る。

「いいえ……私はたっちゃんの思いを無駄にしたくないからよ？」

薫子の言葉に楯無は瞠目し、一夏は眉間に皺を寄せる。それでも薫子は言葉を続ける。

「いいえ。私は新聞部の副部長として貴方の事を知りたいからよ？」

それに男性操縦者達の存在は今日まで――いえ、あの時、篠ノ之博士が世界に警告してからのまでは教えられなかった。でも……今は格好のネタが浮かんだわ」

「格好のネタ……貴女は先輩として恥ずかしくないのか？」

薫子は再び首を左右に振る。

「いえ、私の記者魂としての火が付いただけ、特集になるのなら何でも良いのよ？ 記者は嫌われてなんぼの者よ？ ……それに」

薫子は楯無を見る。

「たっちゃんも、あんたと一緒にいたいと思ってるからね？」

薫子はそう言いながら笑う。何故なら、薫子は楯無を思い、楯無を少しだけ一夏と一緒にいさせようと思っていた。

彼女は新聞部の副部長であるのと同時に、楯無の親友である。それに薫子は二人の事を記事にするつもりはなかった。

単に楯無を一夏と一緒に居させようと思っていた。しかし、薫子は一夏と楯無に起きた出来事を知らない。例え知っていたら、薫子は記事にするかしないかで悩んでいただろう。

「かつちゃん……」

そんな薫子に楯無は驚きを隠せないが直ぐに哀しそうに笑い、ありがとう、と囁いた。

一方で、一夏は下唇を噛みながら両手を拳に変え、強く握り締めていた。

「大丈夫よ？ 貴方とたつちゃんの関係は書かないわーその代わりに、貴方に取材をさせてくれない？」

薫子は懐から手帳とペンを取り出し、一夏に訊く。

「……俺や更識との関係や俺の事を書くつもりはないだろうな？」

間を置いて、一夏が問い返すと薫子は頷く。

「ええ、その代わりに、この学園に来てどう思ったのを教えてくれれば良いわ」

薫子の言葉に一夏は舌打ちすると、渋々二人の所に戻り、椅子に腰掛ける。

本来なら取材拒否すれば良いが楯無との誤解が広まるのはごめんだ。勿論、それは無理に等しいだろうが、ある程度の事を薫子に教えれば良いだけだ。

それにケルティックやエルダーの事は言わないようにした。だが、薫子は楯無にある事を言った。

「先生には、私が男性操縦者に取材したかった為に、遅れたと言つとけば良いわ」

薫子はそう言った後、一夏に取材する。勿論、一夏はそんな事をしたくはなかったが、楯無は薫子の気遣いに内心喜んでいた。

そして、薫子の取材は少し長かったのは言うまでもない。それは、薫子なりの親友への気遣いでもあった。

同時刻、勇人は千冬と一対一の話をする為に職員室にいた。それは、箒の件での事だった。そして、千冬は勇人と、ここには居ない止が一夏の親友であり、少しだけとは言え三年間も一緒にいた事を知る由もない。無論、勇人は千冬にその事を言うのも時間の問題だった。

第35話

「……………」

ここはIS学園の教員室。そこは少し広く、教員達が使うであろうデスクや椅子が沢山置かれ、書類等が入っている硝子棚が五、六つは設けられていた。

だが、教員室にいる教員は全員女性であるのと、余り居ない。今は授業中である為、大半の教員が自分の受け持つクラスで教鞭を執っている。

そんな中、千冬と勇人がいた。二人は向かい合う様に椅子に座っているも、両者は表情を険しくしており、会話もない。

あるとすれば、二人の間には各々の思いがあると云う事になる。――では、勇人よ？　――先に動いたのは、口を開いたのは千冬だった。千冬言葉に勇人は眉間をピクツと動かす。

「お前は何故、篠ノ之の手を潰しに掛かるような事をした？」

千冬は勇人にその事を問う。それに、千冬が勇人を此処に連れてきたのも、箒の件での事だった。因みに箒は手の甲に怪我はしてないものの、未だ激痛が走っているのと、幸いな事に骨には異常はなく折れてはいない。

そんな箒に真耶は心配していたが箒は別に良いと言いなながらも、激痛に耐えきれず、手を手で押さえていたのは言うまでもない。

一方、勇人は瞑目し、深い溜め息を吐く。何故なら、あれは箒が悪いのだ。箒は、一夏に抱き着いている楯無に怒りを覚え殴ろうとした。

それに勇人は箒が一夏を殴るのかと思ひ、一夏を守ろうとしただけであるが勇人も悪い為、何も言えない。勇人は目を開くと同時に口を開く。

「ったく、俺は単にあの女が一夏を殴るのかと思ったから、あいつを止めたに過ぎない」

「だからと言って、あれはやり過ぎだ――最悪の場合、手が折れていたのかも知れないのだぞ？」

「大丈夫だよー俺はちゃんと力を加減したから、激痛だけで済んだじゃねえか？」

勇人はそう言いながらも腕を組む。その表情は何処か呆れている。千冬に対してだ。それに勇人が悪い訳ではないが、千冬は頭を抱えながら溜め息を吐く。

「そんなことを言っても、お前が篠ノ之の手を折ろうとしていたのに変わりない……それに、更識も更識で何故、一……織斑に逢うや否や、抱き着いたのだ？」

千冬は箒だけでなく、楯無の行動にも呆れを隠せない。千冬は真耶と共に教室に来た時に見た光景は、手を手で押さえながら勇人を見上げるように睨んでいる箒と、何故か楯無を抱き締めている一夏が眼に移った。

あの時の光景は千冬や真耶には判らないが一夏は楯無とは面識があるからだ。それも、最初は偶然でありながらも、最悪な形で出逢ったのだ……。

そんな千冬に、勇人は鋭い眼差しを向ける。この女が織斑千冬ーブリュンヒルデにして、名誉の為に一夏を裏切った、一夏のたった一人の肉親にして、一夏の復讐の対象者。

勇人から見ればそう思うだろうがそれは一夏から教えられた事だ。千冬は勇人の姉ではないのと同時に、何の接点もない赤の他人。

それに、勇人は千冬とは話等はするつもりはなかった。何故なら勇人は千冬が、目の前にいる教師が自分に何かを言おうとしているのではないのかを警戒していた。

一つは、束に男性操縦者達の中に一夏が居たのを教えなかった訳を問い質す事。二つ目は、束に連絡出来ない場合、自分か止に一夏の事を教えて貰おうと、千冬自身が考えている事。

恐らく後者の方が強いだろう。千冬は自分を此処に連れて来たのも、一夏の事を問い質す為であると同時に、箒の件は、この件を訊く為の言い訳にしかない。

「ところでもう良いか？ 俺に訊きたいのは篠ノ之の事だけだろ？ それに一夏は更識を連れて何処かに行ったから、教室には止一人しか

いねえからな？」

勇人はそう言いつた後に立ち上がると、踵を返して、教員室を出て行こうとした。

――待て――。刹那、千冬が勇人を呼び止める。勇人は歩くのを止め後ろを振り返ると、千冬は怒りと悲しみが混じったかのような表情を浮かべながら、勇人を見据えていた。

恐らく、さつきも考えたように一夏の事だろう。千冬は一夏の事を自分から訊こうとするつもりだろう――無論、勇人は一夏の事を千冬に教えるつもりはない。

たと言ったとしても、一夏を困らせるだけなのだから。勇人はそう思いながらも、ある事を訊いた。

「織斑先生――アンタは俺から一夏の事を訊きたいんだろう？」

勇人の言葉に千冬は瞠目した。千冬は自分が言いたかった事を勇人が先に行った事に驚きを隠せないでいた。そうだろう――千冬は勇人の言う通り、勇人から一夏の事を訊こうとした。

それを勇人が先に言つた事に驚きを隠せない中、勇人は呆れて頭を抱えると、口を開いた。

「全く、教師が自分の――嫌、同じ苗字であるのと同時に、顔立ちも似ているとなれば誰もがそうもうか……」

「つ……そ、それよりも教えてくれ、お前や霧崎は一夏とはどういう関係だ？ それに一夏に何が遭つたのかを知っているのか？」

千冬は気を取り直して、勇人に問う。千冬は勇人から一夏の事を訊きたかった。本当なら一夏から訊けば良いが、千冬は一夏を助けられなかった事を後悔していた。

千冬は弾から一夏の事を聞かされた時、信じられないと思つてしまった。あの一夏が自分の知らない所で苦しんでいたのを、千冬は知らなかった。

それに今まで、急がしいと言つて一夏の事を見ようともせず、手を差し伸べようとしなかった。もし、あの時助けたら、それ以前に手を差し伸べたら、と後悔していた。

そして、一夏と再会したものの、一夏になんて声をかけてやれば良

いのかは判らなかつた。罪悪感があるのと同時に、自分を許してくれる筈はないと思つたからだ。

それならば、勇人が止に訊けば良いと思つたが、筈が馬鹿な事をやらしたせいで、勇人から一夏の事を訊けるチャンスが出来た。

その為、勇人が此処にいるのも、一夏の事である。しかし、勇人は何も答えなかつたが千冬に鋭い眼差しを向けていたが数分間の沈黙の後、こう言い放つ。

「俺から訊こうとしても無駄だ……そんなの本人から訊け」

「そこを何とか頼む……！ 私は一夏に嫌われている！ 私はあいつの事をちゃんと見てあげられなかつた——私が何を言つても答えてはくれないだろう……だから！」

千冬は勇人に懇願した。しかし、そんな千冬を見た勇人は呆れを通り越して怒りをも覚える。

彼女のやっている事は無駄でしかない。一夏は既に千冬を見限つてると同時に、一夏は千冬とは話をしたくもないのである。

その為、勇人は呆れながらも答えた。

「断る……そんなのは一夏から訊け……」

「しかし……！ 私は一夏に」

「見て上げられなかつたとしてもそれは言い訳だ」

千冬が何かを言い終わる前に勇人が先に言う。それを聞いた千冬は耳を疑うも、勇人は顔を千冬の顔へと近づけ、こう言い放つ。

「貴方が何を言おうが一夏は貴方の元に戻るつもりはない……それに止にも俺と同じような事は訊くな——それに一夏の事を苦しめるな、俺達の過去を詮索するな干渉するな！」

勇人はそう言いながらも、千冬から離れ、腕を組みながら踵を返し教員室を出た。

しかし、勇人の表情はとても険しい。それは千冬への怒りと共に、一夏や止の親友達や、スカー達プレデターの事を気遣い、ああ言つたのだ。

そして、勇人が教員室を出て行く、その間に千冬は青褪めながら俯ていた。

「取り敢えず、一通りの事は答えた……もう良いか？」

その頃、此処は保健室。保健室には一夏、楯無、薫子の三人がいて、一夏は薫子から色々な事を質問されて、疲れを通り越して呆れていた。

薫子は一夏に色々な事を聞く事が出来たのか嬉しそうに手帳を抱き締めていた。これで特集はなんとかなるからだ。

そんな薫子に一夏は溜め息を吐き、楯無は薫子を見て苦笑いしていた。彼女には感謝はしているが、流石に訊き過ぎだと。勿論、薫子には取材したいと言う記者魂が薫子を動かしたから何も言えない。

すると、一夏は立ち上がる。楯無と薫子は一夏を見やるも一夏は溜め息を吐いた。

「取り敢えず、俺は教室に戻るーまあ、後で質問攻めにならない事を祈りたいけどな？ それと薫先輩」

「何かしら？」

薫子は首を傾げると、一夏は髪を掻きながら、薫子に言う。

「俺は兎も角、更識を頼む……あんな事が遭ったら、流石に煩い奴がいるからな？」

「煩い奴？」

薫子が言うのと、一夏は頷く。

「ああーそれは恐らく、更識を襲うかもしれない……だが」

一夏は突然、楯無の頭に手を置き、撫でる。楯無は突然の事で驚きながら徐々に顔を真っ赤にする。

それでも、一夏は関係無しに薫子に対し、言葉を続ける。

「そいつは、更識に手を出さないように俺がなんとかしておくから、何か遭ったら、山田先生に言つといてくれ」

一夏はそう言いながらも、楯無の頭を撫でるのを止め、保健室を出ていった。

そして、保健室に残ったのは楯無と薫子の二人だけだったが、楯無は顔を真っ赤にしながら口をパクパクと開けていて、それを見た薫子

はニヤニヤと笑っていたのは言うまでもなかった。

第36話

一夏は今、楯無や薫子を保健室へと残し、学校の廊下を歩いていた。勿論、教室へ戻る為だが一夏の表情は何処か怒りに満ちている。

それは千冬や箒に対してだった。あの二人がいる教室には戻りたくないのと、楯無に抱き着かれた事で色々質問攻めに遭うのが嫌でたまらない。

あれは誤解であるも理由にはならないし、悪ければあの二人が自分に色々と問いつめてくるのも目に見えている。一夏はどうすれば良いかと思ひ悩みながらも、いつの間にか自分があるクラス・一年一組の教室に着いた。

一夏は教室に入る前に立ち止まり、軽く溜め息を吐くと、教室に入る。刹那、教室にいた全ての者達が一夏を見やる。しかし、千冬は居なかった。

それだけなら未だ良いだろう。が、止や勇人は兎も角、女子達の視線は何処か好奇心な目かつ嫉妬の目を一夏へと向けている。恐らく楯無の件だろう。

それに、勇人は一夏が戻ってくる前に教室へと戻って来たのである。

「織斑君、戻ってきましたか！ 所で更識さんは？」

真耶が一夏が戻ってくるのを確認した後、笑顔を浮かべるも楯無の事を訊いてきた。

「いえ……彼女は保健……」

「彼女!!!」

一夏が何かを言い終える前に女子の大半が驚きのあまり叫び、一夏や真耶、止や叫んでいない女子達の少数は肩を震わせる。叫んだ女子達は皆、一夏の言葉に頬を赤くする者、目尻に涙を浮かべている者達に別れていた。

恐らく、一夏を狙っていたか彼女がいた事に失恋を感じているのだろう。あれは誤解だが何も知らない女子達から見ればそう思えざるを得ない。

最後に、彼女と言ったら流石に恋人同士である事を誤解付ける事になる。

「神様……貴方を恨みます」

「こんな理不尽ガアアーツ！」

「最早諦めるしかないのかあつ!!」

女子達から悲痛の聲が飛び交う。それは女子達にとつて何よりの失恋であるのと同時に、彼氏が欲しかった女子達の心の叫びである事をも意味している。

そんな女子達に真耶は彼女らを宥めるがまるつきり効果無し。止に至つては女子達の様子に何も解らないでいて、勇人は瞑目したまま何も言わない。

一方、当の本人の一夏は頭を抱えていた。誤解だと言つても女子は信じないし、女子は大の噂好きであると同時に、変な噂を流す危険もある。

刹那、一夏の胸ぐらを掴んできた者がいたー箒だ。

「二夏!! あの女は誰だ?! 私がいない間に、あの女と相思相愛の仲になったのか!?!」

箒は怒りながら、一夏に詰め寄る。何故なら、箒は一夏に好意を寄せていた。勿論、歪んだ愛であり、一夏はそんな箒を嫌っている。箒のせいで自分は色々嫌な思ひ出がある。

それだけでなく、一夏は箒に怒りを覚えた。楯無は上級生であるのと、楯無を『あの女』と呼び捨てたのだ。それには流石の一夏も、上級生を敬わない箒に怒るのも無理はない。

一夏は箒に誤解と言いたいが今はそんな事を言つてる場合ではなかった。刹那、箒の手首を掴み、即座に捻る者がいたー勇人だ。

「ああつ!! ま、またお前か!?!」

箒は腕を捻られて激痛で顔を歪めながら、勇人を睨むも、勇人は箒に対し鋭い眼差しを向けていた。が、箒には怒りを通り越して呆れをも感じていた。

ー何故、この女は一夏に関わろうとしているのだろうか?

ー。勿論、それは箒が一夏の知り合いであると同時に嫌われてい

るからだ。その為、一夏に関わるから余計に酷い話である。

「は、勇人君、い、いけません!」

そんな勇人に真耶は慌てて止める。しかし、一夏は、この光景を見て何も言えなくなる。

失恋がどうのこうので喚いたり泣いたりしている女子達。少数は女子達に何も言えなくなるどころか困っている。止は止で愕然としている。最早、その光景は混沌としていた。

それも直ぐに終わった。あの女が、千冬が教室に入るや否や、教室に居る者達を一喝し黙らせたのは言うまでもない。

「くそっ……! 周りは何でそんなに俺と更識が付き合っていると
思っているんだよ……!?!」

一時間目の授業が終了した後、一夏は勇人や止と一緒にいながら、二人に対して愚痴をこぼす。そうだろう、一夏と楯無は付き合っていると
言うのは誤解だがそれが出来なくなっていた。

周りには女子達は女子達で嘆いている。最早、一夏を諦めるしかないと言っている程、過言ではない。その証拠に、女子達の大半は既に諦めモードに入っている。

ある一人だけは違った。箒だ。箒は離れた場所にいるが遠くから一夏を見ている。その視線は想い人へと向ける物ではないのと同時に、一夏に何かを言いたかった。

無論、それは無理に等しい。勇人の存在だ。勇人は一度ならまだしも、二度も一夏に突っ掛かってくる箒に怒りを覚えており、箒が来たらまた何かをするつもりでいた。

彼がいる限り、一夏は箒に近づけられないだろう。ちよつとよろしくて? 刹那、一人の少女が三人に声を掛けてきて、一夏達はその少女を見やる。

外国人なのか腰まである長く美しい金髪の縦髪ロールにカチューシャを着けており、外国人特有の蒼い瞳。制服は他と違いドレスに近い。その女子は一夏達を見て怒りと言うよりも、軽蔑な眼差しを向け

ていた。

「誰？　　。止はその女子に訊ねると、その女子は瞠目し、直ぐに怒る。」

「まあ、私ご存知ないんですの!?　この……」

「セシリア・オルコット」

その女子、セシリアが自分の名を言う前に、勇人が彼女の名を口し、それを聞いた一夏と止、セシリアは勇人を見やる。勇人はセシリアを呆れた目で見ていたが言葉を続ける。

「セシリア・オルコットーイギリス出身であり、イギリス代表候補生ー違うか？」

勇人の言葉にセシリアは再び瞠目する。因みに勇人が何故、セシリアの名を知っているのかは最初にあつたクラス紹介の時である。それはクラス全員がする事であるのと同時に、一人一人が皆に自己紹介した。

その中で箒やセシリアもした為、僅かだが勇人はその女子全員の名を覚えたのだ。これにはセシリアも何も言えなかつたが、慌てて我に返る。

「わ、私の名前をご存知でしたの!?　だ、だったら話は早いですわー!」
セシリアは何時もの表情に戻ると、一夏を指差した。

「あなた!?　さっきの行動は何ですの!?!」

セシリアの言葉に一夏は「はっ?」と言いながら首を傾げ、それを見たセシリアは歯を食いしばる。

「だからさっき、上級生に抱き着かれたり、その上級生をお姫様だっこしたことですわ!?!」

セシリアの言葉に一夏は頭を抱える。ああ、やっぱりか、と。勿論、それは楯無との事であり、それをセシリアはその事を訊ねてきたのだ。

それだけではない、あれは恋人同士ではないのかと思われている為、何も言えない。ましてやセシリアだ。一夏達は知らないが彼女は女尊男卑主義者であり、自分が恋人がいらないのに対し、一夏に恋人がいるのは苦痛しかないのでだろう。

それに、一夏は楯無や薫子、箒の件で色々とストレスが溜まってる為、セシリアか絡んで来ると流石に疲れると同時にストレスが爆発しかねなくなりつつあった。

「ちよつと聞いていますの!?!」

セシリアの叫び声が教室内に木霊し、クラスの女子達が一夏達を見やる。彼女達は彼等のやり取りを色んな意味で見守っていた。例えば、何が遭ったとしても、彼女達は何もしない。

——この女!! ——。一夏は最早ストレスが限界に達していた。今直ぐにでも、セシリアに文句を言おうとした。——更識に妬いてんの? ——。

刹那、止がセシリアにそう言った。それを聞いたセシリアは驚きのあまり言葉を詰まらせ、一夏と勇人は止を見やる。一方。止は頬杖を突きながら恍けていた。

「ねえオルコット? ——夏が好きなの? ——」

「な、何を言ってるのですか!! 私に織斑さんを好きになる理由はありませんわ!?! ——って言うよりもあり得ませんわ! ——」

セシリアは頬を赤くしながら、止に怒る。勿論、セシリアは一夏に惚れている訳ではない。セシリアは単に一夏達がどういう者達なのかを知りたく、そして自分を覚えて欲しいと言う傲慢さを見せようとしていた。

しかし、止はセシリアを単に一夏に近づいたのと、楯無との関係を訊こうとしているのではないのかと勘違いしていた。勿論、それは勘違いだったがセシリアは止に怒りを覚える。

「それよりも貴方は何のですの!?! 何故私が織斑さんとの……」

刹那、チャイムが鳴り、女子達は自分達の席へと戻り始める。

「つ……貴方のせいですわよ!?! 覚えてなさい!!」

セシリアは止にそう言うと、自分の席へと戻る。しかし、止や一夏や勇人もセシリアがどうしたのかを気にしていたが彼等も席に着く。同時に千冬や真耶が教室へと入ってきた。

——俺、何かした? ——。しかし、止はセシリアに怨みを買うような事はしていないのに何故、セシリアはあんなことを言ったのかは

解らないでいた。

そして、千冬がクラスの者達にこう言った。

「二時間目の授業を始める前に、このクラスから、このクラスの代表者を決めなければならぬ」

第37話

千冬の言葉にクラスの女子達はざわつく。何故なら、クラス代表と
言うのは、このクラスで誰か一人を選ぶ事である。勿論、他のクラス
も代表者を選んでいるか、選ぶ前か終わっている頃だろ。

それに、その一人はクラス対抗戦や色んな行事とかに強制参加しな
ければならない。その一人はクラスの代表であると共にクラスの運
命を担っていると言い換えれば良いだろう。

「静かにしろ!!」

周りがざわつく中、千冬は一喝して黙らせる。それが効いたのかク
ラスの女子達が黙る。その中で二人だけ違う者がいた。一夏と勇人
だ。一夏は無視しており、勇人は瞑目していた。

彼等は、そのような事には関わりたくはなかった。その為、周りが
何が言おうと参加しないだろう。しかし……。

「クラス代表は、自身を推薦するか、このクラスから誰かを推薦したい
のならば良い——勿論、推薦された者は如何なる理由があろうと
辞退は出来ない」

「はい、私は織斑君を推薦します!」

「私は勇人君よ!!」

「私は霧崎君が良いわ!!」

千冬の言葉の後だと言うにも関わらず、女子達の半分は一夏達を推
薦し始める。恐らく一夏達の実力を知りたいのか、一夏を諦めるしか
ないのかと思ひ、他の二人を推薦する者が現れる。

誰一人、自身を推薦する者は居なかった。自分達の時間をクラス代
表とかに潰されたくないからだろう。一方、三人は女子達が自分達を
推薦しているのを見てそれぞれ何かを思っていた。

一夏は女子達の中から自分を推薦する事に愕然とし、止は目をパチ
クリとし、勇人に至っては瞑目し続けている。大半の女子達が一夏達
を推薦するな中、千冬は腕を組んで頷く。

「他に推薦する者は居ないのか? ——ならば話は早い……このさ」
「お待ちください!!」

千冬が何かを言おうとした直後、一人の女子生徒が叫び、周りは一斉に、その女子生徒を見やる。セシリアだった。

「私は、このクラスの代表として立候補しますわ！ それに、クラス代表は実力ある者だけがならなければならないわ!! ましてや男がクラス代表をやるのは苦痛しかありません！」

セシリアは異議を唱えてきた。勿論、セシリアは正論に近い。クラス代表は、このクラスを纏めるだけでなく、実力もあり、その覚悟をも持った人物がならなければならない。

大抵は代表候補生がなるべきだ。しかし、女子達を選んだのは代表候補生でなく、珍しき半分で指名した一夏、勇人、止の三人。

彼等は実力は愚か、体力や知識はあるのかは未知数であるのだ。最も、三人は束からISの知識を叩き込まれ、プレデターから戦い方を叩き込まれた為に、この学園ではトップクラスに入る程の実力者達である事を、学園中にいる者達は知らない。

更には、セシリアは言ってはならない事を口にしてしまう。

「そもそも、私は学園に来たのは勉強しに来た事——こんなアジアの小さな島国を観光しに来た訳でもなく、遊びに来た訳でもありませんわ!!」

セシリアはそう叫んだ。セシリアは自信があるのだろう、自分が代表候補生だけでなく実力もある事をアピールしている。

が、一夏はセシリアは見て何も言わずに前を向き、勇人はセシリアを鋭い眼差しで見据えた後、瞑目し前を向く。一夏と勇人はセシリアの事等無視していた——ある一人を除いては。

「ねえ、セシリア？ セシリアって学園に勉強しに来ただけなの？」

止がセシリアの言葉に疑問を抱き、訊ねる。

「当たり前ですわ。私はイギリスから絶大な期待を担ってる身。それに私がクラス代表になれば……」

セシリアは言葉を述べながら自分の胸に手を当てる。そんな止はセシリアを見て呟いた。——可哀想な人——と。止はそう言った後、前を向く。

「それに私は……って、聞いてますの!?!」

セシリアは三人が聞いてない事に怒る。勿論、三人は三人でセシリアの自慢話を聞く訳でもなかった。聞くのが嫌でもなく、反論するのにも余計な状況へと変わる事も目に見えている。

「ちよつと聞いてますの!? これだから男は……ちよつと!」

だが、セシリアは一夏達が自分の話を聞かない事を何度も問うも、一夏達は聞く耳を持たない。それが原因なのか、セシリアは我慢出来ず、一夏達を指差す。

「キィ〜〜ツ、決闘ですわ!! 貴方達に引導を渡してやりますわよ!」
セシリアは三人に宣言した。そしてその少し後に千冬が四人に對しクラス代表決定戦をやる事を言い渡し、一週間後にアリーナでやる事も言い渡したのは言うまでもない。

あれから三時間後、四時間目の授業が終了し、千冬や真耶は教室を出ていき、クラス中の女子達は筆記用具や教科書等を片付け初める。午前中の授業が全て終わった後だと言うのか、クラスの生徒達は少し疲れの色を見せている。そして、大抵はお腹が空いたのか、教室を出ていく。その理由は食堂へと向かい昼食を摂って、午後の授業へと備える為だった。

無論、一夏達も食堂へと向かう為に筆記用具や教科書を片付ける。

「やつと終わった〜飯だ飯〜」

「ふっ、止はそれしかねえのか?」

止は嬉しそうに言い、そんな止に一夏は苦笑いし、勇人は瞑目しながらも微笑んでいる。三人は三人で昼食を楽しみにしていた。

三人は軽い談話をしながら立ち上がるや否や教室を出ようとした。――また、妨害者が現れた。

「――ちよつと待て一夏! ー―箒だった。」

三人や、他の同級生達は箒を見やるも、箒は腕を組みながら険しい表情を浮かべていた。そんな箒に一夏も険しい表情を浮かべる。

「何だ箒ノ之? また何か用か?」

「何か用ではない! 何故私を誘わない!」

箒の言葉に一夏は「はっ?」と惚ける。何故なら、箒は一夏が自分

を誘ってくれるのではないのかと考えていた。勿論、一夏は箒への感情は千冬同様憎悪でかき消す理由等ない。

箒と昼食を摂る理由もなければ、話す理由もない。一夏は箒に呆れながらも、勇人や止を交互に見る。

「行くこうぜ……篠ノ之に関わるとろくでもないからな」

一夏はそう言うと言を返し、教室を出ようとした。刹那、箒が一夏は教室を出ていくのを見たのと同時に怒りを覚え、一夏を追い掛けようとした。

しかし、それも無駄に終わった。一夏が勇人が一夏と今にも駆け寄ろうとした箒の間へと入る。——っ!? ——。箒は勇人を見るや否や目を見開き、立ち止まった直後に歯を食い縛る。

箒は勇人を警戒していた。それは勇人が一夏へと近づく自分を二度も邪魔したのだ。それは箒にとつて何よりの屈辱かつ、勇人を一夏の時間を邪魔する障壁と認識していた。

一方、勇人はそんなつもりはない。勇人は勇人で一夏に絡んでくる箒を一夏から守ろうとしているだけだった。

箒は勇人を睨み、勇人も腕を組みながら鋭い眼差しを、箒へと向けていた。両者の間には不穏な空気が流れ始める。沈黙や憎悪が混じっているような空気でもあった。

周りも二人から醸し出される空気に固唾を呑む。その中にはセシリアもいたが、セシリアは二人の間に流れる空気に冷や汗を掻いていた。

刹那、止が勇人の前へと現れ、勇人を落ち着かせる。

「よしなよ勇人、あの女子に関わるよりも昼食を摂りに食堂に行こうぜ?」

止は勇人にそう言いながら笑い、勇人の肩に両手を置く。

「それによ? 周りが怖がっているじゃねえか?」

止はそう言いながら周りを見渡し、勇人も周りを見渡す。確かに、周りの女子達は少し怯えていた。勇人の威圧的な視線にはない、勇人と箒は三度目の一触即発を起こすのではないのかと思っていた。

「俺達がこの学園に来たのは——いや」

止は首を左右に振り、その後に言葉を続ける。

「ここにいる女子達を怖がらせる為じゃねえ……俺達はこの学園で青春を謳歌する為に来たんだぜ？」

止は勇人にそう言った。止は止で一夏や勇人と共に、この学園で楽しい生活を送るつもりだった。それには一夏や勇人も必要だった。彼等と時に笑い合い、ケンカし合い、時には何時かは判らないが恋愛話で盛り上がるうとしていた。

それだけではない、一夏は勇人は止にとって大切な仲間であり親友である。

そんな止に、一夏と勇人は瞠目するも勇人は直ぐにはくそ笑む。

「そうだな……お前の言い分は言う通りかもしれないな」

勇人はそう言った後に身体を翻す。

そして、止は一夏も見る。一夏は未だ瞠目していたが、止はニカツと笑う。

「それよりも、食堂へと行こうぜ！」

「あつ……ふつ、そうだな」

一夏は微笑むと、三人は教室を出た。一方、箒はポカーンとしていたが直ぐに一夏を追い掛けようとして教室を出る。

「あの止って人……なんかカツコ良かった〜」

しかし、教室にいたクラスの内の、とある女子生徒がだるそうかつトロンとした目をしながら、止の行動に少し感銘していた。

その証拠に、制服にも関わらず、手を隠す程の長い裾をヒラヒラと動かしながら……。

第38話

食堂。そこはとても広く、テーブルは二百には満たないが沢山あり、椅子も三百には満たないが沢山置いてあり、奥には厨房が設けられ、食堂を出入り出来る扉近くには食券機が置かれている。

この学園中にいる者達が食事を摂る為に設けられた場所。食堂は限られた時間でしか開かなく、その時間以外は基本的に閉まっている。

今の時間帯は昼休みなのか、食堂には沢山の女子生徒が居り、一年から三年の生徒達が談話をしながら食事を摂っている。それは、唯一の安らぎの時間とも言えるだろう。

「うわ〜先輩が沢山いるな」

そんな中、一夏達三人もいた。一夏達は上に何かを置いている乗せているトレイを両手で持っている。因みに彼等が頼んだのは一夏がカレーライスに軽めのサラダ、止はシーフードピラフにコンソメスープ、勇人はミートソースのスパゲッティに軽めのサラダである。

彼等はそれぞれ、頼んだ物は違うが共通する事は水の入ったコップや、一夏と止はスプーンを、勇人はフォークをトレイの上に置いている事だろう。それに自分達が座れる席を捜していた。

そんな三人に、僅かだが周りの女子生徒達が見やる。彼女達が見ているのは一夏だった。勇人や止もそうだが一夏は違う。彼は楯無との一件が原因だ。

楯無が抱き着いた事、そんな楯無を姫様抱っこした事が目撃した生徒達を切っ掛けに広まったのだ。誰から見ても、二人が付き合っているとと思うだろう。

周りは一夏を見てひそひそ話をする中、一夏は身体を震わせている。あれは誤解なのだが一夏はその事を言えない為、この怒りをぶつける事は出来ないでいた。

「あそこが良いんじゃないか？」

そんな中、止が自分達が座れる席を見つけた。そこはテーブルがある物の、周りには六つの椅子が三つずつ向かい合うように置かれてい

る。

にも関わらず。そのテーブルには誰も座っていない。――あそこに座ろうぜ？　――。止のたった一言で一夏と勇人は頷き、三人はテーブル近くの椅子に座る。因みに一夏は真ん中、止は一夏の右隣、勇人は一夏と向かい合うように一夏の目の前に座っている。

「いっただきます〜」

止はそう言うと、トレーの上にあるスプーンを手に取り、スプーンでピラフを一口分掬い、口に含む。刹那、止は眼を見開く。――美味しい！　――。止は口内に広がるピラフが美味である事に驚きを隠せない。

米一粒一粒がバターと上手く絡まっており、シーフードが御飯との相性が良いのか更に美味さを引き立たせている。止はピラフが美味しい事に感動しながらも、ピラフをがつつく。

そんな止に一夏は苦笑いし、勇人は頭を抱える。止は余程、腹が空いていたのだろうか？　それとも単にピラフが美味しいからなのだろうか？　それは止に聞かなければ解らないが一夏やスプーンを、勇人もフォークを手に取り、昼食を摂り始める。

――ここ良いか？　――。一人の女子生徒が一夏達に訊ねる。と言うよりも、その女子生徒は一夏に訊ねていると言い替えれば良いだろう。

しかし、その声には見覚えがあつた。一夏達は声が出た方を見やると、その女子生徒・篠ノ之箒が立っていた――両手にはトレーを持っているが表情は少し険しい。

「何だ篠ノ之？　何かようか？」

一夏は表情を険しくそして呆れながら、箒に訊ね返す。止は箒を見て何も感じていない一方で、勇人は箒を睨む。箒は勇人に気付き歯を食い縛るも直ぐに一夏に対し、口を開く。

「隣良いか？　良いだろう、幼馴染みなのだからな？」

箒はそう言うと、勝手に一夏の隣に座る。これには流石の一夏は瞠目するも直ぐに表情を険しくし、今にも箒に文句を言いたかった。しかし、それも一夏の手を煩わせる事はなかった。

「貴方が、織斑一夏君ですか？」

刹那、今度は別の女子生徒が一夏に声を掛けるも、勇人はその女子生徒の声に違和感を感じた。それはクラスでは聞き慣れた声ではない。全くの別人である。

勇人はそう思いながらも、声をした方を見る。勇人だけではない、一夏達も声がした方を見やると、一人の女子生徒が立っていた。

その女子生徒はリボンの色が違っていた。一夏達一年の物でもなく、楯無や薫子達二年の物でもない。

そうなれば、目の前にいるのが三年生である同時に、一夏に用があるのも変わりはない。

「――貴女は？　――。一夏はその女子生徒に訊ねる。その女子生徒は長い茶髪を三つ編みにし黄色いヘアバンドを付け、琥珀色の瞳に眼鏡を掛けている。その女子生徒からは固い雰囲気醸し出されていた。

そして、その女子生徒は一夏に対し、自分の胸に手を当てながら自己紹介した。

「申し遅れました――私は虚、のほとけうつほ布仏虚――更識楯無に仕える者です」

その女子生徒・虚は一夏に軽い自己紹介をする。そんな虚の自己紹介に一夏と勇人は違和感を感じた。一夏は虚の口から『更識楯無』の名が出てきた事、勇人は虚の自己紹介である疑問を抱いていた。

勿論、今はそんな事を考えている場合ではなかった。勇人は兎も角、一夏は虚にある事を訊ねた。

「貴女は、更識の知り合いなのですか？」

「はい――私はお嬢様に仕える者です。それに、生徒会の会計をも務めています」

虚の言葉に一夏は眉間に皺を寄せる。

「会計？　生徒会？　それが俺と何の関係があるんだ？」

「いえ、生徒会は関係ありません――ですが、お嬢様には関係する事です」

「更識に？」

一夏の言葉に虚は頷く。

「はい……ですが今は昼休みですー差し出がましいかも知れませんが生徒会室まで来てくれませんか？ お嬢様の事で色々とお伺いしたい事がありますのでー」(迷惑かも知れませんがお願いします)」

虚は言葉を述べた後、軽く頭を下げた。それを見た一夏は少し考える。理由は、楯無の事だった。虚は自分や楯無との事を訊きたいに違いない。無論、無理に等しいのと同時に気になっていた。

自分が止と共に楯無の前から姿を消した後の、楯無とその身内の出来事までは知らない。あの時、楯無と共に保健室にいた時には、楯無は自分にはあの子の出来事までを語らなかつた。

言うなれば、虚から話を聞く事が出来る。それに、楯無には悪いだろうが虚は楯無を思つての事だった。楯無があんな状態では学園の安全に支障を来す。

それには一夏の力が必要なのである。一夏から楯無と何が遭つたのか聞けば、楯無は立ち直れるのではと賭けていた。

「お願いします……お嬢様があのままではお嬢様は可哀想でたまりません……だから！」

虚は顔を上げ、一夏を見る。虚の表情は何処か哀しい。楯無を思つての事だろう。そんな虚を見た一夏は呆れるように溜め息を吐き、頷く。

「解りましたよ……俺も更識に用があるし、何より誤解も解きたいからな」

一夏は周りを見渡す。周りの殆どが一夏と虚のやり取りを見ていた。しかし、それも楯無との関係となれば更に変な噂が流れるに違いない。一夏はそう思いながらも再び溜め息を吐き、勇人と止を交互に見る。

「山田先生に俺は授業に遅れるから、最悪の場合、五時間目は出られないと言ってくれーカレーは食つていいから」

一夏はそう言った後、立ち上がる。ー待てっ！ー。箒がそう叫びながら、一夏の手を掴む。

「何だ篠ノ之？ お前には用はない？」

一夏はそう言いながら、箒の掴んできた手を振り解き、虚を見る。

「先輩、生徒会室へと案内して下さい」

「解りました。そちらの方は良いのですか?」

虚は箒の事を訊ねるも、一夏は首を左右に振る。

「良いんですーどうぞせ赤の他人ですから」

一夏の言葉に箒は「なっ!?!」と驚く。それでも、一夏は虚にそう言った後、虚と共に食堂へと出ていこうとし、虚の後を従って行く。

箒が呼び止めようとしたが一夏は聞く耳を持たず、箒は怒りを感じて追い掛けようとしたが、勇人がテーブルの下から箒の足を踏んで箒を止める。

「うぐっ!?!」

箒は足を踏まれて激痛を感じた。箒は自分の足を踏んだ者に気づき、その者・勇人を睨む。勇人も箒を睨むが両者の間には重苦しい空気が流れていた。そして、止はそんな二人を見て少したじろいでいた。

同時刻。ここは二年の教室。教室には余り人はいないが、その中には楯無がいた。

「一夏君……」

楯無は自分の席に着きながら頬杖を突いていた。そして、一夏の名を呟いた後、もう片方の手で自分の頭を触る。

そこは一夏が撫でてくれた場所だったが楯無はあの事を思い出したのか、哀しそうかつ、何処か愛おしい目をしながら頬を紅くしていた。

第39話

あれから数分後、一夏は虚に従っていく形で廊下を歩いていた。目的は勿論、生徒会室へと赴き、そこで虚が、楯無と御内に何が遭ったのかを一夏に教える為だった。

虚は一夏の事を知ったのは楯無から教えて貰った事と、一夏にお願いして楯無を励まそうと考えていた。それは未だ言えないが生徒会室に着いたら全てを話すつもりだった。

因みに廊下には他の同級生や上級生が居たが彼女達は一夏の事を知っている。彼女達は皆ひそひそ話をしているが、あんな事をすれば噂が広まるのは目に見えているし、況してや状況が悪化するのも一目瞭然である。

——此処です——。虚は一夏にそう言いながら立ち止まり、近くにある扉を見る。一夏も立ち止まるが一夏は虚が見ている扉を見る。そこは一件何の変鉄もない扉。

しかし、扉の上部分には『生徒会室』と言うプラスチックの表札があった。恐らく此処が生徒会室なのだろう。一夏はそう思っていると、虚が扉を開ける。

中は教室よりも狭い。室内には細長いテーブルが三つもあり、コの字を描くように置かれ、五、六つの椅子が置かれており、書類とかや本を収めている筆筒が三つぐらいいは置かれていた。

「此処が生徒会室……」

一夏と虚は生徒会室へと足を踏み入れると、一夏が周りを見ながらそう言う。一夏は生徒会室へと入るのは初めてだった。普通なら中学にも生徒会室はあっただろうが一夏は中学へ行ってない為、何も言えない。

「織斑さん——近くの席にどうぞ」

虚は一夏を近くの席に腰掛けるよう促し、一夏は呆れながらも了承すると、近くの席に腰掛ける。その間に虚は扉を閉め、鍵を掛けると一夏と向かい合うように、少し離れた席に着く。

この部屋には一夏と虚しかいない。例え誰が入ってきてても、虚が鍵

を掛けた為に誰も入る事も出来ない。

それに一夏は今、虚から楯無の事を教えてもらわなければならなかった。一夏は表情を険しくしている。一方、虚は一夏を見て少し哀しそうな表情を浮かべている。

「で、何を言うんだ？」

「あつ……はい、食堂でも言ったように、お嬢様の事です……ですが」
虚は俯く。それを見た一夏は頼杖を突く。少しの間、沈黙が流れていたが虚は軽く頷き、一夏を見据える。その表情は哀しいままだったが虚は何かを決意したかのように口を開いた。

「では教えます……お嬢様と御内に何が遭ったのかを」

虚は一夏に更識家に遭った事を話始めた。

「成る程な……つまり更識の両親や妹さんとは、更識にどう話せば良いのが解らない、と？」

一夏は虚から更識家に遭った事を全て話され呆れるように納得した。事の発端はあの時だった。

あの時、楯無の両親と虚とその妹は更識姉妹が無事である事に涙していたが、楯無は一夏や止の事を思い出し、捜すも、二人は何処にも居なかった。

あつたのは、倉庫には百万円だけが消えた黒い鞆に、生皮を剥がされた男達の死体と、女性議員の死体と、細切れに近かった男の死体と、唯一の生存者と言って良い程の気を失った金髪の女性がいたただけだった。

そこまでなら未だ良いだろう。それ以降が問題だった。

楯無は二人の存在や更識家に裏切り者がいる事を伝えるも、両親や従者は驚きを隠せなかった。それにこの件は表沙汰になっていない。更識が手を尽くした為に問題ない。

しかし、楯無は両親に何故、簪の狂言誘拐を提案したのかを問い質すも、両親は娘達姉妹の冷めきった仲を戻そうとした為だった。

これには楯無も泣き叫びながら、両親を罵倒した。彼女が怖い思いをしたのと、一夏に人殺しをさせた事への後悔だった。

その日からだった。楯無はあれ以来、両親や簪とは会話をしなくなった。それどころか、部屋に閉じ籠る事が多くなった。これには両親や簪、従者達も困惑するも、彼等は楯無の言葉にあった一夏と言う青年を思い出す。

彼なら、楯無を救える、と。勿論、彼等は何もしていない訳ではない。彼等も彼等なりで楯無と向き合おうとしたが効果無しだった。

更に状況は悪化の一途を辿る一方だった。その為、一夏に頼むしかなかった。それも運良く、目の前にいる青年が、この学園に入学したのは想定外だった。

ISは女性にしか扱えないが彼は別である。そんなのはどうでもいい——今は楯無を何とかしなければならなかった。話を戻そう。虚は一夏に楯無や更識家の事を一通り説明した後、哀しそうに瞑目する。

「織斑さん……私は言うのも何ですが、お願いします、お嬢様の為に力を貸してくれませんか？」

虚は目を開け、一夏を見据える。その瞳には楯無を思う従者として、楯無と家族の仲を戻したいと一心がある為の決意が込められている。しかし、一夏は腕を組み、溜め息を吐いた。

「此方の都合の良すぎるような話だとは理解しています……ですが、私や、更識の前当主様や奥方様や簪お嬢様、私を含めた従者達全員はお嬢様を助きたい……お嬢様と簪お嬢様の仲が戻るのを望んでいます」

一夏は無言で見据えるも、虚は立ち上がり、頭を下げる。

「お願いします織斑さん……お嬢様を助けて下さい。お嬢様を助けられるのは織斑さんにおいて他におりません！　お願いします！」

虚は一夏にそうお願いした。彼女を含めた更識家の面々は楯無を

助けたかった。彼女を助けられるのは一夏しかない。例え此方が悪いのは解っている。

それでも、楯無を助けたいのは変わりなかった。そして、一夏は瞑目する。

一夏も一夏で虚の話を馬鹿らしいと思っていた。そんな事を言われても此方にも都合がある。自分は千冬に復讐したいのだ。自分がそんな他人の御内のゴタゴタ事に付き合っている暇はない。

一夏はそう言おうとしたが、虚はある事を話す為に顔を上げ、瞑目する。

「実は、もう一つある出来事が遭ったのです……」

「ある事？」

一夏が言うのと虚は小さく頷き、その事を話した。それはあの時、楯無が一夏に人殺しにさせた事を両親に話した時だった。

両親は一夏と言う青年が楯無や簪の姉妹達を助ける為に、絶対に許されない行動をした事に驚きを隠せなかったが、楯無は両親に更なる追い打ちを掛けるように叫んだ。

「――私は更識家の当主として務めを果たそうと思っていた！ 父さんや母さんや簪ちゃんの為に頑張ろうと思っていた！ なのに、一夏君を……一夏君を人殺しにさせた……一夏君に何て謝れば良いのか解らないわよ!!」

「――と。」

あの時の楯無は泣きながら叫んだ。それには両親や、近くにいた布仏姉妹や他の従者達はたじろぐも、楯無は言葉を続ける。

「――こんな事になるなら……私は楯無を襲名しなければ良かった……刀奈^{かたな}として生きたかった!!」

「――と。」

あの時の楯無は自分の本当の名前を両親に言いながら叫んだのである。

「あの時のお嬢様は貴方を楯無の名を襲名した事を悔やんでいました……それだけではありません、私達もあんな事をした事を悔やんでます」

虚は再び頭を下げる。

「ですからお願いします織斑さん！ お嬢様を助けて下さい!! お嬢

様をお救い出来るのは貴方しかいないのです……お願いします！
お願いします！」

虚は頭を下げながら、一夏に懇願する。しかし、一夏はそれを聞いて少し虚を睨んでいた。彼女の言ってる事は彼女や更識家の都合が良いだけの話でしかない。だが、楯無をあんな目に遭わせてしまった自分にも責任がある為、何も言えなかった一夏それも、ある人物のせいでもあるが……。

一夏は再び溜め息を吐くも、呆れながらも頷いた。一夏解りましたー、一夏は虚にそう言うのと、それを聞いた虚は顔を上げ瞠目し、直ぐに泣きそうになり。

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

虚は目尻に涙を浮かべながら、一夏に感謝の言葉を述べる。これで楯無を助ける事が出来る。一夏なら絶対に楯無を救う事が出来ると。勿論、それは一夏自身が決める為であるがこの際どうでもいい。楯無を助ける事が出来るのならば何でもいい、と。

「それよりも話は終わりですよね？」

一夏は訪ねると、虚は顔を上げる。虚は目尻に涙を浮かべているも涙は頬を伝っていた。それを見た一夏は呆れるも立ち上がる。

「はい、それよりも織斑さんに、これを差し上げます」

虚は手をポケットに入れながら、一夏に近付き、一夏の近くポケットからある物を取り出し、それを掌の上に置くように、一夏に見せた。「これは……鍵？」

一夏は虚が見せた物一夏鍵を指差しながら訪ねると、虚は頷いた。その鍵は一つしかなくは名札が着いており、名札には「1052」と書かれていた。虚は一夏の問いに答えた。

「はい、これは寮の鍵です」

「寮の鍵？」

虚は頷く。そして、その鍵は一夏が、これから三年間この学園で生活する為に必要な物であり、そして、とある者と同棲するのを、一夏は知らなかった。

第40話

虚から楯無の事を頼まれ、寮室の鍵である鍵を渡されてから数分後、一夏は腕を組みながら教室へ戻る為に廊下を歩いていた。

廊下には女子生徒は一人もいない。それはさつきチャイムが鳴つたのと、同時に授業が始まったのを意味していた。その為、一夏は虚のお陰で授業に遅れたと言えればいいだろう。

すると、一夏は自分が所属している教室へと来ている事に気付き、眉間に皺を寄せる。それも直ぐだったが一夏は溜め息を吐き、教室へと入った。

刹那、教室にいた勇人や止、クラスの女子達、千冬や真耶が一夏を見やる。一夏を見る女子達の視線は突然の事で少し驚き、中には好奇心な目で見ている。その中で箒は一夏が戻ってきた事で安心したと言うよりも何故か怒っているも、止は首を傾げ、勇人は黒板に書かれている内容をノートに写しているのかペンを動かしていた。

「遅刻だぞ織斑？ 何処をほつき歩いていた？」

生憎、教鞭を執っていたのは千冬だったが千冬は一夏に怒っている……と言うよりも少し困惑していた。そんな千冬に一夏は目も合わせず舌打ちすると、自分の席へと戻る。

「織斑君、織斑先生が訊いているのに無視はいけませんよ？」

一夏は行動に真耶は注意するも一夏は真耶も無視していた。真耶は一夏を見て少し戸惑うも、千冬は一夏は机の中から教科書やノートを取り出す。

……一夏……。千冬は心の中で一夏の名を呟く。一夏との再会は千冬にとって一番望んでいた事だった。しかし、今の一夏にはどう声を掛けてやれば良いのが千冬は解らないでいた。

今の一夏は自分を憎んでいる。それは紛れもない事実であり、自分に原因がある事も千冬は気付いていた。

彼から空白の三年間を訊こうとしても、一夏は教えるつもりはないだろう。それならば、彼の事を知ってるであろう勇人や止から訊くしかない。勇人は無理だったが止から訊くしか方法ない。

千冬はそう思っていたが、真耶が千冬の様子に気付き声を掛けてきた為に我に返り、再び教鞭を執り始めた。

「……チツ」

千冬を見た一夏は微かに呟くように舌打ちすると、ペンを取り始めた。因みに、この学園はIS関連の授業だけでなく、社会や国語等、一般の高校でもある教科がある為、問題は無い。

それに、IS関連の教科書は電話帳並みの厚さがあったが一夏達は束からISの知識を叩き込まれた為、問題はなかった。

「つたく……初日からゴタゴタに巻き込まれる何てな……」

二時間後、一夏と勇人は靴を片手に玄関の下駄箱で靴を履き替えていが一夏が不意に呟く。因みに周りには女子生徒達もいるが半分は寮へ帰るか、入りたい部活を見る為にいない。因みに止は居なかった。

止は六時間目終了後、千冬に放課後残るように言われたのだ。これには止は愚痴を溢すも、千冬は止に訊きたい事があるのと、千冬が真耶に頼んで勇人に止と同室である事を意味させるかのように寮室の鍵を二つ渡したのだ。

その為、止は渋々教室に残ったのである。一夏は靴を履き替え終えるも、勇人は何故か履き替え終えたにも関わらず、その表情は何処か腑に落ちないような表情を浮かべていた。

「勇人、どうした？」

一夏は勇人の様子に疑問を訊ねるも、勇人は、とある方角を見ていた。――嫌な予感がする――。勇人は心の中でそう呟いた。それは止の事であり、千冬が止を放課後残るよう言ったのも何かあると勇人は感じた。

――まさか――。勇人は何かに気が付いた。恐らく、あの事であるに違いない。勇人はそう直感すると自然と顔を引きつらせ、靴を持つてる手に力を入れる。

「勇人、どうしたんだよ？」

そんな勇人に一夏が訊ねると、勇人は一夏を見るや否や口を開い

た。

「すまない、俺は少し用事が出来た……悪いがお前は一人で寮に戻ってくれー後から止と一緒に前のお前の寮室へと向かう」

勇人がそう言うと、一夏は「えっ？」と言うも、勇人は靴を履き替え、止がいるであろう教室へと走った。一夏が呼び止めるも、勇人はその場から立ち去っていった。

「どうしたんだ？」

一夏は首を傾げるも、ポケットからある物を取り出し、それをぶら下げるように持ちながら眺める。それは鍵だった。その鍵は虚から貰った鍵である。

一夏はその鍵を眺めていたが、不意に後ろから声を掛けられた。刹那、一夏は表情を険しくし、鍵をポケットに戻し振り返ると、そこには鞆を両手でぶら下げるように持ちながら立っている箒がいた。

「何だ箒ノ之？　また俺に何か用か？」

「そんな顔をするな！　それに何か用ではない。一緒に帰るぞー良いだろ幼馴染みなのだからな」

箒は少し怒っているが、一夏の近くに勇人や止が居ない事に気がつき、頬が緩む。ああ、これで一夏と二人きりだ。箒は内心そう思っていた。そんな箒に一夏は舌打ちすると、箒を他所に歩き出す。

「待て一夏！」

「あつ、織斑君!!」

箒は一夏の後を従っていく形で歩くも、とある女子生徒が一夏に声を掛けてきた。清香だった。

「何かな、相川さん？」

一夏は不機嫌そうに訊ねると、清香は少し肩を震わす。一夏の目が何処か不機嫌そうであるのと、近くにいる箒が清香を睨んでいたからだった。

これには清香もたじろかない訳ではなかったが、清香は突然、少しニヤニヤしていた。その表情には何かをからかおうとしていた。

そんな清香に一夏は首を傾げるも、清香はある場所を指差しながら口を開いた。ーあつちに織斑君の恋人がいるよ？　ーと。勿論、

一夏は清香が何を言ってるのかは解らなかったがそれも直ぐに解った。

同時に箒も「なっ!」と声を上げるも、一夏はまさかと思いつながら、清香が指差した場所へと足早に向かう。箒は一夏の突然の行動にたじろぐも、一夏を追い掛ける。

一方、一夏は足早で清香が言ったと言う恋人を捜したが、そしてそれは直ぐに見つかり、同時に瞠目した。

その恋人とは、鞆を両手でぶら下げるように持っていた楯無の事だった。今の時間帯は夕方だったのか、楯無の水色の髪はオレンジが混ざったように変わり、白い制服もオレンジ色に変わっていた。

それに、周りには女子生徒が寮へと帰るにも関わらず、殆どが楯無を見ていた。

「あつ……」。楯無は一夏に気付く少し悲しそうな表情を浮かべる。周りも一夏に気付くが何処か期待していた。そんな楯無に一夏は瞠目し続けるも、直ぐに舌打ちし、楯無に歩み寄る。

刹那、近くにいた女子生徒達が黄色い声を上げる。彼女達は誤解とは言え、一夏と楯無は付き合っていると勘違いしている。

それに今、一夏は楯無に何て言うのかを女子生徒達は期待していた。勿論、一夏はそんなつもりはない。言うなれば、楯無に声を掛けるだけだが女子生徒達からは期待しかないだろう。

「どうした楯無? 誰かを待つてるのか?」

一夏が訊ねると、楯無は頷き、一夏を指差す。それを見た女子生徒達は黄色い声を上げる。

「俺かよ……それよりも何故だ? お前を待つ理由はない」

一夏はそう言うも、楯無は頷き、片手を制服のポケットに入れ、ある物を取り出し、それを一夏に見せた。

「それは……」。一夏は楯無が見せてきた物・鍵を指差すも、楯無は鍵を持っている訳ではない。楯無は鍵に着いている名札を持っている。その名札には『1052』と書かれていた。

「まさか……それって」

一夏はその鍵を問うと、楯無は顔を上げる。頬を紅くしていた。

「ええ……寮室の鍵……それも虚ちゃんから貰ったのと……その、一夏君と同室になったから……」

楯無は恥ずかしそうに言葉を続けた。その直後だった。ー！周りにいた、一夏と楯無のやり取りを見ていた女子生徒が再び黄色い声を上げる。さっきのよりも大きかった。

「嘘だろ……っ」

一夏は楯無の言葉にやるせなく思ったのか頭を抱える。恐らく、楯無に鍵を渡したのは虚だろう。

自分と楯無を同室にしたのも、その理由は楯無を励ます為の物なだろう。しかし、楯無と色んな誤解がある為、更なる誤解を生じる事になる。

一夏は虚に怒りを覚えながらも、楯無に訊ねようとした。

「一夏あああ?」

後ろから怒りのこもった声が聞こえ、一夏や周りの女子生徒達が声が出た方を見やると、憤怒の形相をした筈がいた。

ー！っ!? ー！。一夏は筈を見て下唇を噛むと、楯無の手首を掴み、楯無を連れて寮へと走る。

ー！あっー！。楯無は一夏の行動に頬を紅くしながら瞠目した。そして、一夏は楯無を連れて寮へと走り、筈は一夏を追い掛け、それを見た女子生徒が再び黄色い声を上げたのは言うまでもなかった。そして、夕日は沈み掛かっていた。

第41話

一夏が楯無を連れて寮へと走って向かっている間、勇人は学校にいた。しかし、勇人は表情を険しくながら足早で教室へと向かっていた。

理由は勇人自身が嫌な予感を感じたのと同時に、止の身に何か遭ったのではないのかを直感していた――それは当たった。

――嫌だよそんなの!?　――。――頼む!　一夏に何が遭ったのかを教えてくれ!　――。勇人が自分が所属している教室へと近づくと、二人の言い争うような声が聞こえた。

それを聞いた勇人は眉間に皺を寄せ舌打ちをする。その声には聞き覚えがあつたが、勇人は教室へと入る。

そこに居たのは、止と千冬だけだった。二人はさつきまで、とある事で言い争っていたが勇人が教室へと入った直後に勇人を見やる。

――勇人……!　――。止は勇人を見て驚く一方、千冬は勇人を見て顔を青褪める。一方、当の本人である勇人は憤怒の形相をしながら鋭い眼差しで、千冬をギロリと睨む。

勇人に睨まれた千冬は「?!」とバツの悪そうな表情を浮かべるも、勇人は二人の元へと歩み寄り、止に背を向け、千冬と向き合うように間に入る。

勇人は表情を崩さなかった。それも、目の前にいる千冬に対する怒りでもあつた。千冬は自分の警告を無視し、止から一夏の事を聞き出そうとしたのである。

それは本当であり、勇人の嫌な予感は当たった事をも意味していた。勇人が教室へと来る前は、千冬が止から一夏の事を聞き出そうとしたのだ。これには止も天然でありながらも、止は千冬に一夏の事を教えるつもりはなかった。

それでも、千冬は止から一夏の事を聞き出そうとした。二人のやり取りは勇人が来るまで続いていたが今は違う。

今は勇人が来た為に千冬は止から聞き出す事は不可能に近い事を意味し、彼等から一夏の事を教えてもらおう事をも出来なくなったのを

意味していた。

「貴様……」

勇人は千冬に怒りを覚え、両手を拳に変え力を入れる。それを見た千冬は俯き膝を突き、止は勇人を宥めるも、勇人の千冬への怒りは消える事はなかった。

「此処か……」

「ええ……」

一方その頃、一夏は楯無と共に寮のとある扉の前に立っていた。その扉は一見何の変鉄もない只の扉だった。が、扉の近くには表札のよくな物があり、そこには『1052号室』と書かれている。

そこまではまだ良いだろう。しかし、通路には疎らだが女子生徒は数人はいて、全員が全員、一夏と楯無を見ていた。

全員が全員、二人を見てひそひそ話をしているが何処か嬉しそうだった。さっきの事と今置かれた現状が原因だろう。一夏が楯無を連れて寮へと走った”、一夏と楯無は寮室でも同棲する程の仲になっっている”と。

それらは女子達の噂話に過ぎないが、恋話なら尚更だろう。因みに箒はそこには居ない――箒は此処に来る前に一夏に手刀で軽く叩かれ気を失っている。

今頃、別の女子生徒に介抱されているかほったらかしにされているだろう。

話を戻そう、一夏は扉の前に立っていたが、周りの疎ら程度の女子達の視線に耐えきれず、鍵を使って楯無と共に扉の中・寮室へと足を踏み入れる。

それを見た女子生徒達は黄色い声を上げるも、一夏は扉を閉めた。

「ふう……疲れた」

一夏は扉を閉めるや否や扉に凭れ掛かりながら不意に眩き、瞑目した。その表情は何処か怒っているよりも疲れの色が見える。

一方、楯無は俯いていて――その表情は何処か寂しい。そして、楯無は靴を脱いで、ゆっくりと部屋の中を歩く。

部屋の中はとても広く、薄型テレビや二つのベッド、クローゼットが置かれ、浴室やトイレ、台所等が設けられ、勉強用のパソコンやデスク等も設けられていた。

それはまるでホテル並とも言えるが二人には関係無かった。楯無は近くのベッドに腰を下ろし、鞆を奥。一夏は一夏で髪を搔きながら、部屋の中を歩く。

「全く……誰のせいでもなかったのやら」

一夏はそう眩くと鞆を起き、楯無は体を震わす。勿論、一夏は楯無の事を気にもせず窓の方へと歩み寄り、窓に背を向けながら腕を組む。

一夏は少し怒っていた、この怒りを誰にぶつけたら言いかが判らないでいた。勇人や止は無理として、何の関係もない女子生徒達は尚更である。千冬や箒つて線もあるが余り大事にしたくない。

それに、楯無と同室になったのも虚が原因であるが、虚とはある人物に頼んで、一夏と楯無を同室にしたのである（勿論、あのウサ耳を着けた人物が虚があるとある人物に対し、虚と同じような事を頼んだのだ）。

勿論、この事を一夏や楯無は知らない――何れは知る事になるだろう。楯無は……今は無理に等しい。今の楯無は一夏の前では罪悪感が一杯で弱気になっている。

「ふう……それよりもこれからの事をどうするべきか……更識？」

一夏は楯無を見て訊ねると、楯無は体を震わせ続けていた。――更識？　――一夏は楯無の様子に疑問を抱く。しかし、楯無は瞑目し、体を震わせながら自分を抱き締める。

「楯無、どうした？」

一夏は腕を組みながら、楯無に歩み寄る。楯無は震え続けていたが、一夏は楯無の肩に手を置き、揺らす。

「おい楯無、おい!？」

刹那、楯無は恐る恐る目を開けるも、目の前に一夏がいる事に気付
き「きやつ!」と言いなながら、一夏を突飛ばした。楯無に突飛ばされ
た一夏は「うあつ!!」と声を上げながら体勢を崩したのがそのまま倒
れる。

それを見た楯無は「あつ!？」と驚き、慌てて立ち上がる。刹那、楯
無は躓いて、一夏目掛けて倒れた。そして……。

「あつ!？」

楯無は一夏に抱き着くようにのし掛かるように倒れた。その光景
は楯無が一夏を押し倒したようにも思えた。幸いな事に周りには誰
もない。居たら居たで更に変な噂が流れていただろう。

すると、楯無は不意に一夏と目を合わせてしまった。一夏は少し
怒っていたが、楯無は一夏を見るや否や顔を紅くする。

「あつ、あつ、ごめんなさい!!」

楯無は起き上がるや否や一夏に謝る。一方、一夏はそんな楯無を見
て怒りを通して呆れるも一夏も起き上がり、直後に立ち上がると、楯
無を無言で見据えながら腕を組む。

一方、そんな一夏を見た楯無は言葉を詰まらせ、俯き、体を震わせ
る。また迷惑を掛けた。簪の誘拐事件での事、彼等に人殺しにさせた
事――これらは許されない事。

しかし、これらは軽いが一夏に抱き着き、お姫様抱っこしてもらっ
た事、薫子に誤解を招き取材をさせてしまった事、虚（大半はウサ耳
を着けたあの人物）の手配で寮室が一緒になった事、ここへ来るまで
一夏に手を繋いで貰った事。

これ等は女子達に良からぬ噂を流してしまい、箒と言う女子に変な
誤解をも生じさせてしまった。

これ等は全て自分のせい――自分があの時、一夏に誘拐事件を話し
なければ、今日抱き着かなければ、一夏にこんな目に遭わさなくて済
んだのだ。

それを考えるだけでも辛い。そして、楯無は堪えきれないのか、目
に涙を浮かべる。

「お、おい!？」

一夏は楯無が泣いた事に少し戸惑う。それでも楯無は涙を止めず、嗚咽を上げる。そんな楯無に一夏は困り果てるが楯無は泣き続ける。これには一夏も困るが、一夏は変な噂を流されるのを嫌だった。

これ以上、噂が流れると自分と楯無が付き合っていると言う広がり、この状況だと自分が楯無を泣かしたようにも思われてしまう。

「どうすれば……っ!？」

最早、噂は消えないし自分は女性の扱いは下手である。最早、彼女を宥める方法はあれしかなかった。抱き締めて慰めても嗚咽は消えないし、何より扉の外まで響くだろう。

もう、あれしかなかった。それは一夏が他の方法を思い付かなかったからだろう。そして、一夏は楯無を抱き締め、楯無を……。

「っ!？」

楯無は瞠目した。楯無は嗚咽を上げてはいなかったーその代わりに、楯無は一夏にキスをされたのだ。

そのキスは一夏は楯無を慰める為、楯無の嗚咽を止める為の唯一の行動でもあった。例えば口を塞いだとしても効果はない。だから一夏は嫌々ながらも、楯無に対しキスをしたのだ。

それは効果はあった。楯無は泣きながらも突然の事で嗚咽を止め、瞠目したまま一夏を見据える。

一方、一夏は楯無には瞠目していたが何処か焦っている。楯無に何を言われるのかを気にし、彼女が暴れないかを心配していた。

勿論、楯無は暴れる気配を見せてはいない。そして、一夏が突然とは言え、二人がキスをしてから数秒後、二人は放れる。

プハツ……。二人の口から僅かだが熱い吐息が見えた。

「い、一夏……君?」

楯無は今だあり得ないと言った表情をしながら自分の唇に手を当てながら、一夏に訊ねる。

一方、一夏は一夏で少し頬を紅くしながら、下唇を噛み楯無に背を向ける。

二人の間には気まずい空気が流れていた。それも、甘い空気と言え

ば良いのだが、二人には判らなかつた。

第42話

「……………」

あれからどのくらい経ったのだろうか、二人の間には色んな意味での重苦しい空気が流れていた。それは良い意味でもあり、悪い意味での空気でもあった。

ことの発端は一夏が楯無にキスした事から始まったのだ。その為、一夏は表情を険しくしながらも頬を赤くし腕を組み、楯無は両手を自分の両頬に当てながら頬を赤くしており、二人は互いの相手に対し背を向けている。

誰から見ても、二人に何が遭ったのかを気にするだろう。幸いな事にその事を目撃したのは誰もいない。居たとしても、二人に更なる誤解を生み出し、更には煩い奴が木刀片手に楯無に襲い掛かるに違いない。

話を戻そう。二人は互いの相手に対し、掛けてやる言葉が見つからないでいて、時間だけが過ぎて行く。この状況を打開出来るのはどちらかが声を掛けるか、誰かが部屋に入ってくるのを祈るしかない。

勿論、後者の方が当たった。それは、誰かが部屋の扉をノックしたのだ。二人は扉の方を見やると同時に扉が開き、ある人物達が部屋の中へと入ってきた――勇人と止の二人だった。

「勇人、止……………」

一夏は部屋に入ってきたのが勇人と止の二人だと気付くも、少し驚いていた。何故なら、二人は何か嫌な事が遭ったのが判るように表情は何処か怒りに満ちている。

勇人は眉間に皺を寄せながら腕を組み、止は頬を膨らましながら両手を頭の後ろに当てていた。

二人の表情は何が遭ったのかか誰から見ても判る。現に一夏は瞠目しており、楯無は二人を見るも、不意に一夏を見て慌てて顔を逸らし、恥ずかしそうに両手の人差し指と人差し指を当てながらモジモジする。

しかし、そんな楯無を他所に一夏は二人に訊ねる。

「どうした二人共？ 何か遭ったのか？」

一夏が訊ねると、勇人は片方の眉をピクツと動かし、止は止でその間に扉を締め鍵を掛けるが一夏の言葉に何も言わず更に頬を膨らます。

何が遭ったのは本当だった。それでも、一夏は首を再び訊ねる。

「嫌な事でも遭ったのか？ それに止が何かやらかしたのか？」

一夏の言葉に止は思わずズッコケそうになるも、勇人は首を左右に振ると、勇人は一夏に鋭い眼差しを向ける。それを見た一夏は首を傾げるも、勇人は自分や止に遭った出来事を一夏に話そうとするも、楯無に気付く。

「それよりも、あの女はどうしたんだ？」

勇人は、頬を紅くしながらモジモジしている楯無を見ながら指差す。一夏と止も楯無を見やるも、楯無は三人に背を向けていた。

「嫌……あの、更識はちょっと……それよりもどうしたんだ？」

一夏は楯無の事を二人に話そうとしたが、二人が部屋に来た事を訊ねる。それを聞いた二人は互いを見ると軽く頷き、直ぐに一夏を見るや否や、勇人が口を開き、ある事を話した。

「何だと……あのクソ女があ……！」

一夏は勇人から、勇人と止自身の身に起こった出来事を聞かされ、千冬への怒りが込み上げてくるのと同時に千冬への憎悪が込み上げてくるのを感じ歯を食い縛る。

実は勇人は、千冬が自分や止から一夏の事を訊き出そうとしたのだ。それは一夏にとって一生消える事のないトラウマを思い出させ、ケルティツクとの思い出を汚すような物。

それを愚問とも言える事を千冬はしたのだ。一夏から見れば下らないと言うよりも、初めからと言うよりも全くと言って良い程無いが、千冬とはよりを戻し、仲直りしようと言う考えは完全に無くなった。

そんな一夏に勇人は悲しい目で見つめ、止は一夏と勇人の話が長

かったのかデスク近くにある椅子に座りながら、一夏を見て何も言わなかった。

「え、えっ?」

一方、楯無だけは違っていた。

楯無は三人の会話を聞いて何も解らないでいた。

そうだろう、楯無は三人の身に遭った事を知らないと言うよりも、知らない方が良いからだ。勇人が話したのは一夏と千冬との事であり、プレデターの話をしてはいない。

話したら話したで余計ややこしくなるのと、いくら外からの干渉は出来ないIS学園でも全世界かIS委員会から何をされるかは解らないからだ。

「俺達はお前の事を訊かれたが、俺達は何も言わなかった」

「そうだぜ? 幾ら身内とは言え、身内の事を聞くのはどうかしているからな?」

勇人は腕を組みながら言い、止はふてくされながらそう言った。二人は一夏の部下であつても仲間であり親友でもある。

それを、一夏の姉である千冬が一夏の事を訊ねてきたのは許さなかった。今更後悔しても、一夏は千冬の元へと戻る気はないし、本人の気持ちも尊重しなければならぬのだ。

しかし、二人から話をされた一夏は俯き、両手を拳に変え力を入れる。

「ごめん二人共……俺のせいで……」

一夏は怒りを抑えつつそう言った。本当なら怒りをぶつけたかったが二人は何も悪くない。悪いのは千冬である。一夏は自分の姉のせいで二人にまで迷惑を掛けた。

それは一夏にとって何よりの二人への罪悪感を生み出す。そんな一夏に、勇人は悲しそうに見つめ瞑目し、止も止で一夏の気持ちを理解しているのか何も言えず、慰める言葉が見付からず声を詰まらせている。

三人の間には重苦しい空気が流れ始める。刹那、止が楯無に気付き、一夏に訊ねる。

「そう言えば、更識……さんは何故此処にいるの？」

止は楯無を手で指す。そんな止に訊かれた一夏は顔を上げ、止を見た後に楯無を見る。

「あっ……」

楯無は一夏が自分を見た直後に声を上げ頬を紅くしながら、一夏から背を向け、モジモジする。そんな楯無に一夏は頬を紅く、頬を掻く。

「嫌、ちよつと……そのお……彼女が俺の……そのお」

一夏は二人に掛けてやる言葉が見付からない。言えば言えばでややくしくなるのは目に見えるし、何より同室である事を話せば二人にからかわれる心配は無いものの、止は羨ましがるし、勇人は自分を見て不敵に笑うだろう。

嫌、女子達の噂になつていから無理に等しい。一夏は何て言えばいいかで悩む一方、止は首を傾げ、勇人は瞑目している。

止は兎も角、勇人は一夏と楯無が同室である事は知っていた。それも黙っていたのは一夏が自分から言うのを待っていたのだ。そして、一夏は観念したのか、恐る恐る話した。

「同室……ッ!!!」

止は驚きの余り叫び、勇人は止の叫び声に瞠目し、一夏と楯無はたじろぐ。そんな三人とは裏腹に止は体を震わせながら、一夏を指した。

「い、一夏君？ き、君はさ、更識さんとは、ど、同室なの？」

止は震える指を一夏に指しながらそう言った。その言葉に反応したのか一夏は恥ずかしそうに頷き、楯無は両手で顔を覆い隠すも耳も真っ赤にしていた。

それは二人が当たりとも言える行動にも思えた。しかし、止は顔を青褪めながら苦笑いする。

「そ、そうなんだ……う、羨ましい……っ!!」

止は顔を両手で覆い隠しながらそう言った。しかし、一夏と楯無が同室になったのは止のせいである。何故なら、止はIS学園に入学す

る前に一夏に更識姉妹の話をしたのだった。

止は更識姉妹が心配だったのだ。幾ら二人の前から消えたと言っても、彼女達を心配させているのでは、と一夏に言った。

一夏は一夏で気にするなどとは言ったが、それを束が聞いてしまい、束はIS学園入学当日、この学園の学園長に頼んで一夏と同室にするように頼んだのだ。

虚と束とでは束の方が偉く、理事長は束の意見を尊重し、一夏と楯無を同室にしたのである。それも楯無には別の理由があるもの、それを一夏達は知らない。

そして、一夏がその事を知ったら、止に何て言うのかも、一夏や止自身も判らないだろう。

「取り敢えず、今はそんなのはどうでも良い……今は、そのお」

一夏は言葉を詰まらせる。刹那、扉の方から大きな音が聴こえた。三人は突然の事で驚くも、勇人は何も動じず、ゆっくりと扉の方を見るやる。

扉の外から叩く音が聴こえるもそれは大きくなっていく。それは、とある人物が扉を強く叩いているからだった。

それは一夏や楯無に用があるか、勇人か止に用があるのかは判らないが、一夏は嫌な予感がし、楯無の元へと歩み寄り、楯無を背中に隠す。

楯無は一夏の行動に瞠目するも、扉の外から女性の声が聴こえた。

ー、一夏！ この扉を開ける!! ーと。

第43話

「――何だ？　またアイツか？　――。室内に勇人の呆れたような言葉が響く。それは室内では小さい――それもその筈、扉の外にいる主が扉を叩いているのと、扉の叩く音が外だけでなく室内にも木霊している。」

室内にいるのは一夏と楯無、勇人と止の四人がいて、全員が全員、扉の方を見ている。楯無は兎も角、一夏達は扉の叩いている主を知っている。

その主は一夏に用があり、一夏と楯無の事を訊こうとしているのだろう。すると、楯無は叩かれている扉を見て、一夏の服の背中を強く掴みながら顔を埋める。

「――お、おい？　――。楯無の行動に一夏は戸惑い楯無を見ると、楯無は何故か震えていた。何故なら、楯無はまた自分のせいで一夏に迷惑を掛けているのではと思っていた。」

勿論、何も言わなくても当たりであり、楯無のせいでもある。彼女のお陰で一夏は周りから付き合っているのではないのかと噂され、その中の一人が（扉を叩いている主でもあり、他にもいるかもしれない）その事を快く思っていない。楯無はそう思うと震えが止まらず、無意識に一夏にすがり付いてしまった。

一夏は一夏で楯無の行動に戸惑うも、勇人は扉を見て溜め息を吐くと、止に言った。

「止――悪いが開けてやれ」

「――えっ？　――。止は目を見開きながら惚けたような声を上げる。そんな止に対し、勇人は親指で扉を指す。行けと言う合図だろうが止は嫌な顔をする。」

止だって開けるのは嫌だった。止は扉の主がああ煩い奴だっけ知っているし、何より何をされるのは知った事ではないが何をされるのは目に見えているし、一夏に迷惑を掛けるからだ。

そうなれば、一夏や楯無に危害が及ぶし、自分にも危害が及ぶ。止はその事を言おうとしたら勇人は先に口を開く。

「安心しろ、俺が居るから何もしないし、何か遭ったら奴は俺を見て何も出来ないからな？」

勇人は腕を組む。そんな勇人に止は納得する。確かに勇人が居るし、あの煩い奴は迂闊に手を出さないだろう。止は一夏を見ると、一夏は「よせ」と言いたそうに表情を険しくしているが、止は「大丈夫だよ」と言い、立ち上がると、扉の方へと歩み寄る。

後ろから一夏が呼び止めようとしているが止は扉の前に立ち、鍵を解き、ドアノブに手を掛け軽く捻る。

刹那、止は扉とぶつかり、そのまま扉に押され、横の壁に後頭部に叩き付けられる。前は扉、後ろは壁であり、止はサンドイッチの具のように扉と壁に挟まれた。

しかし、扉を叩いた主はズガズガと部屋へと足を踏み入れる。その主は長い髪をポニーテールにしているが髪を揺らしている。その主は一夏を見るや否や瞠目し、直ぐに険しい表情を浮かべながら歯を食い縛る。

その人物は箒だった。箒はさつきまで一夏により気を失われたがさつき気が付き、勇人が一夏に話をしている間に寮へと来ていたが、扉が閉まっている為にさつきまで扉を叩いていたのだ。

しかし、箒は一夏に怒っている訳ではなかった。勇人を警戒しているよりも眼中にはなかった。箒が見ているのは一夏の後ろにいる楯無に怒りを表していた。

箒は一夏の心を掴んだ（それは誤解だが）楯無が一夏をタブらかしたのではないのかと思っていた。その為、一夏からある事を問い詰め、楯無から引き剥がそうとしていた。

それに箒が一夏の事が好きである。それは、周りは知らないが箒自身が哀しい過去を持つているが為に……。話を戻そう、箒は楯無を睨み、一夏は楯無を守る形で背に隠しながら、箒を睨み、楯無は一夏の背中にすがり付きながら震え、勇人は何もしないで箒を睨み、止は未だサンドイッチの具のように挟まったまま気を失っている。

そして、扉の外には何故か彼等のやり取りを気にしているのか、箒が扉を叩いていたのを気にしているのかは判らないが女子生徒達が

いた。

各々の思惑がある中、室内は重苦しい空気が、外は好奇心と重苦しい空気が混じったかのような空気が流れている。

刹那、口を開いたのは一夏だった。――篠ノ之、何の用だ？　――と。

「何の用ではない！　一夏、さつきは良くも気を失わせてくれたな！　それにその女とはどういう関係なのだ!？」

箒は一夏の楯無を指差そうとしたが一夏を指しているようにも思えた。そんな箒に一夏は眉間に皺を寄せる。

「何の関係って……俺と楯無は……」

一夏は楯無の事を訊かれて何も言えなくなりそうになるも、瞋目し少し沈黙した。箒から何かを言われそうになるも、一夏は溜め息を吐き、何かを決意したかのように目を開け、箒を見据える。

「俺と更識は……嫌、楯無は付き合っているからだよ」

一夏は箒にそう言った。刹那、楯無と箒は瞋目し、勇人も瞋目し、女子生徒達からは黄色い叫び声が聞こえた。

それは一夏の彼女宣言にも思えた。が、それは違う、一夏は箒が楯無に危害を及ぼさないようにもする為だった。

あの噂は最早誤解とは言えない。言え言えで楯無や簪にも危険が及ぶ。ならば、自分が箒から何かをされても良いと思っていた。「う、嘘だ!？」　そんなのは認められん!!　第一、一夏は鈍感で私の気持ちに気付いて居なかったではないか!？」

箒はその事を指摘するも、一夏は溜め息を吐く。

「それは誤解だ。俺はお前の気持ちを気付く以前に幼馴染みとは思っていない」

「嘘だ嘘だ!!　お前はその女にタブラカされたんだろ!？」　そう言ってくれ!？」

箒は一夏にそう願う。しかし、一夏は首を左右に振ると後ろにいる楯無を見る。――楯無、俺から離れてくれ――と囁く。

楯無は一夏の言葉を聞くと同時に一夏を見る。一夏は表情を険しくしており、楯無は何も言わず一夏から離れる。刹那、一夏は楯無と

向き合い楯無を抱き締め、皆に見せるように横向けになりながら、楯無にキスをした。

「なっ!？」

「キヤーーーーーーッ!!!」

楯無は突然の事に見開き、箒は驚き声を上げ、女子生徒達は黄色い叫び声を上げる。誰から見ても一夏が楯無と付き合っているのを釘付ける。それは一夏にとっても楯無を守る為、箒を自分達から離れさせる為の行動でもあった。

そのキスはさつきよりも長く、そして切ない。一夏と楯無から放れるも二人の息は少し熱かった。

「これが俺と楯無が付き合っている証拠だよ」

一夏は箒にそう言った。楯無は一夏を見据えたまま頬を紅くしながら何も言わず、一夏を見つめている。

一方、勇人は一夏を見て瞠目していたが直ぐに微笑み瞑目した。これで最早、誤解は止まらないだろう、と。

だが、箒は体を震わせながら泣いた。

「嘘だ嘘だ嘘だ!! 一夏は鈍感だからそんな事をしたんだ! 認められん! 認めないいいっ!!」

箒は楯無に迫ろうとした。刹那、勇人は箒が自分を通り過ぎた直後に腕を捻り足止めした。

「何をする貴様!?! また邪魔するのか!?!」

箒は涙を流しながら、勇人を問い詰めるも、勇人は眉間に皺を寄せながら口を開いた。

「いい加減諦めろ! 一夏は更識と付き合っている! 彼奴等の思いを踏みにじるな!」

「煩い煩い! お前に私の何が解ると言うのだ!?! 私がどんな辛い思いをしているのかは解って……解ってたまるかあああ!!」

箒は泣きながら、勇人から放れる。勇人は箒の力に驚くも、箒は泣きながら部屋を出ていく。

「フギャッ!?!」

すっかり忘れていたが止は気が付くも、直後に箒が再び扉を退かし

走り去って行き、止は再び扉と壁に挟まれる。

それを見た一夏と勇人は驚くも、止は再び気を失い、今度は横向けに倒れる。

「止……」

そんな止に、とある人物が止を心配し駆け寄り、止の近くに屈む。裾は長かったが止の体を揺する。

勇人や一夏も駆け寄り屈み体を揺するも、止は眼を覚まさない。

「止、止！　ちっ、眼を覚まさないか……」

勇人は止が気を失っているのに気付き舌打ちすると、止に肩を貸しながら立ち上がると、一夏を見る。

「一夏、俺は止とは同室だから止を連れて部屋を出る。その間にお前は更識さんと一緒に居ろーあの女がまた来るかも知れないからな？」

「あ、ああ……」

勇人の言葉に一夏は納得し頷くと、勇人は微笑み、気を失っている止を連れて部屋を出た。途中、裾が少し長い少女も止を心配し勇人と共に部屋を出ると、勇人は扉を閉めた。

部屋に残ったのは、一夏と楯無であるがこの部屋の住人である為仕方ない。

「はあ……」

一夏は溜め息を吐くと、近くのベッドに腰掛ける。最早、噂は悪い方向へと行くだろう。それはそれで仕方がないが、あんな事を言った手前、仕方がない。

そんな一夏に楯無は気まずそうに俯くと、頬を紅くしながらモジモジしていた。二人の間には重苦しい空気が流れるも、最早、誤解は別の意味での嘘である意味での本当になってしまった。

明日から学園中の噂となるだろう……。

第44話

「……………」

一夏が楯無と付き合っていると嘘の宣言と、一夏が楯無にキスをしてから数分後。此処は勇人と止が同棲している寮室。そこは一夏や楯無が同棲している寮室とは全く同じであり、置かれている物も全て同じだった。

しかし、違うと言えば止が扉近くのベッドに仰向けに寝ているのと、そんな止を心配そうに見つめている少女、デスク近くの椅子に座りながら腕を組みながら瞑目している勇人がいた。

止は兎も角、勇人と少女には会話は無い。あるとすれば、重苦しい空気が流れていると言えば良いだろう。刹那、止の瞼が眉間に皺を寄せるように微かに動く。

「あつ、止が起きるよはやはやく」

少女は表情を明るくし、勇人は瞑目しながらも瞼の片方をピクピクと動かしていた。ーう、うん……。そして、止はゆっくりと両目を開ける。止が最初に目にしたのは、長い裾をヒラヒラと動かした、目がトロンとした少女がいた。

ーここは……。止はそう呟きながら起き上がると辺りを見渡すも直ぐに気付き眼を見開きながら。

「ここは俺と勇人の寮室!」

止は此処が自分の気付くが、頭に激痛が走るのに気付き手で頭を抑える、眼を閉じながら苦虫を噛んだような表情を浮かべる。

「あつ……。痛た」

「ダメだよ寝てなきやく」

そんな止に少女が寝るように促すも、止は少女に気付き「さつきから、君は誰?」と訊ねる。

その少女は背中にまで伸びている茶色い長い髪に両側には、某アニメのマスコットの生き物を模したヘアアクセサリーで両側の一部を結び、トロンとしたような黒い瞳。

誰から見てもやる気無さそうにも思えるが、少女は嬉しそうなのか

裾をヒラヒラと動かしている。そんな少女に止は眼をパチクリとしているが、少女が何者かを再び訊ねようとした。

「そいつは本音、ほんね布仏本音だ」

勇人が口を開き、少女の呟いた。それを聞いた止は「えっ？」と惚ける。そして、彼女の名は布仏本音。一夏達が所属している一年一組の生徒である。

それに本音が此処にいるのには理由があつた。それは、目の前にいる止にあつた。が、止自身は本音の事をよく知らない。何故なら、自己紹介の際、止は寝ていたからだつた。

止が起きていたら彼女の事を良く知っていたか顔見知りになつていたに違い。嫌、本音自身が止を気にかけている事を止自身は知らないでいた。

止は本音を見るも、本音は止を見ながら「ニユフフ」と笑つていた。そんな本音に止は何も解らず首を傾げ、勇人は何故か頭を抱えていた。

此処は一夏と楯無が同室となつている寮室。その寮室には一夏と楯無の二人しか居なかつたが何処か重苦しい空気に包まれていた。

一夏はベッドに腰掛けたまま俯いており、楯無は楯無でデスク近くにある椅子に腰掛けながら俯いていたが頬を紅くしていた。

二人の間には会話はないものの、片や気まずそうに俯いてるのと片や罪悪感があるのか俯いている。しかし、それは数分も続いている。誰か居たらそんな空気に耐えきれず何かを訊ねるに違いない。

「ね、ねえ、一夏君？」

刹那、楯無が口を開いた。こうなつたのは楯無が原因だつた。一夏と楯無は数分前にキスをしたのだ。それは周りに自分達が付き合っているのを誤解させているからだつた。

一夏と楯無は付き合つてはいないがあんな事をすれば誰から見ても付き合つていると思うだろう。話を戻そう。楯無は一夏に訊ねる

も、一夏は顔を上げ楯無を睨む。

その眼差しは鋭く、それを見た楯無はビクツと肩を竦めると再び俯き体を震わせる。一夏は怒っている、それも自分が原因であるのか楯無は下唇を噛み締めながら泣きそうになる。

しかし、一夏はそんな楯無を見て溜め息を吐く。一夏は別に怒っている訳ではない。一夏は不機嫌である為だった。

「おい楯な……うん？」

刹那、自分が着ている制服の右腕部分から音が聴こえ、右腕部分を捲る。一夏は右腕にコンピューターガントレットを着けていた。音の正体はコンピューターガントレットからの通信が入った為だった。

一夏は楯無を気にしながら立ち上がると、楯無に歩み寄り、楯無の前に立ち止まる。

「……あつ……」。楯無は一夏が目の前にいる事に気付き顔を上げ、一夏を見上げる。一夏は未だ表情を険しくしていた。

それを見た楯無は再び俯くも再び体を震わせる。刹那、楯無は頭に何かが置かれているのを感じ、顔を上げる。

一夏が楯無の頭を撫でていた。楯無は一夏が自分の頭を撫でている事に頬を紅くしながら瞠目する。一方、一夏は楯無にこう言った。「少し出掛けてくる。ー夕食は一緒に出来ないけど、篠ノ之が絡んできたら自分で何とかしてくれ」

一夏はそう言うと、楯無から離れ、扉の方へと向かう。刹那、扉が開き、誰かが入ってきた。勇人と止だった。

二人は表情を険しくしているものの一夏も表情を険しくしている。彼等もまたコンピューターガントレットから通信が入り、一夏と合流しようとして一夏がいる寮室へと向かった。

そして、彼等はエンフォーサーに呼ばれたのだ。エンフォーサーはIS学園にいて、この学園にある森林地帯にいた。

三人はエンフォーサーに逢う為にそこへと行くつもりだった。そして、一夏は寮室を出る前に楯無を見る。

楯無は少し驚いていたが一夏は何も言わず、寮室を出ると、扉を閉

めた。そして、寮室には楯無がお留守番と言う意味で一人しかいなかった。

「うぐっ、ひぐっ……」

所変わって、此処は箒と、とある人物が同棲している寮室。そこにはとある人物は居ないが、ベッドで顔を埋めながら嗚咽を上げている者がいたー箒だった。

箒はさつき（誤解だが）失恋したのである。それは幼なじみでもあり初恋の相手だった一夏に想いを伝える前に、一夏が（それは誤解でもあるが）楯無にキスをしたのだ。

あれは箒にとってショックでもあり、一夏のファーストキスの相手は自分ではなくなったのも意味していた。箒にはショックが大きい、一夏は箒を幼馴染みとも思っていない。

にも関わらず、箒はそれを認めようとはしなかった。

「一夏……何故だ？ 何故私を見ようとしなのだ!? 何故、私の事を心配しないのだ!？」

箒は泣きながらそう叫んだ。何故なら、箒には悲しい過去があった。

あれは小学校の時だった。小学校の時、自分は男みたいな女と苛められていた。しかし、そんな自分を助けてくれた人がいた。それが一夏だった。

一夏は箒を苛めていたのを見て見ぬ振りには出来なかったのと、男子がよってたかって一人の女子を苛めているのが許せなかったからである。

そこまでは良いだろう。それ以上が問題だった。それ以来、箒は転校するまで一夏に付き纏い、好きな剣道をさせていた。

それは転校するまで続いた物の、箒は何時の間にか一夏を想いを寄

せ始めていた。転校日は一夏とは別れる事になるも、箒はそれ以降の小、中学校生活は辛い物思い出ばかりだった。

箒を忌み嫌うか快く思わない者達がいた。その者達は束が造ったISにより、女尊男卑になり、女性のせいで家族が仕事を止めさせられ、家庭が崩壊した者達である。

彼等は家庭が崩壊したのも箒の姉である束のせいであると同時に、箒に束の変わりとして八つ当たりしたのである。

箒は孤独だった。友達が居なかった。居たとしても彼等と同じように苛められると思ったからである。

箒は誰にも助けを求める事が出来なかった。束を使えば何とかするだろうが箒は姉が憎い為何も言えなかった。

家族も束のせいで離れ離れになり、相談出来る御内も居ないのと、転校を繰り返す日々を過ごしていた。だが、箒には唯一許すのは一夏であり、一夏が自分を助けてくれるのだと。

にも関わらず、一夏は行方不明になった。箒から見れば束を更に憎むだけでなく、一夏が居なくなつたのは箒には更に孤独を味わわせるのを意味していた。

箒は今日までの六年間、一夏が居ない日々を孤独に過ごしてきた。そして今日、一夏が生きてたのと再会したのは予想外かつ、箒が孤独だった日々を穴埋めするには充分な程だった。

なのに、なのに……一夏は拒絶し、楯無を選んだのである。箒から見れば何もかも信じられないのだろう。

「私はお前に逢いたかった……何で、何でなんだああ!! ……ああああつ!!」

箒は泣き叫んだ。その叫び声は箒自身の哀しみが増しているのを意味している。勿論、それは周りから見れば失恋とも思うだけであり、箒自身の哀しみを知らず居なかった。

そして、箒の泣き叫ぶ声は扉の外にまで響くも、扉の前を通り過ぎる女子達は箒に同情しているかは解らなかった。

第45話

数分後、ここはIS学園の森林地帯。そこは余り広くはないが、生徒が迷子にならない為でもあった。

そんな場所に一夏、勇人、止の三人がいた。止は鼻歌をしながら、一夏と勇人は表情を険しくしながら辺りを伺っていた。

何故彼等は、こんな場所にいるのかは、三人はコンピューターガンレットで、ある人物に通信と言う形で連絡され、ここへと来たのだ。そして、ある人物が三人の前に姿を現す。三人はその人物を見やると、その人物は宇宙人だった。人間よりも一回り大きな体格に身体のうちこちには胸当てや腕当て等の軽めの防具を着け、顔には一本の鋭く縦長い角があるさつぱりとしたマスクを着けていた。右手には、最先端技術をよういた三つの小さな砲身を持っていた。

「エンフォーサー……」

一夏はその宇宙人をエンフォーサーと呼ぶも、エンフォーサーは右腕に着けているコンピューターガンレットを操作する

「久シブリダナ一夏、勇人、止」

ガンレットからくぐもった声が流れるも、エンフォーサーは操作を続ける。因みに一夏は、この学園に来る前にエンフォーサーに連絡した為、何の問題もない。

「俺が来タノハ、エルダーカラアル物ヲ渡シ、アル事ヲ話セト命ヲ受ケタノダ」

「エルダーが!？」

一夏はエルダーと言う者の名を聞いて驚き、勇人は瞠目し、止は一番驚いていた。

「マア落ち着ケーソレヨリモ、コレヲ渡スノガ先ダ」

エンフォーサーはコンピューターガンレットを操作するのを一旦止めると、右手に持つてる三つを、一夏達に一つずつ渡す。

「これは……プラズマキャノン砲の砲身?」

一夏、勇人、止の三人はエンフォーサーからとある武器を渡された直後、一夏は驚きを隠せずそう叫んだ。一方、勇人はプラズマキャノ

ン砲の砲身を眺めたまま何も言わず、止はプラズマキャノン砲を見ているにも関わらず一番驚いていた。

プラズマキャノン砲ーそれはプレデター一族にとって唯一の遠距離武器でもあり、最強の武器として名高い。それはどんな相手も即死に出来、致命傷を負わせ、重傷を負わず事も出来る。

しかし、それはプレデター一族の間では持つ事は許されず、持つ事が出来るのは成人式を成し遂げたベテランプレデター達だけであり、その他のプレデター達は成人式を成し遂げない限り持つ事は許されず、他の星へと行く時にだけしか持たされる事を許されない。

反面、プレデター達がプラズマキャノン砲を危惧していると言い換えれば良いだろう。何故なら、プラズマキャノン砲はプレデター達から見れば諸刃の剣とも言えるからだった。

「ソノ武器ハエルダーガオ前達ニト特別ニ造ツテクレタ」

エンフォーサーはコンピューターガンレットを操作していると、ガンレットからくぐもった声が流れる。エンフォーサー自体がコンピューターガンレットを通して、一夏達に説明していると言い換えれば良いだろう。

そんなエンフォーサーに一夏が訊ねる。

「で、でもエルダーは何故、俺達にプラズマキャノン砲を渡してくれたんですか!?! これは普通、ゼノモーフを討伐するのを生業とするクリーナーや成人式を成し遂げたプレデター達しか与えられない筈です!?!」

一夏はエンフォーサーを問い詰める。そんな中、勇人は鋭い眼差しで、止は首を傾げながら、エンフォーサーを見ている。

三人が三人、エンフォーサーがコンピューターガンレットを通して何かを言うのを待っていた。エルダーが何故、自分達にプラズマキャノン砲を渡したのと、エルダーが何の為にエンフォーサーを自分達同様地球へと赴かせたのか? 何の為にこの学園へと来たのか?

一夏達をそれを知りたかった。

それらを全て知っているのはエンフォーサーである。当の本人であるエンフォーサーは俯いていた。そして、エンフォーサーは何かを

決意したのか顔を上げ、三人を見る。

一夏と勇人はエンフォーサー自身が何を言っても何も動じないという意味をしているのか表情を固くし、止に至っては何か言われても動じらるだろう。だが、エンフォーサー自身もエルダーの命に驚きを隠せなかったのだ。

あれはエンフォーサーにとって何よりも驚愕の真実とも言え、エンフォーサー自身に辛い思いや、彼等自身が辛い思いをするのも目に見えている。

だが、何れ解る事であるのとエルダーが彼等にプラズマキャノン砲を渡したのも納得いく。エンフォーサーは軽く頷くと、コンピューターガンレットを操作しようとした。

刹那、近くから一夏を呼ぶ少女の声が聞こえ、一夏達やエンフォーサーは声が見た方を見る。声はどんどんと大きくなるのと、誰かがこつちへと来る事に気付く。エンフォーサーは一夏達を見ると、コンピューターガンレットを操作する。

ーコノ話ハ後日ハナスー。コンピュータガンレットからくぐもった声の流れると、エンフォーサーはコンピューターガンレットを操作して身体を透明にした。

その間に一夏達はエンフォーサーの言葉に驚くも、エンフォーサーはその場から離れるように木に飛び移り樹々をジャンプしてその場から離れた。

「一夏くーん、何処なの一夏くーん」

少女の声が大きくなるのは変わらない。しかし、一夏はプラズマキャノン砲を勇人に投げる形で渡すと、こう伝えた。

「声の主は解っている……だけど、お前達は先に戻ってくれ」

一夏はそう言うと、声が見た方へと走る。止が一夏を止めようとして追い掛けるも足を挫き転ぶ。その少し後に止は起きあがるも、挫いた足首を両手で掴みながら座り、そのまま激痛で顔を歪める。

そんな止に勇人は呆れ頭を抱えるも、少しの間そこにいて、止に肩を貸す今で寮へと戻ったのは言うまでもない。

一方その頃、一夏は声がした方へと向かう為、森の中を歩いていたが、ある人物と逢う。その人物は一夏を捜していた者だったのか一夏を見て安堵する。その人物は楯無だった。

「――更識？　――。一夏は楯無を見て呆れながら両手を腰に当てる。一方、楯無は何も言わず一夏を見据えていた。

「何しに来た更識？　それに俺が言った事を忘れたのか？」

「そ、それを守れなかったのは、ご、ごめんなさい――で、でも一夏君が勇人君や止君を連れて何処かへ行つたから心配になつてそれで……そ、それに一夏君達が森へと行くのを見たつて人が居たからそれで……その」

楯無は理由を話すも、一夏は呆れながら頭を抱える。

「それは理由はならねえよ……第一、何しに来た？　俺を捜しに来ただけなのか？」

「ち、違うわ……私は只、一夏君が森の中で何をしているのかを気になつたから、それに一夏君、私のせいで学園中から変な誤解が流れているし……そ、それに」

楯無は身体を震わせる。

「一夏君、私達の為に何度も助けてくれた――誤解を招くような事を……なのに私は何もしていない……」

楯無は一夏に背を向けるも身体を振るわせ続けていた。しかし、楯無は一夏に罪悪感があるのを印象付けるのと、楯無自身が一夏の前では弱気になっているのも目に見えていた。

が、そんな楯無に一夏は溜め息を吐き、楯無の前を近付き、楯無の隣にまで来ると、無言で楯無の頭を撫でる。

楯無は一夏の行動に驚くも、一夏は俯き、楯無を見ずにこう言った。「お前は何も悪くない――お前は何も気にする事もない」

一夏はそう言うのと楯無から離れる形で寮へと戻る為に歩く。――待って！　――。そんな一夏に楯無は呼び止めると、一夏は立ち止まるも楯無の方を振り向かなかつた。

「ねえ、貴方は何で落ち着いてられるの？　私のせいで貴方は許されない事をしたのに……何でなの!?　ねえ!?!」

楯無は一夏にその事を問う。確かに楯無から見れば一夏は楯無のせいでやってはいけない事をした。それは許されない事ばかりだが、一夏はその事を気にしていない。

楯無から見れば普通の人間なら楯無を罵倒する以前に、人を殺せないだろう。にもか関わらず、一夏は平然とやった。楯無から見れば信じられないし、一夏が何者である以前に一夏に何が遇ったのかを気にするに違いない。

そんな楯無に一夏は空を仰ぐ、空はいつの間にか紺色になりつつあった。夕日が沈み初めたのか、それとも完全に沈み掛かっているとと言えるのだろう。

そして、一夏は楯無を見る為に振り返る――その表情は何処か哀しかった。が、一夏はこう言った。

「何でかは解らない……でも、お前を犯そうとした奴等や権力を振り翳す奴等が許せなかった……と言えば良いかもな？」

――えっ？　――。一夏の言葉に楯無は何も解らず言葉を詰まらせる。が、一夏は楯無が、楯無の身内が楯無を騙した事に怒るよりも、楯無を怖い目に遭わそうとした奴等を許さなかったのである。

一夏は楯無にそう言うも、楯無はそんな一夏を見て何も言わず一夏に駆け寄り抱き着く。

一夏は楯無の突然の行動に戸惑うも直ぐに呆れると、楯無を抱き締めながら楯無の頭を撫でる。楯無は震えていたが一夏の心の広さに後悔しており、一夏は楯無がああ時の事をフラッシュバックのように思い出しのかと思ひ、抱き返しただけである。

二人は森の中で抱き締めあっていたが、二人共、数分は抱き合っていた。

第46話

「ふう……」

その三時間後、一夏は楯無と共に寮へと戻り、浴室でシャワーを浴びていた。しかし、右腕にはコンピューターガンレットを着けていない。それもその筈、シャワーを浴びている間にも着けていると故障するのは目に見えてるからだ。が、一夏の表情は何処か晴れない。

何故なら、一夏は寮へと戻るや否や、夕食を摂る為に食堂にも楯無と一緒に来て摂った為に、更に周りから変な誤解が流れてしまったのだ。

これには一夏も苛々とするも何とか耐え抜く。幸いな事に筈は何故かそこには居ないし、セシリアには睨まれていたが一夏は気にしなかったのは言うまでもないし、勇人はプラズマキャノン砲は勇人に渡したまま返して貰っていない。

それは未だ良いかも知れないが一夏は自分の胸を触る。一夏は死地を意味するかのような修行の日々を三年も過ごしていたのか胸板も厚く、腹筋も割れているし、腕にも筋肉が付いている。

が、同時に一夏の身体には痛々しい傷痕が全身に幾つも見受けられる。それは一夏がケルティックと共に修行し、強い生き物達と喰うか喰われるかの死地を潜り抜けてきたのだ。

誰から見ても痛々しいと思うが一夏から見れば唯一の思い出である。一夏だけではない、勇人や止の身体にも傷がある。

「長い一日だった……なのにさっぱりしないな」

一夏は不意に呟くと深く俯いた。シャワーヘッドからお湯の雨が一夏の身体を打っている。普通の人なら疲れを取る役目をもしているかもしれないが一夏は違った。

一夏は疲れを取れるよりもまた疲れが溜まっていくのを感じていた。理由は、今日一日が一夏に、一夏自身が憎悪を抱いている相手と出逢った事やセシリアから決闘宣言をされた事。

楯無と再会し、虚の計らいにより楯無と同室となり、更には運悪く

誤解が広まり、やけくそと言うよりも楯無を守る為に周りに嘘の恋人宣言をしてしまった事。

エンフオーサーからプラズマキャノン砲を渡された事。何れも一夏にとつて様々な出来事が一夏に長い一日をも感じさせていた。

「全く……くそがつ」

一夏は舌打ちすると、両手を拳に変え強く握り締める。この怒りをどうすれば誰にぶつければ良いのかが解らなかった。

一夏自身、そんな事をしてもしのみの八つ当たりである事も解っており、一夏はこのやるせない思いを誰にもぶつける事は出来なかった。

「くそがつ……今日は最悪な一日だぜ……」

一夏はそう呟くと、蛇口を軽く捻る。刹那、シャワーヘッドからお湯の雨は出なくなった。変わりに浴室内は湿気で充満している。それでも、一夏は浴室内を出ると、湿気も外へと逃げるように移動した。

一夏は近くに置いてあるコンピューターガントレットを右腕に着け、下着を穿き、四肢を隠す程度の細長い寝間着を着て浴室を出ると、ある少女に目をやる。一窓側のベッドに腰掛けながら窓の外の景色を眺めている楯無だった。

楯無は制服を着てはいない。一水色の水玉模様がある白い寝間着を着ていた。それに楯無は一夏の前にシャワーを浴びていたのか、水色の美しい髪は少し濡れている。

一夏はそんな楯無を見て溜め息を吐くと、何も言わずにデスク近くに置かれてる椅子に座り、頬杖を突く。一機嫌が悪いのか表情は険しい。

二人の間には会話はなかった。無いと言うよりも話題になるような話がなかったと言えれば良いだろう。それにあるとすれば、その状態を保ち続けているのと、時間だけが過ぎていくだけであろう。

「一ねえ、一夏君？」。刹那、話題を出したのかのように楯無が不意に一夏に話し掛けてきた。それを聞いた一夏は頬杖を突いたまま視線を楯無へと向けるも、楯無は窓の外の景色を眺め続けており、一夏の方を見ていない。

そんな楯無に一夏は溜め息を吐く。普通、話す時は相手の目を見る

よな？　と言いたかった。だが、一夏は何も言わないのもあれだと思
い、聞き返した。

「何だ？　もう寝るから電気を消してくれと言いたいのか？」

「いえ、違うわ……一夏君に少し訊いて良いかしら？」

「何をだ？　変な事だったら承知しねえぞ？」

「いえ違うわ……そのお、一夏君は私の事を、どう思っているの？」

楯無の言葉に、一夏は「はっ？」と惚ける。すると、楯無はゆっく
りと振り返る―その表情は何処か悲しく、一夏を見据える二つの瞳
は何処か哀愁漂う。

「一夏君は……私の事をどう思ってるの？」

「いきなり何だ？　俺はお前の事をどう思っているかなんて、俺自身
にも解らねえよ」

一夏はそう言うのと、楯無は俯く―そこから、楯無は何も言わなく
なった。嫌、楯無自身が一夏に自分をどう思っているのかを訊く以
外、何を訊けば良いのかが解らないと言えば良いだろう。

一方、一夏は誤解とは言え、楯無を守るとは言え嘘の宣言をしたし
まった為に一夏にも非がある。

なのに一夏はその事に気付いていないと言うよりも、楯無には恋愛
感情はない為、一夏は楯無の事を何とも思っていない。刹那、一夏は
ある事を思い出し、その事を訊ねる。

「そう言えば虚先輩から聞いたんだが更識、お前、本当の名前は楯無
じゃなく、刀奈って言う名前だったんだな？」

一夏がその事を指摘すると、楯無は瞠目し顔を上げる。

「ど、どうしてそれを？」

「どうしてって、虚先輩から教えられたんだよ―更識、お前はあの誘
拐事件での件で当主になったのを悔やんでいるんだろ？」

「っ……!!？」

一夏はそう指摘しながら、楯無を指差す。勿論、一夏の指摘は当た
りであり、楯無は肩を竦める。

「当たりか……だが、あれは身内がやった事何だろ？　お前が気にす」

「それは違うわよ!!」

一夏が何かを言おうとしたのを楯無は叫んで遮った。が、一夏は眉間に皺を寄せていた。

「それは違うわ……私は誘拐事件が嘘だったということに怒ってるけど、私は貴方を……貴方を巻き込んだ事に後悔しているのよ……なのに貴方はその事を問おうともしない……私は貴方を……」

楯無は手が震えている事に気付き、落ち着かせる為に胸に当てる。「私は貴方に何度謝っても許されないと自分でも解っているわ……なのに……なのに……!」

楯無は俯くも言葉を続ける。

「私は貴方に銃を向けた……それなのに私は貴方に促され、撃つた……そんなのは許される事じゃないわよ!」

楯無は目を開けそう叫んだ。しかし、一夏は驚きのあまり立ち上がり、人差し指を口元に当てる。

「馬鹿止せ! 外に誰かに聞かれたら困るだろうが!」

「そんなのはどうだって良いわよ! 私は許されない事をした!! 私はある以来、貴方への罪悪感が募るし、当主になった事をも後悔しているのよ!」

「だから止せ!? 誰かに聞かれるって言ってるだろうが!」

一夏は楯無に歩み寄るも、楯無は言葉を止めない。

「だから別に良いわよ! 私は貴方に罪悪感はあるし、最早どうでも良くなってたわよ!」

「どうでもって……だからあれは」

「一夏君は怖くないの!? 貴方は私達のせい……むぐっ!」

刹那、一夏は楯無の唇を唇で塞ぎ、片手を楯無の後頭部へと回し、ベッドに押し倒した。

「うっくん!! むっくっ!!」

楯無は両手を拳に変え、一夏の胸を叩く。しかし、びくともしなかった。そして、直ぐに終わり、一夏は楯無から離れる。

「何するのよ!? いきなりキスして!? 貴方は……」

「いい加減にしろ」

楯無が何かを言おうとしたが、一夏は静かに怒る。それを見た楯無

は肩を震わせる。自分を見る一夏の瞳には怒りが籠っていた。恐らく楯無を黙らす以前に喚く楯無に怒っているのだろう

「いい加減にしろ更識！ お前が別に悪い事をした訳した訳じゃねえだろうが!？」

「そんなの……貴方は怖くないの!? 貴方は私達のせいで自分の手が」

「怖えよ!！」

楯無が何かを言う前に一夏が叫ぶ。それを聞いた楯無は再び震えるも、一夏は言葉を続ける。

「俺だって怖えよ……人を殺す以前に自分が怖えんだよ……俺は復讐の為に動いているのに……親友達にも逢いたいし、今すぐにでもあいつにも逢いたいんだよ……っ」

一夏は舌打ちすると、立ち上がり、肩を震わす。一夏は人を殺すのは躊躇しなかった。が、親友に逢いたいのと今の自分は何の為に動いているのか解らなくなっていた。解るといえば復讐の炎は未だ消えてないと言う事だろう。

しかし、復讐の為なのに、一夏は自分は何をしているのかも解らなくなっていた。自分はプレデターに鍛えて貰ったのに何をしているのだろうか、と。

「それにお前はお前だ。お前は更識楯無である以前に更識刀奈なんだろうが……お前が何を思うが俺は俺のした事を後悔しない……でもよ、十字架を背負う覚悟はあんだよ……」

「一夏君……あんたは何で、そんなに人を殺した事を気にしないのよ……貴方は私達と逢わなければ」

「逢わなければお前や妹はどうなっていた!？」

一夏は叫ぶと、楯無は再び肩を震わせた。が、一夏は言葉を続ける。「お前は妹を思っていたんだろ!? だから動いたんだろ!? なのに何だ!?! お前は更識の当主として動いたのか!?! それとも妹の為に動いたのかよ!?!」

「そ、それは……貴方に私達の何が解るのよ……」

「解らねえよ! でもなお前は更識の何だ? 更識楯無か!? 更識刀

「奈なのか!?!」

「っ……わ、私は」

楯無は言葉を詰まらせるも、一夏は舌打ちすると、楯無を見て溜め息を吐くと、楯無を睨む。

「兎に角、お前は気にしなくても良い……だが、俺は復讐の為にも殺しも躊躇しない。俺は俺の怨みを晴らす為にもな……」

一夏はそう言うと、電気を消す為のスイッチがある壁へと歩み寄り、スイッチを押す。部屋の電気は消えたが一夏は扉近くのベッドに寝転がり、楯無に背を向ける形で横向けになる。

「……もう寝る」

一夏はそう言うと、目を閉じる。そんな一夏に楯無は体を震わせるも、自分も寝転がり、一夏に背を向ける形で横向けになるも少し泣いていた。そして、二人は背を向ける形で横向けになるも、二人から見れば長くも感じた一日は終わりを告げた。

しかし、それはほんの序章に過ぎない事を二人は知らなかった。

第47話

翌朝、鳥の囀る声が微かに聴こえ、東から太陽が登り始める。それは一日の始まりを告げるのを意味していた。

そして、ここはIS学園の寮にある一夏と楯無がいる部屋。

「う……………うん……………」

楯無は窓から射し込む太陽の光で瞼を軽く動かし、ゆっくりと眼を開ける。――眼はトロンとしていたが腕で擦りながら上半身だけを起こし、軽く欠伸をした。

それはとても可愛く余計にだらしないとも思えた。が、楯無はある事に気付き、慌てて扉近くのベッドの方へと振り返る。

そこには彼、一夏は居なかった。――正確には、楯無より先に起きたのか、寝間着は散乱している。なのに部屋には自分以外の人の気配はなかった。その証拠に浴室からはシャワーの音は聴こえない。

「……………一夏君？」

楯無は部屋を見渡すも一夏は居ないのに気付くも、一夏は既に寮には居なかった。

「……………」

一方その頃、一夏は制服を着ており、一人教室にいて自分の席に座りながら俯いていた。教室には誰もいない。まだ寝ているのか寮で学園に行く為に身支度をしているのだろうか。

その為、今の時間帯は、今の教室は一夏が独占していると言い換えれば良いだろう。無論、彼はそんな事を思っていない。今の一夏は物思いに更けながら席に腰掛けながらポケットに手を入れていた。

近くには勇人や止はいない。本来ならば彼等は三人で行動するが今の一夏は一人になりたかったのだ。理由は一夏自身が楯無と一緒にいるのが嫌だったからだ。

楯無と居ればあの事を問われるのと、楯無がまた弱気になるのは目に見えている。それに勇人や止はまだ寝ているのかも知れない為、一夏自身も彼等を気遣っていた。

が、プラズマキャノン砲は未だ勇人に預けたままである。一夏はそんな事を考えていた。刹那、教室の扉が開き、一夏は視線を扉の方へと向ける。

一夏は瞠目し、直ぐに齒を憤怒の形相を浮かべ齒を食い縛る。扉を開けたのは勇人や止でもなく、箒やセシリアでもなく、他の生徒でもない。

開けたのはーこのクラスの担任であり、一夏が最も嫌う姉・千冬だった。ーっ!? ー。一方、千冬は扉を開けると、教室には、昨日まで死んだと思っていた弟・一夏がいる事に気付くや否や、眼を見開き驚く。

それに何故、千冬が朝早くから教室に来たのかと言うと、千冬は授業の準備する際に窓を開けたりしている。勿論、これは真耶もやっているが生憎、今日の当番は千冬だったのだ。

二人の間には会話はないー二人の姉弟の間には会話はなかった。何故なら、姉は弟ではなく名誉を選び、弟は名誉を選んだ姉を毛嫌いしている。その為、二人が真っ先に掛ける言葉はない。ただいま、お帰り、等と言う言葉は無いに等しい。

が、そんなのは直ぐに消えた。二人が声が掛ける前に、一夏が動いた。一夏は千冬から眼を逸らし、手を拳に変え強く握り締めているも、席から立ち上がり、教室から出ようとした。が、扉の前には千冬がいる為、一夏は別の扉から出ようとした。

「待ってくれ!!」

千冬は一夏を呼び止めるも、一夏は教室から出ようとする。

「待ってくれ一夏!!」

千冬は一夏の元へと駆け寄り、一夏の手を掴む。刹那、一夏は千冬が手を掴んで来た事に驚きと怒りを感じ、直ぐに乱暴に振り解く。

千冬は乱暴に腕を振り解かされ尻餅も突く。が、そんな千冬を一夏は軽蔑な眼差しで見下す事も無く、再び扉の方へと歩き始めた。

「待ってくれ一夏！ 私の話を訊いてくれ！」

千冬は立ち上がり、一夏を足止めするように羽交い締めした。勿論、一夏は突然の事で戸惑うも直ぐに暴れる。

「何するんだ放せ!!」

「放さぬ!! お前を二度と放したくないのだ！」

「何が放したくないだ!? 俺の事を散々ほったらかしにして挙げ句の果てには見捨てやがって!!」

「それは謝る！ だが、あれには訳があったのだ」

一夏が暴れる中、千冬は何とか羽交い締めしながら、一夏に訳を話した。それは三年前のあの日に遡る。

あの日、千冬は第二回モンド・グロツゾ大会を偉業とも言える二連覇を成し遂げた。しかし、その後が問題だったのだ。

大会終了後、一夏が誘拐されたと連絡があったのだ。それは政府の女性秘書であり、女尊男卑主義者ではない者からの連絡だった。

これには千冬も驚くが、女性秘書は千冬が決勝の相手と戦う前に、政府から一夏を誘拐したと連絡があった。

これには女性秘書は驚き、千冬に連絡すべきだと言うも、政府の連中は名誉が得たいが為に連絡はしなかった。そして、それはモンドグロツゾが終わった後で良いだろうと見て見ぬ振りをしたのだ。

女性秘書は秘書の立場であるも、これには逆らえず、泣く泣く黙る事にしたのだ。が、女性秘書は密かにドイツ政府に連絡し、一夏を捜して貰ったのだ。

しかし、一夏はケルティック達に助けられた後であり、此処からは千冬達は知らないが誘拐犯とおぼしき男達は皆、何故か生皮を剥がされ逆さに吊るされていたのだ。

「私はその事を知らなかった……なのに、私はお前の話を聞かなかった……だから何もかも嫌になって現役を引退した……何が名誉なんだと!!」

一夏が未だ暴れる中、千冬は一夏に説明した。その間に二人はその体勢を保ち続けていた。それは一夏がケルティックに鍛えられたのと、千冬が引退した身でありながらも体を鍛えている為、問題は無

かった。

「そんなのは言い訳にしかならねえよ!? 俺はあんたに見捨てられたのは事実だ!!」

「それは違う!! 私はある時は知らなかったのは本当だ!! 私は五反田から聞いてお前が辛い思いをしているのを知らなかった……ちやんと聞いてやれば」

「そんなのは関係ねえ!!」

千冬が何かを言う前に一夏は力を入れて千冬を払い退ける。千冬は横向けに倒れるも、千冬は一夏の顔を見た。一夏は千冬に背を向けているものの、千冬と向き合うように振り返る。その表情は険しい。千冬に憎悪を抱いているのは誰の目から見ても明らかだった。

「俺はあんたに見捨てられたのには変わりはない……だが、俺はあんたともよりを戻そうと思っていない」

「しかし私は」

「お前は勇人や止にも俺の事を聞こうとしたじゃねえかよ!!」

千冬が上半身だけを起こし何かを言うも、一夏はそれを遮るように怒り、それを聞いた千冬は肩を竦めるも不意に眼を閉じるも、恐る恐る眼を開け、一夏を見上げた。

一夏はまだ怒っているが、それは友人達に聞こうとした千冬に別な意味で怒っていた。

「あんたは俺の事を嗅ぎ回ってるかは解らないがあんたは俺の友人達に聞こうとした……それは間違いだ——あんたは俺達の事を干渉するな……俺に話し掛けるな」

「だが私は」

「俺の話を聞いてねえのかこの野郎が!!」

千冬は再び肩を竦めるも、一夏は言葉を続ける。

「俺はあんたを許さない! 俺の親友を困らせるような事をするな!! お前が何を言おうが俺はあんたの元には戻らない!! あんたが例え何が言おうとな!!」

一夏はそう言うと、千冬への怒りが治まらないまま教室を出ていく。後ろから千冬と呼ぶ声がするも、一夏は聞く耳を持たず扉を開

け、廊下を出るも扉を強く閉めた。

「……あつ……」。刹那、横に人の気配がし、一夏は振り返る。そこには、壁に寄り掛かりながら瞑目しながら腕を組んでいる勇人がいた。

勇人は制服を着ているが止は近くにいない。止は昨日足首を挫いた為、部屋で待機中である。

「勇人、お前、居たのか？」

一夏は怒りは収まりきらないものの落ち着いて勇人に訊ねる。

「居たよ……お前がお前の姉と羽交い締めになりながら何かを話している間にな」

一夏は納得し「そうか」と頷くも、勇人は眼を開け訊ねる。教室から女性の啜り泣く声が聞こえたが二人は気にもしない。

「それよりも、お前は何しに来たんだ？ まさか早起きしたから暇だから教室に来たのか？」

一夏が訊ねると、勇人は眼を開け、一夏を見る。

「嫌、お前にプラスチックノン砲を渡しに来たかったがお前が部屋に居なかったからな？」

「良く此処が解ったな？」

そんな一夏に勇人は不敵に笑う。

「勘だよ……お前が学園にいるんじゃないやねえかってな？」

「何だよそれ？」

一夏は少し呆れるも、勇人はある事を訊ねる。

「それよりも軽く散歩しねえか？ 時間を潰せるし、何より落ち着くぜ？」

「そうだな……行こうか」

一夏は頷く納得しそう言うと、勇人は微笑む。

「全く、お前は復讐に走ると、何にも見えなくなるのか解らねえが、取り敢えず行こうぜ」

勇人はそう言うと、壁から離れ一夏から離れるように歩く、そんな勇人に一夏は何も言わなかったが、後を従っていくように歩き始めた。

教室から未だ千冬の啜り泣く声が聴こえたが、それは誰にも聞かれなかった。それは弟に拒絶された姉の哀しみとも思えるだろう。

第48話

一夏は千冬への拒絶的な事を叫んだ後、勇人と共に学園の周辺を散歩していた。二人は学園が目の前にある校庭近くを散歩していたが朝早くからにも関わらず、数人の女子生徒がいて、校庭の周りを走っていた。

その女子生徒達はタンクトップを着て、ブルマを穿いているも、走っているのか汗を掻いている。が、その女子生徒達は陸上部か何処かの運動部かは判らないが校庭の周りを走っている事に変わりはない。

それに、一夏と勇人は学園周辺を散歩していたものの、女子生徒達を見てはいない。彼等にはそんな下心はないからだ。止は居たら多分、嫌、止に限ってはそんな事はないだろう。

「それにしても、四月なのに清々しい朝が有るなんてな……」

勇人は不意に呟くも勇人は朝日を眺めていた。朝日は時間を掛けて徐々に登りつつあるも、勇人の朝日を見る表情は何処か寂しく何処か嬉しそうだった。

そんな勇人に一夏は瞑目し軽く笑い、そんな一夏を見て「何だよ？」と言いなながらジト目になる。

「嫌、お前の口からそんな事が聞けるのが嘘みたいに思えたからな？」
「別に良いだろ？ 俺が朝日を眺めちゃ悪いのか？」

勇人の問いに一夏は首を左右に振ると、目を開け、勇人に微笑む。
「嫌、何時も勇人が俺や止の為に動いているし、何より何時も俺や止、束さんやクロエさん以外の奴には無表情しかしないから、お前のそういう顔を見れたのは珍しいからな？」

一夏が訳を述べると、勇人は「フン」と言った後、瞑目し、そつぽを向いた。が、一夏は肩を軽く動かす。

「それよりも寮に戻ろうぜ？ 止が心配だからな？」

「安心しろー今頃、湿布が欲しいとごねているだろうからな？」

勇人がそう言うのと、一夏は眼を見開きながら「そうなの？」と驚きながら訊ねるも、勇人は無言で頷く。

「ああ、あいつは昨日……誰だ？」

勇人が何かを言おうとした時、近くから人の気配がして、振り返る。一夏も勇人が振り返った方を見るも、そこには一人の男性が立っていた。

その男性は四十代後半か五十代かは判らないが、貫禄あるよりも何処か優しそうな顔立ちをしている。黄緑色の作業着を着て、作業用のズボンを穿いているも、両手に箒や塵取りを持っている。

その男性は二人を見て微笑んでいるが、一夏は眼をパチクリとし、勇人はその男性を睨んでいた。――誰だ？　――。勇人が男性に訊ねると、男性は何かに気付き軽く笑う。

「これは申し遅れました。私は轡木くつわぎ 十蔵じゅうぞうと申します。この学園で用務員をしているしがない男です」

男性――十蔵の自己紹介に勇人は「轡木？」と言いながら警戒しているが、一夏は自分や勇人や止の他にも男性がいた事に驚きを隠せない。

すると、そんな一夏と勇人に十蔵の二人は微笑みながらある事を訊ねた。

「それよりも君達――君達が噂の男子生徒達ですね？」

十蔵がそう訊ねると、一夏は「は、はい」と戸惑いながらも答え、勇人は無言で頷く。一夏達の存在は十蔵にも伝えられていた。嫌、学園中が男子生徒達の存在を知っているからだ。

ある者は驚異本意で、ある者は警戒し、ある者は気にもしなかった。が、十蔵は驚異本意の者だったと言い換えれば良いだろう。十蔵は二人を見て名前を訊ねると、一夏は自分の胸に手を当てる。

「俺は一夏……織斑一夏です」

「そうですか――では、そちらの方は？」

十蔵は頷くも、勇人に訊ねる。一方、勇人は十蔵から眼を逸らす。

「勇人――俺は勇人と言う」

「そうですか……所で名字は？」

十蔵は勇人が名字を言わない事を訊ねるも、勇人は歯を食い縛り、十蔵を睨む。そんな勇人に十蔵は少し驚くも、一夏は慌てて勇人に背

を向け、十蔵と向き合うように割って入る。

「い、嫌——勇人は単に名字を名乗るのが恥ずかしいからです」

「そうですか？ 別に名字を名乗るのが恥ずかしい訳ではないでしょ？」

十蔵は首を傾げるも、一夏は少し冷や汗をかく。勿論、一夏は此処にいない止は勇人が名字を言わない理由を知っている。

しかし、彼等二人は勇人自身の辛い過去を知っているのと、勇人自身が名字を名乗りたがらない理由も勇人から教えられた為に知っている。

その為、一夏は勇人自身を気遣い庇うも、この学園が何故、勇人自身が名字を言わないのかや咎めないのもおかしい。勿論、二人は知らないが、とある人物が手を回してくれた為だからだった。

「ふむ……だったら辺に良いのですが、二人だけなのかい？ 三人つて聞いたけど、もう一人は何処ですか？ それに君達は何故、朝早く居るんですか？」

十蔵は辺りを伺うも、一夏はその事を教えた。

「いえ、止はまだ寝ています。それに俺達は朝練をしようと思つて早く起きました」

「そうですか——とところで何の朝練ですか？」

「あつ……嫌、それは」

「私の書類整理を手伝ってくれたからです」

一夏がどう訳を話そうとすると、とある人物がそれを遮るように言う。一夏や勇人、十蔵の三人は声が出た方を見やると、楯無が三人の方へと歩み寄る。

楯無は制服を着ていたが表情は何処か悲しそうに笑っていた。

「更識？」

「生徒会長がですか？」

一夏がなにか言うも十蔵が楯無を見てそう言い、それを聞いた一夏は「えっ？」と驚き、勇人は瞠目していた。

が、十蔵は二人を見て首を傾げる。

「二人共知らなかったのですか？ 彼女は更識楯無。この学園の生徒

会長にして織斑先生の次に強いとも言える学園最強の女性ですよ？」
十蔵が説明すると、一夏は「はっ!？」と声を上げて驚き十蔵を見るも、再び楯無を見る。楯無は悲しそうに笑い頷くも、一夏は楯無が何者かを知って驚きを隠せない。

そして、楯無は自分の胸に手を当てた。

「ごめんなさい一夏君。私はこの学園の生徒会長なの」

「せ、生徒会長って……あんた俺を騙っていたのか!？」

一夏は楯無を問い詰めるも、楯無は首を左右に振る。

「いいえ、貴方は私に聞かなかつたから……それに虚ちゃんから聞いたと思つたからよ」

「布仏先輩が?」

一夏はある事を思い出す。それは虚先輩の事だつた。虚先輩は一夏に楯無の事を頼むと言つたが、楯無が生徒会長だと言う事までは教えてくれなかつた。

嫌、あれは虚が楯無を思つて言つた事であるのか、そんな事を言わなかつたのかや言い忘れていたのかは判らない。

だが、楯無が生徒会長である以前に、虚が生徒会に入れたのも、会計を務めていたのも頷ける。が、一夏は楯無を見るも、楯無は懐から扇子を取り出し、扇子を開く。

扇子には黒い文字で「心外」と書かれていた。

「それよりも一夏君に――勇人君かしら? 貴方達は朝早くから何をしていたの?」

「嫌――朝早くに起きたから暇だから散歩していたからな?」

「だつたら置き手紙くらいしなさいよね? 心配したじゃない?」

楯無は少し怒るも、一夏は頭を抱える。

「別に良いだろ? 置き手紙をする以前にペンと紙を用意出来なかつたし、お前を起こすのも悪いし、鞆を漁ると微かな音でもお前が起きると思つたからな」

一夏の説明に楯無は「えっ?」と眼を見開くも、一夏は呆れながらも髪を搔く。

「それによ……別に良いよ」

一夏はそう言うも、勇人を見るや否や「飯食うか？」と訊ねる。しかし、勇人は首を左右に振るも、一夏は溜め息を吐くと、こう言った。「だったら俺は飯を食いに食堂へと向かうから、後は教室でな？」

一夏がそう言うのと、勇人は「ああ」と言いながら頷くと、一夏は軽く笑うと、食堂へと向かう為に学校の中へと戻る。そんな一夏に楯無も後を追い掛けるが二人の間には会話はなかったのは言うまでもない。

「……倦怠期の夫婦みたいに思えるな？」

そんな二人を見た勇人は軽くからかうも、二人の耳には届いていなかった。

「それよりも君は良いのですか？ 朝食は？」

すっかり忘れていたが十蔵が勇人に訊ねる。勇人は十蔵を見て瞑目すると腕を組み、十蔵に背を向ける。

「別に良い、そんな気分じゃないからな」

「それはいけませんよ？ ちゃんと朝食を摂らなきゃ脳が働きませんよ？」

「別に良いよ、何時もの事だからな？」

「それはいけませんーちゃんと朝食を」

「別に良いよ」

十蔵は言い終わる前に勇人が遮る。勇人は肩越しで十蔵を見るも鋭い眼差しをしていた。

「俺は朝食を摂りたいとも思っていない。だが、あんたに指図されるつもりもない」

勇人はそう言うのと、学校の中には戻らず再び散歩する。後ろから十蔵の呼ぶ声がするが勇人は背中を受け止め、内心こう呟いた。

「うるさいクソ爺が……」と。しかし、勇人は十蔵と関わる事で勇人自身が変わるのもまた別の話である。

第49話

その頃、一夏は楯無と共に食堂にいた。食堂には厨房で何かを作っているか食材を切ったりして下拵えをしているおばさんがいた。一方、周りには誰も居ないが二人から見ればそんなのは関係ない。それに一夏と楯無は何故か隣同士に座っている。

本当なら寮に戻れば言いが筈が昨日の件で絡んでくるのは目に見え、女子達に何かを言われるのも明らかだった。しかし、二人の間には会話は無い。二人は誤解で嘘の恋人同士の振りをしなければならなかった。

あんな事をすれば筈や他の女子達が誤解するし、何より噂は風の噂よりも人から人へと伝えられる意味で広まっているに違いない。

「……………」

その二人は渦中の人だったが片やピリピリとして、片や罪悪感よりも恥ずかしそうに俯いていた。ピリピリしているのは一夏であり、一夏は腕を組みながら険しい表情で瞑目し、楯無は恥ずかしそうに俯いていた。

誰から見ても喧嘩しているように見えるが幸いな事に辺りには誰もいない。そして、二人はそのまま会話もしないまま時間だけを過ぎていくのを待っているのか何もしない。

二人の前にはトレイはない——二人は朝食を摂らないつもりなのだろうか。

「……………ねえ、一夏君？」

そんな重苦しい雰囲気には耐えきれないのか、楯無は顔を上げ、一夏を見るや否やそう呟いた。一夏は鋭い眼をしていたが楯無の方へと移し、それを見た楯無は肩を竦める。

「ね、ねえ？ 朝食を摂らないの？」

「別に良い……………本なら一人で摂りたかったのに、お前が来たから食事を摂る気が失せた」

一夏はそう言いながらそっぽを向く。勿論、楯無が悪い訳ではないが楯無は「そう……………」と寂しそうに言うも。

「でも、朝食は摂らなきゃ脳が働かないわよ？」

「良いよ別に……俺は……嫌、こんなのは何度もあるから別に良い」

一夏は思わずケルティックとの修行の日々を語りそうになり慌てそうになるも、何とか堪えた。

「それにお前は飯を食え、お前は生徒会長だからな？」

一夏はそう言いながら、シツシツと楯無に手を振る。楯無は「そう……」と頷くと立ち上がり、厨房があるカウンターの方へと歩いた。

楯無はカウンターに着くと、近くにいたおばさんに食券を渡す。因みに彼女が頼んだのは焼き鮭定食である。

「はいよ」

近くにいたおばさんが楯無の食券を受け取ると、食事の準備をする。

「……………」

その間に楯無は一夏を見る。一夏は腕を組みながら俯いていた。

一夏君……。楯無は不意に呟くも、おばさんの声が聞こえた。

「終わったわよ？」

おばさんは楯無にそう言いながら、トレーを楯無に差し出す。トレーにはご飯や味噌汁、漬物や焼き鮭があった。漬物以外は全て湯気が立っており食欲をそそる。

楯無はおばさんが差し出してきてくれたトレーを見るも、おばさんが楯無の様子に気付く。

「あら、どうしたの？」

「あつ……いえ、何でもありません」

楯無はおばさんを見るも直ぐに哀しそうに笑って首を左右に振る。が、楯無はおばさんとは知り合いだった。が楯無はそれを言わなかった。

「何か遭ったの？ 彼氏さんと喧嘩したの？」

「えっ？」

おばさんの言葉に楯無は目を見開くも、おばさんは哀しそうに笑いながら指摘した。

「喧嘩したのね？ そうでしょ？」

おばさんの言葉に楯無は頷いた。それを見たおばさんは哀しそうに笑っていたが、何かを思い付いたのか表情を明るくすると、楯無に言った。

「あつ、良い事思い付いたわよ?」

おばさんの言葉に楯無は「えっ?」と惚けるも、おばさんは「ちよつと待つててね?」と言い残し、何かをし始める。楯無はおばさんが何をするのかは解らなかった。

そして、おばさんは楯無が頼んだトレーにある物を色々置いてた。ーあつ……ー。それを見た楯無は瞠目しおばさんを見るも、おばさんは軽くウインクした。楯無は驚き続けるも恥ずかしそうに軽く俯き、トレーを手に一夏の元へと戻った。

「お待たせ」

楯無は一夏の元に戻りそう呟くも、一夏は明日の方向を向いていた。そんな一夏に楯無は恥ずかしそうに俯くと、一夏の隣に腰掛け、焼き鮭定食が置いてあるトレーをテーブルの上に置く。

「おい、何で俺の所……は?」

一夏は楯無が隣に座るのに呆れ振り返るも、楯無の頼んだ焼き鮭定食を見て愕然とする。何故なら、ご飯や味噌汁が焼き鮭が二つずつあつたのだ。

にも関わらず、割り箸は一膳しかない。誰から見ても可笑しいが、一夏は驚きながら朝食を指差し、楯無に訊ねる。

「おい? お前二人前も食うのか?」

「違うわよ……そのお」

楯無は否定するも、少し恥ずかしそうに頬を紅くし俯いた。一夏は再び訊ねるも、楯無は顔を上げ、答えた。

「実は……喧嘩した場合は食べさせあう方がすぐ仲直り出来るって……食堂のおばさんが」

楯無は恥ずかしそうに言葉を述べるも、一夏は瞠目しながらカウンターの方を見ると、おばさんは何故か喜んでた。それは、二人が付き合っているのが既に食堂のおばさん達にも広まっていたからだ。

一夏にとって誤解は（最早無理だが）止まる所を知らない事を意味し、交際はしない方が怪しまれるのと、楯無が箒に何をされるのかは判らない。

それに自分も箒に何をされるのかは判らない上、普段は勇人や止と一緒に行動しているが四六時中一緒に行動している訳でもない。

だが、楯無と一緒に行動するのは問題であるのかもしれない。が、楯無は一夏から眼を逸らすも心なしか頬を紅くし続けている。

食べさせ合うのが嫌なのか恥ずかしいのかは判らないが後者の方が強いだろう。一夏はおばさん達に文句を言おうと思いい立ち上がった。

「ーダメツ……！ ー。刹那、楯無が一夏の手首を掴む。

一夏は楯無を見ると、楯無は潤んだ瞳で一夏を見つめていた。お願い、変な行動を起こさないで、と一夏に訴えかけていた。

あの時、楯無は一夏が殺しをしたのを目の当たりにしていたからだ。それも今、一夏がおばさん達に何を言うのかは判らない上、最悪の場合、傷害事を起こす危険があるのではないかと思っていた。

これには楯無も抑えたかった。彼が問題を起こすのを恐れていたからだ。生徒会長としてでもあるが、彼へのせめてもの償いでもあった。

「お願い……問題を起こさないで……お願い！」

楯無は一夏に懇願する。それを見た一夏は楯無に怒りを感じるも、「チツ！」と舌打ちすると、やるせない気持ちを抑えきれないながらも座った。

一夏を見た楯無は哀しそうに笑うと、割り箸を手に取り、二つに割ると、白米を一口掴み、白米を掴んだ割り箸を一夏の方へと差し出す。

「ーな、何だよ？ ー。一夏は楯無の行動に戸惑うも、楯無は小さく囁いた。

「おばさんを誤魔化すにはこれしかないのよ？」

楯無の言葉に一夏は瞠目するも、直ぐに怒りを抑えながら、聞き返すように小さく囁いた。

「だからって、食べさせ合うのは間違っているだろうが!？」

「それは解っているわ……でも、おばさん達を誤魔化すにはこれしかないのよ!？」

「そんなの間違ってるだろうが!? おばさんには悪いけど……俺はごめんだからな!」

一夏はそう言うのと、腕を組みながらそつぽを向く。

「そうよね……私が悪いもんね……」

楯無は寂しそうに笑うと白米を口にする。

「……フン」

一夏は軽く怒るも、楯無は寂しそうにご飯を食べる。が、一夏はチラツと視線を楯無の方へと見る。楯無は寂しそうにご飯を食べ続けていた。

『更識だつて一人の女の子だぜ?』

「……………つゝゝ!」

刹那、一夏は止の言葉を思い出し、何かを思ったのか、楯無の肩を掴む。——何? ——。楯無は箸を止め一夏を見ると、一夏は頬を赤くしながらも、楯無の持つてる箸を指差し、その後に分の口を差した。

それを見た楯無は表情を明るくし、白米は一口掴むと。

「一夏君、アーン」

楯無は嬉しそうに言うのと、白米を掴まんでいる割り箸を一夏に差し出す。それを見た一夏は表情を険しくしながら頬を赤くし続けながら口を開けた。

刹那、一夏は白米を食べた。それを見た楯無は「美味しい?」と訊ねると、一夏は嫌々ながらも頷いた。

「良かった……」

楯無は喜ぶも、一夏は心の中で「止——後で覚えてろ」と止に怒りを感じていた。

「良いわね、若いって」

そんな二人をおばさんは微笑ましそうに見ていたが近くにいたおばさん達も微笑ましそうに、一夏と楯無を見守っていた。

そして、二人は食べさせあっていたが、その間に食堂には女子生徒

達が少しずつだが来ていたが、二人の行動に甘い物を食ったかのよう
に辛い思いをしていたのは言うまでもない。

第50話

二時間後、ここは一年一組の教室。教室にはこのクラスに所属している女子達がいた。が、女子達は何故かたじろいでおり視線をある方向を見やっっている。それは教卓の前にある席に座っている一夏にだった。

一夏は頬杖を突きながら黒板を睨んでいる。誰かに声を掛けられても返事はしない。――と言うよりも誰も声を掛ける事が出来ないと言ひ換えれば良いだろう。

一夏からは負のオーラが醸し出されているが一夏が怒っているのを意味していた。では、何故一夏は怒っているのかは食堂での出来事だった。あの時、一夏は楯無と共に食堂で食べさせ合っていた。

あれは止める事は不可能となった誤解を誤魔化す為だった。が、あの時の一夏は嫌々ながらも楯無に食べさせ、楯無も満更ではないが一夏に食べさせていた。あれは今でも一夏には嫌な思い出かつ、苛々されるにも充分だった。

因みに、それを見た女子達が何故かブラックコーヒーや辛い物を頼んでいたのは言うまでもなく、止も挫いた足を引き摺りながら食堂へと来た時に自分達を見てからかい、遠くから箒が自分と楯無を睨みながら朝食を摂っていたのも言うまでもない。

話を戻そう。一夏は未だ怒っていたが女子達は一夏から醸し出されるオーラにたじろいでいた。一夏は苛々しており、近くには止や勇人はいない。止は湿布を貰いに保健室に言ってるのと勇人はその付き添いで一緒にいる。

二人は一夏のストツパー的な役割をする者達だが生憎二人はいない。その為、一夏は苛々している。女子達も女子達で誰も声を掛ける事は出来ない……訳ではなかった。――おい、一夏！――。そんな一夏に訊ねる勇氣ある者がいた――箒だった。

一夏は表情を陰しくしながら視線を箒へと向けるも、箒は腕を組みながら表情を陰しくしている。恐らく、一夏と楯無の関係を訊ねようとしているのだろう。

が、一夏はあれを誤解とも言えない上、千冬と同様毛嫌いしている為、答えるつもりはない。嫌、今の一夏は既に苛々している為、怒るのも時間の問題だろう。

「一夏……貴様、あの更識と言う女とは付き合っているのか!？」
「……………」

箒は指摘するも、一夏は箒から眼を逸らす。

「答えろ一夏!! あの手更識とは付き合っているのか!? それに剣道とかはちゃんとやっているのか!? それにお前には相応しいのは私ではないか!？」

箒は怒りを抑えきれないのか憤怒の形相を浮かべつつあった。が、一夏も一夏で怒りを抑えきれないでいた。一夏その証拠に、頬杖を突いてない方の手を拳に変え力を入れていた。

箒が何かを言う度に一夏の怒りは何時爆発してもおかしくない。勇人と止がいなければ一夏はもう…………。

「答えろ一夏!! 本当にお前と更識は付き合っているのか!? あれは単なる誤解だろ!？」

箒は一夏を問い詰めるも、一夏は歯軋りし始める。最早、怒るのも目に見えていた。しかし、教室の扉が開き、ある人物が教室に足を踏み入れる。

一夏がその人物を見ると瞠目した。その人物は勇人であり、その後ろには止がいた。勇人は一夏の近くにいて問い詰めている箒に気が付き、箒を睨む。

「一夏!!」一夏は勇人に気づき歯を食い縛るも、勇人は箒を睨んだまま何も言わない。両者の間に重苦しい空気が流れそうになる。が、止が勇人を退かし、止は挫いた足を引き摺るように歩くと、一夏に訊ねた。

「悪いな一夏、ちよつとまだ痛むみたい?」
「え、お前大丈夫か?」

一夏が訊ねると、止は首を左右に振る。

「無理みたい、でも何とか歩ける…………とところで勇人に篠ノ之? いい加減睨み合うの止めたら?」

止は呆れながら、勇人と箒を交互に見る。勇人は止の言葉に頷き、箒は止の言葉に舌打ちするも、一夏を見る。一夏は箒から眼を逸らし続けていた。刹那、チャイムがなった。

その音を聴いた一夏、勇人、止の三人、女子達は自分達の席に戻るも、箒は一夏に「また後で来るからな!」と一夏を指差しながら言った後、自分の席へと戻った。

そんな箒に呆れるも、千冬と真耶が教室へと入ってきた。一夏は千冬を見て歯を食い縛るも、怒りは爆発しかけてはいなかった。勇人と止がいた為になんかあったのだ。

が、更にある出来事が一夏を追い詰める。それは、千冬の一言から始まった。千冬は教卓の前に立つと、一夏、勇人、止の三人を交互に見る。一夏を見た際は一瞬哀しい眼をするも、ある事を話した。

「授業を始める前に織斑、霧崎、勇人の三人に政府がお前達の為に専用機を与えてくれるらしい」

千冬の言葉にクラス中の女子達がざわざわし始める。そうだろう、専用機は国家代表か一部の代表候補生にしか与えられない。それを一般の、ましてや貴重な男性操縦者に与えられるのは例外である。

彼等は代表候補生でもなければ国家代表でもなく、一流の人間でもない。それに政府は一夏達が入学した直後に専用機を造るよう命令したのだ。

これには企業側も困惑するが膨大な資金を貰えば手のひらを返すように了承した。まあ、男性操縦者の専用機を造ったとなれば有名になるからだろう。それに政府は彼等の戦闘データを調べる為でもある。

女子達はざわつく中、真耶が落ち着かせる。だが、更に面倒臭い人物が横槍を入れる。

「あらまあ? 専用機を与えられますの? なら、フェアにならずに済みますかね?」

セシリアだった。セシリアはイギリス代表候補生であるが専用機を与えられている為、問題はない。嫌、セシリアは一夏達に専用機が与えられるの事に喜びを隠せない。それは一夏達に醜態を晒すよう

に痛めつけるのではないのかを期待していた。

セシリアは喜ぶ中、一夏は冷静に聞き返した。

「それは断る。生憎俺達にはウエイランド・ユタニ社から独自の専用機を与えられているからな？」

「ウエイランド・ユタニ社!!」

一夏の言葉に女子達は更にざわつく。ウエイランド・ユタニ社。それは束が作った架空の企業で一夏達が専属パイロットとして活動している。それだけでなく、ウエイランド・ユタニ社は男性用のISも作っていると噂があり、女尊男卑主義者から見れば嫌な存在企業としか思われていない。

だが、それは女尊男卑主義者が崇拝している束が作った架空企業であるとは知ったらどうなるのだろうか……嫌、それは誰にも知らない。だが、千冬は何故か引かなかった。

「そんなのは返却してしまえ、霧崎や勇人は兎も角、お前だけでも良いかな？」

「はっ？」

一夏は惚けるも、千冬は腕を組み言葉を続ける。

「実はお前の専用機は倉持研究所が造ってくれているが、その名は白式——お前に相応しいISだ」

「……………」

千冬の言葉に一夏は千冬に軽蔑な眼差しを向けながら両手を拳に変え力を入れていた——今でも、一夏は怒りそうになっていた。が、そんな一夏を見た千冬は少し肩を竦めるも言葉を続ける。

「そ、それに白式は私のIS、暮桜の後継機だ——それに武器は刀一本しかないが、お、お前ならそれくらいでも大丈夫だろ？」

「……ウエイランドユタニ社から専用機を与えられているって言ったろ？」

「だから返却してしまえ……それに私はお前の姉だ——だから……」

「黙れえ——っ!!!」

刹那、一夏は叫んだ。勇人は瞠目し、それ以外の周りは一夏が叫んだ事にたじろぐも、一夏は同時に立ち上がると叫んだ。

「ケルティッククローラーツ!!」

一夏はそう叫びながら右腕を振り翳す。それを見た勇人は「まずい!」と内心慌てるも、一夏の振り翳された腕からISの武器が展開される。

スピアードだった。一夏はスピアードを掴み伸ばすと、千冬目掛けて突き刺そうとした。刹那、一つの大きな音が木霊する。

「あ、あぁっ……………」

「ぐっ……………」

周りの女子達は戦慄した。が、それは教卓の前にいる一夏と千冬を見ていた。一夏はスピアードを千冬の顔の直ぐ横へと千冬の顔を通り過ぎ、黒板を刺していた。

が、勇人は一夏を見て驚くも、真耶は涙目になっていおり、千冬は冷や汗を掻いている。しかし、一夏は怒りの形相を浮かべている。それはさっきまで我慢していた怒りを堪えきれなかったのだろう。そして、一夏はスピアードを下ろすと、こう叫んだ。

「良い加減にしろ織斑千冬……………これ以上俺を怒らすな!!」

一夏はそう叫ぶ。それを聞いた千冬は肩を竦める怯えるも、周りの女子達も怯える。勇人は何も言わなかったが止は驚いている。

「俺はあんたの弟である以前に一人の人間だ……………俺はあんたの玩具でもない!!」

一夏は千冬に怒るも千冬は怯えながらも反論した。

「そ、それは違う!! 白式はお前の為に造ったのだ!」

「それは違う!! あんたは俺への罪滅ぼしだとしてもあんたの好きにさせたいだけだろうが!! てめえは何をしたいんだ!? 単なる押し付けだろうが!?!」

一夏の言葉に千冬は何も言えなくなる。

「止めろ一夏!! 千冬さ……………織斑先生はお前の為に思ってたのだ!」

だが、箒が横槍を入れるも一夏は箒を睨む。

「てめえもてめえだ籐ノ之!! 俺と楯無は付き合ってたんだよ! 何度言えば解るんだよ!?!」

「なっ!?!」

箒を眼を見開くも、一夏は言葉を続ける。

「それに楯無に手を出してみろ……てめえの顔を殴るからな……千冬……てめえも俺に干渉するな」

一夏はそう言った後、スピアーを解除し、やるせない気持ちを抑えつつケツと言いながら座る。

それを見た千冬や箒は顔を青くし何も言えなくなり俯くも、勇人は瞑目し、止は一夏を宥める。

しかし、真耶やセシリア、クラス中の女子達も一夏の激怒とも言える叫びに半分涙目になり、半分震えていた。

そして、一年一組は一夏のお陰で暗い気分になったのは言うまでもなく、他のクラスでも一夏の叫び声を気になる生徒達がいたのも言うまでもなかった。

そして、クラス代表決定戦までの間、楯無や勇人や止、箒以外は誰一人一夏に声を掛ける者は居なかった。因みに箒は未だ一夏と楯無の関係を聞いたの言うまでもない。

第51話

あれから六日後の放課後。ここは学園近くにあるアリーナ。そこはISで特訓する為やイベント試合をする為でもあり、アリーナの周りには観客席や、一ヶ所には実況席や解説席がある一室や、海外からのVIPや大物だけが座る事が出来る席が設けられていた。

しかし、その大物席以外の一般の席は満席御礼とも言える程、女子生徒で溢れ返っている。彼女達は皆、ある事を楽しみにし、ある事を警戒していた。

それはこの試合は一年一組によるクラス代表決定戦だがそれは単なるイベントに過ぎない。このイベントは男性操縦者達が参加している事に、彼女達は喜びと怒りを感じているのだ。

男性操縦者達の実力はどんな物か、ウェイランド・ユタニ社が造ったISがどんな物でどんな性能なのかを気にしていた。しかし、それももうすぐ判る。

女子達からみれば友達との約束や部活よりも大切な事だろう。勿論、女子達が驚くのか幻滅するのは誰にも判らない。

ここはアリーナに続くピット。そこは試合かイベントに出る者達が此処でISの調整や準備をする為の場所であった。此処には軽く準備運動をしているのか背筋を伸ばしている止がいた。

止は何故か、ISスーツを身に纏っている。止が纏っているISスーツは紺色だが四肢や腹が少し露出しているもの、右腕にはコンピューターガンレット、首には髑髏を模した首飾りをぶら下げている。

が、止は準備運動をしながらもその表情は何処か楽しみに満ちている。それに、そこに居るのは止だけではない。

他にも五人居た。腕を組みながらとある人物を睨んでいる一夏と勇人に、一夏が特別にとピットへと入れるのを許可した楯無と真耶……そして、部外者とも言える人物がいた。

その人物を勇人は睨み、楯無と真耶は首を傾げ、一夏は睨みながら

も呆れ訊ねた。――何故、お前が此処にいる、篠ノ之？　――と。そう――箒だった。箒は許可なくピットに来た為、一夏や勇人に睨まれているのと、その事を一夏は指摘したのだ。

「なっ!?　居ては駄目だと言うのか!」

箒の言葉に一夏は頷くと同時に「ああ」と即答した。無論、ピットに入れるのは楯無と真耶だけであり、それは一夏が許可したからである。

それも一夏がウェイランド・ユタニ社に連絡し、ウェイランド・ユタニ社が学園へと連絡し、学園がその事を真耶に伝えた。これには千冬も反論するも、学園側も一夏と千冬に何が遭ったのかは知らないが衝突する危険があるのを配慮した為、問題はなかった。

なのに、箒がいる時点で無駄になったのは言うまでもない。箒は一夏に反論しようとした。

「私はお前の幼馴染みだ！　私がお前の近くで応援して何が悪い!」
大体そっちの女も部外者だろうが!」

箒は楯無を指差すも、楯無は「あつ……」と戸惑うも、一夏は腕を組みながら、楯無を背中に隠すように移動する。

「こいつは俺が自ら呼んだ。俺の……恋人だからな」

一夏の言葉に楯無は驚き、箒は「なっ!」と驚愕する。だが、そんな三人のやり取りに横槍を入れる物がいた――それは……。

『霧崎止、セシリア・オルコット、両者スタンバイしてください』
アリーナにある放送室の実況席からだった。因みに実況席に座っているのは薫子である。それを聴いた止は準備運動を止め、一夏達を見る。

「もう時間みたい。ねえ一夏、勇人?」

止に訊ねられた一夏は「何だ?」と訊き返し、勇人は無言で首を傾げると、止は笑う。

「勝ってくるね?」

止がそう言うで一夏は軽く笑いながら「ああ!」と答え、勇人は軽く微笑みながら頷いた。そして、止は両手を叩くと、コンピューターガントレットを着けている右腕を高らかに掲げ、叫んだ。

「行くぞチョッパー!! 敵に恐怖を与え、切り刻もうぜえ!!」

あれから数分後、アリーナの中央にはISを纏っているセシリアが宙に留まっていた。セシリアが纏っているISは軽装的かつ全身が美しく蒼い。

それはイギリスと言う紳士の国がセシリアの為に用意したISであり、四つの翼のようなスラスタが特徴的なISで、セシリアは手に大型の狙撃銃を持っている。

だが、セシリアの表情は何処か勝ちを確定しているようにも思えた。勿論、相手が男であるのと、セシリアが今一番に潰したいのが止でもある為、尚更酷い物である。刹那、止がいるピットから一機のISが飛び出て、セシリアの元へと近付く。が、セシリアはそのISを見てかつ戦慄した。

「な、何ですのそのISは!?!」

セシリアは驚きを隠せない。セシリアだけではない、観客席にいる女子達や教師達も皆、そのISを見て戦慄していた。そのISを纏っているのは止である。

止が纏っているISの四肢や胸はプレデターが纏っている防具と全く同じであり、両腕にはシミターブレイドが装備されている。しかし、ウイングスラスタは付いていたがそれが問題だった。

そのウイングスラスタは四つあったがそれらは全て木を模したような色をしており、先端には血の涙を流しているようにも思える髑髏が後頭部から口元を貫通したように串刺しにされていた。

流石にそれを見たセシリアや観客席にいる女子達や教師達は戦慄するが、止はセシリアを見て首を傾げる。

「どったの? 俺のISに何か文句あんの?」

「あ、ありますわよ!?! そのウイングスラスタの骸骨は何ですの!?!」
セシリアの言葉に止は自身のウイングスラスタを見るも直ぐにセシリアを見た。

「何って……普通のウイングスラスタだけど?」

「普通じゃありませんわよ!?! そんな悪趣味なウイングスラスタ見

た事ありませんわ!」

セシリアは驚きながら手に持つてる狙撃銃もといレーザーライフル・スターライトmkIIIを片手に持ち変え、止のISのウイングスラストアーを指差すも、止はムスツと怒る。

「別に良いじゃん? 他人のISを馬鹿にする理由なんて無いし」
「そ、それはそうですね……さ、流石に」

セシリアは少し驚くも、止は軽く笑い、シミターブレイドを展開し身構える。刹那、止の顔からチョップパーのマスクが展開する形で現れる。

「何ですのそのマスク? へんなマスクですわね?」

セシリアは止の顔にあるマスクを指摘する。すると、止はマスク越しで話す。

「そんなの、今は関係ないんじゃないん?」

「それは解りますけど……でも、変なマスクですわね?」

セシリアは気を取り直して、男性を軽蔑するような表情をしながら指摘する。だが、それを聞いた止は無言になる。

「あらあら? 何を黙ってますの? それとも変なマスクと言った事に怒ってますの? それに……」

セシリアは不敵に笑うと、そのまま言葉を続けた。そんな変なマスクを造った人の気も知れませんか? と。勿論、セシリアの言葉に観客席にいる一部の女子達も少し笑う。だが、その言葉は止の逆鱗に触れた。

「ーあの馬鹿っ!? ー。それは止のピットにいた一夏は驚く。が、勇人は舌打ちし眼を逸らす。そんな二人に楯無と真耶の二人は何も解らず互いを見合う。

因みに箒は一夏に追い出され、一夏は箒に言われた楯無を慰める形で頭を撫でたの言うまでもない。

しかし、一夏と勇人はセシリアに対し、言っではいけない事を止に言ってしまった事に怒っていた。あれは止にとって手が付けられない事をしてしまった事をも意味していた。

それは早く止めなければならぬが、最悪にも放送がなかった。

『では、霧崎止とセシリア・オルコットによるクラス代表決定戦第一試合を始めます』

薫子の実況とも言える声が聴こえた。そして再びアリーナ。アリーナにいるセシリアは高らかに宣言した。

「ではこの私、セシリア・オルコ……」

刹那、止は無言でライフルを展開し、セシリア目掛けて撃ち、それを見たセシリアは慌てて避けるも肩に掠りシールドエネルギーが微かに減る。

「いきなり何するんですの!?! 人が名乗りを上げてる間に攻撃なんて!?! 男として恥ずかしくありませんの!?!」

セシリアは止に指摘するも、アリーナの観客席にいる一部の女子達も怒るが、止はライフルを構えると、こう呟いた。

「そんな宣言みたいなのを待つてくれる奴なんていないし……何より漫画の中で充分じゃん?」

止はそう言いながらもチョッパーのマスクの下の顔は怒っていた。それはセシリアの余計な一言が止を怒らせたのは言うまでもない。

そして、止とセシリアの試合は始まった。それが接戦か一方的かは誰にも判らない。彼等二人が戦う事で判る事だろう。

第52話

「食らいなさい!!」

セシリアは手に持つてるレーザーライフル・スターライトmkII Iで対戦相手の止を何度も撃つも、止は難なく躲す。が、止は何もしない訳でもなく冷静に手に持つてるライフルでセシリアに狙い撃つ。 たった一発、たった一発にも関わらずセシリアに当たった。これにはセシリアも驚くがセシリアだって移動したにも関わらず命中した事に驚きを隠せない。

しかし、それはセシリアが知らなかったからだ。止は一夏や勇人とは違い天然だが、三人の中では狙撃が一番上手いのだ。彼はシミターブレイドでの戦いも得意としているが両手を使った武器の扱いにも長けている。

例え、セシリアが遠距離攻撃が得意だとしても、止はそれの更の上をいつてるのだ。セシリアは驚く中、止は無言でライフルでセシリアに狙いを定め、撃つ。それも三発だったがそれらは全てセシリアに命中した。

「所詮紛れ当たりですわ!! この試合はセシリア・オルコットが、ブルー・ティアーズが勝つに決まっていますわ!」

セシリアは単なる紛れ当たりだと思い、スターライトmkIIIで止を何度も狙う。しかし、何故か止は紙一重とも言えるくらい難なく躲して行く。

「な、何故当たらないのですの!?!」

セシリアは命中しない事に焦りを隠せない。勿論、今の止に何を言われても聞く耳を持たない。何故なら、セシリアが言った一言が止を怒らせたのだ。

証拠にチョッパーのマスクを着けているが、止の表情は怒りに満ちている。それでも、止は冷静にセシリアを狙っていた。そのせいか、セシリアのIS、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが徐々に減っていく。

それに対し、止のIS、チョッパーのシールドエネルギーは減って

いない。

『霧崎選手!! オルコット選手を徐々に追い詰めてく!! 誰がこの展開を予想したのでしょうか!』

実況席に座っている薫子が実況放送をするが薫子自身も驚きを隠せない。しかし、観客席にいる女子達は戦慄かつ驚愕していた。

一組の生徒は、止の事を未だ知らないが止の実力に驚きを隠せない。他のクラスの生徒や上級生も止の実力を知りながらも一部警戒していた。

それだけじゃない、一夏と勇人の実力をも警戒していた。だが、今は違う。今は止とセシリアの試合を観戦しなければならない。今はどちらに軍配が上がるのを気にしていた。

一部はセシリアが勝つて欲しいと思っているがそれは無理に等しかった。何故なら、セシリアは止に追い詰められていた。

「くっ、当たって下さいまし!!」

セシリアは止をスターライトmkⅢで狙い撃つも、止は無言で軽く横に移動して躲す。しかし、セシリアは同じ事を繰り返す訳ではなかった。

刹那、セシリアのISにある四つのビットがセシリアから離れ、それらは全て止に対し、ピンク色のレーザービームを繰り出す。それを見た止は無言で躲すも、圧倒的不利だった。

セシリアのスターライトmkⅢも含まれており、事実上の五対一とも言えた。

『オオーっ! オルコット選手、先の不利が嘘のように有利になった!! これには霧崎選手も反撃を食らったのかもしれない!』

薫子の実況放送が流れ、一部のセシリアを応援していたであろう女子達も喜びを隠せない。所詮、男は女に勝てないからだ、と。

「どうですの!?! ブルー・ティアーズの猛攻の前には手も足も出ないですわよね?!」

セシリアは勝ち誇った表情で止に訊ねるが、止は無言でライフルを構える事もなく、セシリアが手に持つてるスターライトmkⅢや四基のブルー・ティアーズレーザービットの猛攻にも何故か難なく躲してい

く。

それには流石のセシリアも驚くが、止が突然姿を消す。――「き、消えた!」――。セシリアは再び驚きながらそう言う。観客席にいた女子達や教師達も止が消えた事に驚きを隠せない。

「ど、何処に居ますの!?!」

セシリアはスターライトmkⅢを持ち構えながら辺りを警戒する。が、いざというときの為に四基のビットを自分の周りを囲うようにして空中待機させた。

近くから薫子の実況放送が流れるも、セシリアは止が何処にいるのかを警戒していた為、聞く耳を持たなかった。

「ど、何処ですの!?! 姿を現し……」

セシリアが何かを言い掛けた刹那、一基のビットが突然爆発した。これにはセシリアも驚く前に爆風で少し怯む。それだけではない、残りの三基のビットも突然爆発した。

これにはセシリアも一基のビットが爆発した直後に発生した爆風には怯む程度だったが、流石に三基も爆発した直後に発生した爆風には耐えきれなかったのか自身も吹き飛ばされてしまう。

――ああっ!! ――。セシリアは吹き飛ばされながらも何とか持ちこたえ、爆風を見て戦慄した。

「な、何が起きました……の?」

セシリアは突然の事に愕然としていた。セシリアだけではない。観客席にいる女子達や教師達、放送室の実況席に座っている薫子、ビットにいる楯無も突然の事に驚愕かつ戦慄していた。

しかし、一夏だけは違っていた。一夏は止が怒っている理由を知っているのか呆れて溜め息を吐いている。因みに勇人は次の試合の為に真耶と共に別のビットへと移動していた。

まるで、ビットが爆風したように思えるが、あれは身体やISを透明にした止がライフルで狙い撃ちしたのだった。

本当ならセシリアを撃てば良かった物の、止は何故かセシリアを狙わなかった。何故なら、止はセシリアに怒りを覚えていたからである。

セシリアがマスクの事を馬鹿にしたからである。このマスクを馬鹿にしたのは別に良いが作った者を馬鹿にした事に怒っていた。

このマスクはチョツパーが作ってくれた物であり、止はチョツパーを尊敬しているだけではなく感謝していた。それをーそれ

これには止も怒る筈だ。今の止はマスクを着けているものの表情は怒りに満ちている。セシリアが許しを乞うとしても止は許さないだろう。

セシリアは未だ辺りを捜すも、止は透明にしながら、セシリアの真上にいた。すると、止はライフルをしまう形で解除すると、両腕に装備されているシミターブレイドを高らかに掲げる。

刹那、シミターブレイドの刀身が赤く染まる形で光輝く。シミターブレイドだけではない、ISも赤く輝く。しかし、その行動は透明の効果打ち消す。

ーなっ!? ー。セシリアは真上にいる止に気付き離れるも時すでに遅しだった。

ー切り裂きジャックー。

止は不意に咄くと同時に、止は物凄い速さでセシリアに迫る。それを見たセシリアは慌ててスターライトmkⅢを構えるも、何かが通り過ぎ、同時に身体に激痛を感じた。

その間に、止はセシリアの後ろにまで移動していたがシミターブレイドを斜めに降り下ろした形で構えていた。

だが、セシリアのISの一部がバチバチと火花を飛ばしていた。それは最早戦えない事を意味していた。

『ブ、ブルー・ティアーズ、シールドエネルギーエンプティ……し、勝者、霧崎止』

薫子の実況放送が鳴る。が、セシリアは恐怖で身体を震わせていた。何が起きたのか、何が遭ったのかセシリアには解らなかった。

観客席にいる女子達や教師達も止が何をしたのかは解らなかった。しかし、当の本人はシミターブレイドを解除し、マスクを脱ぎ、辺りを見渡す。

その表情は怒りよりも何処か哀しそうだった。まるで何か物思いに更けている。それは何かは解らないが、止はチョツパーのマスクを見る。

チョツパーのマスクには何の変化もない。が、止は強く瞑目しチョツパーのマスクを抱き締め、微かに呟いた。ーチョツパー……
わたる渡……ーと。

「な、何が起きましたの……？」

一方、セシリアはISが戦えなくなつた事に気付き着地するも、未だ突然の出来事に戸惑いを隠せない。止が何をしたのかが未だ解らないでいたが不意に止を見る。

止は未だチョツパーのマスクを抱き締めていたが、眼を開け、自分のピットの方へと戻る為に歩く。セシリアとは眼を合わせなかった。

「あ、あつ……」

セシリアは止に恐怖した。それだけではなく、一夏や勇人も止と同様かそれ以上の力を持つてるのではないのかと畏怖した。しかし、今はISを何とかしなければならぬ為、自分のピットへと戻った。

そして、観客席にいる女子達や教師達もセシリア同様、一夏や勇人が止と同様やそれ以上の力を持つてるのではないのかと警戒していたのは言うまでもない。

そして、もう少ししたら一夏と勇人の戦いが始まるのも時間の問題だったのも言うまでもなかった。

第53話

「――お疲れだな、止。ピットへと戻った止を迎えたのは一夏と楯無であり、一夏は止に労いの言葉を掛けた。が、止は沈んだ表情をしていたが一夏に気付き、首を激しく左右に振るとニカツと笑うと「ああー」と答え、纏っていたIS、チョツパーを解除する。」

刹那、チョツパーは消え、止は軽く着地する。チョツパーのマスクは消えなかったが止は一夏に対し親指を立てる。しかし、一夏は軽く溜め息を吐き、止を見る。

止を見る一夏の表情は何処か哀しかった。何故なら一夏は、止が試合を終えた後に止自身がある人物を思い出した事に気付いたのだ。

霧崎渡り―彼は止の双子の弟であり、三年前に死んだ少年である。今も生きていたら止や自分や勇人と同じように高校一年になっていたのかもしれない。

だが、一夏は渡の事を口にはしなかった。一夏自身が止を気遣う為でもあり、此処にはいないが勇人も止を気遣っている為何も言わなかった。言えば彼が哀しむのも目に見えるし、止自身に辛い過去を思い出させるようなものでもあったからだ。

一夏は敢えて言わなかったが敢えて憂いの言葉を掛けて止を元気付けた。

「それよりも止、オルコットを叩きのめした気分はどうだ？」

「ああ、最高だったよ……でも、あれじゃ修復するのに時間掛かるかもね？」

止は両手を腰に当てながら、セシリアのISを心配をするも、一夏は苦笑いする。

「別に良いだろ？ それに……」

『ではこれより五分の休憩を取り入れた後に、織斑一夏選手対勇人選手の手試合を始めます』

一夏の声を遮るように薫子の放送の声が聴こえ、止は一夏に訊ねる。

「次は勇人との試合だけど、一夏大丈夫なの？」

「大丈夫だぜ……でも、勇人とは何度も手合わせしているけど、勝ったり負けたりのお繰り返しかけどな？」

一夏はそう言うも、止は「あー」と納得する。何故なら、一夏と勇人は惑星にいた頃、何度も手合わせしていた。あれは何度も手合わせしたものの、勝ったり負けたりのお繰り返しかけだ。

あれは一夏や勇人にとって良い思い出かつ、次こそ勝つと言う思いもあつた為に悔しい思いなんてなかった。が、それ以前に良きライバルであり良き友である事にも変わりはない。

一夏は軽く笑うも、一夏は制服を脱ぎ始める。一夏ちよつ?!
一夏。それを見た楯無が突然声を上げ、一夏と止は楯無を見やると、楯無は頬を紅くしていた。

「何だ更識？」

「な、何じゃないわよ？ か弱き女性の前で服を脱ぐのは止してよ」

楯無は両手で顔を隠すも、一夏と止は互いを見合い首を傾げるも、直ぐに楯無を見た。しかし、一夏は制服を脱ぎ始める。ブレザー、シャツ、ズボンも脱ぐも、一夏はISスーツを纏っていた。

これは束から教えられた為でもある、ISスーツは汗を吸引するだけではなく軽い。大抵は直ぐに準備出来る事といざという時の為でもある。

それに、一夏のスーツは顔や両手首、両足首から先は全身を隠す程の物だった。それは一夏の身体中には無数の傷痕がある為に、束自身が気遣う形で作ってくれたのだ。

一夏は束に感謝しているが右腕にはコンピューターガンレットを着け、首には三本の縦長い線を模した首飾りをぶら下げていた一夏それが一夏のIS、ケルティックの待機状態の物でもあった。

一夏は制服を脱ぎ終えた後、軽く準備運動をする。その間に止は楯無に一夏が着替え終わった事を教え、楯無は恐る恐る両手を下ろし、一夏を見る。

一夏は準備運動をしていたが一夏の身体に違和感を感じた。一夏の身体には筋肉が付いていた。それは異性や（最悪の場合オカマも）見惚れる物だった。勿論、楯無は一夏の身体を見て見惚れてしまう。

楯無は一夏の身体つきを見て見惚れる中、扉の方からノックの音が聴こえ、一夏、楯無、止は扉の方を見やると、扉が開く。

扉を開けたのは手に何かを持っている千冬だった。それに何故か箒もいた。一夏は二人を見て表情を険しくするも、千冬は少ししたじろぎ、箒もたじろいたが楯無や止を見て表情を険しくする。ピット内には重苦しい空気が流れるも、千冬は一夏に訊ねた。

「い、一夏、つ、次はお前の番だな？」

千冬は一夏に訊ねると、一夏は「ケツ」と吐き捨て二人から眼を逸らすも、千冬とは話をしない。そんな千冬に楯無は訊ねた。

「どうしたのですか織斑先生？ 私達に何か用なんですか？」

「用と言う訳ではないが、一夏に渡したい物があつてな」

千冬の言葉に一夏は瞠目するも直ぐに千冬を見て歯を食い縛る。が、千冬は少し微笑むも、一夏の元へと歩み寄り、手に持っている物――刀を横した物を一夏に差し出す。

その刀は全身が白かったが何処か凛々しきを感じさせる。しかし、千冬は余計な事をしていた。

「何だこれは？」

一夏は千冬に訊ねるも、千冬は答える。

「これは雪片式型だ――白式に搭載される筈だった刀だ」

「雪片式型？」

一夏は雪片を見る。その刀はかつて、千冬が暮桜を纏っていた時に使っていた刀とは同じ物だった。が、千冬は何故これを一夏に渡そうとしているのかが解らないが、一夏は断る。

「要らん、それに俺には刀よりも槍の方が好きでね」

一夏の言葉に千冬は驚くも、箒が横槍を入れる。

「な、何を言ってるんだ一夏!?! 刀よりも槍だと?! そんな事はない! 槍よりも刀の方が良いに決まってるだろ!?!」

箒の言葉に一夏は箒を睨む。因みに箒は千冬と一緒にいるのは千冬が一夏の為に雪片式型を一夏に渡す為でもあり、箒は千冬と一緒に文句は言われないかと思っただからだ。

だが、箒の言い分には半分当たりであり半分外れでもある。何故な

ら刀と槍とでは使い方が違う。刀は接近攻撃しかできないが、槍は接近型であるが、中距離攻撃にも対応出来るのだ。

その為、戦国時代では鉄砲や弓矢が遠距離攻撃に有効ならば、刀は小刀を含め近距離攻撃が有効ならば、槍は近距離攻撃だけでなく中距離攻撃にも有効である。

その為、昔の門番は大抵槍を持って門を守っているのである。箒の言葉に一夏は反論しようとしたが、その前にある事をした。一夏は千冬が差し出してきた雪片式型を手で払うように叩き落とす。

それを見た千冬や箒は驚くも、雪片式型は床に落ちる。千冬は一夏に怒ろうとしたがその前に一夏が静かに怒る。

「言い加減にしろ、俺はお前の玩具じゃないー俺はお前が使った武器も使いたくもない!!」

今度は一夏は叫ぶように怒る。それを見た楯無と止、千冬と箒は肩を竦めるも、薫子の声が聴こえた。

『では、織斑一夏選手に勇人選手ー両者スタンバイしてください』
薫子の言葉に一夏は千冬と箒を睨むも、身体を翻し、首飾りに手を掛け、不意に『ケルティック』と呟いた。

刹那、一夏の身体や四肢にISが纏い始める。それはISだったが止が纏っていたIS、チョッパーと同じだが少し違う。

両腕にはシミターブレイドはないが、左腕には展開される前のリストブレイドがあり、背中には人の骨を模したウイングスラスタが四つもあった。

が、それが一夏のIS、ケルティックだった。そのISはパワーを重視しているが操縦者が一夏である為、更に強力なISである事に変わりはない。

「あれが……一夏君の専用機……ケルティック」

楯無は一夏が纏っているISを見て呟く。が、そのISはかつて自分を助けてくれた時の一夏が纏っていた物と同じである事にも気付く。

が、一夏は楯無と止を見て軽く微笑む。ーー行ってくるー。一夏は二人にそう言った。それを聞いた止は笑いながら「行ってこいー」

言い、親指を立てる。一方、楯無は少し微笑むと頷く。

それを見た一夏は頷くも、千冬と箒を見ずに、ウイングスラスターを噴かしてアリーナへと続く入り口へと向かう。後ろから千冬と箒の声が聞こえたが背中を受け止める形で流していた。

アリーナ。このアリーナの中央の上空にはISを纏っている勇人がいた。勇人のISは一夏と少し同じ物だったが、ウイングスラスターは二つしかなく、五本の鋭利な刃物がついているレイザーディスクを模した物があった。

そして、そのISの名はスカーだった。刹那、一機のISが勇人とは少し離れた場所で宙に浮く形で待機する。ケルティックを纏っている一夏だった。

一夏と勇人は互いの相手を見て微笑むも、直ぐに表情を険しくし、一夏はスピアーを展開し、勇人はリストブレイドを展開する。

『ではこれより、一年一組によるクラス代表決定戦第二試合を始めます』

薫子の実況放送が流れるも、二人は直ぐに素早い動く。そして、一夏は勇人に近付きながら槍を振り上げ、勇人は一夏に近付きながらリストブレイドを横に伸ばす。

そして、二人が近付いた瞬間何かがぶつけ合う音がアリーナに大きく響いた。

それは一夏のスピアーと勇人のリストブレイドが鏝迫り合う音である。一夏の顔にケルティックのマスクが展開され、勇人の顔からスカーのマスクが展開する。

刹那、二人は互いに離れる。スピアーやリストブレイドから火花が飛び散るも、二人はかなり離れると、再び衝突した。が、どちらに軍配が上がるのは誰にも解らなかった。

第54話

ーータアアアッ!! ー。ーウオオオッ!! ー。アリーナではケルティックを纏った一夏と、スカーを纏っている勇人が激しい死闘を繰り広げていた。

一夏はスパアーを手に勇人の身体を叩き、突き、薙ぎ払い等、槍特有の攻撃で勇人を追い詰める。一方、勇人もリストブレイドで一夏の身体を切り裂いたり刺したりした。

が、どちらも時には攻め、時には受け止め、躲したりしていた。どちらも善戦かつ苦戦を繰り返していた。

彼等が衝突する度に火花が飛び、どちらかのISのシールドエネルギーの片方かが、同時にが僅かに減るかの繰り返しでもあった。

それは単なる遊びでもなく、イベント目的でもない。彼等は死闘を繰り広げている。その証拠にどちらも手を抜いてはいない。

抜けば隙を見せる事を意味し、敗北を意味していた。が、そんな二人を観客席にいる女子達や教師達は驚きのあまり身体を震わせたり、あまりの凄まじさに声を出せない者もいた。

しかし、全員に共通していることがあった。ー彼等は恐ろしく強い、とー。それだけではない、中には二人の闘いを恐ろしいと言うよりも、国家代表同士の闘いかそれ以上かもしれない闘いに感銘している者達もいた。

どちらが勝とうが負けようが引き分けになろうが、この闘いから目を逸らさず、目に焼き付けていた。

実況放送をしている薫子からは何の実況もないー薫子は瞠目しており、実況放送をしている暇もなかった。薫子自身も二人の闘いに恐れと、次の新聞の特集のネタが出来た事に内心喜びを隠せないでいた。

そしてーその闘いは更に激しさを増すばかりだった。

「テヤアアアアッ!!」

一夏はウイングスラスターを最大限とまでは言えないが全力で噴かしながら、勇人に迫る。それを見た勇人は無言で見据えるも、一夏

は勇人をスパイクで刺そうとした。

刹那、勇人は紙一重で躲す。ーっなっ!? ーっ。一夏はケルティツクのマスクを着けていたが驚きを隠せないもののそのまま観客席に激突しかねないくらい突き進む。

一夏は身を起き上がらせて急停止するものの止まらない。それを見た観客席にいた女子達は慌てて避難しようとしたが観客席全体には、目では確認出来ないがシールドが張られており、観客席には被害は及ばないものの、女子達は咄嗟の行動を起こしてしまったのだらう。

が、一夏は真正面からシールドに衝突し、スパイクを手放してしまふ。シールドには被害は無かったものの、女子達は一瞬だけ震えてしまふ。

一方、一夏は激突は無かったものの身を翻す。刹那、一夏は首が誰かに掴まれそのままシールドに押し付けられてしまふ。

目の前には誰も居なかったが一夏は突然、目の前にはいないが首を掴まれながら何者かに殴られる。その正体はーっ身体を透明にした勇人である。勇人は一夏が観客席に突っ込むように突き進んでいる間に、身体を透明にして、一夏の後を追い掛けたのである。

そして今、勇人は一夏を何度も殴っていた。勇人自身躊躇している訳ではなかった。何故なら、今は殺し合いとも言える闘いをしているのだ。

それも目の前にいるのは、ISを纏っているのはそこら辺の女子や女性ではない、目の前にいるのは一夏ではあるのだ。

勇人は身体を透明にしながら、一夏を殴り続ける。その度に殴る音がアリーナに響く。それは女子達や教師達から聴いたら痛々しいだろうがそんな事を言っても、彼等の耳に届く筈もないだろう。

「一夏君……!!」

ピットにあるモニターを見た楯無が心配の声を上げる。が、楯無は何故か、一夏が脱ぎ捨てたであろう制服を抱き抱えているも、止は気にもせずに腕を組みながらモニターを見ていた。

それを見た止は最初ツツコミたくなつたが、それ以前に箒が一夏の制服を持つのは自分であると問い詰めてきた為に、止が必死に楯無を守つたのは言うまでもない。

証拠に、箒は苛々しており、千冬は雪片式型を大事そうに抱き抱えている。が、千冬は何処か悲しそうにモニターを見ていた。

「一夏！ そんな奴早く倒してしまえ！ 刀とか装備していないのか!?!」

「一夏……雪片を持つてればこんな事には……!」

箒は一夏が刀を使えと言い、千冬は雪片を持つてればこんな事にはならないと言いつ出す。

勿論、これには止も呆れて言葉も出ないが人が他人の指図を受けて闘う訳ではない。相手の動きを読めとか注意とかの命令はあるが二人の場合は指摘だ。

一夏が刀を使うか使わないかは一夏の自由である。止は二人に指摘したかったが今は関わる気は無かった。今は、一夏と勇人がどちらが勝つのかを気にしていた。

「一夏君……負けないで……!」

楯無はそう呟きながら一夏の制服を抱き抱えている両手に力を入れる。すると、アリーナに異変が起きた。一夏の右肩から、ある武器を展開する。

ハンドガンの銃身だった。ハンドガンは銃身を目の前へと向けると、自動で連射を開始する。刹那、目の前が突然火花が飛び散り、同時に一機のISが姿を現す。スカートを纏っている勇人だった。

勇人は一夏のハンドガンでダメージを喰らい怯むも、一夏はその隙を突いてウイングスラスターを噴かしながら、勇人に体当たりし、勇人は後ろへと吹っ飛ぶ。

それを見た一夏はチャンスと言わんばかりに、ある武器を展開する形で取り出す。スピアードだった。一夏はスピアードを両手で持ち、勇人目掛けて突き進みながらスピアードを横に振る。

一方、勇人も体勢を立て直すのが、一夏が目の前に来るのに気づくも、一夏はスピアードで勇人の脇腹を叩く。

勇人は吹っ飛ばされそうになるが何とか持ちこたえるが脇腹に走る激痛に耐えきれず顔を歪めるも、一夏は肩に装着しているハンドガンの銃口を勇人に向けると、ハンドガンの銃口から銃弾が放たれ、勇人に命中する。

勇人の身体にハンドガンの銃弾の雨が走る。勇人にとっては手痛い反撃を喰らったようにも思えるだろう。――あはっ！――。そんな一夏の反撃に、ピットにいた楯無は喜びを隠せない。

だが、楯無の近くにいた止は楯無を見て苦笑いするも、ある疑問を浮かべる。

――もしかして更識は……。――。止は内心何かを言いたかったがそこまでは言わなくなった。何故ならば、止は今は一夏と勇人のどちらかに軍配が上がるのかを気にしていた――それに……。

「一夏！ 飛び道具は卑怯だぞ!? 刀を使い！」

近くから箒の、一夏の攻撃を拒む声が耳に響く。しかし、飛び道具が卑怯だと言っても、槍の近接攻撃や中距離攻撃、刀等の近接攻撃だけでは何とかなる訳ではない――中には銃や弓矢、手榴弾等の遠距離型攻撃も必要である。

敵が遠くにいる場合は銃を、近くにいる場合は接近戦に強い武器を使えば良いのだ。それは戦略でもあり、どんな敵にも対応する為でもある。

なのに、箒が言ってる事は強要であり、一夏がそれをする理由もない。近くにいた千冬も千冬で何かを言いたかったがそれは内心か、千冬が単に何かを思っているのかは止には判らないのだ。

刹那、アリーナに異変が起きた。一夏の肩に付いているハンドガンの銃身の、ハンドガンの銃口から銃弾が出なくなったのだ。

弾切れだった。一夏はケルティックのマスクを着けているがそれに驚くも、勇人はチャンスと言わんばかりに右手から、ある武器を展開する。レールガンだった。殺傷能力はないものの、レールガンを一夏に向けて引き金を引いた。銃口から一発の蒼い稲妻弾が放たれ、それが一夏の身体に命中した。

一夏は悲鳴を上げなかったものの、そのまま吹っ飛ばされてしま

う。同時にスピアーを手放すも、勇人はレールガンの引き金を二回も引く。

レールガンから二発の蒼い稲妻弾が放たれるもどちらも一夏に命中した。ピットにいた楯無は驚きを隠せないが一夏の制服を抱き抱えていた手に再び力を入れたのは言うまでもなかった。

「つぐつ……」

一方、一夏は吹っ飛ばされながらも何とか持ち堪えるがISには火花が微かに飛び散っていた。一方、勇人も何故かレールガンを落とす。

勇人のISも少し火花が飛んでいたが一夏の攻撃に多少のダメージを喰らったのだろう。

しかし、一夏と勇人は互いを見合う。どちらもマスクを着けているが表情は険しい。それは、彼等が次の技に全てを掛けようとしていた。

そう……一撃必殺技とも言える単一仕様能力ワンオフ・アビリティで止めを刺そうとしていた。

そして、二人はそれを行うべく行動を起こす。一夏が身構えると、一夏の右拳が蒼く光り、勇人は左手からレーザーディスクを展開するように取り出し掴むと、勇人の左手やレーザーディスクが紫色に光ったのである。

二人がどんな必殺技を出すかは誰も判知らない、一部の人だけしか知らない事だ。

第55話

「ハアアアツ……！」

「ツアアアツ……！」

一夏と勇人は今、互いの必殺技を繰り出そうと構えていた。一夏は身構えながらも右拳は蒼く光っており、勇人は左手にはレイザーディスクを持つてるものの、左手とレイザーディスクは紫色の光を発している。

それは一撃必殺技とも言えるワンオフ・アビリティ単一仕様能力。二人はその能力で止めを刺そうとしていた。それはたった一度しか出来ない。何故なら、二人は先の戦いで満身創痍とまではいかないが多少のダメージを受けている。

その為、二人は、この必殺技に全てを賭けようとしていた。当たれば勝ち、外せば負ける。二人はそれに気付きながらも互いの相手に狙いを定める。

一瞬の油断は許されない。油断すれば敗北を招く。二人はそう気付きながらも一夏は全身蒼く光り、勇人は全身から紫色の光りを発する。

単一仕様能力が発動する事を意味していた。それを見た観客席にいる女子達や教師達、実況席にいる薫子、ピットにいる楯無や止は息を呑む。が、筈は何故か苛々しており、千冬は何故かソワソワしていた。

アース・エンガー

「大地の怒り！」

アペルビスイア・タイムリミット

「絶望へのタイムリミット！」

そして、一夏と勇人はそう叫びながら互いの相手に対して突き進む。そして、一夏は突き進みながら右拳を前に突き出し、勇人は左手に持つてるレイザーディスクを一夏目掛けて振る。

刹那、二人が互いに衝突すると同時に爆発音に近い音がアリーナ中に轟き、アリーナに激しい震動が発生しアリーナ中を揺らし、衝撃波が観客席を守るシールドにひび割れを起こす。

それを見た女子達や教師達はたじろぎ、アリーナが揺れる事に気付

き驚愕し、シールドがひび割れた事に恐怖した。が、ある一機のISが背中からシールドへと叩き付けられる。

その近くにいた女子達は突然の事で驚くも、そのISを纏っているのは……勇人だった。そして、軍配が上がったのは一夏だった。

一夏の繰り出した技が勇人よりも少し速かったのだ。一夏の右拳は勇人の胸に命中したのだった。

「……………」

一方、勇人はISを纏いながらもIS火花が飛んでいるだけでなくボロボロだったローが、勇人はそのまま地面に落下し、そのまま地面に叩き付けられる。

左手にはレイザーディスクはない。一夏の必殺技を喰らった直後に手放してしまったのだ。

勇人からは起きる気配はない。死んだわけではない、気を失っているだけだった。一夏は一夏で肩で息をしていたが、ゆっくりと地面に着地し、ISを解除した。

が、顔にはケルティックのマスクが、右腕にはコンピューターガンレットが、首にはIS、ケルティックの待機状態の物の首飾りが残っていた。にも関わらず、一夏はケルティックのマスクを着けているが何処か疲れてはいないがそのまま俯せに倒れ、そのまま目を閉じた……………」

「う、ううん」

数分後、一夏は目を覚ます。それを見て喜びを隠せない者がいた——楯無である。

「一夏君！」

楯無は一夏が目を覚ました事に喜びを隠せない。一方、一夏は瞠目し上半身だけを起こし、辺りを見渡すが此処はピットだった。近くには止、箒や千冬は居ないが、楯無はいる。

「此処はピット……………はっ、勇人は!? 試合はどうなったんだ!？」

一夏は勇人や試合の事を楯無に訊ねるも、楯無は肩を竦める。

「ちよつ、落ち着いて……勇人君は大丈夫よ、止君や山田先生が付き添ってるし、私は一夏君の付き添いよ」

楯無が理由を説明するも、試合の事も説明した。実はあの後、薫子は驚きながらも一夏の勝利を宣言した。それにあの時、女子達や教師達の一部は何故か身体を震わせていたのは余談である。

が、気を失っている一夏や勇人をピットまで運んだのは止であるが、真耶も手伝っていたのは言うまでもない。因みに千冬は此処には居ない。

ある理由で教師達と話をし、箒は止にピットから追い出されたのだ。それにケルティックのマスクは止が外し、今は楯無の近くに置かれている。

一夏は楯無から聞いた後、胸を撫で下ろす。が、何処かホツとしていた。

「良かった……」

一夏はそう呟くも、再び寝転がる。

「……………」

そんな一夏を楯無は無言で見つめていた。その瞳は何処か哀しそうで、何処か安心しているようにも思えた。が、楯無は突如、どんなもない行動を起こす。

それは楯無が一夏の頭ら辺に移動して正座し、一夏の頭を持ち上げた。刹那、一夏は瞠目し楯無を見るも、楯無は頬を紅くしながら恥ずかしそうに目を逸らす。

何故なら、一夏は楯無に膝枕をしてもらったのだ。それは楯無の恥ずかしくない行動でもある。が、一夏から見れば突然の事で驚きを隠せない。

一夏は楯無に訳を話して貰うと同時に起き上がろうとした。――駄目っ！――。しかし、楯無は一夏にそう叫び、それを聞いた一夏は起き上がるよりも少しだけ怯み、楯無を見る。

楯無は頬を紅くしながら未だ目を逸らしていたが、不意に一夏を見つめるも、一夏の頭を撫でる。一方、一夏は未だ驚いていたが楯無は

口を開く。

「貴方はさつきまで闘っていた……多分、疲れていると思うから……」
「だからっ……」

「床じゃ固いー頭が痛くなるかも知れないから……それに」

一夏が何かを言うのを楯無は遮る。そして、楯無は何かを言う前に深く頷くと、一夏に言った。

「膝枕は私のたった一つの我が儘……貴方への罪滅ぼしでもあるのよ」

楯無の言葉に一夏は「はっ？」と惚ける。しかし、楯無は一夏への罪滅ぼしと言ったのは、あの時の借りを返す為でもあった。犯されそうになった自分を助けてくれた事や、この前の嘘の恋人宣言をしてくれた事や、自分を箒から守ってくれた事や慰めてくれた事。

どれも自分に原因がありながらも、彼は、一夏は何も文句はいなかった。なのに自分は一夏に何もしていない。ならば、少しずつでもいいー彼の為に何かをしようとも思っていた。

一夏が拒絶しても、楯無は何が何でもしようと思っている。そんな楯無に一夏は文句が言いたかったものの、楯無はある事を口にする。

「お願い一夏君……私が許されない事をしているのは解っているわ……でも、私の小さな我が儘を聞いて……お願い、お願いっ！」

楯無は一夏に懇願する。それは楯無の小さな小さな我が儘でありお願いでもあった。そんな楯無に一夏は「更識……」と呟くも、渋々と言った感じで楯無に言った。ー判ったよーと。

それを聞いた楯無は微笑むも、一夏の頭を撫で続ける。一方、一夏は恥ずかしいのか楯無から顔を逸らす形で寝返りを打つも、耳まで赤くしていた。

そんな一夏を見た楯無は何故か笑いを隠せない。可愛い、と言いたかったが楯無は内心止めておこうと思っただけ。言えれば言えれば一夏が何か文句を言うのも目に見えていた。だが、楯無は別の意味でこう思っていた。

ー私に出来る事は、これしかないけど、せめて、少しの間だけこうして欲しいーと。

楯無の本心だったが楯無は口にしなかった——無駄に終わった。それはピットを出入り出来る扉から一人の女性が入って来た。千冬だった。

楯無は扉の方を見た直後に千冬に気付くも、不意に「織斑先生？」と呟いてしまい、それを聞いた一夏は瞠目するも直ぐに表情を険しくしながら歯を食い縛り、手を拳に変える。

「一夏君？」

楯無は一夏の様子に気付く。一夏は千冬に憎悪を抱いていた。その為、自然と表情を険しくしてしまったのだ。そんな一夏に楯無は、身体を震わせながら手を拳に変えている一夏の拳を手で優しく包むように掴む。

——更、識？ ——。一夏は楯無の行動に少し驚き楯無を見ると、楯無は一夏を見てはおらず、千冬を見ていた。

「どうしました織斑先生？ 何かようですか？」

楯無は千冬に訊ねると、千冬は少し驚きながらも答えた。

「実はクラス代表決定戦が中止になった事を伝えようと思ってな？」

「中止、ですか？」

楯無は千冬に再び訊ねると千冬は頷いた。

「ああ、それよりも一夏は起きてるのか？」

「まあ、一応起きてますが一夏君に何か用ですか？」

楯無が訊くも、一夏は表情をますます険しくする。お前には用はないと言いたかった。しかし、千冬は頷くと、ある事を口にする。

「ああ——実は一夏の持つてるISを調べたい……だからこそISを預かりたいが為に来たのだ」

千冬はそう言った。が、それを聞いた一夏は耳を疑い瞠目する。そして、千冬に更なる悲劇が襲う事を千冬は知らなかった。それも、後数分も経たない内に……。

第五章、クラス対抗戦。そして再会。 第56話

「ど、どういう事、ですか？」

楯無は千冬の言葉に何も解らないでいた。一方、一夏は千冬の言葉に表情を険しくし、歯を食い縛り、拳に力を入れていた。が、千冬はその事を話した。

実は一夏が気を失っている間、千冬は真耶や他の教師達とこれからの事を話していた。それはクラス代表決定戦をこのまま継続するしかないかでの事だった。

勿論、千冬や真耶を除き全員の答えは決まっていたー中止である。あんな闘いを見せられたのでは、更に危険な闘いがあるのと、先の闘いでシールドにヒビが入っている。

これ以上続けた場合、シールドが何時割れてもおかしくない上、現に一夏と勇人のISはボロボロであり次の止、セシリア戦では満身創痍の状態で闘わせる危険もあるのだ。

止は兎も角として、セシリアは別ピットで二人の闘いを観て恐怖で震えていた。セシリアは止との闘いでは苦戦の一方であり、最後は止の単一仕様能力、切り裂きジャック・ザ・リッパーで止めを刺され、負けた。

あの時のセシリアは止の強さに恐怖したのだ（勿論、セシリアが止を怒らせるような事を言わなければ試合は変わっていたのかもしれないが）。

それを止とは同格かそれ以上の強さを誇る二人と闘ったら、自分のISはボロボロである以前に修復不能に陥る危険もあったのだ。

その為、千冬は真耶や他の教師達と話し合った結果、クラス代表決定戦を急遽中止にし、後日、クラスで籤引きをして決める事にしたのだ。無論、女子達が入れるのは一夏か、勇人か、止か、運が良ければセシリアに入れる者達もいるかもしれないが大半は一夏達に入れるだろう。

女子達も観客席で彼等の闘いを観て恐怖する者もいたが、ある思惑

がある為、彼等に入れるに違いない。ここまではクラス代表決定戦が中止になった訳だが、此処からは別だった。千冬が一夏のISを没収する理由を千冬は話した。

「一夏ーお前の使っているISは提出した書類とは違っていたーお前のISは規定のスペックを遥かに越えている上、第三世代よりも更に上を行ってるかもしれないからだ」

千冬は訳を話す。勿論、それには理由があった。千冬は一夏のISが、ウエイランド・ユタニ社の提出された書類よりも性能が良かった事に違和感を感じたのだ。その為、一夏のISをー他の二人のISも没収して調べようとした。

それは無理に等しいだろうー何故なら、一夏達のISを造ったのは東である以前に、一夏達も東と協力しながらISを造ったからだ。東の造ったISは第四世代である上に、一夏達の身体能力を含めたら、第五か第六世代にもなっている。

「だからそのISを此方に渡せー他の二人は山田先生に頼んでいるからな」

千冬は一夏や楯無に歩み寄る。ーぐっ!! ー。しかし、千冬の言葉に一夏は苛立ちを隠せず、更に拳に力を入れ起き上がろうとした。

「御言葉を返すようですが織斑先生、学園長や企業からの許可を貰いましたか?」

刹那、楯無が千冬に訊ねる。そんな楯無に一夏は瞠目し、千冬も瞠目しながらも立ち止まる。一夏は楯無を見ると楯無は凜とした表情で千冬を見据えていた。が、楯無は千冬の、千冬自身の嘘を見破っていた。

「何故だ更識生徒会長? それはちゃんと許可したぞ?」

千冬は反論するも目を一瞬だけ游がす。それを楯無は見逃さなかった。

「嘘ですね、もし許可しているのなら学園長から連絡は来ますし、企業も機密情報を自ら流すような自殺行為はしません。それに一介の教師が独断で生徒からのISを調べると言う名目で奪うのは、教師とし

てあるまじき行為です」

「だが私は一夏の……」

「一夏君の何ですか？　一夏君の姉だから姉に逆らうなど言いたいのですか？」

楯無の言葉に、千冬はバツの悪そうな表情を浮かべる。楯無の言ってる事は正しかった。千冬は一夏を自分の弟だからと言う理由でISを取り上げようとしていたのだ。

学園長や企業（束が創った架空企業）には許可を貰ってはいない。その上、その間に一夏には代わりの間として白式を使わせようとしていた。勿論、その目論見は楯無に看破され、束が聞いたら怒るだろう。

楯無はそんな千冬を見て呆れ、溜め息を吐くと言葉を続ける。

「織斑先生——貴女のしている事は専横です。モンド・グロツソを二連覇した上に現役引退したとは言え、呆れて物も言えません。それ以前に、弟を思うなら教師である以前に身内として見守るのが貴女自身の、姉としての役目なのではないのですか？」

楯無は千冬に対し言葉を述べる。それを聞いた千冬は何も言えなかった。が、一夏は楯無を見て瞠目していた。楯無は一夏を庇っていた。

それは楯無が一夏への罪滅ぼしである以前に生徒会長として、同じ姉としての更識楯無として千冬に注意していた。が、普段の楯無はサボる事が多いが、いざと言う時の楯無は生徒会長としての役割を果たしていた。

虚が見たら感動と心配をされるだろうが今はそんな事を言ってる場合ではないだろう。楯無は千冬のしている事を指摘しているのだ。

——更識……——。一夏は楯無を見て不意に呟く。が、一夏は気付いていないだろうが一夏は千冬に憎悪を抱いている。最悪な事に此処には勇人や止はない——二人は一夏のストッパー的な役割をしている。

二人が居なければ、一夏は何をするかは判らない。判ったとすれば、千冬が余計な事をし、一夏の逆鱗に触れていたのだろう。それを、そんな最悪な展開を良い意味で外したのは楯無である。

一夏は楯無を見て何も言わなかったが、楯無は千冬にある事を言った。

「本来ならば学園長や企業に報告しなければならぬのですが、今は一夏君を察へと連れて帰らなければならぬ為、今回だけは見逃します。この事は厳重注意で済ませますが、今度やつたら学園長や企業に報告します……それだけは覚えておいて下さいー」

楯無は千冬に釘を刺すと、一夏を見るー楯無は優しい表情を浮かべていた。

「一夏君……立てる？」

「えっ……あ、ああ」

一夏は楯無の言葉に戸惑うも上半身だけを起き上がらせる。刹那、一夏は千冬と目が合うも、ケツと表情を険しくしながらケルティックのマスクを拾い、立ち上がる。その間に楯無は近くに置いてあった一夏の制服を拾い抱き抱える。刹那、一夏は倒れそうになる。

ーあっ！ー。楯無は一夏を見て慌てて支えるも、制服を落とすしてしまうが楯無は一夏に肩を貸す。すると、一夏を制服の事を思い出す。

「楯なーー更識……制服」

一夏は楯無と言いたいそうになるも更識と言いつつ。幸いな事に楯無には聞かれなかったが楯無は制服を落とした事に気付く。

「あつ、ごめんなさい……今拾うわ、一緒に屈んでくれないかしら？」
楯無はそう言うで一夏は頷き二人は同時に屈むとブレザー、シャツ、ズボンを拾う。一夏はマスクやブレザーを片手で持ち抱え、楯無はシャツとズボンを折り畳んでから片手で持つと、一夏は楯無に肩を貸してもらいながら、楯無は一夏に肩を貸しながらピットから出ていく。

千冬の横を通り好きるも、一夏は千冬とは目を合わせなかった、嫌、合わせるつもりはないと言いつつ換えれば良いだろう。ーっ!!ー。一夏は千冬が自分とは目を合わせない事に気付くも、一夏と楯無はピットを出入り出来る扉を最初は楯無、次は一夏の順で出ていった。そして、ピットには千冬しか居なかった。が、千冬は顔を青くしな

がら力が抜け落ちるかのように膝を突き、そのまま四つん這いになる。

「……っ」

千冬は目にうつつすらと涙を浮かべ、涙は床に落ちる。

「一夏……一夏」

千冬は弟、一夏の名を呟く。千冬は一夏とはよりを戻したかった。にも関わらず、それらは全て裏目に出してしまった。が、その行動は千冬が悪い。

千冬は勇人や止から一夏の空白の三年間を訊き出そうとしたり、専用機を返却して白式を使えとか、専用機がスペック以上であり没収するとか……それらは全て千冬の我が儘に過ぎなかった。

そして、千冬は泣き続けるも、誰も千冬を慰める者は居なかった。

その頃、一夏は楯無に肩を貸してもらいながら寮へと戻る最中の為、ピットの通路を歩いていた。が、先の闘いや単一仕様能力のお陰で体力を著しく消耗している一夏の足取りは重かった。

「大丈夫、一夏君？」

楯無は心配そうに一夏に訊ねると、一夏はそっぽを向きながら答えた。

「大丈夫だよ……別に寿命が削られた訳じゃねえ……」

一夏の言葉に楯無は「そう……」と呟いた後、何も言わなかった。が、一夏はそっぽを向きながらも「ありがとう……」と小さく呟く……頬を紅くしていた。

「何か言った？」

楯無は一夏が何て言ったのかを聞き取れなかった為に、訊ねようとした。

「更識……ッ!!」

突如、後ろから声がし、一夏と楯無は後ろを見る。刹那、一夏は力

を振り絞って楯無を突き飛ばす。

ーブシュツツーツ!! ー。刹那、何かがある音が大きく響き渡り、そして、微かだが誰かの血が通路に飛び散った……。

第57話

「ーあぐつ……ー。ピットの通路で一人の青年の激痛を感じたような声が微かに響く。ーい、一夏君!? ー。一夏に突き飛ばされた楯無の心配する声が微かに響く。

が、一夏は右手を左手で押さえていた。何故なら、一夏は右手の甲をナイフで斬られた為に、右手からは血がポタポタと床に滴り落ちている。

さっきの音は一夏が右手を斬られた時の音だったのだ。そして、ナイフを持っている者は千冬や箒ーーではなかった。その人物は女子生徒でもなく、一人の女教師だった。

その女教師は二十代後半か三十代、金髪のロングヘアに青い瞳。紫色の女性用スーツを身に纏っている。だが、その女教師は楯無に怨みを抱いており、楯無を刺し殺そうとしていた。

「貴女は!?!」

楯無はその女教師を知っていたが今はそんな事を言ってる場合ではない。今は、この現状をどうにかしなければならなかった。

一夏は右手の平に走る激痛を堪えながら、女教師を睨む。女教師は標的であった楯無を殺せなかった事に戸惑いを隠せないでいた。

が、一夏に睨まれてると「グツ!?!」と下唇を噛み、ナイフを手にしたまま、身を翻す形でその場から走り去っていった。一瞬、楯無と目が合うものの、その表情は険しかった。

「あつ、待ちなさい!」

楯無は追い掛けようとした。が、一夏はナイフの刀身を放り捨てる、そのまま膝を突きながら右手を左手で掴むー表情は激痛を余り感じてはないが汗を流している。

「ーあつ、一夏君!?! ー。楯無は女教師を追い掛けるよりも一夏を心配し、一夏の方へと戻る。

「何しているんだよ!?! あの女を追い掛けるよ!?!」

「そんな事言ってる場合じゃないわ! 今は一夏君が心配だからよ!」

一夏は楯無に怒る。が、楯無は一夏に反論した後、一夏の近くに屈み、手をスカートポケットへと入れ、ある物を取り出す。白いハンカチだった。楯無はハンカチを取り出した直後に、一夏の右手を掴み、斬られた右手の甲をハンカチで包む。それは応急措置だった。

「ーあつ、一夏!?!」 ー。刹那、後ろから声が聞こえ一夏は後ろを振り返る。そこは曲がり角だったが近くには止と勇人、真耶がいた。が、三人は一夏を見て驚くも止と真耶は勇人に肩を貸しているも、止は勇人を真耶に任せる意味で勇人から離れ、一夏の元へと駆け寄り、一夏の近くに立ち止まる。

「どうしたんだよ一夏!?! 誰にやられたんだよ!?!」

止は一夏に訊ねると、一夏は答えた。

「全く知らねえ女だ」

「知らねえ女?」

止の言葉に、一夏は「ああ」と言いながら頷く。勿論、一夏はあの女教師とは逢った事はないからだ。一夏達は学園に入学してから一週間しか経っていない。学園中にいる同級生、先輩、教師達の顔や名前を一週間で覚える事は出来ないからだ。

しかし、楯無は応急措置を終えた直後、不意に呟いた。ーあ的那个人はエレーナ先生。ロシア語を教えているロシア人の先生よ……ー。

楯無の言葉に一夏と止は楯無を見やると、楯無は悲しそうに俯いていた。その間に真耶は勇人に肩を貸しながら三人の元へと歩み寄る。「更識さん? さつきエレーナ先生と言いましたが、エレーナ先生が貴女や織斑君を襲ったのですか?」

真耶が訊くと、楯無は真耶を見て「いいえ、私を襲おうとしました」と言いながら首を左右に振る。それに何故、楯無がエレーナ先生の事を知っているのかと言うと、それは楯無が所属しているクラスではロシア語を教えてもらった事がある為だった。

しかし、楯無の言葉を聞いた真耶は「そんな……!」と信じられないと言うような表情を浮かべる。何故なら、真耶はエレーナ先生の事を少しは知っていた。

エレーナ先生はロシア人でありながらも、他の教科やクラスを受け

持つ教師達とは気軽に接する明るい人だった。それに生徒達には差別等しなく平等に接している為、一部の生徒達からの人気も高い。

なのに、そのエレーナ先生が殺人未遂を起こす等あり得ない。だが、それには理由があった。それも、楯無にも原因があったからだ。「それよりも楯無……そのエレーナ先生は何故、お前を殺そうとしたんだ？」

一夏は右手に走る激痛が和らいだのか、徐々に冷静さを取り戻しつつあった。恐らく楯無の応急措置のお陰かも知れないが今はそんな事を言ってる場合ではなかった。

一夏は楯無に訊くも、楯無は首を左右に振る。そうだろう、楯無には原因があるものの、完全に楯無に原因がある訳ではない。何故なら、エレーナが楯無を怨む理由はエレーナにしか知らないし、それに楯無も片棒を担いでいるとも言えるからだ。

楯無はエレーナが何故自分を殺そうとしたのかは解らない中、真耶がある事を思い出し、それを一夏や楯無、勇人や止に言った。

「そう言えば二週間前、他の先生方から聞いたんですけど……エレーナ先生の妹さんが自宅で首を吊って亡くなったらしいんです……自殺だったそうなんですが」

真耶の言葉に一夏と楯無と止は驚きのあまり「えっ!？」と真耶を見やり、勇人は真耶の言葉に瞠目していた。が、楯無は真耶の言葉に違和感と言うよりも、その理由が知りたくなり訊ねる。

「や、山田先生!?! そ、それはどういう事なんですか!?!」

楯無は立ち上がり真耶に詰め寄るも、真耶は楯無の行動にたじろぎながらも話した。

「わ、私にも解りません。ですがエレーナ先生はそれ以来、元気を無くしてしまいました」

「でも山田先生!?! それだけでエレーナって言う先生が更識さんを殺す理由とは言えない筈だろ!?!」

今度は止が詰め寄るも、真耶はたじろぎながらもその事も話す。

「だから私にも解りません!?! でも、エレーナ先生の妹さんが自殺したのと、更識さんを殺す理由は関係ない事には気付いています!?! で

すが現にエレーナ先生は更識さんを殺そうとしたのは事実ですから！」

真耶はそう断言する。そうだろう、真耶は知らないが一夏と楯無は襲われたのは事実であり、一夏は右手の平を斬られただけで軽傷で済んだのは良いが殺人未遂でもある為、何も言えない。

例えエレーナ先生の妹が自殺したのが楯無に原因があったとしても、エレーナ先生から理由を訊かない限り、何も解らない。

真耶はそう考えた後、四人を見る。真耶は教師として生徒を守ろうと考えた。

「取り敢えず皆さん、今は無闇に動いてはいけません。エレーナ先生が何をやからすのかは私にも解りませんがこれだけは言わせて下さい、エレーナ先生と逢った場合はなるべく刺激しないのと、私か他の先生方に連絡して下さい」

真耶はそう言うと、勇人を止に託す。止は慌てながらも勇人に肩を貸すも、真耶は言葉を続ける。

「私はこれから学園長の元へと向かって、学園長の判断で学園全体に緊急放送を流しますー勿論、私はこれから向かいますが貴方達は近くのピットで避難し、内側から鍵を掛け、なるべくピットから出ないようにして下さい」

「でも山田先生!?!」

楯無は真耶に反論しようとしたが真耶は首を左右に振って、四人に微笑む。

「私は大丈夫ですー私は一介の教師である以前に、貴方達や他の生徒達を勉強するだけでなく守る為でもあるのですから……では、皆さん気を付けて下さいね!」

真耶はそう言うのと身体を翻し、その場から走り去って行った。後ろから止の呼び止める声が聞こえたが真耶は背中で受け止め、学園長が居るであろう学園長室へと向かって行った。

通路には一夏と楯無、勇人と止が取り残される。しかし、止は三人を見る。

「なあどうする?…このまま山田先生の言う事を聞くのか?」

「それは俺にも判らんが、ここはリーダーである一夏が決める事だ……だろ？」

勇人は一夏を見るも、一夏は俯いていた。勿論、一夏は悩んでいた為にも言えない。真耶の願いを受け入れるか、勝手に動くかを悩んでいた。

「……」しかし、それも楯無のお陰で直ぐに決まった。――更識？　――。一夏は楯無を見るも、楯無は何故か震えていた。

何故楯無は震えているのかはまた自分のせいで一夏に迷惑を掛けたと思ってしまったからだ。

そんな楯無に一夏は楯無の肩に手を回し、自分の方へと抱き寄せる。――えっ？　――。一夏の行動に楯無は驚きながら一夏を見ると、一夏は何故か悲しい目をしていた。

「一夏君？」

楯無は一夏に訊ねるが一夏は哀しそうに笑うと、直ぐに表情を陰しくし、勇人と止を交互に見る。

勇人は一夏が何を言うのかを待っているも表情を陰しくし、止は何故かキョトンとしていた。そして、一夏は何かを決意したかのように頷くと、二人に言った。

「――更識に二人共、近くのピットで待機するぞ」と。一夏は真耶の願いを受け入れる方を選んだのだった。

それは真耶の気持ちが無駄にしない為であるのと、楯無を思い、守る為でもあった。

第58話

数分後、ここは誰も使っていないピット。そのピットの中は綺麗に掃除されており、空気も少し良い方だった。が、そのピットに出入り出来る扉が外から開けられ、ある者達がピットの中へと足を踏み入れる。

一夏と楯無、勇人と止だった。因みに扉を開けたのは止であり、止は勇人に肩を貸して上げながらピットに足を踏み入れ、その後楯無に肩を貸してもらっている一夏が楯無と共にピットの中へと足を踏み入れたのだ。

何故、四人が、このピットへと来たのかは真耶から何処かへのピットへと避難してと言われた為である。勿論、エレーナと逢うのを避ける為であるのと、無闇に動かないようにと言われた為だ。

因みに真耶は学園長に報告する為に別行動を取っている為に、此処にはいない。話を戻そう、楯無は一夏と共に少し歩くと、二人は近くの壁に寄り掛かる形でその場に座る。

因みにマスクはコンピューターガンレットを操作してしまい、制服は楯無しが持っていたが近くに置いた。

「――大丈夫、一夏君？」　「――。楯無は一夏を心配し声を掛ける。勿論、一夏は瞑目ながら無言で頷き、それを見た楯無は「そう……」と呟いた後に俯く。

が、楯無の表情は何処か元気がなく、罪悪感があるかのように悲しそうだった。「――更識？」　「――。そんな楯無を見た一夏は険しい表情を浮かべ、首を傾げる。

勿論、一夏は楯無がどんな気持ちをしているのかまでは解らなかった。楯無は再び自分自身に罪悪感を抱いていた。

あの時の、自分と眼を合った時のエレーナ先生のあの険しい表情。あれは楯無に憎悪と怒りが込められている。それも、エレーナ先生の妹が関係しており、妹が自殺したのが楯無のせいだと言う事を意味していた。

楯無自身は知らないだろうが、エレーナ先生の妹はとある仕事をし

ていた。その彼女が自殺したのには理由には仕事があつた——それを知ってるのはエレーナ先生だけである。

「更識、更識!!」

一夏は楯無の様子がおかしい事に気付き、楯無の肩に手を置き、揺らす。楯無はハツと我に返り、顔を上げ、一夏を見る。

「どうしたんだボくくつとして?」

「あつ……いえ何でも無いわ」

楯無はそう言いながらも首を左右に振る——その表情は何処か未だ寂しい方だつた。そんな楯無に一夏は訊ねる。

「どうした? あのエレーナ先生の事を思い出したのか?」

——えっ? ——。一夏の言葉に楯無はそう惚けるも、一夏は「凶星か?」と突く。が、楯無は一夏に何も言えず、軽く頷く。

「そうか……ならば、何でエレーナって女はお前を殺そうとした?」

「私にも解らない……でも、山田先生が言つたエレーナ先生の妹が自殺したのは少し前に聞いたから……」

楯無はそう言つた後、俯く。何故なら、楯無はエレーナ先生の妹が自殺していた事は半分知っており半分知らなかつた。エレーナ先生の妹が自殺したのは二週間前——つまり、その一週間後には一夏達は新入生として、楯無は二年生として進級したのだ。

それも入学式から、今日を入れての一週間の間にエレーナ先生の妹が自殺した理由を調べてはいない。調べようと思つても、エレーナ先生の妹はロシアにいて、そこはロシア警察が調べる為、日本が調べる事は出来ないのと調べる理由等無いからだ。

自分の家は暗部であるも、エレーナ先生の身内を調べる理由等ないと、楯無自身が一夏を捜していた為にそっちの事まで手が回らなかつたのだ。

楯無はエレーナ先生が何故、自分を殺そうとしたのが解らない中、一夏は勇人や止を見る。一夏と楯無が話している間、勇人は向かい側の壁にもたれ掛かるように座りながら瞑目しており、止は何故かうロウロしている。

だが、一夏達は何故かピットを出入り出来る扉には鍵を掛けなかつ

た。それは、一夏達には得意な事があつた為に。

「……止……」。一夏は止に訊ねると、止は立ち止まり一夏を見て「何？」と訊き返す。

「止……済まないがエレーナって女はお前に任せるのと、通路で扉を見張つてくれないか？」

一夏の言葉に止は「何で？」と言いながら首を傾げる。

「止、俺と勇人は先の闘いで単一仕様能力を使って体力を著しく消耗している。まあ、もう少ししたら何とかなるが、今動けるのはお前だけだからだ」

「そっか……でも一夏、相手は武器を持つてるの？」

「ああ。相手は一応ナイフを持つている……だが、お前は俺や勇人と同じように身体を透明に出来るからな」

一夏の言葉に止は納得するように何度も頷くと、「判った」と言いピットを出ると、通路で待機する。

ピットに残つたのは一夏や楯無、勇人だけだった。が、一夏は再び楯無の方を見ると、楯無は未だ俯いていた。

「……………」

そんな楯無を見た一夏は呆れて溜め息を吐くと、無言で楯無の肩に手を回し、自分の方へと抱き寄せる。そんな一夏の行動に楯無は驚きを隠せず顔を上げ、一夏を見る。一夏は楯無とは眼を合わさない形でそっぽを向いていた。

「い、一夏君？」

楯無は何かを言おうとした。刹那、放送が鳴った。

『学園にいる生徒達や教師達に連絡します。ロシア語を教えているエレーナ先生が生徒を襲うと言う報告がありました』

放送がなり、女性の声が聴こえた。一夏と楯無、勇人が顔を上げる。それでも、放送は止まらない。それに、放送が鳴つたと言う事は真耶が無事学園長に連絡した事を意味していたのである。

『その為、生徒達は速やかに寮へと戻り、鍵を掛けて部屋から出ないようにして下さい……また、教師達は近くに生徒達が居た場合、出来るだけ一緒に行動し寮へと連れて帰り、他の教師達はエレーナ先生を見

つけ次第、他の教師達に連絡し、そして捕まえてください』

放送からそんな言葉が流れた。しかし、それは学園にいる生徒達や教師達に向けた物であり、ピットにいる一夏や楯無、勇人や止には関係ない物だった。

嫌、それはなかった。真耶は学園長に連絡した後、他の教師達と共に一夏達がいるピットへと向かっているのだ。無論、そんな事を三人は知らない。

放送を聴いた楯無は軽く胸を撫で下ろす。彼女は真耶が無事である事に安心したのだ。一方、一夏はそんな楯無を見て一瞬微笑むも直ぐに表情を険しくする。

まだ油断は出来ないからだ。真耶が無事だとしてもエレーナが何処にいるのかは判らない。その為、何時このピットへと近付くのかも判らないのと時間の問題でもある。

一夏がそう思うのは無理もない。一夏はエレーナ先生とは何か遭った楯無を守ろうとしていた。今の楯無は自分のせいだと思っている。今の楯無はエレーナ先生に何時殺されてもおかしくない。その為一夏は命を掛けてでも楯無を守ろうと決めていた。

それは、さっきの恩を返す為に。一方、勇人は何故か再び瞑目する。一夏には関係ない事だったからだ。

刹那、ピットの外から女性の叫び声があった。三人は声に驚き瞳目するも、直後に止の叫び声が聞こえ、またその直後に大きな音が響き渡る。

「ーな、何っ!?」 ー。楯無の驚く声がピット内に木霊する。が、一夏と勇人は別の意味で驚いていた。何故なら、ピットの外には止がいる。その為、止の身に何が遭ったのかは二人から見れば明白だった。

「ーと、止っ!」 ー。一夏は止を心配し立ち上がる。一夏の突然に楯無は「一夏君!」と驚きながら慌てて立ち上がり、一夏を支える。

一方、勇人も立ち上がる。扉の方からは女性の何かを叫ぶ声が扉越しから聴こえた。それは大人の女性の声だったが、勇人は右腕に着けているコンピュータタブレットを操作する。

刹那、勇人の顔からスカーのマスクが着けられる形で、胴体や股部分や四肢からプレデターの防具が現れる。一夏と楯無は勇人の行動に驚くも、勇人は無言で左腕に装備しているリストブレイドを展開し、扉に近付く。

すると、扉が開いた。勇人は身構え、一夏は何故か楯無を守る形で前に出る。が、扉を開けたのは止だった。イー片方の手には、誰かの腕を掴んでいる。

「と、止!?! お、お前大丈夫なのか!?!」

一夏は不意を突かれたかのように驚きながら、止に訊ねる。が、止はキョトンとした表情で「大丈夫だけど?」と答えた。

「イーエ、エレーナ先生!?!」楯無の驚く声がした。何故なら、止の近くには気を失っているエレーナ先生がいて、止が掴んでいる腕はエレーナ先生の腕だったのだ。

楯無がその事を訊ねようとしたが、通路の方から止を呼ぶ声と数人の走る足音が聴こえた。叫んだのは真耶だった。そして、数人の足音は真耶が教師達を連れてきた音だった。

そして、真耶は一夏達が無事である事に涙を流し、数人の教師達はエレーナ先生を拘束したのは言うまでもなかった。それも事件発生から一時間も経たない内に解決した……。

第59話

二十分後、ここは学園の地下にある牢屋。そこは犯罪を犯した生徒や教師、襲撃してきたテロリストを拘束し捕らえる為に設けられた場所でもある。

しかし、その牢屋はあまり使われていないが、今は色んな意味で使われていた。何故なら、牢屋には一人の女性が横向けに転がっていたのだ。

その女性は楯無を襲うどころか、一夏が咄嗟の判断で右手の甲を斬られ、止に返り討ちに遭う形で一本背負いされて、挙げ句の果てには真耶が連れて来た教師達により拘束され、この牢屋へと放り込まれたエレーナであった。

刹那、エレーナの瞼が微かに動く。それはエレーナが目覚めますのを警告するような物だった。それも直ぐに気が付く形でエレーナはゆっくりと目を開ける。

「……………はっ!」

エレーナは目を覚ますや否や直ぐに起き上がり辺りを見渡す。そこは牢屋である事に気付くもエレーナは目の前にある鉄格子の奥にいる人物達に気付く。

一夏と楯無、勇人と止。何故彼等が此処にいるのかと言うと、楯無が学園長に頼んでエレーナとの面会時間をくれないかと頼んだからである。因みに楯無を除いた一夏達は制服を着ている。

「あんたは……………ぐっ!!」

エレーナは立ち上がるや否や楯無を睨む。それを見た楯無はエレーナから目を逸らす。

「此処は牢屋だって事には気付いてるな、エレーナ先生?」

一夏がエレーナに訊ねると、エレーナは頷く。

「ええ……………でも、私がやった事を貴方やその女は覚えているでしょうね?」

エレーナの言葉に一夏は頷く。が、一夏は再びある事を訊ねる。

「先ず質問に答えろ。何故、更識を殺そうとした?」

一夏の言葉にエレーナは眉間に皺を寄せる。

「それには答えられないわー第一、恋人に代わりに答えてもらおうなんて、あんたは酷いわね？」

エレーナは楯無にそう言うと、楯無は瞠目しながら、エレーナを見る。エレーナは不敵に笑っていたが直ぐに苦虫を噛んだような表情を浮かべる。

「それはそうよね……あんたはロシア代表でありながらも、私達姉妹に何が遭ったのかも知らないはずよね？」

「姉妹……それって、山田先生が言ってたあんたの妹が自殺した事か？」

一夏の言葉にエレーナはバツの悪そうな表情を浮かべる。が、エレーナは真耶が余計な事を言った事に怒りを感じる前に、それ以上にある事に怒る。

「ええそうよ……でも妹が死んだのは……その女が、あんたがロシア代表になったせいだからよっ!!」

エレーナは楯無に怒る。それを見た楯無は肩を竦め、止も肩を竦めるが、一夏と勇人は何も動じなかった。一方、エレーナは楯無に怒るも、目尻に涙を浮かべながら言葉を続ける。

「あんたのせいで、あんたがロシア代表になったせいで……関係の無い妹が自殺したのよおっ!!」

エレーナは泣きながら、楯無に怒る。それを聞いた楯無は肩を竦めるも不意に同時に目を閉じてしまう。勿論、楯無は直ぐに恐る恐る目を開けるも、エレーナは怒りが抑える事は出来ないのに関わらず、未だ楯無を睨み続けている。

それを見た楯無は下唇を噛むも、そんな楯無を見かねた一夏は楯無を背中に隠すように前に出ると、エレーナに訊ねた。

「教える？ 何故アンタの妹が自殺したのが更識のせいだと言いたいんだ？」

一夏が問うと、エレーナは哀しそうに俯きながら言葉を続ける。

「私の妹は、エリーナはある仕事をしていた……カウンセラーの仕事よ」

エレーナは妹に遭った事を話した。彼女の妹、エレーナはカウンセラーの仕事をしていた。勿論、それは楯無がロシア代表になった理由とは違うだろうが、別の意味で同じだった。

それはエレーナには親友がいて、エレーナがカウンセラーしている相手でもあった。しかし、その女性は、ある仕事をしていたので。

「まさか……」

勇人は何かを察したのかそう呟くと、エレーナは静かに頷いた。

「ええ、ロシア代表……いえ、だった人よ」

エレーナは再び言葉を続ける。実はエレーナの友人はロシア代表だったのである。何故、「だった」と言う過去形なのかは楯無がロシア代表になる際に、政府からロシア代表の座を降りるよう言われたのである。

これには友人も文句を言おうとしたが、政府の面々は楯無が若いだけでなく、友人よりも楯無の方が実力もある上に、若いのだと良い意味でのマスコミが注目するからだ。最年少の代表ならマスコミの格好のネタであり、イメージアップにもなるからだ。

勿論、友人は更に反論する。自分は代表になる為には必死に努力して得た地位である。なのにそれを、自分よりも若いだけでなく、ロシアのイメージアップしか考えない政府はそれを却下したのだ。

友人は泣いた。と言うよりも権力に逆らえなかった。しかし、それも権力があり、名誉を選んだ人間の汚い欲望が一人の女性を狂わせたとも言え換えれば良いのかもしれない。

友人は代表を下ろされたその日、全てを失ったかのように、この世が終わったかのように絶望した。勿論、周りにいたスポンサーも親友が代表でなくなった事を知ると掌を返すように離れていき、楯無を選んだのだ。

勿論、スポンサー達も楯無が若いだけでなく実力もあると言う理由で良いイメージアップにもなるからと、政府と全く同じ理由だった。友人は更に絶望するものの、更に追い討ちをかける様な事が起きる。

それは、大半の友人がロシア代表だった友人の元から離れたのだ。その理由は周りが知り合いにロシア代表がいるとなれば後ろ盾にな

るし、権力を振りかざす事が出来るからだ。

だが、ロシア代表でなくなった友人を周りは用済みとして絶交したのである。これには友人は悲しむも、僅かながらに他の友人達もいた。他の友人達は必死にロシア代表だった友人を支えていた。

その中にもエリーナもいて、エリーナも必死に支えていた。自分はカウンセラーの人である以前に友人でもある為だった。しかし……。

「だけど、エリーナの友人は全てに絶望したかのように……自殺した」
エリーナの言葉に、一夏と止は瞠目し、楯無は瞠目しながらも、何故か一夏の制服の背広を掴む。

「だが……それが友人とアンタの妹が自殺したのとどんな関係があるんだ？」

そんな中、勇人は何も感じずに訊ねる。すると、それをエリーナは訳を話した。

「あれはエリーナの友人が自殺した後の事だった……」

エリーナは話の続きをする。あの後、友人達は葬式をした。友人達の啜り泣きしていた。その中にもエリーナが居たがある人物がエリーナに近付く。その人物はエリーナに怒っているのか泣きながらもこう叫んだ。

「……何で……何でカウンセラーの仕事をしていながら、娘を助けてやれなかったのよ!!」

「……と。勿論、それを言ったのは友人の母だった。友人の母も彼女なりに支えていたがエリーナがカウンセラーの仕事をしている事も知っていた。しかし、あの時の友人の母は怒りや哀しみのあまり、我を忘れてそう口走ってしまった為である。」

友人の母はエリーナ自身に怨みがある訳ではなかった。が、それはエリーナには衝撃的すぎる物だった為、エリーナの心に傷を負わせてしまう。

その葬式にはエリーナも居たが、他の友人達と共にエリーナや自殺した友人の母を宥めるがエリーナの顔色は良くなかった。

エリーナは友人の母が言った言葉が、カウンセラーの仕事をしながらも、患者同様の友人を救えなかった事を後悔した。

エリーナが悪い訳ではないが、友人の母のたった一言や、友人を救えなかった事をエリーナは自分のせいだと思ってしまうのだ。

そして、彼女は三日後、家で首を吊って亡くなったのだ……。それも第一発見者がエリーナであったのだ……。

「ーひでえ……！ー。エリーナからあの時の出来事を聞いた止は愕然としながらそう口にする。

一方、一夏と勇人は何も言わずに腕を組みながら、エリーナを睨んでいた。そして、楯無はエリーナの言葉に下唇を噛みながらやるせない表情を浮かべながら身体を震わせていた。

しかし、エリーナの妹・エリーナがそんな理由で自殺したなんて信じられなかった。それにエリーナのせいではないが、全ての元凶はロシア政府と楯無がロシア代表になった事なのかもしれない。

そして、エリーナは楯無を睨むー未だ泣いていたがこう叫んだ。

「アンタが……アンタが代表にならなければ……妹は……妹はあああつ!!」

エリーナは楯無に詰め寄ろうとした。が、その間には鉄格子がある為無駄だった。それでもエリーナは叫び続ける。

「返してよ……私の妹を返してよーーッ!! 返してーーッ!!」

エリーナは泣き叫ぶ。それは楯無への怒りだった。エリーナの身内を失った哀しみでもあった。が、そんなエリーナに一夏と勇人は軽蔑な眼差しを向け、止は少したじろいでいた。

そして、楯無は一夏の背中にすがり付いて泣き出す。勿論、一夏は楯無が抱き着いてきた事に気付きながらも何も言わず、楯無の行動を受けれていた。

そして、四人は面会時間が終わるまで、エリーナの泣き叫ぶ声を聞き続けていた。それは彼等なりの気遣いか、それとも出ていく勇気が無かったのかは、四人には解らなかった。

嫌、これだけは言える。彼等はエリーナの泣き叫ぶ事を聞き続ける方を選んだのかもしれない。

第60話

その日の夜。此処は一夏や楯無の部屋。勿論、一夏や楯無は当たり前として、何故か勇人と止もいた。一夏は自分が使つて未だ間もないベッドの上に腰掛けながら俯いており、楯無はデスク近くにある椅子に座りながら悲しそうに俯いている。

勇人は壁に凭れ掛かつて腕を組みながら瞑目し、止はやるせない思いをしているのか表情は険しく、両手をズボンのポケットに入れながら室内をウロウロしている。

三人の青年と一人の少女の間には会話はなく、重苦しい空気が流れていた。周りから見たら喧嘩したか、何か嫌な事が遭つたのかと察するだろうが後者の方が正しい。

それは、四人は三時間前にエレーナと面会した際の、エレーナの妹が自殺した理由と、その背景にあるロシアと言う世界で一番大きな国の極一部の人間が引き起こした悲劇にやるせない思いを感じていた。

その証拠に、一夏と止の表情は何処か険しく何処か哀しく、楯無はエレーナの妹が自殺した理由に同情しているのか哀しい表情をうかべ、勇人に至つては瞑目している為、彼が何を考えているのかは一夏や止やスカー以外、余り判断出来ない。

勿論、四人には共通している事はあつた。四人はエレーナに同情していた。エレーナの妹が自殺したのも、エレーナの友人が自殺したのも全て、ロシア政府やスポンサー、ロシア代表ではなくなった事で自ら切り捨てた者達が引き起こした事による物だったのだ。

しかし、それを四人は何も出来ないでいた。楯無は暗部の人間でありながらロシア代表でもあるが権力を振り翳すという事をしない為、他国に干渉する事は出来ない。

一夏達三人に至つては、プレデターの力を使つてでも皆殺しにしたかったが生憎、相手は非武装の人間や女であり、殺しの対象ではない。

束に頼めば良いが、束が知つたらロシアにある全ての不祥事をロシア以外の国に暴露出来る上、ロシアにある全てのISを停止出来るだろうが、そんな事をしてエレーナの妹、エレーナや自殺した元ロシ

ア代表の友人は帰ってくる訳でもない。

故に一夏と楯無、勇人と止は己の無力さに恨みながらも、何も出来ないまま時間だけを過ぎていくのをただただ感じていた。刹那、止は立ち止まり、一夏達に訊く。

「なあ皆はどう思うんだ？」

止の言葉に三人は止を見やる。止は未だやるせない思いをしているのか焦りの表情をしている。しかし、そんな止の言葉に一夏は訊ね返した。

「何がだ止？」

「嫌……何かって訳じゃないけど、エレーナ先生、可哀想だった」

止の言葉に、楯無は不意に目を逸らす。が、止は憶測に過ぎないがその事を、エレーナ先生の事を話始める。エレーナ先生は、このIS学園の教師である以前にエリーナの姉でもある。

エリーナは元より自殺した元ロシア代表の友人も、各々の将来の為に努力したのだ。エレーナは教師を、エリーナはカウンセラーを目指していたのだ。勿論それは血の滲むような努力をしてまで就いた仕事だったのかもしれない。

なのに、自殺した元ロシア代表の友人はロシア代表になる為にそれ以上に努力して、たった一つしかないロシア代表と言う最高の名誉を勝ち取ったのだ。

それを、それをロシア政府は自殺した元ロシア代表の友人の努力を見もせずに、楯無を実力が良いのと若いだけだからと言って、彼女の最高の名誉であるロシア代表の地位を無理矢理奪ったのだ。

「おかしいだろ？ 何で努力してまで得た地位を……ロシア政府は下らない理由で奪ったんだよ!? そんなのおかし過ぎんじゃねえか!? それにそれのお陰でエレーナ先生の妹が自殺したにも関わらず、見て見ぬふりしているんじゃねえかよ!?!」

止の言葉には怒りが込められていた。それはロシア政府への怒り、そしてエリーナとエリーナ姉妹の人生を狂わした事に怒っていた。

もし、ロシア政府がそんな事をしなければ、ロシア代表は友人のままだったのだろうか？ そうなれば、友人はロシアの為に頑張り、代

表でなくなつた時に離れていった者達とは嘘の友情を貫いていたのだろうか？

嫌、それ以前にエリーナは自殺せずに済み、友人とは一生友達でいたのだろうか？ エリーナが自殺しなければ、エリーナはカウンセラーの仕事を続ける事が出来、友人とは友情を貫いていたに違いないのだろうか？

そうなれば、エレーナはこんな凶行に走らないで済んだ筈だ。だが、そんな止に楯無は目を逸らし続けながらも手を拳に変え、身体を震わす。楯無も辛かつたのだろう。

「……どんなに努力しても報われれば良い結果もあり悪い結果もある——報われない努力だつてある」

刹那、勇人に不意に呟いた。一夏達は勇人を見るも、勇人は腕を組みみながら目を開けた。

「そいつは、ロシア代表だつた女は必死で努力して得た地位を、ロシア政府のせいで奪われた……それは一時的な報われだつたんだよ」

「は、勇人!？」

止は何かを言うも、勇人は言葉を続ける。

「その女は全てに絶望した——だがそれは、再び地位を返り咲こうとする努力をしなかつたからだ……が、俺がロシア政府の一人だつたら、更識を選ぶだろうな」

勇人の言葉に、止は「なっ!？」と目を見開きながら驚き、一夏は瞠目し、楯無は顔を上げ愕然とした。そんな勇人に止は詰め寄る。

「勇人お前、何を言つてるんだよ!?! お前は自殺した元ロシア代表よりも名誉を選びたいが為に権力を使うのかよ!?!」

止は憤りを隠せない。が、勇人は溜め息を吐く。

「違えよ……俺が言いたいののは、もしもの話だ」

勇人の言葉に止は「えっ?？」と惚けるも、勇人はその訳を語り始める。勇人は何故ロシア政府だつたら名誉を選ぶのかと言うと、勇人はロシアが有名になるのならそれで良い、世界で一番大きな国だけではない事を知らしめる為でもあつた。

そうなれば、名誉を得る為には多少の犯罪にも手を出し、多少の犠

性を出してでも得たいからだ。勿論、それは間違つた事であるが自分達は政府の人間であり、権力はある——多少の事は闇に葬る事も出来るからだ。

例え、多少の不祥事があつたとしても、元ロシア代表が自殺したのも自分達のせいだとしても、権力で揉み消す事が出来、自分達の悪事を調べようとするのなら、権力を使って暗殺する事も出来、地位を奪う事も出来るのだ。

それを咎められても、何の事？ と知らないふりをするだけだからだ。勇人はもしも元ロシア代表の自殺が政府のせいだとしても、ロシア政府は権力を使って黙らせる事が出来る、と。

そんな勇人の語りに、三人は信じられないと思つているが、勇人は三人にこう告げた。

「権力は金と同じように人を変える——が、その権力を持つてる人間が権力に屈しない者が極僅かにしかないのも事実であり、居たとしても何れは権力に溺れる——言わば権力は……」

勇人は何故か間を置くように話すのを止めると、直ぐに決意したかのように、止に言つた。

「権力は一度振り翳したら後戻り出来ず、中毒のように振り翳し続け、権力が無くなれば返り咲きたいが為に犯罪に走るからだ……権力を保てるのは名誉だけであり、それに権力は、一度振り翳せば一生止められない——薬物みたいな物だから……」

「そ、そんな……あんまりじゃねえかよ……!」

勇人の説明に、止は苦虫を噛んだような表情を浮かべながら俯き、勇人に背を向けるが止は肩を震わせていた。しかし、勇人の言い分には反論出来ないでいた。

権力は人を変えるのは事実であり、不祥事を揉み消す事が出来るのも事実だ。そんな止に一夏は歯を食い縛るも不意に楯無を見る。

楯無は震えていた。が、一夏はある事を思い出し勇人と止に訊ねる。

「すまねえ二人共、もう遅いから部屋に戻つてくれねえか？」

一夏は二人にそう告げる。それを聞いた止は顔を上げて驚くも、勇

人は軽く頷き壁から離れる。

「い、一夏、何を言つてんだよ!? まだ話をは終わつてねえじゃねえかよ!?!」

止は一夏に詰め寄るも、一夏は冷静に答えた。

「今は答える事は出来ないーのだが、今はもう遅い。俺達に出来る事は明日だ」

「そののなは理由にならねえよ……それに」

「今はあいつの事を考えた方が良い」

止が何かを言いかけるのを、一夏は遮るように言いながら、ある方を首で振る形で指す。そこには楯無がいた。止は楯無を見て「あつ……」と呟くと、何も言えなくなる。

因みに彼等は夕食を済ませたが、箒が絡んで来たのは言うまでもない。そして、止はやるせない気持ちを抑えつつも、一夏を見る。

「判つたよ……でも俺は許せねえんだよ……ロシア政府のやり方がさ……それに解るんだよ俺、身内を亡くしたヤツの気持ちかな……」

止はそう言った後、一夏に悲しい笑みを浮かべながら「お休み」と一言を言い、一夏は哀しそうに笑いながら頷くと、止は勇人と共に部屋を出ていった。

因みに扉を開けたのは勇人であり、最初は勇人、次は止が部屋を出ていった。そして、部屋に残っているのは、この住人である一夏と楯無だけであるが、一夏は楯無を見ると、不意に呟いた。

——更識、俺達も寝るか? ——と。

第61話

一時間後、一夏は自分のベッドにいた。が、何故か一夏の表情は陰しかった。

「何故、こいつが一緒のベッドに居るんだ？　ー。一夏は内心呟く。それは、一夏のベッドには一夏だけじゃなく楯無も一緒に横になっっているのだ。

それは一夏から見れば興奮するよりも、楯無に呆れていた。何故なら、一夏は楯無にもう寝ようと言った際、楯無が自分と一緒に寝たいと言い出したのだ。

これには一夏も否定するが、楯無は引かない。その結果、一夏は渋々了承した。

そして二人は今、一夏は楯無に背を向ける形で横向けになり、楯無は一夏の背中を見るように横向けになっていた。

一夏は嫌々ながらも寝ようとした。これでは止にからかわれるのと、あの掃除用具に何をされるのかは判った物ではないからだ。

「ねえ一夏君？」

刹那、一夏に訊ねてくる者がいた。勿論、楯無だ。一夏は楯無に背を向けながら答えた。

「何だ更識、まだ寝てないのか？　早く寝ろよ？」

「ううん、そうじゃないの……ちよつと訊きたい事があるの？」

「何だよそれ？　明日にしるよ？」

「嫌直ぐに終わるわ……ねえ一夏君？　……一夏君は、どんなに頑張っても報われない努力ってあると思う？」

「何をいきなり言い出すんだよ？」

一夏は楯無に訊ねると、楯無はその理由を話始めた。楯無は最初、ロシア政府からISを貰い、自由国籍をも得た。勿論、楯無はロシア代表になるつもりはないが楯無自身は必死で努力していた。

家や妹を守る為に努力をしていた。勿論、色んな覚悟を背負ってまで努力して得た物が当主とロシア代表の椅子だった。が、その為には沢山の人を犠牲にしてまで得た物だ。

それを、自分は胸を張ってまで自慢出来る物なのだろうかと思つていた。

「私は解らないの……家のせいで一夏君に迷惑を掛けて以来、自分は何の為に当主になったのか、私がロシア代表になった間に、元ロシア代表だった人やエレーナ先生の身内に自殺に追い込んだ事を知らなかった……私はどうすれば良いの？」

楯無は悩んだ。自分は当主になって良かったのだろうか？ 自分はロシア代表になって良かったのだろうか？ と。しかし、そんな楯無に一夏は答えた。――それはお前の自由だ、それにお前は自信を持って――と。

――えっ？ 一夏の言葉に楯無は何も解らないと言つた表情で一夏を見るも、一夏は楯無に背中を向け続けていた。が、一夏は楯無に背を向けたまま話す。

「更識……お前は誰だ？ お前は更識楯無か？ 一夏お前は更識刀奈か？」

「えっ、その質問って……」

楯無は何かに気が付く。その質問は一夏がこの前、楯無への楯無自身に問う際の全くと言える程の同じ質問だった。

だが、この質問は楯無が一夏への罪悪感で悩んだ際の質問とは違う。この質問は一夏が楯無に、ある事を訊ねる為でもある。

「楯無――俺はお前に問う……お前は何の為に当主に、何の為にロシア代表になった？」

「そ、それは……」

「それはお前が努力して得た地位でもあり、同時に周りに迷惑を掛けてまで得た地位だ」

「迷惑を掛けてまで得た、地位？」

楯無の言葉に一夏は楯無に解らないように小さく頷く。

「ああ、お前はそれを自覚している筈だ……お前は妹を守る為に心ない事も言つた……あれはお前が悪いかもしれないが、元ロシア代表の奴やエレーナの妹が自殺したのはお前が悪い訳ではない」

「でも、簪ちゃんは兎も角、エレーナ先生の事は」

「あれはお前が悪い訳じゃない！」

楯無が何かを言う前に一夏は楯無に怒り、それを聞いた楯無は肩を竦めるも、一夏は言葉を続ける。

「更識……お前はエレーナの妹や元ロシア代表の奴が自殺したのはお前のせいではない……あれはロシア政府がした事だ！ お前が気に病む事じゃねえ！ お前は更識楯無として、ロシア代表として胸を張れ！ もし気に病むのなら、そいつらの無念を背負え！ そいつらの分まで生きれば良い！」

一夏は楯無にそう説教した。が、それは弱気になっている楯無を励ます為でもあった。楯無は当主やロシア代表になれたのも楯無が努力して得た事。だが、努力には犠牲が付き物、努力は名誉を得ると共に代償をも得る。

だがそれは、誰にもある事だ。犠牲や代償のない努力何てない、努力はすればする程、喪う物もある。何故、一夏は楯無にそう言えるのかは、一夏も必死に努力したのだ。

その努力は千冬に認めて貰いたいが為の物ではない、一夏はプレデター一族に狩りや闘いを教えられて貰っている際、沢山の生き物達と喰うか喰われるかの修羅場を潜り抜けてきた。

勿論、一夏が戦った生き物達の中には家族持ちの奴等もいた。奴等は、身内を殺した一夏を怨むように叫んだが、それは弱肉強食の世界では当たり前の事だ。

もしも二つの生き物が闘った場合、それが野試合だった場合、どちらかが死ぬのは当たり前だ。片方が名誉や代償を得ると同時に、もう片方の御内に怨みを買う。

負けた方は文句を言われても言い返せないのも事実だ。一夏はその野試合をケルティックから教えられながら闘い、時には一人で戦った事もある。

それは一夏が野試合を勝ち抜き、生き抜いてきたのも事実だ。同時に沢山の生き物から怨みを買ったのも事実だ。

故に一夏は自分が殺した奴等の分まで生き、悪役を買って出ている。もし相手に殺されそうになっても返り討ちにする覚悟もある。

例え返り討ちにしても再び悪役を買って出る覚悟もある。一夏はその覚悟を、楯無にあるかどうかに訊ねた。

「俺はある人から色んな事を教えてもらった。それは誰かは教えられないが、お前は当主やロシア代表になった時の覚悟は何処へ言ったんだ!?!」

一夏は楯無にそう問うと、それを聞いた楯無は何も言えなくなり、悲しそうに目を伏せ、何も言えなくなる。が、一夏は楯無と向き合うように寝返りを打つ。刹那、一夏は楯無の頭を撫でる。

楯無は一夏の突然の事に瞠目し、一夏を見ると、一夏は表情は険しい。が、悲しい目をしていて。それは楯無を気遣うよりも、楯無にある事を訊ねる。

「楯無……お前は何の為に当主やロシア代表になった？ 怨みを買う為か？ それとも名誉を得たいが為か？」

一夏の言葉に楯無は「そ、それは……」と口ごもるも、一夏は言葉をつづける。

「楯無……何でもかんでも一人で背負うな、何でもかんでも辛い思いをするな」

「えっ?」

楯無は再び驚くも一夏は言葉を続ける。

「更識……お前は生徒会長だろ？ あの時のお前は何だったんだ？」

一夏はあの時の事を話す。あの時とは、千冬が一夏のISを没収しようとした際、楯無は生徒会長として千冬を論破したのだ。あの時の楯無は凛々しかった。それなのに、一夏が近くにいると何故かヘタレになっている。

まるで二重人格のようで気味が悪かった。が、それを直すのは楯無自身であり、一夏の説得も必要だった。それを今、一夏は楯無に説得しようとしている

「更識……あの時のお前は生徒会長として立派な事をしていた……なのに何だ？ 何故、俺の前だとそんな弱気になる?」

「そ、それは……」

「俺を人殺しにさせた事か？ あれは俺がやった事だー」気に病む事

「じゃねえよっ」

「でも……人殺しは一生消える事はない……私はそれを貴方に背負わせるような事をした……」

楯無は俯く。が、一夏は瞑目した。

「それは違う……あれは確かにお前の家族のせいかもしれない……だが、俺はそれを後悔してはいない」

一夏の言葉に楯無は驚き顔を上げ、一夏を見る。一夏は瞑目し続けていたが、一夏は目を開ける。

「俺は……既に越えてはならない壁を越えながらも越えそうにもなっていない……それを踏み止めているのは、更識……」

一夏は目を開けると、楯無を軽蔑と言うよりも哀れみの目で見据える。

「更識……お前が居るからだよ……お前がいるから……俺は虚さんにお前を頼まれ、あの掃除用具からお前を守っているんだよ」

一夏の言葉に楯無は頬を赤くする。それは一夏の虚に頼まれた事を約束し、楯無のせいで誤解を生んだ嘘の告白で周りに楯無とキスをした為に、何時も楯無を狙う筈から楯無を守っている。

が、それも限度はある。何時でも楯無と一緒にいる訳ではない、一夏は楯無にそう言いたかったがそれを踏み止め、ある事を言った。

「更識、俺はお前を信じている。俺はお前が立ち直れるのを信じている」

「一夏君……」

「更識……もつと自分に自身を持って、生徒会長として、当主として、更識楯無である以前に更識刀奈としての自身を持つんだ」

「一夏君……私は……あっ」

刹那、一夏は楯無の頭を撫でていた手を楯無の頬に当てる。楯無は一夏の行動に戸惑うも、一夏は言葉を続ける。

「お前は強い女だ……実力もあるし、生徒会長でもあり、人気もあるからな」

「……………」

「勿論、当主としての自信がないのなら、お前はお前が知っている者達

の前ではお前自身の姿を見せる……周りもお前がクヨクヨしていたら心配する」

「……一夏君、私は」

「勿論、自身がないのなら虚先輩や薫子先輩や他の奴等に甘えろ、周りもお前の為に力を貸してくれるからな？ 勿論……俺もお前に力を貸してやる」

「……一夏に抱き着く。」

「お、おい!?!」

楯無の突然の行動に一夏は驚くも、楯無は顔を一夏の胸に埋めながら呟いた。

「……ありがとう、一夏君」と。それは楯無が一夏の言葉に少し自信を取り戻し、本当の自分を再び周りに見せようと言う決意でもあった。

「更識……ったく」

一夏は楯無の行動に戸惑いを見せなくなると、ゆつくりと楯無を抱き返す。その夜、二人は抱き合いながら眠った。楯無は少しだけ自信を取り戻し、一夏は楯無の行動を受け止めたただだが、楯無を落ち着かせるのはこれだけしかないと思いつながら……。

そして、夜が明けるまで、二人はそのまま抱き合いながら眠っていたのは言うまでもない。

第62話

翌朝、此処はIS学園近くにある学生寮の、一夏と楯無の部屋。一夏のベッドには、一夏と楯無が抱き合いながら眠っていた。

「う、ううん……」

刹那、楯無の瞼が微かに動き、楯無は目を覚ますも、自分の身体が一夏と密着している事に気付く。楯無は身体を必死に動かそうとしたかったが一夏を起こしてしまう危険もある為、あまり動かす事は出来なかった。

「どうしよう……でも」

楯無は戸惑うも直ぐに頬を赤くして更に密着した。一夏の男性特有の温もりと一夏の厚い胸板。何れも一般の男性にはない何かを感じる。

それは一夏が勇人や止と共にプレデター達に鍛えられた為に、彼等の肉体は他の一般男性よりも違うからだ。

その為、楯無は一夏の身体に密着するだけでなく、一夏の温もりを感じているのと、一夏には沢山の恩があり、罪悪感もあるからだろう。

刹那、一夏の瞼が微かに動き、ゆっくりと開く。一夏は目を覚ましたのだ。――あつ……。楯無は驚きのあまり離れようとしたが時既に遅しだった。

一夏は楯無を見て軽く言った。おはよう、と。それを聞いた楯無は慌てながら「お、おはよう」と言い返した。

「それよりも離れようぜ？ 勇人や止は兎も角、他の奴等に見られたら何て言うかは判らねえからな？」

一夏は訳を話すも、楯無に聞こえないように小声で「特に、あの掃除用具は尚更だ……」と呟く。そんな一夏の言葉に楯無は頷くと二人は互いに離れ、ベッドから降りる。

刹那、楯無は一夏の前で脱ぎ始める。――おい!? 一夏は楯無の突然の行動に一夏は楯無に叫ぶ。

「何かしらっ？」

楯無は服を脱ぐ手を止め、キョトンとした顔で一夏を見て訊き返

す。

「嫌なにかじゃねえよ？ 異性の前で脱ぐのを止めろよ？」

一夏は顔を少し赤くしながら否定するも、楯無はニヤニヤと笑いながら両手を腰に当てる。

「あら何いゝッ？ 一夏君は昨日、レデイの前で制服を脱いだのに、私が服を脱いだら駄目なの？」

「嫌駄目って言う訳じゃないけど、色んな意味で同じ屋根の下で住んでいる男女が、男が女の着替えを見るのは躊躇するだろうが？」

一夏の言葉に、楯無は何故か微笑むと、静かに一夏へと歩み寄る。一夏はっ？ 一夏。楯無の行動に一夏は惚けるも、後退りする暇もなく、楯無は一夏の前に来て、両腕を一夏の首へと回す。

一夏はっ？ 一夏。楯無の行動に一夏は驚きと共に僅かながらに頬を赤くしていた。楯無の豊満な胸が胸板に当たり、楯無の顔が自分の顔とは僅かに触れる距離であり、女性特有の息が掛かる程である。

普通の男なら耐えきれぬかは判らないが一夏は男でもありながらも、女を襲うと言う欲望はない。だが、楯無は一夏を見て勝ち誇ったように笑う。一方、一夏は楯無を見て愕然し続けていた。

これが本来の、更識楯無の姿なのか？ と。刹那、楯無は一夏の耳元で囁いた。一夏今夜、部屋で裸エプロンで待つてから一夏。それを聞いた一夏は瞠目するも、楯無は「クスッ」と笑うと、一夏から離れ、背を向け、服を脱ぎ始める。

一方、一夏は楯無の言葉に未だ愕然しているのか口をポカーンと開けていた。勿論、それも直ぐに終わった。それは、服を脱いでいた楯無の言葉から始まった。

楯無は服を脱いでいる最中、一夏に気付き、少し恥ずかしそうに言った。一夏エッチ、一夏君のエッチ一夏と。それを聞いた一夏は「ハアッ!？」と怒るよりも不意を突かれたかのように驚きを隠せないかのように叫んだ。

が、そんな一夏に楯無は「勝った」と言わんばかりの不敵な笑いを浮かべると再び服を脱ぎ始める。肌が露出している物の、それを見た一夏は頬を赤くしながらもバツの悪そうな表情で楯無に背を向け、自

分も服を脱ぎ始める。

幸いな事に部屋には誰も来なかった。と言うよりも、止は昨日の件をまだ気にし、勇人はデスクの上に置かれているパソコンに映っている、秋葉原に設置された防犯カメラの記録映像を見逃さないように睨んでおり、箒に至っては何も知らない。

誰かが来たら文句を言われかねないが二人は制服に着替え、止と勇人と合流し、箒に絡まれながらもスルーする形で朝食を摂ったのは言うまでもない。

二時間後、一夏は楯無と別れ止や勇人（後、箒）と共に教室にいて、それぞれ自分の席に着いていた。

彼等の他にも、教室には女子生徒達が各々の時間を有意義に過ごしている。が、大半は何故かひそひそ話をしていた。

エレナ先生による生徒殺人未遂事件か、クラス代表に誰を選ぶかで悩んでいるのだろう。前者は兎も角、後者の方は、女子達は既に決めているに違いない。

しかし、どちらも一夏達に関係するが当の本人達には関係ないだろう。反面、誰一人一夏達に声を掛ける事が出来ないでいたのも事実だ。

その証拠に一夏は頬杖を突きながら不機嫌そうに表情を険しくし、止は未だ昨日の件を引き摺っているのか悲しそうに俯き、勇人に至っては腕を組みながら瞑目している。

三人が三人、何かを考えているが誰にも解らない。そうだろう、一夏は楯無の本来の性格に驚きを隠せず、止はエレナ先生が気掛かりであり、勇人は冷静を装いながらも秋葉原で「とある人物」が現れない事に怒りを覚えていた。

女子達の中には箒もいる。が、本来の箒なら一夏に声を掛ける事は出来るだろうー嫌、それはできなかつた。

一夏の両側には勇人と止がいるのである。止は兎も角として、勇人は自分の前に立ち塞がる障害であるのと、彼がいるのでは一夏に声を掛ける事は出来ないからだ。

その為箒は内心「グツ」と怒りを覚えながら、勇人を睨むも勇人は
勇人で気にもしなかった。

そんな三人を見て箒を含めた女子達は流石に声を掛ける事は出来
ないのと、一夏達の逆鱗に触れる危険も伴っている為、誰一人、何て
声を掛ければ良いのかも判らないのと巻き込まれたくないと言う我
が儘もあつた。

刹那、一人の女子生徒が三人に近付く。後ろから清香の呼び止める
声が出たがその女子生徒はお構い無しに三人に近付く。

それは一夏でもなく、それは勇人でもない。少女が近付いたのは止
だった。刹那、少女は後ろから止の目を塞ぎ、「だくれだくれ」と訊ね
る。止は突然の事で戸惑うも直ぐに答えた。

「ほ、本音……な、何をするんだよ？」

止は暴れる素振りも見せず、その少女、本音に訊き返す。一方、本
音は「ニユフフ」と笑うと、止の目を塞いでいた両腕を下ろす。

直後、止は振り返ると少し青ざめながら、本音を見ていた。勿論、そ
んな止を見た本音は首を傾げ、「どうしたの……？」と心配の声を掛け
る。

そんな本音に止は目を見開くも、直ぐに微笑みながら「何でもない」
と言いながら首を左右に振る。止自身の本音を心配させたくないが
為の言葉だろう。

幸いにも、本音は止の言葉に「そうなの……？」と首を再び傾げる
と、止は「ああ」と頷いた。

そんな中、チャイムが鳴った。その間に女子達は話をするのを止
め、席に着く。そして、千冬と、両手には何かを入れる白い箱を持っ
ている真耶が教室へと入ってきた。

一夏と千冬は一瞬目が合うも直ぐに一夏は千冬から目を逸らし、千
冬は「ツ……」と下唇を噛むも直ぐに何時ものように鋭い表情を浮か
べると、真耶と共に教卓に立つ。

「おはよう諸君、授業を始める前に昨日のクラス代表決定戦は中止に
なっている事は覚えているな？」

千冬の言葉にクラスの女子達はざわつく。

「静かにしろーその後、山田先生や他の教員方と話し合った結果、籤引きで誰を代表にするかで決まったー勿論、お前達が誰を入れるかは此方では判らないのも事実だが、此方は何も言わないー山田先生の持つてる白い箱の中に紙があるーその中に一つだけ取って、織斑、霧崎、勇人、オルコットの名を一人だけ書いた後、それを折り畳んで白い箱の中へと入れろー勿論、四人は参加しなくてもいい」

千冬は言葉を述べた後、手を叩いた後、「行動に移れ」と生徒達に命令する。その間に真耶は白い箱を教卓の上に置く。それを聞いた一夏達やオルコットを除いた生徒達は立ち上がると、白い箱の中にある紙を一枚取り、自分の席へと戻った。

「……ッ」

そんな中、セシリアは身体を震わせていた。勿論、クラス代表は自分になる筈ではない事に気付いていた。止には手も足も出ずにやられ、戦ってはいるが一夏と勇人の凄まじい死闘に恐怖を感じてしまった。

セシリアは彼等三人とは闘いたくないと思った。が、クラス代表にもなれないかもしれない事に悔しい思いをしていた。

そうしている間に女子達は書き終え、そろそろと教卓の上にある白い箱の中に入れる。その間に真耶は黒板に四人の名前を書いていた。

左から織斑一夏、霧崎止、勇人、セシリア・オルコットの順で……。

そして、女子達は全員、クラス代表にしたい者の名を書き終えた。

「全員したか？ なら、私がこれから一つ一つ紙を取り出し名前を言い、それを山田先生が黒板に書くー判ったか？」

千冬 of 言葉に真耶や四人以外の女子全員が頷く。そして千冬も頷き返すと、千冬は白い箱の中にある紙を一枚だけ取り出し、それを開き、名前を言った。

このクラスは三十二人も居るが一夏達を除いたら二十八人である。その為、その中から誰が代表にするかは女子達が決めた事であり、四人や二人の教師はそれを知らない。

「す、凄い……」

真耶は驚愕した。女子達も驚きを隠せない。何故なら、黒板を締め
ているのは一夏、勇人、止の三人であつたからだ。彼等の名前近くに
は「正」の字が一つずつに、もう一つ「正」の字があつたが最後の
画がない。

勿論、一夏と止は瞠目し、勇人は瞑目している。が、セシリアには
誰も入れていない。それを見たセシリアは「ツ……」と悔しそうに下
唇を噛むと同時に悲しそうに俯く。

一方、千冬は一枚の紙を手にした。——これが最後の一枚だ——
と。勿論、それを聞いた真耶や生徒達は生唾を呑む。千冬が手にして
いる紙で全てが決まる。真耶や女子達はそう思うと、緊張してしまつ
たのだ。

そして、千冬は手にしている一枚の折り畳まれた紙を開き、目を見
開いた。そして、紙に書かれている者の名を言った。

——……霧崎、止——と。

第63話

「と言う訳で、このクラスのクラス代表は霧崎止君に決まりました」
教卓に立っている真耶の言葉にクラスの女子達は拍手した。ある者達は、自分が止に投票したのと止が当選した事に喜びを隠せない。またある者達は、一夏や勇人に入れたが当選しなかった事に落ち込む者や仕方ないと思いつながら拍手する者達もいた。

しかし、女子達には共通する物があつた。それは、半年間のデザート無料パスが入るかも知れないからだつた。

それを手に入れる事が出来れば、半年間のデザートは自分達のクラスのものであるかのように独り占め出来る。甘い物好きの者にとって喉から手が出る程欲しい物だつた。

勿論、一夏に（誤解による）恋人がいた事をスイーツでも食つて気を紛らわす者達もいるだろう。が、太るのが確実であろう事に女子達は気付いていないふりをするのだ。

クラスの女子達が止に拍手する中、当の本人である止は、クラスの女子達に何故そんなに喜ぶかは判らないでいた。反面、クラスの女子達は止の強さに期待していた。止の強さは昨日の、クラス代表決定戦で殆ど知つたからだ。

あの時の止は、冷静に、セシリアをライフルで一発も外さずに狙撃した。

その上、止の必殺技とも言える単一仕様能力、切り裂きジャックが女子達を色んな意味で恐れさせたのだ。しかし、それは女子達にとって、デザート無料パスを手に入れる事が出来るのなら関係ない事だつた。

「これでデザート無料パスは私達の物!!」

「これで失恋を乗り切る為にやけ食いよ!!」

女子達が騒がしくなる。既にデザート無料パスを手に入れると言う結果に喜びを隠せないのだろう。――静かにしろ!! ――。勿論、千冬の一喝により収まるも、未だ女子達は興奮が覚めきれないでいた。

「……ッ！　……。刹那、セシリアが突然立ち上がる。それを見た近くの生徒達は驚くも、セシリアは突然、駆け足で教室を出ていこうとした。」

「……オルコットさん!?　……。真耶がセシリアが出ていった事に驚きを隠せない。が、セシリアは黒板近くの扉ではなく、別の、この教室を出入り出来る扉で教室を出ていき、何処かへと走り去っていった。真耶も慌ててセシリアを追い掛ける為に教室を出て行った。」

「な、何が起きたんだ?」

突然の出来事に止はそう呟く。勿論、女子達も突然の出来事に戸惑う。無理もない……セシリアは誰も自分の名前を書かなかった事に嘆き、それで教室に居たたまれなくなったからだ。

勿論、その事を知ってる女子達はいない。そうだろう、セシリアの人を見下すような態度を誰も気にもしない。嫌、僅かながらにセシリアに同情する者もいるのも事情だ。

そんな中、気にしないかのように一夏は頬杖を着き、勇人は腕を組みみながら瞑目していた。男子達三人もセシリアの事など気にもしない……訳ではなかった。

一人だけ、セシリアの事を心配している者がいた。止だった。

「オルコットの奴、どうしたんだろ?」

止は気になったのか、席から立ち上がり教室を出ていく。後ろから千冬の呼び止める声をするも止は背中を受け止め、教室を出ていくと、セシリアや真耶が走った方へと向かった。

「うぐっ……えぐっ」

ここは学園の屋上。屋上には落下防止の手すりがある以外何もなかった。それ以外あるのは、この屋上を出入りできる扉が設けられている建物だけだった。

しかし、扉がある壁の反対側には、壁に凭れ掛かる形で膝を抱きな

がら座り顔を涙でクシヤクシヤにしながら嗚咽を上げているセシリアがいた。

何故泣いているのかは、さつきも行った通り、クラス代表になれなかったのと、自分が見下した男達に負けたのと、だれも自分には投票しなかった事が哀しかったのだ。

「オルコットさん？」

すると、そんなセシリアに近付く者がいた。真耶である。真耶はセシリアの様子に気付き哀しい表情を浮かべていた。

「オルコットさん、どうかしましたか？ 教室に戻りましょう？」

真耶は優しい口調で訊ねるも、セシリアは真耶を見ずに答えた。

「嫌ですわ……教室に戻っても皆は私を嘲笑うに決まっていますわ！」

「そんな事ありませんよ？ 皆さんはオルコットさんを心配していませんよ？」

「山田先生に何が判りますの!?!」

セシリアは涙を流しながら、真耶を睨みそう言った。それを見た真耶はビクツと肩を竦めるも、セシリアは涙を流し、真耶を睨みながら言葉を続ける。

「貴女に私の何が解りますの!?! 私がイギリス代表候補生になるのに、どれだけの努力をしたのか、何故男に負けたくないのか、代表を奪われた事も貴女に解って堪る物ですか!」

セシリアは泣きながら、真耶を罵倒する。一方の真耶もそんなセシリアに何も言えずたじろいでいた。無理もない。真耶は彼女の辛い過去を知らないし、彼女自身がどんなに努力したのかを知らないからだ。

セシリア・オルコットー彼女はオルコット家の跡取りとしての幼き頃、女の身でありながらも経営者としての母に厳しく教えられながらも優しい母の元で育った。勿論、父も居たが彼は婿入りの身であるためか母の言う事に逆らう事はなかった。

セシリアは、そんな父を見て威厳を感じなかったのと同時に軽蔑も感じた。それがセシリアの男を嫌う理由だ。父のような男とは結婚しないと。

だが、ISが誕生し、普及し、世の中が女尊男卑となった頃、父は更に立場を悪くし、母も益々父に嫌気がさしてきたのか、三人で過ごす事はないに等しかった。

だが、そんなある日、二人はセシリアを置いていく形でこの世を去った。交通事故だった。しかし、何故二人が一緒にいたのかはセシリアには解らない。嫌、一生解らないだろう。

そして、二人が残した財産、つまり遺産は娘のセシリアが相続する形で全て受け持ったのだ。

同時に、金を狙う亡者達も現れたのだ。セシリアは亡者達から遺産を守る為に努力した。両親の遺産を守る為、自分がオルコット家を支える為に努力した。

そしてそれが認められたのか、セシリアはイギリスからイギリス代表候補生としてIS学園に通うよう言われ、同時に専用機も貰った。

これにはセシリアは喜んだ。セシリアはIS学園に来たのも、母の為、オルコット家の為、イギリスの為にだった。輝かしい栄光を亡き母への手土産としてでもあった。

それを、それを一夏達が妨害したのだ。セシリアは一夏達を父と同じような存在かと思っていた。彼等を完封なきに叩きのめすどころか逆に返り討ちにされ、一夏と勇人とは闘っていないが彼等の強さを知り、三人に恐怖した。

セシリアにとって屈辱的かつ母に情けない姿を見せてしまったと、セシリア自身そう思っていた。母に何と云えばいいか判らないし、母は自分を軽蔑するのでは、と。

「私は母の為に頑張った……なのに、なのに……うぐっ……えぐっ」
セシリアは再び涙を流す。刹那、そんなセシリアを真耶はセシリアを包むように優しく抱き締める。

「や、山田先生、な、何をするんですの?」

セシリアは真耶の行動に戸惑う。が、真耶は優しく囁いた。――辛かったのですね? ―と。それを聞いたセシリアは瞠目するも、真耶は言葉を続ける。

「オルコットさん、貴女は辛かったのですね……貴女はお母さんの為

に頑張ってたんですね?」

「山田先生、貴女に私の何が……判るのですか?」

「私には貴女の家事情はよく解りません。ですが私は一介の教師として貴女に言います……貴女は一人ではありませんよ?」

「えっ?」

セシリアは真耶の顔を見ようとしますが、セシリアは真耶に抱き包まれている為、見る事は出来なかった。真耶は言葉が続ける。

「オルコットさんー貴女は一人ではありません。この学園の、貴女の所属しているクラスが居るじゃないですか?」

「そ、それは無理ですわ……わ、私は皆さんの前で日本を馬鹿にするような事を言いましたのよ? それを周りは許す筈がありませんわよ……」

「謝れば良いじゃないですか」

真耶の言葉にセシリアは「えっ?」と惚けるも、真耶は未だ言葉を続ける。

「謝れば良いのですよ……謝れば皆さんは許してくれます、勿論ー中には許してくれる筈もない人がいるかもしれませんが、何時かきつと解つてくれますよ?」

「山田先生……私は」

「自信がないのは解っていますーでも、解つてくれますよ? 私はあまり自信がある事を言えませんが、皆さんは良い人ですから」

「山田先生……貴女は何故、私に怒らないのです? 私は先週日本を馬鹿にしたのと、教室を飛び出した事に怒らないのです?」

セシリアは真耶に訊ねる。確かにセシリアの言う通りだった。セシリアは先週日本を馬鹿にした発言をし、尚且つ、教室を出ていったのだ。これには真耶も怒ると思っていたが、真耶は怒らなかった。

それどころか、真耶の様子にセシリアは疑問を抱いていた。刹那、真耶はその事を答えた。

「いいえ責めませんよ……私は日本を馬鹿にした事に怒っていますが、それ以前に貴女がクラス代表に拘る理由が解りましたし……それに私は」

真耶はセシリアを見る――その表情は母性を感じるかのようによい顔をしていた。

「私は一介の教師であると同時に、貴女の所属しているクラスの副担任ですから！」

真耶はニコツと笑う。それを見たセシリアは目を見開くも、直ぐにまた泣き出し、真耶に抱き着いた。

「先生……先生……ワアアアアン!!」

セシリアは真耶に甘えるように泣いた。化粧が落ちようが醜態を晒そうがセシリアには関係なかった。

セシリアは今、真耶と言う教師に甘えていた。真耶は真耶でセシリアを優しく抱き締めたまま背中を擦る。

真耶はセシリアを優しく抱き締めたまま、セシリアは真耶に甘える形で泣き続けていた。

「……出てこなくても良いかな？」

そんな二人を、壁の陰からこっそりと窺っていた止は二人を微笑ましそうに見た後、静かにその場から離れ、屋上から出ていく形で学園内へと戻った。刹那、放送がなった。

『学園にいる教員に連絡します！ 学園にいる教員方は大至急、牢屋へと集まって下さい！ 繰り返しします、大至急、牢屋へと集まって下さい!!』

それを聴いた止は瞠目し、牢屋へと向かった。嫌な予感がする、と。

第64話

「ーハアツハアツ！ ー」。止は今、学園の中を走っていた。単に学園の中を走り回っている訳ではない。ー彼が走っているのは、ある場所を目指しているからだ。そのある場所とは地下室にある牢屋の事であり、そこには、その牢屋にはエレーナが拘置されている。彼がそこに向かう理由は放送で流れた説明。それは止にとつて嫌な予感が脳裏を過らさせるのと、エレーナ先生の身に何が遭つたのを警告させている。教員方を呼ぶと言う事は只事ではない事をも物語っている。

刹那、止は牢屋へと続く階段の近くまで来た。が、階段からは微かに笑い声が聴こえ、階段近くには一人の教員がいて、何故か困惑している。

すると、教員は止に気付き慌てて階段の前に出る。恐らく、地下室には行くな、と言う警告だろう。勿論、そんなのは止には関係なかった。止は教員の前で立ち止まると、教員に言った。

「退いてくれよ！ エレーナ先生に何が遭つたんだよ!？」

「そんなの、一介の生徒に教える訳にはいかないわ！ それよりも自分の教室に戻りなさい！ 此処からは教員以外立ち入り禁止よ!!」

「そんなのはどうだったって良いよ！ それよりも此処を通らせてよ！ エレーナ先生に逢いたいんだよ!」

「それは無理よ！ エレーナ先生は今、貴方に逢えるような状況じゃないわ!」

「そんなの……ぐっ!」

止は下唇を噛むと、そのまま教員を横で払うように突飛ばし、教員は横向けに倒れる。その間に止は階段を駆け降りる。教員の呼ぶ声が聞こえたが止は聞く耳を持たず、階段を駆け降り続ける。

階段からは笑い声が響く。それは階段を下りるたびに大きくなっていく。そして、牢屋の先には数名の教員達が居たが、教員達は止に気付くが、止は階段を飛び降りるかのように牢屋へと来た。

「エレーナ先生!! ……っ!？」

止は階段を駆け降り終えるや否や、エレーナの名を呼びながら牢屋の方を見た。刹那、止は戦慄した。エレーナ先生が拘置されている牢屋の扉は開いていた。しかし、エレーナ先生は逃げた訳ではなかった。エレーナ先生は牢屋にいた。

が、エレーナ先生は他の教員達に拘束されるように押さえ付けられていた。が額から血を流しており、壁には完全に凝固していない生乾きの血が付着していた。

それはエレーナ先生が自分の額を壁に打ち付けていたために付着したモノだった。そしてエレーナ先生は何故か精神がイカれたかのように笑っていた。さっきの階段に響き渡った笑い声の正体は、彼女の笑い声だったのだ。

その笑い声は狂気と言うより、この世の中の全てに絶望したかのようにも思えた。周りがエレーナ先生を呼ぶ中、止はエレーナ先生を見て力を抜け落ちたかのように両膝を突く。

エレーナ先生の笑い声が止や他の教員達の耳へと響き、牢屋全体に木霊する。その光景は同僚や先輩、後輩から見たらエレーナが何故こんな事になったかは判らないだろう。嫌、判るとすれば、彼女は妹が自殺したのと、楯無を殺す事に失敗した事だけだ。

エレーナは全てが嫌になったのだろう。最早、自分には何も残っていない。ロシアに強制送還されても自分の周りには誰もいない。だから、こんな腐った世界に絶望したのかも知れない。

「君戻りなさい！ 見ちゃ駄目よ！」

そんな止に一人の教員が心配し声を掛けると共に、止の肩を揺らす。

しかし、止は返事をしない、いや、返事ができないのだ。あんな様子のエレーナを見て何も言えないでいたからだ。

「あ、ああつ……」

止はエレーナ先生を見て何かを呟く。同時に、そんな止を近くにいた教師が声を掛けてきた。――此処に居ちゃいけない、早く教室へと戻りなさい――。

その教師は止への気遣いでもあったが無理だろう。何故なら、止は

生徒でありながらも、エレーナ先生の様子を知り、生徒で唯一の目撃者と言つて良い程過言ではない。

それに、エレーナ先生が何故おかしくなったのかは判らないが、止が目撃したとなれば、止が周りに言い触らす危険もあるだろう。

だが、止はそんな事をしない。それ以前に、女子達が噂するのも目に見えている。嫌、その教師は教え人として教え子でもある生徒に――止に言っているのだろう。

一方、止は教師の耳を傾ける以前に、エレーナ先生を見て何も言えなかつた、動く気配さえもなかつた。

止はただただ、エレーナ先生の狂喜染みた笑い声に耳を傾けていた。周りが声を掛けても、止は動かないだろう――嫌、いた。その者は階段から降りてきて最初に視界に入ったのは、エレーナ先生だった。

その者は驚きを隠せなかつたが直ぐに止に気付く。――止――。笑い声が木霊する牢屋で聞こえた、止を呼ぶ者の声。この牢屋で木霊する笑い声に掻き消されるかもしれないだろうが止は聞き逃さなかつた。そこにいたのは、一夏だった。

彼が何故此処にいるかや、階段近くには教員がいるのにどうやって降りてきたかは判らないが、一夏は怒りと哀しみが混じつたような表情で止を見ていた。

「一夏」。止は一夏を見てそう呟くと、再びエレーナを見る。一夏もエレーナを見た。

エレーナは未だ狂喜の笑い声を上げており、目は見開いており、口の端からは涎を垂らしている。誰から見ても精神がイカれたと思うだろう――しかし、彼女も又、ロシア政府によって人生を狂わせられた者の一人に過ぎない。

周りが何を言おうが彼女の耳に届く事は一生、無いに等しい。一夏と止、周りの数人の教師達はエレーナ先生の狂喜染みた笑い声を聞きながらその場を動かさなかつた。

牢屋には重苦しい空気が流れ、エレーナ先生の狂った笑い声が木霊する。勿論、それは数分間も続いたが、一夏は止の肩に手を置く。

「ー戻るぞー」。一夏は止に言った。それを聞いた止は一夏を見ると、一夏は首を左右に振る。自分達に出来る事は何も無い。一夏は止にそう言いたかった。が、その表情は、とても険しい。

勿論、止は瞠目するも、直ぐにバツの悪そうな表情で俯き、小さく頷いた。止自身も気付いていたのだろう。

止は立ち上がると、一夏は近くにいる教員に「俺達は教室に戻ります」と言い残し、止を連れて牢屋を出ていく形で階段を昇る。後ろからエレーナ先生の笑い声が耳に響くも、二人は背中で受け止める形で階段を昇り続けた。

「来たか……」

二人が地下室から戻ってきた形で階段を昇り切ると、近くには怒りと哀しみが混じったような教員と、そんな二人に、近くの壁に凭れ掛かりながら腕を組んでいる者が一夏と止にそう呟く。

一夏と止の二人が声が出た方を見ると、そこには勇人がいた。

勇人は壁から離れ、二人を交互に見る。一夏は兎も角、止の表情は哀しみに満ちている。そんな止を見た勇人は溜め息を吐くと、身体を翻し、二人を肩越しで見ると首を横に振る。

「ー話があるー」。そう指摘しているようにも思えた。勇人の行動に二人は互いを

見合うと直ぐに頷き、それを見た勇人は深く頷くと、勇人は歩き出し、一夏と止は勇人の後を従っていく形で歩き出す。

「待ちなさいー」

そんな三人を階段近くにいた教師は呼び止める。刹那、一夏は立ち止まり、教師を肩越しでギリりと睨む。ーっ!? ー。それを見た教師はたじろいだ。が、一夏は無言で前を見ると再び歩き出し、三人は何処かへと向かった。

そして、少し後に千冬と、あの後、セシリアを教室へと戻るように言った真耶がエレーナ先生の様子を見て、千冬は下唇を噛み、真耶は

恐ろしい物を見たかのように青褪めながら両手を口元に当てていたのは言うまでもない。

一方、三人は屋上に居た。勿論、勇人が一夏と止を屋上へと連れてきたのである。それは勇人が周りに話せない事があるからだだった。

「どうしたんだ勇人？ 何か遭ったのか？」

一夏は腕を組みながら、勇人に訊ねる。一方、止は未だエレナあの姿を見たのか、それとも思い出したのか何も言わずに俯いていた。

勿論、勇人の身には何も遭ってはいない。勇人は単に一夏と止を屋上へと連れてきたのは、とある理由からだだった。勇人は無言で頷くと、ポケットから自分のスマートフォンを取り出し、軽く操作すると、スマートフォンの画面を二人に観せた。

最初に観たのは一夏だったが、一夏は止の肩を揺らし、スマートフォン画面を見るように促し、止もスマートフォンの画面を観た。

「ふざけんなよ!?! ロシア政府の奴等、酷すぎんだろ?」

数分間、止は怒りを露にし、一夏は憤怒の形相を浮かべながら両手を拳に変え力を入れる。そこには、スマートフォン画面には、とある内容が書かれていた。そこには、ロシア政府が腐っているという事を示す数々の証拠と、元ロシア代表の女性が自殺した本当の理由が書かれていたのである。

勿論、これには三人が怒るのも無理はなかった……。

第65話

あれから数時間が過ぎ、放課後になった。今は夕方なのか空はオレンジ色に染まり、IS学園もオレンジ色に染まりつつあった。そんな学園の屋上に一夏、勇人、止の三人がいた。

一夏は憤怒の形相を浮かべながら腕を組み、勇人は無言で夕日を眺めており、止は俯きながら手すりに凭れ掛かりながら座っていた。

彼等は各々、その場を動かなかったが共通している事はあった。それは、彼等が内心、ロシア政府への怒りを隠しきれない事である。

事の発端は、最初に観たのは勇人だがスマートフォン画面にあった、ロシア政府が腐っている事を意味している数々の証拠と元ロシア代表の人が自殺した真相。

恐ろしい内容だった。その内容は、ロシア政府の役人や政治家達が関わった数々の不祥事。それは良いかも知れないが、元ロシア代表が自殺した真相は極めて恐ろしく且つ、酷い物だった。

政府は元ロシア代表の人から代表の座を奪っただけでなく、専用機を没収し、更には代表に返り咲く事は出来ないように手を回したのである。

それには理由があった。実は元ロシア代表の、更に元ロシア代表の者が政治家の母を持っていた事が災いでもあった。何故なら、更に元ロシア代表の者が元ロシア代表に座を奪われた事に逆怨みし、母に頼んで代表の座から下ろすように頼んだのである。

更に最悪な事に、母は女尊男卑に染まった人間だった事も災いし、母は更に元ロシア代表であり娘でもある者の願いを聞き入れ、権力を振り翳して無理矢理奪ったのである。

が、娘は代表に返り咲く事は出来なかった。彼女よりも楯無の方が実力が上だった為に、代表にはなれなかった。その上、政府はその女性議員や更に元ロシア代表の者を謀殺したのである。

何故殺ったのかは判らないが、ロシア政府には何か訳があるのだろう。勿論、そんな事を言っている場合ではなかった。

それに、この事を教えたのは勇人が東に頼んで調べて貰うようメー

ルで送信し、束が勇人に教える形で返信したからである。

しかし、今はそんな事を言ってる場合ではない。彼等は既に、ロシア政府の役人達を塵殺しようと思っていた。最早、彼等を止める事は出来ず、誰も止める事は出来ないと言えれば良いだろう。

「二人共、決まったか？」

一夏が勇人と止に訊ねると、勇人は顔を一夏の方へと向け、止は一夏を見る為に顔を上げる。勇人は表情を険しくし、止は哀しそうだが何処か険しいようにも思える表情をしていた。

勿論、二人の答えは決まっていた。彼等も一夏と同じ気持ちだった。ロシア政府には死の制裁を与える。これには周りは反対するだろうが、三人には関係ない。

「ああー。二人は一夏に答える。それを聞いた一夏は深く頷くと身体を翻し、勇人も身体を翻し、止は立ち上がると、屋上を出ていく形で学園内に戻ろうとした。

刹那、屋上を出入り出来る扉が開く。一夏達は扉が開いた事に気が付き立ち止まるも、一人の女子生徒が屋上へと来た。その女子生徒は一夏達に気付き微笑む。

「ー更識ー。一夏はその女子生徒を知っていたのかそう呟いた。その女子生徒は楯無だった。楯無は一夏達の元へと歩み寄る。が、一夏は楯無から目を逸らす。

「此処に居たの？」

楯無が最初に言った言葉はそれだった。勿論、一夏は何も言わない。が、楯無は哀しそうに俯く。

「知ってるわ……エレーナ先生の事でしょ？」

楯無がそう言うも、一夏は軽く頷く。何故なら、エレーナ先生が狂った事は学園全体に知れ渡っていた。それは女子達から見れば気になるのと、恐いと思われるだけだ。

だが、大半の女子生徒達はエレーナ先生に何が遭ったのかは知らない。反面、一部の者達はエレーナ先生が、エレーナ先生の妹が自殺したと何か関係があるのではないのかと思っっているのも事実だ。

しかし、それとは関係あるかもしれないが今は色んな意味で違う。

楯無が此処に來たのも一夏達を捜していた。それも、彼女自身が嫌な予感を感じたからである。

楯無が氣にしているのは一夏の事だった。エレーナの件もあるが、楯無はある事を一夏に訊ねる。

「一夏君……何かを考えていない？」

「ーはっ？ ー。楯無の言葉に一夏は惚ける。が、楯無は一夏を見据える。その瞳には何か心配事があるかのように哀しい。

「一夏君……まさか、人を殺すつもり？」

楯無は一夏に問い、それを聞いた一夏は瞑目したが何も言わなかった。勿論、楯無から見れば当たり前だった。

「当たり前、なの……？」

楯無は恐る恐る再び訊くと、一夏は微かに頷いた。ーッ!?

ー。それを見た楯無は瞠目した。

「な、何を言ってるの？ 何を言ってるのよ!？」

楯無は驚きながら、一夏に詰め寄る。一方、一夏を睨を開き、楯無を見据える。

「だから人を殺すんだよ……ロシア政府の奴等をな」

「そ、そんなの駄目に決まってるじゃない!! そんなの許される事じゃないわよ!？」

楯無は一夏に詰め寄りながら問い質す。そうだろう、楯無は一夏が再び人を殺す事を許さなかったからである。何故なら、一夏は自分の家族のせいで許されない事をしてしまった。

それは楯無にとって辛い思い出かつ、一夏への罪悪感はある。それに一夏はその事に怒らなかつたのと、自分のせいで学園中に嘘の告白をさせてしまい、自分がエレーナ先生に殺されそうになった際も突き飛ばす形で守ってくれたり、昨日の夜、自信を取り戻せと言ってくれた。

それなのに、それなのに一夏は再び悲劇や取り返しのない事を繰り返そうとしていた。これには楯無も怒る筈だ。

楯無から見れば、一夏をこれ以上、危険な目に遭わせたくはなかつた、彼が取り返しのない事を繰り返らすのを見て見ぬ振りは出来

なかった。

「一夏君駄目よ！ 貴方はもうこれ以上……絶対駄目よ！ ……馬鹿な事は止めて!!」

楯無は一夏にそう懇願する。それに今朝、楯無が一夏に対しあんな行動をとったのもあんな事を囁いたのも、色んな事で疲れている一夏を元気付ける為の行動でもあった事に、一夏は気付いていない。

無論、そんなしても一夏はただただ困惑するだけである事に楯無自身も気付いていない。

「そんなのは俺の自由だ……誰かがやらなければ、犠牲者は増え続ける」

「それはそうかも知れない……だからと言って」

「そんなのはお前が知らないだけだ!!」

楯無が何かを言う前に一夏が怒りながら遮り、それを聞いた楯無は一瞬の事で肩を竦めた。が、一夏は言葉が続ける。

「お前に何が解る!? ロシア政府の下らない事で周りの人間が不幸になった!! それなのにロシア政府は知らぬ存じぬ!! こんな事許される筈もねえよ! ロシアだけじゃねえ、何処の国も腐っているに違いないねえ!!」

一夏は怒りながら言葉を述べる。何故なら、一夏は政府が嫌いだった。それは一夏が三年前、誘拐された際、日本政府が名誉の為に伝えていない事を束から教えられ、知った。

だが、そのせいで一夏は千冬は元より、政府が名誉を選んでいた事により、政府が腐っている事に怒りを隠しきれなかった。ケルティック達が助けに来なければ自分は殺されていたからである。

それ以来、一夏はISのせいで腐った世界を嫌いになった。同時に自分達はISを使っている。それは一夏達にとって皮肉な話でもあった。それに、勇人や止もまた、政府により人生を狂わせられた者達だった。

しかし、政府により人生を狂わせられた者達は後を絶たないのも事実であり、全員救う事も出来ないのも事実である。一夏達はそれを知らない訳ではない。だからこそ、一夏はロシア政府のやり方が三年

前の、日本政府と同じやり方とも思ってしまったのである。

「俺達はロシア政府の奴等を許さない……奴等には死が相応しい」

一夏はそう呟くと、楯無を突き飛ばす。楯無は尻餅を着くも、一夏達は屋上を出ようとする為に歩き出す。

「一夏君……ッ!!」

楯無は下唇を噛むも直ぐに立ち上がり、一夏達より先に屋上近くの扉の少し手前まで駆け寄ると、一夏達と向き合い、ISを部分展開した。

その場所は右腕であり、大型ランスを手にしていた。楯無の突然の行動に三人は立ち止まる。止は驚きを隠せず、勇人は眉間に皺を寄せ、一夏は瞠目していた。

しかし、楯無は表情を険しくしながら身構える。それは一夏をこれ以上人を殺させない為でもあった。そして、楯無は一夏にこう言った。

「一夏君……貴方をこれ以上辛い思いををさせたくない……だから、私は生徒会長として貴方を止めるわ!!」

楯無は一夏にそう言った。勿論、それは楯無が勝てばの話である。だが、そんな楯無を一夏は直ぐに表情を険しくしながら無言で見っていた。

第66話

「――何してんだよ? 」。楯無の行動に、一夏は細い目で楯無を睨む。一方、楯無はランスを持ち構えたまま歯を食い縛っていた。「聞こえなかったの? ……私は貴方をこれ以上人を殺めさせない為に止めようとしているのよ?」

楯無は一夏に訳を話す。今の楯無は一夏を止める以外、何もしなかつた。一夏への罪悪感もあるが楯無にとつて、唯一の罪滅ぼしでもあるのだつた。

そんな楯無に一夏は溜め息を吐き、ふと、勇人と止を見る。勇人は瞑目していたが、止に至つては未だ驚いている。だが、一夏は二人に言つた。

「――ここは任せろ、二人は先に寮に戻つてくれ」。一夏は二人にそう言つた。それを聞いた止は再び驚きを隠せず、勇人は目を開け頷いた。

止は兎も角、勇人は気付いたのだろう。一夏は楯無を相手にしようとしている。勿論、一夏は相手にしたくはなかつたのだが、楯無の事だから無理をしても止めようとするからだ。

だからこそ、一夏は楯無と闘い、楯無に勝つ事で、楯無に自分との実力の違いを教えようとしていた。勇人は止に声を掛けた。「――ここは、一夏に任せよう」。――

勇人は止にそう言つた。これには止も三度驚く。刹那、一夏は楯無と距離を保つように前に出ると、右腕を掲げる。刹那、一夏の右腕からISが部分展開され、同時に少し上にスピアも展開され、一夏はスピアを手にとると、軽く振り回すと、楯無に対し、武器を構える。一夏は楯無と戦おうとしていた。しかし、どちらに軍配が上がるのかは誰にも判らない。それを見届けるのは勇人と止。――ではなかつた。見届ける者は、誰もいない。

何故なら、勇人が突然右腕に着けているコンピューターガントレックを操作し始める。刹那、勇人は姿を消した。「――は、勇人!? 」。――止は勇人の行動に驚くも、止も姿を消した。

「ーっ!? ーっ。それを見た楯無は目を見開く。刹那、一夏は地面を蹴って楯無に迫る。楯無は一夏の行動に戸惑う前に一夏のスパアをランスで防ぎ、そのまま鏢競り合いになる。

が、長くは続かなかつた。何故ならば、一夏が力を込めてスパアを上に振るつたからだ。

同時に楯無のランスも無理矢理上へと振り上げられる。ーっあつ！ ーっ。楯無はランスが上へと振り上げられてしまった事に驚きはしなかつたが怯んでしまい、後ろへと引つ張られるようによろけてしまうも、何とか持ち堪え再びランスを身構える。

一方、一夏はスパアを肩に掛けながら、楯無を見据える。その表情は険しいーっまるで、楯無のせいで時間を食われているからだろう。

そんな一夏に楯無は悲しそうな目で見つめる。彼をこれ以上、人を殺めさせない為にも、何としてでも此所で彼を止めるつもりだった。が、それは一夏に任せた方が良かったろう。二人から見ればの話である。二人は身体を透明にしたまま屋上を出ていく形で学園内に戻っていた。

そして、屋上には一夏と楯無しか居なかつた。

「つたく、更識の奴、何を考えてやがるんだ？」

廊下に勇人の声が響く。勇人は今、隣にいる止に愚痴を溢していた。勿論、そんな勇人に止は苦笑いをしている。そうだろう、自分達のリーダーは一夏であるが、一夏が居ない間は勇人が仕切っていると言い換えれば良いだろう。

それに二人は今、鞆を取りに教室へと戻る為に廊下を歩いていたのだ。二人が教室へと戻ると、教室には僅かながら女子が残っていた。一部が二人に気付くも、二人は気にもせず自分達の席にある鞆を取りに行こうとした。ーっあ、トツマにはやはやだくーっ。

近くから自分達を呼ぶ声が聞こえ、二人は声が出た方を見ると、そこには長い裾をヒラヒラと動かしている女子生徒が喜びの表情を浮かべていた。

「ーほ、本音？ そのトツマってー。止がその女子に訊ねる。その女子は本音だった。が、本音はニユフフと笑っていたが、勇人は本音を見て舌打ちする。」

「どうしたの本音？ 何かよう？ それにさっきのトツマって……」

止は本音に訊ねると、本音は首を傾げる。

「何って、トツマは私が止の呼びたい時の方だよ……？」

「そうなの？ それにトツマって言うのは……悪くない」

止は少し恥ずかしそうに笑う。それを見た本音は少し笑うと、ある事を訊ねた。

「それよりもイッチーは何処なの？」

「ーイッチー？ ー。本音の言葉に止は疑問を抱く。が、本音はその事を教えた。」

「イッチーは一夏の事だよ？」

「一夏の事？ 一夏だからイッチーなの？」

止の言葉に本音は「そうだよ？」と答えた。が、一夏が何故イッチーと呼ばれているのかは解らないが、止はある事に気付き訊ねる。

「ーそれよりも何の用だ？ ー。そんな二人のやり取りに勇人は呆れながらも、勇人は本音に訊ねる。もし用があるならば声が掛けないと思ったからである。」

勿論、勇人の言葉に本音は「そうだった」と長い裾をヒラヒラと動かす。

「それよりも二人共、今日の夜空いてる？」

「今日の夜？ 何かあるの？」

止の言葉に本音は頷く。

「うん、今日ね……トツマのクラス代表記念パーティーをやるうとおもってるんだ……」

「ークラス代表記念パーティー？ ー。止の言葉に本音は頷く。それは女子達が止がクラス代表になった事を記念としてパーティーを考えたのである。」

しかし、それは女子達がデザート無料パスを手に入れる為でもあり、止にクラス対抗戦で優勝して欲しいからでもあった。勿論、一夏

は居ないが二人が女子達ともコミュニケーションを取れる事が出来るかもしれない。

三人は大抵、女子達とはあまり話をしていない。パーティーでコミュニケーションを取れば、三人は変わるチャンスもあるかも知れないからだ。

しかし、止は首を左右に振った。

「ごめん、これから用があるんだ……」

止の言葉に本音は「えっ？」と目を見開く。が、本音は直ぐに止に訳を問おうと問い質す。

「ど、どうしてなの……？ パーティーに参加しないの……？」

「いや……その。ごめん」

止は訳を話せなかった。そうだろう、自分達は、これからロシア政府の奴等に報復しなければならぬのだ。その為パーティーに参加出来ないのだ。それを言ってしまうえば、一夏や束に迷惑を掛け、周りにも迷惑を掛けるのも目に見えていた。

止は未だ戸惑うも、本音は泣きそうになる。

「トツマ……」

「ああつ、ちよつと!!?」

本音が泣きそうになつてゐる事に気付いた止は慌てる。勿論、止も参加したかったのだが何時帰ってくるかは判らない為、どうしようもなかった。それだけではない、周りの女子達も何故か止に詰め寄る。

「霧崎君参加しなよ！」

「そうだよ！ 主役の居ないパーティーなんて、只のパーティーだからさ!？」

周りの女子達も止に参加するよう促す。これには止も更に戸惑うも、ロシア政府への怒りよりも女子達の凄さにたじたじだった。

「……チツ」

そんな止や女子達のやり取りに勇人は舌打ちする。だが、勇人も動けなかった。それは、勇人もまた、女子達に参加するよう強要されていた。と言うよりも、勇人は女子達に怒りを覚えたのもまた別の話である。

そして、教室は女子達の勇人や止にパーティーに参加するよう強要する言葉が木霊しているのは言うまでもなかった。

「うぐっ……っ」

その頃、屋上では楯無がランスを杖代わりにしながら跪きつつ、目の前にいる一夏を見た。一方、一夏はスピアを軽く振り回していた。

勿論、二人はさつきまで槍を使って一戦交えていた。それもどちらも互角だったがお互い退かなかった。どちらも槍捌きは凄まじく、紙一重で躲すのもやつとだった。

嫌、楯無が跪いているのは楯無が僅かにスタミナ切れを起こしたからである。勿論、一夏はスタミナ切れを起こしてはいない。

楯無は訓練はしているが、一夏の場合は修行していたと言い換えれば良いだろう。

「うぐっ……」

楯無はよろけながらもランスを身構える。――何故無駄な事をする？　――。一夏は楯無の行動が解らないでいた。しかし、楯無はその事を話した。

「私は貴方を止めたい……これ以上、貴方に人を殺させたくない……だからこうして足止めしてるのよ……」

「……………」

一夏は険しい表情を浮かべながらも、楯無は言葉を続ける。

「私は貴方にしてはいけない事をさせてしまった……謝っても許される事じゃない……だけど私も解らないのよ……自分はこうして貴方を足止めしても効果が無い事は解っているわ……でも」

楯無は眼に涙を浮かべる。

「私は出来る事をしたい……貴方は私に自信を取り戻せと言った――貴方は私に怒りながらも、私を責める事はあまりしなかった……で

も、私も貴方の為に何かをしたいー出来ないと解っていないながらも、貴方の為に何かをしてあげた……い」

刹那、楯無は眼を閉じ、そのまま前に倒れそうになる。ーっ!!
ー。それを見た一夏は瞳孔し、スピアーを放り投げ、スピアーは地面に転がり落ちるとそのまま消えたが一夏は楯無の元へと駆け寄る。

刹那、一夏は楯無を支える形で抱き締めた。同時に、楯無はランスを落とすもランスは消えた。が、楯無の様子が少し可笑しかった。

「おい更識? 更識!」

一夏は楯無が気を失っている事に気付く。が、一夏は下唇を噛むと、楯無を横抱きし、とある場所へと向かう為に学園内へと戻った。そして、夕日も沈み掛かり、夜に差し掛かっていた。

第67話

その日の夜。ここは学園にある保健室。その保健室には明かりが点いており、室内には保険医はいないがベッドの上には仰向けになりながら瞼を閉じている楯無と、そのベッドの近くには一夏が椅子に腰掛けながら無表情で、楯無を見ていた。

普通、こんな時間帯なら学生は居ない筈だった。嫌、一夏が楯無を此処に運んできたからだだった。楯無に何か遭ったと、一夏が思ったからである。

勿論、保険医は突然の事で驚くも直ぐに楯無を診るも、只気を失っているから大丈夫だと言われた為、一夏が一瞬だけ安堵の表情を浮かべたのは言うまでもない。それに二人の右腕にはISの右腕部分は解除されている。

それに保険医は今、教員室で書類の整理をしている為、楯無が眼を覚ました場合は察に戻り、楯無が眼を覚まさなかつた場合は覚ますまで傍に居てやりなさいと言われたのも言うまでもなかつた。

——う、ううん……——。刹那、楯無の瞼が微かに動き、同時に声が微かに聞こえた。それを見た一夏は眼を見開くも、直ぐに無表情になる——直後、楯無は眼を覚ました。

楯無が最初に見たのは天井だったが視界がボヤけているのも事実だった。——っ!! ——。楯無は驚きのあまり起き上がるも、自分がベッドの上にいる事に気付き、一夏が近くにいる事にも気付く。

「一夏君……ここは？ それに何で私はベッドの上にいるの？」
「……保健室だ。お前が倒れたから俺が此処まで運んだ——まあ、お前は二時間くらい気を失っていたぜ？」

楯無が訊くと、一夏は訳を話す。——そうなの……——。楯無は一夏から訳を話されそう眩いた。が、楯無の表情は何処か哀しく、何処か寂しそうである。

「どうした？ 何処か悪いのか？」

一夏は首を傾げると楯無にそう訊ねるも、楯無は首を左右に振つた。

「いいえ……何処も悪いって訳じゃないわ……只、私は何で気を失っていたのかは自分でも解らないのよ……」

「――解らない？　――。一夏からそう言われると楯無は頷き、訳を述べる。楯無は何故自分が気を失ったのかは自分でも解らないのと少し解っていた。それはエレーナ先生の事だった。エレーナ先生は気が狂ったように笑っていると言う事が女子の噂と言う形で流れたのだ。」

勿論、エレーナ先生が故国にも居場所が無いのと、自分を迎え入れてくれる者達はいないと思っただからである。

が、女子達から見ればエレーナ先生の妹が自殺している事やロシア政府が裏で悪事を働いている事に気付いていない。と、言うよりもそんな強大な陰謀に気付く事は永遠に無いだろう。

だが、楯無はエレーナ先生があんな事になったのは自分のせいではないのかと思っていた。勿論、楯無が悪い訳ではない。悪いのはロシア政府なのである。

にも拘わらず、楯無は自分のせいだと思っていた。そんな楯無に一夏は呆れ溜め息を吐くと、楯無を慰める形で反論した。

「それはお前がそう思っているだけだ。お前が気に病む事ではない」

「でも！　私はロシア代表の間、エレーナ先生や身内にそんな出来事が遭ったなんて知らなかったのよ!？」

「それは当たり前だ――誰しも知らない事はある――それもまた事実だ」

一夏はそう言うのと椅子から立ち上がり、楯無の頭に手を伸ばし、楯無の頭を撫でる。――あつ……。一夏の突然の行動に楯無は頬を少し赤くしながら瞠目した。

何度目かは判らない、一夏が楯無の頭を撫でる行動。それは一夏が自分の頭を撫でてくれるのと、一夏の手のひらには男性特有の温もりを髪で感じる事が出来る。

それだけではない、一夏が頭を撫でてくれると何故か自然と落ち着く。何故かは判らない。が、現に今の楯無は落ち着きつつあった。楯無は一夏の行動に戸惑いやそれを受け止めつつも、ある事を訊ねる。

「ねえ、一夏君?」

「何だ? 俺に何か用があるのか?」

「いえ……用って訳じゃないけど、一夏君は何で私の頭を撫でるの?」
楯無の問いに、一夏は眉間に皺を寄せる。ー反面、哀しい瞳をする
と、それを楯無に話した。

「俺にも解らねえ……でも、俺を鍛えてくれた師匠が何時も頭を撫で
てくれたからかな?」

ーえっ? ー。一夏の言葉に楯無は疑問を抱き、顔を上げ、一
夏を見ると、一夏は哀しい眼をしながら無表情だった。

楯無は疑問を浮かべたのは、一夏の言葉にあった師匠と言う存在。
それは楯無には判らないが、一夏の師匠はケルティックの事である。

一夏が三年間、別の惑星で修行をする際にケルティックの下で教え
られながら、体力作りをしたり、共に狩りをしていた。

あれには沢山の思い出があった。その中で一番に印象に残ったの
が、ケルティックが自分の頭を撫でてくれた事である。

最初は一夏は戸惑ったが、ケルティックは何度も撫でてきてくれる
為、徐々に慣れていった。人間にはない、宇宙人特有の温もりを一夏
は髪で感じていた。

何もしてない訳ではない。一夏はその事をケルティックに訊ねた
事がある。何故、自分の頭を撫でてくれるのか? と。勿論、ケル
ティックは直ぐに答えた。

「師匠はあの時、これ以上の事は言えないけど、こう言っただー
『何故かは判らないーが、お前が頑張ったから撫でたからだ』つて
な」

「お師匠さんがそんな事を?」

楯無が言うと、一夏は『ああ』と言いながら頷くが言葉を続ける。
「それに師匠は言っただー地球では褒める時に頭を撫でたり、落
ち込んでいる時にも頭を撫でているからだ』つてーそれに俺は、落
ち込んでいるお前を見たくないからだよ」

一夏の言葉に楯無は「っ!」と再び瞠目しながらも顔を真っ赤にし
て、慌てて俯いた。そんな楯無に一夏は無表情で「どうした?」と訊

くが、楯無は首を左右に振る。

「な、何でもないわ！ た、ただ恥ずかしいから……今度は、そのお……」

楯無は恥ずかしそうに顔を上げ、ある事を言った。

「私は別に頭を撫でてもらうのは嫌じゃないけど……人前ではあまりやらないで」

楯無の言葉に、一夏は「はっ？」と何も解らず首を傾げるも、楯無はある事を訊ねる。

「それよりも一夏君……お願いがあるの……」
「ロシアへ行くなど言われても俺は否定する」

「……っ!? ……」楯無は一夏が自分が言いたい事を先に言った事に驚きを隠せず、顔を上げ、一夏を見ると、一夏の表情は怒りに満ちていた。

そうだろう。一夏はロシア政府のやり方に腹が立っている。その為、楯無が何を言おうが一夏は殺るつもりだった。勿論、彼一人で殺る訳ではない。勇人や止も作戦に参加し、東も作戦に参加している。因みに、勇人と止は今、止はクラスの女子が企画した自身のクラス代表記念パーティーに参加しており、そこには勇人も居たが箒を見張っている為とその場を動けないでいた。

二人は後から合流するように言った為、問題はなく、合流地点は屋上であり、そこで東に人参型ロケットで御迎えに来るようにも連絡した。準備は、万端だった。

それに今、一夏は色んな意味で足止めされていた。それは目の前にいる楯無にだった。楯無は一夏に詰め寄る形で制服の胸ぐらを掴む。「ぜ、絶対に駄目よ!! だ、駄目っ!! これ以上、私の関わった事で……っ!?!」

刹那、楯無は何かを言い掛けるも一夏が突然、抱き締めてきた。

「い、一夏君?」

これには楯無も驚く。が、一夏は楯無とは顔を合わせなかった。嫌、合わせないと言うよりも、会わせようとはしなかった。そして……。……っ!?! ……」楯無は首筋に電流が走る事に気付き眼を見

開く。

それもほんの数秒も経たなかった。一夏は楯無の首筋に携帯用のスタンガンを当てたのだ。それは一夏は楯無を抱き締めている間に、ポケットから取り出した物だったのだ。

「ーい、いちー」。楯無は意識が遠くなりながらも微かに一夏の名を呟こうとしたが、無駄に終わった。楯無は一夏に抱き締められながら気を失う。

一方、一夏は楯無をベッドに横向けにする形で優しく寝かせる。一夏の表情は何処か躊躇もないかのように無表情だった。一夏は此れから、勇人や止と共にロシア政府の役人達を殺す。

それは一夏達が自ら課せた天誅。腐った役人達には死が相応しい。今までのロシア政府に関わった者達の無念を晴らす為でもあった。彼等には明日を見せる訳にはいかない、と。

「ごめんな……」

一夏は保険室を出る前に、楯無の頭を撫でる。本当は保険医から言われたが一夏には関係なかった。それに自分は死ぬかもしれない事にも気付いていた。

それは無いに等しいが一夏は敢えて楯無に言った。楯無は気を失っている為に何も言わない。だが、一夏は楯無の頭を撫で終える形で楯無から手を離れさせる。

そして、一夏は表情を陰しくし、こう呟いた後に二人に連絡した。

「ー塵殺、開始ー」と。

第68話

ここは日本の遙か北側にある大国、ロシア。その国は世界で一番大きく、とても寒い。

そんなロシアの街は今、深夜なのか静寂に包まれ、肌寒い風が吹いていた。何処の街も灯りが点いている建物はあまり見かけない。

灯りといえば、街の道路や街路樹に何本、何十本も設けられ、微かに照らしてくれる街灯と、満月だけだ。

が、そんなロシアの街をとある建物の上から無言で眺めている三つの影があった。全員が黒のジャケットとズボンを着用している。

勿論、彼等が着用しているのは服ではない。四肢や胴体等の一部が露出している防具や、二人の左腕には二本の鋭利な刃物が少し出ている物を装備、一人は両腕には少し長めの鋭利な刃物が少し出ている程度の物を装備している。

が、三人には共通している物があつた。それは三人の背中にはスピーアーが携えられており、右腕にはコンピューターガントレットを装備しており、顔には各々デザインが違うマスクを着けている。

その三人は一夏、勇人、止の三人だつた。彼等は何故、ロシアにいるのかは、それはたった一つの自ら課せた使命があるからだ。それは、ロシア政府の役人達を殺す事だつた。

その理由は、ロシア政府の奴等が裏で働いた数々の不祥事と、エレーナの妹、エリーナと、エリーナの友人である元ロシア代表の者の無念を晴らす為でもあつた。

どちらも権力を振り翳して行ったあるまじき行為。それは許される事ではなかつた。彼等はロシア政府の奴等を殺す事で、彼等には死で償つて貰おうと考えていた。

その為、三人はロシアに居たのである。ーーそろそろだなーー。一夏は勇人や止の二人に言い、二人は頷く。しかし、自然に吹かれる風が彼等の髪やジャケットを撫でるように吹く。

彼等には関係ない事だつた。例え彼等の身体が寒さのあまり悲鳴を上げてても、彼等の心は復讐の炎が灯されている。

そして、三人の表情はマスクを着けている為判らないが憤怒の形相を浮かべている。すると、一夏は二人を見ると、二人に命令する。

「東さんからの命令によると、奴等は今、ロシアの連邦院――俺達の目的はそこにいる奴等を塵殺する事だ――勿論、そこで殺るのはまだだ……今頃は東さんが衛星をハッキングして、全世界の人々にロシアを流している頃だろう」

一夏は言葉を述べる。勿論、それは作戦でもあった。一夏達は最初、ロシアの街で待機している間、東が全世界にロシアの数々の不祥事を伝え、ロシアの役員達の政治生命を絶つてから、塵殺する、と言う作戦だった。

勿論、ロシア政府の役員達が法で裁かれるのなら死で償って貰おう、と言う考えでもあった――勇人の作戦である。

が、ロシア政府の役員達の中には家に居るかも知れない奴等もある。勿論、彼等は塵殺の対象ではない。彼等には自分も殺されるかも知れないと言う恐怖を刻まらせる為に生かしておく為でもあった。

そして、一夏達は東からの連絡を待っていたが一夏は二人に、何時でも武器を展開し、取り出すよう命令していた。それは二人のリーダーとしてでもあり、二人の命を預からせているリーダーとしての使命でもあった。

刹那、三人のジャケットから音が聴こえ、三人はその音に反応する。勿論、東からの連絡でもある。それを取ったのは、一夏であった。

一夏はジャケットの懐から、ある物を取り出す。黒い無線機だった。一夏は無線機のボタンを押すと、顔に近付ける。

「――東さんですか？　――。一夏は無線機の向こうからの連絡を聞く前に先に訊ねると、直ぐ後に東からの連絡が来た。

『終わったよ、いつ君……後はいつ君達に任せるね……』

東は一夏にそう伝える。が、その言葉には本来の東とは思えない程、元気がない物だった。何故なら、東は一夏達が人を殺す事に躊躇していた。

最初は一夏自身から人を殺したと聞かれた際には、東と近くにいたクロエは驚きを隠せなかった。勿論、それは後々話す事になるだろ

う。東の言葉に一夏は頷く。

「ありがとうございます東さん……後は俺達に任せてくださいーでは」

『ちよつといつく』

東が何かを言う前に一夏は先に無線機のボタンを押した。刹那、束からの連絡は消えた。勿論、勇人や止が持っている無線機から音が聴こえるも、二人は出る気配さえもない。

二人は一夏と同じ気持ちだった。勇人は権力を振り翳すロシア政府に怒り、止はエレーナの無念を晴らす為でもある。例え誰かが文句を言おうが、自分達は止めるつもりはない。

そして、一夏達は連邦院へと向かう為に身体を透明にし、連邦院へと向かった。

「おい、どうなってんだ!」

一時間後、ここはロシアにある連邦院。その場所は日本にある国会議事堂前とは良い勝負だが、中央広場には沢山の席があるが国会議事堂の中にある中央広場と少し似ていた。が、その場所には数十人のロシア政府の役員達がいる。

彼等の表情は何処か慌ただしく、憤りを隠せないでいた。勿論、彼等はさつきまでテレビで流れていた内容に恐怖を覚えたのである。

その内容は束が流した自分達が裏で働いた数々の悪事と、元ロシア代表が自殺した事とその真相。それは彼等にとって政治生命を絶たれ、法で裁かれると言う結末が待っていた。中には大半は女性議員が居たが彼女達は女尊男卑主義者達である。彼女達が権力を振り翳したとしても無駄に終わるだろう。

彼等には最早、味方はいない。居るとすれば、周りにいる者達だけだ。周りは政治生命が絶たれる事に危機感を覚えているのか喚いている。

見苦しいの一言にしか過ぎない。どんなに言い訳しても、逃れる事は出来ない。警察の一網打尽でもなく、マスコミ達から逃れる事でもない。彼等に待つてるのは――死だけ。

刹那、中央広場の明かりが一斉に消え、広場全体が暗闇に包まれる。これには周りも突然の事で騒ぎ出す。中には冷静な者達も居たが周りに落ち着くよう言っても効果はない。――キイイ……！――今度は扉の開く音がした。それは二つだったが近くに居る者達にか判らず、遠くに居る者達までには届かなかった。

――キヤアアアア……。刹那、女性の叫び声が木霊する。が、それだけではない、周りが突然、見えない何かに斬り殺されていく。中には背中を斬られたり、中には首と胴体が真っ二つにされたり、中には刺し殺されたりしていく者達で別けられていく。

勿論、沢山の悲鳴が飛び交う。が、逃げようとしても周りには人が居ると、広場全体は暗闇に包まれている為、出口は何処にあるかは、近くに居る者達以外判らないでいた。

中には冷静な者達がいるも未だ効果無し。中には、運良く扉の外に出たとしても、待つてるのは人生が棒に振る形で終わるだけだった。「ひ、ヒイイイッ!!」

周りが見えない何かに殺され悲鳴が飛び交う中、中央広場に血の雨が振るような光景の中、一人の男性が尻餅を突きながらその場を動けないでいた。

その男性はスーツを着ているが金髪碧眼と言う一般的な外国人だった。が、その男性は今、地獄絵図とも言える光景に何も出来ないでいる。

未だに続く見えない何かが殺戮を繰り返し、徐々に少なくなっていく悲鳴、運良く扉に着いてそのまま逃げる者達や、男性同様、その場を動けない者達も居た。

「な、何が起きてるんだ!?!」

男性は力一般叫んだ。が、それは男性の最後に発した言葉だった……。刹那、男性の首が吹っ飛ぶ。首から下は何もなく、断面からは人肉や骨が見える。

同時に血も滝のように噴き出ている。それだけではない、男性が最後に見た光景は、地獄絵図のような光景だけである。彼を殺つたのは、最初に二つの扉を開けた二つの見えない何かではない。

後から合流する形で来た三つ目の見えない何かの手により殺されたのである。

数分後、悲鳴は既に聞こえなくなっていた。

警察が踏み込んだ時には、嘔吐がする程の悲鳴は血生臭い臭いが辺りに充満し、広場全体には数十人の屍が転がり、壁には大量の血が飛び散ったかのように付着し、床には血の海が出来ている。

警察の中には悲鳴を上げる者もいれば、戦慄する者達もいた。その光景は一生、彼等の心に消える事はないだろう。それ以前に、誰が殺つたのかさえも永遠に判らなかつた。

そして、彼等を殺つたのは一夏、勇人、止の三人だった。勿論、彼等は既にその場から離れた後だった為に、連邦院近くには居なかつた。

何故なら、彼等は既にロシアから離れているからだった。が、その事を知る者は極一部しか知らないのもまた事実である。

第69話

時刻は午前三時を回った頃、ここはI S学園近くにある寮。刹那、寮の屋上から一瞬だけ黄色い光が発せられたが、同直ぐに光は消え、そこから一つの物体が地面に微かに触れるように宙に浮いていた。それは、束が愛用している人参型ロケットだった。

刹那、人参型ロケットの扉が開き、そこから三人の人物が降りてくる。一夏、勇人、止の三人である。

それに防具や武器は解除しているが彼等は制服を着ていた。何故なら、彼等はさつきまでロシア政府の大半の役人達を殺したからである。殺した理由は、彼等が行った数々の悪事や元ロシア代表の自殺した本当の真相が理由だった。

一夏達が人参型ロケットから降りると、人参型ロケットは自動で扉を閉め、そのまま風のように消えた。

その場に残ったのは一夏、勇人、止だけである。――終わったな――。一夏の言葉に勇人は瞑目した後に頷き、止は表情を曇らせながら頷いた。

勿論、彼等は人を殺した事に罪悪感があった。しかし、彼等は悪を行う事を躊躇わない。人を殺す事は許されない事だが、仕方ないと言う一言で片付けるしかなかった。

「終わったな……でも、エレーナ先生は元に戻らない……エレーナ先生の妹さんや元ロシア代表の人は生き返らない……」

止の微かに呟くような言葉に、一夏や勇人は止を見る。止の表情は曇っているが哀しい目をしている。そんな止に一夏と勇人は互いを見合うつと軽く頷き、再び止を見る。

「止、俺と勇人は先に戻る。お前は どうする?」

「俺はもう少し此処にいるよ……一人で居たいから」

一夏が訊ね、止は答え返すと、一夏と勇人は頷き、そのまま寮の方へと戻る形で歩いて行った。それは一夏と勇人の止への気遣いだった。止は一夏や勇人よりも天然だが人を思いやる心や慈悲は僅かにあるからだった。

その為、止は一人その場に残ったのは、エレーナやエレーナの妹エリーナ、元ロシア代表の者の三人を思い出していた。

エリーナや元ロシア代表は故国ロシアの、ロシアと言う同じ者達の身勝手な理由で自殺に追い込まれ、エレーナは精神が崩壊している。あのエレーナの狂氣的な笑いは今も止の耳に響く。

過ぎた事かも知れないがああ光景は今も、嫌、一生忘れる事はないだろう。そして、止は空を見上げる。午前三時にも関わらず、黒い空がIS学園や日本全体を暗闇に包んでいる。

が、止は無駄と判りながらもやるせない思いを吐き出す形で、こう呟いた。

「日本もロシアも……自分達の国が栄える為に自分達と同じ国で育ち、同じ血が流れている者達を犠牲にするのかよ……人の命を何だと思ってるんだよ……！」

止はそう言った。そして、止は数分間、その場を動かなかった。

「じゃ、後は今日の朝までお別れだな」

一方、一夏と勇人は自分達が住んでいる部屋を出入り出来る扉近くで、一夏は勇人にそう言った。勇人は軽く微笑みながら頷くと、軽く手を振って自分や止と同棲している部屋へと向かった。勿論隣だが一夏は自分の部屋を出入り出来る扉へと近付き、ポケットから、この部屋のものであろう鍵を取り出し、それを扉のドアノブにある鍵穴へと突っ込み、軽く捻った。

ーガチャー。通路内に微かに音が響いた。が、一夏は鍵穴に押し込んでいる鍵を取り出し、ポケットに戻すと、ゆっくりと扉を開けた。

勿論、他の女子達を起こさないようにする為であるのと、楯無が寝ているかも知れない為でもあった。前者は兎も角、後者は一夏にはどうでも良かった。

楯無は今、保健室にいるだろう。何故なら、楯無をスタンガンで気を失わせたのと、あの子の事は知らない。

楯無が気が付き保健室から出て寮へと戻って来ても、楯無が未だ保健室で気を失ったままでも、今頃気が付いても一夏には関係無かつた。

一夏は扉を開ける。一夏は電気をつけていないのか真つ暗だが、一夏は部屋へと入り、静かに扉を閉め鍵を掛ける。部屋の中は未だ真つ暗だが一夏は部屋の中を歩く。

「一夏君……」

近くから声が聞こえ、一夏は無表情で声が出た方を振り向く。そこは自分が寝ているベッド。

そのベッドには何故か横向けに楯無が寝ており、それを見た一夏は瞠目した。楯無が戻って来ようが戻って来ないが関係ない。一夏は楯無は自分のベッドに寝ている事に驚いていた。それにさっきの楯無の一夏を呼ぶ声は、楯無自身の寝言だった。

それに楯無は寝間着を着ているが一夏は何も言えずにいた。ふと、一夏は楯無の近くに自分が使っている布団が無造作に放り投げられている事に気付く。

「ったく……面倒くせえ女だな」

一夏はそう呟き、その後溜め息を吐くと、ベッドの近くまで歩き、布団を持ち上げると、楯無の身体を覆い隠す形で布団を掛けてやる。

「う、ううん……」

すると、楯無の瞼が微かに動き、同時に声が聞こえた。これには一夏は驚くも、楯無は目を覚ます。一夏あつ！一夏。楯無は一夏に気が付き、起き上がる。

「い、一夏君……ッ、馬鹿っ！」

楯無は一夏を見るや否や一夏に怒りながら、一夏の頬を叩いた。刹那、渴いた音が室内に小さく響く。

「っ、何をするんだ!？」

これには一夏は怒り、楯無に詰め寄ろうとした。刹那、一夏は再び楯無に頬を叩かれた。が、楯無は目に薄つすらと涙を浮かべながら下

唇を噛み締めていた。

楯無は泣いていた。しかし、楯無はまた一夏の頬を叩いた。三度目の渴いた音が室内に小さく響くも、一夏は怒りを露にする。

「てめえ言い加減に……」

「馬鹿」

一夏は何かを言うのを楯無は一夏に「馬鹿」と言った。それを聞いた一夏は「えっ？」と惚けるも、楯無は一夏の胸元に飛び込む。

「お、おい楯無!？」

「馬鹿、馬鹿、馬鹿っ……!」

一夏は楯無の突然の行動に戸惑うも、楯無は顔を一夏の胸に埋めながら「馬鹿」と言い続けた。それには訳があったが今はそんな事を言ってる場合ではなかった。一夏は楯無の行動や楯無が泣いている事に怒りが消えていくのと、戸惑いを隠せないでいた。

楯無が何故泣いているのかは解らないが、一夏は「ッ……」と下唇を噛みながら何も出来ないでいた。楯無が平手打ちをしてきた方の頬は微かに赤くなっており、一夏自身も頬に微かに激痛が走っている事に気付くも、今は何も出来ないでいた。

一夏は楯無が泣き止むまでその場を動けないでいた。それも数分間は続いたのは言うまでもない。

「そ、そんな……」

あれから数分後、楯無は落ち着きを取り戻し、一夏に何処に行ったのかを訊ね、一夏は渋々答えると、楯無自身は戦慄した。因みに一夏と楯無は一夏のベッドで隣同士に腰掛けている。

実は楯無は一夏が数分前に勇人や止と共に、ロシア政府の役人達の大半を皆殺しにした事を一夏から教えて貰っていた。

これには楯無は戦慄しない訳にはいかなかった。一夏は又、自分のせいで人殺しをしたのである。今度の殺人は誘拐犯よりも何倍も多い人達を殺したのである。その証拠に楯無は身体を震わせていた。

「恐らく明日はロシア政府の数々の不祥事や元ロシア代表が自殺した真相が全世界にセンサーショナルに報道されるだろうな……だが、そ

んなのは俺には関係ない」

それを聞いた楯無はますます身震いし、顔を青褪める。そうだろう、一夏は最早、死刑になっても良い程の大罪を犯している。それも全て、自分に拘わっている事だからだ。

「あ……ああつ……」

楯無は何かを言い掛ける。だが、何を言えば良いのかが解らないでいた。一夏に謝罪を述べても一夏の罪が消える訳ではない。一夏に何の行動をすれば良いのかも解らないでいた。やったとすれば、自分は一夏をこれ以上人を殺させない為に止める行動をしたが無駄だった。

自分は暗部の人間なのに、目の前にいる一人の青年に自分に関わっている事で沢山の罪を犯させてしまった。自分は何が暗部の人間だ、自分は何が更識の当主だ、と楯無は自分自身に問い質していた。

「……チツ」

そんな楯無を見た一夏は呆れると、楯無の頬に口付けした。

「なっ!？」

これには楯無も驚き、楯無は一夏を見る。一夏はそつぽを向いていたが、無言で楯無の頭を撫でる。

楯無は再び驚くも、一夏は無言かつそつぽを向いたまま、楯無の頭を撫で続けていた。それは長くも短くもない。それは一夏が「もう寝る」と言うまで、続いた。

余談だが、エレーナ先生は学園側が相談した結果、ロシアに帰す事が決まり、エレーナ先生は翌日、ロシアに強制送還されたがその日の夜に自殺した……。

第70話

朝六時半。此処は一夏と楯無が同棲している部屋。二人は今、各々使っているベッドで寝ており、ベッドから寝息が聞こえるも、一夏の唼が微かに動き、一夏は目を覚ます。

一夏の視界に最初に入ったのは天井で一夏は手で目を擦り、上半身だけを起こす。因みに一夏は寝間着であり、右腕にはコンピューターガントレットを着けていない。

コンピューターガントレットはデスクの上に置いてある。

「もう、朝か……」

一夏は最初に言ったのはそれであり、その後には欠伸をする。一夏は三時間半しか寝ていない。その為、一夏は不機嫌なのか表情は陰しく、唼も重そうである。

「まったく昨日はー嫌、今日の更識は……」

と言うよりも、一夏は不機嫌そうに、隣で可愛らしい寝息を立てている楯無を見る。楯無は未だ寝ているが楯無は一夏の方を見ているかのように横向けに寝ている。

なのに、楯無の表情は少し悲しそうである。一夏は楯無を見て何も言わず、ベッドから降りると楯無を起こさないように着替え始める。

数分も掛からない内に、一夏は寝間着から制服へと着替え、洗面所へと向かい、顔を洗った。

「……散歩しよう」

一夏は洗面所に設けられている鏡で自分の顔を見て溜め息を吐くと、洗面所を出て、デスクの上に置いてあるコンピューターガントレットを手に取り、右腕に装着すると、楯無を起こさないように部屋を出る。

部屋には楯無しか居なかったが楯無は未だ眠り続けており、彼女が目を覚ましたのは数分後であった。

一夏は今、学校近くのベンチに腰掛けていた。本来なら勇人や止も

一緒だが一夏は一人で行動したいと言う一夏自身の我が儘でもあった。

一夏はベンチに座っているが、いつも見ている光景に飽きたのと、同じ繰り返しをしているようにも思える光景に何も言わないでいるのか眉間に皺を寄せている。

これは三年間も続く一夏嫌、三年間と言うよりも留年すれば一からやり直し。また、退学すれば同じ光景を見ないで済むのもまた事実である。

反面、IS学園は他国からの干渉は受け付けない為に身の安全は保証出来る。外に出た場合、命を狙われるのも事実。

一夏はそれを知りながらも前者を選んでいた。千冬や箒は顔を合わしたくは無理程嫌っているが楯無や束の事もある為、それは出来ないでいる。

一夏は内心そう思いながらも、朝日を眺めている。その表情はまだ眉間に皺を寄せているが何処か寂しい。

一夏が人を殺した事に後悔している訳でもなく、楯無の事を気にしている訳でもない。一夏は只、自分は何をしているのか解らないでいる。

自分は何の為にIS学園に来たのか一夏勉強する為なのか、千冬や箒と再会する為なのか、それとも楯無と再会して彼女を立ち直らせる為なのか、と。

何れも一夏には関係ない事ではない。何れも一夏自身がケジメをつけなければならぬ事。一夏はそれを知りながらも解らないでいる。

勇人や止にも言えば良いが彼等にも事情があり、あまり頼りたくはない。頼れば彼等の時間を潰す事になる事は目に見えている。

一夏は溜め息を吐くと、顔を両手で覆い隠す。考えれば考える程、解らなくなっていく。千冬や箒を益々毛嫌いし、楯無に自信を持つよう言っても彼女はロシアの件でますます自信を無くしている。

もうどうすれば良いかが解らない。どちらも女性関係の事であり、自分は女性の気持ち等知る事は出来ない。勇人や止に相談出来る筈

もない。

東やクロエに相談出来るかもしれないが東は忙しい身でクロエは手伝っている身。どちらも時間の関係がある為、無理に等しい。

「どうすれば良いんだよ……！」

一夏は歯を食い縛る。最早、一夏は女性の事で自信を無くしつつあり、誰にも相談出来ないでいる。此処は女子校だが自分を良く知る人物ではない。

自分を知ってるのは東クロエ……それに楯無や、未だ逢ってない親友の妹、蘭……そして。

「どうすれば良いんだよ……鈴」

一夏は不意に親友の一人の名を呟く。その少女は中国で再会し、その後、別れの言葉を言わずに彼女の前からいなくなつた。

あの時、鈴はどう思ったのだろうか……自分に怒っているのだろうか？ 嫌、怒っているに違いない。彼女からのさよならの言葉を聞く前に気を失わせる形で、彼女の前から姿を消したのだ。

流石の彼女も三年行方不明になり、ひよつこりと帰ってきて、また消えたとなれば怒る筈。一夏は鈴に謝りたかつたが今はIS学園にいる為、彼女が逢えるかどうかとも判らない。

「早く起きちやつたわね……まあ、昨日の夜で此方に来たのと、単なる時差ボケかしらね？ ……あらあれは」

すると、一人の女子が寮から出てくると眠たそうなのか目を擦りながら愚痴を零す。刹那、女子はベンチに座っている者に気付き駆け寄る。

一夏も誰かが駆け寄ってくる足音に気付き、両手を下ろし、足音が見る方を見る……刹那、一夏は瞠目し、その少女も瞠目し立ち止まる。

「い、一夏？」

「り、鈴？」

少女は一夏の事をよく知っていたのか驚きながら一夏の名を呟く。一方、一夏もその女子を知っていたのか立ち上がる。

その女子は茶色い髪をツインテールにして纏め、翡翠色の瞳が特徴かつ幼さが残る顔立ちをしている。着ている服は私服ではない……

此処の学園の生徒である事を印象付ける制服だが軽装的な制服である。

しかし、その女子は一夏が今、逢いたい者と相談したかった相手でもある。そんな一夏は驚く中、その女子は――鈴は涙を浮かべながら、一夏の名を言う。

「一夏……っ、一夏――ッ!!」

鈴は泣きながら、一夏の元へと駆け寄り、一夏に抱き着く。突然の事に一夏は戸惑う中、鈴は両手を一夏の背中に回し、顔を一夏の胸に埋める。

「一夏……一夏ッ……!! 逢いたかったわよおっ!」

鈴は一夏の胸に顔を埋めながら泣きながら言葉を述べる。それは怒りや悲しみが混じっていた――嫌、今は鈴自身が再び一夏に逢えた事に喜びを隠せないでいる。

あの時、鈴は一夏が居なくなった事に戸惑いを隠せないでいた――が、束が全世界に男性操縦者達を保護した事を宣言した際、彼女は何か微妙にある事を感じる。

あの中、男性操縦者達の中には一夏がいるのではないのだろうか、と。憶測には過ぎなかったが鈴は微かに淡い期待を寄せる。

一夏がいるのなら、自分もIS学園に通おうと。勿論、色々遭った為に遅れたが何とか転入する形で入る事が出来た。

そして今、鈴の予想は的中した。目の前にいる青年は一夏であり、鈴が一番逢いたかった者でもある。鈴は泣きながら顔を上げる。

顔は涙でクシャクシャだったがそんなのは関係ない。鈴から見れば二度目の一夏と再会した事に喜んでいる。今は、鈴自身の我が儘だろうが鈴はニコツと笑う。

「一夏……逢いたかったよおっ」

鈴は泣きながら再び一夏の胸に顔を埋める。――フツ――。そんな鈴に一夏は微笑むと、鈴の頭を撫でる。

一夏から見れば今一番逢いたかった者、鈴の我が儘を受け止めている。一夏から見れば心に暗い影を落としかねなかった自分に一筋の光が射し込んだようにも思えるからだった。

一夏は鈴の頭を撫で続けるも、突然、鈴は一夏から離れる。これには一夏は驚くも、鈴は泣きながら憤怒の形相を浮かべると。

「バカーッ!!」

鈴はそう言うと、一夏の頬を叩く。そして、大きな渴いた音が二人の周りに響き渡った。

「で、一夏は何でISを動かす事は出来たのよ?」

数分後、一夏と鈴は今、ベンチで隣同士で座っている。鈴は顔に涙の痕が残っていないながらも一夏に訊ねる。一夏は一夏で鈴に叩かれた頬を手で押さええていたが何故か俯いている。

「どうしたのよ一夏……一夏!」

「あつ!? ああ」

鈴が問い掛けると、一夏は驚きながらも我に返り、驚きつつも鈴を見る。鈴は心配そうな表情で一夏を見つめている。

「あつ、嫌、ちよつとな……」

一夏は首を左右に振った後、鈴に微笑む。だが、それは鈴に不信感を抱かせてしまう。

「一夏……何か遭ったの?」

鈴の言葉に一夏は「えっ?」と戸惑う。

「何か遭ったのね? 訳があるのなら話なさいよ?」

「嫌、何でもない……何でもないよ」

一夏の言葉に鈴は溜め息を吐く。

「一夏、それじゃありまくりなように思えるじゃない?」

「えっ……嫌、鈴には関係ない事だぜ?」

「嘘ねーあんだ自分の顔を鏡で見でないの?」

鈴の言葉に一夏は瞠目する。鈴の言ってる事は正しかったー何故なら、今の一夏は何処か青褪めている。

一夏が鏡を見なくても、誰から見ても一夏が悩んでいるように思えるだろう。それを鈴は一夏に指摘しながらも再び訊ねる。

「悩みがあるのなら言いなさいよ一夏?」

「嫌、鈴には関係ない事だから言わないよ」

「一夏……悩んでても何も変わらないわよ？　それに我慢は身体に悪いわよ？　それに……」

鈴は悲しそうに俯く。

「私はあなたの事を助けてやれなかったーそれどころか、貴方は一人で辛い思いをしているじゃない……」

「鈴？　お前何を？」

一夏は何かを言うも鈴は顔を上げる。

「一夏……もうこれ以上、自分を責めないで、自分の言いたい事を周りに言いなさいよ……周りに助けを求めなさいよ」

「り、鈴……」

鈴の言葉に一夏は目を見開く。鈴は一夏を助けられなかった事に後悔していた。それだけでなく、自分は一夏に助けて貰ってばかりなのに自分は何もしていない。

鈴から見れば、鈴は一夏を助けたい。今までの事を償う意味で恩を返す意味で一夏の力になりたい、と。

「お願い一夏……これ以上、自分を責めないで、これ以上、貴方自身を苦しめるような事をしないで」

鈴は寂しそうに言葉を述べる。それを聞いた一夏は瞳を揺らぐ。一夏は鈴の言葉に反論出来ないでいる。

鈴の言葉には意味がある。それも、自分が弱気になっっている事を意味している。鈴の言ってる事は正しかった。

これには一夏は戸惑うも一夏は諦めたように話した。最早、彼女の言う事を聞くしかない。楯無の事もあるが彼女から楯無を立ち直らせるにはどうしたら良い事のかや、自分はどうすれば良いのかも。

「判ったよ鈴……実は……」

そして、一夏は鈴に全ての事を話した。が、ある事だけは鈴には言わなかったが全てを話した。

第71話

「成る程ね……その人はロシア政府の件で自分はロシア代表になって後悔しているのと、どうすれば良いのかは判らないのね?」

鈴は一夏から自分と楯無に起こった出来事を話した。しかし、その中には一夏が人を殺した事や楯無の身内に遭った出来事のせいで人を殺した話はしていない。

実は、一夏は楯無とはどう接したら良いか判らなくいのと、楯無が何を考えているかは判らないでいる。

そうだろう、一夏は女性の気持ち等判らない。例え楯無でなくても、隣にいる鈴や、毛嫌いしている筈に、今現在絶縁状態に等しい千冬ー彼女達が一夏の事を想っていても、一夏は彼女達の気持ちを理解していないだろう。

それは本題ではないー本題は、楯無がロシア代表になったのと同じ時に、元代表だった人が自殺した事、エレーナ先生のその妹、エレーナの姉妹の身に不幸な出来事が遭った事を一夏は全て話した。

どれも、自分が解決出来る本題ではない。元ロシア代表の人やエレーナが自殺した件はロシア警察が調べ終わった後の為解決している。

反面、本題ではないが楯無の件が残っている。それは一夏にとって最大の問題であり、障壁とも思える問題。

虚から聞いたが楯無は当主としての自信を無くし、更には突然、不思議ちゃんになったりと訳の解らない行動を始めた。

これには一夏も戸惑い、悩みを抱える。それを今、鈴に吐き出す形で語り終えたのである。

「俺、解らなくなっただよ……俺は更識の為にちゃんと向き合っているのか? ちゃんと自信を付けさせているのか? ってな」

「一夏……」

鈴は哀しそうな眼で一夏を見詰めるも、一夏は顔を両手で覆い隠す。

それは一夏がプレデターから闘う為や狩りの仕方を教えられ、精神

面が強くなった反面、友情や家族の事、そして更識楯無と言う、たった一人の少女を助けているのかと、自分に疑問を抱き始めていた。

一夏は今にも泣きそうなのか、顔を両手で覆い隠している。一夏自身が弱気になっているのだろう。彼はプレデターに鍛えられていながらも一人の人間。

一夏は完璧な人間でありながらも完璧な人間ではない。嫌、完璧な人間程、誰かに頼りたいと言う強い気持ちがあるからだ。一夏はその一人でありながら、今まさに弱気になっている。

そんな一夏に、鈴は声をかけた。

「そんなの、誰かに頼りなさいよ?」

鈴の言葉に、一夏は驚き、両手を下ろすと、鈴の方を見る。鈴は少し笑っていたが言葉が続けるかのように言葉を述べる。

「そんなの誰かに頼りなさいよ一夏、何でもかんでも一人で背負うような事はしちや駄目よ?」

鈴は人差し指を軽く左右に振る。

「一夏、人はね一人で生きて行く事は出来ないわー誰かに、周りに頼ってこそ成長する者よ? それに女性の悩みは女性から訊くのは当たり前よ?」

「でも……お前は更識を自信つける自信はあるのか? 俺でも無理だったんだぜ?」

「だからよ?」

鈴の言葉に一夏は首を傾げる。が、鈴は言葉が続ける。

「だからよ一夏? それに更識って人は貴方に対してあんな……いえ、それ以上は言えないけど、貴方から自信をつけるよう言われたから、彼女は貴方に恩があるからこそ、あんな行動をしたと私は思うわ」

「更識が……俺に?」

一夏は何故か戸惑いながらも自分を指差すと、それを見た鈴は呆れて溜め息を吐く。

「貴方は馬鹿なの? 更識さんは貴方に恩があるからあんな行動をしたとさつき言っただじやない?」

鈴は呆れながら訳を話す。それは一夏が女性の気持ちを理解して

いないと言う事も意味していた。これには鈴も呆れるどころか、彼は何処まで鈍感なのかを疑ってしまう。

嫌、今は一夏に楯無に件の解決とも言える回答をするのが先であり、鈴は呆れながらも言葉を続ける。

「良い一夏？ 女性の悩みは女性に訊きなさい。女性の気持ちは女性がよくわかる物よ？ 男性がよく解る物じゃないわーそれに……」

鈴は哀しそうに俯く。そんな鈴に一夏は疑問を抱き訊ねると、鈴は我に返り表情を晴らすと首を左右に振る。

「な、何でも無いわ！ そ、それに更識さんには知り合いはいるんでしょ？」

「あ、ああー！ 黛先輩に虚先輩ー！ 後は、のほほんさんに簪と言う更識の妹かな？ それ以外の交友関係は判らないな……」

一夏は楯無の女性関係者の者達の名を言う。因みにのほほんさんとは本音の事であり、簪は前に楯無から聞いた為に逢ってはいないが教えて貰った。

それに、一夏の回答に鈴は考える。

「そう……でも、それだけで充分よー！ ねえ、一夏にお願いがるの？」
「俺にお願い？」

一夏の言葉に鈴は頷く。

「ええ、一夏にはその人達に更識さんを元気づける為に力を貸してつて言っ頂戴、私は更識さんの方を何とかするから」

「何とかって……鈴は更識に用があるのか？」

「ええ、ちよつとね……」

鈴は再び哀しそうに俯く。何故なら、鈴は楯無に訊きたい事があった。それは楯無が一夏が好きなのかを訊ねたかったのだ。

一夏からあんな行動をしたのは、楯無が一夏に好意を寄せているような行動だと、鈴は思ったのである。もしそれが本当ならば、鈴にとって恋のライバルであり、超えたい存在。

本来なら楯無自身から訊きたいが今は一夏の悩みを解決する為に、楯無に自信をつける為に行動しなければならぬ。

ー！ その話はいずれ、楯無と一対一の話になる時に訊ねよう。だが

今は、その話は、隅に置いておこうー。

鈴はそう思いながらも頷くと、再び表情を明るくすると顔を上げ、一夏に言った。

「どう一夏？ 少しは自信がついたかしら？」

「あ……ああーそれにありがとな」

鈴の言葉に一夏は少し肩の荷が落ちたかのように微笑むと、鈴の頭を撫でる。

一夏の突然の行動に鈴は瞠目しながら頬を少し赤くするもすぐに一夏の行動を受け入れる。刹那、鈴は目に涙を浮かべる。

鈴にとって一夏と二人きりになれた事に喜びを隠せなかった。それは二度目の再会とは違い、今回は学園での再会。それも何時でも逢えると言う事実に喜びを隠せないでいる。

鈴にとって、隣にいる青年は初恋の相手ー自分を中国人だからといって周りから苛められていた自分を助けてくれた恩人でもある。

願わくば、ずっとこのまま時が止まって欲しいーたとえ一瞬でも良い……このまま、彼と一緒に居たい。鈴は今、そう願っていた。

「おい、貴様、一夏に何をしているんだ!？」

しかし、それを潰す者が居た。二人は声が出した方を見ると、剣道着を身に纏い、竹刀を片手に持っている箒がいた。

何故剣道着を着ているかは判らないが恐らく部活の早朝での訓練である場所へ行く頃か帰る頃なのだろう。勿論、どちらかは判らないが箒の表情は怒りに満ちている。

「誰よあんた?」

「ちっ!」

鈴は箒が誰なのかを判らず戸惑う一方、一夏は舌打ちをする。最悪な奴に逢ってしまった、と。

そんな二人が何を考えているかも判らない箒は、一夏と鈴が座っているベンチへとズカズカと歩み寄り、ベンチの近くにまで来ると、一夏に訊ねた。

「おい、一夏!? この女は誰だ!? それにお前は誰だ!？」

箒の言葉に鈴はたじろぐも、一夏はイライラしながら答えた。

「彼女は鈴——俺の幼なじみだ」

「なっ!?!」

一夏の言葉に箒は信じられないと言わんばかりの表情を浮かべた。が、箒が驚いたのは、一夏には自分の他にも幼なじみが居た事だろう。箒から見れば幼馴染は自分だけだと思っていたからだ。

そんな箒を他所に、鈴は一夏に訊ねる。

「ねえ一夏? この人は誰? 知り合いなの」

鈴が訊ねると、一夏は首を左右に振ると、こう答えた。

「嫌、知らない——此奴は俺に付き纏っている奴だ」

「なっ!?! 一夏、お前は何を言ってるんだ!?! 私達は幼馴染みではないか!?!」

箒は慌てながら反論する。が、一夏は険しい表情でそれを否定する。

「何が幼なじみだ。お前は俺に勝手に付き纏っては、俺に好きでもない剣道をやらさせていたじゃねえか——それにお前は俺が嫌だと言ったら竹刀で叩こうとしたじゃねえか!?!」

「あ、あれはお前が私の言う事を聞かなかったからではないか!?! どう見てもあれはお前が悪い!」

「っ——いい加減にしろよ!?!」

一夏の叫び声に鈴と箒は肩を竦めるも、一夏は舌打ちすると、鈴を見る。

「行こうぜ鈴、こんな奴と話しても時間の無駄だ、それよりも勇人や止を紹介したいから寮へと来てくれないか?」

一夏の言葉に鈴は戸惑うも、一夏は鈴の手を掴むと、立ち上がる。鈴も一夏に吊られて立ち上がるも一夏は鈴を連れて寮へと戻る。

箒とすれ違ったが一夏は箒を見なかった。

「一夏……っ!?!」

箒は一夏が自分を見なかった事に愕然とした。それに一夏と鈴は寮へと戻る為に歩いていたのか少し離れた場所にいた。

しかし、箒は表情を険しくするも、こう思っていた。一夏は自分の物だ——更識やあの女の物ではない、と。箒は振り返ると、竹刀を振

り翳しながら一夏の近くにいる鈴目掛けて脳天を叩こうとした。

「貴様あーっっっっ!!」

箒は怒りに身を任せて竹刀で鈴を叩こうとした。

「っ!?! 鈴!?!」

一夏と鈴は箒に気付くも、一夏は鈴を突き飛ばす。刹那、鈴が尻餅をついた直後に、何かを叩く大きな音が聞こえ、同時に一夏は箒の竹刀で頭を叩かれ、叩かれた所から出血している。

そして、一夏は仰向けに倒れ、そのまま意識を失った……。

「一夏っっっっっっっ!!」

そして、それを見た鈴の悲痛の叫び声が辺りに響き渡った……。

第72話

あれから三十分後、ここは保健室。保健室のベッドには、眠っているか気を失っているかは解らない一人の青年が仰向けで横になっていた。その青年は一夏であり、頭には何故か包帯を巻いている。

一夏が横になっているベッド近くには、一夏を心配そうに見つめている楯無と、向かい側には楯無同様に一夏を心配そうに見つめている鈴がおり、楯無の後ろには箒に怒りを覚えながらもそれを抑えつつ一夏を心配そうに見つめている止の三人がいた。

三人が三人、一夏が目覚める事を期待している反面、一夏がこのまま目覚めないのではと危惧している。何故、こんな事になったかは一夏が三十分前に、箒が振り翳した竹刀を頭から受けたのである。

三十分前、一夏は鈴を突き飛ばす形で庇うと、鈴の代わりと言う意味で箒が振り翳した竹刀を頭から受けた。刹那、叩いた音は大きく、同時に一夏の頭から赤い血が辺りに飛び散り、一夏はそのまま気を失った。

これには鈴も、箒が最悪とも言える行動に驚く前よりも、一夏が自分を庇った事に驚くよりも、一夏が頭から血を流して気を失っている事に驚き悲痛の叫び声を上げた。

一方、箒は一夏が自分が振り翳した竹刀を受けて頭から血を流しながら気を失っているのを見て、自分は鈴をやる筈だったのに一夏が受けた事に驚きながら恐怖で顔を歪め、竹刀を落とすと身体を震わせながら自分を抱き締めると膝を突く。

勿論、そこからは近くにいたとある者が鈴の叫び声に反応し、その者が一夏をこの保健室にまで運んだのである。

それに楯無と止は少し前に一夏が倒れたと聞いて慌てて駆け付け、鈴は付き添いで最初から保健室にいた。

そして箒は今、とある者達と一緒にいて、勇人は最初は保健室に居たがとある理由で保健室から出て行った為に此処には居ない。

「一夏……目を覚まして」

鈴はそう呟きながら、眠っているか気を失っているかは判らない一

夏の手を両手で包むように掴む。

「一夏君……死なないで……」

一方、向かい側にいる楯無も一夏を心配してそう呟きながら、一夏のもう片方の手を両手で包むように掴む。

一夏から見れば両手に華と言えらるだろうが今はそんな事を言っている場合ではない。一夏は今、色んな意味で生死の境をさま迷っている。もしこのまま死んだら、まずい事がある。

それを知ってるのは、近くにいますと、此処には居ない勇人の二人だ。止は一夏を見て、少し困惑していた。

「まずいな……、一夏がこのまま死んだら、エルダー達が怒るよ……」

止はエルダー達の事を思い出す。嫌、止はエルダー達よりもとあるプレデターを思い出す。一夏が師匠として義理の兄として慕っているケルティック。

彼はチョップパーやスカーと共に成人の儀式をクリアしたかは判らないが今何処で何をしているかは判らない。それだけならまだしも、ケルティックは一夏が死んだと知ったらどう反応するだろう。

プレデターらしく無言かつ動揺しないようにその死を受け入れるのかーそれとも、怒りで我を忘れて、プレデターの掟を破ってまで箒を殺しかねない。

止は不謹慎と解りながらもケルティックがどう反応するのかを心配をしてしまう。嫌、今は一夏が目覚めますのを待つしかない。

止は内心何も言わないで一夏を見守る。このまま時間だけが過ぎて行くのだろうかーそんな事は無かった。

この重苦しい空気を良い意味で打ち破ったのは鈴の発した一言だった。

「所で、貴女は更識さんと言いましたよね？」

「えっ？」

鈴は楯無に訊ね、楯無は不意に呟く。すると、鈴は顔を上げて楯無を見据えるーその表情は険しいが何処か哀しみが混じっている。

鈴は楯無にある事を訊きたかったーそれも直ぐだった。因みに

楯無と鈴は数分前に自己紹介し終えた為に問題はない。

「更識さん……貴女は一夏の何ですか？」

「な、何を言い出すのふうちゃん？」

「私は単刀直入に言ってるのよ……私は貴女が一夏の何かを」
「……………」

楯無は何も言えなくなった。何故なら、楯無は一夏とはとある理由で知り合った。勿論、出逢いは秋葉原であるがそれ以降は何も言えない。

一夏は人を殺した……それも自分が関わっている事と、死刑になっても可笑しくない程沢山の人を殺したのである。楯無はそれを、一夏の幼馴染みである鈴には言えなかった。

言えば、鈴は恐ろしい衝撃の事実と哀しみにくれるだろう。それだけは避けたかった。しかし、何れは解る事だ、何れ話さなければならぬ。

それに、楯無は別の意味で教えなければならぬ事があつた。それも別の意味と言うよりも、鈴が別の意味でショックを受けるだろう。楯無はこの事を言いたくはなかったがこれも何れは解る事だろう。たとえ誤解であろうと、自分も一夏同様悪役を買って出よう、と。

楯無は瞑目すると何かを決意したように頷くと、一夏の手を包むように掴んでいた両手の内の片方の手だけを一夏から離れさせると、その手を自分の胸に当てながら瞼を開け、こう口を開いた。

「さっきも自己紹介したかもしれないけど、私は更識楯無……この学園の生徒会長にして……織斑一夏と交際しているわ」

「……………」

楯無の言葉に鈴は何も判らないといった表情を浮かべる。鈴は今、思考が停止していた。楯無が一夏と交際している？ あの小念仁ぼくねんじんの一夏に女性がいた？

鈴から見れば信じられないと言うよりも、自分が失恋したと言う事実じつじに打ちのめされていた。鈴は哀しそうに俯く。

「そう……なんだ」

鈴は微かに呟く。刹那、鈴は涙を流し、鈴の涙が鈴の頬に伝う。鈴

は泣いていた。勿論、それを見た楯無は自分のした事に後悔しながら、鈴から目を逸らし下唇を噛む。

一方、止は鈴が泣いている事に気付きながらも哀しそうに瞑目した。止は最初から解っていた。

一夏は楯無を箒から守る為に嘘の告白をした事を勇人から聞いたのである。止自身は驚いたが止は別に一夏が楯無と嘘の交際をしている事に怒ってる訳ではない。

止は只、一夏のしてる事は間違いである事に気付いている。そんな事をして周りに悪役を買って出るようなもの。

現に一夏は兎も角として、楯無は箒から怨みを買われている。箒から見れば失恋した事に諦めていないのか未だに付き纏っているが鈴の場合は違う。

鈴は失恋したと言う事実には打ちのめされている。が、それが本当の交際だったとしても鈴は失恋した事に変わりはない。

誰一人、幸せになれる訳ではない。例えるなら、二人の女性が一人の男性に恋をしているとしよう。もしその男性が二人の女性の内、片方を選んだ場合、選ばれた方の女性は喜び、選ばれなかった方の女性は哀しむ。

それに男性がどちらを選ばずに第三者の女性を選んだ場合、どちらの女性も哀しむのも事実。

全ての女性が誰一人、恋が完全に実ると言う訳ではない。実る恋があれば実らない恋があるのも事実。それを止は楯無が嘘の交際を鈴に言ったとしても、止は何も言わなかった。

止は二人のやり取りを見守る事しか出来なかった。

「そうなんだ……一夏に彼女が……ははっ」

鈴は泣きながら笑うと、一夏の手を放すと、両手を目に溢れ出る涙を拭う。

「あれ何でだろ？ 涙が止まらないわね……止まらないわよ……」

鈴は笑いながら涙が止まらない事に疑問を抱く。鈴自身も解っていた。

自分は失恋した。鈴はその事実を自分でも解っていた。だが、それ

も鈴自身が一夏と楯無が嘘の交際を知らない為、尚更酷い話である。それでも、鈴は自分が失恋したと思っっている。その為、鈴は何時止まるかも判らない涙を拭い続けていた。

「何ですよ……やっぱり止まらないわよお……うぐっ、えぐっ」

鈴は嗚咽を上げる。それを見た楯無は目を閉じ僅ながらに涙を浮かべる。楯無自身も鈴に悪い事をしたと気付いていた。

自分は何を言われても良い、これも罪滅ぼしと言う訳ではないが楯無は自分もまた、鈴を失恋させるような事を言ったのも事実だ。

楯無と鈴。片方は、楯無は一夏と嘘の交際をしながらも鈴を傷付けるような嘘を言った人物。鈴は楯無の嘘のお陰で失恋した事を打ちのめされ泣いている。

どちらも悪い訳ではないがどちらも一夏に想いを寄せている。が、それもまたほんの一時なのかもしれない。

そして、保険室では鈴の嗚咽の声が木霊していた。

「止めて下さい織斑先生!! 教師としてあるまじき行為です!!」

「放せ山田先生!! こいつは、私に……私に一夏に何が遭ったのかを教えてくださいなかつたからだ!!」

ここは生徒指導室。ここには織斑千冬と山田真耶。真耶に羽交い締めされながらも泣きながら憤怒の形相を浮かべている千冬と、怒る千冬を慌てながらも羽交い締めして何とか宥めようとする真耶がいた。

しかしそこにはもう一人、別の人物がいた。その人物は、千冬に頬を殴られた横向けに倒れながら気を失っている勇人がいた。

第73話

「あゝもう大丈夫なの?」

鈴が失恋していると思ひ泣き始めてから数分後、止は恐る恐る鈴に訊ねる。鈴は未だ泣いている訳ではないが瞑目しながら鼻を吸り、止に答える形で頷く。

一方、楯無はもう泣いてはいないが鈴から目を逸らしている――鈴への罪悪感なのだろう。楯無は罪悪感に苛まれていた。

鈴に嘘を付いたのと、鈴を悲しませてしまった事だろう。勿論、楯無は別に鈴を悲しませる訳ではなかった――嫌、既に悲しませている。

楯無は心の中で「ごめんなさい」と呟く。

「そっか……それにしても貴女が一夏の幼馴染みね……あの……篠ノ之だっけ? 彼奴も一夏の幼馴染みって言ってるけど、一夏が違うって言ってるけど」

止は鈴を見て感心と、箒に嫌悪感というよりも疑心感を抱くような事を言う。止から見れば初対面かもしれないが一夏から鈴の事を聞いている為、逢う前に知っている。

そんな止に鈴は瞼を開き、顔を上げ、止を見る。鈴の表情は何処か悲しいが何処か疑問を浮かべている。が、目尻には涙の痕が残っている。

「それはそうだけど、貴方は霧崎止って言うの?」

「ああ。さつきも自己紹介したけど俺は霧崎止、一夏とはちよつとした縁で友人だ」

「そうなんだ……それよりも貴方に訊きたい事があるわ」

「何かな?」

止は首を傾げると、鈴は何故か俯く。止が心配して声を掛けると、鈴は俯きながらも何かを決意したかのように頷き顔を上げると、訊ねたかった事を止に言った。

「一夏が、私達の前から消えた空白の三年間、一夏に何が遭ったのかを教えてください」

「えっ?」

鈴の質問と言える言葉に止は目を丸くする。鈴は止から、一夏の空白の三年間を止から訊きたかったのである。

最初、鈴は一夏と再会した際、一夏と再び逢えた事に喜びを隠せなかつたが一夏が三年間何処に行つてたのかまでは聞いていなかった。

あの時は鈴は一夏と再び逢えた事に喜んでいた為に、そんな事を聞き忘れたのだろう。再びこの学園で再会した際も、聞き忘れていた。

しかし、一夏に空白の三年間を訊く前に、一夏は鈴を庇う形で箒の竹刀により気を失つてしまう。これでは一夏から三年間の事を訊く事は出来ない。

例え訊いたとしても、一夏はその事を教えてくれるとは限らない。それならば、一夏の親友でもあり、一夏の空白の三年間を知っているであろう止から聞こうと、鈴は思った。

勿論、それは間違っている事だ。止から訊いても一夏が喜ぶ訳もなく、逆に自分や一夏や勇人が困る。自分達はプレデター達に鍛えられたのだ。

もしも自分が話せば、彼等の存在まで話す事になる。それだけは嫌だった。止は鈴の質問には、こう答えた。

「悪い、それだけは無理だ」

「そんな……どうしてよ?! 私は一夏に何が遭つたのかを気になるのよ!」

これには鈴も困惑するが止に詰め寄る事まではしなかった。そんな鈴に、止は首を左右に振ると、悲しそうに目を附せ、言葉が続ける。

「俺が言うのも何だけど、それで一夏は喜ぶのかな?」

「……えっ?」

止の言葉に鈴は目を見開く。そんな鈴に止は訳を話す。

「なあ、凰さんは一夏の過去を知つてどうするの?」

「えっ……そ、それは」

止の質問に鈴は戸惑いを隠せない。

「解らないみたいだね? それはそうさ? 人は誰しも、語りたくはない過去を持つてるよ? それに一夏は凰さんから過去を教えてく

れと言われても、教える気はないと思うんだ」

「そんなの解んないわよ！ それに一夏を心配してるのよ！ 一夏はずっと一人で辛い思いをしてきたのよ！ だか」

「それは違うー！」

鈴が言い終わる前に止が叫んで遮る。それを聞いた鈴は肩を竦めながら一瞬だけ目を閉じてしまう。

楯無は目を閉じなかったが何も言わず、止と鈴のやり取りを見守る。一方、鈴は恐る恐る目を開け、止を見る。

止は未だ悲しそうに目を附せていた。刹那、止は一瞬だけ瞑目するが直ぐに瞼を開き、言葉が続ける。

「嵐さん、貴女をしている事は間違ってる。人は皆、沢山の過去を持つてる。その人自身が楽しかった事や辛かった事等の思い出は沢山あるー！なのに中には自分が思い出しくもない過去を持つてる人もいるんだ。その人自身の辛かった過去を思い出さそうとする何て間違ってるー！貴女は何がしたいの？ 貴女は只、一夏を助きたいから俺から一夏の過去を訊き出そうとしたんでしょ？」

「そ、そうよ……私は一夏を」

「一夏はそれで喜ぶの？ 一夏は自分の辛かった過去を嵐さんに話す勇氣はあるの？ それは俺には判らないけど、一夏は絶対に話さないよ」

止は言葉を述べるがそれは止自身が一夏を気遣う為や、一夏の空白の三年間やプレデター達の存在を鈴に教える訳にはいかない為でもあった。

それに、一夏の事を鈴に教えても一夏は喜ばない以前に一夏を苦しめ、親友を裏切る事をも意味している。

止はどちらも取るつもりはなかった。あつたとしても、止は死を選ぶ。止はそう覚悟していた。

「嵐さん……俺が言える事が只一つ、一夏を苦しめないでー！彼を、一夏を想うのなら、一夏を友人と接したいのなら、彼を見守るか助けて上げて」

止はそう言うと、悲しそうに俯き下唇を噛む。

「身勝手なのは判るよ……でも、一夏と長い時間一緒にいるのは貴女だー俺は君に嫉妬している訳じゃない、俺は一夏が苦しんでいるのを見たくないんだ……彼は俺達に頼る事もあるけど、何でもかんでも一人で背負おうとしている……姉の事や篠ノ之の事だ」

止はそう呟きながら身体を震わせる。

「あいつは俺達のリーダーとして、復讐とも言える対象達に苛立ちを隠しているけどあいつは我慢しているー二回ぐらいキレたけど、彼奴は自分の姉が俺や勇人から、彼奴自身の過去を訊こうとした事を勇人が教えたら、彼奴は姉への怒りを露にしていた……!」

止はそう言い終えると顔を上げ、鈴と楯無を交互に見る。その表情は何処か寂しい。

それでも、止は最後までも言える事を鈴や楯無に言った。

「貴女方にお願ひがあります。一夏を助けて下さい! 鳳さんは解るか解らないかのどっちかは判らないけど一夏は本当は優しい奴なんだ! あの時、火事の中で死に掛けていた俺を助けてくれたのは」

「馬鹿野郎が……!」

止は何かを言い掛ける前に、とある人物の声が聞こえた。この突然の事に止、楯無、鈴の三人は驚きながら声が出た方を見る。

そこはベッドからだった。そこにいるのは勿論、一夏である。さっきの声の主は一夏だった。

「一夏!?」

「一夏君!」

止達三人は一夏を呼ぶと、一夏は瞼を開けるが表情は険しい。そんな一夏を見た止達は表情を明るくしながら再び一夏の名を呼ぶ。

「うるせえよ……それに、痛っ」

一夏は頭に走る激痛を堪えながら起き上がる。ーあっ! ー。一夏が起き上がるのを見た楯無と鈴は慌てて、両側から一夏が起き上がるのを手伝う形で支える。

「一夏……何時から起きてたの?」

そんな一夏に止は恐る恐る訊くと、一夏は険しい表情を浮かべながらも答えた。

「お前が鈴から俺の過去を訊かされた所まで」

一夏の言葉に止は「うぐつ!？」と言いなながらバツの悪そうな表情を浮かべる。一夏には最初から全てを聞かれていた。

これには止も顔を赤くするが一夏は表情を険しくしたままである。一夏は止に何か言いたそうだった。

止は止で一夏が何を言うのかを気にしていた。勿論、止は一夏が何を言うのかは判らないが一夏の表情を見れば一目瞭然だろう。

「止……」

「あ、ああ」

止は一瞬だけ身体を震わせる。――……ありがとな……。刹那、止は耳を疑う。だが一夏の表情は何処か優しかった。

「い、一夏、お前今なんて?」

止は恐る恐る訊くと、一夏はムツとした表情をするが頬を赤くしながら頬を掻く。

「だからよ……ありがとなって……お前が更識と鈴に俺を助けてくれたと言った事にありがとうって言いたいんだよ……」

「い、一夏……」

止は一夏の言葉に言いたい事を言えず、彼の名を呟く。

「だからよ俺は、その、お前に感謝してんだよ……俺はお前が俺をそこまで心配しているんだな……」

「あ、ああーっく!!」

止は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしながら顔を両手で覆い隠しながら声を上げる。

一方、一夏は恥ずかしそうに俯く。

「な、何か私達」

「お、男達の恥ずかしい友情を見せられたようにも思えるわね?」

そんな二人に楯無と鈴は蚊帳の外だった。しかし、保健室内に止の恥ずかしさのあまりの声が木霊する。

だが、そんな止に一夏は俯きながらも、三人に見せないように少し微笑みながら微かに呟いた。

――ありがとな、止――と。

第74話

「取り敢えず、教室に戻るか？」

少し経った後、一夏は楯無、鈴、止の三人に訊ねる。

「そうだね、そろそろ一時間目の授業が始まる頃かもしれないからね？」

一夏の問い掛けに止は頷き、その後訊ね返す。

「それにしても、一夏は大丈夫なの？　まだ頭が痛むんじゃないの？」

鈴は一夏を心配し声を掛けると、一夏は鈴を見て微笑むと首を左右に振る。

「大丈夫だー俺は修ぎ……嫌、頭は頑丈な方だからな？」

「そう……だったら、いえ、取り敢えず私は先に戻るわね？」

鈴はそう言うと、一夏に背を向ける。後ろから一夏の自分の名を呼ぶ声がしたが鈴は肩越しで一夏を見る。鈴の瞳は何処か寂しそうだった。

それでも、鈴は俯くと一夏に「じゃ、後でね」と言い残し、足早で保健室を出ていく。そんな鈴の様子に一夏は何も解らず首を傾げ、楯無に至っては哀しそうに俯き、止に至っては何も言わずに目を逸らす。

一夏は兎も角として、二人は鈴の様子とその原因は解っていた。鈴は失恋したと思っている。

それは一夏が楯無を箒から守る為の嘘の告白をしたからである。その所為で鈴はショックを受けているのだ。そうなったのも一夏や楯無が原因だろうがそれを知っているのは止と、此処にいない勇人の二人だけ。

一夏や楯無は兎も角として、彼等もまた、鈴を騙しているような事をしてに過ぎない。

「鈴の奴、どうしたんだ？　何か悩んでいるように見えたけど……なんか知らないか？」

一夏は二人に鈴の事を訊ねると、楯無は下唇を噛みながら俯き、止は困惑しながらも「そうかな……」と答えた。二人は知ってるが一夏

は生憎未だ解らないでいる。

「どうしたんだろ鈴？ ……それに……」

一夏は表情を険しくする。一夏はある人物を思い出した為に表情を険しくしたのだ。その人物とは、篠ノ之箒——自分がこんな目に遭ったのも全て彼女のせいである。

一夏は二人に箒はどうしたのかを訊ねると、保健室の扉が勢いよく開き、一夏達三人は扉の方を見る。

扉を開けたのは鈴ではない。扉を開けたのは、肩で息をしながら汗を掻いている虚だった。虚は俯いているがその表情は何か焦っている。

「う、虚ちゃん、ど、どうしたの？ そんなに汗をかいて？ な、何か遭ったの？」

楯無は虚の様子に只ならぬ様子に疑問を抱きながらも訊ねる。すると、虚は荒い息をしながら言葉を述べる。

「じ、実はお嬢様、た、大変です！ お、織斑先生が、は、勇人君に——「勇人がどうしたんだよ！」」

虚の言葉に『勇人』と言う人物の名が出るや否や、一夏が驚きを隠せずそう叫ぶ。一方、止も勇人に何が遭ったのを気にしているのか苦虫を噛み締めたような表情を浮かべている。

しかし、二人は勇人に何が遭ったのかを気にしていた。勇人だけならまだしも、織斑先生——つまり、千冬の名前もあった。

勇人と千冬の間にか遭った。二人から見ればそう結論付ける事を意味しているだろう。嫌、今は虚が言いたいのかを二人は気にしているが楯無は怒りを隠せない一夏を支える。

「お、落ち着いて下さい——じ、実はお、織斑先生が勇人君に暴力を振るったそうなんです！」

「なっ!?!」

「えっ!?!」

虚の言葉に一夏と止は眼を見開きながら声を、楯無は声を上げる。千冬が勇人に暴力を振るった？ それは三人から見れば信じられない事で耳を疑っているだろう。

それ以前に勇人が何故、千冬から暴力を振るわれる事になったのか、何故千冬は一介の教師でありながら一介の生徒である勇人に暴力を振るったのだろうか。

今は色々あるが今は色んな意味で驚きを隠せないでいる。

「な、何が遭ったのよ虚ちゃん!? 何故織斑先生が!?!」

「私にも解りません! ですが今は織斑先生は山田先生や他の先生方が落ち着かせていますが勇人君は未だに……」

「あの女……っ!!」

「絶対に許さないよ!」

虚が何かを言い終える前に一夏と止の怒りの籠った叫び声が木霊し、それを近くにいた楯無と虚は一瞬だけ驚き、二人を見る。

一夏は憤怒の形相を浮かべ、止は一夏程ではないが少し怒っている。

「あの女、ぶっ飛ばしてやる……っ!!」

一夏は千冬に怒りを隠せず起き上がる。止と共に保健室を出ていこうとした。

「駄目よ一夏君!!」

「いけません霧崎君!!」

そんな二人に、楯無は一夏を、虚は止を宥める。楯無は一夏の背中にしがみつき、虚は止の前に出て落ち着かせる。

「放せ更識! 何故止める!?!」

「そんな事しても貴方や止君はどうなるのよ!?!」

「そんなの関係ねえ! あの女は勇人を、俺達の仲間の手を上げたんだぜ!?! そんな許される事じゃねえよ!」

「それは私も解ってるわ! でもそんな事をしても貴方や止君はどうなるの!?! 貴方達は停学か最悪、退学になるかもしれないわよ!?!」

「それも関係ねえ! 仲間が理不尽に傷付けられたんだ! 例えてめえだろうが……っ!! ああっ!」

刹那、一夏は頭に微かに痛みが走るのに気付き、頭を抑える。

「一夏君!?!」

一夏を見た楯無は驚きの声を上げる。一方、止や虚も一夏の様子に

気付き、止は「一夏!?!」と言いながら慌てて、一夏の元へと駆け寄ると、虚も一夏の方へと駆け寄る。

その間に、楯無は一夏にしがみつくの止めると、一夏をベッドの上に寝かせた。

「痛つ……クソツ、なんでこんなに頭が痛むんだ?」

一夏は頭に走る痛みを堪えながらも手で抑えつつ歯を食い縛ると、再び起き上がろうとした。

が、それを楯無が一夏をベッドに寝かすように押さえる。

「寝てなきや駄目よ!」

楯無は一夏を心配し声を上げる。一方、止と虚は一夏のベッドの近くまで来ていたが二人も一夏を心配しているのか、困惑している。

「そんなのは俺には関係ない……! 俺はあのクソ教師が、あの女が勇人に、俺や止の大切な友人に暴力を振るっただぞ?! そんなの許される筈もねえだろうが!」

「それは解るわよ!? でも貴方が勇人君の為に織斑先生に何かをしたら、勇人君は喜ぶの!?!」

「そんなの解んねえよ! 俺は仲間の為に……」

「そんなの間違ってるわよ!!」

一夏が何かを言い終える前に楯無が遮る形で叫ぶ。それを聞いた一夏や止は突然の事に瞠目し、虚は驚く。

「さ、更識?」

「お、お嬢様?」

一夏と虚が楯無に訊ねると、楯無は肩を震わせながら怒りと悲しみが混じったような表情で一夏を見詰めていた。

「駄目よ一夏君……そんな事しても、貴方の得にはならないわ……! いいえ、私は貴方を心配しているからそう言ってるのよ!」

「な、何を言ってるんだよ?」

「まだ解らないの!? 貴方は何で自分を大事にしないのよ!? 何で自分が得にもならない事をしようとするのよ!? 私はそこが解らないわよ!」

楯無は静かに怒りながら言葉を続ける。そんな楯無に一夏は何も

言わず、止と虚は楯無の言葉に耳を傾けていた。

「さつき止君が言ったのを貴方は聞いたか解るか解らないかは知らないけど、止君が言ったじゃない……貴方は止君や勇人君の親友でもあるけど貴方は何で自分一人で得にもならない事をするの？ 貴方は何で、自分一人で背負うとしてるの？ ……貴方はあの時、私に言ったじゃない……誰かに甘えろって……それなのに今の一夏君は誰にも甘えてないじゃない」

楯無はそう言った後、一夏の手を両手で包むように握る。

「一夏君……誰かに甘えて、私にも甘えて……それに勇人君の件は私や学園長に任せて」

「学園長？」

楯無の言葉に、止は首を傾げながらそう呟く。因みに学園長とは、この学園で一番偉い人の事である。刹那、楯無は目を閉じる。

「お願い一夏君、此処は私達に任せて……それにこれ以上、自分を苦しめるような事をしないで……お願い……お願いっ！」

楯無は瞑目しながら、そう一夏に懇願した。それは楯無の一夏を思うが故のお願いでもあった。

もうこれ以上、自分を苦しめるな、自分一人で背負うような事をしないでくれ、と。

楯無は一夏にそう言いたかった。そんな楯無に虚は少し微笑んでいた。虚は楯無の言動に少し喜んでいた。

「楯無は少しだけ自信を取り戻している……虚から見れば楯無が少しだけ自信を取り戻した事が嬉しかったのだろう。」

そして、そんな楯無の懇願に、一夏は無言で楯無を見据えていたがやるせない気持ちを抑えつつ、楯無から目を逸らし下唇を噛むと、不意に呟いた。

「……勇人を頼む……と。それは一夏は楯無の願いを聞き入れた事を意味していた。」

が、それだけでも、楯無から見れば嬉しかったのは言うまでもない。そして、数分後、楯無は一夏の姉、千冬と対立するような話をするのは楯無自身や千冬、周りも知る由もないのも言うまでもなかった。

第75話

「織斑先生、貴女は何故、自分の生徒に暴力を振るったのですか？」

その頃、生徒指導室では千冬と真耶、気を失っている勇人、そして第四者がいた。その人物は、四十後半か五十代くらいの女性であり、優しそうな顔立ちをしながらも表情は険しく、肌色の女性用スーツを身に纏っている。

その女性は、この学園の一番偉い人――学園長である。

勇人や真耶は兎も角、学園長と千冬は指導実 に設けられているテーブル近くにある椅子に腰掛けながら向かい合っていた。

一方、真耶は勇人に膝枕をしてあげながら勇人を心配そうに見つめており、勇人は未だ気を失っている。

また一方で、千冬は学園長の問い掛けに答えるどころか、俯いている。何故、こんな事になってるかは、千冬が勇人に暴力を振るったのである。

その為、学園長が此処にいるのも真耶が学園長が呼んだ為であり、学園長は千冬に問い質す為であるのと、勇人の親友達である一夏と止は元より、楯無を呼ぶ為に生徒会の人間である虚に保健室へ行くよう命令したのである。

虚が保健室にいる楯無を呼びに行ってる間、学園長は千冬に何故、勇人に暴力を振るったのかを問い質していた。

「織斑先生、貴女は何故勇人君に暴力を振るったのですか？ それだけ答えて下さい」「……………」

「答えて下さい！ 貴女は何故、勇人君に暴力を振るったのですか!? 幾ら人を教える立場の人として、生徒を教える教師としてあるまじき事をしたのですよ!?!」

千冬が無言のまま俯いている事に学園長は怒りを隠せない。それでも、千冬は何も言わず俯き続けている。そんな二人のやり取りを真耶は困惑しながら見つめていた。

刹那、生徒指導室を出入り出来る扉から音が聴こえ、学園長と真耶が扉の方を見る。

「失礼します」

外から女性の声が聞こえ、その後に扉が開く。外に、廊下にいたのは楯無と虚だった。二人は表情を険しくしているも扉を開けたのは楯無である。

「更識生徒会長に布仏さん、わざわざお手を煩わせるような事をして申し訳ありません」

学園長は申し訳なさそうに楯無に言うと、楯無は首を左右に振り、その後口を開いた。

「いいえ、後から判ったんですが虚ちゃんが急いで保健室へと来たのも、学園長が私を呼んだからだそうですね？」

「貴女の仰るとおりです。その為、布仏さんにはお忙しい事をさせてしまいました。改めて御詫びいたします」

学園長は立ち上がり頭を下げると、虚は困惑しながらも言葉を述べる。

「い、いいえ、それよりもお顔をお上げ下さい！ 私は学園長がお嬢さ……更識会長を呼んでくれと頼んだから、私は会長を呼んだままです。どうかお気になさらないで下さい！」

虚の言葉に学園長は顔を上げるが未だ申し訳なさそうな表情を浮かべている。刹那、楯無と虚は室内に足を踏み入れると、虚が扉を閉めた。

「さて、それよりも本題に戻りますが、織斑先生？」

学園長は再び千冬と向き合うと、千冬は困惑した表情で楯無を見据え続けていた。

「織斑先生、どうかなされたのですか？」

学園長は疑問を抱き訊ねるが千冬は楯無を見ながらある事を口にする。

「な、なあ、更識姉よ？ い、一夏はどうした？ 一夏は無事か!? 何とか言ってくれ！」

千冬は慌てながらも立ち上がり、楯無に詰め寄ろうとした。そんな千冬に学園長は怒る。

「お座り下さい織斑先生！ 言い方が悪いかも知れませんが今は織斑

君の安否よりも貴女が何故、勇人君に暴力を振るつたのかを訊いて
るのですよ!？」

「なっ!?! が、学園長!?! な、何を言ってるんですか!?! あ、貴女は一
夏の事等どうでも良いと言うのか!?!」

学園長の言葉に千冬は驚きながらも直ぐに学園長に怒る。千冬か
ら見れば、学園長は一夏よりも勇人の事を気にしているような発言を
した事に怒ったのだ。

それに、こうなつた経緯も全て千冬と、それ以前に一夏を傷付けた
筈に原因がある。何故なら最初は、一夏が保健室に運び込まれた際、
千冬は慌てて入ってきたが、保健室には楯無や鈴、勇人や止もいたの
である。

それだけなら未だしも、鈴は千冬を毛嫌いしており、勇人に至つて
は憎悪が籠つた眼差しで千冬を睨んでいた。そこまでは良かったが、
千冬は勇人と止に話があると言つたが勇人が一人で行くと言ひ出し
たので、千冬は勇人を連れて保健室を出ると、ある場所へと向かつた。

それが此処、生徒指導室であつた。が、千冬はある事を勇人に訊ね
るも、勇人は頑なに拒み、それが何回も繰り返される内に千冬はとん
でもない事をしてしまう。それが一夏を思うがあまり、何を言わな
い勇人に手を出してしまつた。勿論、勇人に手を出したと同時に、真
耶が突然生徒指導室へと入ってきたがその一部始終を見てしまつた
為、真耶は慌てて千冬を羽交い締めしたが勇人は気を失っていた。

話を戻そう。学園長の言葉に千冬は怒る中、学園長と口論してしま
い、真耶は勇人に膝枕している為、動けないが虚と共に千冬を落ち着
かせるが効果は無かつた。

そんな千冬を見た楯無はある事を口にする。

「学園長、差し出がましいんですが、私に時間をくれませんか?」

楯無が学園長に言うのと、学園長は楯無に訊き返す。

「何をですか?」

「いえ、私は織斑先生に話したい事があるので、私と織斑先生を二人つ
きりにさせてくれませんか?」

「お嬢様!?!」

楯無の言葉に虚は驚きを隠せない。が、学園長は冷静に再び訊き返す。

「何故ですか？ 貴女は織斑先生に話があるのですか？」

「はい、私は織斑先生と話がしたいのです。勿論、これは織斑一夏君に
関係する事です」

「一夏の事か!？」

千冬は再び詰め寄ろうとしたが学園長が一喝して千冬を黙らせる
と、学園長は再び楯無に言う。

「織斑一夏君に關係する事ですか？」

「はい、今の織斑先生は一夏君の事で頭が一杯です。その為、私は一夏
君に關係する事で織斑先生と話がしたいのです」

「それは私は構いませんが、いざと言う時、貴女に何か遭ったら困りま
す。現に……いえ、これ以上は止めておきます。それよりも貴女は大
丈夫なのですか？ 何なら私達も一緒に居てあげますが……」

学園長の氣遣いに楯無は首を左右に振る。

「大丈夫です。何か遭ったら私は自分一人で対処します。それに私は
今、非常に怒っています」

楯無は視線を千冬の方へと向ける。

「織斑先生のせいで、一夏君は今、やるせない気持ちを抑えていますか
ら……!？」

「さて、織斑先生、私と二人つきりになりましたね？」

「……………ああ、そうだな」

数分後、生徒指導室には楯無と千冬の二人しかいなかった。因みに
少し後に学園長は楯無を氣遣うも見守る事にし、真耶、虚は兎も角と
して勇人は気が付くと自分の置かれている現状に氣付くも、学園長は
虚と真耶に勇人を保健室へと連れて行くように言い、自分は生徒指導
室の外で待っている。

その為、この生徒指導室には楯無と千冬の二人しか居なかった。し
かし、どちらも険しい表情を浮かべている。どちらも殺伐とした雰囲気

気を醸し出していた。

「では、本題に入る前に織斑先生、一夏君は無事ですが先程、目を覚ましたよ」

「つ……そ、そうか」

楯無の言葉に千冬は安堵したのか胸を撫で下ろす。

「貴女から見ればそう思えざるを得ないでしょうーですが今は、私は貴女に一夏君の今後についての話をしたいのです」

「一夏の事か？」

千冬が訊ねると、楯無は軽く頷く。

「はい、貴女には今後、一夏君や止君、勇人君には関わらないでほしいのです」

「ーなっ!? ー。楯無の言葉に千冬は目を見開きながら言葉を失う。が、そんな楯無の言葉に千冬は怒る。

「な、何を言ってるんだお前は!? わ、私に一夏と関わるなど言いたいのか!?!」

千冬は楯無に怒るも、楯無は冷静に言葉を続ける。

「はい、私は貴女に一夏君に関わるなど言ってるのですー貴女だけではありません、篠ノ之箒ー彼女にも彼と関わらないよう警告させます」

「そ、そんなの認められん! 第一、私は一夏の姉であり、たった一人の肉親だ!! お前は私達姉弟の仲を引き裂くつもりか!?!」

千冬は怒りながらテーブルを叩く。バンと言う音が室内に木霊するも、楯無は未だ冷静に言葉を続ける。

「引き裂くつもりではありません、私は今の一夏君が貴女や篠ノ之箒を憎んでいる理由が解らないのですー私は一夏君を思っただけでそう判断したまでです」

「そんな事はない!! 一夏が何故私を憎んでいるのかは解っている! だからと言って何故、関わるなど言うのだ!?! そんなのは認められん!」

「認められないか認められるかは私にも判断出来ません、ですか現に

貴女は勇人君や止君から一夏君の過去を訊き出そうとしたみたいですね？ 何故そんな事をしたのですか？」

「お前に解るか……私がどれ程、一夏を心配しているのかを……お前に解って堪るか！」

千冬は楯無に再び怒る。千冬から見れば千冬は単に一夏と寄りに戻りたいだけなのだ。だが、楯無から見れば千冬の行動は一夏を苦しめているようにも思える。

「織斑先生、貴女は前から変わってませんか？ 一夏君が思うが故に一夏君のISを専横みたいな事で取り上げようとしたり、勇人君や止君から一夏君の過去を訊こうとしたり……まるで、貴女は一夏君を束縛したいようにも思えます」

「黙れ！ お前が何を言おうが私は一夏と寄りを戻す！ ーそして再び二人で暮らしたいのだ！」

千冬は目尻に涙を浮かべながら楯無に怒る。が、楯無は首を左右に振る。

「無理ですね。私はこれから学園長及び……とある人物にこの事を話します。貴女には一夏君や勇人君や止君に干渉しないよう伝えます。では……」

楯無は千冬に軽く一礼すると立ち上がり、生徒指導室の外にいる学園長にその事を話そうと思い、指導室を出ようとし、身体を翻す。

「止めろ……」

千冬は楯無に手を伸ばす。このままで自分は一夏と話が出来なくなってしまう、と。

「止めろ……止めろおおおつ!!」

千冬は楯無が指導室を出る前に泣きながらそう叫びながら自分も立ち上がり、楯無の元へと駆け寄る。

「っ!？」

楯無は扉の前にまで来たが千冬に気付く。が、千冬は楯無を殴ろうとしているのか走りながら拳を振り上げていた。

そして少し後に、二つの音が室内に木霊し、とある人物が千冬に殴られた……。

第76話

「止めろおおおお!!」

千冬は楯無が学園長に自分が勇人や止は元より、一夏と話が出来なくなってしまう事に恐怖したのか、楯無を止めたいが為に楯無に殴り掛かろうと、右腕を振り上げている。

「っ!」

楯無は千冬に気付き、躲す意味で屈む。刹那、扉が勢い良く開き、廊下の外には、とある人物がいた。

刹那、千冬の右拳は、とある人物の右頬を捉える形で殴り、とある人物は殴られた影響でそのまま吹っ飛ばされ、壁に頭から激突し、前のめりになると、そのまま俯せに倒れた。

「い、一夏!」

「一夏君!」

その人物を近くで見た者達が驚きを隠せない。そして、その人物を見たのは止と虚、最初から生徒指導室の外にいた学園長の三人と。

「っ! い、一夏!」

「えっ……い、一夏君!」

室内にいた千冬と楯無も驚きの声を上げる。そして、千冬に殴られた人物は一夏だった。

一夏は頭から壁に激突したのか頭から血を流しながら気を失っている。それだけではない、頭には包帯を巻いていたが箒の竹刀で受けた際に出来た傷が壁と激突した際に開き、包帯の大半が真っ赤に染まっている。

「一夏君!」

「一夏!」

楯無と止は一夏を見て慌てて駆け寄り、一夏の近くに屈み、一夏の身体を揺する。一夏は何の反応もせず気を失っている。

千冬も一夏の元へと駆け寄りたかったが自分は弟を殴ったと言う事に驚きを隠せず、顔を青褪めながら膝を突く。

「お、織斑先生、貴女は何て事をしたのですか!」

学園長は憤りを隠せず千冬に詰め寄り激しく問い質す。にも関わらず、千冬は未だ自分が楯無を殴ろうとしたにも関わらず一夏を殴ってしまった事に後悔している。

しかし、何故、一夏が生徒指導室へと来たのかは、それには理由があった。実は一夏は数分前、止と共に保健室で待機していたが楯無と虚を心配し、止と共に生徒指導室へと向かおうとしたのである。

生徒指導室は、この出来事が起きる数日前に、学校内に設けられている保健室や音楽室等が何処にあるのかを調べた為に問題は無い。

道中、勇人や真耶、虚と遭遇したが真耶から楯無が千冬と一對一の話をする間、一夏は胸騒ぎを感じたのか駆け足で生徒指導室へと向かったのである。

止と虚は追い掛けるも勇人は真耶に止められ、保健室へと行った為に、此処には居ない。話を戻そう。学園長が千冬に問い質している中、楯無と止は一夏の身体を揺すりながら呼び掛ける。

「一夏、一夏!! つ、てめえ!!」

止は千冬に怒りを覚え、立ち上がり、千冬に詰め寄りとした。

「き、霧崎君!」

「いけません!!」

そんな止を学園長は千冬を庇うように前に出て、虚は止を羽交い締めする。

「てめえとただ一夏を傷め付ければ済むんだよ!? 何で一夏を追いつめるんだよ!」

止は千冬に怒るが目には薄つらと涙を浮かべていた。勿論、止は知らないだろうが此れは事故である。

嫌、止から見れば千冬は一夏を殴ったと思うだろう。それでも止は泣きながら、千冬に叫んだ。

「てめえ何か一夏の姉じゃねえ!! てめえは一夏の事を見てねえじゃねえか!? てめえのやってる事は只の放棄や虐待だ!!」

「っ!」

止の言葉に千冬は瞠目し、そのまま自分を抱き締めながら身体を震わせる。

止の言葉は、千冬の胸に大きく突き刺さる。それは千冬が一夏を見なかつたツケが回つたと言い換えれば良いだろう。千冬にとつて、止の言つてる事は千冬の心に傷を負わせる事をも意味している。

止は千冬に怒る中、学園長や虚が止を押さえている中、千冬が止の言葉で傷付いている中、楯無は未だ一夏を呼び掛け続けていた。

「一夏君！　一夏君！　しっかりして！」

楯無は一夏に呼び掛ける中、目に薄つらと涙を浮かべている。一夏死なないでー。楯無はそう願っていた。

自分は未だ一夏にあまり何もしていない。それに自分の我が儘だが楯無は未だ、一夏を必要としていた。一夏は自分の為に色々としてくれた。

それなのに、それなのに自分はそんな一夏を……。楯無はその気持ちを押しえつつも、楯無は未だ一夏を呼び掛ける。

「一夏君起きて!!　お願い一夏君!!　一夏君ーッ!!」

楯無は一夏を呼び掛ける。が、一夏は完全に目を覚ます気配はなかつた。そして、その叫び声のせいかお陰かは判らないが他の教員方も来るまでの間、少しだけ続いていた。

同時刻、此処は遠方にIS学園がある島が見える浜辺。クリーム色の砂浜に、青い海の波打つ音が浜辺に響き、潮風が吹いている。

浜辺には少しだけ空き缶やペットボトル等の塵が散乱しているが、浜辺には一人の青年がいた。

その青年は十代後半であり、長袖の白いシャツに青いベスト、白いジーパンを穿いているが頭には帽子を被っている。

しかし、その青年は帽子を被っているが顔立ちは止とは瓜二つであつた。

「彼処に、霧崎止が……ッ」

その青年は鋭い眼差しで遠方の海に浮かぶ島ーIS学園を見据えていた。あそこには自分が憎んでいる者がいる。

それは青年が最も憎んでいる者、霧崎止がいるからだつた。青年は

歯軋りをすると、左手で帽子を深々と被る。刹那、右腕から音が聴こえ、青年は左手でシャツの右腕部分を捲る。そこにはコンピューターガントレットがあった。

それも、一夏達が着けているコンピューターガントレットとは違う。青年はコンピューターガントレットを睨むも、左手でボタンを押し、顔へと近付ける。

「何かな、トラッカー？ ……うん、うん、判った、直ぐ戻るよ……」

青年はそう言うと、コンピューターガントレットのボタンを押し、再び学園が建てられている島を見る。

此処から見たら何の変鉄もない。あるとすれば一夏が死にかけているのと、止が千冬に怒りを隠しきれず詰め寄っている。勿論、どちらの出来事も外にいる人達は知らないのも事実だろう。

青年はIS学園がある島を見続けたが表情は険しくなる一方であり、青年はいつの間にか両手を拳に変えていた。

青年は止に憎悪を抱いていた。それは消える事のない、止との確執。青年はそれを思い出したのか表情を険しくし続けた。

「……ッ」

青年は下唇を噛むと身体を翻し、何処かへと歩き去って行った。そして六日後、青年はIS学園へと襲撃する……。勿論、それはIS学園に居る者達は知らない。

此処はIS学園にある保健室。そこには一夏が横になっているが頭には新しく包帯が巻かれていた。それだけではない、一夏が横になっているベッドの近くにある椅子には楯無と、その近くには険しい表情を浮かべている勇人と、哀しそうかつ悔しそうに歯を食い縛る止と、一夏を心配しているのか哀しそうに見つめている真耶と虚の五人がいた。

五人は皆、一夏を心配しているが一夏は此れから、病院で集中治療する事になっていた。その為、一夏とは一時的な別れをも意味している。

何故なら、一夏は二度も頭に大怪我を負った。これには流石に頭に異常があるのと、脳内出血している危険もあるからだった。

勿論、そう決めたのは学園長であり、学園長は今、とある人物と共に千冬や箒の処罰の事で話し合っている。

千冬や箒はどうなるかは二人が決める事だろう。嫌、今はそんな事を言ってる場合ではなかった。

「一夏君……」

楯無は一夏の手を両手で包むように握ると、俯く。楯無は後悔していた。

自分はその時、何故屈んだのだろうか？ 身を守る為だったのか？

あの時、千冬に殴られれば良かったのだろうかーそうだったら、一夏は千冬に何をするかは判った物ではない。楯無は自分を責めた。そして、泣きそうになる。

もう何度目なのかも判らない。それも全て、一夏に関わってる事である。それもその筈、楯無は一夏に……好意を抱き、惹かれつつあった。

だからだろう。しかし、それは楯無が一夏に好意を寄せているが想いを寄せているが未だ完全と言う訳ではない。

その為、楯無は一夏に恋愛感情があるかどうかは判らないが半分あり、半分無いと言い換えれば良いだろう。

「起きて一夏君……起きてよ……起きて、私にもっと色んな事を教えてよ……起きてよお……！」

楯無は泣くのを堪えながらそう呟く。そんな楯無に周りの者達は何も言わなかった。何故なら、真耶と虚は楯無に同情し、掛けてやる言葉が見付からず戸惑っており、勇人と止に至っては一夏が死ぬかも知れない恐怖と千冬と箒への怒りを隠しきれないでいる。

しかし、楯無や彼等が何かを思っても、一夏は目を覚ます訳ではない。が、彼を助ける事が出来るのは……最早、あの人物しかいない。

あの人物なら、一夏を助ける事が出来る。そして、その人物は駆け足で保健室へと入ってきた。

楯無達はその人物を見て驚くも、止は驚きながら、その人物を指差

「あ、あんたは!?」
した。

第77話

「あんたは!? ……束さん!？」

止は保健室に入ってきた人物——束を指差しながら驚きを隠せない。一方、勇人は元より、楯無や虚、真耶は束を見て驚きを隠せない。「いつ君!!」

束は止や勇人や楯無達の事等眼中に無い意味で、楯無の近くにあるベッドで横になりながら気を失っている一夏を見て戸惑いを隠せず、ベッドへと駆け寄る。

「いつ君! ……いつ君!!」

束は一夏を呼び掛けるが一夏は目を覚まさない。それでも束は一夏を呼び続け。

「あ、あの束さん?」

束が一夏を呼び続ける中、止は恐る恐る束に訊ねるも、束は一夏を呼び続けていた。そんな中、勇人は束を見て呆れているのか、頭を押さえ、楯無、真耶、虚に至っては彼女が束だと言う事に驚きを隠せないでいた。

彼女達三人は彼女が、この人が篠ノ之束である事に驚きを隠せないでいる。それだけでなく、束は天才でありながらも天災と言われ、ISを造った科学者でもある。

無理もない、三人は束が此処に居る事にも驚いている。彼女は世界中の政府や科学者達が血眼になってまで捜している人物でもあり、指名手配さえもされている。

それにもう一つ、彼女達は別の理由で驚いている事があった——束が纏っている服装だろう。束が纏っている服は不思議の国のアリスが着ているような白いドレス。

誰から見ても、束は科学者でありながらメルヘンチックな服装を着ている事に驚いている。勿論、科学者全てが白衣を着ている訳ではないので、そこは何も言えない。

「た、束さん……ちよつと」

止は再び束を落ち着かせる為に再び声を掛けると、束は困惑した表

情で止と、隣にいる勇人を見る。

「とーくんにはやちゃん……いつ君に、いつ君は大丈夫なの!？」

「と、取り敢えず落ち着いて下さい! 束さん、何故貴女が此処に居るのですか? それに何故、一夏が倒れた事を知ってるのですか?」

「はやちゃんが教えてくれたの! はやちゃんが、いつ君が箒ちゃんやちーちゃんのせいで大怪我を負ったって!」

「勇人が!」

束の言葉に止は驚きながら、勇人の方を見ると、勇人は瞑目しながら腕を組んでいた。勇人は何時束に連絡したかは判らないが止は一夏の安否を気にしながらも、再び束に訊ねる。

「取り敢えず束さん、貴女は何時此処に?」

「私はいっ君を治療したいから、ラボに連れて行こうと思ったから、急いでこの学園へと来たの!」

「ええっ!？」

止は再び驚きを隠せない。が、そんな止に束は言葉を続ける。

「いつ君は只、頭を怪我しているんでしょ!?! だったら私が医療用目的で造ったアンドロイド、ビショツプな」

「あのっ!!」

束が何かを言い終わる前に楯無が束に話掛ける。刹那、束は突然の事に驚く。

「な、何かな? それに君は、誰?」

束は何故か楯無に嫌悪感を見せるような冷酷な眼差しを向けていない。本来の束なら自分が良く接している人物達以外には心を開かない。

なのに、今の束は何故か楯無とは普通に接している。

何故なら、束は一夏達に人と接する大切さを教えられたからである。人と接する事が如何に大事で、如何に必要なのかを、一夏達は教えたのである。

「君は、誰?」

「あつ……私は更識楯無と申します。貴女が、篠ノ之束、ですか?」

楯無は束に自分の名を教えると、束は瞠目しながらも慌てて自分の

名を教える。

「そ、そうだよ！ 私は篠ノ之東だよ！ それよりも貴女なの？
いつ君が大事にしている人って？」

東の言葉に楯無は「えっ？」と目を見開く。いつ君が大事にしている人？ それは楯無にとつて、信じられない事を教えられたような物でもあつた。

それは一夏が楯無を大切な人だと言い換えれば判り易いだろう。そんな楯無を他所に東は言葉を続ける。

「はやちゃんが教えてくれたの……いつ君が箒ちゃんから守りたい、大切な人が居るって……それが君だったんだね？」

東が楯無に訊ねると、楯無と、勇人の隣にいる止は驚きながら、勇人を見る。勇人は瞑目していたが何故か顔を逸らす。

「そ、それは……」

「言わなくても良いよ？ それに此れもとー君から聞いたよ？ 君は更識家の当主としてやっていく自信もない事や、ロシアがあんな事になって、ロシア代表のままでも良いのかも？」

「……は、はい」

楯無は東に頷く。

「訳を話してごらんよ？ 私が力になれるかどうか判らないけど」
「し、篠ノ之博士に、ですか？」

楯無は東が力を貸してくれる事に驚きを隠せない。そうだろう、楯無から見れば東に話を聞いて貰える事は女尊男卑に染まった女性達から見ればこの上ない喜び。

それを楯無は非女尊男卑主義者でありながらも、東から話を聞いて貰えるのだ。反面、楯無は東に言っても良いのかも判らず、戸惑っている。

「わ、私は……貴女のような人に一夏君の事を話しても、い、良いのでしょうか？」

「良いに決まつてるんじゃない？ 君はいつ君に想われているかも知れないし、何より君は今の自分に自信が無い事も知ってるよ？ それに私は、いつ君にも色々迷惑を掛けたーそれは私自身も良く判って

いるの……」

束は悲しそうに俯く。それを見た楯無は何かを言いたかったが束を見て、束にも迷惑を掛けたかのようにも思えたのか、訳を話し始めた。

「成る程ね……貴女はいつ君に色々と迷惑を掛けて、更には妹さんや、ロシアの先生にも迷惑を掛けていると思ってるんだ？」

楯無は、この学園にいた間、自分と一夏との間に起こった出来事を話した。簪の事、一夏が自分を箒から守る為に嘘の告白してくれた事、エレナ先生の妹が自殺した事等を全てではないが話した。

それらは全て楯無が蒔いた種でもあり、それらの一部は一夏が何とかしてくれた。なのに、楯無は自分は何もしていない事に気付きながらも判らないでいた。

「私……判らなくなって来たんです。自分が関わって来た事で一夏君や、近くにいる勇人君や止君、虚ちゃんに迷惑を掛けてるって」

楯無は悲しそうに言葉を続ける。

「お嬢様……」

「更識さん……」

楯無の会話を聞いた虚と真耶は悲しそうに見つめ、勇人は無言で俯き、止はやるせない気持ちを抑えていた。

そして、楯無は泣きそうになるのか腕で目元を拭う。

「私、判らなくなってしまったんです。私は一夏君の為にあんまり何もしていません。それなのに一夏君は私を責めようもしない……なのに私は……私は……うぐつ、えぐつ」

楯無は泣き出す。そんな楯無に虚と真耶は楯無の元へと歩み寄り慰める。

「お嬢様、大丈夫です」

「更識さん」

虚と真耶は楯無を慰める。が、あまり効果は無かった。その為、楯無は嗚咽を上げ続ける。楯無は一夏に再び迷惑を掛けた事、それも今度は一夏が死にかけるような事だった。

これには流石の楯無でも一番迷惑を掛けたような物だと思っただろう。その為、楯無は嗚咽を上げていた。

「それは違うよ、君のせいじゃないよ?」

刹那、束が口を開く。それを聞いた楯無は泣きながらも顔を上げ、勇人、止、虚、真耶の四人は束を見やると、束は悲しい笑みを浮かべていた。

「それは違うよ楯無……嫌、たっちゃんー君は何も悪くないと言えないけど、君はいつ君の為にちちゃんと頑張ってるじゃん?」

「そ、それは違います……私は一夏君の為に言っても、軽い程度の」「それは違うよ?」

楯無は再び「えっ?」と言うが束は言葉を続ける。

「それは違うよたっちゃん? たっちゃんがやってる事は間違いじゃないよ? たっちゃんはいっ君の為にちちゃんと頑張ってるんじゃない?」

「頑張ってるって言われても、それは一夏君に迷惑を掛けた事よりも小さい物です」

楯無の言葉に、束は首を左右に振る。

「いいや違うよ、君はちちゃんといっ君の為に頑張ったよ? それはいつ君から見ればあまり小さな事かも知れないけど、君はちちゃんと頑張ってるよ? それに君が居なかったらいつ君をーうん、いっ君は一生、君への罪悪感は覚える事は無かったと思う、いっ君を止める事は出来なかったと思う」

「わ、私は……」

束の指摘とも言える言葉に楯無は何も言えなくなる。が、束は楯無の頭を撫でる。

「し、篠ノ之博士?」

束の突然の行動に楯無は戸惑う。が、束は悲しそうに笑っていた。「たっちゃん、いっ君はね最初、とー君やはちちゃんや私を含めた人以外にはあまり感情を見せなかったの」

「一夏君が? ……」

楯無が訪ねると束は頷く。

「そうだよ、でもねいつ君を変えたのは誰かは判らないけど、その中にはたっちゃん、君も含まれているんだよ?」

「私もですか?」

「そうだよ? いっ君はね、たっちゃんが居たから、いつ君はちーちゃんや箒ちゃんに憎悪を抱きながらも、それ以上の事はしなかつた。もししていたのなら、ちーちゃんや箒ちゃんを……ううん、それ以上にたっちゃんはいっ君にとつて」

刹那、保険室の扉が開き、一人の女教師が保険室へと足を踏み込む。

「二夏!! ……つ、た、束!?!」

刹那、叫び声が聞こえた。その前に周りが保険室の扉を開けた人物を見やるも、勇人と止は憎悪が籠った目付きをし、束は目を見開きながら震えながら、その人物の名を言った。

「ち、ちーちゃん?」

第78話

「ち、ちーちゃん……!」

「た、東、な、何故お前が此処に!」

東と千冬は互いの相手を見て驚きを隠せない。何故なら、二人は幼馴染みでもあり親友でもあるからだ。

しかし、二人は東が宇宙進出を夢見て造ったISのせいにより離れ離れとなり、連絡は出来るものの、いざという時にしか出来ない。

もう一つ、東は追われている身であり、千冬はIS学園の教師。どちら也多忙の身でありながらも二人の友情は消える事はない。

「お、織斑先生? 何故貴女が此処に!? 貴女は学園長達に呼ばれ、処罰を言い渡されていたのでは!」

真耶は千冬が突然来た事に驚き指摘するも、千冬は答えた。

「そんなのはどうだって良い……ッ、それよりも一夏!」

千冬は真耶の事等気にもせず、東が居る事に驚くよりも、ベッドで横になっている一夏の元へと駆け寄ろうとした。

「来ないで!」

刹那、東が千冬を拒むような事を叫ぶ。東の叫び声に千冬は一瞬だけ肩を竦め、楯無達は東の叫び声に驚きを隠せない。が、一人だけ東の叫び声に驚いていない者がいた――勇人である。

勇人は東の叫び声にたじろぐ事もせず、細い目で東を見据えている。勇人は何かをするつもりは無かった。勇人は見守る事を選んだのだ。

その為、自分は両者の様子ややり取りを干渉しないのと、これは矛盾しているが自分は何時でも、千冬が東に何かをしないように警戒していた。

勇人が見守る中、周りが困惑する中、千冬は東に問う。

「た、東、お前何を言ってるのだ?」

千冬は恐る恐る東に訊ねると、東は険しい顔をしながらも悲しい目付きで、千冬を見据え、訳を話した。

「来ないでちーちゃん、これ以上、いつ君を苦しめないで」

「な、何を言ってるのだ!? 私は一夏の姉だぞ!」

千冬は再び一夏が横になっていいるベッドに近付こうとした。しかし、束はそれを阻む意味で前が出る。

「来ないでちーちゃん、これ以上来ると、流石の束さんも怒るよ?」

束は千冬に警告する。しかし、千冬は退く事は考えないかのように反論する。

「それは無理だ! 私は一夏が心配なのだ! 私は一夏が居なくなったら……」

「だったら何で、あの時助けなかったの!」

千冬 of 言葉に束は怒る。それを聞いた千冬は再び肩を竦め、勇人以外の者達は固唾を呑んで見守る中、束は言葉を続けた。

「ちーちゃん……ちーちゃんは何で、あの時、いつ君を助けに来なかったの? ううん、それ以前に苦しんでいるいつ君に手を差し伸べなかったの?」

「な、何を言ってるんだ? 一夏が私に助けを求めていたのか?」

束の言葉に千冬は驚きを隠せない。何故なら、束は一夏の身に遭った事を話す。実は一夏は極僅かな友人達を除き、周りから千冬の付属品としか見てくれなかった。

出来れば当然、出来なければ「それでも千冬の弟か?」と。それに一夏が千冬に助けを求めても千冬は「忙しい」としか言わず、見ようともしなかった。

普通なら気付く筈なのに、千冬は何故か気が付かなかった。どう見ても変であり、異常とも言える。

もしも、千冬が一夏の事を良く見ていたのなら、それ以前に一夏を誘拐犯から救っていたら、姉弟の仲は変わっていたのかもしれない。

嫌、それは最早過去の話——今はその過去の話をしてない方が良くだろう。一夏に辛い思い出を過らせる事になるからだ。

「いつ君はね辛かったんだよ? ちーちゃんに助けを求めたんだよ? それなのにちーちゃんは何なの? ちーちゃんはいつ君を見ていなかったし、助けもしなかったじゃん?」

「わ、私は忙しかったんだ! それに私達は実の……つ、わ、私だって

本当は一夏とは一緒に居たかった……一夏の傍に居たかった」

「だったら何で、それをいつ君に言わなかったの!? いっ君だってちーちゃんと一緒に居たかった筈だよ!」

「お前に何が解るのだ東……!? お前には篠ノ之箒が居るだろうが!? お前は自分が追われている身でありながらも、自分の身内に迷惑を掛けてるではないか!」

千冬は反論するように指摘すると、東は下唇を噛みながら俯く。東自身が何も言えなくなった訳ではない。

東は、ある事を話した。

「私だって辛いよ……いっ君から聞いたんだよ? 自分が造ったISのせいで沢山の人に迷惑を掛けた事を教えられたり、とー君やはやちゃんが政府のせいで、とー君の場合は身内を亡くしたり……はやちゃんの場合は……ううん、これ以上ははやちゃんを困らせるから言わない」

東は一夏だけでなく、止や勇人の事をも言おうとした。そんな東の言葉に止は辛そうに下唇を噛み、勇人は瞑目しながらも腕に力を入れている。

止や勇人の二人もまた、政府のせいで辛い思いをしたのだ。が、東は哀しく、そして悔しそうに言葉を続ける。

「私だって、私だって辛いよ……でもね今はそんな事を言ってる場合じゃない、今は……」

東は顔を上げ、一夏の方を見る。一夏は未だ目覚める気配はなかった。が、東は再び千冬を見据える。

「今はいつ君を私のラボに連れていかなきゃ行けない! ラボにはクーちゃんや、医療用アンドロイドのビショップが待ってるんだよ! ビショップならいっ君を治せるから!」

東は一夏を抱き起こそうとした。刹那、千冬が東を止めようとして束に詰め寄り、どちらも掴み合うかのような行動を起こす。

「止めてちーちゃん! いっ君がこのまま死んでも良いの!」

「それは嫌に決まってるだろ!? だけど、私は一夏と離れ離れになるのももっと嫌なのだ!」

「そんな事言ってる場合じゃないよ!? もし死んだらどうなるのさ!?」

「そんな時はそいつをぶつ殺し、私は一夏の後を追うように自殺してやるー!」

「そんな事をして何も変わらないよ!! それ以前にいつ君が死んだらちーちゃんを許さないよ!! それにビショップなら、彼女ならいつ君を治せるよー!」

「そんなの信用出来ん!! ビショップか何かは知らないが、一夏を連れて行く等、私が許さぬ!」

東と千冬は一夏を連れて行く連れて行かないかで激しく揉み合う。

「いけません篠ノ之博士に織斑先生!!」

「い、一夏君は、し、篠ノ之博士に任せましょう!!」

「てめえ東さんから離れろよ!!」

虚、真耶、止の三人は二人の間に割って入ると言う意味よりも、千冬を止める。

「何をするお前達!? 何故東の味方をする!?!」

千冬は三人に怒るも、三人は訳を話した。

「何を言ってるのですか!? 貴女は学園長に処罰を言い渡されている筈です!!」

「そうですよ!! 貴女が一夏君に近付いたと知ったら学園長達は貴女に何を言い渡すのかは判りません!!」

「俺は単にお前が一夏に近付く事が許せないだけだ!! てめえはもう、一夏と縁を切られてんだよ!!」

虚、真耶、止の順で三人は訳を言うように叫ぶと、千冬を東から引き剥がす形で離れさせる。

その間に東は三人に感謝の言葉を述べ、楯無や勇人を交互に見るとこう言った。

「たっちゃんやはやちゃん、いつ君を外まで運びたいから、手伝って!」

「えっ、あつ、はい!」

「ああ」

楯無は困惑しながら、勇人は冷静に頷くと、二人は一夏を両側から挟むように肩を貸すも。

「こいつは俺が抱える」

勇人は楯無にそう言うと、一夏を横抱きした。それを見た楯無は驚くも、勇人は楯無を他所に束に訊いた。

「束さん、後はどうしますか?」

勇人は一夏を横抱きしながら、束に訊ねると、束は軽く頷く。

「取り敢えず、外に」

「止めろおおおつ!!」

束が何かを言うも、千冬が叫び声を上げる。それを聞いた楯無、束、勇人は千冬を見るも、千冬は虚、真耶、止の三人に押さえられながらも、千冬は泣きながら、一夏に手を伸ばしている。

「これ以上私と一夏を引き剥がすような事はしないでくれ!! これ以上、私を苦しめないでくれええ!!」

千冬は泣きながら叫んだ。千冬は一夏を求めていた。一夏と擦りを戻したかった。何故なら、千冬と一夏は実の両親に捨てられたからである。

何故、両親が自分達姉弟を捨てたかは解らないが千冬は両親の代わりに一夏を守ろうとしていた。

バイトで家を空ける事は多く、一夏を独りぼっちにする事は多かった。が、それも全て一夏を思うのと、家計を何とかする為だった。

しかし、それらは全て一夏にはあまり効果は無かった。逆にそれが、一夏を追い詰めている事を千冬自身は気が付かなかったのである。

「ちーちゃん……見苦しいよ……」

そんな千冬を見た束は軽蔑よりも哀しい眼差しをしながら、そう呟く。

「ちーちゃん……私ね、ISを造ったのは……ううん、今はいつ君を治すのが先だね……じゃあね、ちーちゃん」

束は千冬にそう言い残すと、楯無と、一夏を横抱きする勇人を外に出るよう促すと、保健室を出ていった。

後ろから千冬が泣きながら一夏を求める叫び声が未だに聞こえるも、束は背中を受け止める形で聞き流す。

だが、束は千冬に少しだけ幻滅していた。そして、それを後悔しているのか、目尻に涙を浮かべていた。

それはまるで、束が千冬との少しだけの確執が生まれたかを意味するかのように……。

第79話

「さて、ここまですれば安心だよ」

三十分後、ここはIS学園にある森林地帯。そこには東、楯無、勇人に、勇人に横抱きされる形で気を失っている一夏の四人と、その近くには東が乗ってきた人参型ロケットが置かれていた。

何故、彼等が此処にいるのかは、東が人参型ロケットを此処に置いたからである。その為、一夏を除いた三人は、この場所へと来たのである。

「はやちゃんにたっちゃん、此処まで来てくれてありがとね?」

東は二人に感謝を言葉を述べるも、目尻には少しだけ涙の痕が残っていたが東は何時もの自分に戻っている。東はさつきまで、千冬とは少しだけの確執を生み出している。それは東にとって、たった一人の親友でもあった。

東から見れば、辛いに違いない。嫌、親友だからこそ、東はあんな千冬を見たくなかったのだろう。東は気丈に振る舞う中、楯無と勇人は東に同情しているのか辛そうな表情をしている。

「さっ、いつ君を人参型ロケットに乗せるから、今準備するね?」

東は懐から無線機に良く似た物を取り出し、ボタンを押す。刹那、人参型ロケットの扉が開き、中から一つのベッドが出てきた。

「いつ君をベッドの上に置いて」

東の言葉に勇人は頷くと、一夏をベッドの上に寝かせる。刹那、一夏のベッドから二本のゴムの紐が現れ、一夏をベッドから離れさせない意味でベッドに絡み付く。

「さっ、後は」

「待つて下さい!!」

東が何かを言い終える前に楯無が叫ぶ。

「た、たっちゃん? どうしたの?」

楯無の叫び声に東は一瞬だけ肩を竦めたが直ぐに何時も通りに戻ると、楯無に訊ねる。

勇人は無言で楯無を見ていたが、楯無は俯きながら両手に力を入れ

ていた。

「どうしたのたつちゃん？ 何か用があるの？」

「別に用がある訳じゃありません……只……」

楯無が何かを言うと、束は「只？」と言いながら首を傾げる。すると、楯無は顔を上げる。楯無の表情は険しいが何処か哀しいと言うよりも何かを決意したかのような目をしていた。

楯無は一夏に何かを言いたかったのだ。勿論、束はその事に気付かないが勇人は直ぐに気付いた。

「な、何かなたつちゃん？」

「私に、一夏君と話をさせて下さい」

楯無の言葉に束は「えっ？」と不意を突かれたかのように惚ける。勿論、束が惚けるのも無理はない。

楯無が一夏と話をしたい——それは無理な話である。一夏は目を覚まさない為、楯無が何を言ったのかは判らないだろう。

もう一つ、一夏には時間がない。最悪の場合、死ぬ危険がある。束はそれを指摘した。

「だ、駄目だよたつちゃん？ それはいくら束さんでも無理な話だよ？」

「それは解っています。ですが、私は一夏君に話したい事があるんです——私は一夏君に……一夏君に」

楯無は瞑目すると、直ぐに目を開け、束を見据え、口を開いた。

「私は一夏君に言いたい事があるのです。一夏君には、いえ、彼には返しても返しきれない恩があります……ですが、私は一夏君に言いたい事があるのはそれではありません。私は一夏君に告白したい事があるのです」

楯無は束に頭を下げる。

「自分勝手である事には気付いています。ですが私は一夏君に言いたい事があります——差し出がましいお願いかも知れませんが、私に一夏君と話をする時間を下さい！ お願いします！」

「たつちゃん……」

束は、頭を下げながら自分をお願いしている楯無を見て、何も言え

なくなつた。が、束は何故か戸惑っていた。

本当なら一刻も早く一夏をラボへと連れていき、療養しなければならなかつた。早くしなければ一夏は死んでしまうからだ。

そうなれば、一夏を慕っている者達は嘆き悲しむ。束はそれだけは嫌だつた。しかし、束は楯無を見て困惑するも、ふと、勇人の方を見る。

勇人は束が見ている事に気付くと、深く頷いた。楯無に時間をくれてやれ、勇人は束にそう言いたかつた。

これには束も困惑するが束はふと、ある事を思い出す。

「(そう言えばたちちゃん、いつ君が大事にしている人だつたね?)」
束は楯無が一夏の大切な人である事に気付く。一夏が楯無を大切にしているのなら、楯無も一夏が大事なのだろう。

だが、そんな一夏を想っている者が他にもいる事にも気付く。篠ノ之箒、自分の妹だ。自分の妹は一夏を想っているが一夏には歪んだ愛を向けている。

それは束から見れば、酷い物であつた。反面、楯無は違う。楯無は一夏に歪んだ愛を向けてはいない。

「(箒ちゃん……ごめんね)」

束は内心、箒に謝ると、束は楯無に対し微笑む。

「良いよ」

束はそう答えると、楯無は瞠目し顔を上げ、束を見る。束は微笑んでいたが言葉が続ける。

「あまり時間はないから、三分くらいだよ!」

「あ、ありがとうございます! ありがとうございます!」

束の言葉を聞いた後、楯無は泣きそうになるのを堪えながら、束に感謝の言葉を述べながら二、三度頭を下げる。そして、楯無は顔を上げると、一夏が寝ているベッドへと近付く。

近くには束と勇人が居るが二人は楯無を見守る形で何も言わなかつた。

「ねえ一夏君? 私ね、一夏君に訊きたい事があるの……」

楯無は哀しい笑みを浮かべながら、一夏に言う。しかし、一夏は気

を失っているか眠っているかは判らない。それでも、楯無は一夏に訊き続けた。

「一夏君、私ね？　一夏君に言いたい事があるの……私は一夏君、私は貴方に何度も助けられたの……当主としてや、ロシア代表の事で自信が無くなつた私に、貴方は自信を持ってと言つた……ううん」

楯無は首を左右に振ると言葉を続ける。

「私はそれでも自信を取り戻す自信は無かつた……でも貴方は私に貴方自信や周りに頼れと言つてくれた……いえ、それだけじゃない——貴方は私の家や、私の行動のせいで篠ノ之さんや周りに誤解を与えさせ、多大な迷惑を掛けた……それなのに貴方は私を責めなかつた……それどころか」

楯無は一夏の頬を触る。一夏の頬はまだ温かつた。嫌、楯無から見れば一夏の温もりを感じさせている。

「それどころか貴方は篠ノ之さんから、エレーナ先生から私を守ってくれた……私の我が儘を聞いてくれた」

楯無は一夏に今までの事を言う。それは一夏が楯無を箒やエレーナから守つた事、朝食で食べさせあつた事である。

「私は今まで、貴方に助けられてばかりだった。私も少しだけ貴方の力になりたかつたけど、貴方がしてきた事よりも全くとつて良い程、良い物じゃなかつた……それでも貴方は私を責めなかつた、それで私ね……実は私ね」

楯無は一夏の頬に触れていた手を一夏の頬から放れさせ、今度は一夏の手を両方の手で包むように握り締める。

「一夏君……私ね、多分だけど一夏君に惹かれた——それに私は、私は」

楯無は瞑目する。少しだけ間を置いているが楯無は自分の心の中に微かにある自分の気持ちを言うか悩んでいた。

そして、束から三分しか猶予を貰つていなかつた為か楯無は目を開け、恥ずかしそうに頷くと、恥ずかしそうにそれを一夏に言つた。

「一夏君、私は貴方が好き！　まだ完全とは言えないけど、私は貴方が好き！」

楯無は自分の気持ちを一夏に言う。が、それは一夏の耳に届いているかは判らなかつたが楯無は自分の気持ちを一夏にぶつけた。

「えっ!？」

「……恥ずかしい」

近くにいた束と勇人は楯無の言葉に反応を見せる。束は頬を赤くしながら驚きを隠せず、勇人は無反応だが頬を赤くしながら目を逸らしている。

二人から見れば、楯無の告白は恥ずかしい物である。が、楯無はとんでもない事をしてしまう。

楯無はゆつくりと、一夏にキスをした。それを見た束は更に驚き、勇人は恥ずかしそうに身体を翻す。

刹那、楯無は一夏から離れると、楯無は名残惜しそうに一夏を見つめながらある事を言った。

「一夏君……約束して、絶対に死なないと言う保証はないけど、絶対に死なないで」

楯無はそう言うと、一夏から離れ、束を見る。

「篠ノ之博士、もう大丈夫です」

「えっ、あつ、う、うん」

楯無の言葉に束は不意を突かれるも、直ぐに我に返るも、まだ恥ずかしそうに顔を赤くしていた。

「じ、じゃあ私はいっ君をラボへと連れて行くからたちちゃん、はやちゃん、離れて」

束の言葉に二人は頷くと、二人は離れる。その間に束は人参型ロケットに乗り込み、一夏が横になっているベッドは人参型ロケットの方へと移動する。

「じゃあね二人共、いつ君は私が何とかするからねっ!」

束がそう言うと、人参型ロケットの扉は閉まる。刹那、人参型ロケットは空高く飛んだ。

二人は驚くも、楯無は直ぐに心配するように表情を悲しくしながらも何かを決意しながら両手の指を絡めるように祈る。

「篠ノ之博士……一夏君をお願いします」

楯無は束に一夏を頼むようお願いする。一方、勇人は何も言わず人参型ロケットが飛んだ上空を見ていた。が、内心、一夏の無事を祈っていた。

そして、束からの連絡は来なかった。それは、クラス代表対抗戦の日になっても、束からの連絡は来なかった……。

第80話

「では、本日の授業は此これにて終わりです」

あれから五日後、此処は一年一組の教室。そこは一見、何の変哲もない日常だが此の教室だけは違う。

その教室には三人の人間がいない。織斑一夏、織斑千冬、篠ノ之箒の三人である。彼等は単に休んでいる訳ではない。三人は各々の理由で休んでいる。

一夏は箒の竹刀と、あれは事故だが千冬に殴られその後に吹っ飛ばされた際に頭を強く打ち、瀕死の重傷を負った。

彼は今、束のラボにて静養中であり、束は勇人や止に連絡を入れない。一方、千冬と箒は学園長と、とある人物に処罰を言い渡された為に、此処には居ない。

なのに、二人の処罰は六日間の自室謹慎処分を喰らっている。軽い、どう見ても軽いと勇人と止の二人は思った。

勿論、それには理由がある。千冬は女尊男卑主義者達が崇拜している存在であるのと、箒は篠ノ之束の妹である事が理由だからである。

そんな二人を学園から追い出したら、女尊男卑主義者達が黙ってる筈もなく、何かをするのは目に見えていた。

これには二人は何も言えなくなった。言え言えで一夏を苦しめるだけだった。

「では明日は、クラス代表対抗戦です。皆さん、霧崎君を精一杯応援して下さいね」

一年一組の教室では副担任の真耶が教鞭を執っていたがさつき授業を終えると、真耶は周りにそう言った後、数人の生徒が少し驚く。

後の少しは一夏の安否と千冬が居ない事に哀しみを抱いている。が、気付けば明日はクラス代表対抗戦ーつまり、明日は止が半年間のデザート無料パスを手に入れるか入れないかが掛かっている。

「そ、そうよね? 霧崎君、明日頑張つてね?」

「わ、私達は明日、霧崎君をいっぱい応援するから!」

「デザート無料パスは霧崎君に掛かっているんだからね!」

女子達の一部が止に鼓舞する。女子達は一夏と千冬の安否を気にしていたがデザートと聞いて寂しさを紛らわせようとしていた。

勿論、当の本人である止はノートを取っていたが女子達の言葉に顔を上げ、辺りを見渡す。しかし、止の表情は何処か哀しい。

「……っ、う、うん、頑張るよ」

止は女子達にそう言った。が、止の顔を見て、止の言葉を聞いた女子達はバツの悪そうな表情を浮かべる。それでも、止は直ぐにニツコリと笑い、言葉を続けた。

「俺、明日頑張るよ。明日、皆の為に頑張って、デザート無料パスをこの手にしてみせる！」

止はガッツポーズをするが内心、一夏を心配していた。止から見れば、クラス代表対抗戦よりも、一夏の安否の方を気にしていた。

止はそれは内心留めておく形で口には言わなかった。それは止の願いでもあった。

そんな止の言葉に大半の女子達は立ち上がり、止に拍手を送る。

「そのいきよ霧崎君！」

「それを明日、他のクラス達に見せつけてやって!!」

「フアイトー!!」

「頑張ってねトツマ〜〜!」

女子達は止にエールを送る。そんな中、勇人だけは止を見て何も言わず、瞑目しながら腕を組む。

勇人は止の気持ちを理解していた。が、それは口では言わなかった。勇人もまた、一夏を心配し、千冬や箒に怒りを抱いている。あの二人のせいで一夏は死にかけている。

勇人から見れば、千冬と箒は憎悪の対象。それ故、勇人は千冬と箒を殺したくてウズウズしていた。

が、そんな事をすれば一夏を哀しませ、更に苦しませる為、勇人は口を閉じてるものの、歯を強く食い縛っていた。

止と勇人は親友であり、恩人でもある一夏がどうなっているのかを気にしている反面、千冬と箒には怒りを押さえつつ、帰りの身仕度を始めた。

止は一夏が死なない事を願う中、勇人は千冬と箒を殺したいと言う
思惑があった。

「ふう……明日でクラス代表対抗戦か……もうちよつと調整しな
きゃ。いざと言う時に困るな」

あれから少し経った後、放課後、個々はアリーナ近くの整備室。そ
こには一機の打鉄に良く似たISと一人の少女がいた。

少女は一夏達と同じ一年生だが水色の長い髪で一部が内側に跳ね
ているのが特徴的かつ、紅い瞳に眼鏡を掛けていた。

そして、彼女の名は更識簪、更識楯無の妹である。彼女は今、この
整備室にて、打鉄二式の最終調整に入っていた。

勿論、彼女は一年四組のクラス代表である為、明日のクラス代表対
抗戦に出る事になっていた。その為、彼女が此処にいるのもそれが理
由である。

「武器、機動力、火力、共に異常無しつと」

簪はパソコンのキーボードを打ちながらそう呟く。カタカタと言
う音が整備室内に小さく響くも、簪はパソコンの画面を睨んでいた。

刹那、簪はパソコンのキーボードを打つ手を止め、ある者達の事を
思い出す。

「そう言えば、お姉ちゃんが大事にしていた人はどうなったんだろう
？」

簪は不意に楯無の事を思い出し、そして楯無が大事にしている者を
思い出す。その人物とは織斑一夏であり、かの有名な女性、織斑千冬
の弟である。

が、その一夏は、かの有名な篠ノ之束の妹である篠ノ之箒の竹刀で
頭を叩かれ、事故だが千冬の暴行により頭を強く打ち、瀕死の重傷で
ある。

それだけならまだしも、束が一夏を連れて何処かへと行ったのだ。
それは学園中にいる女子達が噂しているも、大半の女子達は束と話を
しなかったがそれも束は一夏を連れて直ぐにラボへと戻った為、無理

だった。

否、簪は自分には関係ないと思いきにもしなかった。が、簪は何故か一夏の事を思い出す。

「あの人……もしかして」

簪はある事を思い出す。それは自分が狂言誘拐が本当の誘拐になった際、実の姉が男達に犯されるのを目の当たりにした直後、壁を破壊する形で外から出てくる形で現れた謎の、マスクを着け、胴体や四肢に防具を着けた人物。

簪はその人物を思い出すが、簪はその人物を一夏ではないかと前から疑っていた。その証拠に楯無は良く彼と一緒にいる。もう一つ、彼がクラス代表決定戦でI Sを展開した際に纏っていた防具と顔に付けている。

あれはどう見ても、あの時自分達姉妹を助けてくれた奴と良く似ていた。

「あれつてもしかして、あの人私達を助けてくれた人？」

簪はそう確信する。が、簪はある事も思い出す。

「それに他の二人も彼と同じ鎧やマスクのような物をつけていたけど……でも」

簪は表情を強張らせる。それは簪が、勇人や止の事も思い出し、それも良い物ではなかった。

簪は、勇人は元より、一組のクラス代表である止を警戒していた。彼はセシリアを難なく倒し、クラス代表ではないが一夏や勇人も警戒していた。

しかし、自分は明日、止と当たる。それは簪にとって警戒をも生み出していた。止はどのくらい強いかは判らない。

それでも、簪は再びパソコンのキーボードを打ち始める。

「明日、霧崎と言う人と戦うかもしれない……でも、私は負けない……！ 私は無能じゃない！」

簪はパソコンのキーボードを打ちながらそう言いつた。それは簪の願いでもあり、整備室内にキーボードの打つ音が辺りに小さく響き渡った。

「一夏……」

此処は学園の屋上。そこには一人の女子生徒がいた。鈴である。鈴は哀しい目で夕日を眺めながら一夏の名を呟く。

「一夏、あんたは本当に、会長に告白したの？」

鈴は一夏に問い掛ける。が、一夏は此処にはいない。それでも鈴は一夏を心配していた。

一夏は束が隠れる為に造ったラボで静養している。鈴から見れば一夏を心配しているのと、一夏が楯無に告白したと言う事実を少し前に同級生から聞いた。

これには鈴も驚く。楯無から一夏と交際していると聞いたが、同級生から一夏から告白した事の方が一番に驚いた。

鈴は一夏に訊ねたいが当の本人である一夏は居ないと、楯無と話す勇氣も無かった。

「一夏……一夏……っ」

鈴は泣き始めた。認めたくない、一夏と楯無が交際している事。だが、鈴はそれを一夏の前で言い出せなかった。

何れ判る事だが今の鈴は明日の事で一杯である。鈴は明日、二組のクラス代表としてクラス代表対抗戦に出るのである。

だが今は、鈴は一夏と楯無が交際しているのが嘘であって欲しいと言う、願いがあった。そして、屋上では鈴が一人、屋上で啜り泣きをしていた。

「……………一夏君」

此処は生徒会室。そこには楯無と虚の二人が居たが楯無は窓の外を眺めながら何かを祈っていた。

楯無が祈っているのは、一夏が無事である事であった。が、楯無がどんなに祈っても一夏が無事かどうかは判らない。

「お嬢様、そんなに祈っても一夏さんは無事かどうかは私達には判りません」

そんな楯無に虚は言う。虚はテーブル近くにある椅子に座りながら書類を纏めている。が、楯無を心配し言うも、楯無は虚を見る。

表情は哀しいが楯無は聞き返す。

「それは判ってるわ虚ちゃん……でも、私は一夏君が心配なの、一夏君は私を守って怪我をしたんだから」

「それは判っています。ですがあれは事故です、お嬢様が気に病む事ではありません」

「だけど、それでも私は一夏君を心配しているの」

楯無は俯く。そんな楯無に虚は溜め息を吐くと、ある事を言った。

「お嬢様、私が言うのも何ですが、一夏さんがお嬢様にとって大切な人なら、お嬢様が哀しんでいたら一夏さんも哀しみます」

「えっ?」

虚の言葉に楯無は瞠目し顔を上げるも、虚は言葉を続ける。

「お嬢様、私だつて一夏さんが心配です。私だけではありません、この学園には一夏さんを心配している人達もいます。それだけは判って下さい……それに、一夏さんがお嬢様が哀しんでいるのを望んではいけません。お嬢様が元気な姿を見せるのを一番望んでいます」

「一夏君が?」

「はい、一夏さんはお嬢様が元気ならそれで良いと思っています。これはあまり自信ありませんが、お嬢様が元気なら一夏さんも無事だと思いますーなので、自信を持って下さいーそして、元気な姿で一夏さんに「お帰りなさい」と言えば良いのです」

「虚ちゃん……そうね、そうかも知れないわね」

虚の言葉に楯無は少しだけ元気が出た。そうだ、確かにそうだー彼は、一夏は自分が元気がないと喜ばない。

自分が元気なら一夏も喜ぶ。そして、自分は一夏に「お帰りなさい」と言いたい。楯無はそう願っていた。

「ありがとう虚ちゃん、少しだけ自信がついたわ」

楯無の言葉に虚は笑みを浮かべる。

「それこそお嬢様です、では、仕事に取り掛かってくれませんか？ 仕事は一杯あるので」

「ええ、判ったわ」

楯無がそう言うと、虚は頷き、楯無と虚は書類仕事に取り掛かる。

「絶対に生きててね、一夏君」

楯無は書類仕事を続けながら心の中でそう呟く。一夏が無事である事と彼に「お帰りなさい」と言いたい。

それは楯無の願いだった。そして二人は書類仕事に取り掛かり続けていた。

止、勇人、簪、鈴、そして楯無の五人の各々の願いと思惑がある中、一日は過ぎ、そしてクラス代表対抗戦の日を迎えた……。

第81話

今日この日、アリーナの観客席では多くの女子生徒達が座っていた。一年、二年、三年の全学年の生徒達が観客席でワイワイガヤガヤと騒がしくしている。

彼女達の目的は皆、半年間のデザート無料フリーパスである。彼女達は各々が所属しているクラスのクラス代表生を鼓舞する形で応援している。

女子生徒達は未だか未だかと戦いが始まらない事にソワソワしているが戦いはもうすぐ始まる事に気付いていない。

それに、何と言っても目玉とも言える人物が居た。その人物は今、ピットで待機している。

「うわ〜この前よりも少し多いじゃねえかよ?」

ピットではその人物、身にISスーツを纏い右腕にはコンピューターガンレットを着け、首にはIS、チョッパーの待機状態の物である首飾りをぶら下げている止がピットにあるモニターを観て驚きを隠せない。

止は一年一組のクラス代表だが彼は一組全員の期待を背負っている。しかし、そんな止の近くには楯無と勇人の二人がいた。

止の言葉に勇人は何か物思いに更けているのか何かを考えているのか俯いており、楯無は何か心配事があるのか哀しそうに俯いていた。

二人は止が何を言おうが気にもしてはいなかった。

「それに俺の最初の相手が……ありゃ?」

止は何かを言いながらモニターから二人を見ようとした時、二人の様子に気付く。

「どうしたの二人共? そんな暗い顔をして?」

止は二人に訊ねると、楯無と勇人は顔を上げ、止を見る。

「嫌、大丈夫だ。ちよつと考え事をしてた」

「わ、私はちよつと……ね」

勇人はほくそ笑みながら答え、楯無は少しぎこちない笑いをしながら答えた。

が、止は勇人は元より、楯無の様子に少し溜め息を吐き、哀れみの目で見つめる。

止は気付いていた。彼女は、楯無は一夏の事を思い出し、心配している事に。一夏は今、束のラボで静養中である。

それに何故か、束からの連絡はない。束は何をしているのか、一夏がどうなのかを訊く事も出来なかった。

自分や勇人は元より、楯無から見れば心配しかないだろう。

「なあ、一夏は大丈夫だよ、絶対」

止は楯無に励ましの言葉を掛けると、楯無は驚きを隠せない。そんな楯無に止は悲しそうに目を逸らす。

「俺だってこんな事言いたくないけどよ、俺、本当は怖いんだよ？」

「怖い？ 止君が？」

楯無の言葉に止は頷く。

「俺さ、この前、火事の中で……」

『霧崎止選手、凰鈴音選手、三分後に試合を始めますので両者、ISを展開して下さい』

止が何かを言い掛けるのにも関わらず放送が鳴る。これを聴いた止は頭を抱え、モニターに移っている観客席にいる女子生徒達は歓喜の声を上げる。

「全く、俺に何の怨みがあるんだ？」

止は放送に愚痴を零しながらも渋々、二人から離れ首飾りを掴む。

「チョッパー」

止はその一言だけを発する。刹那、首飾りが紫色の光を発する。

再び刹那、止の胴体や四肢からISが展開され、背中には四つの木の棒を模したような色で、先端には血の涙を流しているようにも思え、後頭部から口元を貫通したようにも思える鬪髑が特徴なウイングスラスターが展開された。

これこそが止のIS、チョッパーである。止は身体を軽く動かしていた。

「全く……まあ、頑張れ」

そんな止に勇人はそう言った後、再び何かを考え始める。一方、楯無は止のISを見て少し苦笑いしていた。

「ああ、いつ見ても、悪趣味なウインググスラスターねー。楯無は止のISにあるウインググスラスターを見て、内心、そう感想を述べる。」

すると、放送が再び鳴った。

『霧崎止選手、 凰鈴音選手、 スタンバイして下さい』

放送を聴いた止は「ハイハイ」と怒りを隠しきれずそう言う二人を見る。

「行ってくるわ」

止は二人にそう言い残すとスラスターを噴かし、アリーナへと向かう形でピットを出ていく。

そんな止を見た楯無は軽く手を振り、勇人は未だ何かを考えているのか俯き続けていた。

「ーワアアアー！ーッ！！ ー。止がアリーナに着いた直後、観客席にいる女子生徒達の叫び声が耳に響く。それは歓喜でもあり、それは怒号でもあった。」

しかし、止は観客席にいる女子生徒達に目もくれず、目の前の少し先にいる一機のISを纏っている女子生徒を見ていた。

その女子生徒は二組のクラス代表生であり、一夏の幼馴染みである鈴だった。鈴の纏っているISは軽装であるが、マゼンダ色に黒や黄色のラインが入っているのが特徴的なIS。

後ろには少し禍々しい丸い物体が二基浮いているが、鈴は右手に大型の武器でもある青龍刀があった。

止は自分の最初の相手が鈴である事に戸惑いを見せるよりも、鈴を心配していた。

何故ならこの前、鈴は初恋が実らなかったと思って泣いていた。勿論、それは楯無が一夏を守る為でもあったがあれは鈴を傷付けるのに充分だった。

一方、鈴は何故か困惑している。理由は、止が纏っているISのウイングスラスターにである

「ねえ、その後ろにあるスラスター、悪趣味ね？」

鈴は止に指摘しながら空いてる方の手で、止のウイングスラスターを指差す。止は自分のウイングスラスターを見ると、再び鈴を見る。

「そうかな？ 俺から見れば何時も通りだけど？」

「嫌、私から見れば悪趣味よ？ それにそんなの見たら、誰だって悪趣味と言うわよ？」

「そうかな？ でも、今はそんな事を言ってる場合じゃないでしょ？」

今は勝負の時なんだからさ？」

「そ、それはそうだけど……」

そう言った後、鈴は何故か哀しそうに俯く。それを見た止は首を傾げるも、再び放送が鳴った。

『では、両者、戦いのスタンバイをして下さい』

放送が鳴ると、止は軽く頷き、シミターブレイドを展開し、身構える。一方、鈴も我に返り、表情を険しくすると青龍刀を構える。

「うん？」

鈴の切り替えに止は首を傾げるが放送が鳴った。

『これよりクラス代表対抗戦第一試合、霧崎止選手と凰鈴音選手の戦いを始めますー始め!!』

放送が鳴り、今度はピーーと言う音が鳴った。刹那、観客席にいる女子生徒達が叫び声を上げる。

「タアツ!!」

再び刹那、鈴は青龍刀を横に伸ばしながら、止に迫る。止は驚くも、鈴は青龍刀で止を斬ろうとした。

が、止はシミターブレイドで軽く受け止める。二人の武器の鐺競り合う音が二人の耳に響き、火花が飛ぶ。

『おおっと！ 霧崎選手、凰選手、いきなり鐺競り合いからだ!!』

アリーナから実況とも言える放送が鳴り、観客にいる女子生徒の一

部が二人を応援している中、ピットのモニターで観ていた楯無は固唾を呑む。

楯無は止を応援していた。一方、勇人は未だ何か考えているのか俯いていた。刹那、ピットの扉が開き、楯無は扉の開く音に気付き、扉の方を見た。――楯無は戦慄した。

楯無は、扉の前、嫌、ピットへと足を踏み入れる二人を見て戦慄したのだ。その二人とは織斑千冬と篠ノ之箒だった。

しかし、千冬は虚ろな目をしており、箒は楯無に気付き歯を食い縛る。――手には、何故か木刀を持っていた。

「貴様……一夏を奪った泥棒猫が！」

箒は楯無に恨みの籠った言葉を楯無にぶつける。それを聞いた楯無は歯を食い縛るも、勇人は二人を見て眉間に皺を寄せる。

何故、この二人がピットにいるのだろうか。勇人はそう疑問を浮かべていたが直ぐに判った。

二人の自室謹慎処分は今日で切れたからだだった。勇人はその事に気付くも、千冬の様子を見て、千冬を警戒する。

「なあ、勇人……教えてくれないか？」

「……はっ？」

千冬は虚ろな目を勇人に向けながらそう訊ねる。一方、勇人は惚けるも、それを聞いた箒は怒る。

「惚けるな！ 一夏の事だ！」

「一夏の事だと？ 何故それを俺に訊く？」

「ふざけるな！ 私や千冬さんが姉さんに、一夏がどうなっているのかを電話で連絡しても、姉さんは電話に出てくれないんだ!! お前なら何か知ってるだろ!？」

箒の言葉に勇人は舌打ちするが千冬は勇人に歩み寄る。勇人は瞳目するも、千冬は勇人の前にまで来て、勇人の肩を掴み、勇人を激しく揺らす。

「教えてくれ! 一夏は大丈夫なのか!? それに一夏には何が遭ったんだ!!? 教えてくれ勇人!! 勇人!!」

千冬は虚ろな瞳をしながらも困惑した表情を浮かべながら、勇人の

肩を激しく揺らしながら、勇人に訊ねる。

「くっ、止めろ！」

勇人は戸惑う。そんな千冬を見た楯無は千冬を止めようとした。

「いけま!!」

「貴様の相手は、この私だ泥棒猫めがああ!!」

そんな楯無を箒は手に持ってた木刀を振り翳しながら迫る。それを見た楯無は驚くも、箒は楯無の脳天を叩き割ろうとして木刀を振り下ろす。

が、楯無はバックステップして木刀を躲す。

「っ……い！」

楯無は距離を置く形で箒から離れ、下唇を噛みながら箒を見据える。

一方、箒は鋭い目付きをしながら涙目になりながら、楯無を睨んでいた。

そして、箒は楯無にこう言った。

「二夏は私の物だ……!! お前みたいな泥棒猫の物ではないいつ!!」

箒は楯無にそう叫んだ。それを聞いた楯無は下唇を噛みながらも懐から扇子を取り出す。

そして、二人の間には色んな意味での二夏を巡っての戦いが始まるうとしていた。

第82話

「一夏は私の物……私の物だあつ……い！」

箒は涙を浮かべながら木刀を手にしながら自分の本音を、楯無にぶつける。一方、楯無は扇子を手にしながら、箒に疑問を抱く。

彼女は何故、一夏に拘るのだろうか。楯無はそこが解らないでいた。反面、彼女を一夏へと近付けさせる訳にはいかない。

彼女が一夏に近付いたら、一夏は彼女に何をするかは判らない。最悪、血を見るような最悪な結末を迎えるだろう。

楯無はそんな結末を見たくはなかった。嫌、一夏をこれ以上、苦しませる訳にはいかない。

楯無は箒を止めるべく、扇子を持ちながら身構える。

「そんな物で私の木刀を受け止められるのか？ 笑止だな」

「確かにそうね、でも、私は貴女を止める」

「つ……黙れえええっ！」

箒は木刀を振り翳しながら、楯無に迫る。一方、楯無は無言で身構え続けていたが箒は楯無の脳天を叩き割ろうとして木刀を振り下ろす。

刹那、楯無は横に躲し、直ぐに箒の後ろへと移動し、扇子で箒の首の裏を軽く叩く。

刹那、箒は木刀を手放す。木刀の落ちる音が辺りに響くも、同時に箒は声を上げずに膝を突き、そのまま前に、俯せに倒れた。

「……同じパターンは通用しないわよ……」

刹那、楯無は鋭い眼差しを気を失っている箒へと向きながら不意に呟くと、扇子を広げる。扇子には黒い筆文字で「心外」と書かれていた。

「止めろ、てめえ!!」

「教えてくれ! 一夏に何が遭ったんだ!」

近くから勇人と千冬の揉め合うかのような叫び声が聞こえ、楯無は声が出た方を見る。

勇人と千冬は未だと言うよりも、千冬は両手を勇人の肩に置きなが

ら未だ勇人に問い掛けていた。

千冬は困惑しながらも何かを求めているかのような表情を浮かべ、
勇人は眉間に皺を寄せながら下唇を噛み締めている。

これには楯無は驚きを隠せず、勇人を助ける為に扇子を閉じ、二人
の元へと駆け寄ろうとした。

しかし、勇人は千冬の両手首を両手で掴み、自分の肩から引き剥が
す。勇人の行動に千冬は驚くが勇人は両手に力を入れる。

「ああっ!!」

千冬は両手首に激痛を感じ顔を激痛で歪め声を上げる。それを聞
いた楯無は立ち止まり瞠目するも、勇人は千冬を開放する意味で手首
を放す。

千冬は両手首に走る激痛に耐えきれないのか、膝を突く。一方、そ
んな千冬を勇人は無言で見下ろしていた。

勇人の千冬を見る目は怒りと軽蔑が籠っている。それだけでな
い――勇人は、千冬が何故、そこまで一夏に執着するのかが判らな
いでいた。

「……………」

が、勇人は何故か自分の両手の平を見る。手の平には何もない、あ
ると言えば生命線くらいだろう。

「…………クソが」

勇人はそう呟いた後、悔しそうに下唇を噛みながら、千冬から目を
逸らす。

「織斑先生」

一方、そんな千冬を楯無は千冬に歩み寄り、千冬の前に立ち止まり、
千冬に訊ねる。千冬は楯無の言葉を聞いて、顔を上げる――千冬は未
だ虚ろな目をしていた。

そんな千冬を見た楯無は表情を哀しくする中、そんな楯無を見た千
冬は下唇を噛むも訊ねた。

「何だ…………更識?」

「何だじゃありません。私は貴女に訊きたい事があります」

「訊きたい事、だと?」

千冬の言葉に楯無は頷き、それを話始めた。

「はい、織斑先生、貴女は篠ノ之さんと共に学園長達から一夏君達に接触禁止を命じられた筈ですが？ それを何故、お破りになられたのですか？」

「煩い……私は一夏と寄りを戻したいのだ……」

「それは理由にはなっていません、貴女と――近くで、私が扇子で叩いて気を失っている篠ノ之さんもそうですが、貴女は単に一夏君を束縛したいだけじゃないですか？」

「お前に何が解る？ ……お前に私の苦しみを解つてたまるか……」

「はい、確かに解りませんが貴女は一夏君と寄りを戻したいと言つても、一夏君はそんな事を望んではいません」

「何だ、と？」

楯無の言葉に千冬は目を見開く。しかし、楯無は言葉が続ける。

「織斑先生、貴女は一夏君の気持ちを理解してましたか？ それに一夏君は貴女を嫌っている事に気付いていますか？」

「一夏が、私を、嫌っている？」

楯無の問いに千冬は俯く。何故なら、千冬は一夏が自分を嫌っているのかには気付いていた。

自分は一夏を見ていなかった。それどころか、千冬は一夏と再び一緒に暮らしたいと言つたのも、一夏の心に来た大きな傷を癒したいからであった。

にも関わらず、千冬は一夏にしている事は一夏を苦しめているだけであり、千冬はそこまで気付いていなかったのだ。

「わ、私は一夏と寄りを戻したかった……私は、一夏の為に自分が出来る事をしたかった……なのに、なのに、私は一夏を殴ってしまった……あ、ああっ」

千冬は虚ろな目をしながら涙を浮かべ、嗚咽を上げる。

自分は一夏と寄りを戻したかった。なのに、なのに自分は一夏を傷付けている……千冬はあの時の事を後悔していたが、束に連絡したのも、一夏の安否を気にしていたからである。

「私はただ、一夏と寄りを戻したかった……私は、今まで自分が一夏を

苦しめている事には、一夏の親友である五反田兄から一夏の現状を知るまでは気付いてやれなかった……私は何故、一夏の事を心配していなかったのか、私は何故、一夏を突き放すような事しか言わなかったのかを自分自身を責めた……私は……姉失格だ……あ、ああっ」

千冬は泣き崩れる。そんな千冬に楯無は哀れみの目で見つめていたが、楯無は何故か悩んでいた。

彼女達をこのまま学園長達の前に出すべきなのか。そうなれば、千冬と箒は学園を追い出されはしないが一生、一夏に付き纏う危険がある。

逆にまた、自分が彼女達を学園長達に付き出さなければ、一夏を苦しめるのもまた事実だろう。

楯無は悩んだ。自分はこのまま生徒会長として、この一連の騒動を学園長に報告するのか、それとも千冬を自分と同じ意味で姉として見逃すべきなのかを。

刹那、モニターの方が騒がしい事に楯無と勇人は気づき、モニターの方を覗る。

モニターにはIS、チョッパーを纏っている止が、相手のIS、甲龍を纏っている鈴を相手に一進一退の攻防を繰り返していた。

「フーン！ ハアッ！」

「タツ！ ハアッ！」

アリーナにいる止と鈴は今、激しい戦いを繰り返していた。止はシミターブレイドを、鈴は青龍刀、双天牙月を使って戦いを有利に進めようとしていた。

止がシミターブレイドで斬ろうとしても、鈴は青龍刀で軽く受け止め。鈴が青龍刀で刀を叩き斬ろうとしても、止は躲していた。

「テヤアッ!!」

止は両腕に着けている防具に装備しているシミターブレイドで鈴を斬る。

一方、鈴は青龍刀で受け止めるものの、そのまま鏖闘り合いに入る。「やるわねあんた？ 流石、一夏の親友と言われているだけじゃなく、ク

ラス代表決定戦でも相手を難なく倒したのは嘘じゃないわね？」

「えっ？ 何故それを知ってる？」

鈴の言葉に止は驚くも、鈴は不敵に笑う。

「それは今はどうでも良いわ、それより今は、戦いの最中よ!!」

鈴はそう言うと、止のシミターブレイドを青龍刀で弾き返す。止は弾き返された事に驚くも、同時に怯む。刹那、鈴はチャンスと言わんばかりに青龍刀で止を風ぎ払う。

止は驚くも、防御する事は出来ず、風ぎ払われ、吹っ飛ばされるが即座に体勢を直し、鈴を見る。

鈴はスラスターを噴かしながら、止に迫る。止は驚くも、鈴は青龍刀で止を叩き斬ろうとした。

刹那、警報が鳴った。アリーナにいる観客席に女子達、ピットにいる楯無と勇人、アリーナで戦っていた止は元より、鈴は警報に驚くと同時に緊急停止した。

『緊急警報!! 緊急警報!! 学園上空から謎の飛行物体が学園へと接近中!!』

近中!! 繰り返す、謎の飛行物体が学園へと接近中!!』
警報と共に放送が鳴る。これにはアリーナに居る者達全員が驚く。止や鈴も驚くが突如、アリーナの上空から謎の飛行物体が鶻の如く、もの凄い速さで降りてくる形で出現し、地面に激突し、煙を発生させる。

「なっ!?!」

「何よ!?!」

止と鈴は突然の事で驚くも、煙は徐々に消え、地面には極僅かにクレーターが出来ていたが中央にはその飛行物体を見て更に驚いた。

その飛行物体は、一機の赤いISだった。しかし、何故か人が乗っている気配なく、おまけに全身がボロボロで火花を飛ばしている。まるで何かと戦っていたが負けたのを物語っているようにも思えた。

そこが問題ではなかった。その近くには一人の、ISを纏っている青年がいた。

「な、何よあいつ」

「あいつは!?!」

鈴は驚きながら何かを言い終わる前に、止は驚きのあまり叫んでしまふ。

止はISを纏っている青年を見て驚いていた。その人物は止とは瓜二つの顔立ちであり生き写しのような青年でもあった。

が、そんなISを纏っている止とは瓜二つの青年は止を睨んでいた。

「お、お前は……わ、渡……!?!」

一方、止はその人物を知っていた。その青年は渡……彼は止の双子の弟であり、死んだ筈の霧崎渡だった。

「久しぶりだな……止!!」

「わ、渡なのか!?!」

驚きを隠せない止を他所に、渡は止を睨みながらそう言った。止は驚きながらも渡の名を言う。

しかし、彼等の再会が良い事なのか、悪い事なのかは誰にも判らない。そして、二人は、悲しき再会を果たしたのも言うまでもなかった。

第83話

「わ、渡……」

止は今、乱入者もとい襲撃者の正体に驚きを隠せないでいる。

襲撃者は自分の弟である霧崎渡だった。それは止には衝撃的である一方で、鈴や観客席に座っている女子生徒達は衝撃的な真実を突き付けられているかのように驚きを隠せないでいた。

彼女達は渡が、男性である事に驚きを隠せないでいた。彼は、渡はISを纏っているが彼女達から見れば、第四の男性IS操縦者と思うだろう。

それは一部の女性達から見れば危険人物であり、男性達から見れば新たな希望だろう。が、渡は女性達や男性達の思い等、知った事ではないのも事実だろう。

「わ、渡……それは!?!」

しかし、止は渡は何故がISを纏っている事にも気付いており、疑問を抱いていた。

渡が纏っているISは自分や一夏、勇人と良く似ている。が、そのISは胴体や四肢は緑色かつ軽装備でもあり、近くにはウイングスラストアーはないが、片方は緑色で、もう片方は白が特徴的な二基の大きな球体が浮いていた。

「わ、渡……お、おまー!」

止は驚きながら、渡に訊ねるようとした。刹那、渡は武器を展開し、それを二人に向けるように持ち構える。

渡が展開した武器は一六門のガトリングガンだった一それとも、渡と同じくらいかそれ以下の大きさを誇っている。

それを見た止と隣にいた鈴は驚きを隠せない中、渡はガトリングガンの引き金を引く。

刹那、ガトリングガンの銃口から銃弾が連射する形で何十発も放たれる。

「危なっ!」

「つぐつ!?!」

それを見た鈴と止は慌てて二手に別れる形で避けるも、避けるのが遅かったのか数発の銃弾を喰らった。

無論、彼等のISのシールドエネルギーが僅かだが減った。が、渡は止が移動しているにも関わらず、ガトリングガンを止に向け引き金を引き続けながらガトリングガンを動かしている。

「わ、渡!!」

止はガトリングガンの銃弾の雨を避けながら、渡の名を叫ぶ。一方、渡は聞く耳も持たず、憎悪の籠った目で止を睨み続けていた。

その瞳には憎悪だけでなく、怒りも籠っていた。渡は止を憎んでい——渡自身や渡を良く知る者達にしか判らないだろう。

「後ろががら空きよ!!」

突如、後ろから渡に突撃してくる者がいた——鈴である。鈴は青龍刀を右手で持ちながら、渡に迫る。

刹那、渡の背中にあり浮いている二基の球が鈴へと迫る。鈴は驚くも、二基の珠は突然、変形した。

二基の珠の内、緑色の球体は片方は犬に良く似た禍々しい生き物へと、もう片方の白い球体は鷲に良く似た生き物へと変形する。

どちらも、咆哮を上げながら鈴へと迫る。

「な、何!?!」

鈴は何かを言い掛けるも、鷲に良く似た生き物のロボットは両目からビームを発射し、ビームは鈴の近くにある二基の珠体を破壊する。

鈴は驚くも直後に犬に良く似た禍々しい生き物は鈴の左腕に噛み付く。

鈴は左腕に激痛を感じるも、犬に良く似た禍々しい生き物のロボットは鈴の左腕を噛み付いたまま放そうとはしない。

一方、鷲に良く似た生き物は再び白い球体へと変形し、白い球体は鈴の腹に体当たりする。

「がはっ……い!」

鈴は左腕でなく腹にも激痛を感じ、力のない声を上げるが白い球体はそのまま鈴を押し出す形で、壁目掛けて突き進む。

刹那、鈴は後ろから壁に激突し、同時に犬に良く似た禍々しい生き

物のロボットは鈴の左腕を噛み付いているのを止める形で口から放し離れ、鈴の腹を押し出すように突き進んでいた白い球体は鈴から離れる。

直後、鈴はそのまま前のめりになり、そのまま地面に俯せに倒れるも、腹を激しく押さえていた。

「ああっ!!」

それを遠くから見た止と観客席に座っている女子生徒達は驚きを隠せない。

が、そんな止に怒る者がいた。

「余所見するな！ 貴様の相手は俺だ!!」

渡だった。

「っ!? わ、渡……っ!」

止は渡を見て下唇を噛むも、渡の攻撃を避ける形でいどうしながらシミターブレイドを戻す形で引っ込め、ライフルを展開し、ライフルを渡へと向け、引き金を引いた。

刹那、ライフルから一発の銃弾が放たれ、銃弾は渡の右肩に直撃する。

「ぐっ!?!」

渡は右肩に激痛を感じるも怯んでしまう。しかし、止はそれをチャンスと言わんばかりに、ライフルの引き金を三回引く。

三発の銃弾は一発は渡の左肩を、一発は渡の左手を、最後の一発は渡が持っていたガトリングガンを撃ち抜く。

「あがあっ!!」

渡は胸や左手に激痛を感じているのか顔を歪めると、ガトリングガンを手放し、左手を右手で押さえる。

同時に、ガトリングガンは粒子となって消えた。

「渡!! ぐごめん……」

それを見た止は後悔しているのか悔しそうに顔を歪めると、ライフルを渡へと向け、引き金を引いた。

刹那、ライフルから再び、一発の銃弾が放たれる。それを見た渡は下唇を噛みながら避けようとしたが再び胸を撃ち抜かれる。

「ぐあつ……」

渡は胸に激痛を感じるも倒れそうになるが何とか踏ん張り、激痛を感じながらも止を睨む。

それを見た止は下唇を噛むと再びライフルで渡を撃ち抜こうとした。

「ガアアア!!」

刹那、遠くから一匹の獣の咆哮が聞こえ、止は咆哮がした方を見ると、そこには、犬に良く似た禍々しい生き物のロボットが咆哮を上げながら止に迫るが、突然、緑の球体へと変形した。

止は慌てて狙いを緑の球体に変える。が、止は少し上に白い球体が迫ってくる事に気付きライフルを構えようとしたが球体の方が速かった為、白い球体は止に体当たりする。

「つぐ!」

止は声を微かに声を上げるが今度は緑の球体にも身体に体当たりされる。

二つの球体は止に体当たりしただけでなく、止を押し出す形で壁へと突き進む。

そして、数分も経たない内に何か壁に激突し、同時に煙が微かに発生し、同時に音がアリーナ中に木霊する。

そして、煙の中から二基の珠体が煙の中から飛び出てくると、渡目掛けて突き進み、渡の前にまで来ると止まり、渡の背中へと移動した。
「……………」

一方、渡は煙の中を眺めていた。が、煙は徐々に消えていく。そこには、壁の近くで俯せに倒れている止がいた。

止から起きる気配はない。止は気を失っていた。

「……………死ね」

そんな止を見た渡はゆつくりと近付き、非情な一言を発すると、あの武器を展開する。二丁のサブマシンガンだった。

渡はサブマシンガンを両手で持つと、気を失っている止へと向け、引き金を引いた。

「止めろおおつ!」

「止君!？」

突如、後ろから声が聞こえ、渡は振り返ると、そこには二機の I S が渡へと迫って来た。

一機は勇人であり、勇人が纏っているのは I S、スカーである。

もう一機は楯無だが楯無が纏っている I S は水色を基準とした機体かつ、軽装備であり、背中にあるウイングスラスタは羽が水みたいな蝶の羽を模しており、右手には白いランスを持つていた。

そう、それが楯無の I S、ミス^霧テリアス^纏・レイ^淑デイ^女だった。

二人はさつきまでピットに居たが乱入者である渡を捕らえるべく、千冬や箒を置いて行く形で、アリーナへと来たのである。

二人は止を助けるべく、渡に迫る。刹那、上空から一機の I S が目にも止まらぬ物凄い速さでアリーナの方へと降りてくる。

それは、渡を守る形で背を向け、勇人と楯無と向き合う形で前を向いている。

「なっ!？」

「何よ!？」

「あ、貴方は!？」

勇人と楯無は驚き、渡は I S を纏っている人物を見て驚いていた。

その人物は二十代前半か後半に差し掛かるくらいであり、ショートカットの髪に黒い瞳。爽やかな顔立ちだが服は緑色の I S スーツを纏っていた。

そして、その人物は I S を纏っているが渡とは同じと言うよりも、背中には太刀を模したウイングスラスタが一本しかなかった。

そして、その人物は男性であり、五人目の男性操縦者だった。

「あ、ああっ」

「う、嘘でしょ?」

その男性を見た勇人と楯無、アリーナの観客席にいる女子達は驚きを隠せない。

しかし、男性は楯無と勇人を睨み続けていた。

「……………」

一方その頃、束のラボでは一人の青年がベッドで仰向けに眠っていた。

青年は頭に包帯を巻いており、上半身は裸であり下半身には水色のパジャマを穿いている。

辺りには心電図等が映し出されているモニター等の器具が置かれており、青年の右手には注射の針が刺さっていたがそれは点滴をしているからであった。

それは良いとして、周りには青年以外、誰も居らず、心電図から流れる音だけが辺りに響く。

「……………う、ううん」

刹那、青年の瞼が微かに動き、そして、青年は、一夏は眼を覚ました…………。

第84話

「……っ、月影つきかげさん!？」

渡は自分を守ってくれる形で背を向けている者を月影と呼んだ。一方、月影と言う人物は楯無と勇人を無言で見据えたまま何も言わない。

「な、何者なの貴方は!？」

楯無は右手に持つてるランスの先端を月影に向けながら問う。一方、勇人は月影と渡の二人を鋭い目付きで見据えたまま何も言わない。

が、勇人は内心、ある事を呟いていた。——まさか、あの二人……。勇人は何かに気付く。勇人は彼等が、自分達を育て鍛えてくれたプレデター一族とは別の、とあるプレデター一族の放った刺客ではないかと。

しかし、今はそんな事を考えている場合ではない。突如、月影が右腕を横に伸ばす。それを見た楯無はランスを持ち構え、勇人は右腕に着けている腕当てに装備されているリストブレイドを展開し身構える。

一方、月影は何も言わずに右腕を横に伸ばしていたが後ろにある太刀を模したウイングスラスターが月影の右手の方へとゆっくりと動いた。

楯無は驚き、勇人は眉間に皺を寄せるが月影は太刀を手にとった直後、楯無と勇人へと迫りながら太刀を振る。

「退けっ!」

勇人は楯無を突き飛ばす。刹那、月影の太刀は勇人を斬り捨てる……事は出来なかった。何故なら、勇人はリストブレイドで月影の太刀を受け止めていた。

が、リストブレイドと太刀に共通する鉄と鉄の軋む音が二人の間に微かに響く。

「(グツ……重い!)」

勇人はリストブレイドをで太刀を受け止めたものの、内心そう呟き

ながらも下唇を噛んでいた。

重い、とても太刀の攻撃が重かったのだ。それだけではない、月影は太刀を片手で持っていたのである。

「勇人君!？」

一方、月影は勇人を無言で見据えていた。しかし、そんな二人を、勇人に突き飛ばされながらも軽く持ち堪えた楯無は驚きを隠せず、下唇を噛むと勇人を援護しようとした。

が、そんな楯無に銃弾の雨を浴びせる者がいた。楯無は突然の事に驚くも、楯無に銃弾の雨を浴びせているのは渡であり、銃弾の雨の正体は、渡が両手に持つてるサブマシンガンで楯無へと向けながら引き金を引いていたのである。

「貴女の相手は、この俺だ!!」

渡はそう言いながらサブマシンガンの引き金を引き続ける。そんな渡を見た楯無は歯を食い縛る。

刹那、楯無の周りから水のような物が現れ、水は楯無を守る形で楯無を包み始める。

「何だあれは!？」

それを見た渡は驚くも、周りを水で取り囲まれている形で護られている楯無は不敵に笑う。

「今はそんな事を言ってる場合じゃないでしょ?」

楯無は水の正体を渡に教えるつもりはなく、渡目掛けて突き進む。それを見た渡は驚くも、楯無はランスで渡を風ぎ払う。

渡はランスで風ぎ払われ吹っ飛ばされそうになるも何とか堪え、楯無に対し、サブマシンガンの銃弾の雨を浴びせようとした。

が、楯無はその前に渡へと急接近しランスで渡が両手に持つてるサブマシンガンを叩き落とす。

渡はサブマシンガンを叩き落とされた事に驚く間もなく、楯無にランスで二、三回攻撃を喰らう。渡はランスの攻撃を喰らい怯むも、渡の背中に浮いていた緑色の球体と白い球体が渡を助けるべく、楯無に襲い掛かる。

緑色の球体は犬に良く似た禍々しい生き物のロボットへと変形し、

白い球体は驚に良く似た生き物のロボットへと変形し、二匹は楯無に襲い掛かる。

「貴方達が襲ってくる事も承知よ！」

が、楯無はランスで二匹の生き物型ロボットを返り討ちにした。

「ハウ……ファル!？」

渡は二匹の生き物型ロボットが返り討ちに遭ったのを見て、驚きを隠せず二匹の生き物型ロボットの名を呟く。

因みにハウは犬に良く似た禍々しい生き物の事であり、ファルは驚に良く似た生き物の事である。

そんな渡に楯無は標的を再び渡に定め、ランスで突く。

楯無が渡を押してる頃、月影と勇人は激しい闘いを繰り広げていた。勇人はリストブレードで月影に斬りかかるも、月影は太刀で受け止めると、二人は鐺競り合いになる。

「おい、向こうはピンチだぞ？」

二人が鐺競り合う中、勇人は月影に言う。月影は鋭い眼差しをしながら、勇人を見据えていたが無言を貫いている。

「おい？ 仲間がピンチだぞ？ 何故気にもしない？」

勇人は月影が何の反応もしない事に疑問を抱く。刹那、月影は口を開いた。

「……そんなのは関係ない……奴がどうなろうが死のうが、俺には痛くも痒くもない」

「何？ 貴様何を？」

月影の言葉に勇人は眉間に皺を寄せ再び訊ねると、月影は頬を吊り上げる。

「だから言ったろ？ 俺には関係ねえってな!!」

月影はそう叫びながら太刀に力を入れて、勇人のリストブレードを弾き返す。

勇人はリストブレードを弾き返され一瞬怯むも、月影は太刀を右手で持ち、左手からある武器を展開する。

小型のショットガンだった。月影はショットガンの銃口を勇人へと向け引き金を引く。

ショットガンから一発の銃弾が放たれ、勇人の身体に命中する。それでも、月影は笑みを浮かべながらショットガンの引き金を引き続ける。

勇人は何発もの銃弾を喰らうも何とか堪え、勇人は左手からとある武器を展開する。刹那、勇人の左手が一瞬だけ光る。

それは勇人や月影を巻き込み、月影は光に怯むも、太刀やショットガンを手放し、眼を押さえる。直後、それを見た勇人はチャンスと言わんばかりにレールガンを展開し、月影を撃つ。

月影は勇人の攻撃を喰らう中、勇人はレールガンを放り捨て、月影に体当たりする。

「ぐっ!!?」

月影は身体に激痛を感じながら顔を歪めるも、勇人は月影を体当たりする形で突き進む中、突如、月影を掴みながら空高く上昇し、一定の高さまで到達すると半回転した。

勇人は月影を地面に叩き付けようとしたのだ。しかし、月影は勇人の顔を掴み、勇人に頭突きした。それはとても痛く、普通の人間なら頭蓋骨が割れる程の威力だった。

「あがつ!!」

勇人は頭に激痛を感じるが頭から血を流す。それでも、月影は勇人の頭に二度目の頭突きをした。これには勇人も耐えきれず月影を放してしまう。

これをチャンスと見た月影は歪んだ笑みを浮かべると、今度は自分が勇人を掴み、そのまま勇人と共に地面目掛けて落下する。

刹那、地面に大きな音がアリーナ中に響き渡り、同時に激しい煙が辺りに発生する。

「あっ!?!」

「!!?」

楯無と、何故か観客席にいる女子は突然の事で驚く。煙はまだ消えなかったが徐々に消えていき、音の発生源となった場所や、二つの人影が見える。

そして、煙が完全とは言えないが大半は消え、二つの人影の正体が

判り始めた。それは、月影が歪んだ笑みを浮かべながら、勇人の首根っこを片手で掴みながら軽く持ち上げていた。

勇人は空を仰ぐように顔を上げながら気を失っていたが頭から血を流していた。

「勇人君!!」

勇人を見た楯無は驚き声を上げるが月影は歪んだ笑みを浮かべながら、勇人を横へと投げ飛ばす。勇人は地面に転がる。

「勇人く……ああっ!!」

楯無は勇人を心配するが背中に激痛が走るのを感じた。が、それはハウが緑色の球体へと変形し、楯無が水で守られているにも関わらず、楯無の背中を攻撃した。

楯無は背中に激痛を感じながらも振り返るが今度は横から白い球体が水突き抜ける形で現れ、白い球体は楯無の肩口を攻撃する。

楯無は肩口に激痛を感じ歯を食い縛る。刹那、後ろから何かの水の中を突き破り、楯無は振り返るも首を掴まれる。

「ああっ!!」

楯無は首を掴まれ悲鳴を上げる。楯無の首を掴んだのは月影だった。

「ふっ……はははは!」

月影は狂喜の笑いをしながら、楯無の首を掴んでいる腕に力を入れる。

「アアアッ…………!」

楯無は首を更に締め付けられている事に力ない声を上げるが手に持ってたランスを落とす。一方、それを聞いた観客席にいる女子達は恐怖で顔を歪ませる。

『……せ、生徒達は避難して下さい!!』

放送が鳴る。それはとても遅かったが女子達は悲鳴を上げながら逃げ始める。女子達は楯無が月影に敗れたのではないかと思い、逃げていたのだ。

「お、お姉ちゃん!!」

「お、お嬢様!!」

観客席にいた簪と虚は楯無が殺されると思い心配の声を上げる。

「あ、ああっ……!!」

一方、楯無は首を更に締め付けられながらも意識が無くなっている事に気付く。

視界がボヤけていく、力が無くなっている。ああ、自分はこのまま死ぬのか？……。楯無はそう感じていた。

刹那、楯無はある人物達を思い出す。簪……虚……本音……薰子……両親に従者達……そして……。

「……一、夏、君……」

楯無は目尻には涙を浮かべながら微かに呟く。それは今、一番逢いたい者の名であった。

「!!」?

刹那、月影は上空から誰かの気配を感じ眉間に皺を寄せながら上空を見上げる。

上空から一嫌、更に上空から一機のISがアリーナへと落下するように迫ってくる。

そして、そのISはアリーナへと乱入する形で現れた。そして、そのISを纏っているのは一夏だった。一夏が纏っているのは一夏の専用IS、ケルティックである。

だが、一夏の表情は険しい。だが、一夏が見ているのは、月影に首を掴まれている楯無である。

「更識!? 貴様……ッ!!」

一夏は険しい表情を浮かべながら、月影に怒りの籠った叫び声を上げる。

だが、月影は一夏を見て狂喜の笑いを浮かべ続けていた。

第85話

「貴様……ッ!!」

一夏は、楯無の首を掴みながら狂喜の笑いを浮かべている月影に怒りを向けながらスラストを噴かせる。

一方、そんな一夏を見た月影は「フツ」と軽い笑いを浮かべると、指をパチンと鳴らす。刹那、ファルが球体から驚に良く似た生き物へと変形し、一夏を攻撃するべく、鋭い嘴で一夏の目を抉るとした。

「どけええッ!!」

が、一夏はファルの顔を力一杯殴る。ファルからは金属の軋む音が聴こえたが一夏はファルの翼を掴むと、力一杯放り投げる。

ファルは地面に叩き付けられるも大きな音が聴こえ、煙が発生する。それでも、一夏には関係なかった。

一夏は月影の近くまで迫るが緑の球体が、ハウが一夏に体当たりし、一夏は微かに激痛を感じたがハウは一夏をぶっ飛ばしながらも犬に良く似た禍々しい生き物へと変形し、一夏に右腕に噛み付く。

一夏は地面に叩き付けられるも、ハウは一夏の右腕に噛み付いたまま離れようとはしなかった。

「このクソ犬が!!」

一夏は左手を拳に変え、ハウの右眼を強く殴る。ハウは右眼に激痛を感じたのか一夏を放す形で口を開けてしまう。が、ハウの右眼には火花が飛び散っていた。

一夏はそれをチャンスと言わんばかりにハウの右後ろ足を掴むと、ハウを放り投げる。ハウは地面に転がるも、一夏は月影と向き合う。

月影は少し離れた場所にいるが、一夏は怒りを隠しきれないでいるのと、頭には未だ激痛が走っている事にも気付いていた。

何故なら、一夏は数分前まで眼を覚まし、束に泣きながら抱き着かれるも、束からアリーナで止と鈴が何者かと戦っているのと、楯無と勇人が止めに入った際にまた別の、つまり月影が乱入した事を教えられた。

これには一夏は驚きを隠せず、四人を助けると言い出す。勿論、こ

れには束やクロエ、ビショップが制止するも、一夏は彼女達が危ないと聞かなかった。

その為束は泣く泣く彼を人参ロケットへと乗せ、彼を学園近くにあるアリーナにまで連れていったのである。

因みに連れていったのはクロエであり、クロエはそのまま引き返し、一夏は人参ロケットから飛び降りるもそこは上空であったが、直ぐにI Sを展開した為に問題なかった。

「貴様……!!」

一夏は病み上がりでありながらも、月影を睨む。刹那、月影は笑いながら、楯無を一夏目掛けて投げる。

「っ!？」

それを見た一夏は慌てて楯無を受け止めると、彼女を片手で抱えようと、彼女を哀しそうに見詰める。

「更識……」

一夏は自分の片腕の中で気を失っている楯無の頬をもう片方の手で触り、軽く撫でる。

楯無は死んでいないが気を失っており目には微かに涙の痕があり、首には月影が絞めたであろう手の痕があった。

「更識……勇人……止……鈴」

一夏は三人を見る。近くには仰向けで地面に転がっている勇人、場所は少し離れているが壁に凭れ掛かりながら俯いている止、更に離れた壁近くで俯せに近いように横向けに倒れている鈴。

止は渡が、鈴はハウとファルがやったが、一夏は静かに俯くと、抱いていた楯無をゆつくりと地面の上に仰向けに寝かせる。

刹那、一夏は顔を上げるが憤怒の形相を浮かべながら下唇を噛み、ギロリと鋭い眼差しで月影を睨む。

月影は何故か余裕のある笑みを浮かべながら首を左右斜めに振っていた。一方、一夏は身体が振るわせながら空を見上げながら力一杯叫ぶ。

「ウアアアア……ッ!!」

一夏は力一杯叫んだ。それはアリーナ全体に響くも、一夏が月影へ

の怒りと、仲間達を傷付けた事への怒りをも意味していた。

一夏は叫んだ後、月影を見るや否や月影を指差す。

「貴様……貴様だけは許さねえ!! 貴様は俺の仲間を傷付けた! 絶対に許さねええ!!」

一夏は月影を指差しながらそう言った後、月影は片目でニカツと笑う。が、その行為は一夏の逆鱗に触れる。

「ウオオオツ!!」

一夏はウイングスラスターを噴かしながら、月影目掛けて突き進み、月影を殴ろうと右腕を振り上げ、月影の間近にまで来ると、月影目掛けて右腕を振り下ろす。

刹那、痛々しい音が二人の間に木霊し、同時に月影は吹っ飛ばされる。しかし、一夏は月影を逃がすつもりもなく、月影の片脚を掴むと、月影を振り回し、壁へと叩く意味で手を放す形で投げる。

月影は一夏に投げられるも、数分も経たない内に壁に叩き付けられる。同時に大きくもなく、小さくもない音が壁の方から聴こえた。

「ウアアアア!!」

一夏は怒りの叫び声を上げながらとある武器を展開する。それは一夏の遠距離攻撃型主力武器の一つ、ガトリングガンだった。それも小型でありながらも一発一発が威力の大きい物である。

一夏はガトリングガンを両手に取ると、月影目掛けて引き金を引く。刹那、ガトリングガンから数発の銃弾が放たれ、その全てが月影目掛けて突き進み、それらは全て月影に命中する。

それだけではない、月影がいる壁からは煙が発生する。一方、一夏はガトリングガンの引き金を引き続けているがガトリングガンからは煙が出ており、真下の地面からは空の薬莖が何発も音を転げ落ちる。

が、一夏は憤怒の形相を浮かべ続けていた。それは月影への怒りでもあるが一夏の怒りは収まる気配はない。

アリーナの観客席から虚や本音、簪の止めろと言う一夏への心配の声が聞こえるが一夏の耳には届いてはいない。

一夏は本気で月影を殺そうとしているのと、仲間の無念と楯無の無

念を晴らす意味で仇を取ろうとしていた。

一方、月影は何もしない訳ではなかった。月影はガトリングガンの銃弾の雨を身体中に浴びながらも、一夏の方へと突き進む。

月影は何故か笑っていた。強者に逢えた事とそれを完膚無きに叩ける事に喜びを隠せず、それを楽しみにしているようにも思えた。

「貴様何を笑ってやがる!」

一夏は月影に怒りを感じ、ガトリングガンをぶっ飛ばし続けるも、月影は完全に間近にまで迫ってきた。

刹那、月影は一夏に体当たりし、一夏は吹っ飛ばされながらもガトリングガンを手放す。

直後、月影は一夏の片脚を掴むと、一夏を地面に叩き付ける。一夏は地面に叩き付けられるも、月影は一夏を今度は背負い投げする形で再び地面に叩き付ける。

月影はそれに飽きたらず、一夏を何度も地面に叩き付ける。月影はいつの間にか、狂喜の笑いを浮かべていた。

彼が何故そこまで笑っているのかは誰にも解らないが、月影は今、一夏を死の淵まで追い詰める事に喜びを隠せないでいる。

「こなくぞがああ!!」

一夏は悲痛の声を上げるが月影は突然、一夏を叩き付けるのを止めると、一夏を近くへと放り捨てる。

一夏は投げられた直後に地面に転がりるも俯せに倒れた。

「うぐあつ……あがつ」

一夏は身体に走る激痛を堪えながら顔を上げ、月影を睨む。月影は何故かニツコリと笑っていたが、一夏の方へと近付く。

「うぐつ……あがつ」

一夏は立ち上がろうとして身体を起き上がろうとしたが身体が言う事を聞かなかった。

そして、一夏は月影に頭を鷲掴みされると月影に持ち上げられる。

「うぐつ……くそがああッ……!」

一夏は月影に対し、そう吐き捨てる。一方、月影は狂喜の笑いを浮かべながらも片方の手を拳に変え、一夏の腹を殴る。

一夏は腹を殴られ声を上げるがとても小さかった。それでも、月影は再び一夏の腹を殴ろうとした。

「……チツ」

突然、月影は表情を険しくすると悔しそうに舌打ちし、一夏を放す。

一夏は地面の上に崩れ落ちるも、力を振り絞って月影を睨む。

月影は悔しそうに一夏を見下すと、一夏に背を向け、急いで渡の方へと向かう。渡は楯無に倒されたのか俯せに倒れており、気を失っていた。

月影は渡の方へと向かう、渡の近くまで来ると、渡を肩口に寄せ抱えると、指をパチンと鳴らす。

刹那、一夏に倒されたハウとファルが突然、緑の球体と白の球体へと変形し、月影の方へと突き進み、二人の近くで止まり、宙に浮く。

同時に、月影の太刀を模したウイングスラスターも月影の方へと突き進み、二人の近くで止まると、月影の後ろで宙に浮く。

月影は一通り確認した後、渡を肩で抱えながら鶺鴒のように上空目掛けて突き進む。二つの球体も追い掛けるが二人と二つの球体はアリーナから離れると、何処かへと飛び去って行った。

「ま……待てー!」

その間に一夏は倒れながらも月影に手を伸ばすも、月影が渡を連れ、二つの球体も従っていく形で上空を飛んでいくのをただ見ているしか出来ないでいた。

が、一夏は彼等が上空へと飛び去って行ったの見た後、力一杯叫んだ。

「あ、ああああああッ!!」

一夏は叫んだ。彼は、自分は月影に負けたと思っていた。あれだけのガトリングガンの銃弾をぶっ飛ばしながらも彼はピンピンとしており、彼は痛みをも感じていなかったのか笑い続けていた。

一夏から見れば屈辱以外何でもなく、自分は彼に負けたと感じていたのだ。

「ああああッ!! あああーっ!!」

一夏は叫び続けた。それはアリーナ全体に木霊するも、それは教員

部隊が来るまで続いていた。

勿論、そんな一夏を見ていた簪、虚、本音は何も言えず、彼を憐れみの目で見続けていた。

第86話

月影が渡を肩で抱え、ハウとファルなる生き物へと変形する緑色の球体と白の球体がアリーナから逃げてから数分後、アリーナは今、慌ただしかった。

アリーナでは一夏、楯無、鈴、勇人、止の五人が医療班に診て貰っているが五人全員、ISを解除していた。一夏は兎も角、楯無と鈴、勇人と止は医療班に身体を診て貰っている中、楯無だけは違った。

楯無は医療班の女性達に診て貰っているも近くには簪、虚、本音が心配そうに楯無を見つめている一方で、一夏は勇人と止の近くにいた。

勇人は兎も角、止はさつき気が付いたが何故か膝を抱きながら俯いている。

「……渡」

止は不意に自分の双子の弟、渡の名を呟く。止はさつき、一夏から渡が月影と言う人物に肩で抱えられる形でアリーナから飛び去っていった事を教えられた。

そのせいか、止は哀しそうに膝を抱きながら俯いていたのだ。勿論、止自身は渡が生きていたのと再び逢えた喜びよりも、渡が自分に憎悪を向けている事も愕然としている。

そんな止に一夏は止の肩に手を置こうとしたー出来なかった、一夏は止の肩に触れようとした瞬間、何故か躊躇し、下唇を噛みながら、止の肩に置こうとした手をゆつくりと拳へと変えると拳に力を入れ、身体を震わせる。

一夏は自分の無力さに悔しさを隠しきれないでいた。自分は月影と闘ったが自分は負けたようにも思えた。

あのこびり付くような笑い顔と、ガトリングガンの銃弾の雨を浴びながらも月影はピンピンとしていたのだ。

一夏から見れば屈辱以外かつ、怒りが込み上げてくる。が、一夏はそれを顔には出さず、空を仰ぐ。空は蒼かったが学園自体や自分の心は曇っている。

「(次逢った時は……絶対に、倒してやる)」

一夏は自分にそう決意付けさせる。すると、遠方から声が聴こえた。

「一夏さん!! 会長が眼を覚ましました!!」

叫んだのは虚だった。虚は一夏に楯無が眼を覚ました事を一夏に教える為に叫んだのだった。

一夏は虚の叫び声を聞いて驚くも、ふと、止の方を見る。

「行って良いよ……」

止は俯きながら、一夏にそう答え、それを聞いた一夏は驚くも、止は顔を上げ、一夏に哀しい笑みを向けながら言葉を続ける。

「行ってきな一夏、彼女は、更識さんは一夏に逢いたがつっていたよ？」

一夏が行けば彼女は喜ぶし、何より彼女の哀しい気持ちを埋められるのは一夏だけだよ？」

「だけど止……お前は……嫌、ごめん」

一夏は止に何かを言い掛けるが止を気遣い首を左右に振ると、哀しそうに「後でな」と言い残し、駆け足で楯無の所へと向かった。

「(……渡)」

止は、楯無達の所へと向かう一夏の背中を眺めた後、再び俯くと渡の名を呟いた。止にとって、渡は大切な弟だからだろう。

が、その渡は敵として、自分を憎悪の対象として敵意の籠った目で見ていた。止から見れば哀しいとしか言いようがない。

止は身体を震わせはしなかったが目尻には涙を浮かべてはいないが、その込み上げてくる哀しみを、気持ちを強く抑えていた。

「更識!」

止に促され、一夏は楯無の所へと来ると、真っ先にそう言った。楯無の回りには簪、虚、本音、その他の医療班の女性が居たが簪、虚、本音は一夏を見やっていた。

彼女達は皆、一夏を心配そうに見ている中、楯無は一夏を見て笑みを浮かべていた。

「一夏君……!」

楯無は一夏を見て喜びを隠せなかったが目尻には涙を浮かべてい

た。一方、一夏は楯無の近くで屈むと、楯無の右手を両手で包むように掴む。

「一夏君……無事だったのね？」

楯無は一夏を見ながら真つ先にそう答えた。楯無は一夏が無事である事に喜びを隠せないが、何故か上半身を起き上がろうとしている。

「お嬢様、寝ていなきや駄目です！」

虚は慌てて楯無にそう言うも、楯無は首を左右に振る。

「良いのよ……私は一夏君に……っ」

楯無は虚を制止すると、一夏の胸にゆっくりと抱き着く。

「お、おい!？」

楯無の行動に一夏は戸惑うも、楯無は左手を一夏の背中へと回し、一夏の胸の中で身体を震わせていた。

——良かった……。楯無は一夏の胸の中でそう微かに呟く。一夏はあまり聞き取れなかったが、胸に濡れる感触を感じた。

一夏は直ぐに気付くも、無言で眼を附せ、楯無の右手を放すと、左手を楯無の背中へと回し、右手を楯無の頭へと回すと楯無の背中と頭を撫でる。

「ごめん……俺が早く来ていればこんな事にはならなかった……」

「別のいいのよ……私は……私は一夏君が無事ならそれで良い……それで良い！」

楯無は一夏の胸の中で言葉を続けた。楯無は一夏が無事であるならそれで良かった。

一夏が生きていただけでも、楯無自身にはこれ以上の喜びを感じ、一夏が生きている事を裏付けるのか意味しているのかは判らないが、楯無は一夏の温もりを力一杯感じようとしていた。

一夏も一夏で楯無の我が儘を受け入れていた。それは一夏なりの償いなのかもしれないが一夏は無言で楯無の背中や頭を撫で続けていた。

そんな二人を虚は涙ぐみながら微笑み、本音と簪は微笑ましそうに見守っていた。刹那、アリーナの入り口から一人の女子生徒が慌ただ

しそうに駆け足でアリーナの方へと来た。

箒である。彼女がアリーナへと来た目的は勿論、一夏を心配しているからであった。箒は一夏を見付けるや否や、一夏の名を叫ぶ。

「一夏!!」

箒が一夏の名を叫ぶと、それを聞いた一夏は瞠目し下唇を噛む。一方、虚と本音の布仏姉妹は驚き、止は顔を上げ驚き、未だ気を失っていた勇人は眼を覚まし、鈴はまだ気を失っており、医療班の一部が箒の言葉に驚き顔を上げる。

一方、箒は駆け足で一夏の元へと迫るも一夏と楯無の二人が抱き合っている事に気付き、眉間に皺を寄せながら歯を食い縛る。

「貴様ーっ!!」

箒は楯無に怒りを覚える。

「来ないで!!」

刹那、そんな箒を怒りが籠った叫び声で止めようとした人物がいた。それを聞いた箒は驚き止まるも、近くにいた医療班達、止は驚き、勇人は上半身を起こし、虚と本音は驚き、一夏も驚く。

が、一番に驚いていたのは、楯無だった。アリーナにいる者の殆どが叫び声を上げた者を見やる。そして、叫び声を上げたのは、簪だった。

簪は箒にそう叫んだ後、立ち上がり、一夏と楯無を守る形で背を向け、箒と向き合うと両手を広げる。

「来ないで……お姉ちゃんが今一番辛い思いをしてまで一番逢いたかった人とのゆつくりとした時間を邪魔しないで!」

簪は箒にそう言う。一方、箒は眉間に皺を寄せながら怒る。

「煩い! その女は一夏をタブラカしたのだ! そんな奴は一夏を奪った……に過ぎない!」

「それは違う! お姉ちゃんは一夏をタブラカした訳じゃない! 一夏はお姉ちゃんを選んだ……それだけだよ!」

「それは違う! その女は一夏をタブラカしたに決まってる!」

「そんなのは貴女の独り善がり! それにお姉ちゃんを悪く言わないで!」

簪は箒に怒る。が、それを聞いた楯無は瞠目していたが箒は簪に言い返す。

「そんなの嘘に決まってる！ その女は一夏をタブらかしたのだ！ それにお前はその女の妹だろ!? なのに何だ!? お前は一夏が好きだった場合、一夏が姉に取られたらどうするんだ!? それにお前がその女の妹だとは知らなかったし、お前の事はあまり知らない！」

箒は簪に文句を言う、簪は俯く。確かにそうだった。箒は箒とは初対面だがそんなのは関係なかった。

「どうした？ 何も言い返せないのか!？」

箒は簪が何も言い返せない事に怒るよりも勝ち誇った表情を浮かべていた。が、簪は顔を上げ、箒を見据える。

その表情は怒りと言うよりも何かを決意したようにも思える。

「確かに貴女の言う通りかも知れない……でも、そんなのは事実ではない。私は貴女とは今逢ったばかりの初対面とは言っても、私は貴女を許さない」

「許さないだと？ 何をだ?」

箒は眉間に皺を寄せながら訊き返すと、簪はそれを箒に言った。

「貴女は私のお姉ちゃんを、更識刀奈を馬鹿にした……私はそれが許さない……それだけじゃない、貴女は一夏君が好きと言っても、貴女は単に一夏君に付き纏ってるだけ——それじゃあ、一夏君は振り向きもしないし、一夏君を苦しませているだけ」

「な……何だと!？」

箒は怒るも簪は言葉を続ける。

「それよ。それだから一夏君は貴女を嫌い、お姉ちゃんを選んだ……でもそんなのはどうでもいい……それよりも謝って」

「何をだ?」

箒は惚けるも、簪は一瞬下唇を噛むとそれを箒に言った。

「お姉ちゃんに謝って!! 貴女にお姉ちゃんを馬鹿にする理由はない! お姉ちゃんは私にとって大切な人であり家族だから! だから謝ってよ!」

箒は箒に楯無に謝罪するよう訴える。一方、そんな簪を後ろにいた

楯無は驚きを隠せなかった。

「か、簪ちゃん……」

楯無は泣きそうになる。それは簪が自分を思っている事、それは簪自身が自ら口にした姉への思いを、姉に悪口を言った簪に怒りをぶつけていた。

が、楯無だけではない。虚も本音も簪の言葉に驚きを隠せないでいた。

「貴様、言わせておけ……っ!?!」

簪は簪に詰め寄るとした刹那、簪は意識が遠退いていくのを感じ、膝を突くと、そのまま前に倒れ掛かり、俯せに倒れた。

「は、勇人!?!」

そして、簪の後ろにいたのは勇人だった。勇人は無言で簪の後ろの首を叩き、意識を奪う形で簪に手刀を喰らわせたのである。

一夏は勇人の行動に驚くも、勇人は無言で簪を見下ろし続けた。た。

第六章 「再会、招待——そして和解」 第87話

あれから一時間後、一夏達は保健室にいた。保健室には一夏、楯無、簪、本音、勇人、止、鈴の七人がいた。が、楯無と鈴は保健室に設けられているベッドで横になっており、虚は生徒会の仕事——つまり、学園長と、とある人物と共に箒や千冬の事で話をしていた。

「更識、鈴……もう大丈夫か？」

一夏は、ベッドで横になっている楯無と鈴に訊ねると、楯無は哀しい笑みを浮かべながら、鈴は少し笑いながら首を左右に振る。

因みに鈴は二十分前に目を覚ましたが何かあると危険と言う事で保健室のベッドで横になっていた。

「大丈夫……もう殆ど大丈夫だから」

「私も……未だ少し痛むけどね？」

「そうか——それよりも二人も大丈夫か？」

一夏は勇人と止の二人にも訊ねると、勇人は無言で首を左右に振り、止は俯いたまま頷く。

「そうか……それよりも奴らは何者だったんだ？」

一夏は何かを考え始める。それは一時間半前に襲撃してきた者達——それは、渡と月影と言う人物と、犬に良く似た禍々しい生き物へと変形する緑の球体と、鷲に良く似た生き物へと変形する白い球体の事である。

渡は兎も角、月影は何者なのだろう——嫌、今はそんな事を考えている暇はなかった。一夏は月影は元より、渡の事を考えていた。

「止の双子の弟、渡——先ずは彼奴をどうにかするのが先だな」

一夏の言葉に止は瞳目しながら顔を上げ、一夏を見る。

「い、一夏、い、今なんて？」

「アツ……嫌、彼奴を此方へと引き入れられないかなく……って」

一夏の言葉に止は眼を見開きながら訊ねた。

「一夏、そ、それって」

止が訊ねると、一夏は哀しそうに笑いながらゆつくりと頷いた。

「ああ……俺は奴を、渡を此方に引き込もうと思つているんだ」

一夏は止に渡を味方に引き入れる理由を話した。一夏は、止がさつきから落ち込んでいるのを見ていられなかつたからである。何故なら、一夏は渡の事はあまり知らないが止から訊いた事はある。

それに渡とは未だちゃんと向き合つてはいないが渡は気を失つていたが少しだけ逢つた。

それなら未だ良いだろう——が、一夏は渡を此方の味方に出来ないかを考えていた。

渡が味方なら力強いのと、一夏はある事を危険と感じていた。

「渡と月影は男性操縦者だ——世間から見れば第四、第五の男性操縦者……つまり」

「世間は彼等を篠ノ之博士同様、血眼になつて捜し出し、モルモットにする危険もあり、女尊男卑主義者なら殺しに掛かる——と、言いたいんだろ？」

一夏が何かを言い終える前に、勇人が腕を組みながらそれを代わりに言うように言葉を述べた。

それを聞いた一夏、楯無、簪、本音、鈴は驚き、止は眼を見開きながら身体を震わせる。

「は、勇人——そ、それつて、ど、どういう事だよ？」

止は震えながら、勇人に訊ねると、勇人は溜め息を吐きながらそれを言った。

「止、お前は馬鹿か？ 世間から見れば奴らは恰好の実験材料——もしも奴らが何処の企業にも属していないのなら、企業側は無理矢理でも引き入れるか、女尊男卑の奴らなら暗殺もしかねない——強いて言うなら、奴らは指名手配犯級の者達だからだ」

「そ、そんなのつて……渡はどうなるんだよ!？」

止は勇人に詰め寄ると、勇人は再び溜め息を吐き、再び言葉が続けた。

「止……奴らは貴重な人材だ——奴らは世界中から欲しがられる存在だ——そうなれば、奴らは生き抜く保証は無い——奴らは今頃どうし

ているのかも、俺には判らない——止、お前もそうだろう？」

勇人の指摘に止はバツの悪そうな顔をする。確かにそうだった。そんな止を見た勇人は無言で俯く。

「止、俺が言うのもなんだが、お前と渡は双子の兄弟だって事は知ってる。だが同時にお前らの絆は何処かで亀裂が入った」

「違う!!」

勇人の言葉を止は否定するように叫んだ。それを聞いた簪、本音、鈴は肩を竦め、一夏は何も言わなかったが勇人は眉間に皺寄せる。一方、止はそれを話すように口を開いた。

「それは違う……彼奴は、渡は俺を憎んでいる筈だ——そうだろうな……あの時、俺は奴を見殺しにしたんだから……」

止は肩を震わせながらある事を言い始めた。三年前、止は渡と共に、とある火災に巻き込まれた。

あの火事の中、止は火の影響により崩れ落ち手来た瓦礫により、足を挟まれた。そんな中、止は渡の名を叫んだ。何度も、何度も叫んだ。勿論、渡は兄、止を捜していた。

そして、渡は遠くで止を見つけた際、止を助けるべく、止の元へと駆け寄ろうとした。が……。

「そんな時、天井が音を建てて崩れ落ち、そこで……っ」

止は下唇を噛むも言葉を続ける。

「渡が……渡が俺の目の前で……瓦礫に埋もれた……」

止はこれ以上何も言わなかった。その代わり、両手を拳に変えながら震えていた。止は辛かった——何故なら、止は渡が瓦礫に埋もれる瞬間を唯一目撃した人物でもあった。

彼は目撃者でありながらも、弟の死を目撃した兄でもある。

止はその後、弟を呼び掛け続けていたが煙を大量に吸い、そのまま意識を失いそうになるも、一夏やチョッパーに助けられ一命を取り留め、事なきを得た。

止はその後、プレデター達に怯えながらも、一夏が彼等の元で修行をしていると訊き、自分も強くなりたいと申し出た。

それは、自分は渡を助けられなかった事、自分の無力さを知った事

と、渡への償いをする為に強く生きて行こうとしたのである。

それに、何時も気丈に振る舞っていたのも、周りに心配掛けさせない為でもあった。

が、渡が生きていたのなら、自分は何の為に生きていたのだろうか
と、悩み始める。本当ならチョッパーに相談したかったが彼は今、此
処には居ない。

「トツマ……」

そんな止に本音は止に歩み寄り、慰める。

「大丈夫だよトツマ、トツマは何も悪くないよ〜」

本音は止に慰めの言葉をかける。周りも止に慰めの言葉をかける
も、止は哀しい笑みを浮かべる。

「みんなありがとう……でも」

止は保健室から出て行こうとして扉の方へと歩き出す。一夏が呼
び止めると、止は立ち止まり、一夏達を見る。

「ごめん……でも、少し一人になりたい……じゃ」

止はそう言うと、保健室の扉を開け、外に出ると、後ろ手で扉を閉
める。

「トツマ〜」

本音が追いかける為に保健室を出て行った。保健室には一夏、楯
無、簪、鈴、勇人の五人しかいなかった。

「止君、大丈夫なの？」

「止は大丈夫だ——彼奴は強い奴だ——あのくらい、立ち直れる筈だ」
楯無が心配するように言うと、勇人は心配ないと答えた。

「でも、渡って子は止君の弟なんですよ？ 兄弟が兄弟の心配をする
のは当たり前じゃないの!？」

「そうだよ。霧崎君は弟の事を心配している——仲が良い証拠だよ
?」

鈴と簪も指摘するが勇人は溜め息を吐きながらそれを言った。

「それは無理だ。奴の、奴の兄弟の問題だ——部外者である俺達が関
わる事ではない——何より、俺達は何を言っても、止と渡の霧崎兄弟
の溝は、彼等が埋めるしか無い——俺は用があるから、寮に戻る」

勇人はそう言うと、保健室を出て行った。途中、勇人は「家族か……」と寂しそうに呟いたが一夏達には聞こえなかった。そして、勇人は保健室を出て行くと、保健室には一夏、楯無、簪、鈴の四人しかいなかった。

嫌、それは良いとして、保健室には不穏な空気が流れていた。

「それよりもさ、一夏、貴方は大丈夫なの？」

「何がだ鈴？」

鈴は一夏に訊ねると、一夏は訊き返す。

「いえー貴方は月影って言う奴に何度も地面に叩き付けられたんでしょ？ 普通だったら頭をやられている筈だったんでしょ？」

「大丈夫だ鈴、あの時、絶対防御が発生していたから何とかなかったーまあ、発動していなかったら俺は死んでいたのかもしれない」

一夏の言葉に鈴は「そう……」と言いながら一夏から目を逸らす。

が、鈴は一夏に罪悪感を抱いていた。勿論、一夏がこうなったのも全て自分のせいだと思っていた。鈴が悪い訳ではないが、鈴自身、罪悪感を抱いている為、周りが何を言っても、鈴には自分を責めるに違いない。

「それより」

「一夏君」

一夏は鈴に何かを言おうとしたが楯無が遮る。

「何だ更識？」

一夏は楯無を見ると、楯無は何故か頬を紅くしていた。一方、一夏は眉間に皺を寄せながら首を傾げていた。

「どうした更識？ 熱でもあんのか？」

一夏は楯無の額に手を当てる。——っ!? ——。一夏の行動に楯無は顔を真っ赤にする。

一方、一夏は何故か首を傾げていたが、それを見た簪は不意に呟いた。

「鈍感……」

「何か言ったか？」

簪の言葉に一夏は訊ねると、簪は「何でもない」と言っつて首をピイツ

と振る。

「何だよ一体？ まあいい。それよりも更識、どうした、熱でもあるのか？」

一夏は楯無に訊ねると、楯無は頬を紅くしながら首を左右に振る。

「熱がある訳じゃないの……」

「だったら何だ？ 用がないのなら別に良いだろ？」

「違うわー用があるわ」

「だったら何だ？ 用件を早く言え？」

一夏は楯無の額に当てていた手を当てるのを止める形で離れさせると、腕を組みながら呆れる。

そして、楯無は恥ずかしそうにそれを言った。

「一夏君……ゴールデンウィーク——つまり、連休の間、私や簪ちゃんの家に来てくれない……かな？」

楯無は恥ずかしそうに言う。そして、それを聞いた一夏は「はっ？」と恍けた。

第88話

「俺が、お前やお前の妹の家に？」

楯無の言葉に、一夏は怪訝な表情を浮かべながら訊き返すと、楯無は深く頷く。

しかし、一夏は楯無の言葉に疑問を感じていた。楯無と簪の更識姉妹が生まれ育った家、更識——それは古くから伝わり、暗部の一族でもあり、由緒正しき家でもあり、この二人はそこのお嬢様でもある。

一夏から見れば自分は一介の庶民にしか過ぎず、そんな昔から暗部を生業とする家の敷居に足を踏み入れるのは夢のまた夢である。

もし足を踏み入れたとしても、自分は更識家から見れば異様な存在だろう。一夏は楯無の言葉にまだ解らないでいる中、楯無が口を開く。

「実はね一夏君……虚ちゃんから聞いたかも知れないけど、私が楯無の名をやっていく自信が無いって、知ってるわよね？」

楯無の問いに一夏は無言で頷くと、楯無は哀しそうに笑うと再び言葉が続けた。

「そう……勿論、それは本当よ……それで私は刀奈として生きたいと思っていた……それに、一夏君にまた逢いたいと思っていた」

楯無の言葉に一夏は瞠目する。が、楯無は言葉が続ける。

「一夏君に逢って、一夏君に謝り、一夏君と一緒にいたい——私は一夏君の我が儘を受け入れたかった……家の事で一夏君を巻き込んでしまった罪悪感もあつたけど、私はあの時、一夏君がこの学園に入学した時、真っ先に一夏君に逢いたかった……なのに、なのに私は一夏君に思わず、抱き着いちゃった」

楯無は言葉が続けるが恥ずかしそうに頬を紅くする。それを聴いた一夏は呆れるも、楯無は言葉が続ける。

「それは良いかも知れない……でも私が一夏君を家に招き入れたのは別の理由があるの」

「別の理由だど？」

一夏の言葉に楯無はゆっくりと頷く。

「ええ、私が一夏君を家に招き入れたい理由――それは一夏君に父さんや母さん、他の皆に逢わせたいから」

楯無の言葉に一夏は眉間に皺を寄せ、簪は眼を見開く。

「実はね、一夏君に私や簪ちゃんの両親や従者の皆に逢わせたい理由があるの……」

楯無は一夏に訳を話始める。それは楯無が部屋に閉じ込もっている時、両親が部屋の扉の前にまで来ると、自分達も一夏を捜していると言い出した。

これには楯無も驚くも、両親は自分達の狂言誘拐のせいで一夏なる健全な青年を人殺しにさせてしまった事を後悔していた。

もしも彼に逢える事が出来れば、彼に謝りたい――許されない事や謝っても彼の罪は消える事はない事も判っている――それでも彼に逢い、謝りたい、と。

「父さんや母さんは後悔していた――だけど私や簪ちゃんも、貴方に後悔している……」

楯無は起き上がると、潤んだ瞳で一夏を見据える。

「お願い一夏君、私や簪ちゃんの家に来て……両親を、従者の皆を元気付けて上げて……お願い」

楯無はそう言った後、軽く俯いた。一方、そんな楯無に簪は宥め、鈴は何も言わず俯く。だが、一夏は腕を組んだまま楯無を細い目で見ていた。

それは良いとして、一夏は何故か悩んでいた。自分は楯無の願いを聞き入れるのか、それとも此処は断るべきなのかと。

勿論、どちらも間違った選択である事にも気付いていた。前者の場合には更識家の者達を苦しめるだけであり、後者はもつと苦しめるだけである。

故にどちらも自分には関係ないが半分関係ある事だろう。一夏は少し悩んだが楯無の言葉に、ある事を思い出す。

両親――それは一夏にとって嫌な言葉でもあった。自分の両親は小さい頃に蒸発し、何処で何をしているのかは判らない。

それに自分は束の所に居たが束に両親の事を調べて貰おうと考えていなかった。調べば調べばで面倒くさいからだ。

それに自分は両親の温もりを知らないー嫌、知りたくもなかった。両親は自分やあの女を捨てた、あの女は自分の事を見ていなかった為、自分は家族に愛されていないと一夏は思っていた。

「……………」

一夏は悔しそうに下唇を噛むと、身体を翻すー肩を震わせていた。そんな一夏を見た鈴は何かを思ったのか、何も言わなかった。

「一夏……貴方まさか）」

鈴は気付いた。彼は、一夏は両親の事を思い出したのではないのか、と。鈴は小学校の頃、一夏が両親が居ない事を教えてもらった事がある。

その為、鈴は一夏が両親の事を思い出しのと同時に、一夏が両親に憎しみを抱いているのではないのかと、鈴は思った。

が、鈴もまた両親の関係で寂しい思いをしていたー鈴の両親は離婚したのである。親権は母の方へと行ったが鈴は両親が寄り戻すのを第一に望んでいた。

しかし、鈴はその事を今話す訳にはいかなかった。言え言えで一夏を苦しませるのではないのか、と。鈴は一夏に悩みを言えず下唇を噛む。

一方、一夏は楯無と向き合う為に振り返る。一夏の表情は険しくそして悲しい。

「一夏、君？」

楯無と簪は一夏の顔を見て疑問を浮かべると、一夏は俯き口を開いた。

「更識……俺はお前の願いは聞き入れる事は出来ない……」

一夏の言葉に楯無は眼を見開くも、一夏は言葉を続ける。

「更識……俺には両親は居ない……」

「えっ!？」

一夏の言葉に更識姉妹は驚く。が、一夏はまだ言葉を続ける。

「更識……俺は両親の温もりを知らない、俺には両親が何をしている

のかも知らない……それに俺はずっと一人だった——親友が居ても、俺には家族の温もりを知らない」

一夏はそう言いながら下唇を噛むも直ぐに続ける。

「俺は家はあったけど、そこは帰る場所とは思っていなかった……あの女が居ても居心地が悪かった——世間も俺をあの女の附属品として見てくれなかった」

一夏は肩を震わす。

「俺は家族と言う暖かい物を知らない……ずっと孤独だった……俺は家族を欲しいと思っていなかった、帰る場所もなかった……」

一夏は顔を上げる。

「だから更識、俺は家族と言う物がある場所に居たくない……俺には一人でいる方が良い——嫌、本当は彼奴と——嫌、それは今は別が良い……だからお前の願いを聞き入れる事は出来ない」

一夏はそう言うと、身体を翻し、保健室を出ようとして歩き出した。

「一夏君……っ」

楯無はベッドから降り、一夏日掛けて走る。刹那、楯無は一夏の背中に抱き着く。

楯無の突然の行動に一夏は驚きはしなかったが、簪と鈴は瞠目しながら頬を紅くしていた。

「どういっつもりだ、更識？」

一夏は背中に抱き着いて来た楯無に問うと、楯無は額を一夏の背中にくっ付けながら答えた。

「一夏君、ごめんなさい……私はそれを知らなかった……それでも、私や簪ちゃんの家に来て」

「だからそれは……」

「私達の家が帰る場所だと思って！」

一夏が何かを言い掛けるも楯無は叫んで遮らす。それを聞いた一夏は無言になるも楯無は言葉を続ける。

「一夏君……私達の家が帰る場所だと思って……私が一夏君に家族の大切さを、温もりを教えてあげる……私が、一夏君の心にある大きな傷を癒してあげる！ 私が一夏君が辛かった事を知りたい！ 一夏

君が寂しくないように努力する！」

「楯な……」

「貴方は一人じゃない！」

一夏が再び何かを言い掛けるが楯無は再び遮らす形で叫ぶ。それはさつきとは違い、一夏は肩を竦めるが楯無は言葉を続けた。

「二夏君、貴方は一人じゃない！ 貴方には勇人君や止君、鈴ちゃんや篠ノ之博士、それに貴方を心配している人達もいる！ それに、それに私も貴方を心配している！」

楯無はそう言うと、両手を一夏の腹に回す。

「二夏君……貴方は私に言ったじゃない、お前は一人じゃないって……なのに貴方は自分が言った事は人に言えない事じゃない……貴方は私に嘘を付いたの？」

楯無の問いに一夏は答えない。が、楯無はある事を言った。

「二夏君……これは言いたくないけど、私には少し判る——貴方は本当は優しい人だって」

「俺が優しい人？」

楯無の言葉に一夏が訊ねると、楯無は答える。

「ええ、貴方は本当は優しい人——私がエレナ先生に殺されそうになった時、篠ノ之さんに暴力を震われそうになった時、私のせいで周りに誤解されそうになった時、私が織斑先生と一対一の話をすると聞いて心配した時も、貴方は全て私を心配し守ってくれた……それだけじゃない、私を守る為にクラス中に怒ったり、私を責めようとしたかった……」

楯無は今までの事を一夏に話した。勿論、一夏は楯無を箒から守る為でもあり、千冬や箒に怒りを感じた為でもある。

「それに、それに、一夏君……私は、私は……」

楯無は少し恥ずかしそうに口ごもるも、何かを決意し叫んだ。

「二夏君……私は貴方が好き!! 私は貴方の優しさに惹かれた——それで貴方が好きツ!!」

楯無は一夏に告白した。それは楯無の本音でもあった。が、それを聞いた簪は眼を見開きながら頬を紅くし、鈴に至っては顔を真っ赤に

していた。

「ぎ、更、識？」

一方、一夏は眼を見開いた。が、楯無は頬を紅くしたまま口を閉じながら強く瞼を閉じていた。

しかし、楯無の告白は一夏の心に届いたのか、一夏はどんな反応するのかは一夏しか解らないのも言うまでもない。

そして保健室は、楯無の告白のせいで重苦しいと言うよりも恥ずかしい空気が流れていた。

第89話

「さ、更識?」

一夏は背中に抱き着いている楯無の言葉に驚きを隠せないでいた。一夏は、楯無が自分に想いを寄せていた事と好意を寄せている事に気が付かなかつた。

否、一夏は楯無に恋愛感情を抱いている訳ではなく、筭から守るべきの存在であるからだ。

その為、一夏は楯無の言葉にまだ驚きを隠せないでいた。一方、楯無は恥ずかしそうに頬を紅くしていた。

さっきのは楯無の気持ちだった。しかし、一夏は何かを言おうとしたが楯無は突然、一夏から離れ保健室の扉の方へと駆け寄り、扉を開けると廊下の方へと向かう。

「お姉ちゃん!」

楯無の行動に一夏は驚くも、簪は姉の後を追い掛ける為に保健室を出ていった。

「お、おいお前ら!」

一夏は更識姉妹が出ていった事に驚きを隠せない。そして保健室に残ったのは一夏と鈴だけであった。

「全く、あいつらは何なんだ?」

一夏は呆れながら、鈴に訊ねる。一方、鈴は何故か何も言わず起き上がると、ベッドから降り立ち上がると、一夏の方へと歩く。

「鈴?」

一夏は鈴の行動に疑問を抱き、鈴と向き合うように身体を翻す。一方、鈴は一夏の前に佇んだまま、何も言わず俯き続けた。

「鈴、どうしたんだ?」

一夏は鈴に訊ねると、鈴は微かに口を開いた。

「ねえ一夏? 一夏は彼女の事をどう思ってるの?」

鈴の言葉に一夏は眼を見開くも、鈴は顔を上げ、一夏を見据える。

「だから、会長の事よ? 一夏は会長の事をどう思ってるの?」

「どう思ってるって……俺は」

鈴は呆れて溜め息を吐くと、それを指摘した。

「貴方は馬鹿なの？ 会長はね、貴方に告白したのよ？ それに恋人同士なのに何故告白の事を間に受けないの？」

「嫌それは……ッ」

鈴の言葉に一夏は戸惑い、それを見た鈴は再び溜め息を吐くと、あの事を言い始める。

「ねえ一夏？ あの頃の約束を覚えてる？」

「えっ、約束？」

「ええー私の作った酢豚を毎日食べるって約束？」

「あ、ああ……それがどうしたんだ？」

「……あれはね、私が唯一、大切な人に言った言葉だったの」

「大切な人……まさか!？」

一夏は何か気付く。嫌、一夏は気付かなかったと言えば良いだろう。何故なら、一夏はあの時、鈴の言葉を真に受けてはいないと言うよりも、あれは単なる約束だと思っていた。

しかし、実際は違う。あれは鈴の一夏への告白の約束でもあった。その為鈴は一夏に好意を寄せていた為、あんな事を言ったのである。「やっと気付いた？ そうよね……でもあれは私の告白でもあった。酢豚を毎日作ると言ったのは、一夏とずっと一緒に、一緒に居たいと言う意味でもあったのよ？ だけどそれはもう意味は無いかも知れない……でも、これだけは言わせて」

鈴は瞑目するーそして瞼を開き、自分の思いを一夏にぶつける為に口を開いた。「一夏……私は貴方が好き！ これは嘘じゃないー私は貴方が好きなの！」

鈴は自分の気持ちを一夏にぶつけた。その証拠に鈴は頬を紅くしている。余程、恥ずかしかつたのだろう。

そんな鈴の告白に一夏は瞠目していたー嫌、一夏は楯無だけでなく鈴が告白してきた事、鈴が自分に想いを寄せていた事に気付かなかつたのである。

一夏から見れば、鈴は幼馴染みであり友人としか思っていなかったのだろう。それ以前に、鈴が中国に帰国する前に、一夏に言った「酢

豚を作ってあげる」——あれが鈴の一夏への告白にも近い言葉であり、それを一夏は気付いていなかった。

「り、鈴……お、お前」

一夏は鈴の告白を聞いて間を置くように少し沈黙した後、恐る恐る訊ねる。一方、鈴は恥ずかしそうに俯くと、恥ずかしそうに訳を話した。

「一夏……さっきの告白は私の貴方への気持ちをぶつけた——でも、貴方には恋人が居る事は知ってる……それでも、それでも私は貴方が好き……これは私の気持ち」

「り、鈴——あ、あれは、更識は……あつ」

一夏は鈴の言葉に反論しようとしたが鈴は目尻に涙を浮かべており、涙は頬を伝っていた。その涙は鈴の我慢する形で溜めていた物であり、一夏に一向も早く一夏の口から告白の返事が欲しい——鈴の、一人の青年に想いを寄せる少女の淡い願いなのだろう。

失恋しても構わない。だからこそ、一夏の返事を聞きたい、と。

「鈴……っ」

一夏は鈴が涙を浮かべているのを見て、バツの悪そうな顔をしながら俯き下唇を噛む。鈴は早く返事が欲しいのだろう。だからこそ、自分の口から返事が欲しい——鈴のたった一つの願いなのだろう。

一夏は少し悩んだ——鈴の事もあるが何故か楯無の顔を浮かべる。自分はさっきまで、楯無に告白された。あれは楯無が溜めに溜めていた気持ちを吐き出す形で告白した物だった。

一夏から見れば楯無は恋愛対象ではないが楯無は自分に恋愛対象を抱いていた。しかし、一夏は自分は何故自分が楯無の顔を思い浮かべたのかは解らなかったが今はそんな事を言ってる場合ではない。

今は鈴の、目の前にいる幼馴染みの告白の返事を答えるのが先だった。一夏は小さく頷くと、顔を上げ、鈴の告白に答える形で口を開いた。

「鈴、お前の告白は良く解った……俺はお前が好きだ」

一夏の言葉に鈴は泣きながらも瞠目し顔を上げる。一方、一夏は鈴を見て哀しそうに俯き、言葉を続けた。

「だけど、俺の鈴の告白に答える事は出来ない……俺は鈴——お前を幼馴染みであり親友として好きだ……だからこそ、俺はお前に恋愛感情を持つ事はなかった」

一夏は言葉が続けながら身体を震わせ始める。

「俺は鈴の気持ちや、鈴が恋愛感情を持つてる以前に、俺は女性の気持ちを全くと言う程知らない上、異性が異性と付き合っている事に羨ましいと思いつつも、応援したいと思つていても、自分が恋をしたいなんて考えもなかった……」

一夏は顔を上げる。その表情は悔しいと言うよりも悲しいかつ、鈍感な自分に怒りを感じているのか悔しそうに怒りが籠っていた。

それを見た鈴は驚きはしなかったものの、一夏が何かを言うのを待つていた。そして、一夏は口を開く。

「だから鈴、俺はお前の返事には答える事は出来ない——嫌、俺はお前に恋愛感情を抱いてはいない、俺はお前を幼馴染みとして付き合っていきたい……それが俺の」

一夏は俯く。

「それが俺の……俺の答えだ」

一夏は鈴の告白を受け入れなかった。そうだろう、一夏は鈴を友として接していききたかった。長く入れれば何れ恋愛感情を抱いていたのだろう。

嫌、二人を引き裂いたのは二人ではない——二人の周りに起きた出来事が二人の恋愛を成そうとさせなかったと言い換えれば良いだろう。

もし一夏が鈴の気持ち知っていたら、もし一夏か鈴がどちらかが僅かな残り時間の間に告白していたら、二人は恋人同士になっていたのだろう。

が、それも過去の話——今はその過去の先である未来と言う名の現在。一夏は鈴に告白を受け入れなかったが一夏は、とある覚悟をしていた。鈴の罵倒、一夏は鈴の罵倒や何かをされてもそれを一夏は何もせずに受け入れようと考えていた。

「そうなんだ……振られちゃったな——」

鈴は何もしなかった。一夏は鈴の言葉に驚き顔を上げると、鈴は何故か泣きながらも笑っていた。

「振られちゃったなくまあ、そうだよね？　一夏には会長と言う立派な恋人が居るもんね？」

鈴は両手を後ろの腰に当てながら身体を翻す。

「そうよね〜会長は私よりも強いし、胸もあるし、私よりも綺麗だもんね……」

鈴は一夏を見る。鈴は微笑んでいたが一夏は鈴を見て何も言えなくなる。

「鈴ー」

「だけど一夏？　私はね最初から解ってたの」

鈴の言葉に、一夏は「えっ？」と惚けてしまいが鈴は瞼を閉じる。

「私は失恋した……それはついさっき解ったーでも、私は一夏がーいえ、一夏が会長を恋人として見ているだけでなく会長を心配しているーあの時、一夏が私に会長の事で悩んでいたのを話したのを覚えてる？」

「あ、ああ」

「そう……その時ね、私は少し思ったの、一夏は会長の事を思ってるー会長の事を誰よりも心配していた、ってーだから私は今告白したのも、一夏が誰が好きなのを知りたかった」

鈴は再び涙を流す。それはさつきとは違い、少し多かった。

「私はもう、一夏の傍にいる事は出来ないーそう悟った」

「り、鈴……お前ー」

鈴は泣きながらも笑っていた。かの少女は失恋に気付きながらも、一夏に弱い所を見せたくなかったのだろう。

そんな鈴を見た一夏は下唇を噛み俯くも、鈴は一夏に、こう言った。

「一夏、会長を、恋人を大切にしなさいよね？　しなかったら、私が許さないわよ？　じゃあね！」

鈴はそう言うと、保健室の扉の方へと駆け寄る。一夏が呼び止めようとしても、鈴は聞かず、鈴は扉を開けるや否や、廊下の方へと足を踏み入れ、右の方へと走って行った。

が、鈴は哀しそうに眉間に皺を寄せ、瞑目しながら涙を流していた。鈴は、少女は自分は失恋したと判り、それを一夏に見せたくない形で保健室を出ていったのである。

「り、鈴……ッ」

一夏は鈴を追い掛ける事は出来なかった。嫌、鈴を苦しめる事は出来ない判断したのである。

「俺は……俺は最低だ」

一夏はフラフラしながらベッドに腰掛けると、身体を震わせながら悔しそうに俯いた。それは一夏が鈴を悲しませていた事と鈴の気持ちを理解していない自分に怒りを感じていたからであった。

そして、今の時間帯は夕日だったが夕日は沈み掛かっており夜になりつつあったが一夏はその場を動けないでいた。

第90話

一夏が鈴に告白され、一夏自身が鈴の告白を受け入れられない事を話をしていた丁度その頃、此処は学園の屋上。

屋上には落下防止用のネットが張り巡らされ、手すりも設けられている。が、屋上全体は白にも関わらず、夕日の影響かオレンジ色に染まっていた。

「お姉ちゃん……」

そんな屋上には二人の少女がいた――更識楯無と更識簪の二人の姉妹である。姉妹は屋上にいたが簪は哀しい目で目の前にいる、手すりに手を置きながら沈み逝く夕日を寂しそうに眺めている楯無に呟く。

「(……一夏君)」

楯無は不意に心の中で一夏の名を呟いた。何故なら楯無はついさつき、一夏に対し、自分の心に溜めていた想いを全て吐き出す形で告白したのである。

一夏から見れば突然過ぎた出来事だろう。一方、楯無から見れば恥ずかしいと言うより辛い気持ちで一杯だった。

自分は何故あんな事を言ったのだろう。あれは自分の気持ちを一夏に言っただけなのに、何故か持ちは晴れない。

「嫌われちゃったのかな……私」

楯無は不意に呟く――同時に楯無は、自分は一夏に振られたと思っていた。あんな事を言えば一夏は自分に幻滅するだろう。

嫌、するに違いない。自分は一夏に守られているだけであってそれに惹かれたに過ぎない――なら、一夏はどうだろうか――彼は自分に恋愛対象を抱いているのだろうか。

彼は自分を……いいや、これ以上は思い出したくはなかった。楯無は夕日を眺めながら俯く。

「私は……嫌われたのか」

「そんな事ないよ」

楯無は諦めたのか言葉を述べるが簪がそれを遮り、楯無は目を見開

き後ろにいる簪を見ると、簪は怒りと哀しみが混じったような表情で楯無を見ていた。

「か、簪ちゃん……貴女何時からそこに？」

「ずっと前に居たよ？」

簪の言葉に楯無は驚く。

「ず、ずっと前って私の後を追い掛けてたの？」

「うん……お姉ちゃんが私に気付く、と言うより、私がお姉ちゃんに声を掛けるまで、ずっと後ろにいた」

簪の言葉に楯無は「そ、そうなの？」と驚きを隠せない。何故なら、楯無は簪がいる事をすっかり忘れていた。

本来なら気付いている筈だが楯無は一夏の事で頭が一杯だった為、簪の存在をすっかり忘れていたのである。

「ごめんなさい……私、貴女の事を忘れていたかも知れないわ……」

楯無は簪に謝罪する。が、簪は首を左右に振り、それを終わると口を開いた。

「別に良いよ、私は慣れっこだから……それにお姉ちゃん」

「何かしら？」

楯無が答えると、簪は何かを考えているのか軽く瞑目し、直ぐに目を開け、訊ねた。

「お姉ちゃん、一夏君の事どう思ってるの？」

簪の言葉に楯無「えっ……」と言った後、目を見開く。何故なら、簪は楯無が何故一夏をどう思ってるのかを訊ねたのである。

簪は楯無が心配だったからである。簪は、楯無が一夏と交際しているのは学園中で噂となり、楯無が一夏と食べさせ（楯無が一方的だが）合っているのを何人かは目撃し、一夏が楯無を箒から守っている事も耳にし、二人が同室である事も皆知っている。

そこまではまだ良いだろう。しかし、簪は何故楯無に一夏との関係を気にしているのかを、楯無に指摘するように言葉を述べる。

「私はお姉ちゃんが一夏君と一緒にいる所を何度か見た事があるけど声を掛けなかった……ううん、私はお姉ちゃんが好きな人と一緒にいる所を邪魔したくなかったから」

「えっ……簪、ちゃん？」

簪の言葉に楯無は目を見開く。しかし、簪は言葉を続けながらも哀しそうに俯く。

「お姉ちゃん……ずっと一人で辛い思いをしていた……ううん、お姉ちゃんはずっとあれ以来、私達の事を避けていた」

簪は訳を述べ始める。それは簪があつた誘拐事件後、楯無が両親に狂言誘拐や一夏に人殺しをさせた事を問い質していた。あの時、簪は楯無の泣き顔を見て今までや今日まで後悔の念に駆られていた。

それだけでなく、自分は楯無への罪悪感から楯無に声を掛ける事は出来なかった。出来たとしても、楯無に何て言葉を掛けてやれば良いのかは判らなかった。

「私はお姉ちゃんに謝りたかった……でも、お姉ちゃんは私や父さんや母さん、従者の皆に怒っているんじゃないかって、それが怖くて怖くて言えなかった」

簪は俯きながら言葉を述べ、それを聞いた楯無は「簪ちゃん……」と寂しそうに呟くと、哀しい笑みをしながら首を左右に振る。

「それは違うわ簪ちゃん……貴女は悪くない、悪いのは私よ？」

「でも……お姉ちゃんは男達に犯されそうになったのに……一夏君が人殺しをしてまで助けて貰ったのに、お姉ちゃんは怖くないの？」

……お姉ちゃんは怖い目に遭ったのに何でそんなに平気でいられるの!？」

簪は顔を上げる——その表情は何も解らないと言うより、疑問を浮かべているような表情をしながら哀しい目をしていった。

それを見た楯無は哀しい笑みをしながらも、再び夕日の方を眺める。

「私にも解らない、のよ」

「えっ、解らない？」

簪の言葉に楯無は深く頷く。

「ええ、私ね、犯されそうになった恐怖よりも、一夏君に何て言葉を掛けてやれば良いかが解らなかった——それに私自身一夏君に再び逢いたいと思っていた……それに」

楯無は言葉を続けていたが少し俯く。

「一夏君に逢えた時、私は抱き着いたー今思えば恥ずかしい思い出だけど……けど」

楯無は顔を上げ、簪と向き合う。楯無は少し笑っていた。

「それ以来、私はあの時から今日までの間、一夏君と一緒にいて、一夏君に罪悪感もあつたけど、一夏君に惹かれていった」

楯無は恥ずかしそうに簪に言った。何故なら、楯無は一夏に告白したのも一夏が学園に入学してきてから、今日までの間に一夏に惹かれていた為であつた。

何時かは判らないが時間と言う物が楯無の心に変化を及ぼし、一夏に恋愛感情を抱かせたのかもしれない。

楯無はその事に気付いてはいないが楯無は話題を変えるかのよう
に、簪にある事を話す。

「それよりも簪ちゃん、私は貴女に言いたい事があるの」

「私に言いたい事？」

楯無は簪と向き合うと、口を開いた。

「簪ちゃんーこれは覚えてる？ 私が簪ちゃんに言った言葉を？」

「言った言葉……あつ」

楯無の言葉に簪は俯く。

「そうよ、私が簪ちゃんに、貴女に『無能のままでないさい』つて」

楯無の言葉に簪は俯きながら少し頷いた。それは簪や楯無にとつて余計な一言でもあり、姉妹に大きな溝を作るような言葉でもあつた。

それだけでなく、簪の狂言誘拐を招き、一夏を人殺しにさせた言葉でもある。しかし、それには訳があつた。それを、楯無は簪に話す。

「実は簪ちゃん……あれはね、簪ちゃんを暗部の仕事に就けさせたく
なかつたからなの……」

楯無の言葉に簪は眼を見開き、顔を上げる。が、楯無は言葉を続ける。

「私達更識家は暗部の一族ーそれ故、裏の仕事を受け持ち、生業として
いるーけど、それは殺しとか、危険な事をする事が多いからよ

……それで簪ちゃんには、ううん、簪ちゃんには暗部の仕事を就けさせたくない、簪ちゃんには更識簪として何処かの大学に進学して、夢を持って、青春を謳歌して欲しい——簪ちゃんには幸せになって欲しいから、私はあんなことを言ったのよ」

「そ、それって、でも、それじゃお姉ちゃんはどうかなの!? お姉ちゃんは私に幸せになれって言っても、お姉ちゃんは幸せになりたくはないの!?!」

簪の言葉に楯無は首を左右に振る。

「私は良いのよ……私は更識楯無として、第十七代更識家当主として、その一生を過ごすつもりよ——勿論、後継者を生む為に母親ともなるつもりよ?」

楯無の言葉に簪は何も言えず俯いた。簪は、彼女は楯無の妹として、姉である楯無の力になりたかった。が、楯無の言葉で姉を憎んでいたが狂言誘拐にも加担したのも、姉を懲らしめたいと言う我が儘もあった。

だが、さっきの楯無の言葉に簪は少し後悔した。楯無があんなことを言ったのは、自分には危険な事を担わせたくない、自分には幸せになつて欲しいからであった。

簪は楯無とは目を合わせないように俯いていたが、目尻に涙を浮かべ始めながら身体を震わせる。

「簪ちゃん!?!」

楯無は簪を見て驚くが簪は泣きながら楯無に抱き着く。これには楯無は驚くも、簪は泣きながら口を開いた。

「お姉ちゃんごめんなさい……ごめんなさい……!」

「簪ちゃん!?! それって……」

「ごめんなさい! ……私はお姉ちゃんを……お姉ちゃんを……ひっく、うっく!」

簪は泣きながら、楯無に謝罪の言葉を述べる。それは楯無への後悔の表しでもあり、楯無が自分を大切な存在と見ていた事と、簪自身が楯無を、刀奈という姉が妹である自分の幸せを願いながらも、自分は幸せになるつもりは無いと言ったからである。

しかし、簪はそれを許さなかった——簪は楯無に言った。

「お姉ちゃんも……お姉ちゃんも幸せになってよ……！ お姉ちゃんには一夏君がいるよ……お姉ちゃんも幸せになってよ、幸せを掴んでよおっ!!」

簪は泣きながら言った。それを聞いた楯無は瞠目するも直ぐに涙目になりながら目を閉じ、両手を簪の背中に回し擦った。

が、楯無は簪の言葉に後悔と簪の言葉に泣いてしまったのだ。

そして楯無は簪と言う大切な妹にそう言われながらも、簪と言う大切な妹を持つて幸せだと言う事に泣いていた。

そして二人の姉妹は数分間も泣き合いながら抱き合っていた。

それは二人の我が儘か、彼女達がそうしたいのかは判らない——だが、夕日は完全に沈みかかっており、空は紺色へと変わっていた。

第91話

三十分後、此処は保健室。保健室には一夏が哀しい目をしながら窓の近くで佇みながら空を眺めていた。

空は既に暗闇に包まれており、夕日も完全に沈んでいる。一夏から見れば、他の人から見れば一日が終わるのを告げるのと同時に、夜が好きな者達から見れば始まりだろう。

生憎、一夏は前者でもなく、後者でもない。一夏はプレデターから色んな事を学び、身も心も鍛える形で成長し強くなった。それは日夜でもあり、終わる事も無い修行を一夏は勇人や止と共に潜り抜けて行った。

言わば一夏達は修羅の人間でもあり、そこら辺の猛者達とは対等に渡り合える強者達となっていた。しかし、今の一夏は強者と言うよりも、葛藤に苛まれていた。

人間関係。一夏——或いは全ての人間に当てはまるであろう問題。一夏はその事で悩みを抱えていた。

一夏は数十分前まで鈴の事で悩んでいた。鈴は自分への想いを打ち明けた。が、自分は何故か鈴を振った。

自分は鈴を只、幼馴染みとしか見ていなく、恋愛感情と言う物を抱いていない。あつたとしても、自分は鈴の告白を受けいたかは判らない。

それだけでなく、何故か楯無の顔を思い浮かべてしまった。何故かは判らない——何故かは……。

「鈴……っ!?!」

刹那、一夏は鈴だけでなく弾や数馬、蘭、束、そして何故か千冬や箒を思い出してしまう。

前者の四人は兎も角として、後者の二人は思い出したくもない存在。

「クソッ!!」

一夏は窓を叩く。バン、と言う音が一瞬だけ聴こえ、室内に小さく木霊する。一夏の怒りの表れだろうか——それとも、一夏が八つ当た

りする形で叩いたのかは一夏にしか判らない。

すると、保健室の扉が開き、一夏は扉の方を見ると、楯無と簪が保健室へと足を踏み入れた。因みに開けたのは楯無だが閉めたのも楯無である。

「更識……」

一夏は二人の名字を言うがその表情は何処か哀しい。そんな一夏を見た楯無と簪は互いを見合うつと、直ぐに一夏を見やる。

「どうしたの一夏君？ 何か遭ったの？」

楯無が訊ねると、一夏は首を左右に振る。

「嫌、ちよつと考え事してただけだ……それよりも」

一夏は首を傾げる。

「二人はどうしたんだ？」

「えっ？」

一夏の言葉に更識姉妹は惚ける。が、一夏は言葉が続ける。

「だから二人はどうしたんだ？ 何をしていたんだって聞いてんだよ？」

一夏は呆れながら再び訊ねると、二人は再び互いを見合うつと、軽く微笑む。

「なに笑ってんだ？」

一夏は気になったのか訊ねると二人は一夏を見た。

「実は私達、一応だけど和解したの」

「何っ？」

楯無の言葉に一夏は目を丸くする。一夏は二人が和解した事に驚きを隠せないでいた。

更識姉妹——この二人は姉、楯無の心ない言葉のせいで姉妹の仲は冷めきっていた。それは一夏は楯無から聞いた為に知っていたが一夏から見れば和解は驚きでしかない。

それだけでなく、更識姉妹が和解したとなれば、虚や本音——更には更識姉妹の身内や従者達は喜ぶだろう。否、更識家の面々から見れば悲願だろう。

一夏は驚く中、楯無は頬を紅くしながらある事を話す。

「私達は和解したけど、それは一夏君、貴方のお陰よ」

「はっ？俺のお陰？」

楯無の言葉に一夏は惚ける。が、楯無はその訳を述べる。実は楯無は此処に戻ってくるまでの間、簪から家の事を、自分は一夏の事を教えあっていた。

簪は元より、一夏は虚から聞いたかも知れないが更識家の面々は楯無を心配していた。それは楯無が、刀奈が楯無としての自信を取り戻して欲しいのと、簪との仲が戻って欲しいのと、彼女自身が元気になるって欲しいが為に努力した。

しかし、何れも失敗に終わり、楯無はますます心を閉ざしつつあったが更識家の面々は一夏なる者が楯無を、刀奈を救う事が出来る人物ではないかと。

一夏はそこで驚きはしなかったが楯無の方が問題であった。実は楯無は一夏と一緒に居た時の事を簪に話してしまう。

実は楯無は一夏と一緒に居た時の間、一夏は自分に色んな事を教えてくれた。ロシア代表になった時の自分を思い出せと怒った事、名誉は得るが代わりに怨みと言う代償を得る事等もあった。

それだけではない、一夏は楯無が箒に襲われないように守る形で一緒に行動したりしてくれた。何れも楯無から見れば、こう思うだろうーそれを楯無は一夏に感謝と言う形で述べた。

「一夏君……私ね一夏君と秋葉原で出逢う前は楯無の当主であると同時に簪ちゃんとの事で悩んでいたーうん、一夏君を許されない事をさせてしまった事で哀しんでいたーでも、一夏君は私に何の文句も言わなかった……それだけじゃない、弱気になっている私を一夏君は優しくも厳しくしてくれた」

楯無は何故か言葉を詰まらせ俯く。それを見た一夏は首を傾げ、簪は心配そうに楯無の顔を覗くも、楯無は俯きながら頷くと、顔を上げ、一夏を恥ずかしかつ愛しそうに見つめながら口を開いた。

「まだ私は誘拐あの事で当主の自信は未だ完全とは言えないから付いてないけど、私が良かったと思ってるの」

「良かった？何がだ？」

一夏が疑問そうに訊ねると、楯無はそれを答えた。

「だって、一夏君がいたからー最悪な形だけど、一夏君は私を心配し、簪ちゃんと仲が戻ったのも、全て一夏君のお陰だから！」

楯無は恥ずかしそうでありながらも叫んだ。それを聞いた一夏は瞠目するも、楯無は一夏に微笑みながら、一夏の元へと歩み寄る。一夏は楯無が何をするのかは判らなかつたが楯無は一夏の前に立ち止まると、そつと一夏に抱き着く。

「お、おい!？」

一夏は楯無の行動に戸惑うも、楯無は顔を一夏の胸に埋めていた。楯無は一夏の温もりを求めていた。

それも感謝の意味でもあり、一夏に惹かれている事をも意味していた。一方、一夏は楯無の行動に戸惑っていたが楯無の行動を受け止めていた。

心無しか、戸惑いながらも頬を紅くしていて頬を搔いている。

「お姉ちゃん……」

簪は一夏と楯無を微笑ましそうに見ていた。一方、一夏は楯無の行動を受け止めていたが、ある事を思い出し、それを楯無に訊ねた。

「それよりも更識、一つ訊いていいか？」

「何っ?」

楯無は顔を一夏の胸から離すと、一夏を見上げる。一夏は表情を陰しくしていたが一夏は楯無に訊く。

「あいつはー簪ノ之はどうした？」

一夏の言葉に楯無は瞠目した。しかし、楯無は簪がどうなったのかは知っていた。

簪ノ之箒、彼女は勇人に手刀で気を失われてしまうもその後、学園長と、とある人物の決断により、地下の牢屋に拘束されながら閉じ込められている。

一夏や楯無や簪は判らないが地下では箒が一夏を求めている事や理不尽だとかで喚いている。そんなのは関係ないだろうが楯無は一夏が何故、箒を気にしているのかは判らなかつた。

一夏は箒を毛嫌いしている。それだけでなく、箒が自分や一夏に執

拗に迫ってきてくる事も判っていた。その度に一夏や勇人に返り討ちに遭っている事も楯無は目撃者である為、知っている。

「い、一夏君、何故あなたは篠ノ之さんに逢いたいの？ 逢ってどうするつもりなの？」

楯無は一夏に訊ねると、一夏はその訳を話し始める。

「あいつは何れ、お前を殺しに掛かって来るかもしれないー嫌、お前の妹にも危険が及ぶかも知れない……それに」

一夏は楯無の頭を撫で始める。これには楯無は驚くが一夏は言葉を続ける。

「俺は彼奴には良い思い出は無い。だけど彼奴とは何れ決着を着つけなければならぬーその為には彼奴とは絶縁を言い渡さなければならぬんだーこれ以上、俺の為にお前ら姉妹を巻き込む訳にもいかないからな……」

一夏は悔しそうかつ哀しそうに言葉を述べる。一夏は楯無を心配していた。

何故かは一夏自身には判らないだろうが一夏は楯無を箒から守りたい存在でもあり、楯無や簪が彼女の毒牙に掛からない為の考えでもあった。

あまり効果はないだろうが箒に何があるうが一夏は彼女と決着つけるつもりだった。そんな一夏の言葉に楯無は考え込む。

彼を箒と逢わせるべきなのか、と。楯無は一夏を箒と逢わせる事は容易い為問題は無かった。

しかし、そうなれば箒は何をするかや一夏が箒を殺すかもしれない危機感を抱いていた。

だが、一夏は箒とケリをつけたいが為に無理矢理でも、箒と逢うつもりだろう。箒も箒で一夏に何を言うのかは判らない。嫌、彼は、一夏は自ら決着を着けたい為、何も言えない。

彼は自分だけでなく、簪を守りたいと言っている。これには楯無は悩んだのだ。簪に危険が及ぶのだけは防ぎたいー彼、一夏が困る事だけでも防ぎたい。

楯無は何かを決意したのか頷くと、それを一夏に答える形で言っ

た。

「判ったわ……」

楯無の言葉に一夏は哀しい笑みを浮かべながら「そう」と言い掛ける。

「その代わり、条件があるわ」

楯無がそれを遮る形でそう言うと、一夏は「条件？」と言う。一方、一夏の言葉に楯無は深く頷くと、険しい表情で一夏を見据える。

これには一夏は生唾を呑み、簪は心配そうに見詰めている。

そして、楯無が何を言うのかは一夏や簪は判らなかつた。判るとすれば楯無がそれを言うまでだろう。

そして、保健室内は重苦しい雰囲気の流れるも、それを緩和できるのは楯無だけであつた……。

第92話

翌朝、此処は学園の地下室にまで続く階段。階段近くには制服姿の一夏と楯無の二人の男女がいた。しかし、二人の表情は険しく、彼等は視線を階段へと向けている。

単に向いている訳ではない。これから階段の向こうにある牢屋の、鉄格子の向こうにいて、身体中を拘束されている女子生徒、篠ノ之箒に逢う為に、二人は牢屋へと続く階段の前にいるのである。

箒との面会は一夏が望んだ事である。面会の件は楯無が生徒会長の権限を使って、学園長への許可は貰った為に問題はない。その代わり、学園長からは箒との面会時間は十分だけと言いつ渡されたがそれは充分か少ないかは判らない。

否、一夏は箒との面会は嫌な思い出しかないだろう。が、一夏はこれ以上自分の知り合いのせいで周りに、更識姉妹に危険を及ぼせたくはない。だからこそ、一夏は箒と決着を付け、彼女にこれ以上、周りに危険を及ぼさせない為であるのと、彼女には完全なる絶縁を言い渡すしか方法はない。

それは効果あるかは判らない。だがしかし、最悪な結果だけは防ぎたい。

「いよいよね……大丈夫、一夏君？」

楯無は隣にいる一夏を心配そうに訊ねると、一夏は首を左右に振る。

「嫌、俺は大丈夫だ。それよりも更識は大丈夫なのか？俺と一緒に篠ノ之と面会したいと言ったが？」

一夏は険しい表情を崩さずに楯無に訊ね返す。その言葉には一夏の気遣いが籠っているが楯無は哀しそうに微笑む。

「大丈夫……篠ノ之さんを追い込んだのは私にも責任があるわ……なのに貴方は私や簪ちゃんのために篠ノ之さんと決着を付けようとしている……たがらこそ、私も篠ノ之さんに、篠ノ之さんと同じように貴方に想いを寄せている事を言いたい、最悪な結果になろうとしても、私は貴方が好きである事に、変わりはない……」

楯無の言葉に一夏は何も言わず耳を傾けていた。以前の「一夏なら楯無が言葉を述べる前に階段を降りていたのだろう。が、今の「一夏は違う――彼は自らの後始末を片付ける為に動いているに過ぎない。

そして、「一夏は楯無に対し深く頷くと、楯無も頷き返し、二人は階段を降りる為に足を踏み入れた。

牢屋。そこには身体中を拘束されながら虚ろな目をしている箒がいた。しかし、そこにはエレーナ先生は居ない。

エレーナ先生は数日前にロシアに強制送還されたその日の夜に自殺したのである。エレーナ先生は兎も角として、箒は虚ろな目をしながらもある人物に逢いたい気持ちで一杯だった。

織斑「一夏、箒にとって想い人でもあり、大切な存在。が、それは箒が思っている事であり、一夏自身は毛嫌いではない。

「一夏……一夏」

箒は覇気も感じないような口調で一夏の名を呼ぶ。刹那、階段の方から足音が聴こえた。

それは徐々に大きくなっていくがそれは階段を降りる足音であり、誰かが牢屋へと来た事を物語っている。箒は視線を階段の方へと向けた――箒は目を見開いた。

階段を下りてきたのは「一夏」だった。箒は「一夏」が来てくれた事によるものなのか目に生気を取り戻し、喜びを隠せない。が、その後ろに、「一夏」が続くように楯無も降りて来ると、箒は下唇を噛み、楯無を睨む。

「貴様……っ！」

箒は楯無を睨みながらそう呟き、それを聞いた楯無は下唇を噛むも、「一夏」は箒の前に立ち止まると腕を組みながら、箒を睨み、楯無は「一夏」の隣にいながらも少し後ろに立ち止まる。

幸いな事に「一夏」と箒の間には鉄格子がある為、最悪な結果を招く危険はない。が、「一夏」は険しい表情を浮かべ続けている事には変わりはない。

「よう、無様な姿だな」

一夏は箒に問う。

「い、一夏、私を助けに来てくれたのか？」

箒は少し嬉しそうに訊ね返すが一夏は溜め息を吐き、首を左右に振る。

「違う、俺はお前に言いたい事があるんだよ？」

「言いたい事？」

箒が聞き返すと、一夏は頷き、鋭い眼差しを箒へと向けながら口を開いた。

「篠ノ之、俺はお前とは話すつもりはないし、これから俺に付き纏うな」

「ーなっ!? ー。一夏の言葉に箒は目を見開きながら驚きを隠せない。だが、一夏は言葉を続ける。

「篠ノ之、これ以上、俺に付き纏うなー勇人や止、それに更し……楯無やその妹にも手を出すな」

「な、何を言ってるのだ一夏!? お前は私よりもその女を選ぶと言うのか!？」

「……ああ、それに俺は、お前が嫌いだからだよ!」
「なっ!？」

一夏の言葉に箒は愕然とした。それも一夏の言葉は一夏自身の本音でもあり、一夏自身の怒りをも表している。それにその言葉は箒の胸に突き刺さり、箒自身の心に暗い影を落とす。

しかし、そんな箒を他所に一夏は言葉を続ける。

「篠ノ之……俺はお前が嫌いだ……お前のせいで俺は友達をあまり作れなかった、友達を多く失ったーそれに俺は俺に好きでもない剣道をやらせ、俺が拒んでもお前はそれを聞こうとしなかった……それだけじゃない、お前が転校するまでの間、俺は寂しい日々を過ごしていた……学校でも家でも孤独だった。友達が居ても、お前のお陰であまり遊べなかった」

一夏は怒りを隠しきれず握り拳を作る。が、そんな一夏に箒は反論する。

「そんなのはどうだって良いではないか!? お前は私という方が楽し

い上、私はお前が必要だったからだ!! それに剣道を続けさせていたのも、お前との時間が作りたかったんだ!」

「そんなのはお前の勝手だーだがな、俺から見れば、お前と一緒にいるのは屈辱でしかない、剣道もあまり好きではない」

「何だと!? お前は剣道の良さが判らぬのか!?!」

箒は剣道を馬鹿にした事に怒る。が、それには理由があつた。それを一夏は話す。

「別に良いとか悪いとかじゃねえー俺はな、お前が勧めた剣道のせいで大切な時間を奪われたー俺が拒んでも、お前はそれを良しとはしなかったじゃねえか!?!」

「そんなのはお前がヘタレだからだ!? お前は剣道をやるのを嫌がつていたではないか!?!」

「ふざけんな!!」

一夏は怒りのあまり叫んでしまう。しかし、それを聞いた箒は肩を一瞬だけ竦め、楯無は一夏と箒のやり取りを見守っているが何の反応も見せなかつたが一夏を心配そうに見守っていた。

「い、一夏……?」

箒は恐る恐る、一夏を見る。一夏は憤怒の形相を浮かべながらも歯を食いしばっていた。

「いい加減にしろ篠ノ之……お前がそう思っても、此方は散々だったんだよ!?! お前が剣道を進めるせいで俺は孤独だったよ!?! お前と一緒にいるせいで友達はあまり近づいてこなかった!! あの女もそれを俺が弱気だとか忙しいとか構ってくれなかつた!! お前がいるせいで俺はずっと辛い思いをしていたよ!?! お前は人の気持ちを知ってたのか!?!」

一夏は怒りながら、箒に言葉を続ける。それを聞いていた箒は目を見開いており、楯無は何もせず、箒から目を逸らす。それでも、一夏は箒に、こう言い放った。

「お前は少しは人の気持ちを考えろよ!?! それにお前のお陰で俺は苦しい思い出が大半だ!! 俺の六年間を返せ!! 返せよっ!?!」

一夏は怒りで我を忘れ、箒に詰め寄ろうとした。が、鉄格子のせい

で箒に詰め寄ろうと出来なかった。

「ダメ一夏君!!」

楯無は慌てながら、一夏を止めようとして一夏を羽交い締めする。が、一夏の怒りは一向に治まる気配はない。

「お前のお陰で俺はどんな思いをしたのかお前に判るか!? お前が転校した後も俺は孤独だった! お前が残した爪痕は俺の孤独を続かせていた! 返せよ、返せよ!!」

一夏の怒りは箒に向けられていた。が、一夏の溜めに溜めていた怒りが箒へと向けられている。それも全て、箒に原因があるが一夏には耐えられなかった事なのだろう。

そんな一夏を楯無は羽交い締めするも一夏の怒りは消えない。が、そんな一夏に箒は目尻に涙を浮かべながらも、一夏に言い放った。

「そんなのは、そんなのは……っ! そんなのはお前の思ってる事だ!! それにお前は私の気持ちを知ってるのか!!?」

箒は泣きながら叫ぶ。それを聞いた一夏は「何だと?」と言い、楯無は瞠目しながら、箒を見た。箒は泣いていたが箒は言葉が続ける。

「一夏……お前には判るか? お前に私の気持ちが判ってたまるか!!」

「何がだよ!? それにお前の事等どうだって良い!? 俺は今俺自身の話をしているんだろうか!」

一夏は怒りながら訊ね返すと、箒はそれを拒絶するように言った。
「黙れ!!!」

箒は叫ぶ。それを聞いた一夏は下唇を噛み、楯無は目を見開く。が、箒は泣きながら鋭い眼差しを、一夏や楯無に対し、言葉が続けた。「私はずっと孤独だった!! お前と別れてから、私はずっと孤独だったのだ!! お前と離れ離れになってから、私はずっと独りだった!!」

箒は泣きながら叫んだ。それは、その意味は箒自身に箒の辛い過去を思い出させるような物であった……。

しかし、それを一夏や楯無からどう見られ、どう思われるのかは、箒の過去を知るまで、判る筈も無いだろう。

第93話

「……………」

「そ、そんな……」

一夏と楯無は今、目の前にある鉄格子の向こうにいて、身体中を拘束されている箒自身の過去を聞いて、それぞれの反応を見せていた。

一夏は無言で鋭い眼差しで腕を組み、楯無は信じられないと言うかのように驚きを隠せない。一方、箒は悲しそうかつ悔しそうに自分の過去を教えていた。

箒は一夏と別れてからずっと辛い日々を過ごしていた。それは束が造ったISが原因であり、そのせいで家庭崩壊した者達に心ないことを言われ、誰も助けてくれなかった。

それに転校を繰り返し、そこで友達を作る事が出来なかった。作つたとしても、束の機嫌を取り持ち、束に気に入られようと媚びる輩が大半もいたのである。

箒はずっと孤独だった。家族も束のせいでバラバラになり、話す事が出来る存在がいなかった……箒から見れば苦痛その物であり、箒自身が普通に過ごしたかった事を束はぶち壊しにしたのである。

一夏に歪んだ愛を向けたのも、彼だけが自分を助けてくれたのと、彼だけが自分にとって希望でもあった。しかし、そんな箒の話の聞いた一夏は何時の間にか下唇を噛んでいた。

「私はずっと孤独だった……誰も私を助けてくれなかった……あの人のせいで家族はバラバラになった……なのに、あの人は助けようとしなかった!! あの人にとって、私は如何でも良い存在だったのか!? それに一夏、お前は何故、私を見ようとせずに、その女を見ているのだ!? 何故、私ではなく、その女を選んだのだ!?!」

箒は叫ぶ……目尻には涙を浮かべていた。その涙は箒の楯無自身への怒りと嫉妬が籠められている。そんな箒に楯無は何も言わず下唇を噛みながら、箒から目を逸らす。

刹那、一夏は楯無を守る為か、背中に隠すように移動する。一夏の行動に楯無は驚くも、一夏は軽蔑な眼差しで箒を睨んだまま何も言わ

ない……訳ではなかった。一夏は静かに、口を開いた。

「篠ノ之、お前の過去には同情するーのだが、そんなのはお前の自業自得だ」

一夏は箒に言い放ち、それを聞いた楯無は瞠目し、箒は目を見開くも直ぐに怒る。

「な、何だと!? お前は私の過去が如何でも良いのか!? それに一夏、お前は私の過去を何だと思ってるんだ!」

「さつき、お前の過去は同情すると言ったーけどな、それはお前が誰にも助けを必要とはしなかったからだ」

一夏は言葉が続けながら突然、瞑目する。

「篠ノ之……貴様は何故、周りに助けを必要としなかった? 何故、お前は東さんに助けを求めなかった? 何故、家族と一緒に居たいと言わなかった? 言えば、東さんが何とかしてくれた筈だ? それを何故、しなかった?」

一夏は箒に指摘した。確かに東に言えば何とかしてくれた筈である。それを何故、箒はしなかったのだろうかー勿論、箒はそれに答えるー嫌々ながらに。

「あの人は私達家族をバラバラにした……あの人は私達家族よりも名誉を選んだ……私から見れば、あの人は憎悪の対象でしかない……」

箒は怒りがこもった口調で、東の悪口を言う。元はと言えば全て束が原因であり、束がISを造らなければこんな事にはならなかった。

それに箒が束をあの人と言うのも、箒自身が彼女を嫌い、彼女を最早、家族とは言えない存在として見ていたからである。

そんな箒に、一夏は溜め息を吐くと、ある事を話す。

「それは違う、あの人は、束さんはお前やお前の家族を如何でも良いとは思っていない」

「嘘だ!!.. あの人は私達家族を蔑ろにしていたではないか!? それにあの人が私達家族をバラバラにしたではないか!」

箒は怒りながら否定する。が、一夏は首を左右に振り、その後になの訳を話す。

「篠ノ之……お前は知らなかったと思うが束さんはな、泣いていたん

だよ」

「!? ……な、泣いていた? あの人が?」

箒は恐る恐る訊き、一夏の後ろにいた楯無は目を見開く。だが、一夏は静かに頷くとその訳を述べ始める。

一夏は最初、勇人や止と共に東のラボで東やクロエー更にはビショップの六人で過ごしていたーそんなある日、一夏は偶然、東が籠っている部屋で、誰かの啜り泣く声が聴こえた事に気付く。

それだけではない、一夏は誰が泣いているのかは直ぐに判った。それは東であった。一夏は東を心配し、部屋に入り、東に訊くも、東は涙目になりながら、とある写真が納められている写真立てを大事そうに持っていた。その写真には幼き頃の東や箒ー少女達の近くには東や箒の両親が写っていた。

そうー東は幼き頃の自分や、自分の両親や妹と一緒にいる家族写真を見て泣いていたのだ。東は自分の家族を心配していたのだ。

東は後悔していたのだ。自分の造ったISのせいで家族がバラバラになった事に……。

東はISを造ったのは宇宙に行く為であるのと、家族を宇宙へと連れて行きたいが為に造った物であった。しかし、世間はISを宇宙進出するよりも兵器にした方が良いと考えたのである。

これには東も怒るが、家族がバラバラになってしまい、東は自分のせいだと責めていたのである。身内の夢は、その身内の家族や周りに迷惑を掛けるーまさにその通りであった。

東は普段、あんな性格なのは元からであるが、内心家族と一緒に居たい気持ちで一杯であったのだ……。本当ならISを造らなければ良かったーしかし、家族を宇宙へと連れて行きたい。それが東の夢であり、東が望んでいた事であった。

それに東があの時、千冬にISを造った理由を話そうとはしなかったのも、その為でもあった。

「東さんはあんな性格だけど、本当はお前や、東さんやお前の両親を誰よりも心配していた……。だから東さんはお前がIS学園に行った時も、東さんは心配していたー『箒ちゃん、大丈夫かな……。』って」

一夏の言葉に箒は身体を震わせながらそれを否定した。

「う、嘘だ!! ……あの人は私達を如何でも良いと持っている筈だ!!」

一夏、そんな作り話信じないぞ!!」

「嘘じゃねえ!!!!」

一夏は一喝した。それを聞いた箒は肩を竦めるも、一夏は憤怒の形相を浮かべながら言葉を続けた。

「嘘じゃねえ……束さんは心配していたー束さんは自分の造ったI Sが家族をバラバラにした事にも後悔していたーなのにお前は何だよ? 何故、束さんの気持ちを判つてやれねえんだよ!」

「つ……そ、それは……」

箒は何も言えなくなる。そんな箒を見た一夏は呆れると、後ろにいる楯無に訊ねた。

「更し……楯無、もう時間かも知れねえから戻ろうぜ……」

「えっ? あっ……」

楯無が何かを言いかける前に、一夏は楯無の手を掴み、階段の方へと歩き始め、楯無はそれに続くように歩いてしまう。

「待て一夏!! 戻るつもりか!」

箒は一夏を呼び止める。刹那、一夏は立ち止まり、箒の方を見るーそれも睨みながら……。

「篠ノ之……俺はお前に言つとく事がある」

「な、何だ?」

「篠ノ之……俺はお前が嫌いだ」

一夏の言葉に箒は目を見開く。しかし、一夏は言葉を続けた。

「篠ノ之……俺がここに来たのもお前を助ける為ではないーお前に完全な絶縁を言い渡しにきたのと、束さんの気持ちを前にお前に伝える為に来たんだーそれに俺の彼女や、その彼女の妹には手を出すな……手を出せば、お前を殺す!」

一夏はそう言うのと、箒は目を見開く。しかし、一夏はそう言った後、楯無を連れて階段を上り始める。後ろから箒が一夏を呼び止める声が聞こえるが一夏は耳を貸さず、階段を上り続けていた。

しかし、箒の呼び止める声は一夏を求める物と、束が自分達家族を

心配している筈も無い事を問い質す為でもあった。そして、牢屋に箒の叫び声が何度も木霊するも、箒は泣きながら叫んでいた……。

「一夏君……」

一夏に連れていかれる形で階段を上り、箒の泣き叫ぶ声を背中で受け止めていた楯無は心の中で一夏の名を呟く。しかし、楯無はそれを口では言わなかった。何故なら、楯無は一夏を心配し、一夏を気遣っていたからである。

そして、一夏と楯無の二人は無言で階段を上り続けていた。

丁度その頃、ここはIS学園近くにある寮の、勇人や止が住んでいる部屋の洗面所。

洗面所には勇人が下にはズボンを穿きながらも上半身だけを裸にしており、更にはカッターを右手に持ちながら洗面所に設けられている鏡で自分の身体を見ていた。

勇人の身体には無数の傷痕があった。それはスカープレデターと共に修行し、修行により負った傷である。それはとても痛々しい物であったが勇人は自分の身体を見て下唇を噛むと、視線をカッターの方へと移す。

カッターには刃物が剥き出しになるように展開されていた。が、勇人はカッターを自分の左腕へと近付ける。

刹那、勇人は自分の左腕を切りつけた。勇人は別に自分の身体を傷付けるつもりで切った訳ではなかった。それに、勇人が自ら切り付けた左腕には小さな横一文字の切り傷が出来ていた。

しかし、切り傷からは血は出なかった。代わりに白い液体のような物が勇人の腕の肌を伝うように垂れる。

「……つぐつー！」

勇人は自分の左腕を見て、下唇を噛むと軽く俯きながら身体を震わせていた。勇人は何かに怯えていた。それも自分は人間ではない事に怯えていた。

何故なら、勇人が政府の人間により、半分人間であり半分アンドロ

イドにされたのだ……それも、
勇人の心に、暗い影をも落としていた
のである……。

第94話

一夏は箒に決別的な事を言った後、楯無と共に牢屋を出ていく形で階段を登った後、廊下を歩いていった。近くには楯無が居るが楯無は彼が何処に向かうのかは判らなかつた。

楯無は一夏が何処に向かうのかを判断出来ず、少し首を傾げた後、一夏に訊ねる。

「ねえ一夏君？ 何処に向かつてるの？ 食堂？ それとも教室なの？」

楯無は訊ねるが一夏は無言のまま廊下を歩き続けていた。そんな一夏に楯無は訊き続けるがどんなに訊いても、一夏は無言で楯無の方を見ずに廊下を歩き続け、楯無は後を従っていく形で歩き続けていった。

「ねえ一夏君？ ……っ」

楯無は下唇を噛むと、楯無は一夏の前に立ち足はだかるように移動する。刹那、楯無は一夏の顔を見て驚きを隠せない。一夏は、哀しい表情と言うよりも、怒りの籠った表情をしていた。

その表情は、一夏が単に何度も訊ねてくる楯無に怒っている訳ではない。

一夏は箒への怒りを抑えきれないでいた。勇人と止の二人が近くに居なかつた為か、それとも箒の顔を思い出した為なのかは判らなない。そんな一夏に楯無は何も言えなくなるが一夏は楯無を手で退かすと、再び歩き出す。

「一夏君！」

楯無は従いて行こうとした。ーー来るな!! ーー。刹那、一夏は叫んだ。それを聞いた楯無は肩を竦めると、恐る恐る一夏を見る。

一夏は楯無に対し背中を向けていたが肩越しで楯無を見るーーその表情は怒りが籠められているが楯無に怒っている訳ではない。

ーー……っー。一夏は下唇を噛むと、前を向き、そのまま歩き出す。楯無はその場を動けなかつたが一夏は少し歩いた後、立ち止まり、楯無の方を見る。

楯無は一夏の言葉のせいとか、何故か哀しげに俯いていた。そんな楯無に、一夏は下唇を噛みながら髪を掻き、楯無の元へと戻る。

「一夏君？」

楯無は一夏が戻ってきた事に気付くが一夏はその間に楯無の前へと戻ってきていた。

「い、一夏君？ 一体どうしたの？」

楯無は恐る恐る訊く。楯無は別に一夏に怯えている訳ではない、楯無は一夏が何故怒っているのかが判らないでいた。

別に楯無が悪い訳ではないが、一夏は楯無に対して謝る。

「ごめん……さっき怒鳴って」

一夏の言葉に楯無は驚く。が、一夏は哀しそうに下唇を噛むも、直ぐに言葉を続ける。

「俺ちよつと考えて事をしてたんだ、それでお前に酷い事を言っちゃまった、それはごめん」

「あつ、そ、それは別に良いのよ？ お姉さんは別に怒ってないし、それに一夏君の気持ちを考えずに訊き続けた私も悪いから、別に一夏君が悪い訳じゃないわよ？」

「……………」

楯無の言葉に一夏は無言で楯無を見据える。すると、楯無は一夏の頬を触る。一夏は楯無の行動に戸惑うも、楯無は哀しそうに笑う。

「それに一夏君は、ずっと辛い思いをしてきたんでしょ？」

「…………えっ？ な、何が？」

楯無の行動に一夏は何も判らず戸惑う。だが、楯無は、ある事を一夏に言った。

「一夏君、もうこれ以上、嫌な事を思い出さないで、貴方はもう、充分と言つていい程、苦しんだのよ？」

「苦しんだ？ 俺が何を？」

「恍けないで、貴方は昔から周りから、織斑先生の付属品としか見てもらえなかったんでしょ？」

楯無の言葉に一夏は目を見開き、身体を震わせる。何故なら、一夏は昔から苦しい思いをしてきた。それは周りが一夏を付属品としか

見ていなかった事や迫害した事である。

それは一夏にとつて消える事の無い思い出だが、何故楯無はそれを知っているのかは、楯無自身が答えるように口を開く。

「実は私が一夏君を捜している時、一夏君に関する噂が何件何百件もあった。でもそれはとても悪い物だった」

楯無はやるせない思いを感じた。楯無から見れば苦痛と、一夏に同情するような内容であった。あんなのは人間の屑がやる事であり、楯無はそんな人間の屑ではない。その為、楯無は一夏を気遣いながらも言葉を続ける。

「一夏君、これ以上自分を苦しめないで……貴方はとても優しい人、自分よりも皆を心配する優しい人」

楯無の言葉に、一夏は哀しそうに俯きながら身体を震わせる。一夏は嫌な思い出を思い出していが楯無は言葉を続ける。

「一夏君……貴方の苦い思い出は貴方の心に大きな傷を負わせたのかもしれない。さっきの篠ノ之さんや、織斑先生にも良い思い出は無いかも知れない。でも、私は貴方に苦い思い出をこれ以上はさせたくない……貴方はもう、十分に苦しんだ……だから」

楯無は一夏に手を伸ばそうとした。刹那、一夏は楯無に抱き着く。——えっ!? ——。一夏の突然の行動に楯無は目を見開くが一夏は両手を楯無の背中に回しながら強く抱き締めていた。

「い、一夏君!? ど、どうしたの突然!」

楯無は一夏の行動に戸惑いながらも訊ねる。一方、一夏は何も言わず楯無を抱き締め続けていた。一夏は自分の厚い胸板に楯無の豊かな胸が当たっても興奮もせず恥ずかしくもいなく、楯無から良い匂いがするがそれを嗅ぐような疚しい事を考えてもいない。

一夏は単に楯無に甘えたいが為に抱き着いたのである。理由は一夏が弱気になりつつあった為だった。一夏は昔、僅かな理解者達を除いた者達から姉の附属品としか見てもらえず、心に大きな傷を負った。

それは消える事もなく拭い去る事も出来ない。一夏から見れば苦痛でしかなかった。何故それを思い出したのかは箒との話の時である。

箒との決別の話は一夏の過去を呼び起こすには充分な程であり、その中には千冬にも相手にされなかった事も含まれていた。

一夏から見れば苦痛でしかなかった、苦い思い出しかなかった。だからこそ、一夏は誰かに甘えたかったのだ。

本当なら誰かに八つ当たりしたかった。しかし、千冬以外は何の罪もない。一夏はそれを知りながらも八つ当たりしたい気持ちを堪え、楯無に甘えてしまったのである。

さつきまで怒っていたのも、楯無の呼び掛けに反応しなかったのも一夏は嫌な過去を思い出してしまったのと、一人でいたいと考えていた時も、近くにいた楯無に怒りを感じ八つ当たりしてしまった為に、楯無に謝罪する形で抱擁しているのであった。

一夏は自分でも判るように抑えきれない怒りを、楯無に八つ当たりに近いように甘える中、楯無は一夏の行動に戸惑いながらも頬を紅くしていた。楯無から見れば喜びしかないだろう。

「更識……俺、お前に甘えて良いか？」

一夏は不意に眩き、それを聞いた楯無は不意を突かれるかのように「えっ？」と惚けてしまう。が、一夏は言葉を続ける。

「更識、俺、判んなくなっちゃった……」

「えっ、どうしたの突然？」

楯無は訊き返すと、一夏は楯無を更に強く抱き締める。——あつ……——。楯無は少し戸惑う。身体が痛い訳ではなく、一夏の行動に戸惑っているだけである。しかし、一夏は楯無を見ないように楯無の右肩口に顔を埋めていた。

「更識、俺、判んなくなっちゃった……俺は何の為に、この学園に来たのか判んなくなっちゃった」

「い、一夏君？」

「どうしたの？ わ、私、判らないんだけど——お姉さん困るよ？」

「それは悪かった——でも、俺の我が儘を聞いてくれ……」

「我が儘？ 一夏君の？」

「……ああ、俺の、俺の我が儘を……っ」

刹那、楯無は何かに気付き瞠目した。自分の右肩口に濡れる感触が

した。それは一夏が涙を流しているからであった。

これには楯無は驚くも楯無は直ぐに瞑目しながら笑みを浮かべると、左手を一夏の後頭部に、右手を一夏の背中へと回し、左手を軽く動かす。楯無は一夏の頭を撫でていた。

楯無自身の気遣いでもあるが慰めでもある。一夏は楯無の行動に驚きはしなかったが一夏は嗚咽を上げる。

「大丈夫よ一夏君、お姉さんが居るから、お姉さんに一杯甘えても良いのよ?」

「つぐ……す、済まねえ……ああつ」

楯無の気遣いが嬉しかったのか一夏は泣き続けた。何故かは判らない、一夏は自分の辛い過去を忘れようと楯無に甘えている。しかしそれには理由があった。

一夏は辛い過去だけでなく、千冬や箒に憎悪を抱いているだけでなく、鈴が告白したにも関わらず、振った事も思い出していた。

千冬や箒は元より、自分は何故か鈴の告白を受け入れなかった。それは一夏は鈴を親友として好きだった。反面、一夏は自分でも気付かないように自分が甘えている少女、楯無を思い出したからである。

千冬に殺しに掛かった時も、箒が文句を言った時も、何故か楯無の顔を事を思い浮かんだ。一夏から見れば何故かは判らない。

嫌、一夏自身は気付かないだろうが一夏は楯無を異性として微妙に意識していたのである。それは守りたい存在かも知れなかったがそれは何れ大きくなり、一夏にとって大切な人になる事を一夏自身は未だ知らないだけである。

それに今は一夏は楯無に感謝していた。楯無の気遣いとも言える言葉に溜めていた苦しい思いが少しだけ和らいでいくのを感じていたのである。

一夏が楯無に抱き着く形で二人は抱き合い続けていた。それは長いか短いかは判らず、近くにも女子達を通るも二人には関係なかった。

しかし、女子達は二人の甘いとも言える空間に少し悔しい思いと、吐き気がするのを感じたの言うまでもなかった。

第95話

あれから数分後、一夏と楯無は今、食堂に来ていた。食堂には疎らだが女子生徒がいて、時間が経つに連れ、徐々に人が多くなつていく。そんな中、一夏と楯無は自分達が摂るべきであろう朝食が乗ったトレーを持ちながら隣同士に歩いていった。その光景は恋人同士に見えるがそれは嘘の恋人同士——故に周りに誤解を与えているが楯無は最早、一夏を意中の異性として惹かれ、好意を寄せている。

一方の一夏は楯無の淡い気持ち等知りもしないが楯無を微妙に感謝している。一夏と楯無、どちらも互いの相手を気にしているがそれは兩人にとつて吉なのか、凶のどちらなのかは判らない。

が、楯無から見れば裕福な時間なのかもしれない。元来楯無の表情は嬉しそうであり、一夏は無言だった。

「一夏君は、サンドイッチなの?」

楯無は、一夏が持つてるトレーの上にある食事物を見て訊ねると、

一夏は呆れながら「別に」と答えた。

「別にじゃないでしょ? 一夏君はそれで足りるの?」

「俺は少食だ——それに俺はダイエットしてる訳ではないし、余り食いたくない方なんだよ?」

「ふう〜ん、でも沢山食べた方が脳が働くわよ?」

「あのなあ……つたく、お前はどうかなんだよ? 鯖味噌定食って」

一夏は呆れながら、楯無が手に持つてるトレーの上にある食事物、鯖味噌定食を指摘すると、楯無は頬を膨らます。

「別に良いじゃない、一夏君はサンドイッチなのに指摘するの?」

「別に俺は指摘する訳じゃねえ、俺は只——」

「彼処に座りましょう!」

一夏は反論する前に楯無は、ある方角を見ながら言うと、その場所へと歩く。

——おい! ——。一夏は楯無の言葉や行動に文句を言いたかった。が、楯無は自分が見付けたテーブルの方へと歩く。

「一夏君も早く早く!」

楯無はテーブルの前に着くと、楯無は一夏を呼ぶ。恥ずかしいと言
うよりも、早く来てくれと促す。勿論、それを見た一夏は不意に辺り
を見渡す。

女子生徒達は何故か自分と楯無を交互に見ているが微笑ましそ
うであり、中には少しだけ驚いている者達と、中には何故か歯を食
縛っている者達もいた。

一夏と楯無が恋人同士に腹を立てているのだろう。ー止めろよ
！ー。一夏は恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら、楯無がいる
テーブルの方へと歩いていった。

「つたく止めろよな？ そんな行動をしたら此方が恥ずかしいじゃ
ねえかよ？」

一夏は恥ずかしそうに訊くと、楯無は首を傾げる。

「別に良いじゃないー人を呼ぶのは悪い事じゃないわよ？」

「悪い事じゃないって……此方は恥ずかしいじゃねえか？ ……つた
く」

一夏はトレイをテーブルの上に置くと、テーブルの近くに儲けられ
ている椅子に座る。刹那、楯無はトレイをテーブルの上に置くと、椅
子に座る。

「何故俺の隣に座るんだよ？」

一夏は楯無に疑問を抱く。何故なら、楯無は一夏の隣に座ってい
た。一夏から見れば疑問その物だろう。

しかし、楯無は答えた。

「別に良いじゃない、私が何処に座ろうと私の勝手でしょ？ それに」

「あつ、お姉ちゃん」

楯無が何かを言う前に近くから声が聞こえ、一夏と楯無は声がした
方を見ると、トレイを持っている簪がいた。因みに簪が持つてるト
レーの上には、熱いうどんと熱いスープが入っている大きな器が置か
れていた。

「簪ちゃんじゃない。おはよう」

「おはようお姉ちゃんに一夏君」

簪は二人が座っているテーブルに近付くと、簪は二人を交互に見

る。

「朝から熱いね……」

簪は恥ずかしそうに訊くと、一夏は「はっ？」と惚け、楯無は何故か喜んでゐる。一夏は元より、楯無は妹が自分達を恋人同士だと認識している事に喜びを隠せないでいた。

「それよりもお姉ちゃんに一夏君、此処に座つて良いかな？」

「別に良いわよ！ 簪ちゃんなら大歓迎よ！」

楯無の言葉に簪ちゃんは軽く頷くと、楯無の向かい側に座る。

「二人共、頂きましょう」

楯無は二人にそう言う。それを聞いた簪は頷き、一夏は呆れながら頷くと、更識姉妹は手を合わせながら「いただきます」と良い、一夏は無言でサンドイッチを一つ手に取り、一口含む。

「あら一夏君、貴方はいただきますも言わないの？」

楯無は一夏に呆れるも、一夏はまだ呆れながら「別に良いだろ」と答え、サンドイッチを食べる。

「朝ちやんと食べなきゃいけないけど、ちやんと言葉も言わなきゃいけないわよ？」

「うるせえな、俺が何をしようが俺の勝手だろ？ それに俺は規則正しい生活はあまり好きじゃねんだよ？」

「そうなの？ でも規則正しい生活は人を良くする物なのよ？ それに一夏君」

「うるせえ、さつさと食べ」

楯無は何かを言う前に一夏は静かに怒る。
「むくく」

一夏の言葉に楯無は頬を膨らます。それはとても可愛らしい物だったが楯無は笑みを浮かべる。

楯無はさつきまで、少し泣いていた一夏を慰める形で抱き返していた。楯無から見れば一夏の抱擁は嬉しい物かつ、彼の悩みを少し解つたような気がした。

しかし、彼に人殺しをさせた事や、ロシアでの件は未だ解決してい

ない。人殺しは兎も角、ロシアは今、沢山の大量殺人事件で世間が騒がしくなっている。

勿論、ロシアの経済や大規模な政治家の交代―その理由としては、次の新大統領である壮年の男性がロシア国民に謝罪し、今後このような事が起きないよう手を打っている。

その大統領は国民からの支持も高く、国民からの人気もあり、女尊男卑主義者でもないからである。それに自分はロシア代表としてどうなるかは、ロシアが更識家に連絡し、更識家が楯無に連絡する形で伝えられる。

言わば自分はロシア代表のままですらわれるのはロシアに委ねられている。

「お姉ちゃん？」

楯無が考え事をしてしていると簪が心配そうに訊ねる。

「う、ううん何でもないー」

楯無はニツコリと笑い、簪は「そうなの？」と訊き返し、楯無は「ええ」と答えた。

「……フン」

そんな姉妹を見た一夏は軽く瞑目する。が、一夏は内心笑っていた。

「よう、一夏」

刹那、近くから声が聞こえ、一夏、楯無、簪は声がした方へと振り返ると、そこにはトレーを持って止と勇人の二人が立っていた。

止は少し笑っていたが、勇人は無言で一夏達を見ていると同時に、二人は、この学園の物である白い制服を着ていた。

「止、勇人」

「おはよう一夏、それに更識さんも……更識さんで良いかな？」

止は楯無は元より、簪に訊くと、簪は軽く首を左右に振る。

「別に大丈夫……簪で良い」

「あっ……う、うん」

止は軽く頷くと、二人は椅子に座る。因みに、一夏が真ん中で隣には楯無、楯無の向かい側には簪、簪の隣には止、止の隣には勇人が座つ

ていた。

「何だ二人共、朝食はそれか？」

一夏は止と勇人の二人が選んだであろう朝食を見て訊ねる。止は焼き立てのパン一枚にベーコンエッグやサラダやコーンスープ、勇人はカレーライスにサラダである。

「別に良いだろ、お前はサンドイッチだろ？」

勇人は一夏に反論すると、一夏は「まあな」と微笑む。止と勇人は三人同様朝食を摂り始めるも、止はある事に気付く。

「そう言えば一夏、お前に訊きたい事があるんだけど……」

止が唐突に一夏にある事を訊ねてきた。――何だ止――。一夏は止を見ると、止は少し怪訝そうな表情を浮かべていた。

「どうした止？」

一夏は止の表情を見て何か悟ったが。止は少し無言で俯く。

「止……はあ」

一夏は止が何を考えているのかは判らなかつた。と言うより、一夏は止が自分に何を言うのかを悟った。

恐らく渡の事だろう。止は渡の事を誰よりも心配し、誰よりも無事である事を喜ぶと同時に敵になった事を誰よりもショックだったに違いない。

一夏は止のリーダーであり、仲間であり、親友である。止が渡の事を心配していると同時に、一夏もまた、渡を心配している。彼が何処にいるのかも判らないと同時に、渡が女尊男卑主義者達の者達に殺されていないのかを心配していた。

後で束に連絡して、渡を捜して貰うよう頼もうと、一夏は思った。

「止君？ どうしたの？」

一夏は止を心配する中、楯無も止を心配していた。楯無だけではない、簪も心配そうに止を見ており、勇人は鋭い眼差しを止に向けていた。

一方、止は俯いたまま何も言わなかつた。と言うよりも、止自身も気付いていた。しかし、止は軽く頷くと、顔を上げ一夏を見据えると、ある事を言った。

「実は……オルコットの事なんだけど……」

止の言葉に、一夏は目を見開く。勇人は眉間に皺を寄せ、楯無と簪は互いの相手を見据え首を傾げ、直ぐに止を見やる。

止は少し俯くも、止はオルコットを、セシリアを心配していた。それには理由があつたが、止はそれを話した。

周りには女子生徒の談話している中、騒がしい中、一夏達がいるテーブルでは、止は悲しそうにセシリアの事を話していた。

第96話

「成る程な……オルコットを救いたいのには、お前の我が儘じゃなく、山田先生の手助けでもある為か……」

止がセシリアの事を話した後、一夏は腕を組ながら呆れていた。一夏は元より勇人は瞑目しながら耳を傾け、楯無と簪はセシリアとは誰か なのかを知りながらも、止の話に耳を傾けていた。

因みに食事は止が話終える前に済ませている。

実は止がセシリアを助けたいと言ったのは、セシリアの為に動いている山田先生……つまり、セシリアと真耶を心配していたからである。

実は真耶はセシリアの為に頑張っているがセシリアもまた、クラスに馴染むように頑張っていた。しかし、効果はあまり良いものではなく、女尊男卑主義者からはあまり良い目で見られていなかったのである。

セシリアが一夏達男に負けた事が屈辱的かつ、それを無様に負け、尚且、クラスの代表にも選ばれなかった事が原因なのだろう。

女子の噂は凄惨なものである事は気付いていたがそれ以上である事に、一夏達は驚きと呆れていた。

「オルコットの奴、自分がした事の過ちには気付いている……でも、あいつは必死でクラスに馴染もうとしているけど、クラスの奴等は……特に女尊男卑主義者の奴等はそれを許そうとはしない」

止はセシリアの事を心配しながら言葉を続ける。一夏と勇人は、止自身がセシリアの事を心配している事には気付いているが止は言葉を続ける。

「俺は最初、オルコットの事はどうでも良いと思っていた。でも俺はあの時、オルコットとの鬪いをした時、オルコットが俺の着けていたマスクを馬鹿にした事には怒っていた」

「ああ……」

一夏は止の言葉に納得するように頷く。勿論、それはクラス代表決定戦の時であり、その時にセシリアが止が顔に付けていたチョッパー

のマスクを馬鹿にした事であり、それを聞いた止は怒り、セシリアを完封なきまで叩きのめした事である。

あれはセシリアが悪いが止はチョッパを尊敬している為、仕方ないとは言え仕方ないだろう。

「俺さ……あん時は本当に怒ったよ？　でも、クラス代表決定戦の翌日、籤引きで俺と決まった時、オルコットは泣きながら教室を出ていったのは覚えているか？」

「ああ、その後に山田先生が追い掛け、お前が追い掛けた後だろうか？」
「うん、でもそれだけじゃなかった、オルコットは自分の過去を話した時に泣きながら話した時に、山田先生がそれを優しく論じていた。俺から見れば山田先生は良い人だと思ったんだ」

「そうだな……山田先生は織斑先生……」

勇人は何かを言い掛ける前にある事に気づき、一夏を見る。一夏は勇人の言葉を聞いていたが一夏は哀しい笑みを浮かべながら首を左右に振る。

俺は大丈夫だ、心配するな、と一夏は勇人に訴え掛けていた。勿論、勇人は軽く頷くと言葉を続ける。

「山田先生は織斑先生よりもまともだが少しおっちょこちよーいーだ
がそこが逆に和むからな？」

「だろ？　それに俺は力になりたいんだよ、山田先生やオルコットの
為にもさ？　……なあ二人共、お願いがあるんだ」

「お願い？」

「……………」

止の言葉に一夏は訊ね、勇人は無言で止を見ていた。

「俺の身勝手かも知れないけど、オルコットや山田先生の為に力を貸
してくれないか？　俺あのままじゃ、オルコットが可哀想で仕方ね
えー！　オルコットは必死で自分のした過ちに気付いている！　だか
らこそ、二人の為に力になりてえんだ！　なあ頼む二人共、力を貸
してくれ！」

止は一夏と勇人の二人にお願いする。しかし、止が何故、セシリア
の為に動いているのかには理由があった。

実は止は三年前、あの火災で、実在は生きていたが渡だけでなく両親も失ったのである。止から見れば両親や弟を失ったのは哀しい物であった。

だが、止は一人ではなかった。一夏や勇人、三人のプレデターがいる為、寂しくはなかった。

セシリアが独りぼちなのを、止はセシリアを自分と重ねてしまったのである。セシリアは一人ではない。セシリアには自分達やクラスの皆がいる事を教えたかったのである。

だからこそ、止はセシリアを助けたいと思ったのだろう。そんな止の願いに一夏は哀しい目で、勇人は瞑目しており、楯無と簪は心配そうに見ていた。

刹那、口を開いた。

「止……俺はお前の言い分には理解出来る」

「一夏？」

止は一夏を見ると、楯無と簪も一夏を見やる。勇人は瞑目し続けていたが少し笑っていた。

「止……確かにオルコットの過去は同情出来るし、オルコットが女尊男卑主義者達に嫌な思いをされている事にも判ってた……だが、お前はどうかなんだ？」

「どうって……何が？」

止は首を傾げるが一夏は何故か言葉を詰まらせる。一夏は止に渡の事を言いたかったのである。

嫌、止に言いたかったが言えないでいた。言えば止を悲しませるだけであり、止はショックを受けるのではと思っていた。

「判ってるよ……渡の事でしょ？」

「っ!？」

止の言葉に一夏は目を見開くが止は哀しい笑みを浮かべながらそれを述べた。

「確かに俺は渡の事で一杯だーでも渡に構ってる暇はないー渡には悪いけど、今はオルコットや山田先生の事が先なんだ」

「止……お前」

「一夏……確かに俺は渡を心配しているけど、今はオルコットや山田先生が先だー渡には何れ、俺から話をし、何れ兄弟として決着をつける」

「止……」

止は俯く。両手を拳に変え力を入れていた。止は渡を心配していたがそれは後にしていた。本当は渡を心配していた。

だが今は、セシリアや真耶が先であり身近な事から解決しようとしていた。周りから見れば薄情者と言われるかもしれないが今はそれしかなかった。

「俺だつてさ、渡を助きたいよ……でもよ今は、クラスの仲間を助けるのが先なんだ……クラスの奴が困っているのを見てられないんだよ」
止は顔を上げる。今にも泣きそうなのか止は目尻に涙を浮かべていた。そんな止に一夏は下唇を噛む。

一夏は止の気持ちを察した。止は堪えている、と。

「……止、俺は嫌だけど判ったぜ」

「一夏？」

「えっ、一夏君？」

一夏の言葉に止と楯無は一夏の名を言う。すると、一夏は嫌そうに訳を話始めた。

「俺はオルコットは嫌いだー俺はオルコットが女尊男卑主義者であるのと、止を怒らせたと言う理由で嫌いだったーだけど、お前はオルコットを嫌っているよりもオルコットを助きたいみたいだからな？」

一夏は髪を掻く。心なしか頬を紅くしていた。

「まあ、お前はそう言うのなら俺は文句は言わねえよー俺はただ、お前が困っているのをリーダーとして親友として見たくなかったからな」

「いち」

「俺も助けてやるよ」

「勇人!？」

止は一夏に何かを言い掛ける前に勇人が口を開き、止は驚きなが

ら、勇人を見ると、勇人は鋭い眼差しを止へと向けていた。

「止、俺は別にお前を助けるつもりはない、だがお前を見捨てるつもりもない——俺は止と言う親友の願いを聞き入れる形で手助けするだけだ」

勇人は呆れながら言葉を続ける。それを聞いた止は涙を流しそうになる目を押さえる。しかし、止は嬉しかったのだ。

一夏と勇人が、二人の親友が自分の為に力を貸してくれる。それは止にとって、嬉しい以外なんでもない。

「止、泣くなよ?」

一夏は止に呆れながら言うと、止は首を左右に振る。

「嫌、別に泣いてる訳じゃねえよ? 目にゴミが入ったからそれで泣いてるだけだよ?」

止は恥ずかしそうに否定する。勿論、嘘がバレバレだが一夏は止をからかい、勇人は再び瞑目していたが笑っていた。

「お姉ちゃん、この三人、凄いな?」

「……ええ」

そんな三人の友情に更識姉妹は見守っているのか蚊帳の外だった。嫌、二人は彼等の友情に何も言えなかつたと言えば良いだろう。

何故なら彼等は死地を潜り抜けた猛者達であると共に親友であるからだ。親友の危機には親友が駆け付ける。

一夏、勇人、止の三人は其処らの男達の友情とは違う。彼等の友情はそれ以上の友情で固く結ばれている。

だからこそ、彼等の友情は脆くはない。更識姉妹は三人の友情に何も言えなくなる中、一夏は止をからかい、止は泣きながらも否定し、勇人は無言だが笑みを浮かべていた。

それは何処にでもいる普通の男子生徒達だったがその光景は更識姉妹には珍しい物だった。

そして、それは食堂が朝の時間が終わるまで続いていた。

一方その頃、千冬は一夏に歪んだ思いに目覚めかけている事を一夏、は知らなかった。

第97話

「一夏……」

一夏達が食堂で朝食を摂ってる頃、千冬は寮にある寮長室で一人、ベットの近くに凭れ掛かりながら一夏の名を呟いていた。千冬は寮長であるがこの時間帯なら教師が学園で授業の準備をしなければならぬ。

では、何故千冬は未だに寮長室にいるのかは学園長やとある人物に寮長室もとい自室での三日間の謹慎処分を言い渡されたのである。

これには千冬も反論しなかったが楯無は千冬が勇人に詰め寄り問い質した事や、その内容が一夏の事である為、楯無は学園長達に洗いざらい話してしまい、このような結果となってしまった。

そこは未だ良いだろう。しかし、千冬は虚ろな目をしており、一夏の名を呟き続けていた。彼女は今、一夏の事しか頭になかった。

千冬にとつて、一夏を誰よりも心配し、誰よりも求めていた。千冬が目が虚ろなのは一夏を求めるがあまり、心が弱りきっているからだった。

「一夏……何故お前は私を拒むのだ？ 何故お前は私に過去を話したがないのだ……」

千冬は一夏に訊ねる。勿論、此処には一夏は居ない。居たとしても、一夏は千冬を拒み直ぐに寮長室を出ていくと同時に、自分の過去を話したがる。

千冬が強要しても一夏は更に拒絶し、千冬を殺しかねない。その前に一夏と接触した時点で千冬に重い処罰を喰らうのも目に見えていた。

「一夏……一夏」

千冬は一夏を求める。千冬は寂しかったのだ。千冬は一夏が誘拐された事を日本政府が黙っていた事と、それが原因で一夏を苦しめている事を知らなかった。

千冬は一夏を養う為や家計を助ける為にバイトをしていた。それが原因で一夏の事をあまり見てやれないでいた。

一夏が苦しんでいるのに自分の事を優先し、一夏が努力している事を褒めてやる事さえもしなかった。周りから見れば異常かもしれないが、千冬は家計を助ける為に疲れきっていたのである。

ある日、親友の束が造ったISで有名になった際も、それが一夏を更に追い込んでいる事にも気付いていなかった。

そして、あの日が千冬や一夏の姉弟の絆を裂き、大きな溝を作る出来事が起きる。それは一夏誘拐事件。

千冬は名誉を得たと同時に、ツケが回った意味である事件で弟を失ってしまう。千冬から見れば絶望でしなかった。

千冬にとつて、一夏は大切な弟だった。日本に帰国した際も、一夏の親友達の一人である五反田弾に殴られ、弾から一夏が苦しんでいる事を知った。

それは千冬にとつて知るべき事実であり、千冬を追い込むには充分な程であった。千冬は一夏の苦しみを知ったと同時に一夏に謝りたかった。

束が捜してくれても、千冬はドイツに恩を返す意味で一年間、教官を務めていた。そこでラウラと言う銀髪の少女と出逢い、ラウラ率いるクラリツサ以下数名の女性隊員の指揮を執る事にもなった。

しかし、一夏を失ったと言う心の傷を拭いきれず、何時もは気丈に振る舞っていたが裏では泣いていた。逆にそこでラウラが一夏に怨みを抱く事になるのは別の話である。

千冬が教官の役目を終えた後、今度はIS学園から教員にならないかと言われた。勿論これは、一夏誘拐の事を教えようとした女性秘書の願いでもあった。

最初は千冬は断っていたものの、女性秘書は学園長や学園側にも頼み込み、千冬を学園の教員にしてくれと頼み込んだのである。

『これ以上、彼女が苦しむのは良くない、彼女は私達日本政府のせいで苦しんでいるー彼女には悪いけど、彼女には一夏君の分まで生きて貰う為に過去に拘るだけではなく、明日の事をも見てほしい』

女性秘書は学園長に対してそう言ったが学園長もまた、彼女が一夏を失った事で苦しんでいる事は知っていた。

何故なら、一夏が死んだ事は女性秘書から聞かれ知っているが、学園長は彼女が日本政府の陰謀に巻き込まれた被害者に過ぎないと思っただのである。

だからこそ、千冬には学園で教員をしてもらいたかった。千冬を心配しているのは束だけではなかった。周りの極一部もまた、千冬を心配していたのである。

千冬は何度も拒んだが最終的には折れ、学園の教員となった。そして、二年後の今年、奇跡が起きたのである。

弟が生きていたのである。千冬から見れば喜びしかなかった。これでもた、一緒に暮らせるー千冬はそう思っていた。

しかし、現実は違った。一夏は自分を拒絶しており、自分の方へと近付こうともしなかった。

千冬から見れば判らなかった。無理もない、千冬も一夏や箒と同じように孤独の日々を過ごしていた。一夏を失った事で千冬は自分の過ちや一夏の大切さを知った。

どんなに一夏を求めても一夏が生き返る訳ではない。一夏が自分を許す筈もない事に気付いていた。が、千冬は一夏が生きていても、罪悪感で一夏に近付く事は出来なかった。

自分は一夏に嫌われている。千冬はそれに気付きながらも近付けられないでいた。

近付いたとしても一夏は拒絶する事も目に見えていた。それだけじゃない、千冬が勇人や止に一夏の過去を訊こうと詰め寄ったのも、白式を与えようとしたのも、一夏のISをスペック上の理由で没収しようとした後に白式を渡そうとしたのも、全て一夏の為でもあった。

結果は全ての外れだった。過去の件は一夏に知られてしまったがそれでも訊こうとしている。白式を与えようとした件は一夏に拒まれ失敗し、没収しようとした件は楯無に論され失敗した。

千冬のやる事は全て裏目と出てしまった。過去の件を訊こうとした際や、楯無に一夏の事を教えても聞き入れてくれなかった。

それは全て千冬の勝手かツケが回った事なのかは判らない。だが

千冬は未だ一夏を求め続けている。

自分には一夏が必要であると同時に、一夏への罪滅ぼしがしたかった。それらは全て裏目となるも、千冬は泣く。

「一夏……一夏」

千冬は泣き続ける。一夏を失った後の孤独が故だろう。千冬は自身が悪いと気付きながらも千冬はそれを一夏に上手く言えなかった。そして、千冬は泣き続けた。

それは数分間も続いた。扉の向こうにいる、この寮長室を出入り出来る扉を通る女子達に聴こえているのかは判らないが千冬は泣き続けた。

「……………ふふっ、ハハハ」

刹那、千冬は泣きながら笑う。それは狂気と言うよりも孤独か弟を求めぬがあまりの狂気とも思えた。

千冬は虚ろな目をしながら泣きながら笑うと、口を開く。

「そうか……こうすれば良かったか……そうだ、そうすれば良い」

千冬はある事を考えてしまう。それは一夏が拒もうとしても、一夏を無理矢理一緒に住ませれば良いと言う考えだった。

その考えは最早ストーカーと言うよりも、千冬の我が儘だった。それでも千冬は言葉を続ける。

「一夏が拒んでも私は一夏を離さん……それに一夏と一緒にいる奴等は私が認めた者達しか近付けさせない……それにあの忌々しいガキ共や生徒会長は論外だ」

千冬は楯無、勇人、止の事を一夏の親友であろうと近付けさせない者達として見始める。

「そうだ……そうすれば良かった……そうすれば……ふふっ……ハハハ!!」

千冬は狂氣的な笑いをする。それは千冬が壊れている事を意味していた。

「誰にも一夏を渡さん！ 一夏は私の物だ！ 一夏には私の考えたレールの上を走ってもらおう！ それに、それに、私を認めた者達以外の奴等には一夏には指一本触れさせん……触れたら、例え誰だろう

と破滅に追い込み、殺してやる！ 何人いようが殺してやる!! 殺してやる……ハハハハハ！」

千冬は狂気的な事を言う。異常としか見えなかったが千冬は既に心が壊れ掛けていた。千冬は一夏を自分の物としか見えなくなり始める。

それは千冬が悪いのか、一夏が悪いのかは判らない。だが姉弟はI Sにより絆を引き裂かれた被害者達と言えば良いだろう。

弟は姉に憎悪を抱き、姉は弟を自分にしようとする独占欲が出来てしまう。

それは最悪な結果を招く事になる事を千冬自身は知らなかった。

今は千冬は狂気的な笑い声を上げ続けていたが笑い声は室内に木霊し続けている。

そして、千冬の心は完全とは言えないが一夏を思うがあまり壊れてしまった……。

第98話

「あがつ……」

此処は学生寮の勇人と止が共同生活をしている部屋。そこには二人の男女がいた。女性の方は織斑千冬であるが何故か気を失っている。

もう一人は男子であったがIS学園の特徴である白い制服を着ているが何故か膝を突いて、腹を押さえながら踞っていた。

しかし、千冬の近くには血の着いた包丁が転がっており、男子が押さえていた腹には血が着いていた。が、腹からは真っ赤な血が止まる事無く出続けているのと、男子生徒は汗を流しながら歯を強く食い縛っていた。

何故こんな事になっているのかと言うと、千冬がその男子生徒を刺そうとした後、殴られ気を失ったのである。その為、このような事になってしまったのだ。

「う、ああつ……」

男子生徒は腹に走る激痛に耐えきれず、そのまま前に倒れ掛かり、俯せに倒れた。

時は十五分前。

「取り敢えず、教室に戻ろうぜ？」

一夏達が食事を済ませた後、止が突然そんな事を言う。これには近くにあった一夏、楯無、勇人、簪の四人は頷く。

「そうだな、教室にはあの二人は居ないし、何より少しぐらい平穏な時を過ごせるな……」

止の言葉に一夏は腕を組みながら言う。あの二人は千冬と箒の事であり、一夏から見れば顔を見たくもない存在。一緒にいるだけや顔を見るだけでも、憎しみが増す。

嫌、今の一夏の表情は何処か安堵している。二人が居ないからか、二人がいるせいでゆっくりとした時を過ごせなかった為に、今の、二人が居ない事が一夏にとって、久しぶりとした安らぎの時間なのだろう。

そんな一夏を見た楯無は少し微笑むが楯無から見れば、一夏がゆっくりとした時間を過ごせる事が、楯無にとって何より嬉しかった。

逆に未だ、不安が楯無の心を支配していた。一夏が再び、人を殺さすのではないのか、と。それが楯無の不安を積もらせている物であり、楯無自身が一夏を心配している事を意味している。

楯無は一夏を見ている中、楯無の心には安否と不安が入り交じっている。すると、一夏は楯無を見ると何故か楯無の頭を撫でる。

楯無は突然の事に戸惑うが訊ねた。

「ど、どうしたの一夏君？ 突然頭を撫でてきて」

楯無の問いに、一夏は楯無を見て溜め息を吐くと、楯無に対し口を開く。

「どうしただと？ 落ち込んでいたから気にしただけだが悪いのか？」

「えっ……わ、私は別に落ち込んでいないわよ？」

「嘘を付くな、お前、顔に書いてあるぞ？ 落ち込んでいます、ってな？」

——えっ!? ——。一夏の言葉に楯無は自分の顔を触る。それを見た一夏は軽く笑う。

「ははっ、冗談だよ？」

「あっ……むくく」

一夏は笑い、楯無は頬を紅潮しながら頬を膨らます。そんな光景を簪は少し笑い、勇人は瞑目しながらそっぽを向き、止は苦笑いしていた。二人のやり取りは恋人同士に見えなくもなかった。

「取り敢えず、後は昼休みか放課後でな」

一夏はそう言うと、楯無の頭を撫でていた手を下ろし、立ち上がると、トレーを持つ。勇人と止の二人も立ち上がるがトレーを持ってカウンターの方へと歩こうとし、踵を返し、勇人や止も踵を返す。

——待つて！——。刹那、楯無が三人を呼び止める。勿論、楯無が呼び止めようとしたのは一夏だけであるが勇人や止も振り返ってしまう。

「何だ更識？ 何か未だ用があるのか？」

一夏は呆れながら、楯無に問うと、楯無は頬を紅くしながら何故かモジモジしていた。その仕草は可愛い物だったが一夏は何も判らず首を傾げる。

一方、勇人は一夏を見て頭を抱え呆れ、止に至っては苦笑いと言うよりもニヤニヤしながら、一夏を見ており、簪に至っては無言である。

三人はそれぞれの表情を浮かべているが三人には共通している事があった。それは楯無が一夏に惚れているのと、一夏はそれをはぐらかしているのか何も判らないでいる。

「どうした？ 何にもなければ俺達は教室に戻るぞ？」

「嫌……その、私のお願いはどうかな？」

「どうって何が？」

「嫌……私や簪ちゃんの家に来ないかって話」

「……あ、ああ……」

楯無の言葉に一夏は少し戸惑う。それは昨日の話の事であり、楯無が一夏を更識家に招待したいと言う話である。

それはいいとして、一夏は行くかどうかは決めていなかった。が、楯無から見れば早く決めて欲しいのだろう。早く決めてくれれば楯無の心配は消えるだろう。

否、それ以前に楯無は一夏に家に来て欲しかった。一夏と少しでも一緒に居たい、一夏の心に来た大きな傷を少しでも癒したい。

楯無は一夏が何を言うのかを期待していた。出来る事なら来て欲しい、と。一方、一夏は何故か悩むが、止がふと、ある事を思い出す。

「あつ!! 忘れた!!」

止の叫び声に一夏達は驚く。

「ど、どうしたんだよ止？」

「あつ、嫌、ちよつと寮で忘れ物をしたんだ」

「忘れ物？」

一夏の言葉に、止は頷く。

「ああ、今日の授業で必要なノートを忘れた、俺は先に寮に戻ってるから、二人は先に教室に戻ってて、俺はノートを取りに行ってから教室に戻るから、山田先生には俺は遅れると言っというて」

止はそう言うのと、カウンターの方へと歩いて行く。止は一夏達とはどンドン離れていくが一夏達は止の後ろ姿を只見ていた。

「止……あつ、それよりも更識?」

「何かしら一夏君?」

一夏は何かを思い出したのか楯無に訊くと、楯無は一夏の方を見ると訊き返す。

「あつ、さっきの話何だけだよ……」

「さっきの話? あつ、うん」

楯無は固唾を呑む。一夏が何を言うのかを期待するのと反面に、一夏の答えはどっちなのかを、楯無は心配する。

行くか、行かないか、と。行くのならば喜ぶ、行かないのなら仕方ないと思つて諦めるしかない。が、一夏の答えは一夏自身が少し悩んだ末に決まっていた。

一夏はそれを決意した意味で頷くと、楯無に答えた。

「更識、俺は行くよ、お前やお前の妹の家に」

——えつ? ——。一夏の言葉に楯無は目を見開く。何故なら、一夏の言葉が「行く」と言う、楯無自身が望んでいた答えでもあったからだ。

楯無自身は少し驚きながら、一夏に訊ねる。

「い、一夏君、行くの? わ、私や簪ちゃんの家には?」

「ああ、お前には少し、お世話になったからな」

一夏は恥ずかしそうに訳を述べる。実は一夏は楯無の行動に少し感謝していた。楯無は千冬が自分のISをスペック上の理由で取り上げとした際に、楯無は千冬に対し論して止めたりしてくれた為に取り上げられずに済んだ。

因みに勇人と止の二人のISは真耶が取り上げようとする前に、真耶は学園長に確認の連絡をし、千冬が許可を貰ってない事に気付き、

言わなかった。

それだけではない、楯無は一夏の為に、千冬に一夏に近付かないよう釘を刺したりしてくれたのである。

それは少しお世話になったと言うよりも、楯無が千冬や箒の事で苦しんでいる一夏の為に動いてくれていたとしか思えなかった。

逆にそれが、一夏が千冬と箒への憎悪を抱く前に、楯無と一緒に居る時だけ、千冬と箒を忘れる事が出来た。

最初は楯無の事等どうでも言いと思っていた。しかし、それが長ければ長くなる程、楯無と一緒にいるだけは少し安らかな時間が出来ていた。

一夏にとって幸ある時間かも知れない——勿論、その時間は何れ別の形になるだろうが一夏はそれを知らない。そして、楯無にこう言った。

「更識、お前は俺にに沢山の事をしてくれた——否、お前と一緒にいる事が当たり前にもなっていた——お前は俺に安らかな時間を少し与えてくれた……それが俺の答えかも知れないが俺はお前に感謝している」

「一夏君……」

楯無は一夏の名を呟くと、一夏は少し恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「だからよ、お前に恩を返す意味で家に行つてやる、お前やお前の妹の身内や身の回りの使いに少し挨拶してやるよ」

一夏は恥ずかしそうに言葉を述べる。が、一夏の言葉を聞いた楯無は目を見開くも、直ぐに微笑ましそうに見つめる。

「ええ……後で家族に連絡するわ」

楯無は嬉しそうに言った。楯無から見れば一夏が家に来る事は嬉しいのであろう。一夏が家に来れば、両親や皆を元気付ける事が出来る。

嫌、一夏がしてきた事は許される事ではない。それだけでなく、自分は一夏を支えたい——楯無の我が儘かもしれないが楯無の切ない我が儘でもあった。

一方、一夏は恥ずかしそうに楯無にそっぽを向き続けていたが頬を紅くし続けている。楯無も楯無で頬を紅くしていた。

「ハア……」

「お姉ちゃん……」

一夏と楯無を見た勇人は溜め息を吐き、簪は楯無を見て少し何も言えなくなる。勇人と簪、この二人は一夏と楯無の二人の淡くも切ない気持ちを見て、呆れながらも応援したい気分で一杯だった。

第99話

数分後、此処は学生寮。寮は生徒は殆ど居なかった。大半は身支度を終えて学園へと向かった者、残りの極僅かの者はサボりか風邪の為に休んでいるだろう。

そんな中、一人の男子生徒が通路を歩いていた。止である。止は慌てる素振りを見せていないが自分や勇人と共同で過ごしている部屋へと歩いていった。

彼は今、授業で使うであろうノートを取りに寮へと戻っていた。無論、一夏や勇人には山田先生に遅れると言い残している為、問題は無い。

もし、真耶に指摘される形で怒られても、授業に使い、黒板で書かれた内容に録る為に必要なノートがなければ、何の意味もないし、怒られるよりはましだった。

止は自分や勇人が共同で過ごしている部屋を出入り出来る扉の前に着くと、制服のポケットから鍵を取り出し、鍵穴へと差し軽く回す。

ガチャツ……。鍵穴から小さな音が聴こえた。キー開いた事を意味していた。止は鍵を抜くと、鍵をポケットへと戻す形で入れ、ドアノブを捻り、扉を開け、部屋の中へと入る。

「ああ〜っ、早く授業へと戻らなきゃ」

止は準備を怠った自分に怒り呆れながら自分が使っているデスクへと歩み寄る。止が使っているデスクには物は散乱してはいないが小綺麗であり、本が何冊も積み重ねられており、それらは全て、サブイバル関連の物であった。

それらは全て、パソコンの通販で購入した物ばかりであり、止から見ればいざと言うべきか、或いは渡を救えなかった事への罪悪感かは止にしか判らないだろう。

止はデスクの上にある、授業の内容を録る為に必要なノートを捜していた。直ぐに見付かった。

止は学園へと戻ろうとして、ノートを手に取り取ろうとし。刹那、扉が開く。

「誰だ……えっ?」

止は扉が開いた事に気付くが眼を見開く。扉を開けたのは千冬だったが千冬は俯いたままである。

「お、織斑!」

止は千冬を見て驚く中、千冬は駆け足で止に迫る。

「えっ!」

止は突然の事で驚くも、千冬は止に抱き着く。

「うぐっ……」

刹那、止は腹に激痛が走る事に気付き、腹を見ると眼を見開く。そこには、腹には包丁が突き刺さっていた。間に合わなかったのだ。

包丁の周りには自分の血が、白い制服を真っ赤に染めている。しかし、千冬は包丁を持つてる手に力を入れていた。

少しでも、止に致命傷を与えたようとしているが千冬は止を睨んでいた。その鋭い眼差しは憎悪が籠っている。

「一夏は誰にも渡さん……一夏は私の物だ……」

千冬は力ない声で呟くが止は「ぐっ……!」と歯を食い縛り、腕に力を込めて千冬の顔面を殴った。

千冬は吹っ飛ばされるが少し飛んだ程度であり、仰向けに倒れた。

一方、止は無言かつ危険と判りながらも包丁を抜く。

「うぐあっ……」

止は苦しそうに顔を歪めるが包丁の抜く音が止の耳に響く。完全に包丁を抜く事は出来たが包丁の鋭い先端や刀身の半分は真っ赤だったが止は包丁を落とす。

カラン……包丁の落ちる音が辺りに小さく木霊した。

「あがっ……」

止はそのまま腹を押さえながら跪く。止の額には激痛の表れなのか汗が出ており、腹に流れ出る血は止まらない。

「う、ああっ……」

止は腹に走る激痛を堪えつつ力ない声を上げる。最早、自分は助かるかどうか判らない。

このまま大量出血で死ぬのだろうか、止の心には死という言葉が過

り、止の心を支配している。

「だ、誰、か……」

止は誰かに助けを求めようとしていた。千冬は気を失っている為無理に等しく、今の時間帯は皆、学園にいるだろう。

ならば、自分で何とかするしかない。だが、その自分は倒れておりどうする事も出来ない。

このまま死ぬのだろうか、止は身体を震わせるが止は出逢った者達を思い浮かべる。

それは走馬灯か、死へのカウントダウンかは判らないが止は出逢った者達を思い出していた。

一夏、勇人、楯無、簪、クラスの皆、本音。セシリアの件は未だ解決していない。止はそれに後悔しながらも眼を閉じ、今一番逢いたい者達の名を上げる。

「チョッパ……渡……」

止は二人の名を呟く。

チョッパ。彼はプレデターの一人であり、両剣の扱いを教えてくれた師匠。彼という時はとても辛かったが楽しい事もあった。

止にサバイバルの師匠かも知れないが止から見れば逢いたい者の一人だろう。

渡、霧崎渡。彼は双子の弟であり、止の目の前で瓦礫に埋まれ死んだと思われていた。

しかし、彼は生きていたのだ。彼と逢った際は驚きしかなかったが渡は彼に憎悪を抱いていた。

それは止が悪い訳ではないが仕方ないと言えない。止は渡を心配していたが彼に謝りたかった。

あの時、自分を助けようとして巻き込んでごめん、と。勿論、渡は許してくれる筈もないだろうが止はチョッパ同様、彼に逢いたかった。

「みんな……ごめん」

止は意識が消えていくのか眼を閉じつつあった。大量出血の影響かもしれないが止は死を覚悟していた。

刹那、通路から叫び声が聴こえた。止はその叫び声に気付いたが止は静かに眼を閉じた。何故なら、扉は開いたままだったのだ。

それは幸いな事か何の意味もない事かは判らないが止が死んだのかは判らないが、止自身は少し気付いていた。通路からの叫び声は女性の物である事に……。

そしてその叫び声を上げた女性は誰か、そして止がどうなるのかはその女性に掛かっていた。

第100話

「……………」

一時間後、ここは学生寮の一夏と楯無の部屋。その部屋には一夏と楯無、勇人、本音、簪の五人がいた。

一夏は自分のベッドに腰掛け、隣には楯無が腰掛け、簪や本音は近くに立っており、勇人は近くの壁に凭れ掛かりながら腕を組んでいる。

しかし、この時間帯は授業中だが彼等は授業をサボっている訳ではない。それに彼等の表情は顔色が悪いと言うよりも、何処か哀しみに満ちている。

何故なら、彼等は一人の生徒を心配しているのだ。一夏と勇人の親友であり、更識姉妹の恩人であり、本音の想い人である霧崎止を。

止は今、生死の境をさま迷っている。止は千冬に刺され、意識不明の重体であり、目を覚ます気配はない。

止は今、学園に設けられている、重病人や大きな怪我を負った者達だけの為の集中治療室に居り、面会謝絶中である。これは学園長やとある人物の計らいでもあった。

集中治療室にいるのは世界中からは貴重とも言える男性操縦者であると共に、女尊男卑主義者達に襲われないようにする為でもあった。

幸いな事に集中治療室だけであって、医療器具は豊富であり、いざという時の備えでもあったのだ。何より、一夏や勇人も止との面会を拒否させている。

学園内にいる極一部にしか、集中治療室に入る事を許されているのであると同時に、一夏と勇人に止を逢わせないのは二人が何かをするのを避ける為である。

二人は止の親友であると同時に、彼等には止が怪我と闘っている事を告げた。一夏は最初は否定した物の、勇人は一夏を宥めつつ、楯無は一夏を落ち着かせていた。

一方で、千冬は今、牢屋に入れられており、学園側は千冬の処罰を

どうするのかを教員達と話し合っており、生徒達には自習と言う形で待機させているが、一夏と勇人は寮に居るのは千冬に襲い掛からない為や、楯無を監視役として居るのだった。

簀や本音は楯無の御内や知り合いであり、虚は生徒会の件で色々と忙しい為に此処に居ない。

しかし、一夏達の間には不穏な空気が流れ、お通夜さながらの重苦しい雰囲気醸し出されている。

誰一人明るい話をする気もなく、誰一人話題を出そうとする気配もない。彼等は止と言う人物を心配している。

彼等だけではない、学園の大半の者達が止を心配している。彼の明るさか、彼にはカリスマ性が有ったのかは判らないが心配している事に変わりはない。

「……………」

そんな重苦しい雰囲気に耐えきれないのか、一夏が無言で立ち上がる。

「一夏君？」

近くに座っている楯無は疑問の表情を浮かべながら、一夏を見上げる。簀や本音も一夏を見やり、勇人は視線を一夏の方へと移す。

一夏の表情は般若のように怒りが籠っていたが憎悪と復讐も籠っているようにも思えた。勿論、楯無は直ぐに気付く「駄目よ！」と慌てながら、一夏を抱き止める。

「離せ！俺はあの女が許さない……俺はあの女を殺さなければ俺の気は晴れない！」

「だからってそれじゃ止君は喜ばないわよ!! 貴方が織斑先生を嫌っているのは知ってるけど、貴方のする事は許される事じゃない!」

楯無は一夏を必死に止める。楯無は薄々、嫌、一夏が千冬と箒を嫌っている事に気付いていたが今は違う。

彼は本気で彼女を、自分の姉を殺すつもりだ。もしそうなら、まったら、彼は一生、姉を殺した弟として白い目で見られ、重い十字架を背負う事になる。

それに一夏は、それ以前に誘拐犯達やロシア政府の腐った役人達を

殺している為、彼はもう死刑になっても可笑しくない。

勿論、それらは楯無が関わっているのと、楯無自身が一夏をこれ以上手を汚させたくないのだった。

証拠に、楯無の目には涙が浮かんでいた。一夏を心配しているのと、一夏を思う彼女の哀しみの表れなのかもしれない。

一夏が暴れ、楯無が止める中、簪と本音はオドオドしていた。彼女達は一夏を止めたいが一夏の親友を思う事には同情しているのと、今の自分達に一夏を止める力はない。

となれば……簪と本音は視線を勇人の方へと移す。勇人は目を閉じているが彼なら一夏を止める事が出来る。

そんな二人の、お願いとも言えるような視線に勇人は気付くも内心舌打ちするも、勇人は不意に声を掛けた。

「止せ一夏、そんな事をして止は喜ばない」

「なっ、勇人……!?!」

「勇人君!?!」

勇人の言葉は突然の事に一夏と楯無は驚くも、勇人は鋭い眼差しを一夏へと向けていた。それは凍てつくような物だったが勇人は内心、止を心配し、一夏も心配している為に炎のように熱い。

「一夏、此処は抑えろ、お前があの子を殺しに行っただけで何も変わらない」

「だけどあいつは止を刺した! あいつは俺を狙うだけでいいのに、あいつはお前や止、更識を巻き込んだんだぞ!?! それにお前は何で落ち着いていられんだよ!?! お前は止が死に掛けているのに、何で落ち着いていられんだよ!?!」

一夏は勇人に詰め寄り、肩を掴む。楯無は慌てて宥めるが勇人は一夏から目を逸らす意味で項垂れる。

「俺だって辛い……だからこそ、俺達には何も出来ない……だからこそ、俺達は止が自分から生きて帰ってくる事を祈るしかないんだよ……」

勇人は言葉を述べる。勇人らしい冷静な物だったが何処か弱々しい。勇人もまた、止を心配している意味をも表していた。

「っ、この野郎!!」

一方、一夏は怒りで我を忘れ、勇人の胸ぐらを掴むが勇人は項垂れたまま、何も返事もせず反撃する気配もない。逆にそれを見た楯無達は驚きながら、勇人を助ける意味で一夏を引き剥がそうとした。

「駄目よ一夏君!! 勇人君だって辛いだよ!? 勇人君に八つ当たりしても何も変わらないわ!」

「そうだよイッチー! ハヤハヤだってトツマの事を心配しているんだよ〜!」

楯無達は一夏を止めるが肝心の一夏は怒りで我を忘れ続けている為、効果はない。あるとすれば、一夏は勇人に何をしでかすのかは判らないのと、楯無達から見れば最悪な結末でしかない。

楯無達の間に不安が過る中、勇人はゆつくりと顔を上げ、一夏を見据える。勇人は一夏に鋭い眼差しを向けるが何処か哀しく、何処か怒りを感じさせる。

それを見た一夏は勇人の睨むような視線にたじろぎはしなかったが下唇を噛むと、勇人を乱暴に放す。

一夏は勇人を殴れなかった。嫌、殴れなかったと言うより、勇人の獲物を見付けたような視線に殴る気力が失せ、親友に手を出した自分が恥ずかしく思えたのだろう。

一夏は項垂れると、勇人に対し「済まねえ……」と軽く謝る。楯無達も楯無達で一夏が勇人を殴らなかつたのと落ち着いたのを見て哀れみの目で見据える。

そこは安堵したかつたが一夏に掛けてやる言葉が見つからなかつたのだ。そんな一夏に楯無はゆつくりと、一夏の背中に抱き着く。

一夏は楯無の突然の行動に驚きはしなかつたが身体を震わせていた。勇人は一夏を見て何も言わず目を閉じると、その場から離れる。

「何処行くのハヤハヤ……?」

本音が声を掛けると、勇人は立ち止まり肩越しで本音を見る。視線は本音には向かなかつたが勇人は静かに呟いた。

「暫く一人になりたい……気晴らしにはならないが、そこら辺を散歩してくる……従いてくるなよ」

勇人はそう言い残し、部屋を出ていく、勇人の後ろ姿は何処か寂しそうだが何処か哀愁漂う。扉の開く音が聴こえ、直ぐに閉める音も聴こえた。

勇人が部屋を出ていった証拠でもあるが本音は簪を見る。

「かんちゃん、私達はどうぞしよう……」

「う……うん、私達は」

「二人共、自分の部屋に戻りなさい」

簪が戸惑う中、楯無が優しく訊ねた。

「お姉ちゃん？」

簪は楯無の方を向くと楯無は哀しい笑みを浮かべていた。妹を心配する姉の顔だったが一夏を心配しているようにも思える。楯無は言葉を続ける。

「二人共、部屋に戻りなさい。これは生徒会長の命ではありませんんー御内や当主としての命です」

「でもお姉ちゃ」

「簪ちゃん、これは当主としての命ですー私は大丈夫です、一夏君の事は私に任せて、貴女達は自分達の部屋に戻りなさい」

「……………うん」

楯無の言葉に簪は何も言えなくなかったが、楯無の言葉に従うしかなかった。別に姉が恐い訳ではないが簪は一夏を姉に任せようと思った。

一夏の事を知ってるのは楯無だけであるが勇人や止、束には及ばないが今の一夏を任せられるのは楯無しかない。

簪は頷くと、本音を連れて部屋を出ていこうとした。本音が何かを言い掛けていたが簪は本音の手を引っ張り、部屋を出ていった。

扉の開け閉めする音がしたが二人の少女が部屋から出ていった事を物語っていた。

そして部屋には、一夏と楯無の二人しか居なかったが楯無は一夏に問い掛ける。

「一夏君、泣いても良いのよ……」

楯無は静かに問い掛けた。それは楯無が一夏を気遣っているのと

一夏が勇人や簪や本音に涙を見せたくなかつた事を、楯無は察したのである。

嫌、楯無だけではない、勇人も気付いていた。勇人も一夏が泣くのを堪えている。一夏を見据えた際、一夏が泣きそうな目をしている事に気付き、敢えて部屋を出ていったのだ。

楯無は簪や本音を気遣いながらも一夏を心配していたのだ。刹那、一夏は嗚咽を上げた。身体を震わせながらも嗚咽を上げた。

簪、本音といった者達は兎も角として、勇人の気遣いと、楯無の気遣うような言葉に抑えきれなかつた涙を流した。

一夏の嗚咽は部屋に木霊する中、楯無は一夏の背中を抱き締め続けていた。一夏への気遣いか心配かは判らないがどちらもそうとしか言えなかつた……。

第101話

「落ち着いた……？」

一夏が泣いてから数分後、楯無は心配そうに訊ねる。後ろから抱いた為に一夏がどんな表情をしているのかは判らない。

否、判るとすれば嗚咽は聴こえず、身体は震えていない——僅かだが一夏の呟くような言葉が楯無の胸に刺さる。

「……ああ」

一夏の言葉を聞いた楯無はぐつと下唇を噛むと、一夏の背中に顔を埋め、両手に力を入れる。

「そう……でも私は一夏君が苦しい思いをしているのは私でも判る——、一夏君の苦しみは友達を喪うかも知れない恐怖を、貴方はそれを恐ろしいと思ってる……それに」

「……っ」

一夏は背中に濡れつつあるのを感じ、目を見開く。

「私は……これ以上、貴方が苦しむのを見たくない、貴方が辛い思いをするのを私は見たくない」

楯無は少し泣きながら、一夏に懇願する。

楯無は想いを寄せる一夏を心配し、そう言えた。すると、一夏は眼を臥せ、両手に力を入れ、身体を震わせる。

「……………俺は、もう、何も判らなくなった……………」

「えっ？」

一夏の言葉に楯無は惚けるが、一夏は楯無にある事を言った。

「更識、俺はもう何も判らなくなった——それだけじゃねえ、あの人達に何て言えば良いのかが判らなくなった」

「あの人、達？」

一夏は楯無に、ある出来事を言った。自分は最初、ある者と逢った際は他人同士であったものの、修行を重ねていく内に絆を深め、自分は彼を師として慕っていった。

それだけでなく、勇人や止と言う親友を得、沢山の思い出を得ていった。一夏から見れば辛かったが一夏は弱音を吐かなかった。

一夏は姉に復讐したいが為、自分は彼やエルダー達の恩に報いる為に頑張つて来た。地球に帰還した際も彼等を心配させないのと、勇人や止を部下であり親友として接していた。

前者は兎も角、後者は一夏には強い理由があつた。後者はスカーとチョツパーとの約束があつた。彼等は一夏に、こうお願いしたのである。

あの二人を頼むー勇人を、止を、と。スカーは勇人を、チョツパーは止を一夏に託したのである。

彼等は確かにそう言った。だが、彼、チョツパーには何て言えば良いのだろうか。一夏はそう思っていた。

勿論、エルダー達の存在は楯無には伏せるようにしながらあの人達と言つた。

「俺は彼奴が、止が死ぬのは嫌だ……彼奴は俺の大切な友達だ……彼奴は渡と言う弟とまだ和解して」

刹那、振動音が辺りに響く。一夏は言葉を止めるがその振動音は楯無のポケットに入つてるスマートフォンからだつた。

「ちよつとごめんね」

楯無はスマートフォンをポケットから取り出すと、それを見た。虚からだつた。楯無はスマートフォンを耳に当てる。

「どう虚ちゃん……えっ? ……そう、うん、うん、判つたわ、一夏君に伝えとくわ」

楯無は虚と軽いやり取りを済ませると、スマートフォンをポケットにしまい、一夏を見ると、辛そうな表情を浮かべる。

一夏は楯無の様子に気付くも、楯無は辛そうに口を開いた。

「実は虚ちゃんから、学園長達が織斑先生や篠ノ之ちゃんの二人に処罰を言い渡したのよ……でも」

学園長と、あの人物は織斑千冬と篠ノ之の処分を楯無に言い渡した。

織斑千冬、彼女には一年間の教師活動の停止処分を言い渡し、篠ノ之の筈には退学処分を言い渡したのだ。

これには二人も怒るが彼女達は知らなかった。それは女尊男卑主

義者の女性達が黙っていないからだった。

千冬は女尊男卑主義者の女性達からは尊敬の眼差しを向けられ、箒は篠ノ之束の妹であり、彼女に何かあれば束は黙ってないだろうと思っただのである。

が、この処分は余りにも軽すぎる。それを楯無から聞いた一夏は憤りを隠せない。

「ふざけんなよ!! 止を刺しといて、お前や鈴にも迷惑を掛けるような奴には軽すぎる処分じゃねえか!」

一夏は学園長と、あの人物に憤りを隠せないのか叫ぶ。そんな一夏に楯無は一夏を宥める。

「落ち着いて一夏君! これは学園長達が決めた事なのよ!」

「それが何だよ!?! そんな処分じゃあ納得しねえよ!」

「貴方の気持ちは判るわ! でも落ち着いて! 学園長達だつて考えた末の処分を下したのよ!」

「それが納得出来ねえんだよ!?! あの二人は俺を追い詰めたんだ……っ!」

一夏はやるせない思いを吐き出す形で壁を殴る。八つ当たりにか見えないだろうが一夏なりの八つ当たりだった。

女子供は殴るな、傷付けるな——兄弟子、ケルティックの教えでもあり、掟でもあった。

しかし、自分は既に掟を破っている。女性議員やロシアの腐った役人達を沢山殺した。

最早許されない事を自分は沢山してきた。否、今は違う。一夏は後悔していた。

自分の御内や関係者——つまり自分のせいで楯無や止、勇人と言った者達を巻き込んでしまった。

止には何て言えば良いのだろうか? 一夏はそう思い身体を震わせると、そのまま膝を突く。

「一夏君? どうしたの?」

楯無は心配して声を掛ける。が、一夏は哀しそうに俯き、両手を絡める。

「まさか……一夏君、大丈夫よ」

楯無は直ぐに気付き哀しそうに笑いながら、一夏の隣に屈むと、肩を抱き寄せ、もう片方の手を一夏の絡んでいる両手に重ねる。

楯無は一夏が何かに怯えている。恐らく、一夏は親友達が再び危害を加えられるのではないのかと思っていた。

もしそうならば、最悪の場合、親友達の中に死者が出てしまえば彼は後悔の念に駆られるだろう。

楯無が一夏の肩を抱き寄せたのも、手を重ねたのも、一夏を落ち着かせる為だった。

「一夏君、辛いのは判るわ……でも元気出して、貴方がそんなんじゃ、止君が哀しむわ……」

「……っ」

「貴方の気持ちは判るわ……貴方はずっと、ううん、今は落ち着いて」楯無は一夏を励ます。しかし、一夏は俯いたまま何も言わなかった。

「一夏君……」

楯無は再び思った。彼はもう充分に傷付いている。これ以上、彼には辛い思いをさせたくない。

彼には——否、思い人には静養が必要だ。こんな場所にいるよりも、彼には物静かな場所で安らぎを与えてやりたい。

静養出来る場所は一応ある。自分や簪、布仏姉妹の帰るべき場所、更識家。

彼処なら一夏を咎める者は居なく、彼処なら一夏に安らぎを与えてくれる。

勿論、それは楯無から見れば嬉しいが今はそんな事を言ってる場合じゃない。

彼は病み上がりであり何時またやられても可笑しくなく、命を落としかねない。

それだけは避けたい。楯無は決意したように頷くと、一夏に訊ねた。

「ねえ一夏君……急で悪いかも知れないけど、明日、私や簪ちゃん、虚

ちゃんや本音ちゃんの帰るべき家——つまり、私達の家、更識家に来ない？」

楯無は一夏にそう言った。それを聞いた一夏は驚き瞠目しながら、楯無を見ると、楯無は少し哀しそうに笑いながら頷いたのだった……。

第102話

「お前達の、家に？」

楯無の言葉に、一夏は目を見開く。だが、一夏は別の意味で驚いていた。

それは楯無が家に来ないのかと言うお誘い。それも明日と言う突然の事。一夏から見れば驚きしかないのだろう。

そんな一夏を他所に、楯無は理由を述べた。

「一夏君、貴方はもう良いのよ、これ以上、自分を苦しめないで……貴方が二人に怨みを抱いても、それは何の意味もない——逆に貴方を追い詰めるだけよ……」

「な、何だよそ……っ!?!」

一夏が何かを言おうとした時、楯無は一夏に抱き着く。一夏は突然の事に戸惑うも、楯無はゆっくりと離れると、頬を紅くしていた。

「お願い、私達の家に来て……私は、貴方には安らぎの場所を与えたいのよ……」

「だ、だからって、止はどうするんだよ!?! 止が生死の境をさ迷ってるんだぞ!?!」

「止君は大丈夫よ……止君なら大丈夫……」

「お前に何が判るんだよ!?! 止は……っ、止も一人だったんだぞ……」

一夏は悔しそうに下唇を噛む。そんな一夏に楯無は哀しそうに俯くと、ある事を言った。

「一夏君、私ね、辛かったの……」

楯無の言葉に一夏は「はっ?」と惚ける。が、楯無は悔しそうかつ訳を話した。

実は楯無は一夏に罪悪感を抱いていた。一夏を人殺しにさせた事に後悔していた。

それだけじゃなく、楯無は犯されそうになったが未遂に終わった物の、それは楯無の心に傷を残していた。

あれは悪夢のように楯無を追い詰め、楯無を不安にさせ、楯無への自信を無くさせていた。

幾ら楯無を継いだとは言え、暗部の人間とは言え、楯無は一人の女の子。犯されると言う恐怖は拭え切れないのだ。

「私は怖かったの……私を犯そうとした男達の顔は歪んでいた。私は怖かった……怖かった」

楯無は身体を震わせる。恐怖への現れだった。そんな楯無を見た一夏は何も言わず、楯無を心配そうに見ていた。

刹那、楯無は一夏に抱き着く。一夏は突然の事にまた驚くが楯無は身体を震わせていた。

——更識……——。一夏は楯無が震えている訳に気付いた。楯無は怖かったのだろう。それでなく、虚から、楯無が楯無としての自信を無くしている事を聞かされた。

しかし、現に楯無は確かに自信を無くしている。それだけなら未だしも、一夏は悩んだ。

彼女の家に行くべきなのか、それは虚が言ったように楯無を頼むように言ってくれた事にも関係し、楯無に自信を取り戻す為にもなる。逆にそんな事をすれば止はどうなる？ 止は死にかけている。楯無の為に動くか、此処は止の為に動くか。

一夏は二つの内、一つを取らなければならなかった。

「……………」
一夏は決心したように頷いた。それは一夏にとって、最悪な決意だった……。

「……………」
その頃、ここは日本のとある廃墟と化した工場。その工場のとある部屋。

その部屋はとても汚いのか埃が被っているのと物が一つも置かれていない。

しかし、その部屋には青年と男性が居て、青年は俯いたまま壁に凭れ掛かりながら体育座りしており、男性は青年の前に座りながら、俯いている青年を励ましていた。

青年の正体は霧崎止の双子の弟であり、先日、学園を襲撃した青年、

渡だった。

一方、男性は渡を心配そうに見ていた。男性は二十代前半の精悍な顔立ちに、肩まで掛かる長い髪に清んだ黒い瞳。

白いシャツに黒いベスト、黒いズボンを穿き、白いスニーカーを履き、左腕には緑色のコンピューターガンレットを付けていた。

「渡、俺はお前が独自の判断で行動を起こした事は咎めたいが、今は、お前が自分の判断を間違っている事を、俺は良く判っている」

男性は渡に優しく言い聞かせると、渡は重い口を開く。

「でも半蔵さん……俺は貴方のファルを勝手に持ち出し、貴方の許可なく独断で行動したせいでファルを傷付けてしまいました……」

「それは気にするな——だが、お前は大丈夫か？ 兄と逢ってどうだった？」

半蔵と言う男性が渡に訊くと、渡は瞠目し直ぐに下唇を噛みながら顔を上げる。

渡の表情は苦痛その物だった。止と再会した事は渡から見れば憎しみが増すばかりなのだろう。

渡の心には止への憎悪しかないのだろうか。そんな渡を見た半蔵は溜め息を吐く。半蔵は渡に呆れるのと同時に、同情をも感じた。

渡の兄、止は渡のたった一人の家族。そんな彼を渡は拒絶している。別に渡が悪い訳ではないが止も悪い訳でもない。

渡にそう言いたかったが半蔵はあえて、ある事を指摘する。

「渡、俺は別にお前達兄弟の事をとやかく言うつもりはない。だがな、お前はまだ若い——その命を粗末にするな」

「でも半蔵さん、俺は——俺は彼奴を許せない、彼奴は俺を見捨てた——それだけは変わらない」

「確かにあれは見捨てたと思うだろ。だが実際は違う、お前の兄はお前を見捨てた訳じゃないし、お前は今も兄から心配されてるに違い」

「それは違う!!」

半蔵が何かを言う前に渡が叫んで遮る。半蔵は突然の事で何も言わなくなるが渡を哀れみの目で見ていた。

「彼奴は俺を捨てた。彼奴は俺を……っ」

渡は止への怒りを覚えつつも再び俯く。これには半蔵も流石に何も言えなくなるが渡の頭に手を置く。

すると、部屋の扉が開き、半蔵が扉の方を向くと、一人の男が部屋に入ってくる。その人物は月影だった。

月影は渡を見て呆れながら舌打ちする。

「チツ、そのガキ、まだ落ち込んでんのかよ？　ったく、はた迷惑なクソガキだな？」

月影は渡に嫌悪感を表すも、半蔵は表情を険しくする。

「お前のせいだぞ！　渡を連れ戻して来いと言ったのに、勝手に暴れるなんて言っただろえぞ！」

「はあつ？　悪いのはそいつだろうか？　そいつが勝手に行動しなきゃ、彼奴等がやってきたから此方は身を守る為に暴れたんだよ？」

「そんなのは当たり前だ！　渡は私怨で動いた！　奴等から見ればお前や渡は敵だ！　そんな事も判んないのか!?!」

「そんなのは判ってるよ!?!　大体お前が行けや良いだろうか!?!　俺が行かなくても、お前が行けばそのガキも言う事聞くだらうが!?!」

「お前が勝手に行動する危険があったからお前を行かせんだらうか!?!」

半蔵は月影に怒りながら立ち上がると、月影に指摘した。そんな半蔵に月影は言い返す。

「はあつ？　何だよてめえ？　リーダーだからって何でも許されんのかよ？　だったらリーダーの座を俺に譲れ？　そうすればお前も楽に行動出来るだらう？」

月影は半蔵に訊いた。逆に月影の表情は何処か笑っている。まるで半蔵をリーダーの座から引き摺り下ろし、自分が新たにリーダーになろうとしていた。

しかし、それには理由が二つあった。自分が半蔵よりも年上であり、実力は半蔵の次に強いからだった。

しかし、それも無駄に終わった。月影の言葉は半蔵の逆鱗に触れる。半蔵は無言で彼を睨むも、ある武器を展開し、手に取る。

一本の刀だった。その刀は切れ味は良さそうであり、白銀色の刀身

が妖しく輝く。

「殺ってみろ……お前が居なくなれば俺や渡も気が楽になる——そうすれば、俺達は安心する」

半蔵はそう言うと、手に持つてる刀を月影に向ける。刀の先端は月影へと向けられていた。

持ち主である半蔵の眼差しは鋭く、月影を排除する事にも躊躇しない事を意味している。

そんな半蔵の眼差しを向けられている月影は不気味な笑みを浮かべながら指を鳴らす。

何時でも来い、相手にしてやる。月影は半蔵の事を快く思っておらず、彼が居なくなれば自分の行動は何でも許される、と。

半蔵と月影。どちらも譲れなかった。片方はリーダーとしての使命を果たす為に部下を殺し、もう片方はリーダーを殺し、自らリーダーとなろうとする。

どちらも、互いの利益を得ようとしていた。

「止めて下さい!!」

渡の叫び声が部屋に木霊する。半蔵と月影は渡の方を見ると、渡は身体を震わせながら言葉を続けた。

「止めて下さい二人共、全て俺のせいなんです。俺が私怨で動かなければ、こんな事になりませんでした。だから半蔵さんと月影さんが互いを殺し合う何て事はしないで下さい……!」

渡は悔しそうに言った。そんな渡に月影は呆れながら指摘した。

「ああ、そうだよ！ お前が動かなければこんな事にはならなかったんだよ!!」

「月影！ 貴様は口を出すな!」

半蔵は月影に怒る。一方、渡は二人に言った。

「すみません半蔵さんに月影さん、暫く一人にして下さい……」

「渡？ 何故だ?」

「暫く一人になりたいんです、俺は自分のやった事を反省したいんです……」

「……判った、暫く一人になれば、それと何か遭ったらハウを呼べ」

半蔵は刀を下ろし、渡の近くに屈むと、渡の頭を撫でながらそう言った。渡は深く頷く。

「ケツ、反省しろクソガキが」

月影は渡に気遣うような言葉を掛けなかった。それを聞いた半蔵は月影を睨むも、月影は舌打ちすると部屋を出ていった。

扉を乱暴に開け、乱暴に閉めたのである。半蔵は月影に呆れながらも、渡には優しい表情を見せるとそのまま頷き、立ち上がると部屋を出ようとした。

ふと、扉を開ける前に渡を見る。渡は俯いたままであったが半蔵は渡を哀しそうに見た後、何も言わず部屋を出ていった。

扉を締めた音が部屋に木霊するも、渡は俯いたまま何も言わず、その場を動かなかった。

しかし、彼は止を怨みながらも、半蔵と月影の二人に迷惑を掛けた事に後悔していた。

そして、部屋は薄暗く静寂に包まれていたが、それは渡の心情を物語るようにも、思えた……。

第七章、新たなる楯無、そして恋人同士へ…… 第103話

翌日、此処はIS学園。今の時間帯は朝七時であり、殆どの生徒は部活関係や偶然早起した者達ばかりであった。

そんな学園の正門には六人の男女がいた。二人が男子であり、四人が女子である。

しかし、その内の男子一人と女子三人は白を基準とした制服であり、後の二人は私服であり手提げ鞆を手にしている。

「ではお嬢様に一夏さん、後の処理は私と本音が承りますので、お二方は更識家でゆっくりと静養して下さいね」

女子生徒の一人が二人に対し頭を下げながらそう言った。これには私服姿の女子生徒——更識楯無は深く頷き、隣にいる男子、一夏は「フン」と嫌そうに答える。

そう、私服姿の男女は一夏と楯無であり、制服姿の者達は勇人、簪、虚、本音の四人だった。

何故、彼等がこんな朝早くから起きたのかは一夏と楯無が軽い静養の為に、楯無と簪の更識姉妹、虚と本音の布仏姉妹の帰る場所、更識家で過ごすのだ。

それは一週間くらいだが本当はゴールデンウィークの時に帰る筈だったが楯無が一夏を気遣い、昨日の内に楯無が家に連絡して明日帰ると連絡したのである。

勿論、一夏から了承を得る為に楯無が言い、一夏は止の事がないから楯無に「行く」と返事をしたのだった。

これには楯無は喜ぶが一夏は止への罪悪感もあった。

「それにしても一夏、お前が更識家でゆっくり過ごすとはな……それも俺に言う前に」

制服を着ている男子生徒、勇人は一夏に対し呆れ、そんな勇人に一夏は申し訳なきように謝る。

「悪い……でも俺はもう疲れてるんだ……あの女共の件で色々」

「別に俺はそれを指摘してる訳ではない——俺が言いたいのは、お前が自ら選んだ事に間違いはないのかを訊いてるんだ」

勇人の言葉に一夏は「えっ?」と惚ける。そんな一夏に勇人は目を閉じ、腕を組み、言葉が続ける。

「一夏、俺はお前が、お前自身が決めた事に責めるつもりはないと言ってる、お前は止の事を気にしながらも自分に安らぎが欲しい——俺はそう思った。だが違った、お前はその女の為に動いた」

勇人は目を開け、視線を楯無の方へと向ける。楯無は勇人の視線に気が付き首を傾げるが勇人は言葉が続ける。

「お前は人に頼りたくないと言う強い気持ちはあった——あの時のお前は親友達に逢うのがどんなに辛いのかを自分で抑えていた、人に頼ると言う事が恥ずかしいとお前自身はそう思っていた——だが今は……」

勇人は不意に微笑む。

「その隣にいる更識楯無と言う少女に惚れ、お前自身が身内の事で弱わってるお前を見て自分の家で静養させたい、と強く言い出したからな?」

勇人の言葉に一夏は瞠目し、楯無は勇人の言葉に目を見開き、隣にいる一夏を見る。

一夏は頬を紅潮させると俯き、そんな一夏に楯無は顔を真っ赤にしながら頬を紅潮させ俯く。

「えっ? 一夏様がお嬢様に?」

「イツチーがくっつ?」

「えっ、一夏がお姉ちゃんに?!」

布仏姉妹と簪は二人の様子に驚きを隠せない。そうだろう、三人は一夏が楯無を意識している事には気付かなかった。

そして、楯無は一夏が自分に惚れている事に気付かなかったのだ。楯無は一夏に告白したが、一夏が自分に想いを寄せている事までには気づいていなかった。

嫌、一夏が楯無自身に惚れている事に薄々気付かなかったのかも知れない。最初はクラス代表決定戦の時に千冬に論破した時や、楯無が

自分の為に千冬や箒に対して真正面から言った事だろう。

それは楯無自身が一夏の為の罪滅ぼしであり、それが一夏を惹かす切っ掛けにもなっている事を楯無は気付かなかった。

二人が互いを意識し、互いの相手を見れないでいる中、簪達は顔を紅くし、勇人は二人を見て呆れていたが表情を険しくする。

「それよりも一夏、止は俺達に任せろ」

勇人の言葉に一夏は眉間に皺を寄せる。止は今も尚、集中治療室にいるが一向に目を覚まさない。

別に死んだ訳ではないが彼は殴った千冬と共に女子に見付かったが、それが幸いな事にその女子は一夏達のクラスメイト、鷹月静たかつきしずね。箒のルームメイトであったが今は一人であり、あの日は不幸な事に忘れ物を取りに来ていたのだった。

一夏と勇人は静寂に感謝しながらも、止の安否を気にしていた。

「取り敢えずに止は未だ目を覚まさないが、今は安静にしているー無論、常に俺が付き添えないが、あの人に連絡しておいた」

勇人の言葉に一夏達は首を傾げるが勇人は不敵に笑い領いた。

「ま、まさか……東さん？」

一夏はその人物に心当たりがあり、勇人に訊ねると、勇人は再び領いた。

「ああ、昨晚あの人に連絡を入れといた……あの人は錯乱していたがクロエやビショップが何とか宥めていたがな」

「そうだったのか……それよりも勇人、お前凄いな？」

一夏は勇人の行動に、勇人は凄い人物だと改めて実感した。勇人は自分や止とは違い頭も良く、何時も一歩先を言ってる。

それに彼が束に連絡したのは、これで三回目だった。二回目は自分が殴られた事での連絡、三回目は止が刺された事での連絡である。

そして一回目の連絡は、自分と止がI Sを起動し、東京全体、嫌、関東全体が警察による大規模の捜査の時の事だった。

あの時の勇人はテレビを見ていた際、ある車を見て、下唇を噛んでいた。

それは救急車だった。ランプは点滅しており、中に急病人が乗って

る事をも意味していた。

勇人はあれを見て慌てて束に言ったのである。束が彼等を預かっているとえば彼等も納得し、封鎖も解除されるだろう、と。

勿論、止から聞かされたが後日、救急車に乗ってた者は何とか助かった。

「それよりもお前等、早く行け、もうそろそろ時間だぞ?」

勇人は呆れながら言うと、楯無は腕時計を見て慌てる。

「そうだったわ! 行きましよう一夏君!」

楯無は踵を返すと走って行った。一夏も後を追い掛けるが、そんな一夏達を見て勇人は呆れ、虚達は彼等を見て、彼等が見えなくなるまで手を振った。

「さて……俺は教室に向かうか」

勇人は手を振らなかつたが彼は踵を返し、学園の方へと歩き始めた。

「ハヤハヤ?」

そんな勇人を見た虚達の内、本音が不意に口を開く。勇人は歩き続けていた。しかし、本音は不意に学園の方を見ていた。

「(トツマ……)」

本音は学園の集中治療室で安静にしている止の事を呟いた。

本音は止に想いを寄せていた。それは入学式の日、勇人が箒と一触即発的な状況の際に止が割って入り勇人を説得し、何とかその場を収めてくれた。

あの時の本音は止を気に掛けていた物の、恋愛感情は無かつた。しかし、あの時の止は弱々しかった。

双子の弟、渡との再会。あれは止にとって苦痛であり、止には最悪な事だった。あの時、止は一人屋上にいた。

と言うよりも、本音も居たが止は辛そうに自分に言った。

『俺は渡に迷惑を掛けた……出来る事なら謝りたい』

止は辛そうに言葉を述べた。止自身の本音だった。止は渡と和解したい。止自身の強い表れだった。

本音は止を見て何時もの止では無い事に気付く。それが本音が止

を心配する切っ掛けにもなっていた。

だが彼女は気付かなかった。自分は後に止の大切な人となる事を、本音や止の二人はその事を、未だ知らない。

「ったく……」

一方、勇人は歩きながらも舌打ちしていた。が、勇人もまた、大切な人が直ぐそこまで来る事を未だ知らない。

そして一夏と楯無も又、ロシアの件や誘拐の件を更識家で決着付ける事も未だ知らない。

そして翌日、フランスとドイツから二人の転校生が現れ、更なる出来事が起きるのを、彼等は未だ知らなかった……。

第104話

あれから数分後、IS学園にはモノレールがあった。このモノレールは孤島であるIS学園の一つの内の交通機関であり、本州へと向かう事も出来る。

勿論、このモノレールを使うにはIS学園から外出許可や宿泊許可を貰わなきゃならない為、余り利用する者は居ない。

いるとなれば、学園を下見に来る者や学園の御内である来賓者達くらいだろう。因みに他にも行ける事が出来るのは船とヘリである。

海は船、陸はモノレール、空はヘリ、IS学園は陸海空の交通機関を持つてると言っても過言ではないだろう。

そんなモノレールの中には一夏と楯無の二人が居たが二人は隣同士に座っており、膝には手提げ鞆を置いている。

モノレールの中は比較的空いてるものの人は少なからずいる。しかし、二人は互いの相手の顔を見ようとはしなかった。

それは数秒や一、二分は経っていないながらも二人は言葉を交わさないう。二人は走っている事で揺れているモノレールの中で、目的地に着くまで何もしていなかった。一夏は窓の外の景色を眺めていて、楯無は軽く俯いていた。一夏は景色を見て何も言わないが青い空に紺碧色の海を眺め続けていた。

この景色は、IS学園からでも見れるが彼はこんな景色を見て、何かを思っていた。

一方、楯無は軽く俯いているが頬は紅い。楯無は勇人の言った言葉に少し恥ずかしい思いをしていた。

勇人は一夏が自分に惚れている事を自分達に指摘した。楯無から見れば恥ずかしかったが、楯無はある事を気にしていた。

「もしかして、私が告白した事も知ってるのかしら？」

それは楯無が、この前、一夏に告白したのである。あの時の一夏は気を失っていたのか、眠っていたのかは判らなかった。

それでも、自分は確かに一夏に告白した。一世一代と言うよりも、あれは自分の気持ちを全て吐き出した物だった。

楯無は自分のした事に恥ずかしさを覚えながらも、一夏にある事を訊く。

「ねえ一夏く」

「海が綺麗だな……」

一夏は楯無の言いたい事を遮るように不意に眩き、それを聞いた楯無は「えっ？」と不意を突かれたように惚ける。

一方、一夏は海を眺め続けていた。その表情は何処か切ない。一夏は海と言う物を知りながらも遊びに行つた事は一度や二度とくらいしか無かつた。

姉は忙しい身であつた。が、束が自分を気遣い海に連れて行つてくれた事はあつた。あの時はとても楽しかつたが本当は姉と行きなかつた。

否——自分は姉を心配させまいと本当の気持ちを押し殺した。今思えば、あの時の思い出は良い物であり悪い物でもあつた。

一夏は切なそうに海を眺めている間、楯無は一夏の言葉に疑問を浮かべ、訊ねる。

「一夏君？ どうし」

刹那、アナウンスが流れる。

それも着いた事を意味しているのだろう。

「一夏君、着いたみたいよ」

「……ああ、そうだな」

二人はアナウンスを聴いて軽い言葉を交わす。僅かだったが二人はモノレールが駅に着くまでその場を動かかなかつた。

「久しぶりの、陸に上がった気分だ」

一夏と楯無はモノレールを降り、駅の出入口前にいた。出入口前は交差点となつており、沢山の人が行き交い、バス停が何個も立っており、タクシーが何台かは停まっている。

彼等はバスやタクシーを使う訳ではない。彼等は誰かと待ち合わせをしている。

「それにしても、未だかしら？」

楯無は辺りを見渡す。何処も人が行き交うが楯無は誰かを待っていた。昨日連絡し、七時ぐらいには来ると言ったが未だ来る気配はない。

楯無は不安になる。このままタクシーを使って本家に行くべきかと。そんな楯無を他所に一夏は辺りを見渡し続けていた。

「おい、あれリムジンじゃねえか!？」

近くから男性の声がした。楯無は声が出た方を見ると、その先には黒の細長い車が此方へと来る。

「あれよ一夏君」

楯無は一夏の裾を掴みながら、一夏に自分が見ている方を見てくれと急かす。

一夏は楯無の行動に呆れるも、楯無が見てる方を向く。一夏は瞠目した。黒い車、リムジンが二人の近くまで来ると、二人の前で横向けで停まり、リムジンからはエンジン音も止まり、運転席から一人の運転手が降りてきた。

その運転手は四十代前半の男性であり、白のシャツに黒のベスト、黒いズボンを穿いているのが特徴的な男性だった。

「遅いですよ三浦さん」

楯無は運転手に対して少し怒る。それに対し、三浦は申し訳なきそうに謝る。

「すみませんお嬢様、交通関係で少し遅れまして」

「そう……それよりも彼を紹介するわ、一夏君よ」

楯無は隣にいる一夏を紹介し、三浦は彼を、一夏を見る。

「貴方様が、一夏様ですか？」

三浦は一夏を見て困惑の表情を浮かべる。三浦は彼が一夏だと判った。彼が楯無と簪姉妹を助ける為に誘拐犯達を殺した青年。

彼から、更識家の面々から見れば彼は恩人であり、同時に彼に許されない事をしてしまった。

三浦は彼を見て一応、軽くお辞儀すると、一夏も軽くお辞儀した。「自己紹介は後で良いわ、それよりも三浦さん、御父様は本家に居るの

？」

「左様ですお嬢様、旦那様は本家でお待ちです。さきつ、詳しい話は本家にお着きになってからにして下さい」

三浦はそう言うと、リムジンの後頭部座席の扉を開ける。

「判ったわ、一夏君乗りましょう」

楯無はそう言うと、後頭部座席の奥へと座る。一夏は三浦に再びお辞儀すると、車の中へと入った。

車の中にはソファーのような席があり、前にはテーブルがあった。リムジンだけであつて高級感もあつた。

一夏はリムジンの中を見て少し戸惑うも、楯無は一夏に「座つて」と促す。

一夏は軽く頷くと、楯無の隣に座り、その間に三浦運転手は扉を閉め、運転席に戻ると、エンジンを掛けると、一夏と楯無を見る。

「では行きます。一時間程度で着きますので、お二方は軽く何かとお話をして下さい——又は、軽く一休みして下さい」

三浦はそう言うと、車を動かして始めた。車の中は車が動く度に揺れるが三人には関係無かつた。

「ねえ、一夏君？」

「何だ？」

一夏は楯無を見ると、楯無は悲しそうに俯く。

「後悔して、ない？」

「はっ？ 何がだ？」

「私が……貴方を止君から引き離し、貴方を思って、本家で静養させようと言つた私に、怒つて、ない？」

楯無は申し訳ないように言葉を述べる。それを聞いた一夏は無言だったが舌打ちしていた。

一夏の舌打ちを楯無は聴き逃さなかつた。が、楯無は言葉を続ける。

「そうよね……でも私は貴方の気持ちを察しないで、止君の傍に居させられなくなつた貴……っ!？」

刹那、一夏は楯無の頭を撫でる。楯無は一夏の行動に戸惑うが一夏

は無言で楯無の頭を撫で続けていた。

「い、一夏君？　ど、どうしたの？」

「……更識、もうそれ以上言うな……」

一夏の言葉に楯無は「えっ？」と惚ける。が、一夏は楯無に言葉を続ける。

「更識、俺はお前が俺の為に動くのは良い、だがお前自身が辛い思いをしても、お前が喜ぶ訳じゃない——俺はお前が楯無か、刀奈として生きたい事やロシアの件で悩んでいるのを俺が気付かないとでも思っているのか？」

「えっ？　……そ、それは」

「凶星か？　そうだろうな。お前は自分よりも他人を心配し、俺の為に動いていた……もう無理するな？　お前はお前自身の心配をしろ——俺が束さんの所にいる間にお前は寝てないんだろ？」

「あつ、そ、それは……きやつー！」

刹那、一夏は楯無を無理矢理自分の膝へと寝かし付ける。

「い、一夏君何を!?　……あつ」

楯無は一夏に怒ろうとしたが、一夏を見て目を見開く。彼女は彼が、一夏は無言だった。

楯無は一夏を見て何も言えなくなるが一夏は再び楯無の頭を撫でる。

「無理はするな、睡眠不足は身体に悪い——家に着いたら俺が起こす」

「一夏君……貴方は何で……」

「何も言うな——ゆつくり寝てろ、俺が起こすから、な？　それに……」

一夏は楯無に微笑んだ。

「もう辛い思いをするな……それに俺は、嫌——今はゆつくり寝てろ」
「………うん」

楯無は一夏を見て何も言えなくなる。しかし、楯無は嬉しそうに頬を紅くして頷くと、そのまま目を閉じた。

一方、一夏は楯無を見て微笑んでいたが楯無の頭を撫で続ける。

「(………ありがとうございます、一夏様)」

そんな二人のやり取りを三浦運転手は車を運転しながらも、一夏に感謝していた。

そして、リムジンは更識本家に着くまで道路を走り続けていた。

第105話

あれから一時間後。此処は東京にある静かな住宅街。その場所には一台の黒いリムジンが走っていた。

「お二方、もうそろそろ着きますよ？」

リムジンを運転している三浦運転手が一夏と楯無に言う。一夏は軽く頷くと自分の膝で、可愛い寝息を立てながら寝ている楯無の肩を揺らす。

「更識、もうすぐ着くみたいだぞ？ そろそろ起きろ」

一夏は楯無の肩を優しく揺らしながら囁く。刹那、楯無の瞼がピクツと動き、ゆっくりと瞼が開く。

楯無の紅い瞳が見える——楯無は自分を見上げている一夏を見る。一夏は微笑んでいたがその笑みは楯無には安堵と同時に、一夏には感謝していた。

「一夏、君？ 着いたの？」

「ああ、三浦さんがもうすぐ着くと言ったからお前を起こした」

「そう——ありがとう、起きるわ」

楯無は身体を起こすと、目を擦る。その間に一夏は何も言わずに自分の手提げ鞆を手に取り、楯無も手提げ鞆を手に取る。

「着きましたよ」

同時にリムジンも止まり、三浦運転手が二人にそう言うと、エンジンを止め、車から降り、後頭部座席の扉を開けた。

三浦運転手は二人に微笑むと「鞆をお持ちします」と言いながら手を伸ばす。

二人は三浦運転手の言葉に頷くと、手提げ鞆を渡し、三浦運転手が離れると、二人はリムジンから降りた。

——あつ……。一夏は目の前にある門を見て、瞠目した。その門は和風のような物でも大きく、一般人が門を潜るのには躊躇するくらいだった。

その右斜め上には防犯カメラが設置されていて、それが侵入者を見付けると同時に和の雰囲気をぶち壊しにしているようにも思えた。

門の左右には白い壁と瓦の屋根が左右に伸びていた。しかし、そこが更識本家の正門であり、表札には「更識」と書かれ、その少し下にはインターフォンが設置されていた。

一夏は門を見て何も言えなくなる中、楯無が一夏の腕を掴む。楯無は心配そうに見ていたが、もう片方の手には自分や一夏の分の手提げ鞆をぶら下げていた。

恐らく、三浦運転手から渡されたのだろう。

「では、私は車を戻してきますので、お二方は先に家の中で待機して下さいね」

三浦はそう言うと、楯無は「ええ」と答え、三浦は頭を下げると、リムジンに乗り込み、リムジンからエンジン音から聴こえ、リムジンはそのまま走り去って行った。

「入りましょう、皆が待つてるわ」

楯無は一夏を家の中へ入ろうと促す。一夏は頷くと、楯無は微笑み、楯無はインターフォンを鳴らした。

『お嬢様ですか——只今、家の者が門をお開けします』

インターフォンから女性の声が聴こえ、それを聞いた楯無は「ええ」と頷いた後、

「一夏君、緊張してる？」

楯無は困惑しながら、未だ門を見ている一夏に訊ねると、一夏は楯無を見ると首を左右に振る。

「嫌、大丈夫だ、俺はな——それよりもお前は」

刹那、門が開く。二人が門の方を見ると、門の少し先には大きな和風の豪邸が建っていた。

一夏は驚くも、門を開けたのは三十代後半の男性。スーツを身に纏ってるが楯無に微笑む。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「ただいま、後藤さん」

楯無は男性を、後藤に言い返す。すると、後藤は一夏に気付き、瞳目する。

「貴方は……そうですか」

「後藤さん？」

後藤は表情を曇らせ、楯無は疑問を抱く。後藤は「何でもありません」と言いながら微笑む。が、とても哀しそうな物だった。

「それよりもお二方、前当主と奥様、従者達がお待ちです」

後藤はそう言う。「此方です」と先を歩く。

「行きましよう、一夏君」

楯無は一夏を促す。一夏は辺りを見渡していたが更識本家の広く、緑豊かな敷地を見ていた。

「一夏君、どうしたの？」

楯無が再び訊くと、一夏は無言で頷き、歩き出す。しかし、一夏は未だ辺りを見渡していた。少し先の左側には白い石庭があり、逆に右側には池があり、錦鯉が遊いでいていた。更にその右側の奥には離れなのか屋敷が一軒あった。

更識本家の屋敷は和風だが縁側もあり、かなり豪華だが築何百年なのだろうか、と思ってしまう。

そうしている内に、屋敷の前に着いた。一夏は改めて見るが一夏は何かを思う。

「着きました——では、開けますね」

後藤は家の玄関を開けると、家の中が露になる。そこは玄関土間だったが僅かに段差があり、通路もある。

そして、人は何人かはいた。が、五人は居たが男性二人、女性三人だが服は各々違う。

嫌、一つ共通しているとすれば、彼等の表情は安堵しているのか困惑しているのかが判らなかつた。

「皆、ただいま」

楯無が彼等に微笑むと、彼等は頭を下げる。

「お帰りなさいませ、お嬢様！」

彼等は楯無に言った。楯無も頷く。すると、彼等は頭を上げる。が、彼等の表情は何処か暗い。

「皆、どうしたの？」

楯無は彼等の様子に怪訝そうに見る。一方、彼等は楯無の質問に答

える事は無かった。

それどころか、彼等は隣にいる一夏を見て困惑している。彼が更識姉妹を助ける為に手を染めた青年、一夏だと、彼等は気付いた。

——何か？——。一夏は彼等の視線にたじろぐ事はなく、眉間に皺を寄せていた。そんな彼の視線に彼等は背筋が震えるのを感じた。

一夏の視線には殺気が籠っているのと、彼が自分達を警戒している事にも気付いた。

自分達も一応、暗部の人間だが彼の方が幾多の修羅場を潜り抜けてきた為、彼の方が何倍も強く、そして優しい。

「皆、彼が」

「刀奈」

楯無が彼を紹介しようとした時、奥から女性の声が聴こえた。その女性は楯無を刀奈と呼んでいた。

「奥様!!」

「御母様!」

後藤を含めた従者達や楯無が女性を見てそう言った。

その女性は四十代前半の優しそうな顔立ちに肩まで掛かる茶髪に黒い瞳。服は淡いクリーム色の和風を纏っている。

女性は刀奈や簪の母であり、奥様でもあった。

「お帰りなさい刀奈——あつ」

女性は楯無に微笑んでいたが、楯無の隣にいる一夏を見て哀しい表情を浮かべる。

「貴方は……一夏君なの？」

女性は一夏を見て恐る恐る訊ねる。すると、一夏は深く頷いた。

「そう……」一夏君、来てそうそう悪いかも知れないけど、主人に逢ってくださいませんか？」

「御母様?!」

女性の言葉に楯無は驚きを隠せない。彼女だけではない、周りの従者達も驚きを隠せないでいた。

一夏は驚きはしなかったものの警戒はしていた。が、女性は言葉を続ける。

「一夏君、私の主人と逢ってくれませんか？　主人は貴方の事で色々
と訊きたい事があるのです」

「御母様何を言ってるの!?　一夏君はお客様なのよ!?　休ませるのが
先の筈よ!」

「刀奈、これは主人が決めた事です、主人は一夏君に逢いたがってます
——それに一夏君は……ごめんなさい」

女性は一夏に謝る。

「一夏君、貴方を巻き込んでしまつて」

女性は一夏に謝罪の言葉を述べる。そんな女性に周りの従者達も
頭を下げる。

「お気になさらないください、自分は彼等に怒り、死を与えたまでで
す」

一夏の言葉に周りは驚愕し、頭を上げる。と、同時に、一夏の言葉
に戦慄した。彼は人を殺した事を後悔よりも平然と言つたのだ。

これには彼等も驚くが一夏自身、沢山の者達を殺してきた為何の意
味もないだろう。

「(一夏君……貴方は辛くないの?)」

一方、楯無は一夏の心配をした。彼は自分や簪を助ける為に手を染
めた。

決して許される事ではないが、彼の表情は無その物だったが内心、
彼が何を考えているのかまでは判らなかつた。

「すみませんが、前当主様に逢わせてくれませんか？　そちらの方を
何時までも待たせる訳にはいきませんから」

「あつ、ええ、そうね——此方です、私が案内します」

女性はそう言うと、一夏を促す。一夏も頷くと靴を脱ぐ。

「一夏君……」

刹那、楯無が不意に呟く。すると、一夏は楯無の方を見ると、手提
げ鞆を持ってない方の手を楯無の頭の上に置き、撫でた。

これには楯無も驚くが一夏は一瞬だけ微笑むと、直ぐに表情を険し
くし、女性の後を従っていった。

「一夏君……」

楯無は一夏の後ろ姿を見つめ続けていた。しかし、一夏は自分の父と何を話すのかは判らなかつた。

そして、楯無の心は不安に包まれていた……。

第106話

数分後、ここは本家の客間。客間と言っても和室であり、テーブルしか置かれておらず、出入口に出来る襖と向かい側には障子が設けられていた。

そんな客間には一夏がいた。一夏は辺りを見渡しているが正座していて、その下には座布団が敷かれており、隣には手提げ鞆を置いている。

何故なら、一夏は楯無と簪の母に此処まで案内され、主人が来るまでの間、此処で待つと言われたのだ。その証拠に、一夏の向かい側には一枚の座布団が敷かれていた。

現に待つ事数分は経ってるが一夏は愚痴を滲す事はなく、苛々してもいなかった。

彼は、こう言う事には慣れており、一時間や二時間ぐらい、何とも無かった。

刹那、襖が開き、一夏は音に反応し、襖が開いた方を見ると、通路側に一人の男性が立っていた。

その男性は四十代後半の男性であり、黒い髪に黒い瞳、顔立ちは良いが少し険しい表情をしているが貫禄があるように思えた。

黒の袴を身に纏ってるが恐らく更識姉妹の父であり、前当主である事を意味しているのだろう。

しかし、一夏は彼を見て何も言わず見据え続けていた。一方、男性は一夏の視線にたじろいでいないが男性は客間に足を踏み入れると、襖を閉めた。

襖の閉めた音が辺りに小さく響き渡る。男性はその後、座布団の所まで歩き、座布団の上に正座した。

刹那、二人は互いの相手を見据え合う。彼等の瞳には各々の思いがあるがどちらかが先に口を開くかは、判らない。

「君が、織斑一夏君か？」

しかし、口を開いたのは、男性だった。男性の言葉には本当の事を訊こうとしていた。

「……普通は、自分から名乗るのが一般ではないのですか？」

一夏は頷いた後、答えた。その言葉には偽りはない。

「そうか、では私は更識龍三りゆうぞう、第十六代楯無だ——今は、娘の刀奈に楯無の名を譲り、自らは引退し本当の名を名乗っている」

「更識龍三——それが貴方の名ですか——自分は一夏、織斑一夏と申します」

「君が、か——娘達が世話になったな……それに、済まなかった！」

龍三は頭を下げる。恐らく、自分達の行いのせいで一夏を人殺しにさせた事だろう。

しかし、自分が謝罪したとしても一夏の罪が消える訳ではない。過ぎてしまった事は仕方ない事だろう……一夏から見ればの話だが。

「顔をお上げ下さい——貴方が気に病む事ではありません」

「しかし!! 君はとんでもない事をしてしまったのではないか!? 私達が君を……っ」

龍三は顔を上げ、一夏を見る——龍三は瞠目した。一夏の表情は陰しく、瞳には怒りや憎悪どころか、そう言った物は何一つない。

龍三は元楯無であるが一夏の気持ちを察してはいない。逆に一夏もまた、彼に殺意はない。

「龍三さん、俺は貴方方のした事に怒ってません——ですが、俺は貴方の大切な娘さん達が怖い目に遭わそうとした奴等に怒ったのです」

「だが君は、奴等に報復を与えたのか? 殺しと言う報復を?」
龍三の問いに、一夏は首を左右に振る。

「いえ、奴等は貴方の娘さんのお姉さんの方を犯そうとした——俺はそれが許さなかったのです——だけど、俺が一人を殺そうとした時、彼女は私に銃を向けて、撃たれました」

「銃を!? 大丈夫なのか!?!」

龍三は困惑するが一夏は首を左右に振る。

「大丈夫です——だけど俺が気になるのは、その後の事です」
「その後の事?」

龍三の言葉に一夏は頷き、ある事を訊ねた。それは楯無が龍三やその母に対し、私達姉妹に、こんな事をやらせた事、彼を一夏を人殺し

にさせた事を後悔していた。

そして彼女は、両親に対し楯無なんて継がなきゃ良かった、刀奈として生きたかった、と。

これらは全て虚から聞かされた事だが一夏はそれを龍三に話し、それを聞いた龍三は俯く。

「そうか、虚ちゃんが……」

「はい、それよりも一つお伺いしたいのですが」

「何かな？」

「そちらに、狂言誘拐の情報を外部の女性議員に漏らした裏切り者は居ましたか？」

一夏の言葉に龍三は悔しそうに下唇を噛む。何故なら、自分達の情報が女性議員に流れたのはスパイがいたからである。

そのスパイは自分達が信頼していた者だった。しかし、それがスパイだと判ると龍三達はスパイを、彼を抹殺した。

「成る程ね……裏切りには死を与える——それが貴方方のやり方ですか」

「うむ、私は娘達が本当の誘拐に巻き込まれた時には怒った……私は我を忘れ、スパイだった者を始末した——私は彼を信用していたが……辛かった」

「成る程ね……ですが娘さん達の気持ちはどうだったんですか？」

「娘達の気持ち？」

龍三の言葉に一夏は頷く。

「はい、彼女達は怖い目に遭いましたが自分は彼女達が辛い思いをし続けているようにも思えました——楯無は、いえ、楯無さんは自分は楯無ではなく、刀奈として生きたかったのは虚さんの口から聞かされましたが、現に彼女は自分に良くすがり着いてきます」

「刀奈が!？」

「はい——恐らく自分に罪悪感を抱いているのでしよう……だけど」

一夏は下唇を噛み締めながら俯く。

「どうしたんだ一夏君？ 刀奈が何かしたのか？」

龍三が心配そうに訊ねると、一夏は首を左右に振り、再び言葉を続

けた。

「いえ、自分にも原因がありました——自分には嫌いな人が二人も居ました、それも同じクラスでありました——その二人は自分に関わって来ては、俺や親友達、御宅の娘さん達に危害を加えて居ました——俺は何度そいつらに言っても、そいつらは俺や親友達や彼女達に手を出そうとしていました……だけど彼女は、楯無さんは違いました、彼女は俺の為に二人に真正面に向き合い、一夏に関わらないでくれと言ってくれました……なのに奴等は楯無さんに危害を加えようとしてました」

一夏は身体を震わせながら、龍三に謝る。

「此方も謝ります……自分は貴方の大切な娘さん達に、自分の為に彼女達に危害が及ぶ様な行動や起こさせてしまいました！」

一夏は辛そうに言葉を述べる。一夏は後悔していた。楯無と簪が自分の為に、千冬や箒と対立するような行動をさせてしまった。

楯無は千冬にIS没収の件や、箒共々一夏に接触しないように言い渡し、簪は一夏と姉を思つて箒に怒った。

しかし、それらの行動は没収の件以外は全て裏目に出て、危害を加えられそうになったのである。

一夏はそれを姉妹の父である龍三に言うのと、龍三は悲しそうに微笑む。

「それは良い……それは我が更識では良くある事だ」

龍三の言葉に一夏は顔を上げる。

「良くある事？」

「うむ、あの二人は互いに譲れない思いがある——あの二人は自分よりも他人を思いやる心はある……それに私は君に感謝しているんだ」

龍三の言葉に一夏は「感謝です、か？」と訊き返すと、龍三は悲しい笑みを浮かべながら頷いた。

「君のおかげで、娘達は互いを許した……私達の悲願が叶った……礼を言う」

龍三は頭を下げた。楯無と簪の和解——それは龍三達の悲願であった。彼女達の仲が戻ったのは一夏のおかげであった。

姉妹の和解は虚からの連絡であり、龍三達は最初は戸惑っていたが龍三達は一夏に感謝と共に、彼に助けられた事に再び後悔した。

だが昨日、楯無からの連絡で自分と一夏が明日来ると聞かされた。龍三は戸惑うものの、楯無は一夏に安らぎの場を与えたい、と強く申し出たのだった。

「君が来ると聞いた時は最初は驚いた。だが君は私達が思ったような人ではなかった」

「思ったような、人じゃ、ない？」

「ああ、君は私達に怒らなかった、それどころか君は弱気になつて刀奈に怒りながらも優しく接してくれた……君には返してくれも返しきれない恩を貰った……改めて言う、ありがとう」

龍三は頭を下げた。そんな龍三を一夏は顔を上げるよう促す。

「止して下さい……自分は弱気になつてる楯無さんが心配だからです、それに自分は彼女に……」

「刀奈が何だい？」

龍三は一夏の言葉に疑問を抱く。

「あつ、いえ自分は彼女に……すみません」

「何を謝ってるんだい？ 刀奈が何だい？」

「いえ……自分は、その」

一夏は何故か言葉を詰まらせる。何故なら一夏は楯無を意識し始めていた。

それは没収の件や自分の為に千冬や箒に接触禁止を言い渡してくれた事。

それだけでない……弱気になつてる楯無を最初は疎ましいと思いつながら、千冬と箒から彼女を守って行く内に、彼女を本気で守りたいと思つてしまった。

あの時から少しずつ意識してしまつたに違いない。が、彼女が月影に殺られそうになった時に、本気で守りたいと思つてしまった。

そして、弱つている自分を優しく包んでくれる楯無を、本気で意識してしまった。

一夏は少し戸惑うが、龍三が訊き続ける為に一夏は深く頷いた。

「どうしたんだい一夏君？」

龍三は一夏の様子に疑問を抱く。一方、一夏は決意したように頷くと、少し険しい表情を浮かべ、龍三に自分の気持ちを言った。

「龍三さん……俺は、俺は楯無さんが……いえ、楯無が好きです！ 親友としてではなく、仲間としてではなく、一人の女性として、彼女が好きです！」

一夏は龍三は言った。それは一夏自身の本当の気持ちだった。

第107話

「い、一夏、君？」

一夏の告白とも言える言葉に、龍三は瞠目していた。何故なら、一夏は楯無——刀奈に好意を寄せていた。

龍三は刀奈の実の父親であり、父親から見れば目の前にいる青年が実の娘に好意を寄せている事を伝えるのは、相当の勇気がいる。

それを彼は、一夏は平然と言った。普通の家庭なら実の娘が付き合ってる男性を、父親は良い目で見る筈もない。

龍三が驚いてるのを他所に、一夏は表情を険しくしながら頬を紅くしている。勇気を出して言ったのだ、これには恥ずかしいに決まってるに違いない。

しかし、それを聞いたのは龍三だけではなかった——襖の外から、誰かの声が聴こえた。

——刀奈？——。女性の声だった。それを聞いた一夏は「えっ!？」と驚く。刹那、襖が開くと、一夏と龍三は目を見開いた。

そこには、正座しながら顔を真っ赤にしている楯無がいた。近くには、お茶が淹れられてある湯呑みが二つ乗ってるお盆が床に置かれていた。

そして楯無の近くには女性がいた。楯無と簪の母親であり、襖を開けたのは彼女だった。

「か、刀奈？ それに喜美江？」

龍三は娘と自分の妻を見て眩く。一方、楯無は驚きの目で一夏を見据え続けているが頬は紅い。

さっきの言葉を、一夏の告白を聞いてしまったのだろう。お茶は、彼女が運んできた物なのだろう。喜美江は聞いてなかった為に何も知らない。

「や、更識……!？」

一夏は楯無を見て何かを言い出す。が、楯無は突然、立ち上がりその場を離れる。

足がお盆に少し当たり、湯呑みに淹れられてあるお茶が少し溢れ

る。

「更識?」

「待つんだ一夏君!!」

一夏が追い掛けようとした時、龍三が呼び止める。一夏は龍三の方を見ると龍三は悲しい表情を浮かべる。

「龍三、さん?」

一夏は龍三に訊くと、龍三は口を開いた。

「君は、刀奈が好きなのか?」

龍三が訊くと、喜美江は驚き、一夏の方を見る。一夏は頬を紅くしながら頷いた。

「はい、自分は彼女が好きです、彼女は俺の為に動いてくれました、だから俺は彼女に惹かれました」

「そうか……では一夏君? 君は刀奈を大事にしたいと言う気持ちは強いのか?」

龍三の言葉に、一夏は深く頷く。すると、龍三は腕を組むと目を閉じ溜め息を吐く。

「そうか……では、君にお願いがある——彼女を、娘を頼む」
「貴方!」

龍三の言葉に喜美江は驚く。が、龍三は喜美江を見て首を左右に振る。

「良いんだ喜美江……さて、一夏君?」

龍三は再び一夏を見ると、一夏も龍三を見る。

「一夏君、私は君の噂を色々知ってる……君は心ない暴言を受けられていたね?」

「……っ、はい」

一夏の表情は暗い物へと変わる。龍三は一夏を捜している間、一夏の噂を色々知ってしまった。が、今は龍三は言葉を続けた。

「だが君はそれを受けながらも君は誰にも話さなかった……君は何でも一人で背負い込んでいた……だが今は違う、君は娘に頼っている」
「えっ?」

「一夏君——君は刀奈の為に色々してくれた——父親である私から

見れば嬉しい物だった、刀奈が笑顔を少し見せてくれたのも、刀奈と簪が和解したのも君のおかげだ——今改めて礼を言う……ありがとう」

龍三は軽く頭を下げる。そんな龍三に一夏と喜美江は何も言わなかった。そして、龍三は顔を上げると一夏に言った。

「一夏君……娘を、刀奈を頼む」

「一夏君……」

その頃、楯無は自分の部屋にいた。楯無の表情は何処か切ない。だが、楯無は今、色んな意味で自分を落ち着かせていた。

一夏の告白。あれは楯無が一番聞きたかった物だった。自分は一夏に惹かれていた。が、自分は一夏の告白を受け入れる自信はなかった。

自分は一夏に多大な迷惑を掛けた。そんな自分が、一夏の恋人になれる筈もない。自分よりも簪か鈴の方が良い。

楯無はそう思うと、胸が苦しくなってくるのを感じた。

「更識……」

刹那、扉の方から叩く音が聴こえ、楯無は顔を上げる。

その声の主は一夏だった。幸いな事に鍵は掛けてある為、問題は無い。そんな一夏を楯無は扉に近付き、訊いた。

「一夏君……貴方はさつき……」

「悪い、聞かれてたんだやっぱり」

一夏は苦笑する。しかし、楯無は何も言えなかった。彼女の表情は暗い物へと変わっていた。楯無は、一夏の告白を受け入れる自信が、まだなかったのだった。

「更識、さつきの言葉は本気だ……」

刹那、一夏の言葉に楯無は瞠目した。しかし、一夏は扉の向こう側

にいる為、彼がどんな表情をしているのかは判らなかつた。

「更識、俺はな……」

一夏は楯無の部屋を出入り出来る扉の前に立ったまま、ゆつくりと言葉を述べ始めた。

一夏は最初、楯無と逢つた時は彼女が止にぶつかつて謝りもしない事に怒りを感じた。

が、楯無が涙を流したのを見て気になり、妹が誘拐されたと聞かされ、彼女の為に動いた。

しかし、それは狂言誘拐と知り、怒りはあつたものの、楯無を犯そうとした男達を殺し、それを下した女性議員を殺した。

その後、楯無に謝られたが一夏はそれを気にもせず、彼女の前から姿を消した。

学園での再会した時、彼女は泣きながら自分に抱き着き、そして自分は彼女をお姫様抱っこし、保健室へと連れていった。

そこからは色々あつたが虚からは鍵を渡され、彼女を箒から守る為に嘘の恋人宣言と言う形でキスをしたり、楯無が食堂で一夏に食べ合いをさせたり、IS没収やロシアの件で一悶着遭つたりもした。

今思えば、あの時の自分は千冬や箒に怨みがあつた筈なのに、楯無がいたおかげでそう言つた感情は少しずつだが消えていった。あの時、学園で起こつた出来事は異様な程多く、そして死と隣り合わせのような出来事ばかりだつた。

今思えば、自分が生きてきたのは楯無のおかげであり、楯無に惹かれ、自分は女の子を見捨てる事は出来ない性格だからこそ楯無を助ける思いがあつたのかもしれない。

一夏はそう思うと、楯無といた頃の自分を思い返す。あの時の自分は固かつた。親友達以外には心を開こうとは考えていなかった。

しかし、それを良い意味で壊したのは楯無であつた。彼女と再会して、薫子、虚、本音、簪、と言つた彼女の知り合い達とその妹とも知り合いになつた。

一夏から見れば淡い思い出であり、彼女達が居なかつたら、自分は

一生、親友達や知り合いにしか心を開かなかったのかもしれない。

一夏はそう思うと、改めて楯無に礼を言う。

「ありがとな楯無——お前が居なかったら、俺はずっと心を閉ざしていたのかも知れない、最悪な結末を迎えたのかも知れない……」

一夏は悲しそうに、扉の向こうにいる楯無に言った。それを聞いた楯無は瞠目し、口元を両手で押さえる——目尻には涙を浮かべていた。

一夏が、彼が、想い人が自分に好意を寄せているのを改めて知って、自分は何の為に泣いてるのかを、楯無自身、何も判らなかつた。

判るとすれば、自分は……彼の気持ちが自分に向けられている事に泣いているのだった。

楯無が泣いてるのを露知らず、一夏は軽く深呼吸すると、軽く頷き、楯無に告白した。

「楯無——嫌、刀奈！俺はお前が好きだ！俺の言ってる事は嘘じゃない！これは俺の気持ちだ！お前は俺の為に動いてくれた、心配してくれた！俺はお前のそこに惹かれた！お前が好きだ、刀奈!!」

一夏は楯無に自分の想いを伝える。それは偽りのない、一夏自身の本当の気持ちであつた。

楯無を守りたい、自分のせいで傷付いた楯無の傍にいたい、自分の為に更識家に静養させたいと周りを説得した楯無に恩を返したい。

一夏は自分の心にそう言い聞かせていた。そんな一夏の、一夏自身の現れとも言える告白の言葉に楯無は強く目を閉じ、そして、扉の鍵を開け、扉を開けた。

そこにいたのは、自身の想い人である一夏がいた。その表情はとても優しい。リムジンの中で見た一夏の表情も優しかったが今の彼の表情はそれ以上に優しい物だった。

「一夏君……っ、ワアア——ン!!」

楯無は堪え、溜めていた涙を吐き出す形で流しながら、一夏に抱き着いた。

一夏は楯無の行動に戸惑いながらも軽く抱き止める。一方の楯無

は一夏の胸を埋めていた。

「一夏君……私も、私も貴方が好き……ひくっ、貴方は私を何度も助けてくれた……本当は私が、うぐっ、えぐっ」

楯無は一夏の胸の中で泣きながら自分の気持ちを伝える。

本当は望んでいた事だった。一夏の傍に居たかった。彼は自分を何度も助けてくれた。

自分はそこに惹かれたのかもしれない。だが今は違う——今は一夏が自分を好きと言ってくれた。

そんな楯無を見た一夏は両手を楯無の後頭部や背中に当て、撫でる。

「大丈夫か楯無？ そんなに辛いのか？」

「ううん……私は嬉しいの、貴方が私を好きって言ってくれたのを……私も貴方が好きだったの……！」

楯無は泣きながら口にする。すると、楯無は顔を上げ、一夏を見る。

一夏はまだ微笑んでいたが楯無の顔は涙でクシャクシャになっていた。

「楯無——嫌、刀奈、俺はお前が好きだ——これは嘘じゃない、お前が好きだ」

「……私も好き、貴方が、どんな男性よりも、貴方が一番好き」

「そうか……刀奈、俺と付き合ってくれ」

「……はい！」

二人は頷き合う。そして、二人は互いの顔を近づけると、そのまま唇を重ねた。

とても長い物だった。が、二人の頬を何処か紅い。

刹那、二人は離れる。息は荒かったが、二人は互いの相手を愛しそうに見つめ合う。

そして、二人は再び、熱い口付けを交わした。それはさつきよりも長かったが二人には関係なかった。

「刀奈……良かったの」

「本当ですね……でも彼なら、一夏君なら彼女を幸せに出来るかも知れないわね……」

そんな二人を、龍三と喜美江は遠くから微笑ましそうに見ていた。しかし、一夏と楯無の二人は二人に気付く事は無く、二人は恋人同士に成れた事に嬉しさを隠せなかった。

だが、この時、一夏と楯無は知らなかった——奴等が、とあるプレイヤー達が自分達を狙っている事を……二人は知らなかった。

第108話

「それでね、一夏君」

あれから数分後、一夏と楯無は肩を寄せ合いながら談話をしていた。因みに二人は数分前、恋人同士となったのだ。

一夏から告白し、楯無をそれを受け入れたのだ。楯無は嬉しかった——愛する人、一夏からの告白を。

楯無当主ではなく、一人の少女として、嬉しくて堪らなかった。しかし、彼女は知らなかった。

一夏は良心の塊とも言える青年である。女性に暴力を振るうとか、賭け事とかはやらない。

逆に大切な人達は大事にするのと、仲間や親友を思う気持ちは誰よりも強く、曲がった事は嫌い、悪を許さない性格の持ち主であり、そしてプレデターに鍛えられた為に強い。

一夏と楯無改め刀奈、二人の男女は互いの恋人と他愛もない会話を、時間を大切にしており、二人は楯無の部屋で肩を寄せ合いながら談話を続けているのだった。

楯無は嬉しそうに自分の身に遭った出来事を、一夏に話す。それを聞いた一夏は嬉しそうに微笑ましそうに、耳を傾けていた。

「そうなんだ……でも此方も面白い事が遭ったぜ？」

「面白い事？」

楯無が首を傾げると、一夏は微笑みながら頷き、口を開いた。

「ああ、実は束さんのラボに居た頃、クロエさんに料理を教えていたんだけど、クロエさん、間違えて包丁で指を切っちゃって、指から血が出たんだ——でも後で勇人がクロエさんの指を啜えたんだ——そしてたらクロエさん、口をパクパクしながら顔を真っ赤にしちゃって、俺と止——あつ、つ……」

一夏は目を見開き直ぐに下唇を噛みながら哀しそうに俯く——両手は震えていた。

——あつ…………。楯無も一夏の様子に気付くが彼女も直ぐに気付き、哀しそうに俯くと、一夏の片方の手を両手で包むように掴む。

一夏と楯無は気付いた。霧崎止——彼は今、織斑千冬に刺され瀕死の重傷を負い、今も尚、眼を覚まさない。

本当は傍に居たいが彼女の気持ちにも答えたいのと、止への罪悪感がある為に、楯無の家に逃げると言う形で逃げてしまった。

彼は自分を責めるのだろうか？——嫌、責めるに違いない。彼を刺したのは姉、千冬である。自分と千冬は実の姉弟であるのだ。

一夏は止が自分を責めるのと、止に何て謝れば良いのかが判らなかつた。

「ねえ、一夏……」

刹那、楯無はポケットに違和感を感じた。振動音——それもスマートフォントフオンの振動音だった。

楯無はスマートフォンを取り出すと、画面を見た。『虚ちゃん』と黄色い文字が映っていた。

楯無は画面をタップすると、耳に当てた。

「どうしたの虚ちゃん？——えっ!？」

楯無は瞠目した。一夏は楯無の様子に気付くが、楯無は徐々に嬉しそうに微笑むと、一夏を見た。

「一夏君——止君が目を覚ました」

楯無は嬉しそうに一夏に言った。——っ!?——。が、それを聞いた一夏は悔しそうに下唇を噛むと何故か俯く。

「一夏君、どうしたの？——あっ……」

楯無は直ぐに気付いた。止が目を覚ました事。それは一夏や止を慕う周りの者達が一番望んでいた事だった。

しかし、逆に一夏には罪悪感もあつたのだ。何故なら、止を刺したのは千冬であり、千冬は元とは言え、一夏の姉。

止から見れば、一夏は自身を刺した千冬の弟である。そんな一夏は止の親友であるが一夏から見れば、親友を巻き込んだ事に後悔していた。

止は千冬に刺されてから今日まで目を覚まさなかつた。だが今は、目を覚ましたのだ。

一夏から見れば嬉しいが止から見ればどう思うのだろうか？ 嫌、

自分を嫌うに違いない。

一夏が肩を震わす中、楯無はスマートフォンを持ってない方の手を一夏の手の上に重ねると、虚に聴いた。

「虚ちゃん、それは誰から聞いたの？」

『篠ノ之博士が私達に連絡してくれたのです』

「篠ノ之博士が？」

『はい、篠ノ之は私や簪お嬢様、本音や勇人さんや鈴さんや学園長に教えてくれました——ですが本音が……』

「本音ちゃんがどうかしたの？」

『いえ——本音ったら止君が眼を覚ましたのを知ると、止君に抱き着きながら泣いちゃいました』

「本音ちゃんが!?!」

楯無は驚く。それを他所に虚は言葉を続ける。

『はい、本音は止君の胸の中で泣きじゃくっています、止君は申し訳ないように本音に謝っているみたいです』

「そう……それよりも虚ちゃん、私も言いたい事があるの」

『言いたい事？ 何ですか？』

虚が訊くと、楯無は頷き、ふと一夏を見る。一夏は俯いているが肩を震わせていた。

本当なら言いたかったが今は不謹慎だと、楯無は思った。しかし、

楯無はそれを、一夏を気遣い、止めた。

「やっぱ……」

『布仏先輩、更識さんと話してるの？』

虚の近くから男性の声が聞こえた。それは紛れもなく、止の声だった。一夏から見れば久しぶりに聞きたかった言葉だろう。

だが今は、今の一夏は止への罪悪感がある為に会話が出来る状況ではない。

「その声は、止君？」

楯無は止の声に気付くが一夏は肩を更に震わす。

「あつ……ごめんさい、ちよつと待ってて」

楯無はスマートフォンでの会話を一旦止めると、一夏を見る。

「一夏君、大丈夫?」

楯無が心配そうに訊ねると、一夏は震えながらも頷く。恐怖、一夏は今、止への恐怖を感じていた。

止に謝りたい。たが止は……。刹那、スマートフォンから虚の声が聴こえ、楯無はスマートフォンを耳に当てる。

「どうしたの?」

『お嬢様、止君が一夏さんとお話をしたいそうです』

「止君が一夏君と話をしたい?」

楯無の言葉に一夏は顔を上げ驚きながら、楯無を見る。楯無は一夏に気付くが合えて虚の言葉にも耳を傾ける。

『実は止君が一夏さんにどうしても聞きたい事があるみたいです——それに止君は、こう言ってるみたいなんです——』一夏を怨んでない』って』

「止君が一夏君を怨んでない?」

「なっ!?!」

一夏は再び驚く。止が自分を怨んでいない? 一夏から見れば耳を疑うような発言だった。

「止君がそう言ってるの? 虚ちゃん?」

『はい、止君はそう言ってるみたいです、止君——彼、一夏さんを怨んでないみたいです、彼は織斑先生に刺された事は、自分が一番良く判ってるみたいです——ですが、それは織斑先生が独断でした事であり、一夏さんには何の罪もない、と』

「止君が……そんな事を?」

虚の言葉に楯無は信じられないと言うような表情をした。何故なら、止は千冬に刺されたが一夏を怨んでない。

普通なら親友の姉に刺された事は、刺された親友から見れば良くない思い出だ。

それを止は何にも感じないよりも、寧ろ一夏を庇ってるようにも思える発言をしているのだ。

楯無が驚く中、一夏も驚く。二人は止の発言に驚くながらスマートフォン越しにいる虚が何かを言い掛けている。

『どうしましたかお嬢様？ 何か返事をしてください』

「いえ……それよりもまた少し待って」

楯無は再び会話するのを止めると、一夏を心配して訊ねる。

「一夏君、大丈夫？ それに今の会話——止君が貴方と話をしたいみたいなの……」

「止が……でも俺は——彼奴は俺が」

一夏は再び俯く。

「一夏君……逃げないで」

そんな一夏に楯無は厳しい事を言う。一夏は驚き顔を上げると、楯無は哀しい表情を浮かべていた。

「一夏君、逃げないで、止君と話を——止君は貴方と話をしたいのよ？ ——それなのに、貴方は逃げるの？ 今の貴方は止君への罪悪感があるのは私にも判るわ、だけど逃げないで——貴方は止君から逃げて何も変わらないし、止君も喜ばないし誰も得しない」

楯無は一夏に怒る。それは一夏を思い、止との友情を確かめる物でもあった。

このまますれ違ったら誰も喜ばず、当人達の友情にもヒビが入る。それを楯無は許さなかった。

彼等は自分達の恩人であり、今の自分達はずっと哀しい思いをしていたのだろう。

楯無は二人を心配しているからこそ、そう言えたのだった。

「楯無……刀奈……ああ、そうだな」

一夏は辛そうに頷く。それを見た楯無は「大丈夫、私も居るから」と一夏を励ますと、虚に言った。

「虚ちゃん、止君に代わって」

楯無が言くと、虚は『判りました』と答え、止に代わろうとして止に渡す。

「一夏君……はい」

その間に楯無はスマートフォンを一夏に渡し、一夏はゆっくりと受け取ると、耳に当てた。

『……一夏か？』

スマートフォンから青年の声が聞こえた。それは紛れもなく、止
だった。

「……止」

一夏は辛そうに答えた。そして、二人はどんな会話をするのかは楯
無や、止の近くにいる者達は見守る事しか出来なかった。

第109話

「と、止……」

一夏は、楯無のスマートフォンを使って、止と会話し始めた。しかし、一夏の表情は暗い物であり、止に掛ける言葉は何処か罪悪感に苛まれていようにも思えた。

それを知ってるのは、近くにいた楯無くらいだろう。嫌、楯無は心配そうに見つめながらもそれを口にはしない。

出来るとすれば、自分は彼の傍にいる事と、彼を落ち着かせる為に手を握る事くらいだ。

『一夏、一日振りくらいかな?』

「そうだな……それくらいだろうな——止、お、俺……」

一夏はそれ以上は言えなくなる。すると、止が少し笑う。

『どうしたんだ? 俺と話すのが恥ずかしいのか?』

「嫌、違うんだ——その……ごめん」

一夏は辛そうに目を閉じる。止は、元とは言え自分の姉だった千冬に刺されたのだ。止から見れば、元とは言え自分のせいだ。

さつき、自分と楯無は恋人同士になれたがそれを報告するどころか、自分には止に掛けてやる言葉が見付からない。

彼がどんなに自分を非難しようが一夏はそれを受け止めつもりでいた。

『どうしたの一夏? どっか悪いの?』

「あつ……嫌、何処か悪い訳じゃない……その、ごめん……俺の身内がお前を」

『そんなのは気にしないよ?』

一夏が何かを言う前に止がきよとんとしたような口調で言う。それを聞いた一夏は瞠目するが止は言葉を続ける。

『一夏、俺は刺された事は気にしないよ? だってあれはお前がやった訳じゃないし、俺の不注意だからお前が気にする必要ないじゃない?』

「だけどお前は俺の!?! ……っ、お、俺はお前に罪悪感があるんだよ!?!」

なのに何でそんなに平気何だよ!? 責めろよ!? 俺を詰れよ!」
一夏は止に怒る。一夏から見れば身勝手な行動である事は判っていた。だがこうしなければ、止は自分を責める筈だ。

しかし、隣にいる楯無は一夏の様子に戸惑う。が、スマートフォン越しから聞いていた止は一夏の言葉の嵐に耳を傾けていた。

『……確かにそうかも知れない……でも、俺は別にお前を責めるつもりはないよ?』

「と、止、お、お前は何を言っただよ!? お前は俺を責める資格が」
『そんな物はないよ!!』

一夏が何かを言う前に止が叫び、それを聞いた一夏は一瞬だけ怯む。楯無もそうだったが一夏は恐る恐る、止に訊ねた。

「と、止?」

『一夏、俺は責めたいよ? でもそんなのはしたくない……だっってお前の俺の、俺の友達だから……友達を責める理由なんてないからだよ!! あっ……っっ』

『トツマ!』

止は叫んだ。が、止から悲痛の声が聞こえ、近くから本音が止の心配する声が聞こえた。

「と、止!」

一夏も止の心配をするが楯無も心配しているのか困惑している。

『い、一夏……俺はお前を責めない……お、俺はお前の友達で……お、俺の恩人……だから、それにお前……うぐっ……お前は俺と勇人のリーダーだから、お前がクヨクヨしてたら、俺は、俺はそんなのは嫌だ! お前は本当は優しい奴でとても強い! お前がクヨクヨしているのは見たくない! 俺が知ってる一夏は皆を思いやる強い男だあっ……ああっ!』

止は再び叫ぶと、止はまた悲痛の声を上げる。そんな止を一夏は「止!」と、楯無は「止君!」と心配する。

スマートフォンに向こう側からも簪や虚の声が出たがそれらは全て止を心配する声——が、スマートフォンから止が激痛を堪えながら、周りを制止するような声が聞こえた。

『大丈夫だよ……それよりも一夏——胸を張って、お前はリーダーだつて事を忘れないで……お前の姉は姉で……お前はお前だから、それだけは判つて……先輩、後はお願ひします』

止はそう言つた後、スマートフォンを虚に渡す。

「止、止!?!」

一夏は止からの返事を聞きたかつた。が、虚が答えた。

『すみません一夏さん、止君は病み上がりなのです——だから今は止君を安静にさせて上げて下さい、それに止君は貴方を責めてはいません』

「ですが虚さん!? 俺は!」

「一夏君!!」

楯無が叫ぶと、一夏は楯無を見る。楯無は怒りと哀しみが混じつたような表情で一夏を見ていた。

怒りは止の事を心配しない一夏に、哀しみは一夏を心配しているようにも思えた。一夏から見るとは判らなかつたが楯無は一夏に怒りがありながらも心配していた。

「一夏君、今は落ち着いて……今は止君を気遣つて、今は止君の気持ちも理解して上げて……今は、今は止君の思いを無駄にしないで」

楯無はそう言つた後、一夏の手を重ねている手に力を入れる。楯無自身の気持ちだつた。

今の一夏は止の言葉を理解しているよりも心配の方が強い。それは一夏の良い所だつたが今は違う。止を心配し過ぎているのだ。

「一夏君……時間はまだ有るわ、止君は死んだ訳じゃないわ……それに今は止君を安静にさせて、それに貴方も、今はゆっくりしていつて……お願ひ」

楯無は一夏に寄り添う。それを見た一夏は何も言えず悔しそうに下唇を噛むと、スマートフォンを楯無に差し出す。

「返すよ——刀奈の言う通り、今の俺には止を責める資格はない……」

「一夏君……それで良いの? 貴方は……いいえ、これ以上はいいわね……判つたわ」

楯無はそう言うスマートフォンを受け取り、耳に当てる。

「ごめんなさい、今はありがとう虚ちゃん」

『此方こそすいません、貴重な時間を割いてしまつて』

「良いのよ、それより止君をお願いね」

『判りました。では』

「ええ、また後でね……」

楯無はそう言った後、スマートフォンを下ろすと、辛そうに一夏を見る。一夏は俯いていたが楯無はそつと一夏の方に頭を置き、大丈夫、大丈夫だからと囁いた。

しかし、一夏は止への罪悪感があるのか、楯無の言葉に耳を傾けながらも後悔していた……。

その頃、IS学園ではモノレールが走っていた。そのモノレールは今、厳重な警戒体制の元の中で走っていた。

周りにはISを纏った女性が五人もいた。まるで囚人を護衛するようにも思えたがそれもその筈、そのモノレールには織斑千冬、篠ノ之箒の二人が拘束される形で乗っていた。

何故、二人は拘束されているのかは、箒が一夏に関わろうとしたのと、千冬は止を刺そうとした事で学園長が彼女達に処分を下したのだ。

二人は反論したが自分達は罪を犯した。その為、拘束される形で護衛されていた。因みに護衛しているのはIS委員会の選りすぐりの精鋭達であり、IS委員会の中ではマトモな方である。

「一夏……何でお前は私を見てくれないのだ……何で私を」

「一夏……お前は私の者だ……私の……」

二人はぶつぶつと何かを呟いている。が、二人は一夏を想っていた。しかし、一夏は二人を嫌っている為、何とも言えない。

そんな二人を近くにいる女性二人が哀れみの目で見ている。どち

らもISを纏っているが、これでも強い方である。

「可哀想よね何か……」

「ええ、でも二人共、一夏君に関わろうとしたから、何とも言えないわ」
「それよりも一夏君は何で、彼女達を嫌ってるのかしら？」

「私にも判らないわよ……でも」

刹那、モノレールの外から大きな音が聴こえた。女性二人は外を見るが、外にいる仲間が何者かと闘っていた。

それも仲間達は一機、また一機と倒されていく。

「な、何が起きてるのよ!？」

「わ、判らないわよ!？」

女性二人は戸惑うが、このモノレールの次の車両へと出入り出来る扉が開く。二人は扉を見る。刹那、扉の方から青白い弾が出てくると、弾は二人の内、一人の女性の頭を吹っ飛ばす。

隣にいた女性は驚くが、今度は隣にいた女性の頭も吹っ飛んだ……。

そして、モノレールは何者かに襲撃され、織斑千冬と篠ノ之箒は何者達かに拉致された……。

モノレールが何者達に襲撃されてから数分後、ここは日本のとある廃墟。

「そうか……織斑千冬と篠ノ之箒を拉致したのか……全く、何を考えてるんだ月影とブラックは!？」

廃墟には半蔵が、とある者と一緒に居ながら憤りを隠せない。何故なら彼は近くにいる者から、部下である月影がとある者と一緒にモノレールを襲撃し、千冬と箒を拉致したと言う話を聞かされた。

それも無断であり、人を拉致までした。それは半蔵にとって怒りしか湧かなかつた。

人を拉致する事は捕虜にも使えるが彼はそんな姑息な手を使わな

い。使ったとしても捕虜相手を気遣う心配もあつた。

半蔵は舌打ちすると、とある者を見る。とある者——彼もプレデターだった。が、そのプレデターは軽装だが髪の色は茶色く、顔には驚を表したマスクを着けている。

左腕にはガントレットを着けているが彼は半蔵を無言で見据えていた。

「ファルコナー……お前はと思う？　月影やブラックのやり方を見て」

半蔵はファルコナーに対して冷静に問い掛ける。一方、ファルコナーは首を傾げていたが半蔵は辛そうに目頭を押さえる。

「そうだよな……お前に言っても無駄だよな……だがな、お前には何の罪もない——それに、お前達は殺るつもりなのか？」

半蔵は辛そうに、ファルコナーに訊く。何故なら、半蔵は今、あるプレデターから、ある人物の抹殺命令を下された。

その人物はまだ少女であり、半蔵から見れば辛い任務でもあつた。が、そうしなければ、半蔵が大事にしている者の命が危うい。

その為、半蔵はリーダーとしての使命と、部下の勝手な行いに怒りと、大事な者を守る為に動かなければならない。

半蔵はリーダーとして重いとも言える、ある人物の抹殺命令を受け入れる。

「取り敢えず、俺が行く……お前も来るんだろ？」

半蔵の問い掛けにファルコナーは頷くと、半蔵は「そうか」と辛そうに言った後、懐から、ある物を取り出す。

「こんな少女を殺せつてのによ……」

半蔵は辛そうに呟く。それは写真だったがある少女が写っていた。

隠れて撮ったようにも思えるがその少女は——更識楯無だった……。

第110話

「う、うん……」

あれから二時間後、一夏は目を覚ます。

「う、ううん……」

一夏は目を擦りながら起き上がる。因みに此所は楯無の部屋であり、一夏は楯無の部屋のベッドで横になって眠っていた。

「此所は……あつ、刀奈？」

一夏は此所が楯無の部屋に気付くと、ふと、近くから寝息が聴こえ、寝息がした方をみると、そこには、楯無が自分の方を見る形で横向けに眠っていた。

楯無は気持ちよさそうに眠っていたが寝息は可愛らしく、とても可愛らしい寝顔をしていた。

一夏は彼女を見て微笑むと、不意に楯無の髪を撫でる。——ん……
——。楯無は気持ち良さそうなのか微笑んでいる。

一夏はフツと笑うと、楯無の髪を撫で続ける。楯無の髪は空のように綺麗で良い匂いもした。

使ってるシャンプーが良い物なのだろう——が、一夏は楯無を愛しそうに見詰めると、不意に自分の方へと引き寄せる。

楯無は寝ているが何故か一夏の方へと擦り寄る。楯無は寝ぼけている訳ではないが何故かそんな行動をしてしまう。

刀奈……。一夏はそう囁くも楯無は起きなかった。余程疲れているのか或いは車の中での疲れがまだ取れなかったのかは判らない。

しかし、一夏は楯無には感謝していた。楯無は自分の為に色んな事をしてくれたのだ。

それに、楯無の部屋のベッドに寝ていたのは彼女が自分を気遣いベッドに寝かせてくれたのだ。

ベッドからは楯無の匂いが染み着いているが一夏は別にそんな趣味はない。一夏は単に、楯無のベッドに寝るのが恥ずかしかったのだ。

最初は断ったが楯無がどうしても言い、そして自分は負けた訳で

はないが楯無に甘えてしまったのだ。

「……刀奈」

一夏は楯無の本当の名前を言いながら、楯無の頭を撫で続ける。このまま時が止まって欲しい——このまま、彼女との安らぎの時間が欲しい——彼は、一夏はそう願っていた。

否、それは儚い夢に等しい——自分はプレデターに育てられた者。どう見ても、一夏は楯無と一緒に居られる時間は限られていた……が、一夏はある事に気付く。

「そう言えば、エルダーは何故、俺や勇人、止を助けくれたんだ？」

一夏はある疑問を浮かべる。それはエルダー達の行動だった。あの時は他のプレデター達が自分達の事を気に入らないのと、それが理由で自分達を地球へ帰してくれた。

しかし、一夏には腑に落ちない事があった。

プレデターは何故、自分達を地球へと帰したのか？ それに何故、防具や武器を与えてくれたのか？ それに何故、エンフオーサーも学園に居て、何故プラズマキャノン砲を与えてくれたのか？

一夏はプレデター達の行動に戸惑う。そして一番判らないのがケルティック達だった。彼等は何故、ドイツに居たのか？

あれは偶然なのか——自分を助けたのは偶然で、何故余所者でもある自分達を星に招き入れてくれたのか？ それも三年と言う長い時間も費やしてくれたのだろうか？

一夏はプレデター達の行動に戸惑う。考えれば考える程、判んなくなっていく。まるで自分は本来の目的を見失っていくようにも思えた。

自分は千冬に復讐したい為だったのか？ それとも楯無と一緒に居たい為だったのか？ 一夏は考えれば考える程、判らなくなっていた。

一夏は気付けば顔を真っ青にしていた。どんどん判らなくなっていく。ケルティックと一緒に居た時には彼等がドイツに来た理由を訊こうとしたが恩人である身の上、訊く事は出来なかった。

一夏は冷や汗を流す。判らない——判らない、とそう思ってしまった。

う。

刹那、楯無の瞼が微かに動き、一夏は楯無を見る。楯無は可愛らしい唸り声を上げた後、ゆっくりと目を開けた。

「う……一夏君？」

楯無はまだ眠たそうになりながらも、一夏を見る。一夏は慌ててぎこちない笑みを浮かべる。

「か、刀奈、良く寝れた？」

「う……ん……あれ、どうしたの一夏君!？」

楯無は一夏の様子に気付き、眠気が飛んだように起き上がると一夏を心配そうに見つめる。

一夏は楯無の言葉に戸惑いながらも笑う。

「えっ、な、何が？」

一夏は惚けた振りをするが楯無は再び訊いた。

「どうしたの一夏君!？ 顔色が悪そうよ!？」

「た、大丈夫だよ？ 俺は何時も通りだぜ!？」

「嘘!？ どう見ても顔が真っ青で汗を掻いてるじゃない!？」

楯無は一夏に指摘すると、一夏は「っ!？」と言葉を詰まらせる。

楯無にはお見通しだった。一夏の表情は暗くそして疑問を浮かべているようにも思えた。

それに対し楯無は暗部の一族であり、相手の表情まで判るように訓練されている為問題はなかった。

が、今は違う。楯無は心配そうに一夏に訊ねる。

「一夏君、どうしたの顔色が悪いわよ?？」

楯無は心配そうに訊ねる。しかし、一夏は何も言わず項垂れる。

「一夏君……どうしたの?？」

楯無は一夏に訊く。勿論、一夏は何も言わなかった。と言うよりも、楯無にどう返答すれば良いのかが判らなかつた。

自分はプレデターに育てられた。そんな事を言える筈もないし、楯無は信じる筈もないからだ。

一夏は楯無にどう答えれば良いか判らない中、楯無は一夏を心配する。

「一夏君……っ」

楯無は下唇を噛むと、一夏の頬を両手で挟むように触れると、無理矢理顔を上げさせる。

一夏は楯無の行動に驚く刹那、唇に柔らかい物が当たる事に気付く。

一夏は瞠目するがそれは紛れもなく、目の前にいる楯無の唇だった。そう、楯無は一夏にキスしたのだ。

それも今までのキスとは違う。一夏からではなく、楯無からであった。一夏は瞠目する中、楯無は目を強く閉じている。

時間だけ過ぎていく——それは数十秒ぐらいたったが楯無は名残惜しそうに離れる。二人の間には銀色の色があった。

「一夏君……どうしたの？ 何か遭ったの？」

楯無はそう言った後、寂しそうに一夏の胸に顔を埋めながら一夏に抱き着く。これには一夏は戸惑うが直ぐに微笑むと、優しく抱き返し、楯無の頭を撫でる。

「大丈夫だぜ？ 俺は少し考え事をしていただけだから」

「本当に？ ……さっきの一夏君は顔色が悪かったわよ？ 何か遭ったの？」

楯無の問い掛けに一夏は何も言わず辛そうに瞑目するが直ぐに哀しそうに笑う。プレデターの存在を言いたかったがそれを我慢した。彼等の存在と楯無の為に我慢した。それは正しくも間違った事でもあるが一夏は耐える。

そしてそれを心配している楯無に嘘を付く事になると思いながらも、一夏は嘘を話す。

「大丈夫だよ刀奈——俺はさっき嫌な夢を見たんだ」

「嫌な夢？」

楯無は顔を上げ、一夏を見る。その表情は不思議そうに見ているようにも思えたが一夏は楯無を心配させないように微笑んでいた。

「ああ……俺が刀奈の前からいなくなる夢だったんだ——その夢のせいで俺は刀奈が喪うんじゃないかって思って、それで顔色を悪くしたんだ」

「そうなの？　それが原因なの？」

楯無は未だ疑問を浮かべていたが一夏は優しく微笑みながら頷くと、楯無の頭を撫でる手を止め、楯無の額に自分の額を当てて。

これには楯無は頬を紅くするが一夏は口を開いた。

「それは本当だぜ？　俺は刀奈が居なくなるのは嫌だ……俺は刀奈が好きだから変な夢を見たんだ」

「一夏君……大丈夫よ、私は此処にいるわ、貴方は一人じゃないわよ？」

楯無はニツコリと笑うと、再び一夏の胸に顔を埋める。一夏は楯無の行動を優しく受け止めると、再び楯無の頭を撫でる。

「刀奈……」

一夏は楯無を見ながら微笑む。自分には今、大切な人がいる。それも自分の為に動いてくれた人でもある。

自分は彼女に惹かれたのもそこだが、同時に罪悪感もあった。彼女には何れ話さなければならぬだろう。

しかし今は彼女と一緒に居たい。気になる事もあるが今は彼女との大切な、安らぎの時間を味わいたい。

例えそれが一瞬だけでも、ほんの一時でも良い——せめて誰も、自分と彼女を邪魔しないで欲しい。

一夏は儂いとも言える気持ちを口では言わず心の中で呟いた。自分は何れ何かに遭うに違いない。

だが今は何も遭わないでいる——、一夏はその時間を楯無といふ時間を大切にしようとしていた。

一夏は今の時間を大切にしている中、楯無は一夏の胸に顔を埋め続ける。

その光景は誰から見ても微笑ましい光景だったが今は誰も邪魔しないで欲しい、と言う二人の気持ちの表れでもあった。

そして二人は数分間抱き合っていたが安らぎの時間でもある事を、二人は嬉しく思っていた事は二人だけの秘密だった。

しかし、一夏は知らなかった。彼等が、プレデター達が一夏達を連れていったのは、ある目的がある事を……それを知ってるのはエルダー達であり、そして一夏達がそれを知る時、一夏達は絶望するに違いないだろう……。

第11話

一夏と楯無が互いの相手と一緒に安らぎの時間を過ごしている頃、ここは日本のとある廃墟。

「……………」

廃墟のとある個室には簡易ベッドがあり、ベッドには渡が横向けに寝ていた。その寝顔は穏やかな物だったが近くには、とあるプレデターが居た。

そのプレデターはファルコナー同様、軽装が特徴的かつ、顔に付けてるマスクはさっぱりとしていたが二本の牙が生えているようなのが特徴的なマスクだった。

そのプレデターは渡を見据えていたが別に渡を殺すつもりは無かった。彼は、渡をパートナーとして見ており、互いの背中を預け合うには相応しい存在だと思っていた。

しかし、プレデターは渡を見て何かを思う——彼は半蔵が大事にしている者だと言う事にも気付いていた。

それに半蔵は今……刹那、この部屋を出入り出来る扉が開き、トラッカーが扉の方を見ると一人の人間と仲間のプレデターが一人部屋へと足を踏み入れる。

半蔵とファルコナーだった。二人はやる前に、半蔵が渡の様子が気になり、渡の部屋へと来たのだった。

「トラッカー、渡は……フツ」

半蔵は、寝てる渡を見て微笑むと、ベッドに近寄り、渡の頭を撫でる。

半蔵は渡を大切な弟分として厳しくも見守っていた。彼は自分達の部隊の中では一番若い。

その為、危険な事をやる事が多く、半蔵もヒヤヒヤしていた。だが彼は、復讐の炎に駆られている。

復讐の相手は霧崎止——渡の双子の兄である。渡は三年前、止が助けに来なかつた事により逆怨みに近い形で彼を嫌っている。

半蔵から見ればそれは渡の為になるのか？ と半蔵は思った。本

当なら渡を止の元へと返したい——彼には健全な学生として、青春を謳歌させたかった。

が、渡の言い分や気持ちを尊重しなければならぬ為、何とも言えなかった。半蔵は渡を見て辛そうに俯く。

「放せ、この化け物が!!」

「うるせえ黙れクソ女が!!」

部屋の外から数人の叫び声が聞こえ、半蔵は驚きながら扉の外を見る。——……う、ん? ——。

その叫び声に反応したのか渡が起きる。

「渡!」

「あれ……半蔵さん?」

渡は目を擦りながら起き上がると、部屋の外から数人の叫び声に気付く。

「な、何か遭ったんですか?」

渡は外からの叫び声に驚く。そんな渡に半蔵は言った。

「渡、何が遭っても部屋から出てくるなよ。」

「えっ、半蔵さん?」

渡は半蔵の言葉に驚くが半蔵は深く頷くと、トラツカーを見る。

「トラツカー、渡を頼む」

半蔵はそう言うと、ファルコナーと共に部屋を出た。その場に残された渡は何も判らず戸惑うがトラツカーは無言で首を傾げていた。

一方、半蔵とファルコナーが声がした方へと向かう為、通路の中を走っていた。

「止める化け物め!!」

「うっせえよさつきから黙ってるのと言ってるのに喚きやがって!!」

揉め合う声が飛び交う。そして、半蔵とファルコナーが曲がり角に曲がった直後、半蔵は驚愕した。

声を上げていたのは月影と、無言の一体のプレデターに、何故か拘束されている女性と少女が月影と揉めていた。

しかし、拘束されているのは千冬と箒だった。半蔵は驚いているが千冬と箒は半蔵に気付く——と言うよりも隣にいるファルコナーを

見ていた。

「っ?! 化け物がもう一体?!」

箒はファルコナーを見て怯える。千冬も驚いていたが半蔵も驚いていた。

この二人は……。半蔵は千冬と箒を見て何かに気付く。そんな中、月影は半蔵を見て歪んだ笑みを浮かべる。

「半蔵か? コイツだぜ? 俺が拉致した女共は」

月影は笑いながら、半蔵に言う。これには半蔵も驚くが月影に怒る。

「何をしてるんだ月影?! 何故その人達を拉致した!?!」

半蔵は月影に怒るが半蔵は月影がブラックと共に、千冬と箒を拉致した事をファルコナーから聞かされた為に知っていた。

それに半蔵は更識刀奈を殺す前にファルコナーとやっていたのは、刀奈をどうやって殺すのかを話し合っていて、ついさつき殺す方法を見つけ、渡の部屋へと向かったのだ。

話を戻そう。半蔵は月影に怒る中、後ろから声を掛けられる。

「半蔵さん? どうしたの?」

半蔵は後ろから声を掛けられ驚くが後ろを振り返る。そこに居たのは、渡だった。

「わ、渡?! 何で此処に居るんだ?! 部屋に居ろって言っただろ?!」

半蔵は渡が自分との決まりを破って部屋から出てきた事に驚く。刹那、千冬は渡を見て豹変する。

「霧崎貴様—— ツ!! 生きていたのか!!」

千冬は渡に怒りながら、渡に迫ろうとした。しかし、月影に後ろから蹴りを入れられ、仰向けに倒れるが月影に拘束された。

「何だよこの女? あのクソガキを見て怒ったみたいだぜ? おい渡? てめえ何かやったのか?」

月影は渡に呆れながら訊ねると、渡は首を左右に振る。

「い、いえ、自分は何もしていません……それにその人とは何の面識もないです」

渡は千冬とは逢った事がないと言う。そうだろう、渡は千冬とは

逢ってない。それ以上に千冬の事を知らないだけでなく、彼女に怨まれるような事をしていない。

そんな渡に千冬は叫ぶ。

「ふざけるなあつ！ 私は貴様を刺した筈だ!! 生きていたのか——ッ!?!」

千冬の言葉に渡は瞠目し、月影はハッ? と呆れ、半蔵は驚く。何故なら彼等は千冬が渡を刺したと勘違いしていた。

否、彼女が刺したのは渡ではない、彼女が刺したのは彼の双子の兄、止である。そう——千冬は渡が止だと思っていた。

渡が面識がなかったのも、彼女に刺された覚えもないのも事実だろう。そんな渡を驚いているのを他所に、トラッカーが渡の肩に手を置く。

渡がトラッカーに気付くがトラッカーは渡の後から来た為に判らなかつたのだ。

そんな渡に半蔵は千冬に怒る。

「何を言つてんだアンタは?! 渡は俺達とずっと一緒だったんだぞ?! 刺す事は出来ないんだぞ?!」

「嘘を付くな! 確かに私は霧崎を刺した筈だ!! なのに何故奴はピンピンとしている!?!」

「ソイツって、止の事か?」

怒る千冬に月影が呆れながら答えると、千冬は月影の言葉に驚く。

「な、何だと? どういう事だ? 奴は止ではないのか?」

「当たり前だよ馬——鹿。アイツは霧崎渡——お前が刺した止って奴の双子の弟だぜ?」

月影の言葉に千冬は「なっ!?!」と驚き、再び渡を見ると、渡は瞠目していた。

何故なら千冬は止に双子の弟がいる事は知らなかつたのだ。その為、渡が此所に居る事も知らず、彼がピンピンとしているのも、それが理由だ。

「さ、刺した……奴を!! 止をか!?!」

渡は驚きながら千冬に訊ねると、千冬は頷いた。

「ああ刺したよ！ 奴等は私の一夏の障害だから殺そうとした!! だから私は奴を刺したんだ！」

千冬は怒りながら、渡に叫ぶ。一方の渡は千冬が止を刺した事に戸惑いを見せていた。

止を倒すのは、殺すのは渡だった。なのにそれを、千冬は代わりにと言う形で刺したのだ。

これには渡も戸惑うが、半蔵は渡を気遣うように声を掛ける。

「渡、お前は部屋に戻れ」

「えっ？ 半蔵さん、何を？」

半蔵の言葉に渡は戸惑う。が、半蔵は険しい表情をすると、渡に対し言葉を続ける。

「良いから部屋に戻れ。此処からは俺と月影、ブラックやファルコナー達が話し合う——子供であるお前には重すぎる話だからな」

「でも半蔵さん……」

「渡！」

渡が何を言う前に半蔵は怒り、それを聞いた渡はビクツと肩を震わすが、半蔵は辛そうかつ気遣うような眼差しで渡を見据える。

「渡、今のお前には重い話だ——お前は部屋に戻って、ハウと……」

半蔵は腕を組むのをやめ、指をパチンと鳴らす。刹那、半蔵の近くから、白の鷲に良く似た機械の生き物、ファルが展開される。

ファルは半蔵の近くで浮くように翼を動かしながら飛んでいたが半蔵の肩に降り、止まる。

「ファルと一緒に遊んでいなさい……ファル、渡と」

半蔵はファルにそう命令すると、ファルは渡の肩へと飛んで移動する。

これには渡も困惑するが渡はファルを見た後、半蔵を見る。半蔵は辛そうに頷くと、渡は「あつ……」と何かを言い掛けたが深く頷くと、ファルを見る。

「行こう、ファル……」

渡はファルの頭を撫でる。ファルは機械なのか、渡は鉄の頭を撫でているようにも思えたがファルは気持ち良さそうなのか鳴く。

渡は微笑むと踵を返し、部屋に戻る為に歩く。半蔵は渡を見た後に何も言わず、頭を抱える。

渡は止が刺された事を気にしていないのか？ 半蔵は渡の様子に疑問を抱いていた。実の兄を刺されたのなら慌てる筈だ。

渡からはそれを感じられないが渡は心の何処かで止を心配しているに違いない。だが今は、それは渡との一対一の時に話そう。

今は千冬と箒をどうするのかを月影とファルコナー達と話し合うしかない。

「それよりも月影、コイツらはどうするんだ？」

半蔵は気を取り直し、月影に訊く。月影は呆れながら答えた。

「それは決まってるんだろ？ コイツらは人質だ——それに使えるかもしんねえぜ？」

第112話

「な、何を言っただよ？」

月影の言葉に半蔵は解らないでいた。否、正確には月影の言葉に従いていけないでいた。月影が彼女達を利用する？ 刹那、半蔵は月影に怒る。

「ふざけるな!! 人質を取る等、俺には出来るか!？」

半蔵は月影に怒る。何故なら、半蔵は女を人質に取る所か彼女達を利用しようとまでは考えていなかった。

捕虜には出来る限り危害を加えず、拷問は死なない程度に軽く痛め付ける程度であった。

それは半蔵自身が女子供を殺さず、尚且つ非武装や病気を患い、戦う意志のない者達を殺さない、と言う決まり事をしていたからだっただ。

彼女達を人質にする事は彼女達を巻き込む意味であるのと、彼女達を死なす事は自分の決めた意志に反する事をも意味していた。

そしてそれは、ファルコナーの教えでもあり、彼もまたプレデター達の誇りを汚さない為に、心に決めていた事だった。

そんな半蔵に月影は呆れると、言葉を述べる。

「お前は馬鹿か？ コイツらは一夏って言うガキを求めているんだぜ？ それにコイツらは使えろと言ったのは、ある目的の為なんだぜ？」

「ある目で……」

「ふざけるな!! 化け物と一緒にいるお前達に力を貸すか!!」

半蔵が何かを言い掛ける前に箒が月影を拒絶する。

それを聞いた月影は鼻で笑うと、ある事を言い出す。

「何言っただ貴様？ お前達を助けたのは俺とブラックだ？ 言わばお前達の恩人だ——恩を返す為に働け」

「断る！ 私と千冬さんは貴様等に助けてくれと頼んだ覚えは無い！

それよりも私と千冬さんを解放しろ！ 私達にはやる事があるんだ!!」

箒の言葉に月影は「やる事だ？」と呆れながら訊ね、半蔵は首を傾げる。そんな二人を余所に箒は怒りながら言葉を続けた。

「あの女は一夏をダブらかした……否、それだけでなく一夏は何故か私を嫌っているのだ!! それもあの女が一夏に抱き着いたからだ!!」
箒の言葉に半蔵と月影は解らないでいた。あの女とは楯無の事であり、二人はあの女が楯無である事に気付かないでいた。

「私はあの女を許さん……あの女だけでなく、一夏と一緒にいるあの二人もだ!! 一夏は彼奴等に唆されている!! だから私は……彼奴等を始末する!! だから私と千冬さんを解放しろおおつ!!」

「篠ノ之の言う通りだ!! それに一夏は私の物だ!! 一夏を助ける為に私達を解放しろ!」

箒と千冬は半蔵と月影、ブラック達に自分達を解放しろと叫ぶ。それはまるで、一夏を求めるような言動だった。

二人が一夏を求める理由——どちらも孤独な日々を過ごし、一夏を求めるあまり歪んだ愛情を向けてしまったのだ。

彼女達が悪い訳ではないが彼女達の過去は同情出来るかも知れない。しかし、半蔵達は箒の過去を知らない為、半蔵達から見れば彼女達が何を言ってるかは理解できないだろう。

しかし、月影は何も言わずに呆れていた——否、彼は最初から彼女達の事を知っているようにも思えた。

刹那、月影はある事を思い出し、それを半蔵に指摘した。
「そう言えば半蔵? お前は確か、ある女を殺すつもりだったろ?」

月影の言葉に半蔵は不意を突かれ「つ!」と言葉を詰まらせる。一方、月影は笑っていたが千冬と箒は何も解らないでいた。

「ど、どういう事だ貴様等!? あの女とは誰の事だ!」
箒が月影達に訊ねると、月影は呆れながらも喜びの表情を浮かべ答えた。

「ああそうか? 確かお前等知らなかったんだな? まあ無理もねえよ? お前達を拉致したのは、ある女を殺して貰う為だよ?」

月影は笑いながら言った後、その殺して欲しい者の名を言った。
「確か、更識楯無だっけ、な?」

月影の言葉に千冬は目を見開き、箒は「なっ!？」と叫ぶ。そんな二人を他所に月影は言葉を続ける。

「確か更識楯無だっけ? 俺達は今、そいつを抹殺の標的としているんだぜ? まあ、俺達は女を殺せないから困っているんだよ?」

月影は笑いながら、二人に説明する。しかし、月影は楯無を二人に殺させるのと、千冬と箒を仲間にする理由は二人を利用する為でもあった。

この二人は一夏に歪んだ愛を向けている。それならば彼女達を利用して一夏を奪い、周りの奴等を殺して貰おう。

向こうは彼女達は人質だと思いがそれに敵意を剥き出しにされたのならば、向こうは戦うしかないだろう。

箒は兎も角、千冬は強いし何とかなるだろう。もし駄目なら用済みと見なし殺せば良い上、向こうは弱っている間に殺せば問題ない。

つまり月影は、千冬と箒に奴等を始末をさせ、尻拭いは自分達がやれば良い。そう考えていた。

月影は彼女達を仲間や人質だけでなく利用価値のある人駒として使おうとしていた。

「コイツら使える——それに、ブラック達が自ら手を汚さなくても、コイツらならやってくれるだろうな?」

月影の言葉に半蔵は目を見開き「貴様」と怒りながら月影に歩み寄る。近づいた刹那、半蔵は腹に激痛が走る事に気付く。

——ガハアッ!? ——。半蔵は腹を押さえる。それは半蔵が月影に腹を殴られたからであった。

それも生身の物ではない——月影の腕は、身体は、月影自身が半人間であり、半分サイボーグであるからだ。

その為彼のパンチは生身の人間なら激痛でしかない上、最悪の場合死にかねないからだ。

半蔵は腹に走る激痛に耐えきれず膝を突く。刹那、生き物の咆哮が辺りに木霊し、何者かが月影に迫り、月影を殴り、月影は吹っ飛ばされる。

月影は壁に叩き付けられるが、横向けに倒れる。

殴ったのは、ファルコナーだった。ファルコナーは月影が半蔵を殴った事に怒り、月影を殴ったのだ。

ファルコナーは唸り声を上げながら、月影に迫ろうとした。

「止せ、ファルコナー……！」

そんなファルコナーを半蔵は腹に走る激痛を堪えながら言葉で制止させる。

これにはファルコナーも止まるが、ファルコナーは半蔵を見て、半蔵に歩み寄り、半蔵の肩に手を置く。

ファルコナーは半蔵を心配していた。だが、半蔵はファルコナーを見て微笑む——それはまるで作り笑顔にも思えたがファルコナーはそれを見て何も言わず、月影の方を見る。

ファルコナーは月影に殺意を抱いていた。そうなるも無理はない——月影は半蔵を殴ったからだ。だからこそ、ファルコナーは月影を殴ったのも無理はないだろう。

そんなファルコナーを他所に、月影はゆらゆらと立ち上がるとファルコナーを睨む。

「クソが……だが今は、やる事があるがな？」

月影は何事も無かったように立ち上がると、千冬と箒の二人に訊く。二人はさっきの行動に戸惑っていたが月影は不敵に笑う。

「更識楯無を殺したくねえか？ ……彼奴を殺せば一夏って奴を取り返す事が出来るぜ？」

——っ!? ——。月影の言葉に千冬と箒は言葉を詰まらせる。楯無を殺し、一夏を取り返す事が出来る。

それは二人から見ればまたとないチャンスだった。一夏を自分達の元へと置ける事が出来る。

しかし、月影の言葉には信用は出来ないが今の二人には一夏を取り返し、自分達の元へと起きたかった。

二人は一夏に歪んだ愛を向けている。二人は孤独に、辛い日々を過ごして来た。箒は六年、千冬は三年間孤独に過ごして来た。

その為、今の自分達には一夏が必要だった。彼、一夏なら自分達を救ってくれる。

なのに彼は、自分達を拒んでいる。そうなったら自分達は……二人は一夏を失う恐怖と、一夏を得たいが為に決意した。

「私は一夏が欲しい……その為には修羅にだつてなつてやる！ 私をお前達の仲間にしてくれ！」

「私もだ！ 一夏の隣に相應しいのは私だ！ その為なら私は全てを失つてまで一夏を手に入れる！」

二人は月影に答えた。答えは彼等の仲間になる事だつた。それは間違い、それは利用される意味にも近かつた。

だが今の二人にはそれは関係なかつた。二人は自分達の孤独を忘れようとしていた。

「こ、コイツら……本気なのかよ？」

そんな二人に半蔵は驚きを隠せない。間違っている——そんなのは彼や彼女達の為にはならない。

そうなつたら、彼女達は一生、一夏と言う者に嫌われる。そうなつたら束縛する危険もあるし、彼女達も殺されるのかも知れない。

半蔵はそう思うと、二人に恐怖よりも助けたい衝動に駆られた。この最悪な結末だけは避けたい——そして渡だけでなく、彼女達も助けたい、と。

半蔵はそう思うと下唇を噛み、辛そうに俯いた。そんな半蔵を他所に、月影は不敵に笑っていた。

一人は彼女達を助ける為、一人は彼女達を利用する為、彼女達は想い人の為に悪の道へと走ろうとしていた。

しかしそれはどういう結末をたどるのかは、彼等の今後の行動のみだろう……。

第113話

勇人は今、危機的状況に陥っていた。と、言うよりも、今、物凄く不機嫌でいた。

何故なら勇人は今、小柄で銀髪に紅い瞳かつ、片方は眼帯を付けている少女に殴られそうになったのである。

何故なら、その少女は勇人に怒りを覚えていた。その怒りは八つ当たりにも近いが少女は、勇人に八つ当たりしたのは仕方ない事だった。

周りは、真耶や七人目の男性操縦者は固唾を呑む処か、震えていた。しかし、そうなるのも仕方ない事だった。

そして、少女は口を開き、こう言い放つ。

「貴様が、貴様等が教官を!!」と。

時は一日前、此所は止がいている保健室。此所には勇人、止、本音、虚、簪の五人と束がいた。しかし、彼等の表情は戸惑いを見せていた……勇人を除いては。

「それでモノレールに乗っていたちーちゃんや箒ちゃんは何者かに連れ去られた……でも、近くには、頭部の無いISを纏った女性の死体が二つあったみたいだよ?」

束の言葉に勇人を除いた者達に動揺が走る。そうだろうか? 頭部の無い死体があるとすれば猟奇的殺人と思える上、吐き気をも促す様な物だ。

それを一般の、しかも未だ成人にも満たない子供から聞けば尚更悪い。その証拠に少女達は少し口を押さえていた。一方で勇人は頭部の無い死体に違和感を感じていた。

そんな殺し方は……もしかすると、と、勇人は推測した。そして、勇人は束に訊く。

「束さん、頭部の無い死体には血は出ていましたか?」

「えっ? 否、血は出ていなかったよ?」

「そうですか……ならいんです」

勇人は少し考える様に俯く。勇人は推測した。頭部の無い死体に血は出ていない——恐らく、だとすれば……。

——仕方ない——。勇人は小声で呟くと、頷き、保健室の扉の方へと向かう。

「勇人、何処行くの？」

そんな勇人に止が呼び止め、勇人は足を止めると、振り返る。勇人は表情を険しいままにしている。が、そんな勇人に束や簪達は疑問に思っているのか少し不思議そうに見据えていた。

「何処か行くの？ トイレ？」

「……否、ちよつと、お手洗いだ」

勇人は表情を緩めると、束の方を見ると、止を頼みます、と言い残し保健室を出た。

「……………」

保健室の外——つまり、廊下には誰もいなかった。恐らく授業中か単に居ないだけかは判らない——それでも、勇人には関係なく、好都合でもなかった。ふと、勇人は歩き始める。

勇人は、あの推測を、頭部が無死体の謎を解明するべく、ある人物に接触しようとしていた。

その人物はエンフォーサープレデター……この学園の森の奥にいるプレデターである。

そのプレデターは何故学園に居るのかは判らない。が、勇人は、頭部の無い死体を作り、彼女らを殺害したのは他のプレデターではないかと推測していた。

だとすればエンフォーサーがプラズマキャノン砲を渡してきたのも、エルダーがそう命令したのも、全て、その別の何かのプレデターが居るのではないかと思ひ、それを渡してきたのだろうか？

否、その推測は本当かどうかは判らない——判るとすれば、彼に全て接触すれば解決に等しく、そしてその推測を裏付ける理由もあった。

少し前、この学園に襲撃してきた二人の男性操縦者。一人は止の

弟、霧崎渡——もう一人は、月影と言う者。

何方も装備は違えども、自分達と同じ機体と良く似ている機体を身に纏っていた。

恐らく、その機体を造ったのは……刹那、勇人の腕から音が聴こえ、勇人は立ち止まり、音が聴こえる方の腕の、制服の腕部分を捲る——コンピューターガンレットがあった。

音の正体はそれだったがその音は誰かからの連絡をも意味していた。

勇人は音の正体に驚いてはいなかったが何故か出ようともせず、軽くボタンを押すと、再び歩き始めた。

勇人は気付いていた、その連絡主は一夏であろう事に——。しかし、勇人はあえて出ない方を選んだ。

一夏は恐らく、モノレールでの事件に気付いたのであろう。それは事件であり、報道もされている。

それも千冬や箒が乗っているのと、彼女等が誘拐された形でいなくなったのと、頭部のない死体にも気付いたのかもしれない。

連絡してきたのもその為だろうが勇人は応答しなかった。否、しなかったのではなく、したくないと言い換えれば良いのかもしれない。

勇人は一夏に連絡しないのは勇人自身が彼を気遣っていたからだった。

彼は、一夏は充分と言える程、疲れている。彼は身内や幼馴染の件で傷つき、更には自分や止が傷付いている事でも自分を責めているだろう。

それに彼は今、楯無と一緒に彼女の屋敷で静養している。それを彼に連絡するのは、彼の静養を、安らぎを奪う様な物だ。

それだけは絶対にしたくない。彼は自分の親友であり、ライバルでもある。

彼を使うくらいなら、自分で解決する。彼の手を煩わせるくらいなら、自分が全てを背負おう、と。

それは間違った選択でもあるが彼は、勇人はそれでも良かった。彼には身内がないのと、そして自分には名字がないのは、自分は元々、

名字その物が無かったからである。

その為、彼には喪う物はなかった。が、出来る事なら、親友達の為にも、自らを犠牲にもする覚悟はあった。

そして、勇人は何時の間にか学園を出て、森がある所まで来ていた。

人は考えている間に何かをし終えているという事は聞いた事があるがそれが本当の様にも思えた。

勇人はその理論的な事を信じるか信じないかは自分でも判らなかつたが森の中へと足を踏み入れ、森の中へと消えていった……。

「勇人、勇人！」

その頃、更識家の屋敷では一夏が腕に付けているコンピューターガントレットで学園に居る勇人に連絡を繰り返していた。

しかし、彼からの応答は無く、無駄にも等しかった。否、勇人自身が彼を、一夏をこの件から遠ざける形で、彼に連絡に応答しない形で無視していた。

が、一夏は彼、勇人の気持ちを理解していないのではなく、彼自身の思いに気付いていないからだだった。そんな彼、一夏を、近くにいた楯無は心配そうに見ていた。

何故なら彼女は一夏の行動に戸惑いと心配を隠せないでいる。それもその筈、二人はついさつき、モノレール襲撃事件を龍三から聞かされ、知った。

それだけでなく千冬や箒が何もかに連れ去られ、二人の頭部の無い死体と海では機体を纏った女性達が何者かに殺害された形で水死体となって発見されると言う悍ましくも猟奇的殺人襲撃事件が発生したのだ。

それは瞬く間に報道され、ネットでも話題となりつつあった。そんな猟奇的でもありながら、千冬と箒と言う有名人が連れ去られた事はマスコミには恰好のネタでもあり、逆にネットでは猟奇的殺人の方を気にしていたのだ。

一夏から見れば別の何かが襲撃したのと、一夏は頭部の無い死体に

何かに気付いた。それを一夏は、勇人が止に連絡して気をつけるのと、

あまり迂闊な行動をしない様に釘をさすつもりで連絡したのだ。

止は一夏の命令に頷く一方で、勇人は何故か応答しなかったのだ。一夏は勇人に連絡を入れ続ける一方で、楯無は一夏を見て慌てて止める。

「い、一夏君！ もう止めて！」

「っ、か、刀奈？」

楯無の言葉に一夏は我に返り、楯無を見る。楯無は辛そうに、そして心配そうに一夏を見ながら口を開いた。

「い、一夏君……これ以上は止めて……そ、そんな事をして、何も変わらない」

「だ、だけど、は、勇人が、それに止は重傷で動けないのに……彼奴らに何か遭ったら……どうなるんだよ!？」

一夏は冷静さを失っていた。何故なら一夏は二人が、勇人と止に何が遭ったら、自分はリーダーとして失格になる……。それに彼等は自分の親友でもあり、それが千冬か箒にな何かをされたら、殺されたら、自分はどうかなってしまう。

一夏はそう思うと心配と自分の関係している者達が殺されたらどうなる？ そうなれば自分は……自分は。

「……………」

一夏は俯くと頭を抱えた。一夏は疲れていた。度重なる不運と傷ついていく仲間達——全てとは限らないが全て自分が招いた種。最早、自分が居ればもつと沢山の悲劇が生まれる。

それも全て自分のせい——彼、一夏はそう思うと、悔しい想いで涙を浮かべ始めた。

「う、うぐっ……………」

「一夏君……」

そんな一夏を楯無は優しく声をかけると、静かに一夏に寄り添う。楯無は気付いた。彼は、一夏は疲れているのと自分を責めている。

これには楯無も気付くが彼女は暗部の人間。人の気持ちを知らず

も教えられた為に、彼の気持ちも理解した。

それは功を奏したのかは判らない——が、楯無は一夏が泣き止むまで傍にいた。

そして、楯無の部屋は一夏が泣き止むまで、一夏の泣き声が木霊し続けていた。

第114話

「……………」

満月が見えるその夜、此所は更識家の屋敷にある縁側。そこには、一夏が縁側に座りながら寂しそうに夜空を眺めていた。しかし、彼は私服ではない——彼が来ているのは軽い白の浴衣だった。

彼はついさつき、更識の面々と共に食事を済ませ、入浴も済ませたのである。が、その時の一夏は周りには平然を装っていたが内心は震えていた。

千冬や箒の事、傷ついた止や鈴の事、そして未だ連絡が来ない勇人の事もあった。何れも一つずつ片付けるのは難しく、無理にも等しい。

それだけではなく彼はリーダーとしての自身も失いつつあった。何がリーダーだ、自分はリーダーらしい事はしていなく、逆に彼等を傷付けているじゃないか。

一夏はそう思うと、自分に怒りとやるせない気持ちを抑えきれなかった。最早自分にはリーダーとしての資格は……刹那、一夏は近くから人の気配がし、気配がした方を見ると、そこには楯無が居た。

楯無は白の浴衣を着ているが何処か凛々しく、私服姿とは違い何処か色っぽく何処か可愛らしいが逆に表情は何処か寂しそうで何処か悲しそうに笑っている。

「一夏君、風邪引くよ?」

「楯、刀奈……」

「そこ、隣、良いかな?」

楯無の言葉に一夏は俯くが楯無は許可無く一夏の隣に膝を折る形で座った。楯無の行動に一夏は驚いてはいないが未だ俯いていた。

満月は綺麗だった——周りには雲は無い。まるで、薄暗い地上に光を灯している様にも思えた。楯無は満月を見て、不意に呟いた。

「ねえ一夏君? あなたは平気なの?」

楯無の言葉に一夏は瞠目し、「えっ?」と言いながら顔を上げ、楯無を見る。楯無は満月を見ていたが一夏の方を見ると、言葉を続けた。

「一夏君、あなたは平気なの？ それに大丈夫？」

「えっ？ 何がだ？ それに俺は大丈夫だぜ？」

一夏は少し笑う。が、そんなのは楯無には通用しなく、逆に楯無に不信感と心配を与えてしまい、楯無はそれを一夏に指摘した。

「嘘よ？ 貴方はリーダーとしての自覚を失いつつあるわよね？」

「えっ……っ」

楯無に指摘された一夏は少し悔しそうに俯く。楯無の指摘は正解とも言えた。一夏は今、迷いを生んでいた。

リーダーとしてではなく、身内や知り合いの関係で親友達を傷付けられ、更には知らない敵の存在と、自分を育ててくれたプレデター達の真の理由。

どれもリーダーでありながら判らないのと、疲れしかなかった。最早、自分は疲れきっていた。出来る事ならこの現実から目を背けたい——、一夏はそう思ってしまった。その証拠に、一夏は震えていた。

「一夏君……」

刹那、一夏の手を誰かの手が優しく掴む。勿論、その手の主は楯無だった。一夏は楯無を見て驚きはしなかったが力無い声で「刀奈……」と呟いた。

「一夏君……大丈夫よ、貴方は一人じゃないわ……皆が居るし、私も居るわ……それだけじゃない、貴方は勇人君や止君の親友であり、リーダーでもあるのよ？」

「だけど、俺は彼奴らが傷ついたので自分のせいだと思っている……！ そ、それに俺はリーダーじゃない……！ お、俺はもう、親友を一人も助ける事も」

「助けてるわ！」

一夏の言いたい事を遮る様に楯無は静かに叫び、それを聞いた一夏は少し驚くが楯無は言葉を続ける。

「一夏君、貴方は助けていないと言ってるけど、貴方は助けているわ……その人達は簪ちゃんや鈴ちゃん、勇人君に止君、篠ノ之博士やクロエちゃん、ビシヨップさん——それに私も助けたのよ？」

「お、俺が皆を助けた？」

「ええ、貴方は私達を助けたわ——止君は火事で動けなかった彼を貴方は助け、勇人君は判らないけど、篠ノ之博士や鈴ちゃんも貴方が死んだと思っていたけど貴方が生きていた事には喜び、クロエちゃんには料理を教え、そして私と簪ちゃんには……」

刹那、楯無はそこから言葉を嚙み、俯く。それを見た一夏は心配そうに見つめるが楯無は顔を上げ、一夏を見る——目には涙を溜めていた。

「私達姉妹の壊れた絆を直してくれた……ううん、それだけじゃない、私が辛い時には少しでも助けてくれた……それに貴方は誰よりも優しく、誰よりも他人を心配する人——私は、いえ、私は貴方に感謝し、そして惹かれた……」

楯無は泣きながらニツコリと笑う。それは楯無の一夏への想いを綴ったような内容だった。彼は誰一人助けていない訳ではない——彼は既に僅かに沢山の人を助けていた。

勇人、止、鈴、東、布仏姉妹、クロエ、簪、そして——楯無を助けていたのだ。彼が彼等彼女らを助けたのは彼が優しいのと、彼自身が復讐に駆られながらも人としての情を忘れていなかったのだ。

簪が誘拐され、楯無が犯されそうになった時も彼は怒りを隠しきれなかった……。クロエが東の為に美味しい料理を作りたいと言った時も、彼は彼女の為に料理を教えてくれた。

止が火事に巻き込まれ死にかけた時も助け、渡との件で困った時も気にかけて、セシリアを助けたと言う強い気持ちにも賛同してくれた。

鈴に再会したのも彼女の為に逢ったのだ。

楯無——刀奈には一夏を人殺しにしてしまった時やロシアの件で弱気になった時も少し嫌そうにしながらも気にかけて、助けてくれたのだ。

一夏は誰も助けていない訳ではない——彼は既に、沢山の人を助けている。彼自身が気付いていなかっただけであり、そして彼自身が何時の間に行っていたからであった。

そしてもう一つ、彼の目の前に居る少女、楯無は一夏にある事を言った。

「一夏君……貴方がリーダーじゃなきゃダメよ……勇人君や止君のリーダーは貴方だけ、それに貴方が弱気になったら二人は心配するし、貴方がリーダーの座を降りても、他の二人に譲っても、二人はこう言うわ——「リーダーは一夏、お前だけだ」って」

「二人が……そう言うのか？」

楯無は深く頷く。

「ええ……一人ならそう言うわ……リーダーは貴方だけ……そ、それに私は貴方が必要、なのよ……」

楯無はそう言うのと、一夏の肩に頭を置く——僅かだが彼女の表情は少し悲しそうだった。

「それに私はあなたが好きなのは事実だけど、私はこうしたい……」

「楯無……ふっ」

一夏は楯無の行動に戸惑うが直ぐに悲しそうに笑うと、開いた方の手で楯無の頭を撫でる。彼女の髪からはいい匂いがした。それだけでも一夏の行動に楯無は嬉しそうにしていた。

が、彼女は少し震えていた。これには一夏は気付かない訳ではなかった。

「どうした？」

「怖いのよ……？」

「えっ？」

楯無の言葉に一夏は驚くが楯無は言葉を続けた。

「怖いよ……貴方がこれ以上、自分を責めるのは……それに今は、この時間を、この時だけは忘れて……」

「刀奈……」

「お願い一夏君、今は私が居るから、今は、この時だけは……！」

「刀奈……」

一夏は戸惑うが楯無は引かなかった。楯無は一夏が好きであり、彼とは恋人同士であり、恋人である彼がこれ以上辛い出来事ばかり遭う事が楯無には許せなかった。

出来る事なら彼の傍に居たい……更識楯無ではなく、更識刀奈として……少女は淡い気持ちを彼、一夏に願っていた。

そんな彼女に一夏は戸惑うが彼は少女の切なる願いを聞き入れる形で横抱きするが彼の表情は晴れなかった。

今の彼にはリーダーとしての自身だけでなく、彼女の辛い思いや彼女の女心を理解出来なかった……そして、彼はますます判らなくなっていくのを、彼自身も気付いていた……。

地上が闇夜に包まれる中、たった一つの希望の光とも言える満月が照らされる中、二人の影は一つになっていた。

「……………」

その頃、学園近くの学生寮の勇人と止が共同して生活している部屋では、勇人が自分が使っているベットに腰掛けながら険しい表情を浮かべていた。

が、彼が険しい表情を浮かべていたのは、彼が数時間前——森の奥でエンフォーサーに逢い、そして彼から全ての話しを教えられ、それを聞いた勇人は怒りしか沸かなかった。

プレズマキャノン砲を渡してきたエルダーの目的、エンフォーサーが地球に来た目的、そしてその二つが意味する事は、自分や一夏、止に関わる重大な事。

それは絶望を与え、世界を震撼させる様な出来事、それが世間に知られれば、自分達は立場や命さえも危うい——勇人は、この事実を先に知った事に怒りと後悔を覚えながらも彼は、この事実を一夏や止には言えなかった。

言えば彼等は絶望するだろう——それだけはしたくなかった……。

「ちっ……」

勇人は舌打ちすると、そのままに転がる。最早逃げ道は無い……勇人はそう思ってしまうと同時に、目を閉じた。

何故なら彼は今日の出来事を忘れたいのと同時に、早く寝るつもりだった。

寝る理由としては彼は夜で行動する事が多いのと、彼がこの事を誰にも話さない理由としてだった。

そして彼は知らない——翌日、銀髪の少女に怨まれ、金髪の生徒にはやましい事をする事に……。

第115話

「半蔵さん……」

「言うな……それ以上は」

あれから少し経った後、ここは東京の郊外にある廃墟。そこには半蔵と渡の二人がいた。彼等は筆舌しがたいものであるが視線の先には二人の女性と少女がベッドで横になっていた。

織斑千冬と篠ノ之箒の二人だった。何方も寝息を立てているが表情は険しくも哀しい。理由は簡単、織斑一夏に拒絶されたからだ。同時に色々遭って拘束されたのだが月影により救出され、この場所へと連れて来られた。

そして今は仲間として迎え入れられたのだが一夏を理由かつ、更識楯無をどうにかする事が条件だった。

「とは言え……どうも納得いかん」

しかし、半蔵は頭を抱える。幾ら一夏が欲しいとは言え、自分達の仲間になるのはどうかしている。自分達の傍には危険な捕食者がいるのだ。それも、彼等と一緒にいる奴等よりはタチが悪いのだ。

彼女達が彼を取り戻したいのは勝手だが殺される未来しかない。今は寝ているがそれは半蔵が疲れたから寝とけと言ったのだ。彼女達は不審な目で彼等を視ていたが半蔵はある武器で、彼女を寝かした事は黙っておこう。

しかし、今は半蔵は彼女達の事を考え危惧しているが、不意に渡の方を視る。

「だが……渡」

「……いえ、これ以上は言わないで下さい」

半蔵は何かを悟ったように渡に訊ねると、彼は何も言わずに目を閉じると、下唇を噛みながら俯く。彼は知っているのだ。兄、止が刺された事を、千冬自身の口から。

それは愕然だった。同時に倒すべき憎悪が倒せない事……否、半蔵から視れば、兄が死ぬ事に躊躇しているとしか思えなかった。彼の兄は生死の境を彷徨っている。

最悪、死ぬかもしれないが渡から視ればどうだろうか？ 千冬は仇かつ、憎しみしか抱かない。そんな彼を、半蔵は心配していた。自分達の中では新参かつ、彼女等の先輩である。

教える立場……未だ早いだろうが今は渡の事が気がりでもある。半蔵は彼を心配そうに見ていたが溜息を漏らす。

「ふう……渡、暫くの間、お前は活動を自粛しろ」

彼の言葉に渡は瞠目し、彼の方を視る。彼は気まずそうに俯いているが視線を彼の方へと向ける。

「今のお前は止が刺された事で私情に駆られる危険がある」

「そんな!？」

「そんな状況でお前を前線に出せばどうなる？ 俺達の立場は、命は危うくなる」

「それは有り得ません！ 僕は……!」

「では何故、俺のいない隙を狙って学園を襲撃した?」

彼の言葉に渡は言葉を詰まらせる。そうなのだ、実は渡は学園を襲撃した際、学園を襲撃したのだ。同時に、あの赤い機体は束が一夏、勇人、止の三人のISの性能を上げる意味で襲撃させたのだがそれは渡により軽く一捻りされてしまったのだった。

しかし、渡が学園を襲撃した事に変わりはなく、月影の手を患わせ、半蔵を困らせた事にも変わりはない。半蔵は彼にその事を指摘するが渡は何も言わなかった、言い訳もなかった。

「渡、お前は霧崎止、お前の兄を倒したい事には変わりはない事は判っている……だがな」

半蔵は渡の肩に手を置く。

「お前は若い、その命を散らすな。大抵の事は俺と……奴が何とかする。それに、ブラック達もいるが今は周りを看てくれている」

「……………」

「お前はいざと言うとき以外、前線に出るな……勿論、お前の背中を預ける奴はお前に手解きは怠らない上、強くさせてくれる」

「……半蔵さん……っ」

渡は下唇を噛みながら肩を震わせた。悔しいと思えるが彼の言い

分は正解とも言えるのだ。が、半蔵は渡を心配しているからでもあつた。彼はその事にも理解しているが不意に声が聴こえた。

それは唸り声でもあるがベッドの方からだった。彼等は声がした方を視ると、千冬が起きたのだ。

「う……………うん……………っ!？」

千冬は目を覚ますが我に返る。

「此処は……………あっ!？」

千冬は半蔵と渡に気付くが歯を食い縛る。

「っ……………お前達!？」

千冬は二人に警戒する。何故なら、彼等に連れて来られた事に根を持って更識楯無を抹殺する事や、一夏を取り戻す事の為に共闘しているのだ。

が、今は警戒しているのだろう。千冬は二人を睨む中、半蔵は溜め息を吐く。

「ハア……………もう大丈夫か?」

刹那、半蔵は呆れたように訊ねる。その言葉に千冬は歯軋りする。

「ああ、だが……………」

刹那、半蔵は彼女の口を手で押さえる。これには千冬は驚くが彼は哀れみな目で彼女を見詰めていた。

「……………それ以上は言うな」

半蔵はその先を言わせなかった。千冬は瞠目するが半蔵は先を続ける。

「あの時は、気が動転してたんだろうよ……………お前は織斑一夏を求めたいが為に周りを視てなかった。ソイツの意見は愚か、お前はしてはいけないことをしてしまった」

「……………」

千冬は彼を憎しみが籠った目で見ているが彼女のした事は赦される物ではない。一夏達を傷付け、止を刺したのだ。否、一夏を求めるが余りの行動だろうが今は違う。

今は半蔵が彼女に対して、理由を問っているだけであり、指摘でもあるのだ。

「兎に角、今のお前は織斑一夏を求めている上、何をするのかは目に見えている……まあ、月影が連れて来たとは言え、俺にも非が有るからな」

半蔵は千冬の口元を押さえていた手を下ろすと、髪を搔く。

「……何が……」

「うん？」

千冬の言葉に半蔵は気付くが千冬は涙目で彼を視ていた。

「お前に何が解る……私は一夏が心配だからだ!!」

彼女の言葉に半蔵と渡は肩を震わす。が、千冬は泣きながら怒っている。彼女は一夏を求めていた。自分は一夏の事を考えていなかった。彼の事を気に掛けてやれなかった。

その為、彼女は一夏が生存していた事に喜びながらも、彼の為に何かをしようと思った。同時に一対一で話をしようにも彼は拒絶していた。

当たり前とは言え、彼女は引かなかった。どうしても和解したかったのだ。が、それ等は全て最悪な物となってしまうのだ。

「私は一夏が欲しい……その為には幾多の障害が遭ったとしても私は一夏を手に入れる……!」

千冬は半蔵に詰め寄る。

「その為にはお前達の力を借りる! お前達なら私達の宿願を果たせる! お前達は私達の為に……!」

「巫山戯るな!」

刹那、半蔵は叫んだ。その言葉に渡と千冬は肩を震わせるが半蔵は怒っていた。千冬の言葉には自分達をどうだって良いと思えないう発言とも感じたからだ。

自分達は彼女達の駒じゃない、道具でもないからだ。

「……お前、俺達を何だと思ってやがる……! 俺達はお前達の駒じゃない! お前達の為に動く義理もない……!」

「それは違う……私は一夏が欲しいからだ! その為に」

「それが可笑しいってんだよ!」

「なっ……!?!」

半蔵の言葉に千冬は驚くが半蔵はその事を指摘する。

「俺達は勝手に動くわけにはいかない……！ それに俺達は何時死んでも可笑しくはない状況にいる……お前の為に動いて死ぬのはご免だ……！」

半蔵はそう吐き捨てた後、身を翻し、その場を離れるように歩き出す。

「渡……部屋に戻るぞ……」

途中、渡にそう言うが彼は戸惑う

「えっ……でも」

「……」

渡は彼を視るが背中を向けていた。彼女の発言に怒りを感じているようにも思えた。渡はその事を察知するが不意に千冬の方を視る。

彼女は目を耳開いていたが辛そうに歯を食い縛ると俯く。涙を浮かべているが流しているのだった。渡はその事に気付聴こえを上げようとした。

しかし、それは出来なかった。止を刺した事もそうだが信用している訳でもないからだった。彼女は一夏を求めているがそれは知った事ではないのだった。

「……だが、アンタ達を見捨てる事はしない」

刹那、半蔵の方から声が聴こえた。その発言に渡と千冬は目を見開き、彼の方を見やる。彼は肩越しで千冬を見ているが目を細めたままだった。

「は、半蔵さん？」

「……な……」

渡は驚きつつ声を上げ、千冬は何かを言いたかった。が、半蔵は不意に哀しい視線を千冬に送る。

「俺は……お前が彼を求めている理由は知らない……だが、俺はお前達を見捨てない……それに、何か遭ったら俺に言え……話だけは聴いてやる……それだけは覚えておけ」

半蔵はそう言った後、前を見るとその場を離れるように歩き去っていた。渡は彼の発言に驚くが慌てて彼の後を追いつけた。

「……あ、ああっ……」

一方で、千冬は何故か嗚咽を上げた。彼の言葉に何処か救われたようにも感じられたのだ。何かまでは判らないが彼は自分達を見捨てないと言ったからだ。

自分は一夏が欲しいだけなのに……たったそれだけなのに、だった……。

第116話

翌朝、此処はI S学園の一年一組の教室。室内は今、重苦しい雰囲気包まれていた。

それは、このクラスを受け持ち、教えてくれる女教師が不祥事を起こした事だった。それは衝撃を与え、戦慄させている。それは織斑千冬が止を刺した事だった。

あの有名な人物の不祥事がそれであり、被害者でもある止が死ぬかもしれない。否、それは過去形であり、今は現在だ。現在は止は一命を取り留めており、療養している。

しかし、一夏と箒は居ない。一夏は更識家で静養する事となり、箒は退学処分を下された。が、千冬と箒は行方不明となった。それだけでも周りは気になるのかヒソヒソと話をしていた。

しかし、これから先、どうなるのかと不安を隠せないからだ。

「……………」

そんな中、教室のとある席には、一人の青年が瞑目しながら腕を組んでいた。周りの心配とも捉える会話に耳を傾ける気配はなく、静かにその場を動かず、待機しているだけだった。

しかし、内心何を考えているのかは彼にしか判らない。同時に彼はこの先、一人で戦わなければならぬのだ。一夏は更識家にて静養しており、止は病室で待機している。

何方も前線から離脱する意味で居ない。その為、勇人が一人で学園生活を過ごす意味にも近いからだ。周りは千冬や箒、一夏や止の事で戸惑う中、話題を変える事はしないで行く。

否、これと言った話題が無いからだ。周りは一夏、止、箒、千冬がいない中で困惑する中、チャイムが鳴った。それは話題を変える意味か、終わらせる意味かまでは判断出来ないが一旦停止する意味でも良かったのかもしれない。

周りはチャイムが鳴る中、席に着き始める。ゾロゾロとだが勇人は席に着いたままであり、動く事はしなくても良かった。すると、扉が開き、一人の女性が教室に足を踏み入れる。

真耶だった。彼女は、千冬のあの件で色々遭ったがある人物により、担任となった。副担任はある人物が受け持つ形になっているが今は不在であり、居ない。

周りは真耶を見やるが視線は困惑が籠められていた。彼女達は真耶を信用していない訳ではない、これから先の事を考えているからだろう。

「み、皆さん……」

真耶は周りの視線に気付くが彼女だって困惑しているのだ。まだ間もないにも関わらず、担任となったからだ。重荷でもあるが今は別の意味でも大変だった。

彼女達、このクラスの生徒達を元気づけるのが先だった。その為には……が、真耶は哀しい笑みを浮かべる。

「大丈夫です……皆さんは……」

真耶はそれ以上は言わなかった。否、かける言葉が見つからないのだ。自分達の級友である者達が色んな事で居ないのだ。

自分は彼等の代わりになる事は出来ない。

しかし、彼女の不安を拭う切っ掛けはあるのだ。それも、明るい話題だった。

「実は皆さんにお知らせがあります……!」

刹那、クラス中に衝撃が走る。何か良からぬ物ではないかと思っていた。が、真耶は口を開く。

「実は、今日から、転校生が来ます、それも二人です」

更に刹那、周りはざわめく。否、驚愕と言い替えれば良いだろう。何故なら、不安の中で転校生が来るのだ。喜ぶべきか喜ばないべきかは彼女達には判断出来ない。

周りはその事で近くにいる者達と話をするがただ一人、それを気にもしない者が居た、勇人だ。彼は瞑目したまま何も言わない。話題に触れる気配もないからだだった。

逆に言えば、彼は一夏と止の二人の安否だろう。内心であるが彼は彼等を気に掛けているのだ。勇人はそう考えている中、真耶は言った。

「取り敢えず、お二人方は廊下にいます。入って来て下さい」

真耶は扉の方を視る。周りも一斉に扉の方を見やる。勇人はそのままであるが扉の開く音が聴こえた。すると、二人が教室の中へと足を踏み入れる。

「えっ!?!」

周りの驚く声が出た。愕然とも言えるがそれもその筈だった。二人の内、一人は十代前半の腰まである銀髪に赤い瞳、右目には眼帯を付けているが凜としている。

それはいいとして、もう一人が問題だった。その人物は腰までブロンドの髪をゴムで一つに纏めている。容姿はいい方であるが勇人は彼を視て眉を顰めていた。

周りは銀髪の少女、否、金髪の者を視て驚いているが二人は教卓の前に立つと、真耶が言った。

「お願いします」

二人に言った、自己紹介を促しているのだった。彼女の言葉に金髪の者は頷くと、周りを視ながら。

「シャルル・デュノアです。えっとわ、僕はフランスから来た男性操縦者です」

「お、男!!!」

彼、シャルルの自己紹介に周りは騒ぐ。男性操縦者? 驚愕でしかなかったのだ。フランスにも男性操縦者が居た。それは世界がひっくり返る程の衝撃でもあった。

周りはシャルルを視て驚く中、勇人は何か違和感を感じていた。が、それを咎める気配はなかった。片方の、銀髪の方から敵意の籠った視線を感じるからだ。

銀髪の少女は自分を見ている事に変わりはないが表情は険しかった。すると、彼女が勇人の方へと近づく。

「ラウラさん!?!」

真耶が銀髪の少女をラウラと呼ぶが慌てる。周りは彼女の行動に驚かないがラウラは勇人に近づくなり、勇人に対して叩こうと手を挙げる。

「あ……い！」

真耶が言い掛ける刹那、大きな音は……しなかった。ラウラが手を振り下ろす前に、勇人が彼女の手首を掴んだからだだった。同時に彼は力を入れて、手を退かす。

周りは突然の事で驚くが勇人は目を細めていた。

「何をする？」

勇人はラウラに対してい言った。しかし、ラウラは。

「貴様が……貴様達が教官を……い！」

ラウラは勇人に対して怒りを爆発させている。理由は教官、誰かまでは判断出来ないがその人物を尊敬しているからだだろう。しかし、勇人には心当たりはない。

怨みを抱かれる人物は沢山いるが……が、勇人は目を細める。怨まれるなら仕方ない事だが勇人は訊ねた。

「誰だ？ 教官って？」

「惚けるな！ 織斑千冬の事だ！」

刹那、教室内はどよめく。彼女の言葉が衝撃的でもあったのだが、勇人から視れば何とも思わない。あるとすれば、彼女が千冬の知り合いだと言う事だろう。

「貴様や織斑一夏達のせいで教官は居なくなつた！ 私が尊敬し、崇拜している教官をだ！」

「……それで？」

「なっ!？」

勇人は彼女の問いに何とも思っていない。否、関係無いと言わんばかりだった。が、彼は千冬がどうなろうと関係無かつた。彼女は一夏を求めている。

何故かは判らないが狭隘としか感じられなかつたからだ。普通に話をすれば良いのに、それを壊したのは彼女自身なのだ。勇人はそれをラウラに言おうとしたが彼女の逆鱗に触れている事に気付いてなかつた。

「キ、キサマー……っ！」

ラウラは怒りのあまり、殴り掛かろうとした。周りは彼女の行動に

驚く。

「ガアアアアあ!!」

刹那、彼女は悲痛の声を上げる。同時に勇人に掴まれている手を激しく動かしていた。何故なら、手首に激痛を感じているからだ。理由は簡単、勇人が彼女の手首を掴む手に力を入れていたからだ。

半分人間半分アンドロイドの彼はその自分の特殊な力を活かしてラウラの手首を締めていた。これにはラウラも悲鳴を上げるが離れる意味で身体を動かすが、勇人は目を細めていた。

ラウラへの怒り、だろう。干渉して来る事にだ。勇人はラウラに対して手を緩めない。周りは突然の事かつ、勇人の行動に気付く者や気付かない者達もいるが困惑している。

誰も止める気配はなかった。が……。

「や、止めて下さい!」

真耶がラウラを助ける意味で勇人を止めようとする。

「ダメです勇人君! そんな事をしては!」

真耶は勇人を止める。勇人は勇人でラウラの手首を掴み続けたが力を入れていた。彼女に対し、呆れと怒りが籠った視線を送っていた。

ラウラは激痛を感じているが勇人は気にもしなかった。周りは勇人の事で戸惑うが彼は。

「……………」

勇人は何かを思ったように視線を走らせる。その先には金髪の青年、シャルルが居た。彼は勇人を視て困惑しているが何処かよそよそしく感じた。まるで修羅場を視たようにも感じるが勇人は目を細める。

何かを隠している、そう気付いたのだった。同時に、ある考えも浮かぶが彼はそれを言わなかった。自ら確認した方が良い、と。勇人はそう考えている中、ラウラの悲痛の声は教室に木霊し続けていた。

第117話

「ふう……」

あれから数分後、一年一組の教室。周りはざわついていて千冬の件で不安になっていた。が、それ以上に、ある件で更に不安になっていた。

そんな中、その件に関わり、当の本人でもある勇人は一人、席に着いたまま溜息を漏らしていた。彼はさっきの事で呆れと怒りを感じていた。

自分は先ほど、ラウラ、否、ラウラ・ボーデヴィツヒに絡まれたのだ。彼女は織斑千冬を崇拜しており、それが理由で自分や一夏、止に憎悪を抱いている。

仕方のない事とは言え、原因は彼女にあるのだ。彼女は、千冬は一夏を求めているからだ。孤独が故でもあるが一夏は拒絶しているのだ。その結果、最悪の物となったが致し方ないだろう。

それにラウラは現在、真耶の付き添いの元、医務室にいる。絡まらないだけでも良しとする。同時に勇人はそう思いながらも二人の安否を気にしつつ、視線を走らす。その先には……。

「ねえねえ!? フランスはどんな所だったの!?!」

「男性操縦者は何時判ったの!?!」

「というか、生まれは何所!?!」

その先には、数名の女子生徒に囲まれている男子生徒、シャルル・デュノアがいた。彼は周りに対して質問の嵐を受けているが当惑していた。

「皆、そんなに言われても困るよ……」

彼は苦笑いしていた。周りの質問は普通でもあるが女子は噂好きかつ、知りたい事は知りたいのだろう。しかし、彼は聖徳太子ではない。彼は一般的な青ね……否、彼はそこまで考えた後、目を細める。

違和感を覚えていた。嫉妬ではないが彼は本当に男性操縦者なのか? と。もしも見つけなければ世界が仰天する筈だ。それが伏せられたのは怪しいと思えなかった。

彼を気遣ってか、或いは何か別の目的が有って、この学園に来たのか？ 勇人は彼を怪しみつつも彼に話しかける者がいた。

「はやはやく〜」

本音が彼に近づく。彼女の声が出た方に視線を走らせると、困惑した表情を浮かべている本音がいた。近くには二人の女子生徒もいた。蒼いボブカットに片方だけピンで止めている少女、鷹月静祢、紫の髪に黒い瞳の少女、相川清香もいた。

後者は兎も角、前者の彼女は止を発見してくれたのだ。彼女には感謝しているが彼はそれを言わず、敢えて本音に訊ねる。

「どうした？」

「あつ、う、うん……はやはやはどう思うの？」

「……何がだ？」

彼の質問返しに本音は戸惑う。彼女はある理由で彼に近づいたのだ。勿論、本音はそれを言った。

「彼、シャルルンの事だよ〜」

「……何？」

本音は視線をシャルルの方へと走らせる。彼や二人の少女も視線を走らせる。シャルルは周りの質問にひとつひとつ答えている。何時終わるのかは判らないが休み時間中に終わるかどうかも判らない。

勇人は彼を見ているが本音は。

「彼、フランスから来たんだよね〜？」

「ああ。それが何だ？」

勇人がそう言うと、本音は言った。

「どうしてっ……う〜ん」

本音は考え事をする。彼女も何かに気付いたのだろうか？ 勇人はそれに気付いたが彼は言った。

「奴は俺に任せろ」

「えっ？」

彼の言葉に本音達は目を見開く。彼を見ると彼は微かに表情を陰しくしていた。彼はシャルルを疑惑の目で視ていた。それは後から良かったのだが彼は別の話題を出す。

「それよりも、お前はどう思う?」

「えっ? 何が?」

本音は彼を見る。が、それは虚しくもチャイムが鳴ってしまった。これには四人も気付くが勇人は本音に対し。

「後で話す」

彼は彼女に対し、そう言ったのだった。

「フン! はっ!」

その頃、此処は更識家にある道場。そこはとても広く、多くの者が入るには充分過ぎる程だった。壁には竹刀等が飾られているが練習用でもあるのだろう。

そんな中、中央には一人の青年がいた。道場着を纏っているが手には独特な槍を持っていた。彼はそれを使って練習、否、槍術をしていた。

一つ一つ、無駄な動きはないが汗を沢山掻いていない。表情は険しいが練習の手を緩めない意味でもあった。そして、その青年は一夏だった。

彼は学園の生徒であるが千冬や箒の件で疲れ果て、更識楯無により、更識家で静養する事になった。が、彼はそれを破る意味で練習をしていた。

「たっ! はあっ!」

彼は槍を、スピアーで突き、払い、振り回す。そして、軽く振り下ろした。

「……っ」

一夏は軽く歯を食い縛った。彼はある事を思い出していた。それは少し前に学園に襲撃して来た者達である。一人は兎も角、もう一人が問題だった。

霧崎渡、霧崎止の双子の弟にして敵でもある人物だ。彼はどうするのかは勿論、此方側……否、現時点では難しいだろう。彼は止を憎み……刹那、この道場の出入り出来る横開きの扉から音が聴こえた。ガラガラと言う音が聴こえるが一夏は扉の方を見る。

そこには、タオルを片手に持っている少女、楯無がいた。

「刀奈……」

一夏は思わず笑みを零す。最愛でもあるが今の彼に取って、心の拠り所でもある。

「一夏君……此処にいたの？」

楯無はそう言いながら扉を閉めると、彼に近づく。その間に一夏はスパアーを片手に持つ。

「一夏君、静養してなかったの？」

楯無は彼にタオルを差し出ししながら訊ねる。一夏はタオルを手にとる。

「否、身体を動かしたくて、つい……ああ、龍三さんには許可を貰ったぜ？」

「そうなの？ お父さんったら」

楯無は父の行動かつ、許可した事に呆れるが一夏は軽く笑う。

「別に良いだろ？ 俺は……」

一夏は不意に暗い表情を浮かべる。彼の様子に楯無は気付く。

「一夏君？」

楯無は彼に尋ねる。すると、一夏は辛そうに話した。

「あいつ等は……俺がいない間に何かなければ良いんだ……」

「えっ……あつ」

楯無は何かに気付いた。彼は、一夏は二人の事を考えていた。霧崎止と勇人の二人をだ。彼等は一夏不在の間、学園にいるのだ。しかし、止は静養しており、今は勇人独りなのだ。

彼等は大丈夫か？ 何かされていないのか、と。一夏は彼等を心配しているが楯無は哀しい笑みを浮かべる。

「大丈夫よ……彼等は」

「……」

楯無は彼に気遣いの言葉を掛ける。その言葉に一夏は何の反応を示さないが彼は自分の立場に疑問を感じているのだ。自分のせいで彼等が傷付いた。

それは紛れもない事実であり、リーダー失格でもあった。しかし、

楯無はそれを気にもしなかった。否、彼の気持ちを痛い程理解しているからだった。

「……一夏君」

楯無は彼に優しく抱き着く。せめてもの慰めだった。そんな楯無に彼は何もしなかった。否、自分を追い詰めていたからだった……。

「ふう……色々遭ったな」

「ハハハ、そうだね？」

その頃、学園にあるアリーナ。その建物内にある着替え室では勇人とシャルルの二人がいた。彼等はISの実技の為にスーツに着替えているが彼等はその前に色々追いつけられていたのだ。

主に女子生徒であるがそれは置いといて、彼等は授業の為に着替えているが二人共、着替え終えていた。勿論、この場所を案内したのは勇人である。

「それにしても、君は凄いな？」

「……何がだ？」

シャルルの言葉に勇人は彼の方を視る。紺色の青いスーツを纏っているが華奢であった。身惚れる訳ではないが彼は不信感を抱いていた。彼は……勇人は彼を見続けていたがシャルルは言葉を続ける。

「だって君は周りに女子生徒がいる中で生活していたんでしょう？」

それって凄いなじゃないか」

「……俺だけだと思ってるのか？」

勇人は目を細めるがシャルルは気付く。

「あつ、い、否、そう言ってる訳じゃないんだ！ 僕はただ……」

「……ただ？」

勇人は舌打ちする。彼の様子がオドオドしく感じたからだ。しかし、シャルルは彼を見て微かに困惑する。彼を怒らせた、そう思っていた。

が、勇人はロッカーを閉めると、身を翻す。

「おい……貴様は何者だ？」

「えっ？」

勇人の言葉にシャルルは瞠目した。が、勇人は彼に近づく。シャルルは彼の様子に気付くが慌てて後退ろうとした。しかし、それは無駄だった。後ろはロッカーだからだ。

シャルルはそれに気付くが既に遅かった。勇人は直ぐ近くまで迫っていたからだ。そして、勇人は彼のスーツに手を伸ばし、そして……。

「っ!」

シャルルは目を見開いた。否、突然の事で戸惑い、恥辱していた。何故なら勇人の行動にだった。彼はとんでもない事をしたのだった。

彼は、勇人は力一杯、シャルルのスーツの胸部分を引き裂いたのだった。

シャルルは目を見開いたままだったが頬を真っ赤にさせている。彼女の、胸部分には白い肌が露出するが乳房も露になっってしまう。しかも、薄いのではなく豊満であった。

男である筈の彼女とは思えない程、大きいのだった。それだけでは、シャルルは顔を真っ赤にしているのも恥じらっているからだ。た。

「貴様……嘘をついたな？」

勇人は舌打ちした。彼は……否、彼女だったのだ。勇人は最初から気付いた訳ではない。彼女に対し、不信感を抱いたのは、この事だった。